

マルメロ家だいすき日
記2022～

大野 紫咲

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

マルメロ家の日常を描いたエッセイによるこそ。

こちらはマルメロ家における、半フィクション、半ノンフィクションのエッセイ集です。

我が家の創作つ子達と夢主・紫咲との日記を、自由に書き綴っております。

日記成分・独り言成分が強めなので、特にオチなどはないことが多いです。

我が家の子達はほとんどがオリジナルキャラクターですが、アプリゲーム『SEVEN S CODE／セブンスコード』（2022年6月30日サービス終了）の世界より、ヨハネさんをお迎えしております。

他にも、刀剣乱舞やSkyの世界・モンハン世界ともゲートが繋がるので、色々な子が登場する可能性あり。

※我が家は見た目が子供・精神年齢が大人の天使や悪魔たちが存在するため、描写だけをみると、子供への過度な接触と取られる事案が多発しております。ご注意ください。

※また、性別に関しましても、不定性の子が多く見受けられるため、地の文や会話文だけでの描写を見ると、関係性によっては同性愛に取られる要素もあるかと思えます。

※ 紫咲はリアルの世界で結婚しておりますが、パートナー達の同意のもと、かなりご都合な複数愛を前提に話が展開しております。現状、主に作中恋愛CPとして当家で公言しているお相手は、ヨハネさん（セブンスコード）と直生くん（一次創作）、青雨（モンハンライズのタマミツネをモデルにした一次創作龍神）です。いわゆる逆ハーレムに近いかと思われます。ご注意ください。

その他、設定は割とふわふわしております。何でもありの方のみどうぞ。

一部作品は、夜恵城本丸シリーズとしてPixivにも掲載しております←

<https://www.pixiv.net/novel/series/10974850>

目次

マルメロ家の日常1

逃げ道と妥協点 | 1

もふもふ直生くんとムラサキ | 25

ムラサキと体重やら胸やらの話

32

カップリングなりきり1000の質問その

1

カップリングなりきり1000の質問

その1 | 50

カップリングなりきり1000の質問

その2 | 76

マルメロ家の日常2

世界で一番強い人《前編》 | 119

世界で一番強い人《中編》 | 133

世界で一番強い人《後編》 | 149

ぬいぐるみと嘘 | 163

お前のことが | 171

其は、いにしへの君【MHR×マルメロ

家】

其は、いにしへの君【MH×マルメロ

家】(1) | 177

其は、いにしへの君【MH×マルメロ

家】(2) | 188

其は、いにしへの君【MH×マルメロ

家】(3) | 197

其は、いにしへの君【MH×マルメロ

家】(4) ————— 208

マルメロ家の日常3

牛乳とビスケット ————— 220

甘えん坊としっかり者 ————— 233

金の牢、銀の鎖 ————— 254

その続きは、また今度 ————— 271

骨抜き注意報 ————— 294

マルメロ家×夜恵城【本丸】

小さな本丸の、超病弱な主と不思議な

ぬいぐるみの話 ————— 307

何もできない私に、たった一つできる

こと ————— 335

母の日2023

母の日2023・第一話『梅の神、刀の

神』 ————— 366

母の日2023・第二話『天使にくびつ

たけ』 ————— 381

母の日2023・第三話『蛇の道を行く

者は』 ————— 389

母の日2023・第四話『年始、吉慶、

赤灯籠』 ————— 396

母の日2023・第五話『月下の演舞』

母の日2023・第六話『夕景と感傷』

母の日2023 ————— 409

母の日2023 ————— 425

母の日2023・第七話『そして、物語

は続く』————— 438

マルメロ家の日常4＋本丸

君が、見えない————— 461

夜恵城本丸第一回キスの日選手権

471

緊張の理由————— 492

図書館の君————— 503

私たちのこれに、今はまだ名前はない

《前編》————— 521

私たちのこれに、今はまだ名前はない

《後編》————— 530

兼さんを暗黒竜ツアーに連れて行くヨ

ハネさん————— 550

京極正宗は主のスカートを詰めたい

570

朝涼みの刻————— 582

猿の手————— 589

剣とペン————— 597

タマミツネ・青雨が本丸にやって来るま

でのお話

幽霊タマミツネの怪《第一話》

607

幽霊タマミツネの怪《第二話》

621

幽霊タマミツネの怪《第三話》

630

幕間くマルメロ家本丸の顕現事情く

マルメロ家の日常5

青雨と夜翰さんの出逢い

645

とあるタマミツネの日記《第一話》

そこは耳じゃない

663

とあるタマミツネの日記《第二話》

680

とあるタマミツネの日記《第三話》

698

とあるタマミツネの日記《第四話》

714

とあるタマミツネの日記《エピソード》

729

751 742

マルメロ家の日常1

逃げ道と妥協点

「ただいま……」

時刻は、夜中の12時を回って1時近くになっていた。

隣家でさつきまで晒されていた喧騒が嘘のように、見慣れた部屋の中は時折道路を通る車のタイヤの音以外、しーんと静まり返っている。

あまりに誘われた飲み会が長引くので、途中で帰らせたヨルクんとエリくんは、すっかり私の布団の隣で夢の中だった。ヨハネさんは、その反対側で微かに背を丸めて眠っている。

傍に跪いて、そつと二人の髪を撫でる私の背後から、直生くんが声を掛けた。

「まあ、なんつーか、災難だったな」

「仕方ないよ。自分の関係ない職場の人たちばかり集まったらこうなるって」

思わず苦笑を返したものの、顔に滲み出る疲れは隠せない。

夫である鯨の同僚達から、いわゆるたこ焼きパーティーに呼ばれて参加したものの、大人数が集まると盛り上がりがちになる職場の身内トークについていけるはずもなく、

途中から完全に暇を持て余していた私に、珍しく直生くんは付き添ってくれていた。

普段他人にストイックで、他人を憐れむような真似をしない彼には非常に珍しいが、最近少しずつ柔らかくなってきたところもあるからか、こうして気に掛けてくれたり、話す機会も増えた。

「夜羽達なら、ヨハネが先に寝かしつけといたから安心しろ。」

まあ、こいつらちよつと察しの良すぎるくらいいい子だから、オレらがいなくても問題はなかったろうけどな」

「うん、ありがとう……。天使と悪魔とはいえ、ホントに手が掛からないから助かってるよ」

想像以上に遅くなった帰宅でずーんと重くなってしまった胸の内を抱えながら、私は即シャワーを浴びて、布団に寝転んだ。Twitterに色々書き込んで、気持ちの整理をする。

飲み場は嫌いではないし、他人の話や経験談・容姿や行動を観察して得られるものもあるし、何より私自身が話し相手に飢えていたので参加したのだが、隣に座った誰かと一人ずつ話すならまだしも、大勢がいつぺんに、みんなに向かつて喋るのが前提の雰囲気では、自然と私は静かになってしまふ。そういう場には我先にと喋りたがる人が他において、私が率先して口を開く必要はないからだ。

周りが楽しければ基本それが一番いいことだからと割り切っているが、十分二十分に一度程度、それもほんの十数秒とかしか話題を振られないのは、それはそれで寂しい。しかも聞かれることといえば大体、結婚までどのくらいかかったのかとか、結婚式はしたのかとか、（私からすれば）くだらない質問ばかりだ。まあ、本人がそれ以上語らないことを根掘り葉掘り聞いてくるほどデリカシーがない人達ではなかったたので、根は皆いい人なのだろうけど。

実際、私のノンアルコール飲料が進んでないと見るやお茶とジュースを勧めてくれたり、提供した食器や道具に大変感謝してくれたり、会話に混じれない以外は何ら不愉快な目には遭っていないのだ。むしろ、この場で一番厄介なのは変に気難しい私なのかもしれない。

単純に私とその「場」が合わないだけであって、彼らには何の罪もない。

そういういい人ばかりに囲まれて、さりとて退屈な思いは拭い去れず、途中から鯨がかなり気を遣っていることすら癪で、目も合わせずに大体無視してしまった。レッテル貼りの苦手な人間に、テンポの速い飲み会は向いてないな。

そもそも今夜はタコパだと聞いていたので、どんなに盛り上がり上がつても常識の範囲内の時間に終わると思っていたし、鯨が気を利かせて先に帰るか聞いてくれなければ、地

獄だった。

これ幸いとばかりに、眠気で体調がよくない振りをして帰って来た。「呼んでくださってありがとうございます。楽しかったです」と、笑顔で完璧な大嘘までついて。「普通の人はさあ、あれを地獄だと思ったりしないのかな。みんな楽しそうにしてたけど。」

楽しいか楽しくないかで言われたら楽しい方って答える人が多いと思うけど、地獄とまで思う人はそんなにいないんじゃないかと思うんだよねえ……」

「さあな。そもそも見えてる表情からだけじゃ、他人が何考えてるかなんてわかんねーだろ。」

あの人らにとってはあれが楽しいことで、あんなにとっては違った。そんなだけのことだ。

別にそれ以上、推測することも思い詰めることもない」

横になった私のとりとめもない話を聞きながら、直生くんは隣に座り、頭を撫でてくれていた。

直生くんは暫く黙っていたけれど、その口が、思いもがけない言葉を作るのを私は聞いた。

「前にあんたが言った。『その目で見て、聞いて、感じたことがすべて』なんだろう。」

つまらないと感じたんだったら、それがあなたにとつての真実だよ。

気にすんな。あんたは悪くねえ。……あんたは、何も悪くねえよ」

つい、目を見開いた。まさか私に向かつて、こんなことを言うとは思わなかったからだ。その言葉で、一気に安心して涙腺が緩んでしまった。

玄関先の電灯がほんのり反射する廊下は、静まり返っている。

今も、隣で鯨と同僚達は楽しく飲み続けたり、片付けをしたりしているのだろう。

私が地獄と感じる会話を、当たり前障りなくそれとなく楽しんで。

私のパートナーが感じられる楽しさを、なぜ私は隣で享受出来ないのだろう。

そう思うと、久しぶりに胸が苦しくなつて涙が出る。

相手にされないことが悲しいのか、交流出来ないことが悔しいのか、それとも下手な話題で相手にせずについてくれたことを逆にありがたく思っているのか、鯨に気を遣われたことが情けないのか、それでも気を遣つてくれるパートナーで居てくれたことが嬉しいのか……

ぐちゃぐちゃに流れる涙の理由が、一向にわからない。

わからないけど、わかることが一つだけある。

私は別に、辛いからといって哀れまれたい訳じゃない。

可哀相だねとかひどいねとか言つて欲しいわけでも、代わりに泣いたり怒ったりして

欲しいわけでも、ましてや私を追い詰めた人々を憎んで欲しいわけでもない。

あんまりな目に遭った時ならば当然話は別だが、どんなに泣いても苦しくても、この程度は私にとっては些細な思い出に分類される方だ。むしろ、たつた一回の接触が原因で、その人達の良さや見つめるべき本質を、永遠に曇らせてしまう方が、私には怖い。

だから……こう言つては悪いが、「こんなに泣かせて、辛そうな事に気付いていながらなぜもつと早くメロを帰らせなかつた」と鯨を悪様に罵るであろう愛理がこの場になかつたことや、そこまで言つたかは分からないけど主人をこんな目に遭わされて多少不愉快だったかもしれないヨルクン達が寝ていたことは、私には幸いだった。

特に愛理が鯨を嫌っているのは分かっているが、今それを聞かされるのは辛い。むしろ鯨としては、私を厚意で誘つてくれた先方と、無理やりあの場にいるしかなかつた私の、どちらにも角を立てない形で申し出てくれたと思うのだ。

けれどももし愛理や皆がそう刺々しく言い出せば、私としてはその気持ちを慮つて、鯨を、ひいてはこの飲み会自体を悪者にせざるを得なくなつてしまう。私が前向きに捉えていきたいと願う事物の評価を、私以外の人の中で底辺まで貶めてしまう。私が何か一つ、愚痴を零しただけで。それはとても、つらいとか悲しいことだった。

というのも、最近になって漸く気付いたことだけだ。

とはいえ……いくら口ではそう言つたところで、こんなにべろべろに泣いていては、

当然見ている側には心配されてしまうに決まっている。

直生くんがこういう時にばかり私の傍に現れるのは、それが理由だろう、と思った。彼なら、いくら私の話を聞いたところで、いいとも悪いとも言わない。

その場限りの感情に深い理由を求めないし、ああそうかよと首肯を返しながら、どうしても行き過ぎた箇所だけは諫めてくれる。

なんだかその、他人からはひどく冷めて見えるであろう優しさが、私には心地良かった。

そういえば、前も職場の飲み会で傷付いて帰った日には、直生くんが傍にいたつけ。

決して同じ布団には入って来ないまま、こちらを見て視線を合わせることすらなく、直生くんは枕元に膝を組んで座り、傍で眠っているヨハネさんと窓の外の月明かりを、交互に眺めていた。

「直生くんは寝ないの？ もう2時だよ」

「不規則な時間帯の仕事に慣れると、深夜でも目が冴えちまつてな。あんたはさつきと寝ろ」

この子は一体いつ寝てるんだろう、と思っていたところで、ようやく鯨が帰ってきた。隣のリビングに入ってきたので、布団の中からおかえり、と声を掛けると、私はとつとつに寝たと思っていたのか、少し驚いた返事が返ってくる。

「まさか、2時まで掛かると思わなかったわ……。食器は洗って持って帰って来たから」
「だいぶ遅くなったね。お疲れ」

ほんの二、三言葉葉を交わしてから、彼はふと何かを思い出したように、「こんな遅くまで起きて待つててくれてありがとう」と言った。別に待つてたわけじゃなくて泣いて寝れなかったただけだし、あまりに想定外の言葉だったので、私の口からは「ああ……。まあ、うん」と間拔けな声が出た。

おやすみの声を掛けてから、自室に引つ込んでいく姿を追うように台所に顔を出す私と、それを呆れ顔で眺める直生くんだけが、その場に残される。

ぐずり、と鼻を吸り上げたまま、私はほうと溜息を吐いた。

「……さすがに鼻声だけじゃ、泣いてるのには気付かないか」

「気付いて欲しかったのか？」

「んなわけないでしょ。別に私、謝って欲しいわけじゃないもん」

「そういう顔してるけどな。今から部屋押し掛けて、寂しかったって素直に言えよ。布団にぐらい入れてくれるかもしれないぜ」

「そんな恥ずかしいことはし〜ま〜せ〜ん〜!!!」

お茶が飲みたかったものの丁度切らしていたので、やかんを火にかけながら、その前に私はずるずる座り込んだ。おい、と直生くんが物問いたげな声で咎めながら肩をつつ

く。

「ここで泣いてるお前の肩を抱くのは、どう考えてもオレの役所じゃねえだろうが。

こういうことを口に出さなくても気付いてやれるのは、オレらみたいな連中だけでぞ。人間って奴は、たとえばどれだけ近い関係性でも、言わなきゃ気が付けない」

「それは分かってますけど、どう考えたって今更あの人に慰めてもらうなんて想像つかない。そういうポジじゃない」

「お前から夫婦なんだろう？ たまにぐらい意地張ってないで甘えてやれよ。オレに今まで喋ってたようなことを、隣の部屋に飛び込んで喋るだけで済む話じゃねーか」

「そしたらなんか、私が同僚の人たち相手に変な焼き餅焼いてたことまでバレるじゃんっ!? 私はただ、人がまったたく気にしてないことを上手く消化できなくて、他人を嫌だと思っちゃう自分が一番イヤなだけ……もうやだ死にたい……」

「……こういうことあんま言いたかないけど、あんたもしかして生理前か？」
「そうですけど?!?!」

体育座りで突つ伏していた涙目の顔を、がばつと上げる。

無理やり自分を納得させかけたと思えばすぐに泣き出す、情緒不安定極まりない私の挙動は、それで直生くんにも納得されたいらしい。一応身体上の性別は女である直生くんは、あ……とわかったような声を出してそれ以上何も言わなくなった。心当たりが

あつたのかもしれない。

そうなのだ。ちよつと落ち込んでしまうことと、PMSの不調が被ってしまった日には、些細なことでも気持ちの切り替えができないで、永遠に悲観のループに入ってしまう。

最近はあまりなかったけど、今は実際に生理前なのでもうそういうことにしておこう。それこそタイミングが悪かっただけで、誰も悪くなんかない。

やかんの火は忘れずに消してから、お茶を注いで部屋に戻る。布団に潜り込んでからも、さっきの「ありがとう」を思い出すだに涙が出た。悲しかったからじゃない。一応は、自分のことを考えていてくれたのが分かって、ほんの少し嬉しかったからだ。

「おい、あんま泣くな。せつかく通つたのに、寝ながら泣いたらまた鼻詰まっちゃうぞ」「だつてえ〜〜〜」

私にも泣きたい日ぐらいある。

いくら泣き止んだと思つていても、黙つて上を向いているだけで、涙が目の横を伝つていくだけの日もあることぐらい、許して欲しい。

さっきのお茶は冷めただろうかと、ぐすぐす鼻を鳴らしながらマグカップを手に取り、一口啜つてから振り向くと、直生くんが黙つてこちらを見ていた。

「……」

怒っているか呆れていると思ったが、意外なことにそのどちらでもない。何かを考えているような顔だ。

何か言いたいことでもあるのかとぼーっと見つめていたら——彼は想定外の行動に出た。

左手で私の顎先を素早く捉え——唐突にその唇を重ね合わせたのだ。

「……………?!?!」

あの超がつくド級のイケメンに正面からキスをされていることにも、その相手が私であることにも驚いたが、何よりあの直生くんが、たとえ慰めであつても気軽に私なんかにキスするはずない、という思いが勝つて大混乱してしまう。

とにかく愛理一筋、他の人間には脇目も振らずここまで成長してきたプライドの塊みたいな人間が、慰めや優しさであつても、演技以外で他人に唇を許すことなど、許してもいいと思う程揺るがされることなど、決してない。

ないはずなのに、それは挨拶や戯れの域を超えて甘い、熱いキスだった。

軽く触れ合わせただけの、初めて味わう熟れた唇の感触に、これは何かの冗談なのか、応じて良いものなのかと慎重に引きかけた私の後頭部を、空いた手が支えていた。

「……………ふ……………っ」

皆が寝静まった部屋に、二人分の吐息と、煩い心臓の鼓動だけが耳元に響く。

本気でキスに応じるのなんて、ヨハネさん以外ではいつぶりのことになるだろう。

戸惑いを置き去りにするくらい、表面を食んでいた唇が舌尖へ、喉の奥へと深く交わり、全てを搔つ攫つていく。触れ合う額と鼻筋が熱い。

突き飛ばすようなことはしなかった。否、正直に言えばしたいと思わなかった。気が付いたら指が縋っていた。

それとなく私の掌を受け止めてくれていた大きな指が、するつと組み入れた指の隙間をなぞる。それだけで体がぞわぞわすることを知っているかのように、掌から肘、腕を、さらに髪や耳の先を、キスの最中にそれとなく触つて、小さな火を灯していく。

「……………は、あ……………」

「……………つふ。腰砕けだな」

唇が離れた瞬間、吐息が漏れると同時に鼻で笑われたけど、まさしくその通りだった。最初からへたりこんではいたけど、腰から下がガクガクして力が入らない。ほんの数分キスしただけで、息すらまともに吸えない程上がってしまった。

顔を伺い見れば、直生くんは目を細めたまま、暗闇の中で微かに光る艶っぽい唇を、ペろりと舐めては不敵に歪めてみせた。

そのくせに、私の顎を片手で捉えたまま囁く声音は、今までにないほど優しい。

「αのキスで、大概のことがどうでもよくなるねえ奴なんかいいよー」

「……っ」

ぶわっ、と顔が熱くなった。

思わず、想定外すぎて布団の上で思いつきり背を向けてしまう。

たしかに、なんかもう……今の一瞬だけで、頭の中を占拠していた飲み会だのくしゃくしゃの感情だのが、どっか行ってしまった気はするけど。

暗に、自分にぶつけると言われているのか。

体質的に、私が向こうじゃΩになることを知っての行動だろうか。いや、私の性別がΩだろうとαだろうと何だろうと、彼ならこうする、と思った。

直生くん自身も布団に入ってくる気配を伴いながら、低くて落ち着いた声が響いた。

「まあ、効くのは少し時間掛かるかもな」

「な、なんで。あの……」

「あんたが一番必要そうに見えたから。」

オレが誰にでも気軽にこういうことしないのは、あんたが一番よく知ってたんだろ」

恐る恐る、ころりと寝返りを打った先で、試すような青い瞳とかち合う。

懐に入れた人間以外には、たとえどれだけ表面上は丁寧な態度を取ろうと、決して気を許さない。

何であつても、「愛理を守る」という己の目的の為なら、冷酷に斬り捨てる。打算もな

しに、最初から相手に気を持たせるなんて、リスクイかつまどろっこしい真似はしない。そういう人間だ。鈴木直生は。

だからこそ、その行動に説得力が出る。それが戯れでない事は、その行動自体が一番物語っている。

「んで？ 効いてきた頃になって、あんた一人でどうにかなんのか」

「ど、どういうことよ」

「手伝ってやろうかって言ってるんだよ」

「……」

「言っただろう。あんたは、悪くない。」

……それでも傷が痛むんなら、いつそ何もかも忘れちまえよ」

伸ばされた大きな掌が、私の視界を覆った。

……なるほどな。ヨハネさんはこの畏に堕ちたのか。

抱き寄せられた先に、大柄な肩と豊満な胸がある。やけにヨハネさんもヨルクくんもエリくんも静かだと思ったが、こういうわけだったらしい。最初から、私たち二人を除いたみんなに、防音魔法が掛かっている。多分、何をしようと何を叫ぼうと、誰にも気付かれることはない。

そつと額を触れ合わせた直生くんが、私に囁いた。私が小柄な分、その包み込むよう

な肉体の力強さが、よく分かる。

「あんたが去るに十分な、1回目の言い訳はもう与えてやった。オレじゃなくて本人に、不満も感情も全部ぶつけちまえてな。多少の恥を捨てれば、あんたにとっても同居人にとっても有益で、現実的な解決策だったはずだ」

「……」

「んで、2回目の言い訳は、まだ必要か？」

「……その聞き方は、ずるい、と思う」

返事の代わりに、小さく笑う声がして口付けが降ってきた。

いつもこうだ。この人は、何もかもを自身の美貌とカリスマ性で押し流す。αの特権を翳せば、何しても許されるしどうにでもなると思ってる。

しかもその言い訳を、何よりも必要としている人間の前に、溺れる人間に藁を差し出すみたいにくここぞという時ばかり持ち出して、逃げ道を全部塞いで、相手から握らせてしまう。

そのことが、一番悔しい。

(ほんと、地頭いいくせに、なんでそういうとこばかり頭が回るかな)

はつきり言って、才能の無駄遣いだ。

けれどいくら恨み言を吐いたところで、誘惑に負けた私には何一つ、言い返せる余地

などないのだった。

翌朝。

「……」

とてもここには書き記せないほど、夢の中であられもない目に遭った気がする。

そして私を好き勝手籠絡した本人は、現在ヨハネさんの横で大の字になりながらくーかー寝息を立てている。

思わず指先を眉間に当てた私は、どう皆に顔向けしたらいいだろうかと頭を悩ませた。

いやもう、素知らぬ顔で黙ってたらいいのかもしれないけど、居直るには若干気まずい。

「なんだ。寝付くの遅かった割に、もう起きてんのか」

「直生くんこそ早起きじゃん。まあ、ちよつと生理痛もあるし……朝ご飯どうしようかと思つて」

でもおかげで少しだけ、素直になれた気がする。

なんとなく、別に何を責めるでもなく、鯨をカフエヘブランチに誘つてやろうかな、と思う程度には。嫌なことがあつた翌朝にも残りがちな、変な拗れや後ろ向きな落ち込み

は、ほとんど消え失せていた。ただ落ち着いて、分かち合うために会話がしたいという素直な気持ちだけが、残っていた。

それはそれとして、だ。

根本的な解決にはなつたんだろうか、これ。やる必要あつたか？

天気のいい土曜日、朝日の中で呆けていると、直生くんが無責任に隣から言った。

「根本的に解決しようと思つたら、逆に手なんか出してねーよ。」

「忘れたことを忘れちまえるからいいんだろ」

「直生くんって、意外とそういう刹那的な悦びに身を任せるタイプだね」

「オレの職業がまあそうだからな」

頭を振り、散らばっていた髪を結び上げながら、しゃあしゃあと述べてみせる。

その場限りの演技で、他人に夢を見せる仕事。

共通するといえばする。もしかしたらこの子は、ホストや風俗業やらせても上手くいったのかもしれない。ていうか、一時期レッスン代とか化粧代稼ぐのにしてたんだっけか。

そうこうするうちに、隣の布団でもぞもぞと動く、エリくんとヨルクんの気配がした。

「あ……二人とも、おはよう」

「おはよー。サキ、帰って来てたんだ」

「ぐっすり寝てたから、全然気付かなかった」

おはようのキスをすると、くすぐったそうに二人で抱きついてきた。いつも通りだ。ということは、すぐ隣にいたけどアレには気付かれてない……と思いきや。

二人は何か意味深長な表情をして、布団の背に隠れ、穴から出てきた子兔のように体をくっ付け合いながらこちらを見ている。

「() () () () () ()」

「() () () () () ()」

「ちよつと二人とも、何訳知り顔して……」

「() () () () () ()」

わかった二人ともグルなやつだこれ。

もう、と二人の頭を撫でたら、ヨルクんとエリくんは順番に照れたような顔をした。

「ボク達は何も言っていないよ。でも直生にーちゃんか、もしサキが落ち込んで帰って来たら慰めてあげたくなくなるかもしれないから、念のため魔法の準備しといてくれって」

「直生くんが適任だって言うんじゃ、しよーがないよね」

「あんのやろ……」

どこまで、計算の範囲内だったのか。

いくら人外かつ中身は子供でないとはいえ、小さい子を巻き込んでまで何してるの

よ。

思わず半目になって、Tシャツを捲りながらお腹を掻く直生くんを肘で突いてしまった。

「なーにが『慰めてあげたくなる』よ。慰めるは慰めるでも完全にソツチの方じゃない、このケダモノが……」

「けどよかつただろ？」

「バーカー！バーカー！！」

「うーん、うるさい……朝から何……」

もうバカしか言葉が出ずに言い争っていたら、隣のヨハネさんがずるずるとタオルケツトの下から這い出てきた。これだけの騒ぎになっただけの騒ぎになっただけ目を覚ますのも無理はない。

そういえばこっちは何か知らされていたんだらうか……と思っていたら、ヨハネさんは目を擦りながら、寝惚けてこっちに抱きついてきた。出て来たばかりの、気持ちいい感触の敷布に押し倒される。

「んわあつ、ちよつ」

「ふあ……サキ、おはよ……」

「？」

!?!?!?!?!

何をそんなに驚いて……とふと開いた自分のシャツの胸元を見た瞬間、私も固まっ

た。

昨晚の、明らかなる痕跡。首筋や鎖骨に、くつきりとキスマークが残っていた。

当然、がばりと背後を振り返るヨハネ氏。直生くんは、一瞬あちやあとという顔をしたが、初めからバレるのは想定内だったようで、特に焦った様子もなく苦笑してみせる。

「な、直生……?!?!? おっ、おまえっ、まっ、まさかつ、まさかつっ」

「お前の方がそんな露骨に慌てることねーだろ。ここは普通オレが慌てるどころだぜ」

「じゃーなんであんたはそんなに余裕なんだよっツツ?!?!? この見境なしの淫乱オオカミ

……っ、もうほんとツ、ほんと信じらんないッ！」

「んな耳元で悲鳴みてえな声出さなくていいだろ！ お前的大声頭にキンキンくるんだ

よー！」

「ご、ごめんなさいヨハネさんその、私も悪かったから……」

「あんたには怒つてないからツツツ！」

全然怒つてなくはなさそうな大声で言われて、思わず肩をすくめる。

やれ察しはしたけど本当にやるとは思わなかったあの、やれ人の彼女を何だと思ってるんだあの、膝を詰めてこんこんと説教するヨハネさんと、手を合わせるもののイマイチ本気で反省しているように見えない直生くんのやり取りを眺めながら、私は痴話喧嘩に興味津々のヨルクン達を抱え、そのままズルズルとリビングまで退散した。

まああの二人、色んな意味で身体をゆるし合うほど仲が良いみたいだし、何とかなるだろう。きつと。

(てことは、私もヨハネさんも、二人とも直生くんに寝取られたことになるのか……?)
どういいう状況だそれ、と脳内でツツコミを入れる。

甘えられる先が増えたのは、素直にありがたいと思うが……世間一般から見れば、この家はどんどん特異的な状況が加速しているに違いない。

まあ別に、誰に批判されてるわけでもないしいつか、と思いながら、私は改めて、喫茶店に行くために鯨の部屋の扉を開けた。

直生くんが喫茶店について来るのも、珍しいことだった。

普段、こんな風に外で直生くんと話をする機会はあるまい。

道中、車の中で鯨さんは、私がか何か話し掛けるより先に「昨日は、多分あなたに一番つまらない思いをさせたからごめんね」と謝ってくれて、それだけで溜飲が下がるといふか、だいたいのがもうどうでもよく感じた。

私と話をしながら、「誰かが楽しく過ごそうと思ったら、誰かが自分を抑圧するついでにか、犠牲にするしかないからね……」とも言っていた。人が聞いたらキレるところかもしれないが、私は別に、その感覚を知っておいてくれるならばそれでいい。これが分

かるということは、少なからず鯨にも自己を犠牲に配慮した経験や自覚があるということだ。

そうまでしてでも、場の空気を壊さず尽力した私は褒め称えられるべきなのだから、その分こうやって言葉を交わし、本を買ってもらい、朝食をいい喫茶店で奢ってもらえるだけよしとしよう。

労ってもらえるならば、労は大した苦にならない。労いや感謝を忘れた時が、一番の問題だ。

食後、久しぶりにゆったりと膝を組み、持ってきた本で読書の時間を楽しみながら、私は隣で頷いて様子を見守っていた直生くんにも、ふと問い掛けた。

「そういえば、ヨハネさん達はどこ行つたの？」

「夜羽たち連れてラウワン行かつて」

「ほえ？」

そりやまた、行き先としては珍しい。

カフェインレスコーヒーのカップをゆるりと回しながら、私は想像を巡らせた。

「ラウワンで何するんだろ。ボウリングとかかな。カラオケだけなら、わざわざラウワン行かないよね」

「スポッチャでキックボクシングやるんだとき。サンドバッグ殴る気満々だったぜ。主

にヨハネが」

「……わあお」

一体、何に対するストレス発散なのか、聞きたい気もするがやめておこう。

直生くんも釣られて神妙な顔をしていたが、私の顔を見て、はあと溜息を吐いた。

「あんた、存外鈍いよな。なんであいつらじゃなくてオレがここに居るか、本当にわかってんのか？」

「？」

ボックスシートに深く身を沈めた直生くんは、肩を竦めて説明するように片手を広げる。

ポニーテールに、洗いざらしのデニム地のシャツがよく似合っていた。

「あいつらだって、昨日のこと、何とも思ってたねえわけじゃないだろ。」

別に、本気であんたのつるんでた連中を嫌ってるわけじゃない。

ただ、あんたの前で今すぐいい顔できる自信もねえし、かといって露骨にあんたの前でそんな態度を出しちまったら、必死で参加してたあんたが傷付く。

だから、ちよつとしたストレス発散というか、距離を置いてんだよ。心配しなくても、多少ガス抜きすりゃ元通りけろつとした顔で帰ってくる」

納得しかない説明に、今度は私が申し訳なきでため息をつく番だ。

「やつぱり、あちらを立てればこちらが立たずか……困ったねえ。

別に、とんでもない無理をしてるわけじゃないんだし、私が一人で奮闘してることに
関しては、そこまでみんなが気を揉んだり心配してくれなくつても、大丈夫なんだけど
……」

「まあ、死なない程度ならオレもいちいち止める気はねーよ。ただ、あんたにほんの僅か
でも、傷付いて欲しくなくて心配な連中もいるんじゃないか。あいつらはまだ、慣れた
方だと思っけどさ。

愛されるつてのも、なかなか大変なものだな」

そう言つて、直生くんが目を閉じながらコーヒーを啜る。

誰かが愛したいと願う通りに愛されることにも、責任が伴うのか。

思えばそれは昔からそうだった気がするけれど、大人になつても変わらないようだ。

誰かを心配させないことと、自分が自分を擦り減らすことの妥協点は、どこに存在す
るのだろう。

それを共に考えていけるようにと、私は自身も無理をしがちな直生くんの手を、隣で
そつと握つたのだった。

もふもふ直生くんとムラサキ

「……」

金曜日の真昼間である。

喫茶店とスーパ―に鯨を伴いながら共に出向き、布団に転がったムラサキを、直生が見下ろしていた。

いつもと変わらないポニーテールだが、その頭髮からはみ出た、ミルクティー色の柔らかなような垂れ耳は、面白がって直生に魔法を掛けた夜羽と恵李朱によるものである。耳こそ垂れているが、目つきは鋭い。同じく毛量の多い亜麻色の尻尾は、落ち着きなくさつさと畳を払い続けていた。

視線の先に、抱き枕に抱きついたまま、安らかに口を半開きにしてているムラサキの顔がある。寝るつもりはないと言っていたが、案外疲れていたらしい。

「すぴー……」

澄んだ青い瞳は、せつかくオレがいるのにこのザマは何だと言いたげな光を放っているが、これは拗ねているだけで別に怒っているわけではない。

直生は、ムラサキ——の抱き付いている、白くてもふもふの抱き枕をじつと見つめて

いた。この家への嫁入り前から、ムラサキの実家からはるばるついて来ている、あざらしの抱き枕である。多少変色し、型崩れしてふにやふになつてきているが、人間の子供ほどの大きさはあるそれを両足でがっちりホールドしながら、ムラサキは安心したような顔をその白毛に埋めていた。

対して、直生の顔の険しい事といつたらない。

「……」

なんでこんな怖い顔で睨まれているのか、あざらしの方が聞きたいといった顔で冷や汗を浮かべている。ような気がする。

つまるところ、直生の嫉妬というやつだった。

なぜこんなに上等の抱き枕が傍ににいるのにそんな奴を抱いているのか、とでも言いたそうである。が、そんなことを素直に言える直生ではない。

そもそも自分は、過去にムラサキを嫌つていたキャラで通つている。最近になつてそれは変化したもの、だからといって気楽に簡単に、おいそれと余裕のない顔を見せたことはないし、傍に居させてくれと素直に打ち明けるのも恥ずかしい。

先程まで直生のワンピースを着ていたムラサキは、部屋でそれを脱ぎ落とすと、下に着ていた白の半袖シャツに、これまた直生のデニムのキュロットを部屋着代わりになつていた。

最近では寒い寒いと騒いでいたくせに、滅多に着ない相当なミニ丈のキュロットで堂々と寝ている。抱き枕をホールドする脚は、ワンピースの下に穿いていた白タイトのままなので、寒くないらしい。タオルケットすら掛けていない肩は、捲れ上がった半袖の下から剥き出しになっていた。

「……おっ」

直生が隣に座って声を掛けても、ムラサキは小柄な体をあざらしごとぎゅーつと丸めるだけで、起きない。

風邪を引いたらどうするんだと、言い訳するように白いタオルケットをそーつと引つ張って体に掛けるが、それでも勿論起きない。その腕に抱かれたフィット感満載の抱き枕を、手放す気配もなさそうだ。

(あー……うー……、もうー)

ぼふん、と音が立って煙が上がる。我慢が限界に達した直生は、獣人姿から、レトリバーのような犬姿に変化していた。

亜麻色の柔らかな体毛を持つ巨躯が、胸毛を波立たせてぼすうつとムラサキの隣に潜り込む。

ムラサキと抱き枕の間に一片の隙間もないのがもどかしいと言うように、仕方がないのであざらしとは反対側にムラサキをサンドするようにして押し掛けると、タオルケッ

トの下に泳ぐように顔を突つ込みながら、ふんふんと鼻を鳴らす。

起こしたくはないが腹立たしい、というように、脚で布団を蹴りながらばたばたしている、ムラサキの喉から微かに声が漏れた。

「ううん……」

「！」

もしや起こしてしまつたか、というように機敏に頭を上げた直生の耳がゆらんと揺れるが、そうではなかつた。

ムラサキはごろりと寝返りを打つと、枕を背にして直生の方に体を向けたのである。

そのまま、今度は直生のふわふわした毛に顔を埋めて、また安堵したようにすーびー寝息を立て始める。

「……」

ぼんつ、とたまらず煙を立てて人型に戻つた直生は、固まつていた。耳がほんのり赤い。まさか、こんなに素直に身を委ねられるとは思つていなかつたらしい。

狭い布団の上でぎゅうぎゅうに密着していたので、今は腕の中にムラサキの姿がある。そつと引き寄せるように両腕を回すと、ムラサキは毛皮の代わりに直生の豊胸に顔を寄せながら、すやすよと眠り続けていた。柔らかな呼吸音と共に、静かに胸が動いている。

「……つたく」

自分から潜り込んでおいて悪態を吐く直生だが、その頬は隠しようもなく緩んでい
る。

やっとこつち向いた、とばかりに微笑んだ顔は満足げで、年相応な幼さと独占欲を剥
き出しにしていた。直生本人も、こんな表情は誰にも見せたくないだろう。

自分の服を着て、自分の腕の中にいるのだから、少なくともこいつは今どこにも行か
ない。そう思ってもいるかのようだ。

開けた窓から日の差してくる部屋で、ムラサキの寝顔を眺めているうち、いつの間に
か隣で横たわっていた直生さえも、そのぬくみに負けて眠りに誘われていたのだった。

(んん……?)

ややあつて、私は目を覚ました。

20分くらいの昼寝のつもりで随分長く寝てしまった気がする。手を伸ばすと、耳に
嵌めることすらできずに力尽きたせいで放り出されたイヤホンが、そのまま抱き枕のあ
たりに転がっている気配を指先に感じた。

今何時だろう。家の中が薄暗い。目を擦りながら、台所の時計を見ようとして、妙に
身動きが取りづらいことに気付く。

「へ……う？」

思わずぼかんとしてしまう。直生くんが、私のすぐ傍で眠っていた。がっちり私をホールドしながら、頭の上に顎を乗せて。私のは比較にならないほど豊満かつナイスなバディが、呼吸の度に規則正しく上下している。

(な、何これ。え、待って、どういう状況???)

そろそろ体をずらして見上げると、淡い色の垂れ耳が、時々顔の横でぴくつと動いていて、ますます訳が分からなくなる。うさぎ……にしては短いよな。犬だろうか。獣人イラストにするには難しそうな耳をしている。モップみたいな尻尾が、ぱたんと一回揺れたのが見えた。

ただ眠っているだけなのに、ため息が出てしまいそうなほど整った顔立ちと綺麗な肌は相変わらずなのだが……可愛いなおい。

(ヨルクン達のいたずらか……?)

まあ、前にもヨハネさんのことを犬にしてくれと頼んだ事があるので、それには正直驚かない。驚くべきところなんだろうけど。

どちらかというと、直生くんが私を抱き締めて眠っていたことに驚いている。

そりゃ、今まで添い寝してくれとか頼んだことはあったけど、眠っている時に潜り込んでくるなんて、そんなあからさまな可愛いデレを見せてくれたことはあまりない。

甘えたいのかと人に追求されて答えに窮するような、そんなやりづらい状況を、あの子は自ら作ったりしないだろう。ましてや私相手に。と、思っていたのだが。

ヨハネさんの影響で、多少は素直になる気になつたのだろうか。

(……まあ、いつか!!)

私は眠い。

細かいことを考えるのを放棄し、私はもぞもぞと身じろぎするともう一度、直生くんにくつついて目を瞑つた。

背中を枕、お腹を直生くんにサンドされているおかげでぬくぬくと温かい。

私は、直生くんのことがとても好きだ。だから、いくらでも甘えてくれて構わない。その存在を受け止めることで生きようと思えるのなら、愛欲だろうと性欲だろうといくらでもぶつけて欲しい。むしろ、甘えられる事で支えられているのは私の方だ。

くつつかせてくれるのなら、これ以上嬉しいことはない。今日は直生くんに甘えてゆつくりさせてもらおう。

最近疲れていた分、いくらでも眠ることができたので、結局次に二人して目が覚めた時には、とつくに窓の外は陽が落ちて部屋が真っ暗になっていたのだつた。

ムラサキと体重やら胸やらの話

今年はどうにも、徹底して病院に通う年になったようだ。

体調が悪いのだから仕方ないのだけど、とはいえ検査しても検査しても、原因らしい原因はわからず。一応、低体重による体調不良を疑って、人生でほとんど初めてのピルを服用することになり数日目のある日のこと。

幸いなことに、以前飲んだそれのようなひどい副作用がなかったことには安心しつつも、私は微かな違和感を覚えて、お風呂場でぺたぺた自分の体を触り回していた。

「……」

「どうした？」

既に一糸纏わぬ姿で先に湯船に入っていた直生くんが尋ねてくる。ヨルクんたちの魔法で多少は拡張しているものの、身長180センチを超える彼が入っていると、もうそれだけでお湯が溢れそうだ。

寛いでいるその前側にちゃぽんと腰を下ろしながら、私はわしわしと自分の体、もといその胸部を触りながら、首を傾げた。

「……」。いや、なんか……気のせいかもしれないんだけど、ピルを飲んだらおっぱいが大

きくなつたような」

「ほんとか?」

言うや否や、後ろから回された手に思いつきり胸をわっしやあと驚掴みされて、変な声が出た。何の躊躇いもなかった。

「あひやあああ!!」

「んー……んー? まあ、大きくなつたと言われたらそんな気もすつけど……大きさはともかく揉み心地はまあいいな」

「あひいいいいいっ、ちよ、揉み心地って何! もうちよつと遠慮つてものをだね!!」
「オレとお前の仲だろ?」

「そーーだけど、心の準備くらいさせつ、おい揉みすぎ! どんだけ揉むん!」
なんかもう、大きさとか関係なく揉みたいだけでしょこの人。

どデカイ凶体の直生くんから逃げられるはずもないので、捕まったまま慣れない感覚にばちやばちや暴れまくっていたら、湯船の端の方に入っているヨルクン達から、羨ましそうな視線を感じた。夜羽くんと恵李朱くんと夜翰さん、三人団子のように固まつて、じーつとこつちを見ている。

「いやそんな羨ましそうな目をするもんじゃないよ?! ただの胸じゃん!」

「お前らも触るか?」

「自分のものじゃないくせにあたかも自分の胸みたいに言うなあ!」

触られるのは苦手—とか、どうせ直生くん言うくせに。

とはいえ、ヨルクんたちの場合は純粹にくつつきたい意味合いが強いだろうし、拒否する理由もない。すい—と泳ぐようにやって来たヨルクんとエリくんは、次々と紅葉のよ—うな手を私の胸に当てた。

「ボクも触る」

「チエツク失礼します (⊠? ⊠)」

いやらしさなど欠片もない、すごい真剣な顔でぺたぺたと触っている様子は、聴診器を当てる小さなお医者さんに見えなくもない。なんだかかわいい。けど、絵面が絵面なので、私はちよつと恥ずかしくなってきた。

「う—くん……」

「う—くん……」

「そ、そんな神妙に触られても恥ずかしいんだが……」

「よくわかんない (⊠? ⊠)」

「でしようね!!」

結局わからなかったらしい。無邪気な二人にじやれつかれているヨハネさんを、私は流れで見上げた。

「ヨハネさんはわかる?」

「……」

仕方がなさそうに近付いてきたものの、結局ヨハネさんも触るらしい。洗い場に出た直生くんと交代して、抱き締めた私の後ろ側から、控えめにそつと綺麗な掌を添えつつ、ヨハネさんも首を傾げた。

「確かに言われてみれば、ちよつと上側がお腕状になったというか、厚みがあるように感じるかも……?」でも、ある意味ボク的感覺だから、それもよくわからないな」

言いながらしれつと指先で胸の外側や腋の下を触っているが、戯れで触る誰かさんとは違い、これは乳がんチエツクをしてくれているようだ。毎度のことながら、こういうヨハネさんの無言の優しさというか甲斐甲斐しさに涙が出る。

その一方、長い大量の見事なブロンドを洗い終えた誰かさんは、再び私の真正面からぎゅうぎゅうの湯船に入ってくると、胸をもにもにし始めた。どんだけ好きなんだ。

「ふーん……じゃあ念のため再チエツクを」

「君は揉みたいだけだよな??? てかさんなに羨ましいレベルの豊胸がついてるんだから、自分で好きなだけ揉めばいいじゃん!」

「自分の揉んだって別に面白くも何ともないだろ」

「他人のは面白いんかい!」

嫌われているよりはいいけど、距離が縮んだ後の直生くんのスキンシップで大抵だよなあと遠い目になってしまう。まあ、私が相手だからこそこまでスケベ全開なのかと思つたら、それも嬉しくはあるんだけど。

「まあ、大きくなろうと小さくなろうと、ボクにはどうでもいいけどね……」

ヨルくんたちの頭を泡だらけにして洗ってあげながら、ヨハネさんが呆れたように小さく呟くのが、シャンプーを泡立てる音に混じって聞こえてきたのだった。

それから、さらに数日後。

あの日だけであれば、ピルの一時的な副作用だとか、たまたま胸が張っていたけどだとも説明がついたのだけれど、数日に渡ってブラをつけた時の感触や張り方が違っているとなると、さすがに予想が確信に近付いてくる。

「やっぱりなんか、大きくなった……よな……?」

「うん (⊗ ? ⊗)」

「さすがに分かるようになってきたね」

洋服筆筒の前で着替えながら、自分の変化に驚いていると、綿のトップスを着た私があつためるようにしながら、後ろから愛理が抱きついてきた。暖が取れるのはありがたいが、この両手はなんなんだ。

「だって、メロって元々Cカップのブラでも小さ過ぎる事あるくらい胸あったんだよ？
僕からすれば懐かしいくらいっていうか、やっとその頃の大きさに戻ったって感じ
じゃない？ 健全健全」

「だから揉むんじゃない！」

愛理が元々あやめさんのおっぱい大好きなのは知ってたけど、この子たち、本当に人の胸揉むの好きだよ。あやめさんとか直生くんに比べたら、こっちは随分揉み甲斐のない胸だと思うのだが。

どのへんがいいのだろう、と首を傾げていると、愛理と一緒に私を挟んだヨハネさんが、正面からぺたつと胸に手を当てて、何やら衝撃じみた表情を浮かべていた。

「そ、そんな……今までボクが知ってるどのムラサキより胸が大きい……だと……？」
喜んでいるといふより、若干ショックを受けたような顔だ。今まで自分が知ってきた相手とは全然違う一面を目にしてしまった時のような。その反応に新鮮味を覚えつつ、そんなに驚くことだろうかと考えてから、私はすぐに気が付いた。

「ああ……よく考えたら、ヨハネさんは私が痩せすぎになる前の体を知らないのか」

愛理と私は付き合いが長いから、元々の私の胸のサイズも知ってたし、むしろ私自身久しぶりに、そんな時期もあつたことを思い出して驚いたくらいだ。デフォルトであるサイズしか知らないヨハネさんが驚くのは、ある意味無理もないかもしれない。

両側から押しくらゐ頭のようにくつついたヨルクんとエリスくんが、ふにと私の胸をつついていた。

「ボクたちも知らないけどね。でも柔らかくて気持ちいい」

「ヨハネずつと宇宙猫みたいな顔になってるね（ΦωΦ）」

「宇宙猫で」

思わず突っ込んだけど、たしかにそう言ってもいいような、何とも複雑そうな面持ちを浮かべている。今まで知らなかったからって、そんなに深く考えなくてもいいのに。

そう思っていたら、ヨハネさんは真顔でこんなことを言い始めた。

「ねえあのさ……もしかしてだけど、ムラサキつて本当だったら、ボクと同じくらいか、ひよつとしてそれ以上に胸の大きさある」

「ないないない！ そんなこと絶対にならないから！ 二次元補正に勝てるわけないじゃん！？」

こちらとしては、みんなと同じ世界にいる間だからこそ、ちよつとおまけで盛つてもらっているぐらいの感覚である。もし私の体をそのまんま二次元に落とし込んだら、胸の大きさは言わずもがな、その他もスタイルのいいヨハネさんや愛理なんかには及びもつかない事になってしまうのは間違いない。まあ、元々勝とうなんて思っていないけど。

なので、ヨハネさんには変なことを気に病まないでいただきたい。私はヨハネさんの

胸が大好きだ。

ぶんぶん首を振った私に、じーっと視線を注いだヨハネさんは、何を思ったか、そのままやれやれと肩をすくめてみせた。

「それにしてもさあ……普通女性って、痩せる時は胸とかお尻から痩せて、太る時はお腹とか付いて欲しくないところから肉が付くから大変だ、とか言わない？」

いきなり胸から太るって、あんたどれだけ痩せてたのさ……薬飲んでちよつとご飯の量が増えただけなのに」

「で、ですよね……」

ピルを飲んでから、食欲が増した上にお腹も壊しくくなつたおかげで、心なしか食事の量は、普段の1〜2割ほど増えた気がする。

でも、それ以外に大きく食生活が変わつたところはない。生理前に胸の大きさが変わることはあつたけれど、それでもここまで目に見えて膨らんだことは、ここ数年ずっとなかったと思う。

やつぱり今まで女性ホルモンが正常に出ていなかったのかなあ、と自分の体の異常さに改めて思いを馳せながら、私は冬物のワンピースにもそりと頭を潜らせたのだつた。

が、そんな改善の兆しにほつとしたのも束の間、私の身体異常は、どうやら女性ホル

モンだけにとどまらなかったらしいということがわかってきた。

女性ホルモンよりも更に上位に来る、下垂体からのホルモンが著しく低く、全く出ていないようだという検査結果が出たのは、それから間もなくのことだった。

原因不明だが、これが今年どころか、長年私の人生を苦しませてきた体調不良の要因ではないかということまでわかり、何とも言えず狐につままれたような気分だった。

今まで「虚弱体質」で自分も周囲も片付けてきたものだったので、治るかもしれないと言われても、そう簡単に信じられるものでもない。

まあでも、ここまで検査に少なくはない時間とお金を掛け続けてきたのだから、体がおかしい原因がわかっただけ、光明が見えたし幸いと思うことにした。

そして、検査が始まるまでの当面の治療方針として、これまた著しく低かったステロイドホルモンを補う薬を飲むことになった。

それにより、1シート消化したばかりのピルは、どうやらお役御免になったらしい。ステロイドの補充でどれだけ体調が改善するかを見たいので、ピルは一旦服用中止という医師の判断だった。まあ、これを仰ぐためだけに病院内外をたらい回しにされ、患者としての尊厳を傷付けられ、酷い目に遭った話というのもあるのだが、それはここではどうでもいいので省略しておこう。

皆には大いに慰めてもらった。

とりあえずピルをやめなければいけないという話を伝えたその日、いつものように皆でお風呂に入りながら、私の両脇にくつついたヨルくとエリくんは、名残惜しそうに胸をもにもにしていた。

「女性ホルモンが減ったら、やっぱりこの胸もしぼんじやうよねえ」

「つまりこの胸ともあと数日でお別れか……」

「今のうちにふにふにしとかなきゃだね」

すつかり気に入られてしまったらしい。本当に残念なんだろうなあ、と微笑ましくその様子を眺めていたら、ヨハネさんがいつになく冷たいというか、呆れ返った目でこちらを見ていることに気付く。

私はともかく、ヨルくんたちにまでこんな目を向けるのは珍しい。呆れるというか、何かを咎めているような視線だ。思わず目をぱちくりさせると、ヨハネさんは若干苛立ちを滲ませたような声で、お風呂のお湯を蹴った。

派手な水飛沫の音に、ヨルくとエリくんが小さくびくつとなる。

「あのねえ……。あんたたち、もつと他に言うことあるでしょ？」

「……」

ここまで聞くとわかる。明らかに怒っているようだ。

容赦なく怒りの矛を向けられた夜羽くと恵李朱くんは、ぱちぱちと瞬いてヨハネさ

んを見つめる。

「…………えっ」

「あっっΣ」

けれど、すぐに何かに気が付いたらしい。二人であわあわしながら、大慌てで私に向かつて申し訳なさそうに謝り倒してきた。

「！ お姉さん、ごごごごめんね（；・ω・；）、違うんだよ、お姉さんのおっぱいが小さくなるからがっかりしてるわけじゃないよ（；・ω・；）」

「そっ、そうだよ!? サキの体のことが一番大事なのに、ごめんね、ボク達こんな……胸のことぐらいで勝手にはいやいだり残念がったりして」

ヨルクンに至っては、しょんぼりし過ぎて泣きそうな顔になっている。

そんなことに気を遣わなくていいのに、本当にいい子たちだと思いつながら、私は濡れた手で軽く二人の頭を撫でた。

「あはは、いいのよ二人とも。こんな胸でも、そんなに好きになつてくれるなんて思わなかったし。」

…………それに、胸が減るかもって状況が一番がっかりしてるの、多分私だから……」

「わああああ（；・ω・；）」

思わず乾いた笑いでずーんと肩を落とすと、大慌てでヨルクンたちが抱きついて慰め

てくれた。

ヨルクんたちの反省はどうやら正解だったらしく、大きく溜め息を吐いたヨハネさんは、それ以上何も責めずに、私の後ろに回り込んだ。

「……はあ。だからボクは最初っから、あんたの体型なんてどうでもいいって言うてるのに」

ぎゅっ、と後ろから抱き締められる。綺麗な褐色の、細くも逞しい腕。ぴたりと頬を寄せられて表情は見えないけれど、静かでもはつきりと響く心地よい声で、心からそう思ってくれているのが伝わってくる。

「ヨハネさん……」

「どうでもいいんだよ、胸の大ききなんて。大きかろうが小さかろうが、あんたの体だから最初から全部好きだって、ボクは言うてるでしょ。それでもまだ気にする気？」

私の胸に一喜一憂した反応をみせる皆も十分可愛かったけど、そんな中で全く反応が変わらなかつたのは、そういうえばヨハネさんだけだっけ。

周りの反応に傷付いたわけではなかつたけれど、知らないうちに自分で自分自身を傷付けるような真似をしていたようで、その優しさに思わず涙が滲みそうになった。

「うう……あ、ありがとうね。」

いや大きいのが嫌って人もいるし、一概に大きいからいいなんて言えないのはわかつ

てるけど、それでも私は大きいおっぱいが好きだから大きい方がよかったよ（；ω；）

全然ブラの肩紐落ちてこないから便利だったし！せめてヨハネさんくらいあればよかったのに（；ω；）

「肩紐……実用重視なのが、あんたららしいとか何というか……」

そこなの？ と物言いたげな表情を浮かべたものの、ヨハネさんはすぐ微笑んで、ちよつと困ったように自分の控えめな胸を眺めてから、私の頬をつついた。

「これでいいって、あんただいぶ薄欲じゃない？ 大きいのがいいなら、もつとこう……直生とか、あやめさんとか」

「君のおっぱいは、大き過ぎず小さ過ぎずやらしすぎず、形もいいし可愛いし柔らかいし、私の全理想が詰まった究極のおっぱいなんだが」

「そ、そう……？ それに、ホルモン剤自体をやめるわけじゃないじゃん。」

一番体に大事な作用を持つてる副腎のホルモンをこれから摂取してくんだから、それによる女性ホルモンの分泌次第じゃ、必ずしも胸が縮むって決まったわけじゃないでしょ」

「ん……まあ、それもそうか」

「縮んでから考えればいいじゃん。どんな形や大きさになっても、ボクは好きだよ。触

れて気持ちいいことに変わりはないんだし。いくらでも触ったげるし」

頬ずりをしながら、自分の腕と全身に私の体を閉じ込めてくる。

細身だからつい忘れがちになるけど、ヨハネさんも大体体が大きい。すごい長身の、くびれも肉の付き方もパーフェクトなモデルボディなのに、それでも私が好きだと言
う。

頭を撫でられてうとうと目を細めていると、とつくに後退して脱衣所で体を拭いていたヨルくんたちは、何やらこそこそ言い合いながらこちらを覗いていた。

「ボクらや直生くんじゃ及びもつかない、完璧な対応だった……」

「ヨハネが全部お株持ってた（? ）ボクらが悪いのわかってるけどなんかくやし
い

（? ）」

ヨハネさんの深すぎる愛情の見せつけ方が、素直に羨ましくもあり、悔しくもある様子だった。

まあ、ここまでできる人ってなかなかいないような気もするけれど……。

そして、そんな優しさの持ち主がすぐ傍にいてくれることに、どうしても今はニヤケが隠せない私なのであった。

「うげひ」

そうして、新たな薬を飲み始めて数日後の、お風呂上がりのこと。体を拭くのも早々にそろりと体重計に乗って、思わず変な声を上げた私の方を、先に出て着替えていたヨハネさんが振り返った。

「どうしたの？」

「あぎや……」

「何、さつきからその悲鳴」

「た、体重が……増えてます……38だったのが、40.2キロに……」

やや複雑な心境でそう報告すると、当然、何故嘆くのかと言いたげに、ヨハネさんは形のいい眉を寄せた。

「なんだ。いいことじゃない。ずっと増やさなきゃって思ってたでしょ。やつと40キロ台に戻ったんだね？」

「うう……そ、そうだけど、ピル飲んでからの一ヶ月で2キロ近く……頭では分かかってても、女子として太るのはやつぱ抵抗あるよお……」

減るのはいいが、太るのはよくないみたいな刷り込みが為されてしまっている、己の脳内と慣習が忌々しい。

たしかに、太っていると云われたことはない。むしろ細すぎだからもつと食えと言わ

れたことの方が多いくらいだ。でもそれ、つまるところは太い人間は食うなということにならないか？ その「細い」の免罪符が使えるのは、一体いつまでの話だ？

とか色々考えてしまって、要は太り過ぎはよくないと言ってるのと同じ意味ではと思ってしまう。しかもまあ、大概は見た目的な意味で言うじゃないですか、みんな。

お陰様で、最近の体調は波がありつつ比較的いい方だと思う。これも、体重が正常な方へ戻りつつあるからなのかもしれない。

けれど、覚悟していたこととはいえ、それで重くなったとか言われたり思われたりするの、女の子としてはなかなか複雑な気分にもなるわけで……。いや、私女の子って歳じゃないかもしれないけど。

しおしおになりながら体重計を洗面台の下に戻し、私が毛糸のパンツと腹巻完全装備でパジャマに着替え、タオルを濡れた髪に巻いているのを、腕組みしながら眺めていたヨハネさんは、準備ができるのを見計らって、ひょいっと私の体を両腕に抱え上げた。

相変わらず、その細腕からは考えられない、すごい力だ。さすがはSOAT隊長。

「ちよっ、何してるの?!?! 重いよ?!?!」

「別に大して変わらないけど?」

「今は変わらなくても、この後2キロ3キロとか、45くらいまで万が一にも増えようもんなら、順調に重くなっちゃうけど!」

やだやだー、ヨハネさんに重いか抱えるの大変になったとか思われたくない！ 悪気がなくつても傷付いちやうじゃん！」

「バカじゃないの？ ボクがそんなこと思うって本気で思ってるワケ？」

暗がりの廊下でじたばた暴れてみても、全然離してくれる気配がない。

離してくれないとなれば、暴れるのはヨハネさんが余計大変になるだけなので、私は大人しく抱えられたまま、その胸元にぴったり顔をくつつけた。Tシャツの胸元は、お風呂上がりでほこほことあったかい。

抵抗しないのを見て取ってか、ヨハネさんは私を抱えたまま大股で寒い廊下をさつきと後にすると、自室の敷布の上に座り込んだ。本来お客様用だった、極上の毛足が長い新品を敷いたばかりなので、犬モードの直生くんの毛皮並みにふわふわだ。

自分のあぐらの上に私を抱えたまま座っても、下ろしてくれる様子はなさそうだった。

子供のように私の体を揺すりながら言う。

「もつと喜びなよ。あんたの体がおかしかったの、どう考えても低体重が原因の一つでしょ。これからは、これがあんたの『殻』になるんだ。これまでのあんたの『普通』じゃできなかったことが、いっぱいできるようになるんだよ」

「うう……でもその『殻』、絶対今までのより重いんだよ……？」

「だから何さ。あんたの命の重さが増えたってことでしょ？」

体重が増えるってことは、消えそうだったあんたの命が、だんだん重さを増すってことになるじゃないか。ボクは嬉しいよ。この手に感じられる、あんたの命が増えるんだから」

体の重さは、命そのものの重さだと。燻んだ青の瞳が、真剣に説いている。

丸ごと受け入れて、そんな風に言ってくれた存在に、私は思わず目を見開いて。

心から感謝しながら、ぎゅつと抱きついた。

「ヨハネさんって、なんでそんなイケメンなのかなあ」

「当たり前のこと言ってるだけだと思うけど……」

「その当たり前前の考え方が素敵なの！ もうほんと大好き、結婚して」

「はいはい」

流れるように言いながらも、私を抱えたままバランスを崩して布団に倒れ込んだヨハネさんは、一瞬きよんとんととして私を見つめた後、楽しそうにくつくと肩を揺らして笑ったのだった。

きつと大丈夫だろう。どんな自分でも愛してくれる人がいれば、私はまだ闘える。

もう何度もわかり切ったことではあるけれど、感謝と優しさで胸がいつぱいになった夜だった。

カップリングなりきり100の質問その1

カップリングなりきり100の質問 その1

I あなたの名前を教えてください

I : 今回は対談形式だね。久しぶりだなあ、これやるの

M : ま、まさか私が一人のキアラとして、呼ばれると思っただけだね……。大野紫咲です。よろしくお願いします

I : どうも、おなじみ鈴木愛理です。紛らわしいから、イニシャルはI r i sのIでいくね。そして？

A : 新しい顔ぶれもいて、なんだか嬉しいわね。吉村あやめです。よろしくね

J : ボク、ここにいてもいいのかな……。櫛夜翰。言つとくけど、公式とは無関係だからね。サキ達の世界にいるボク、って話だから

I : 意外とヨハネはそういう事律儀に気にするよなあ

J : 「意外」は余計だよ。そりや気にするでしょ。ボクのせいで一次創作タグ付けられないんだし。ヨルハに来てもらえばよかつたんじゃない？

M : いずれはそうなると思うんだけど、ヨルハくん、一応まだ小さいからね……。少な

くとも見た目は。成人向けの作品に出てもらうのは、ちよつとつと気が引けるといふか

(汗)

A : こ、今回もあるのね、あの恥ずかしい質問…… (照)

I : まあまあ、みんなそんな気負わずに笑。とりあえず、この顔ぶれでいくからよろしくね

2 年齢は?

I : えつと……作品によつて変わるけど、とりあえず今の年齢でいい? 37です

J : 意外と年だなあんた……

I : 女性に対して失礼過ぎるだろ (# ^ ω ^) そういうヨハネは?

J : 一応若いつて褒めてんだけど。ボクは今年成人を迎えたところ

A : はあ……いいわね若いつて……。私なんてもう34よ

I : 君はまだ30代前半だろ!?

I : 前半も後半も関係ないわよ! 愛理童顔だからよく年間違えられるし!

M : みんな大人っぽいからいいじゃん……私28だけこの間中学生と間違えられた

よ…… (ズーン)

(一同の気の毒そうな顔)

3 性別は?

I : 全員女？（周囲を見渡しながら）

J : ……それボクに言わそうとしてる？ 一応男んだけど

I : や、アバターの性別で言った方がいいのかなって。てか、僕最初本当に女の子だと思ってたんだよね

M : 私も。全然気が付かなかった……。まあでも、どつちとか関係なく、ヨハネさんはヨハネさんだよ

A : みんながそう言うから、私も拘りはなくそんな風に思ってたわよ。いつもお洒落に気を遣ってて可愛い子だなって（にっこり）

J : えっ……。……あ、ありがと……。…（もじもじ）

I : おっ。珍しくヨハネがデレてる

4 貴方の性格は？

M : む、……。ううん、結構わがままで、根暗だと思う（苦笑）

I : 僕も、基本性格は結構サキに似てるかな。素は割と暗いしネガティブだよ（苦笑）

A : ん、んと……。優柔不断で、気が弱い人間って感じかしら……

J : ねえ、みんなマイナスイメージの印象しかないの……。？ 自己評価低すぎない？

I : 自分でどう思うって聞かれたら、そういうもんだろ（苦笑）ヨハネはどう答えよ

うと思つてたのさ

J:……自分の目で見たものしか信じない性格。真実と物事に向き合おうとするけど、その分人への気配りは出来ない冷たい人間つてとこかな

I:自分だつてそれなりに低いんじゃない

5 相手の性格は?

M:よ、ヨハネさんは優しいよ! 傍目にはツンケンしてるけど、ほんとはずつごく優しいの。いつも誰かのことを守ろうとして、本人は気配り出来ないって言うけど、人の痛みとか繊細なところによく気が付く人で、すごい情熱家で、情に脆くつて……

J:サキのことだつて、ボクはワガママつて思つたことないんだけど。むしろ他人の前では気疲れするほど控えめな方でしょ。明るく相手を振り回してるように見えて、よく人のこと観察しながら動いてるし。普段自分を殺すからボクの前では我儘なんだろうけど、それだつて可愛いもんだよ

I:おいおい、この二人はノロケか? (呆) 僕も負けてられないな。あやめのことは、素直で優しい子だつて思うよ。よくも悪くも、自分に嘘つけないっていうか。こうと決めたら絶対に曲げないし、頑固だよ

A:それを言うなら、愛理もでしょ? 意外と感情に振り回され易くて、ぼろつて涙したり、大笑いしたり、表情豊かなところがあるのよ。普段はクールで格好いいけど、そ

れもプライベートとのオンオフ切り替えがすっかり出来てるんだなって、憧れちゃうの

J : アイリが? へえ?

A : あと、寂しがり屋さんよね。ふふ

I : !!! そつ、そんなことは……君だって、台湾から帰る時に泣いたくせに

A : それだって、そもそも愛理が失恋に傷付いて、私のとこまで逃げて来たせいでしょう?

J : えつと……つまりどっちも寂しがりだってことでいい? (呆)

6 二人の出会いはいつ? どこで?

I : これはもう何回も答えてる気がするけど、2008年頃にアメリカで

J : お互い日本人なのに、会ったのは外国なの?

A : ええ。愛理が研修で渡米してたところに、私が留学で来て出逢ったの。ルームシエ

アメイトとしてね

J : ふうん……なんかグローバルなんだね

I : ヨハネ達こそ、世界を超えた遠距離恋愛だって聞いたけど?

M : あ、そうだね……。これは遡るなら、今年の1月頃、私が「セブンスコード」つてアプリを始めた時かな。リアルの世界では、まだ1年経ってないんだねえ

J : 作中でも、まだ出逢って数ヶ月のはずなんだけど……? まあ、ボクはよくこつ

ちに来て、マルメロとしてのあんたにも会ってるから

7 相手の第一印象は？

M：……ちよつとハデハデな子だ、って思った……笑

J：まあ、この見た目と肌の色じや、無理もないか（苦笑）

M：あつ、でつ、でも、今は好きだよ。それに、まっすぐな髪と透き通った目と、整った顔立ちがとつても綺麗で……愛理によく似てる綺麗な子だなって思ったの。だって私、愛理のことも好きだから……照

I：おや、熱烈な告白ありがとう

M：あ、あとは、声ね！ もともと愛理の声のイメージに似てるって情報を読者さんからいただいたんだけど、本当にびったりで。中性的で、低くて落ち着いてるけど時々女性らしい色っぽさも滲んで、うっとりするっていうか……ご、ごめん。外見ばかり褒めてるよね、私

J：いくら外見でチャホヤされるのがイヤっていつても、さすがにそこまで褒めちぎられるとムズムズするんだけど……。サキって、出逢つてからずっとこんな感じ。最初はちよつと得体が知れないなって思ったけど、なんでも素直に話すし顔に出るから、わかりやすい子だなって思った

I：顔に出やすいって点では、僕も同感だな。出逢つた頃は本当に、初心で人を信じ

やすい、いわゆる典型的なお嬢様って思ったよ。ただ、こんなに根性ある子だなんて、思ってたけど

A：やつぱり、いくらナメられたくないって思っても、そんな風に見られるものよね
 ……

I：悪かったって。今はそれだけじゃなくて、だいぶ印象変わったからさ

A：ならいいんだけど。愛理のことは、完璧に自立してる、社会の中の憧れの女性像って感じだったわ。正直、その印象は今でもあんまり変わってないのよ

I：君だって、いい具合に自立してるだろ？

A：それとは何か、格好良さが違うっていうか！ タバコだって吸うし、仕事もできろし！（じたばた）

8 相手のどんなところが好き？

M：5問目で、大体言っちゃったような気がするよ……（赤面）

I：じゃあ、性格以外で何かない？ 具体的なエピソードとか

M：んー……ヨハネさんって、面倒見がよくて世話焼きなんだよね。私のことだけでなく、ヒバリちゃんとかことりのことも、何だかんだ言って邪険にしないでくれる

A：ヒバリちゃん？

M：あ、えっと、向こうの世界で仲良くなった、小学生くらいの女の子だよ。ヨハネ

さんが膝に乗せてゲームして遊んでくれていると、なんか親子みたいでかわいいの笑

A：あら！同じ年下の子相手でも、ライラちゃんいつも大喧嘩してる愛理とは大違いねえ笑

J：あれは相手が悪過ぎるだろ！クソ生意気なんだよ！すぐ屁理屈こねるし……

A：でも、そうやっていつも年下の子目線で、全力で遊んで上げてる愛理のこと見てるの、私結構好きなのよ？

I：うえ……思いもがけず評価が高いけど、そうかあ……？

A：なんか、ぶつきらぼうで素直じやないように見えて、優しいところがあるとキュンときちやうわよね。風邪の時にいつもより頻繁にLINEが送られて来たり、帰りに美味しいもの買ってきて看病してくれたりとか……

M：わかるくく！ なんだかんだで優しいところが、やっぱり好きだなんて

I：いやいや。僕じゃなくても、誰だってそうするだろ普通?!

J：だよなあ。あんた達が危なっかしくて見てられないからでしょ（呆）

（そういうのを優しいと言うのでは？という顔のあやめとムラサキ（? ）

9 相手のどんなどころが嫌い？

J：……この質問、意味ある？ 嫌いだったらそもそも一緒にいないと思うんだけど

I：うわあ、出たよヨハネの天然純情発言

M : 多分、本気で嫌いとかじゃなくて、一緒にいたらここが気になるとかちよつと困るとか、そういう意味よね……？

J : ああ、それならいつぱいあるよ。体が弱過ぎるくせに無理するところとか、すぐダラダラ夜更かしするところとか、リアルだと気が弱すぎてすぐ人任せにするところとか、やるつて約束したことをいつまで経つてもやらないところとか

I : あるんかい

J : 欠点がゼロの人間なんてないからね

M : あはは…… (苦笑)

J : まあ、その分好きなのところが遥かに凌駕してるから何も困ってないんだけど？ (しれつ)

M : は、ちよ……;;;; (驚) (慌)

I : はいはい、ごちそうさま。無理し過ぎは、僕もたまに言われるんだけど……あやめのヤなどとか……言うとか、僕まで心が狭い人間みたいになるからなあ (溜息)

A : あつ、あるの? ; ; ; ;

J : 吐いちまえ吐いちまえ。誰も聞いてないよ

I : 琢真と仲良くし過ぎなんだよ……別に何もなし、僕一人の私情つて事は分かつてんだけど (むすつ)

A : あ……それはねえ……。同じバンドのメンバーだし、よく相談にも乗ってもらってるし

I : わかってるよ。認めたくないけど僕も世話になってるし、そこで会うの強制的に止めさせたところで、スツキリせず余計に苦しくなるだけだろうし。けどなんか……存在がムカつくんだよあいつ!!

J : ……アイリって、もしかして独占欲結構強い？（ひそっ

A : 強いわよ。自分は結構浮気するのにね（ひそひそ

I O : 貴方と相手の相性はいいと思う？

M : 私はいいと思うけど……ど、どうかな？

J : 正直、戦闘面では二人ともシールド型だから、相性いいとは言えないんだよね。でも、そもそも何か一緒にカバーして乗り切ってきたし。何より傍に居られるってことは、多分いいんだと思うよ。相性なんて、後からどうとでもなる

M : よ、よかったあ……

I : いい事言うじゃん。僕らに關しても、最初は最悪だとあやめに思われてたみたいだし？笑

A : 何よ、自分だってそう思ってたくせに笑。でもその後は喧嘩しつつも上手くいったんだから、相性だけでは分からないわよね

I : うん、……本当にね。

I 1 相手のことを何て呼んでる？

I : あやめ？

A : 愛理♡ って、やだもう、恥ずかしいわよこれ（笑）（照）

J : ムラサキだから、サキを愛称にしてるかな

I : そういえば、君はなんで「さん」付けなの？

M : え？ うーん、愛理さんのことをさん付けしたり呼び捨てしたりするのと、似たような感覚だよ？

J : もっと呼んでくれていいんだよ？

I : と言ってますけど。呼び分けとかはあるの？

M : え、ちゃんと呼び捨てしてるじゃん。その、素が出た時とか。甘えたい、ときとか……（赤面）

I : ふうん？ ふううううん？（にやにや）

A : ちよつともう、愛理ってば。からかうのはそのぐらいにしてあげなさいよ（苦笑）

I 2 相手に何て呼ばれたい？

M : 私は、危なくなつた時にヨハネさんが反射的に「サキ」って呼んでくれたのが嬉しくて。それからずっと、二人の時はそう呼んでもらってるんだ。名前で呼ばれるの

も、もちろん嬉しいんだけどね

J : そういえばボクから呼んだんだっけ……。ボクは別に何だっでもいいけど……

I : 苗字でも?

J : 最初の頃はって話だよ。今は名前で呼ばれ慣れてんだから、そっちじゃないとやだね

I : おーおー、言うねえ笑 んー、僕も別に希望はないかな。今更アイリス呼びに戻させる気も起きないし

A : 最初の頃は、あんなに名前で呼ばれるの嫌がってたのにね笑

I : 君があんまり呼ぶから、もう慣れちゃったよ……

13 相手を動物に例えたら何?

I : 動物? そうだなあ、猫だったらふわっふわのメインクーンかな。あやめはたしか卯年だったよね? 寂しがりなところも似てるから、ウサギっぽくも見えるし。それか羊……とにかく、毛が長くてふもふもふわっふわした生き物かな。あやめの毛とか体って、ふわふわして気持ちいいんだよ

A : やだ、もう。なんだかそう言われると恥ずかしいわね(照笑)でも猫もウサギも羊も、可愛くて好きだから嬉しいわ。愛理は、気まぐれな猫かしら。一見ツンツンして見えるし何考えてるか分からないけど、こつちが全然心の準備してない時に限って、擦

り寄つて来たりね

I : 僕つてそんな風に思われてるの？ 笑

A : それから、格好良いから狼も似合うかしら。ヨハネさんは？ ムラサキちゃんの
ことどう？

J : ……動物か。考えたことなかったな（じーっ

M : ……（照）（もじもじ）

J : 猫よりは小型犬つぽいとは思うけど……それ以外の動物なら、イルカかな。賢い
し、人の気持ちがよく分かるし。海を気持ちよさそうに泳いでく姿が、なんか似てる

I : だつてさ？

M : え、ちよつと意外……。私も綺麗な海とか水辺には惹かれるから嬉しいな。ヨハ

ネさんは、うーん……

J : どうせツンケンしてるから、ハリネズミとかハリセンボンとかなんだろ？

M : それもちよつとは考えたけど（苦笑） ……ニシコクマルガラス？（首を傾げ）

A : 普通の鳥じゃないの？

I : なんてそんなピンポイントな種？

M : ニシコクマルガラスつて、鳥類の中にも珍しい、生涯に渡つて同じパートナーを
貫く種なんだつてさ。なんか、人間で言う愛情に似たホルモンの分泌も確認されてるら

しい。動物って、より多くの相手と番って少しでも多様性のある子孫を残すのが目的だから、パートナーを変えないのは正直メリツトがなくて、凄く珍しいんだよ。だから、その……

J : ?

M : その話を読んだ時に、なんかあの……一途なところが、すごく似てるなと思っちゃって……

I : あー……~~ん~~んかわかる。それはわかる。ヨハネすつごい一途そう

J : なっ……?!?! (慌) こ、この話はもういいから！ (汗)

I 4 相手に~~レ~~レゼントをあげるとしたら何をあげる？

M : わっ。どうしよう。迷っちゃうな

I : 僕も、贈り物選ぶのは結構楽しんじゃうんだよね。社会人になってお金が使えると、何かにつけてプレゼントしたくなるというか

A : 相手の喜ぶ顔、見たいものね。それを想像するとわくわくしちゃうって……私もその気持ち分かるわ！ うーん、何をあげても喜んではくれるけど、私は敢えて、相手が自分じゃ買わなさそうな髪留めやお洋服かしら？ 愛理って、身だしなみは綺麗だけど、普段自分が使う系統以外は全然買おうとしないんだもの

I : 仕事で使えない物買ったって意味ないだろ笑 でも、そのへんの冒険は自分じゃ

なかなか出来ないから、君がいて助かってるよ。そうだな、僕も一緒にシヨツピング行つた時は、服とか贈るけど……あやめは料理が好きだし、新しいキッチン用品とか、エプロンとかも視野に入るかな。それだと実用的だしね

A：あとは、二人でお休みの日に使うネイルとか？

I：色が綺麗で、そんなに使わないのについてい集めちゃうよな笑

M：なるほどね。私は、何だろ……消え物だったら、お香とかアロマオイルとか、ヘアケア用品とかかな？ 最悪、香りが合わなければ自分で使えばいつか笑 練り香とか、リップスティックもいいよね

J：まあ、部屋に飾れる物とか、小さくて持ち運べる物って、そこにあるだけで相手の存在意識するからね。だから、ボクだったら……

M：うん？ なに？

J：……。いや。何でも……（目逸らし）

I：今、指輪かネックレスって言おうとしただろ。ヨハネも大概束縛重いよなあ（にやにや??!）

J：?!?!

ちつ、ちちちちがつ、そんなこと絶対ないからッ!!!!!!
（慌）

I 5?!?!プレゼントをもらうとしたら何がほしい？

I：ちなみに、今相手が言つたものは貰えたら嬉しい感じ？

A : それはもちろんよ！

J : だね

M : うん。嬉しいよ。すつごく

I : 満場一致と。んーと、じゃあそれ以外で欲しいものか……普段作ってもらってるからプレゼントに入るか分からないんだけど、あやめの手料理とか？

J : あ、料理は分かる。ボクも食べたい

I : 意外なところに賛同者がいた。そりやそうか。サキだって料理上手だもんね

M : じよ、上手って程じゃないよ……(照) あんなに当たり前のもので喜んでもらえるんだったら、その笑顔こそ私にとって最高のプレゼントだね

I : うわあ……うわあ……この僕が、なんか久しぶりに熱に当てられそう……。あやめはどう？

A : ふふ、私も、愛理が美味しっていっぱい食べてくれたら、それだけで嬉しいわよ(にっこにっこ)

I : い、いや、今のそういう質問じゃないんだけど……(赤面)

16 相手に対して不満はある？それはどんなこと？

M : うーん、なんかこれ、9問目と被る感じ？

J : 大概言った気がするよね。まあ、もしかしたらこれから先も、何か出て来るかも

しれないけど

I : 長い間一緒に居ればいるほど、それはどうしてもなあ……

M : 愛理は同居の先輩って感じだけど、やっぱりそれでしんどくなる事はある？

I : そりゃあね。ただ、不満って言っても、上手くそれを言葉に出来ないんだよね……

A : でも、あんまり言語化出来ないの言い訳に、逃げ続けているのもよくないわよ。私は、愛理にもっと遠慮なく言って欲しいなあって。察して欲しくて不機嫌になられても、わからないんだもの（ぶう）

I : う、努力はする………

I 7 貴方の癖って何？

M : 口癖も含めていいんだったら、「多分」「つばい」「感じ」を連発するところかな……
自信がなくて、ついつい曖昧な言い方に逃げちやう（苦笑）

J : でも、こっちの世界にいる時は結構はきはき喋ってる印象だけど？

M : それは、セブンスコードだと表以上に大胆になれるからっていうか、私であつて私じゃないからだよ（苦笑）

J : あんたの癖っていうと……よく赤くなるよね。ほっぺた両手で押さえてるし

M : えっ。あつ……（赤面）

J : ほら。またやってる

I : ふうん、なかなか可愛い癖じゃないか

M : ううう、リアルだったらこんなに分かりやすく赤くならないから、つい……（むにむに）

A : 私の癖は、自分じゃよくわからないかも……

I : こういうのって、どこまで癖に入るんだろ。洗濯物は必ず物干し竿の右から干すとか、コーヒードリップパーは必ず白と黒を一日ずつ交互に使ってるとか、そういうのは分かるんだけどな

A : そういふのは、癖っていうより習慣なんじゃない……？笑

18 相手の癖って何？

A : 癖……愛理の癖って、何かあるかしら。ゲームをしながら膝を手で叩いたり、何か分かった時に指を鳴らしたり、指先に出ることが多いわよね。後は、ひやかす時に口笛を吹いたり。ちよつとキザな癖が多いなあって印象よ笑 それから、女癖？

I : 悪かったね、キザで。手癖も女癖も、どうせ兄さん譲りだよ笑 ヨハネの癖は何かないの、サキ？

M : ああ、それは……爪噛み？ でも、最近はあるまり噛んでないよね

J : ストレスがない時は、できるだけ噛まないようにしてたから。あんたのネイル、塗ってもらう時にボロボロなのヤダし

M：そんなことまで考えてくれてたんだ……ちよつとじーんとしちやつた笑 だつて、ヨハネは指以外も結構噛み癖……あつっ（焦）（慌てて口を押える）

I：……ふうん？ どこを噛んでるんだろうなあ（にやにや）

J：わ、バカっ……！（焦）

M：い、今のは聞かなかつたことにして〜！；；；（ぶわあああ）

I 9 相手のすること（癖など）でされて嫌なことは？

M：え、……特に、相手に被害が及ぶようなことつてないよねえ

J：うん。ボクもないかな。……枕に涎垂らされるぐらいは、しょうがないかなつて諦めてるし（溜息）

M：うわわわ、ごめん……；；；；

I：うーん、そうだよね。癖つて基本的に個人の範囲内で完結しちゃうし。ああ、でも、休みで寝てる日に朝から大音量でミキサー回されるの結構キツいかも……

A：ごめんなさい！ 家を出る前に手の込んだおやつ作ろうと思つたら、間に合わなくて……；；；；

J：これも、癖じゃなくて習慣？

A：そうね、お菓子作りは趣味で。でも愛理も、ぼーつと携帯見たり雑誌見たりしながらローテーブルに手を伸ばして、飲み物零すのやめなさいよ。今まで何回カップから

ぶちまけて、慌てて布巾持って来る羽目になったと思ってるの

I : はい、すいません……

20 貴方のすること（癖など）で相手が怒ることは何？

M : 綺麗つて褒めると、怒られる

J : それは、今までどう受け止めていいか分かんなかったから……

I : じゃあ、今は平気なの？

J : まあ、サキにならね

I : ひゆう。妬ける

J : そういえば、ボクが起き掛けに、あんたの髪いじって顔埋めてるのは、迷惑じゃない……？

M : え。それは全然、別に迷惑なんかじゃないよ。ずっとすーはーされてると、むしろ可愛いなって思うし。私まで気持ち良くて、二度寝しちゃうから困っちゃうけど……

／／

J : そっか。怒ってないなら、いいんだけど……（ホッ

I : ヨハネって、ほんとにサキの髪好きだよねえ。ま、ボクもあやめの髪触ってるの好きだけど

A : 触るのはいいけど、ヘアセットした後でぐしやぐしやに撫で回すのやめてよねー

！笑 天然パーマに見えても、これ結構苦労してるんだから。満月ちゃんだって、バイト先でされて困るって言ってたわよ

I：ごめんって。なんか、君も含めて普段頑張ってる子が目の前にいると、思いつきり撫でたくなっちゃうんだよね笑

M：（満月ちゃんの「困る」は別の意味のような気が……まあいいや、ここでは黙っておこう）

2 I 二人はどこまでの関係？

M：……ど、どこまでって……！ ……（俯いて真つ赤）

J：……（赤面）

I：（交互に見比べ）ほほーう……。これは「察し」ってやつ？（にやにや）

J：う、うるさいな……。そういう自分はどうなのさ！

I：僕？ 僕はもう、同居はしてたし、風呂は入るし、キスから何からそれ以上まで、なーんでもしたことがあるけどね。なあ、あやめ？

A：う、うう、もう……。 たしかに、その通りだけど！（照）

M：……うん？ あれ？ して「た」？

I：ああ、ほら、リアルタイムの事はまだ分からないから。小説読んでる人のために、一応時系列に忠実に答えておこうかと思って。作中では一緒に住んでるから安心して

ね

M：ああ、なるほ……ど……ど……？ んん……?? (首をかしげ) まあ、いいか……

22 二人の初デートはどこ？

M：私がお世話になつてるママの、バーで偶然会つた時かな。それとも八尺様事件の前に、ヨハネが街中で私を間違えて誤認逮捕しそうになつた時？

J：あれつてデートに入るの？ (呆)

M：だつて、初めての調査つて感じで面白かつたよ笑 手錠で繋がれて離れられないなんて、なかなかないし。テケテケはさすがにちよつとビビつたけど……

I：なかなかスリリングなデートみたいだね。僕達は、一体どこからデートに入るんだろう

A：付き合う前だけど、アメリカで一緒に美術館に行ったのは、印象深く残つてるわね。絵もだけど、愛理の見たことない表情に、ドキドキしちゃつて……。でも、その後の台湾の海の景色も忘れられないし、二人で出掛けた場所はどこも素敵で、選ぶことなんて出来ないわ

J：でもまあ、これつてつまり、本人が「初デート」つて認識すれば、何でもそうなるつてことだよね

I：うん？ まあ、そうじゃないかな

J : じゃあ、今度デートらしいデートは改めて誘うから。覚悟してよね

M : ……!!! ……(赤面)

I : おお、これは宣戦布告だ

A : なんだか、私まで楽しくなってきたわ!

M : 二人ともからかわないでよ! 笑

2 3 その時の二人の雰囲気は?

M : うえ、ああ……ヨハネさんは、街中で起きる事件の原因が私だと思ってたから、最悪だったよね……

J : う、ごめんって……;;;

M : でもさあ、それでも優しくかったんだよ。「女」って呼ぶ事に何かすっごい申し訳なさそうな顔して、ちゃんと名前聞いてくれたし。手錠で繋いでる間も、ずっと守ってくれたしね

J : 別に、特別なことじゃない。被疑者にだって人権はあつて当然だろ。それに、その……

M : ……? ?

J : い、今だから言うけど、その、……か、可愛い、かつたし……。ボク多分、あの時からあんたのこと好きだったよ

M:!!! え、ちよ、ちよつと待って、そんなこと思ってたの（混乱）

A:わあ……後でその話ミカに聞いたけど、ヨハネもすっかり私情に動かされてんじゃない

J:うるさいなあ！ サキに対する大体全部は私情だよッ！

I:SOAT隊長、まさかの開き直り……笑笑笑 まあ、このくらいにしておくか。どうかな、僕らの美術館デートの時は

A:愛理つてば私をからかって面白がつてばかりだから、完全に私がリードされてるつて雰囲気だったわよ。でも、私は愛理がすっかりしてくれてるおかげで安心出来たし、結局はそれでよかつたんじゃないかと、今になつたら思うわね

I:なるほど。エスコートの才は認めてくれるわけだ

A:ええ。愛理はそういうの、昔から器用で上手だと思うわよ

24 その時どこまで進んだ？

J:……。手は、繋いだかな

M:あと、壁ドンされて口塞がれたし、一瞬だけど同じベッドで添い寝したよねえ

I:待つて事件の調査だよ？ それどういう状況???

J:い、いい色々あつたんだよ！ 別にいいだろッ！ そう言う、そっちは

I:……。何かあつたっけ

A : 何もないわよう。カフェでおしゃべりしたり、隣に並んで歩いたりはしたけど。その前には車の中で強引に人の唇奪つといたくせして、デートらしいデートの時は何もないなんて……（しくしく）

J : それはそれでどういう状況か気になるだろ……

I : あはは……（苦笑）

25 よく行くデートスポットは？

M : S O A T の事務所と研究所と事件現場……じゃ、あまりにも芸がないよね

J : でも、実際二人でよく行く場所って多分そこなんだよね……

I : 仕事上のパートナー、って感じがしていいじゃないか。でもプライベートくらいあるだろ？

J : 互いの家、っていうのが意外と一番よくあるかもね。ご飯食べて、眠くなったり疲れたりしても、そのままゆっくりできるし

A : おうちデート、ってやつね。いいんじゃないかしら。私達だって、同居してる間は毎日おうちデートみたいなものなの笑

I : 気が楽だよ。別に、家の中で楽しめることだっていっぱいあるし。一回引き籠もると出たくなくなるのはわかる笑 外だと、カフェやレストランに行ったり、ショッピングやゲーセンに行くかなあ。大須とか楽しいよね

A : 喫茶店って、いくら巡っても特色があつて飽きないわよね。少しお高いレストランでご褒美のランチやディナーも、特別感があつて素敵よ。最近は、たまに公園に鳩さんを見に行ったりとか……

I : あ、動物園とか水族館もいいな

A : 私は遊園地も好きだけど、誘ったら一応愛理も付き合ってくれるのよ

J : ……結構あるんだな。行けそうな場所

M : 今度、一緒に遊びに行くのが楽しみになるね

I : ダブルデートとかもいいんじゃないか？

A : あら楽しそう

M : 待って何か今フラグ立った気がする

カップリングなりきり100の質問 その2

26 相手の誕生日。どう演出する？

J：演出かあ……：そういうのボク苦手なんだよね

I：ヨハネだったら、そういうの凝りそうに見えるけどなあ

J：どこまでしたらいいのか分からないんだよ。ケーキに蝋燭立てて食後に出て来るようにした方がいいのかとか、プレゼントは当日まで黙っておいた方がいいのかとか、なんか打ち上げ花火とかスクリーンとか音楽みたいなものって必要かとか……

I：ぶふつ。いや、十分すぎるでしょっていうかそれはやり過ぎ笑 そこまでいくとプロポーズのレベルだから！笑

A：ふ、ふふつ。やっぱりいい子よね、ヨハネさんて……

J：なっ……（赤面）し、仕方ないだろ！ 今まで、特別な人をそんなまともに祝おうとしたことなんてなかったんだから！（汗）

M：笑 ……何だって嬉しいよ。ヨハネさんが傍に居て過ごしてくれるだけで、他に何もいらぬもの。

I：おお、言うねえ。ひゅー

J：うう……／＼／＼（かあああ）

M：でも、自分がどう演出するって聞かれたら、困っちゃうなあ。あんまり変に期待させちゃっても悪いし、私だったら、もうその月か前の月ぐらいに、「誕生日に欲しいものある？」って聞いてちやうかな。もし都合が合って旅行とかできそうなら、一緒に計画を立てるのも楽しいよね。それで、もしその途中で何かあげたいなって思うものが見つかったら、こっそり用意する……かも。

J：サキは隠し事下手だから、それくらいで丁度いいのかもね。お互い変に気負わなくていいし

I：まあ、誕生日っていつでも日常の一場面だから、あんまり気遣いとかせずに、祝う気持ちがあるのが一番大切だよ。僕も、祝って欲しいっていうよりは、やるなら大勢呼んでわいわい食事とか楽しみたいタイプかな。中華圏だと、誕生日は祝う側じゃなくて、祝われる側がみんなに奢るんだよ笑

A：自分が誕生日を迎えられるっていうのは周りの人達のおかげでもあるし、その考え方もある意味理に適ってて気持ちいいわね

I：まあとはいえ、あやめの誕生日パーティーだったら、みんなが帰った後に二人きりの時間は欲しいかな？（顔を覗き込みながら） ちよつといつもは行かないホテルで、枕元にアロマライトを灯したりしてね？

A：！……つ、も、もう（照）別に私は、愛理の誕生日だからって、セクシーならンジェリーを着てベッドの上でお出迎え、なんてしないわよ？

I：あ。それいいな。やってくれるんだったら本当にやってみせてよ

A：ああつ、余計なこと言っちゃった……

M：ふふ。あやめさんがんばれー

J：ふあいとー（棒）

27 告白はどちらから？

M：こつ、……えーと、私から、かな……？ 告白っていうか、日常的に連発してたから……orz

J：今思えばどれが告白だったんだろうね（遠い目）

M：全部！ ぜんぶです！！ 愛理さん達も、そのへんは結構曖昧な感じだったよね！？

（必死）

A：そうね。私から愛理に気持ちは伝えてたけど、返事をちゃんと貰えたのは結構後だったし……「一緒に住む」っていう状況が先に来てたから、私たちもかなりなあなあになっちゃってたわよね笑

I：別に、表立って気持ち伝えなくても、何となくで何とかなってたからなあ……

J：だよね。やっぱりそういうもん……

I : っていうか、じゃあヨハネからはサキに伝えたわけ？

J : え、……や、本編の作中で改まっては、ただだけど………;

I : 伝えといた方がいいぞ？ 僕が言うのも何だけど

J : べ、別に、普段に会話の中じゃ言ってるんだから、分かっているならボクはそれでいいっていうか………;

A : ダメよそれじゃあ!!! 何気ない言葉の中で言われるのをずーつと待ってるのと、わざわざ相手から自分に伝えてくれるのと、天と地ほど差があるのよ?!?!

M : な、なんかあやめさんが熱くなってる笑 ま、まあまあ、ここ一応物語の外の世界だし、それに前回の質問回からかなり間が空いて、今ではかなり素直に伝えてくれるようになったよ？ ね、ヨハネさん

J : う………;

I : おお、ヨハネの初心い反応ってなんか珍しいなあ。一体しばらく会わないうちに何があったのさ？

J : う、うるさいなあ……! ボクの事なんだと思ってるのさ!! あんたみたいなタラシとは違うんだからね!!

I : なつつΣ (タラシ扱いに若干のショックを受ける)

28 相手のことを、どれくらい好き？

I : どのくらい……って。どう表現すればいいのさ、これ

M : いつもこういう質問って、相手の為なら自分も死ぬる？ みたいな究極の選択形式で来るけど、正直いくら相手が大切でも、自分の命とか苦痛と引き換えにしてまでどうにかしたいって人、いないよね……

I : 身も蓋もないけど、それ正直なところだよなあ……

A : もう。二人とも、夢っていうか精神的な気迫が足りないわよ（ぶんぶん）

I : じゃああやめ、もし僕が危ない奴に掴まって、お前が目玉を抉り取るところを見せたらこいつの命だけは助けてやるって言われたら、自分で自分の目玉スプーンで抉り出せる自信ある？

A : え；；； 私、そんな陰湿なこと考えたことない……（ぞわっ

J : ふっ。陰湿って……ゴメン、アイリが陰湿だなんて言うから、ついびつたりすぎて笑っちゃった。よくそんなおぞましい事考えられるね

M : あ、でも私同じの漫画で読んだことあるよ

A : 多分同じ漫画読んでるよね？

J : ……マジで？（真顔）

M : でも、極端な話そういうことですよ。「相手のためならどこまでできるか」方式で愛の重さを計っていくのって、私あんまりよくないと思うなー

I：まあ、みんな自己犠牲は程々の範囲で、つてことだよね……。多少怖かったり辛かったりするのを、相手のおかげで乗り越えられる、つていうのは確かかもしれないけど

M：それなら、あるよ！ ヨハネさんに会えるつて思ったら、それまでリアルの家事や生活もいっぱい頑張れるし……。あつ、そういえばヨハネさんが髪を褒めてくれてから、ヘアオイルやシルクの枕カバーを使つて、時々だけドケアするようになったんだ。私結構面倒くさがりだから、絶対一人じや続けられないの。これも相手のことを思つての愛情表現かなー、つて

J：相手を想つて変わったことなら……。一番は、傍にくつつかれるのが平気になったことかな。サキの植能のせいもあるのかもしれないけど、以前のボクじや考えられなかった。こんな風に、気が付いたら触れ合つたり、信じて話せたりするようになったのは、それくらいサキが好きだからかな、つて

I：ふむふむ、なるほど。それは僕も常日頃、感じてることかな。傍にいられる、つて時点で、その相手は結構特別だよ

A：そうねえ。私の場合はそれに加えて、相手への心配も増えたかしら。踏み込めるつていう安心感があるからか、ついつい鬱陶しがられるくらい、心配しちゃつて。ご飯ちゃんと食べてるのかとか、無理して仕事に行つてないかとか……

J : ああ、それはわかるかも。なんか、アイリとかにもよく過保護って言われるんだよね……そんなつもりないんだけど

29 では、愛してる？

M : うん、もちろんもちろん！ 愛してるよ！ びつぐらぶ！♡

I : なんか、素直ににこにこそれ言ってくれる人材がいると不思議と安心するよな、この質問（苦笑）

M : 私が番長になって先陣切らないと、多分誰も言わないでしょ？ ここにいるみんな笑

A : ええ、そうね、ふふ……。ちよつと恥ずかしかったから、ムラサキちゃんが先に言ってくれて助かったわ。私もちゃんと愛してるわよ、愛理（ウインク）

I : え、ええ……。これ、僕も言う流れ？ 笑 とりあえず、ちよつと保留にさせてくれよ。僕は、サキみたいにまっすぐには、相手のこと見れないんだからさ

M : ……???

A : もう、しょうがないわね。愛理って意外と複雑なこと考えてるんだから、仕方ないけど

I : それで、ヨハネは？

J : ……

全員：(じーろろろろろ)

J：言おうと思っても、この状況下じゃあ言いづらいでしょ、どう考えても……………

I：あはは、ごめんごめん

A：うふふ、ごめんなさい。私もなんだか気になっちゃって

J……………(騒いでる際にムラサキの頭をそつと引き寄せる) サキ。愛してる(耳元でぼそつ)

M：(ぶわあああつ) え……………う……………あ……………(ひらひら舞い続ける桜)

I：あーっこいつ抜け駆けした！ 何言つたの!? てかめっちゃ桜舞ってる!?

J：あんたが一番もったいぶって言わなさそうな、一番当たり前の言葉だよ(愛理に向かつて舌を出す)

A：(こそこそ) き、聞こえちゃったんだけど……………ヨハネさんは、そういうの伝えることに一切迷いが無いのね……………? すごいわ

J：だって、人前でひけらかすのは違うっていうか恥ずかしいと思ってるだけで、単なる事実だもの。ボクが世界で一番、サキを愛してるっていうのは

M：(もう言葉を発することができない)

30 言われると弱い相手の一言は？

M：愛理の「お願い、ダメ？」は全世界共通でヤバいと思う

A：わかるわあ（うなずき）

I：なんでサキの方が先に答えてるのさ!?笑

M：私だって愛理のファンだもん。なんだろう、言わなさそうな台詞なのに普通に似合うよね

A：そうなのよ。違和感がないっていうか、正直に言うのとつても可愛いわ。あんまりあげつらうと言わなくなっちゃうかしらと思つて、言わなかつただけ……

I：んー……そう？ 僕としては、普通の感覚で言つてるだけなんだけどなあ。気に入られてるなら何よりだけどき

J：たしかに、アイリに何か頼まれると謎の断りづらさがあるよね（溜め息）

I：どーゆー意味だそれは（ぐりぐり）

A：ヨハネさんは、ないの？ ムラサキちゃんの。なんだかいっぱいありそうだけど

J：な、なんでわかるの、エスパー……???

M：えっ、そんなある??? 私あやめさんみたいな、可愛い系キャラじゃないと思うんだけど

J：いや、見た目の可愛さとかそういうんじゃない。なんかこう……一番必要な時に、一番背を押してくれる言葉をくれる、から。だから、一個に選ばないんだ。

たとえば、悩んでるボクに向かって「本当にそれでいいの？」って言ってくれた時。

この質問で聞かれてる「弱い」とは、少し意味が違うけど……でも、ボクにとつては、ムラサキのくれる言葉のひとつが、宝物だからね。

M：ヨハネさん……（じーん）

I：やばい……なんていうか想定外に良すぎる回答が来て居た堪れなくなってきた。どうすんのこの二人真面目すぎるよ

A：じーんときちやうわね……（うるうる）

M：あつ、で、でも、我らは気にせずあやめさんに言われると弱い台詞とか考えていただいて

I：この流れで!?笑 そーだなあ……お願い事には、僕も流されやすいタイプだけど

A：えー!? 意外とケチっていうか、ゴネる時はしっかりゴネるじゃない笑

I：君も僕も、主張は意外と激しい方かもね笑 だから「ダメ？」はそっくりそのまま答えとして返すよ。単に聞いてるだけじゃなくて、あやめが言う可憐いんだからさ。あざといつて言うの? ついつい聞いちやうんだよね

M：まあ、たしかにこの二人どちらが言っても破壊力ありそうではあるね……。

ヨハネさんに言われると弱い言葉かあ……いや正直私もわからん。すべてがパフェクトすぎて、何言われても私は奴隷になる（真顔）

I：じゃあもうこの二人には聞くだけ野暮な質問だったということ……（呆）

31 相手に浮気の疑惑が！ どうする？

A：んく……私はこういう時、結構臆病になっちゃうのよね。

最終的には相手に聞くんだろうけど、それまでは周りの人に様子を聞き込んだり、相談したりとか……信じたくなくて外堀から埋めたくなくなっちゃうかも……；

M：ああ、うん、でもその気持ちはわかるよ……真実を見たくないっていうかね。本当だったら怖いもんね

A：向き合うにしても心の準備つてもものが要るのよねえ……！

J：え、何……サキはボクが浮気すると思ってるの？

M：いや、そう思ったとしても、大概は捜査上の誤解とか、人間関係がたまたま親しげに見えるちゃったんだらうなって……思うようにするけど、それでも不安になった時は、私はやっぱり聞かかなあ。それで嫌な気分になったりしない？

J：それは別に……まず絶対になんか前提で話するけど、事実はどうあれ、サキにそう思わせてたつてことは、それは誤解されるような言動を取ったボクが原因でしょ。

聞いてくれればこつちだつて誤解は解けるし、安心させてあげることにはできるし。何よりそういう時一番辛い気持ちになるのは、サキだろうからね。それを解決するためなら何でもしたいって感じ。思った事は正直に言ってくれた方が、傷が残るとしてもボク

はいいかな。

ちなみにボクも、思った事は口に出しちゃうから、正直に聞くタイプだね

A：だそうよ、愛理？

I：みんな真正直か……眩しいね……

M：愛理は、そういうの口に出さずに勝手に機嫌だけ悪くなって拗らせそうだよ

I：う……；；；；

A：まあまあ、私も口下手な愛理のために、察するようにはするわよ……

32 浮気を許せる？

M：うーん、浮気をする人を全否定するつもりはないんだけど、個人的にはどうかっ

て言われたらイヤだなあ、やっぱり！笑

J：まあ……黙ってる必要性もないのに黙ってこっさりされたら、それは嫌だよ、普通

通に考えて

M：あ、でも、他に好きな子ができたとか、そういうのは別だよ？

私のことは捨てないでほしいし、多分嫌な嫉妬はしちゃうけど、複数愛を否定するわけじゃないから……真剣に愛したい相手がいるなら、素直に言っしてほしいかな

A：そっか。ムラサキちゃんたちもポリアモリーなのよね、一応

M：ポリアモリーを名乗れるほど、広い心を持っててる自信はないんだけどね……；；；

今のところ、結局はみんながみんな私を一番に大事にしてくれるから、大好きになった子全員と付き合えてるような感じだし……;;;

I：サキとそういう話ができると安心するなあ。愛する対象も愛そのものについて、グラデーションつてもものはあるからね。そのへん寛容な人といられるのは、やっぱり安心するよ。

それはそれとして、浮気って言われるものは僕も好きじゃないかな、やつぱり。好んでするというよりは、のつびきならない事情があつてせざるを得ないって感じのものだよね、これって

A：よかつたあ……じゃあ、これは全員一致なのね。でも愛理は、嫌だつて言つておきながら未遂も結構あつたわよね？

I：う……いやでも最終的に全部君に話してるよね!? ちよつとタイミングが遅れそうになつただけだよ!

A：はいはい。そういうことしておくわよ笑

3 3 相手がデートに1時間遅れた! どうする?

J：その前に連絡をもらつてたら、時計見ながら1時間どこかで時間潰すし……
無連絡で1時間遅刻なんだとしたら、それは心配になるよね、普通に考えて

M：うんうん。まあ私も、台湾にいた時は現地の人との待ち合わせつて、みんな余裕

で30分1時間遅刻するゆるい感じだったから、そのくらいはあんまり気にならないかな……。

事情があるんだったら、待たせてる相手に気を遣わせたくないもん。ゆつくり来てねーって言うよ。バタバタしてたら日を改めるし

J：まあ、寝坊とかだったら普通に怒るけど？

I：でもヨハネはそう言いながら、交通事故に遭ったとかよりはずつといいと思つて安心しちゃうタイプじゃないの？

J：……。それはそうでしょ。呆れはするけど、生死に関わる事情で遅刻されるよりは、寝坊で100ペン遅刻された方がずっといいよ

I：わ、わあ、イケメン……イケメンがいる……

A：でも、愛理もそう言つて、遅刻で怒ったことつてあまりないわよね？ いつも「気にしないで」って言つてくれるわよ

I：そりゃ、自分も身に覚えがあることを棚に上げて、相手にしつこくは怒れないでしょ笑

だから僕も、二人と同じかな。待たされた時間よりは、理由と中身の方が気になるからね

A：そうね。私もみんなと同じかしら？ できるだけ相手の気持ちに沿つてあげたい

と思うわ。1時間遅刻って、何か大変な訳があるんでしようし

J : このついでだから言わせてもらうけど、さつき寝坊なら怒るって言ったんだけどさ、サキの場合、1時間コースの遅刻だと身支度に時間が掛かったとか、あと寝坊だとしても、前日具合が悪くて夜更かししてたらうっかりってことが多いから、怒るに怒れないんだよね。むしろなんで調子が悪いの我慢して来るんだって、怒ることの方が多くなって

M : えへへ……(照)

A & I : あー……(わかる)

34 相手の身体の一部で一番好きなのはどこ?

M : 一部!? 一部と言わず全部好きだが!?!?

I : 頑張って絞って笑

M : む、むむ……本当に端から端まで全部好きなんだけど……(じーっ)

J : ! : ……ま、まあ、ボクはこの通り綺麗な造形だし???(視線が落ち着かない)

M : おっぱいって言う私の下心が見えそうだから、この瞳ってことにしておくね

J : 今下心しか見えない回答だったけど???

M : だって! エッセイでも熱弁したけど、本当に好みなんだもん、このいやらしさ

の欠片もないおっぱいの形! 控えめで、それでいて美しくて……こう、なんていうか

なあ、大ききの暴力で勝負しない感じが、エロに関わりなく純粹におっぱいを好きになってもいいんだっていう赦しを与えてくれてるようで……私は好き（拝む）

J：そ、そりやどうも……？

I：思いがけず胸で哲学を説いたね

M：あつ！ あの、大きい人をデイスってるわけじゃないよ!!? あやめさんの胸の形ももちろん好き！ 千差万別！

A：ふふ、ありがとう♪

I：お、それだったら僕も熱弁できるよ？

A：もう……愛理のは本当に下心しかないじゃない笑

I：下心上等。だって本当に、柔らかくて大きくて気持ちいんだもん。あくまで体の話ではあるけれど、こんな綺麗な肌と胸持つてる人って貴重だよ？ 君のケアの手間に、敬意を表する的な意味でもね

A：まあ、褒めてもらえるのは嬉しいけど……（照）

前にも言ったけど、私は愛理の脚が好き。あとはその……脚を見ると、どうしてもお尻が視界に入っちゃって気になるのよね

M：わかる。愛理さんのお尻は可愛い。スタイルいいからほんとに美しいんだよね。小ぶりだし綺麗に持ち上がって……ヨハネさんのお尻も似た良さを感じるけど。君

も筋力がついてるから、垂れてこない張りのあるお尻が維持できるのすごいと思うよ。
お尻の筋トレってほんと大変だったもん、私じゃ長続きしなかつたくらい

J : ……。なんだろう。そのへんのスケベオヤジと同じようなところしか見てないのに、サキの褒め方で言われると全然嫌な感じがしない

I : 愛の成せる技だねえ。そういえば、ヨハネは？ サキの体で好きな場所

J : 身長

M : 即答!?

I : わかる。同志だなー(固い握手)

M : 愛理さんまで!?

A : ふふ。でもわかるわ。ちっちゃくて可愛いわよね、ムラサキちゃんつて。……

あつ、その、もし気を悪くしてたらごめんね

M : いや、言われ慣れてるし、言うて自分でも、不便なところ以外はそこまで嫌いじゃないからいいんだけど……

J : それこそ、大きい小さいで良し悪しを測るつもりはないけど、サキの場合は単純に抱き締めやすいんだよね。腕の中にすっぽり入っちゃうし。座ってる時も、寝てる時も、密着するとすごい安心感っていうか……ぬいぐるみみたい

I : 特に冬場なんか、サキっていつもこもこもこした服着てるしね。寒がりだから

A : ふふ、私もぎゅーっしておこうかなーっ

M : いやいや私から見るとみなさん巨人なだけdうわあ何をするやめr

35 相手の色っぽい仕種ってどんなの？

M : めっちゃいっぱい、ある
!!!!!!

I : 笑

J : あの……正直これ、どういう状況下で何してるかによらない？

I : ほう？ ムツツリスケベのヨハネくんは、一体何を考えたのかな（にやにや）

J : なっ……、だ、だつてさあ、そういう事してる間は何してたつて色っぽい仕草にしか見えないだろ!?!? そういうこと言うあんたの方がよっぽどムツツリなんじゃないの!?

A : 愛理つてば、ヨハネさんと並んで喋つてたら子供みたい……笑

でも、ふふ。そうよね。ベッドシーンにいる相手のことは、どこを切り取つても色っぽくて可愛く見えるもの。

M : んくく……選び出したらきりがないけど、私は瞳を伏せる仕草が好きっ。

ヨハネさんて、童顔だけど顔の彫り深くて綺麗だからさ。瞼の奥行きがすごいっていうか……目を伏せただけで、睫毛の形とか、瞳に入る影の感じとかがすごい好きなんだよね。えっちなことしてるかどうかに関わらず、色っぽいなのなんの

I : ああ……うんうん。絵になるよね。わかる

J : あれつて色っぽいの……？ 半分癖でやつてるようなものだと思つてたけど（自信なさげに俯く）

M : そうそれ。ちよつと不安そうだったり、儂げな表情を見せてくれたりするの、信頼してくれてるんだなあつて感じがしてぐつとくる。嬉しい（にへにへ）

J : ふ、ふうん……あんたつてやつぱり、変なの（そわそわ）

I : まあ、ヨハネはプライド高いタイプだし、そんな風にサキが思うのもわかる気がするね。

あやめは……そうだなー、変な話だけど「黙つてりや美人」つて感覚に近いかも。ほら、喋るところおっとりした感じなんだけど、なんとなく遠くを見てる瞬間とか、真剣に本を目で追つてる雰囲気とか、そういう時はミステリアスな魅力があるつていうの？
僕は好きだな

A : なあにー、それ笑 私何も考えてないと思うけど……

I : それでも綺麗に見えるつてことだよ。たまにシャッターなんて切りたくなくなるね

A : 愛理が時々盗み撮りしてるの、それが原因だったのね？笑

I : 君だつて人の寝顔、勝手に盗み撮りしてるだろ？ 何が面白いんだか……

A : 私の中じゃ、あれが色っぽい瞬間なのよう。愛理つて口元の表情が雄弁なのよね。

きりつと結ばれてる時とか、微笑んでる時も格好良くてドキドキするんだけど、それがふとゆるんだところを見ると、愛しくなっちゃうというか……

笑顔や半開きの口元が色っぽいななんて、私変なのかしら（どきどき）

J：いや、変じゃないと思うけど

M：わかるわかる。緊張した時に舌で唇をべろつと舐める瞬間とか、えっちいよね

A：あゝん、それもわかるわ！

I：な、なんかあやめがすごい口フェチみたいになってる……そんなに見られてたとは笑

36 二人でいてドキつとするのはどんな時？

A：今ので大半語り尽くしちゃった感があるわね……。

でもいつばいあるわよ。並んで歩いてる時に、さりげなく手を繋いでくれた時とか、さつと腕を組んでくれた時とか。愛理は相手をドキツとさせる達人よね

J：だからタラシってフアンの人に呼ばれるんじゃない？（呆）

I：うるさいなあ笑 スキンシップで喜んでもらえるんだつたら別にいいだろ！ あんまこういう事言うとか柄じゃないか思われるかもしれないけど、僕も割とそういうのは好きだし……親しい相手限定だけど

J：じゃ、反対にアイリからアヤメさんに対してドキドキするのは？ やっぱり向こ

うから触れられた時？

I : それもあるけど……反対に塩対応っていうのも、色んな意味で心臓にくるよ？
ちよつと拗ねてつーんとされた時とか、あからさまに怒ってむくれてる時とかさ。いや、そうだったのは僕が悪いんだろうけど、なんか可愛いなってニヤニヤしちゃう笑

A : もー！ 人が本気で怒ってるのに、可愛いだなんて笑

I : あやめつて普段は滅多な事じや僕にも人にもガチ怒りしないから、いつも穏やかな反応を返してけるところで敢えて冷たくされると、ちよつとドキツとするんだつて！
慌てさせられるところも含めて楽しいというか……わかってくれよ笑

J : うわー……アイリつて意外とドMなどこあるんだね（引）

M : 割とあるよ？ 表に出してないだけで。

A : ムラサキちゃんはどうなの？

M : これもいつぱいあるけど……二人でいる時で一番多いつてなると、やつぱり顔が不意に近付いちやつた時？（照）

I : あー……ベタだけどよくある展開だね。慣れるとそうでもないつて思うけど、やつぱりストレートにドキツとくる奴だよな、こういうのつて

A : 愛理つてば大人ぶっちゃつて……私は今でもドキドキするわよ？

J : 正直、たまにサキに近付くとビックツとなるから、嫌がられてるのかとボクは思っ

てたけど……

M：ちがーう！ もっとやって！笑笑

I：；だそうです笑

J：でも、嫌がられてるのかと思ったら面白くて、なおさらやつちやつてたところがあ
るんだよね。理由はわからなかったけど、反応は面白かったからさ

I：こっちはまさかの嫌がらせ目的だった笑 好きな子を虐めたくなるタイプ？

J：そういうのとは違うけど。でも、困ってる顔を見るのが楽しいとは思うね。こう
やってじつと見ると、どんどん真っ赤になるし（じーっ）今思うと、こういうのも「ド
キツとする」に入るのかな？

A：私たちは逆に、ヨハネさんの意外なドS具合を知ってしまったわ……

I：ヨハネ性格悪う……まあサキはサキで虐められて喜んでるから別にいつか……

M：たしかにその通りだけど、人を勝手にDMみたいに言わないでくれる!?笑

ええ、本当にこれが回答でいいのお？ もっと私にドキドキさせられる面とかない？

J：……あるけど、言うの勿体無いんだよ。ここで言うには（ぼそっ）

I：ひゆう。妬かせるねえ

37 相手に嘘をつける？ 嘘はうまい？

M：えー……無理ですね、基本的に（苦笑）

J：つけて言われたらつけると思うけど……あまりやりたくはないね。相手の生死とか命を握られてるとか、そういう状況下に限られるかな

I：この事をバラしたら相手の命はないとか、脅迫されてる時？

J：まあ、そういう感じ。あとは、この情報を漏洩するとサキが危険に巻き込まれるって場合とか、医者之余命宣告じゃないけど、伝えることで大きな精神的負担がサキにかかったり、サキ本人の生死が関わってくる場合……とかかな。そういう時は、嘘ついても黙ってるかも

M：ちよつと、意外といっぱいあるじゃん!? ちゃんと話してよ!! (汗)

まあ、ヨハネさんとかユイト氏って、SOATと言いながらたまに公安みたいなお仕事してるから、お仕事上言えないことがあるのは仕方ないとは思うけど……

J：まあ、ボクもあまりそんな事態が起きてくれないよう祈るばかりだね……嘘をつくのは、昔から慣れてはいたけどさ。サキには使いたくない(苦々しい表情)

I：ふむ……なるほどね。僕にはそんな大それた仕事だったり企業秘密だったりはないけど、相手を思つてというより、自分が傷つきたくない一心で嘘は使いがち……かな。ただ、つくのが下手だとは言われるね。どういうわけか

A：愛理って意外と顔に出るのよ? でもね、小さい嘘じゃなくて、本当に本当に大事なことに限って、こっちはわからなかつたりもするのよ……。だから言つて欲しいん

だけど

J : あんた……嘘をついてるっていうより、自分ごと嘘で騙してる感じの人だよ

I : うっ……痛いところ突くなあ、ヨハネは（苦笑）

M : あやめさんはー？ 私と一緒に、嘘は苦手そうって話だったけど

A : そうねー、私も隠し事はできないタイプ。スマートに嘘とかでその場を乗り切れる人が羨ましいわ（嘆息）

J : 即座に口から嘘八百が出て来るのも、そんなに褒められたことじゃないと思うけどね……純真さは美德なんだから、大事にした方がいいよ

A : でも、ナンパだったり、仕事で困った相手に声を掛けられた時に、臨機応変で立ち回れる力ぐらいいは欲しいじゃない？ 笑

I : まあ、馬鹿正直って貧乏くじ引きがちだからねえ……それが君の美点なんだけど
38 何をしている時が一番幸せ？

M : ……これ、相手と一緒に、ってこと？

だつたら私は、ヨハネさんの隣で美味しいものを作ってる時かな。それでー、一緒におやつとか食べながら、楽しい映画を見てるとき！

I : 食べるの大好きな君らしいね（微笑）でもわかるな。サキの料理も、あやめの料理もおいしいし

A：誰かのために心を込めて料理を作るって、幸せな気分になれるのよね。ふふふ。

J：それだったら、ボクも同じなだけけど？　ボクは作ってもらおう側のことが多いけどさ。横に立って喋ってるだけで、サキってホント楽しそうにしてるし。食べる時もこの上なく美味しそうな顔するし。そういう顔を見ると、こつちだって幸せになる

I：おお、言い切るねえ。んんん……やつぱ、夜隣にいて、相手の温もりを傍に感じる時かな。別に抱き付いたり何かしろってまで言うつもりはないけど、隣に自分以外の人の体温があるのは、悪い気分じゃないよね

A：ふふ、そうね。一日が終わって、大好きな人と一緒に、今日も頑張ったなあって思える瞬間は最高だと思うわ。私は朝の支度の時間も好きだけど、夜って朝ほどはバタバタしてないしね？

I：まあ、お互い仕事を立て込んでない時期に限るんだけどね！

A：ゆっくり一緒に寝られる日って意外と限られてくるから、余計に特別さがあるわよね。二度寝の朝とか、幸せを感じちゃう笑

39 ケンカをしたことがある？

J：サキなんて、あんまり酷いこと言うって倒れちゃいそうだから、あんまりしたことないかな……

M：多少の言い争いはあるけど、そこまで甚大なのはないよね（苦笑）私の淫紋の話

を最初全然聞いてくれなくて、私がキレちゃった時ぐらい？笑

J：それは悪かったって……

M：あとは、あからさまな喧嘩じゃなくても、ちよつとぎくしゃくして、みたいな事はなくもないかなあ……本編だと。そういうのは、愛理たちもよくあるんじゃないの？

I：そうだね……。喧々譁々の喧嘩よりは、意外とそういうのの方が多いかもね。そして、大概はそういうのの方が面倒くさい笑

A：やりたくなくても、いつの間にか積もり積もって……ってことはあるわよね、どうしても

J：そうなるまで我慢できるってことは、二人とも大人ってことなんじゃないのかな

I：あまり物分かりのよすぎる大人になっても、それはそれで困ると思うよ？笑

A：一回、私が作ったクリスマスケーキを愛理が勝手に友達にあげちゃって、それで喧嘩になったのが記憶に新しいわね

J：ええ……それは普通に酷い

I：出来が良すぎて気付かなかったんだってば!!! まあそれでも、勝手に持ち出したのは悪かったと思ってるけど……

M：買って来たものだったとしても、相手が自分のためを考えて買ってきたものの平気で人にあげちゃうなんてドン引きだけどね……

I：いやほら、茉莉は僕ら共通の友人だったし、後であやめも一緒に呼んで病院でパーティーすればいいかなって思ったのであって、流石に知らない人間には……ええい、わかったよ！ 僕が悪かったから！ ごめんなさい！

40 どんなケンカをするの？

I：あ……これも、今喋っちゃったよね

J：ボクラ、やつぱり喋りすぎ？

I：そういうコーナーだからいいんじゃない？ 笑

J：ねえ、そういえば、サキにアイリは嫉妬深い方だって聞いたんだけど、そういうのが原因で喧嘩になった事とかはないの？

A：あるわよく、いっぱい。私がやってるバンドのメンバーで男の子がいるんだけど、単に男だからって理由で、一緒にいるだけですっごい揉めたりとか……

J：うわあ……それは心狭っ

I：別に性別だけが原因じゃないよ！ なんていうかあいつ……すごい気に食わないんだよね。まあ裏を返せば、癪だけど僕がそれなりに琢真のことを認めてるってこともなるんだけどさ……

A：愛理が琢真くんのこと、どれくらい気に入らないのかはわかってるつもりだけど
笑

たしかに、性格も容姿も文句ないものね。誰にでも気さくで、優しくて

I：そのくせ何でも出来るし！ 僕みたいな人間相手にも世話焼きだしさあ！ 非の打ち所がなくてホントムカつくよあいつ

J：へえ……そんな人がいるんだ……

A：ヨハネさんは、そういうのあんまりないの？ 過去の恋人に妬いちゃったりとか。

私は結構、どうしようもない過去のこととかが気になっちゃうタイプなのよ。自分のことも、相手のことも……（苦笑）

J：……。それは意外だけど。ムラサキの過去か……話を聞いてて胸がざわつかないわけじゃないよ。けど、それがあからこそ今の彼女があるって、思ってるから。

それに、一番大事なのは、今ボクが一番彼女の傍にいて、今ボクが彼女の一番なんだってことでしょ。だから、そういう意味じゃあまり気にならない

I：うわあ……すごい自信だね

M：進んで妬かせようと思ってるわけじゃないけど、ヨハネさんがどっしりしてくれてるから、私も安心して昔の思い出話とかできるんだよね

J：ボクは大人だからね。……まあ、その分甘えさせてくれないとイヤだけど？（すねっ）

A：まあ、うふふ。なんだかヨハネさんって、私が聞いてたよりずっと素直でいい子

なのね。常に捻くれてる誰かさんとは大違い

I : いちいちボクを引き合いに出してくるのやめてくれる!? 笑

41 どうやって仲直りするの?

M : お、仲直りの方法ときたか。愛理さんたちはー? 気になる!

I : ええ? 特に特別なことは何もしてないと思うよ。お互いにごめんって言いやすい雰囲気になるまで、カフェに誘って一緒にご飯食べたり、どこか出かけたり……って感じ。なんか、下手に言おう言わせようって思うと、余計うまくいかないからね。

気まずくても、いつもと同じように過ごしながら、会話の流れでぼろっと……ってことが、一番多いかも

A : こういうのって、お互いがお互いに悪かったかもなあとは思ってるんでしょうけど、なかなか素直に言い出せなくて…… (苦笑)

J : あー……まあ、言い出そうと思っても気恥ずかしかったりはするよね。ムラサキとはあんまないけど、直生とはよく些細なことで喧嘩するから、わかんなくはない

I : ああ、そういえば君ら付き合ったんだって? まあ、それはまたの機会に聞くとして。

サキたちは? どうやって仲直りするの?

M : え……;;;;ふ、普通にごめんねって言う以外に、何かあったっけ (汗)

J：まあ、ボクたちの場合は大体それで終わりだよね……。

M：喧嘩って、喧嘩しちゃう事自体が悲しいし寂しいからさ。なんかもう、ちよつと嫌だなって思ったり引つ掛かることがあれば、喧嘩になる前に、相手が冷静な時間を見計らって伝えるようにしてる。ほつとした後は、その分甘える時間やくつつく時間もいっぱい取って仲直り……って感じかな？

J：あまりサキに抱え込ませたくはないんだけど、サキは相手のことよく見てるから、伝え時やタイミングまでしっかり考えてることが多いよね。本当に余裕がない時は、困らせるようなこと絶対に言わないから、ボクだつて助かつてるんだよ？

その分やつぱり、甘えたがつてる時はうんと甘やかす……かな。こつちにとつてもいいんだよ。触れ合つてるうちに、大体のことはどうでもよくなつてきちゃうし。これは、サキの植能の効果でもあるかもしれないけど……

I：ふふ、幸せな関係だね。堪え性が度を超すのもどうかと思うけど、君は本当に腹が据わつてるよなあ

M：え、ええ？ そんなことないよ。嫌な目に遭つたり辛い目に遭つたりしたら、とても落ち着いてなんていられないし……

J：それは普通誰でもそうだと思うよ？

42 生まれ変わつても恋人になりたい？

J：恋人っていうか……仲間とか、家族がいいな。恋以上に発展するにしても、大前提として絆があるわけでしょ。まず最初に

M：そうね。恋は付属物っていうかおまけって感じだし。恋なしでも成り立っていい関係が、私は一番尊いと思うな。だから、生まれ変わってもそうやって二人でやっていける関係がいいよね

J：うん。上手くいくんだったら何でもいい

I：君たち、本当に深いこと考えるよね……。結ばれることが大前提なのもすごいけど

M&J：だって出来るんならその方がよくない???

I：わかったわかった、君たちが仲良いのは存分にわかったから笑

ちなみに、あやめは？

A：もちろん、なりたいに決まってるじゃない！ 恋人以上の関係性になれるなら、ね？

あまりそこで比べるのもどうかと思うけど、来世でも親しくなれるなら私は嬉しいわ
I：うん。そういう意味では僕も同意かな。どんな形であれ、君と会えたら人生は退屈しなさそうだよ笑

43 「愛されているなあ」と感じるのとはどんな時？

M: これねー……人に変だつて言われることもあるんだけど、「言わなくてもわかるでしよ」つて言われた時が、私は一番きゅんとくるかな笑

I: ええ? それは確かに、ちよつと変わつてるな笑

A: なんだか、相手にコミュニケーションを放棄されて全部察しろつて言われてるみたいで、嫌にならない?

M: ー……なんかそのニュアンスとは、また違うんだよね。勿論、旦那とか他の友達に言われたら、相当カチンときちやうけど笑 でも、ヨハネさんのこの言葉は、何ていうか……安心感があるつていうか。不安になつて尋ねた時に、ぎゅつと手を引つ張られながらこう言われると、あ、なんか私が心配してたことなんて、ヨハネさんの中では当然のこととして受け止めてくれてたんだな、つて感じがして……

I: 相棒感、つてやつ?

M: うん、そうそう! そんな感じ!

J: 素で思つたことやっただけだったんだけど、そんな風に思われてたんだ……

I: よかつたねヨハネ、人によつては地雷ワードなのに、こんな好意的に受け止めてもらえて……(呆)

A: きつと、それもヨハネさんとムラサキちゃんの関係性が、前提にあつてこそよね。なんだかうらやましい

I : おや。僕だつて、信賴してるつもりだけど？

A : それは分かつてるけど笑。でも、言わなくつても伝わるつていうのは、現実の世
界じゃやっぱりちよつと理想論っぽいところがあるわよね

I : ロマンチックだけど、そこまではなかなかなあ

M : どつちも大事だよな。だから私も、できるだけ普段は、愛してるとかありがとう
とか伝えるようにしてる！

J : ……サキの方から言つてくれると、正直ボクもホツとしてる。だから、反対にボ
クが「愛されてる」つて感じるのは、そういう時かな

M : おや。普段は「はいはい」つて聞き流してばつかで、あんまりそういうこと言つ
てくれないのに

J : 割とその辺、受け身でサキに甘えてるから照れ臭いんだよ……。まあこの機会だ
からさ(ボソツ)

I : ふふ、大袈裟でも言つておく甲斐があるつてもんだね。なんだろう、僕が愛され
ていると感じる……つて確かにこれ、照れ臭いな。なんだろ、愛情表現つて意味では、ほ
んとふとした瞬間じゃないかな。頼んでなかつた洗濯物やシャツが、帰つてみたら綺麗
に洗われて畳まれてた時とか。夜勤明けに冷蔵庫開けたら、胃に優しそうなおかずを
残してくれてた時とか。

そうやって、生活リズムが違ってても、相手が自分のことを考えてくれる時間があつたんだなって感じる瞬間は、確かに嬉しいよね

A: そういうのは、私も愛理もお互い様よね。ちよつとした思いやりがあることで、不満や不安があつても相手に優しくなれることがあるから、私も大切にしているの。

そういう時に、ありがとうつて伝えてくれると、それもまた愛されてるって感じるわ。大変なのに頑張つちやおうつて、思えるんだもの

I: まあ、それはしてもらつてる身としてはできるだけ、ね？

44 「もしかして愛されてないんじゃないや・・・」と感ずるのはどんな時？

M: ええ？ そんなことないよ？ いつもすつごい愛されてるなって思つてる！

J: そ、そお……？ なら、いいんだけど……

M: 不安というか、私はヨハネさんのこと一方的にずつと好きだったけど、応えてもらつてもいい立場だなんて、最初は思つてなかつたから……。

だから、何されても嬉しいの。ヨハネさんから、気持ち伝えてくれるだけで

I: ほんと、サキからはいつも幸せそうなのが伝わってくるよね。

こつちもあんまり……「愛されてない」とまで思うことは、少ないかな。そもそも愛つて、幅広いものだし。ただその種類とか方向性が、自分の求める方向とはずれてきてる、つて感じることはある……かも。時と場合によつてね

A : 自分も相手も変化するものだから、それはある意味どうしようもないものかもしれないわね……。そういうのも話し合って解決できればいいけど、愛理一人で抱え込んじゃうのを見ると、寂しくなるかしら。愛理のことなのに、私が「愛されてない」って感じるの、おかしいのかもしれないけど……

M : 相手からの信頼も、愛情のひとつだと思うからね？ それが欠けてて寂しいって思うと、やっぱり愛されてないって感情に結びつくのかも。わかるなあ

A : 自分のエゴっぽいってわかってても、やっぱりそう思っちゃうのよね……

I : 僕としては、放置するのも信頼とか愛情の一部に入ると思うけどなあ

J : 二人とも理に適ってると思うし、どっちに重きを置くかは、難しいところだね

4 5 貴方の愛の表現方法はどんなの？

I : てつとり早いところだと、ハグとキス？

A : ふふ。愛理って意外とそういうところアメリカンよね

I : だって、難しい事しなくてもそれだけで伝わるのは、楽だからさ笑

A : シンプルだけどいい表現よね。私は、さっきムラサキちゃんが言ってたみたいに、できるだけ気持ちやお礼を伝えるようにすることかしら

M : 二人が言ったことは、両方ともやるかな……。あとはもう、とにかくくつつく！笑
磁石みたいにぎゅーつくつついて、離れないの。朝も昼も晩も一緒にいる

J : それはさすがに鬱陶しいって…… (呆) 仕事してたら無理だし。

でも、そうだね。気が付いたら、なんか引き寄せられるようにして横に戻って来ちゃうんだよな。28問目でも喋ったけど、隣にいるって、お互いの意志があつて、なおかつ居心地が良くないとできないことだから、割と最強の愛情表現じゃない？ 言葉がなくても伝わるものがあるしさ

I : どうも、口下手にも易しい表現方法が出揃った感じだな笑

46 もし死ぬなら相手より先がいい？ 後がいい？

M : えつ……うぐ……これまた難しい質問 ; ; ;

J : 後がいい。ボクがサキのいない世界を耐えることはできるけど、ずっと悲しんだままサキを残すのは可哀想だからね

I : わお……格好いいね

J : あと、できればボクと夜羽たち以外の人間を、これ以上サキに愛して欲しくないから (ボソツ)

I : 意外と激重な理由だった笑 ヨハネもああ見えて、大概嫉妬と束縛重くない？ サキはそういうの大丈夫なの？

M : 大丈夫かどうかは数年過ごしてみないと何とも言えないけど笑、でも単に束縛が重いのと、束縛重いけど物分かりはいいのとは違うから、今は楽だよ？ 楽だけ愛さ

れてるのもしつかりわかるから、私は嬉しいし

I : なるほど、どちらかというところ兄さんみたいなタイプか……じゃあ意外と噛み合ってるわけだ

M : まあ、愛理ほど感情が重い子とも何だかんだでこれまで付き合ってるわけだし、大丈夫だとは思うんだけど？

I : それは、僕としては喜ばしいんだかどうかどうなんだか笑 そうだなー、僕は先の方がいいかも。相手がいなくなっちゃった後の世界って、何を面白いと思ってるかわかんなくなりそうなんだよね。あやめに限らずだけどさ

M : 君も負けず劣らず重いじゃん笑 まあ、わからなくはないよ

A : 私も、愛理って意外と後追いでふらつと死んじやいそうだから、できれば長生きして安心させてあげたいのよね……。自分が残るのは辛いかもしれないけど、愛理ほどは辛い思いをしないんだったら、その方がいいと思ってる（苦笑）

I : 君も優しいなあ、大概（頭ぼんぼん）

M : 私はー……うーん……ああは言ってくれたけど、残された命があるなら、ちゃんと生きたいとは思うんだよね。先に死んでヨハネさんを悲しませたくないのは私も同じだし、心配させないように胸張って生きてたいっていうのはあるかなあ

J : でも正直、寿命だけ見ると、サキの方が先に天寿を全うする確率は高いよね？

だから最初から、残される覚悟だったんだけど

M：そ、そこまで考えてくれたの……？

I：そうか、忘れてたけど、言うてこの子ら結構な歳の差恋愛なんだった……。じゃあ、ヨハネはそれも覚悟で付き合ったんだ。ほんとすごいね

J：すごいのかは分かんないけど。でも、サキが過去にいてボクが未来にいる時点で、命の時間に限りがあるのは何となく意識してたから。だから余計に、残された時間を一杯使って愛さなきゃって思うのかもしれないね

A：う、うう、私たちも見習いたいわね……

47 二人の間に隠し事はある？

M：……ある？

J：やましいことは何もないと思うけど。ボくら、お互いの好きな人とか結婚相手まで、全部公開し合ってる仲だろ？

M：そうねえ。ま、本編は本編で色々あるかもしれないけど、それは関係性に関わる秘密というよりは、二人自身も知らなかったことって感じだし、隠し事とは違うかな？

I：なるほど？ 僕は……どうだろうね

A：私はないつもりだけど。愛理にはあるのかしら？

I：さあ……？ (微笑)

J : うわあ、意味深

A : 秘密主義ってわけじゃないと思うけど、愛理ってほんと、言わないことが多いんだから（嘆息）

M : あやめさんよく付き合ってるね……？ 私だったらキレちゃうけど

A : 私だって、煮え切らなくなることはよくあるわよ！笑

まあ、今ではそういうところも含めて愛理なのかなって、思ってるし……それに、二人だけの関係性が全てじゃないと、思ってるしね

4 8 貴方のコンプレックスは何？

J : いきなり趣旨変わりすぎじゃない？ ずっと二人に関する質問だったのに、なんでいきなり自分の話になるんだよ

M : まあまあ……

J : ボクで言ったら、この容姿。誰の目でも惹ける、自信の源でもあるけど……同時に、コンプレックスでもあった

I : 一見その二つは矛盾してるように見えるけれど、案外表裏一体なものだよ、そういうのって。僕も、異国の血が流れてるってことに關しては、複雑な気持ちになる。

母さんの故郷である中国と、ひいお爺さんの出身であるロシア。どちらも、お世辞にも日本とは仲が良いとは言えない国だろ。これを理由に虐められたりしたことは、幸い

にしてないけど……ニュースとかで国際情勢見ると、何とも言えない気持ちにはなるよね。

誇りには思ってるんだよ。母さんや先祖のことを。自分が曲がりなりにも外国語を多少喋れるっていうのも、便利だなと思ってるし。ただその国とか、国民全部が正しいことをしてるってわけじゃないから……それはどこの国でもそうなんだけど。

コンプレックスってほどではなくとも、ルーツって色々考えさせられるものだよ

M：そうだね……何の変哲もない平凡な日本人の私には、想像することしかできない感覚だな……

A：私もそうね。二人の後で言うのと安っぽく聞こえちゃうけど、私はこの体型……とか？

M：うん、同じ。私もそう。痩せてる割にそんなに美しくもない体と……あとはとにかく、体全部の弱さかなあ（溜息）

J：アヤメさんは、どのへんで悩んでるの？

A：昔っから、お肉が付きやすいのよう。お腹とかお尻とか、太腿とか……でもキツイ運動は苦手だから、なかなか減らなくて

I：僕はそこがいいんだって、言ってるんだけどね

J：でも、ある程度体型はしつかりしてた方が、仕事がキツイ時も動き回れると思う

よ。ムラサキの前で言うのも何だけど……

A：そうね。脂肪であつても、ついてるのは大事かなつて、最近思えてきたのよ。ライプに出る機会も多くなつたし、その度に倒れていられないものね。何曲か通して歌つても平気な体力を蓄えてる体なんだつて思うと、今じゃ少しは愛せるような気がするわ

M：ほんとほんと……体は資本だから。みんな、私みたいにならないようにね

J：サキは、まだこれからだからね？

I：そうだよ。病院で糸口が見つかつたんなら、まだ遅くはない。少しずつ治して。急には無理かもしれないけど、試せることがあるんなら試してみなよ。応援してるから

M：ふふ、みんなありがと

49 二人の仲は周りの人に公認？ 極秘？

J：表立つて公開するつもりもなかったけど、いつの間にかSOAT中に知れ渡つてたよね……

M：じゃあ一応、公認つて呼んでいいのかな……？ あ、でも、セブンスコードと創作世界の中だけだけどね!?笑

リアルの世界は、さすがに……鯨は知ってるけど、家族や親戚までには理解してもらえないと思えないから、大つぴらにできないし（苦笑）

J：それはまあ、正直ボクもかな……表面上、リアルな家族とか知り合いには、セブ

ンスコードで直生と出逢って婚約したみたいなことになってるけど、サキとのことは内縁の妻状態だし

I：純愛な割には、そのへんの事情なかなか複雑だよ、この二人笑

僕たちはどうだろ？ 一応、両親に紹介はしたんだっけ？

A：ええ。でも、私の親はまだ多分、ただの友達だと思ってるんじゃないかしら……？ 結婚とかいう話になってくると、多分改めて説明する必要があるわよね

I：まあ、それは僕もちやんと話してはないかな……母さんとあやめは台湾で会ってるし、実家に遊びにも来てるから、それなりに仲はいいけど

A：でも、麗香さんは何となく察しているような感じだったわよね？ 笑

I：まあね笑 父さんも、黙ってるけどわかっているような風だったし……そういうわけで、僕んちに関しては秘密でもなんでもないんだよね

J：暗黙の了解ってやつか……自然と受け入れてくれるって流れは珍しいんじゃない？ アイリの家も、そんな先進的な家庭ってわけじゃなかったんでしょ

I：自分でもそう思う。特に母さんなんて、昔は潔癖だから同性愛なんて絶対に考えられなかったんだけど、人は変わるもんだね

A：きつと、麗香さんにも麗香さんなりに思うところがあるのよ。私は、とつてもよくしてもらってるわ

I : 君ら、僕以上に仲良しだもんな笑

50 二人の愛は永遠だと思う？

M : 思いまーす！ ていうか、そうであつて欲しい！ です！

J : ボクもそう

I : あつさり答えるなあ！

J : 普通に答えるのは恥ずかしいけど……でもここで否定して、本当に永遠じゃなくなつたら嫌だからね。永遠なんて、どうせ誰にもわからないし経験し得ないことなんだから、それならできる限り永いつて方がいいでしょ

I : 合理的なんだか、ロマンチストなんだか……笑

なんか自分が色々考えてるの馬鹿らしくなってきたし、それなら僕も軽率に賛成しとこうかな

A : あら、愛理にしては珍しいじゃない。ふふ、そうね。永遠を願う気持ち自体は、悪いものじゃないもの

マルメロ家の日常2

世界で一番強い人《前編》

これは、少し前……先月くらいの話。

ヨハネさんの「それ」が爆発したのは、鯨さんが丁度出張中で家を空けている、数日間の楽園を過ごしている時のことだった。

思えば、夏にオメガバースの世界で直生くんとの出逢いがあり、ひよんなことから二人が付き合うことになり、そのことでヨハネさんの心はいっぱいいっぱいに割かれていただろうから、帰って来て再び私の側にいるようになって、ヨハネさんが比較的落ち着いていることに、あまり疑問は抱かなかった。

もともとかなり大人びた子だったし、私や私の体調管理のことについても、冷静なアドバイスをくれていたから……。

なんだか二人とも慣れて、それが普通なような気がしてしまっていた。

その日、冬の毛糸を買いに自転車で出掛けたものの、品数不足や休業日で、二店舗連続フラれてしまった私は、仕方なく、いつもは行かないスーパーに寄って、ほんの少し贅沢な買い物をして帰って来た。

買い出しに付き添ってくれた直生くんには、見切り品の生クリームを買うのは贅沢に入らないとか、見切り品の高そうな豆腐を買うのは贅沢かどうかで迷うんじゃないとか、財布の紐を押さえ続ける私に剛を煮やして散々口出しされまくったが、なんとか双方の妥協点を見つけてお買い物してきたのだった。

なお、生クリームは買った。これで、後で直生くんの髪色と同じかぼちゃを使って、かぼちゃ餅にするのだ。

ほくほくと、大きなスーパーの製パンコーナーで買ったクロワッサンとホテル食パンをラックに並べている私を見て、ヨハネさんは何とも言えない顔つきを浮かべていた。

いつも行くスーパーには、パンは菓子パンしかない。いくらスーパーとはいえ、その場で焼いてるパンって高級感があってテンションが上がる。このあたりパン屋が少なから、パンが大好きな私は美味しいパンに飢えているのだ。

どんなにパンが大好きでも、さすがに私一人では沢山買えないのが難点だけど。

「たまにスーパーのパン屋のパンを買うのは、贅沢なの……?」
「直生くんにも同じこと言われた!」

どうも、私の贅沢の基準は、ヨハネさんたちの考えるそれと若干ズレているらしい。そんなに質素かな。稼ぎがない主婦の私からすれば、十分な贅沢なんだけど。

「あのスーパーも、一人で行くには遠くてなかなか行けないから、買い物で行ったの本当

に久しぶりだよ！ 何ヶ月ぶりかな!? 自転車を漕げるくらい元気つていいわねえ」

「手芸屋さんが閉まつてた帰り道だっけ……寒くなかった?」

「今日はまだ暖かかった方だと思う。ほらー、お惣菜もちゃんと買ったよ」

あんまり私の好きな品がなかったの、小さなレバナラのパックを買った。

これを一人で独占して昼飯にできるのも、贅沢。だと思ふ。

相変わらずの少食ぶりを見て、ヨハネさんは少々呆れた目をしながらも、ご飯茶碗を差し出してくれた。

「もうちよつと、色々買って来てもバチは当たらないと思ふよ?」

「んー、結局は自分で作った方が美味しいかなって思ふもん。」

それに、たまに普段行かないスーパーで真新しいものを見るのも楽しかったけど、どうしてもあのスーパーに行かないスーパーで売ってない品っていうのもなかったから……やっぱり近いところで十分かな、私は」

「まあ、行くのが楽だもんね。ことあんたの体力じゃ」

「今の土地に越してきて幸せなのはねえ、スーパーが近くなったことと、坂道がないからいつでも自転車ですばい買い溜めできること、あと品揃えが多いこと、お魚がいっぱいあること、バーコード決済できること、それから見切り品のくるみパンが、いつも棚に並んでること!」

「相変わらず薄欲だねえ……」

ちよつと高い声に移行する時の、艶の入ったヨハネさんの声が好き。

幸せいっぱいでごちそうさまをしてから、さつきと食器を片付ける。

折角掃除もしたし、せめて鯨が帰ってくるまではこまめに洗い物を回して、綺麗な台所にしておきたいな。二人だとしても、洗い物の後の台所の汚れや、食器やタッパ―が山積みになった網棚を、そのままにしてしまう。

一人で、あまり汚れや埃も溜まらない家を、独占して心穏やかに過ごせるのは、パートナーが出張中だけの特権だ。鯨には申し訳ないけど。

ご飯を食べ終わってからまだまだ動けそうだったので、ホテル食パンという名前にだけ惹かれて買ってきた食パンを、私はパン切り包丁で切り分けた。

一人で食べ切るには到底多すぎる、小さいとはいえ一斤サイズのパンだけど、何も考えなしに買って来たわけではない。これを一食サイズに切り分けて、明日と明後日の分はそのまま、それ以降の分は冷凍庫に入れて置いておくのだ。

そうすれば、朝眠いし怠い時に、食パンをナイフ出して切らないといけないという面倒も発生しないし、切つてあるものをトースターに放り込んで焼くだけでいい。冷凍ご飯は大概解凍作業が必要だけど、パンだったら薄いものなら直にトースターで焼いて食べられるのも、パンのいいところだ。

朝が苦手な人間の、最強の味方。でも、明日はクロワッサンにカフェオレボウルで、フランス式朝ごはんにする。楽しみだ。想像しただけでほっぺたが落ちそう。

思わずにへにへしながら、パン切り用の細いナイフで、潰さないよう慎重にパンを切り分けていると、ヨハネさんが興味深そうに、台所に立つ私を覗いてきた。

「こんな事をする余裕まで、出てきたんだ」

「え？ へっへー、そういうえばそうだね。元気がない時なんか、パンの冷凍どころじゃなかったもんねえ」

思えば、こんなことをしようなんて思ったこと自体が、随分と久しぶりだ。

贅沢しようにも、贅沢する品を買ったり作ったりする体力なんかないし、近場のコンビニにすら足が向かない、そういう日々だった。

ほんの少し、病院からもらった薬のおかげで改善したのだ。まだ、症状とか病気そのものが治ったわけではないけれど。

手の込んだ、美味しい料理を作ってみたいな。

普段下ごしらえが面倒な、あんな食材やこんな食材も使ってみたい。

手が掛かっただけに、最高に美味しい料理が出来上がると、幸せになる。

幸せになれるんだったら、台所の掃除やお風呂の掃除も、ちよつとやってみよう。

やった分だけ、幸せが返ってくる。

なんだか気分がいいから、毛糸で何か編んでみたい。

あんな話も、あんな絵も描きたい。あれも、これも。

最近の私は、そればかりだった。

普段は忘れていた気持ちだが、あれこれいっぱいに溢れてくる。

背後から、優しい声が掛かって、ふわりと頭を撫でられる。振り返って見上げると、優

しげな瞳のヨハネさんと目が合った。

「……今はもう、だいぶ平気？」

「うん。薬飲んでるだけで、モチベーションも体の楽しさも全然違うよ。」

夜になっても、乾いた食器片付けとこうって気になるし、明日になったら朝ごはん何

にしようって考えられるし。

あ、でもやる気があるのは、鯨さんの出張中限定だけどね？

みんな味わってご飯食べてくれるし、お風呂とかも綺麗に掃除できるし、部屋も一人

じゃそんな汚れないからいつでも清潔だし。

まるで擬似ホテル暮らししてるみたいでほんと楽し……っ、んん、……っ?!?!」

急に、ぎゅっと抱き締めたまま唇を塞がれたから、言葉が続けられなくなつた。

あまりに突然のことで、嬉しいけど目を白黒させてしまう。

ヨハネさんにしては、言動に脈絡がない……っっていうか、めっちゃ急だけど!?

台所の剥き出しの木の床が、微かに軋む。パンを出しっぱなしにした作業台に、体ごと押し付けられながら、台所にはあまり相応しくない、ちゅっという甘い生々しい音が、唇を吸われる度に響いた。

「ちよ……っ、まつ、まつて……パン切りナイフまだ……っ、持つてる、危ない、からっ」
このまんま、二人っきりの甘美な感覚に酔いしれてしまいたいけれど、さすがに手元に刃物を持ったままは危ない。パン切り用だし大した切れ味はないと思うけど、それでも下手に触ったら怪我をしてしまう。

空いた腕で慌ててとんとんヨハネさんの体を叩くと、その言葉でやつと、諦めたように吐息を吐いて、拘束を緩めてくれた。

よ、よかった。改めてパンやナイフを片付けてからリビングに戻り、完全に安全な状態になった上で、私はもう一度、差し出されたヨハネさんの腕にすっぽりと収まる。

こんな風にべったり甘えられたのは、よく考えたら、ヨハネさんが長めの夏休み明けに帰宅して以来かもしれない。

意外かもしれないけど、それまではなんだか一歩引いたような感じで、再会を喜んだり、会えなかった分を補充したりするのを、ヨハネさん自身が遠慮しているように見えた。もちろん傍にいるのを喜んでくれてたのはわかったけど、見境なさや思いつきり加減があまりない、というか。

ぎゆうつ、と私の肩口に肩を埋めて擦り寄ってくるヨハネさんを、私はちよつと驚きながら、目をぱしぱしさせて見上げる。

「ど、どうしたの、突然」

「夏が過ぎてもこの方、あんたの体調一向に良くならなかつたし。

直生のことや、夜羽や恵李朱のこともあつて、ボクのことまで気を回してる余裕あんななかつたでしょ、あんたは。

だから、黙ろうと……あんまり迷惑掛けないようにしようと思つてた、けど。

なんだろう。気が緩んだのかな」

そう言つて、ヨハネさんは顔を伏せたままで、腕の力を強めた。

思いもがけない言葉だつた。素直で気弱で……普段の不敵なヨハネさんから出てくるとは、あまり思えないような言葉。

「そ、そんな」

「……ボクだつて、鬼の心臓じゃないんだからね。

あんたは勝手にしつかりしてると思つてるみたいだけど、ほんととは……」

恨みがましく吐き出されたと思つた言葉が、途中から涙で濡れて先が続かなくなり、私はますます慌ててしまった。

震える肩に手を置いて急いで覗き込むと、葉影の露のように儂げな泣き顔が、綺麗な

髪の内側に見えた。涙の粒が揺れて、ぼつりと掌の上に落ちる。

まったく、私は……。こんな悲しい顔をさせるまで、ヨハネさんの寂しさに気が付かないなんて。強情で我慢強さが過ぎる恋人の頬に、私はそつと指で触れる。

「……うん。ごめんね、あんまり気付いてあげられてなくて」

「ずつと、不安だった。あんたが消えていなくなっちゃうんじゃないかって。

あんたは一生懸命気丈に去勢張って生きてたけど、それでも生きてる笑顔が辛そうで……いつか、消え失せてしまいそうで……

だから、本当にここにいるんだって、あんたが自分の意志でいなくならないんだって思えるまで、安心できなかつた」

そんな大袈裟な話だったのか、と目を丸くした。

私自身に死ぬ気はととなかつたのだけれど、そんな風に見えていたのか。

まあ、確かに、辛いことも多かつた。死にたいと思うことも、ないわけじゃない。でもそのどれもが、今のところ最終的には笑い話になっているし、現に私はこうして生きている。

こればかりは無理でしょ……という思いをさんざん繰り返しながらも、ひいひい言いつつ今まで生きて来られたのは、ヨハネさんやみんなの支えがあつてこそだ。最後に笑える世界になるのは、みんなが居てくれるから。

だから心配しないで……と思っただけど、ヨハネさんはずっと不安だったらしい。掠れた声が、耳元で囁いた。

「ボクは、あんたが思うよりずっと、弱虫なんだよ？」

夜羽や恵李朱や愛理たちの前で、情けない面できないから必死だけどさ。

あんたが本来の元気を取り戻すほど、あんたが今までどれ程苦しかったのか、眼裏に浮かんでくる……

あんたの苦しそうな顔ずっと見てきて、ボクが今までどんな気持ちだったか、あんたにわかる？」

思わずはっとしたというか、はたと立ち止まった瞬間だった。

何とはなしに「良くなった」「楽になった」と口にはしたけれど、今まで何かを飲んで、何かを試して、そうはつきりと実感を伴って言葉にできた事は、明らかな病からの回復を除いては、一度もなかった。

どんな薬を飲んででも、高い栄養剤を使っても、早く寝ようと腹巻きをしようと体に良いものを食べようと、どんなにどんなに努力したところで、私の体はそれについて来ようとしなかった。

それが当たり前だった。

「良くなった」「楽になった」「大丈夫」……

そう口にするのは、本当に心からそう思ったわけじゃなくて、たとえ思い込みだとしてもそう信じていなければ、本当に、何の希望もなくなってしまうからだ。良くなったと思っていなければ、結局はこの体で何をしても無駄だという事実が、絶望としてのしかかってくるだけの日々が現実なのだ、わかってしまうから。

気のせいだとしても、これで体にいいことをしたのだと、少しはマシになったのだと。その結果まだ十分に体が動かなかったとしても、今ひとつ活力に欠けて力が入らなくても、熱っぽく怠く辛かったとしても、それは「本当に辛い」状態よりは、良いはずだから。

それが私の「良くなったよ」の定義だった。「良い」状態で多分、他の人から見ればまだ底辺にいる状態なのだと、気付きようもない。

そんな私が、一時的であれ、何の迷いもなく確信を持って「良くなった」「元気になった」と自分から口にしたのだ。

明らかに、間違いないと、自分で変化を実感できるくらい。これまでの、良くなっていくのかいないのか分からないような、中途半端な体力黄色ゲージの状態とは、格段に違った。

「良くなった」と言いながら、知らず知らずのうちにずつとしんどそうに体を引き摺りながら過ごしていた私を、その頃から見続けていた人間が、一体どんな気持ちだったの

か。今の私と比べて、あの頃の私がどれほど擦り減っていたのか知った時に、どんな気持ちになるのか。

私はまったくの無頓着で——そして、ヨハネさんの涙を見て、初めて気がついた。

「い、いめんね」

「謝らないでよ。謝らないで……ボク本当に、安心したんだ。

昼間布団に戻ることもなくなつたあんたが、炬燵に座つて歌を歌つてる。

バカみたいに目をキラキラさせながら、ボクたちに向かつて話し掛ける。

何度立ち上がつてもしんどそうな顔をしないで、お茶やらコーヒーやら淹れて、お菓子まで焼いてもケロリとしてる……

そんなどうでもいい光景で、胸がいつぱいになって溢れそうになるんだよ。あんたにわかる？ この気持ちがい

ぼろぼろつと、向かい合った瞳から、遠慮なしに涙が零れ落ちた。

これ以上なく泣いてるけど、明らかな涙声とは違って、あまり声は震えてない。荒ぶる気持ちよりも、静かに語り聞かせるような、穏やかな音色が柔らかな胸元から指先を伝わり、触れている私まで届く。

けれどその間にも、雨のように涙は幾筋もひっきりなしに降つて、私を濡らしていくのだ。びつくりするぐらい、透き通る青の綺麗な瞳から、次から次へと涙が溢れ落ちて

いく。これまで溜め込んだ気持ちが決壊したみたいに。ぼろぼろぼろと、綺麗な雫が花弁みたいに落ちる。

彼が語るのをずっと聞いていたら、なんだかこっちまでもらい泣きしてしまった。

頭を撫でてくれる、たおやかな掌が温かい。そのぬくもりに甘えながら、私も滲んだ涙を手で拭う。

「ありがと……ありがとう。こんなに、想ってくれて」

「当たり前でしょ。大好きだよ、サキ。ほんとに……愛してる」

「ふふ。私も大好き」

これ以上なく、ストレートでまっすぐな、愛の言葉。

こういうべったりした付き合いは嫌かと思ったのに、必要な時には、自分からこんな素直に伝えてくれるようになった。だから、私も伝えられる。

安っぽいと思う人らには、いくらでも思わせておけばいい。私は、いくらでも伝えて欲しいい言つて欲しい。

寒い時期だからを理由にべったりくっついていたら、部屋の扉の陰から、こそこそつとこちらを覗きながら話す声がした。

「……なんかいい雰囲気じゃない？ あの人二人」

「今夜は二人きりにしてあげようか」

「たまには譲つてあげないと、ヨハネが可哀想だもんね（☒?☒）」
ちつちやな影が二つ、肩を寄せ合つて話している。

やれやれ、と鼻を噉つたヨハネさんは、小さく笑つてから、ちらつと夜羽くと恵李朱くんを振り返つた。

「ちよつとそこ二人？ 聞こえてるんだけど？」

「わーい、バレた」

「ラブラブタイム邪魔しちゃったあ」

「まったく、マセた子供ガキが大人に余計な気を回さなくていいんだよつ」

二人いっぺんに頭をもみくちやにされたヨルクんとエリくんが、きやあきやあ笑つているのに釣られて、私も笑つた。

世界で一番強い人《中編》

でもその気遣いは本物だったみたいで、お風呂から上がってきてその日の夜、二人は寝室のスペースを魔法で区切ると、さつきと一緒にくつついて寝てしまった。

防音魔法が施してあるだけなので、隣に寝てることには変わらないのだが、優しい二人はたまにこうして、私とヨハネさんが二人きりでいちやつけるようにしてくれる。

まあ、みんなで寝てる時も、構わず同じくらいべったりいちやついていることはあるのだけど……。小さく寝息を立てる二人を微笑ましく眺めていたら、どうやらそちら側に加担する気なのか、自分も寝支度を整えた直生くんが、布団の上で本を読んでいた私の頭をぼんぼんと叩いた。

「よ。早く寝ろよ」

「直生くんもこつちで寝る？」

「オレはちび達と。ヨハネの邪魔しちや悪いだろ？」

そう言って小さく、人差し指を立てて口に当ててみせる。

直生くんも等しく、ヨハネさんの……。それから一応は私の、大事な相手であるはずなのだが、こちらはこちらで気を遣ってくれているらしい。

シャワーと歯磨きに行ったヨハネさんを待ちながら、直生くと少しだけ話をした。「そういえば、あんた仕事始めたんだって？ 大丈夫なのか、この時期に」

「うん、まあね……だから絶対に、寝込んででもできそうな仕事を吟味して選んだんだけど。携帯一本で、在宅でできる簡単な仕事。月収1000円もない、お小遣い稼ぎみたいなやつだけどね？」

「そりゃほんとに小遣いだな……」

「でも緊張しちゃったよ。仕事は仕事だもん。特に病院で、あんな診断が出た時期と被っちゃったしね……。でも今んとこなんとかやれてる。」

直生くんみたくないすっごい夢とか活動には、足元にも及ばないかもしれないけどさ。

でも、私の力を頼られることもあるし、今は精一杯、目の前のことをやってみるよ。どんなに金銭的には価値の低い仕事でも、ちよつとでも続けられたら、自信とかこれからの自分がやりたいことに、繋がってくるかもしれないからさ」

だから負けないよ、と歯を見せる私に、直生くんはほんの少し、切なげに目を細めた。「……？ どうかした？」

「……いや。前はあんなに仕事に怯えきってたのに、強くなったな」

「そうかな。そうかもね。今だって怖いよ、やれないかもって思う事に挑戦するのは。」

でも、前に病気で休職してた私の友達が言ってたんだ。自分に自信をつけるのに、最

初は誰でもできる簡単な仕事から始めたんだって。一日だけの単発の、ドーナツの箱詰めとか、そういう難しいくない単純作業。

そうしたら、少しずつ働いてた時の自信が戻ってきて、社会復帰もできたって。

私もそういうのやってみたくって……でも、今の体じゃ、一日だけのバイトでも体調が不安定だし、通勤すらしんどいでしょ。

だから、やれる事考えたの。肉体労働が無理でも、家から一步も出ない仕事なら、ワゴンチャンあるでしょ？ だからもつかい、クラウドサービスのサイトに登録して、色々探そうかって。そこで見つけた」

「よくもう一度する気になったな。あのサイト、仕事がピンキリすぎて、どれ選んだらいいかわかんねえって、結局前は何もせずにやめちまっただろ」

「うん……それは確かにそう。でもね、たまにはちよつと失敗してもいいのかなって、そう思えた！

何をするのも怖かったけど、まあ人間なんだから、わからないことも失敗もあつて当然だし？ いくら安全圏っぽい選んでも、結局やってみるまでどうかわからないんだから、とりあえずやってみるつきやないじゃん。

「1円でも10円でも入ってくるんだったら、何もしないよりはマシでしょ？」

まあ、単純に無職の罪悪感に耐えられなくなった、とも言っただけ。

でもとりあえず、30歳になる前に、何か仕事っぽい仕事やってます、と言ってみたかったのだ。確かに周りの人はみんな仕事をしていて、私はずっと焦っていたけれど、それで周りを羨んだり、治らない自分の体を恨んでいたってどうにもならない。

いつまでも怯えて、何も行動しなくせに周りだけ羨み続けて、自分自身の可能性を蝕んでいるのは、他でもない私自身だ。誰かのせいとかじゃない、自分が自分を、一番嫌な人間にしちやつてる。体調不良を免罪符にするのが嫌だ、といくらリアリストぶつて嘆いていたところで、結局のところそれを乗り越えるのは、私自身しかない。

私の恐怖も苦痛も、誰かから同情や共感を寄せられたところで、肩代わりはできない。私は、私のフィールドで闘うしかない。

他の人にできることができないのなら、何か工夫していくしかない。
羨んでる暇があるなら、やればいい。

健康のためでも、仕事のためでも、精神衛生のためでも、創作のためでも、
自分のできることを。ただ淡々と、一生懸命に。

私は髪を下ろしたパジャマ姿の直生くんを、力強く見上げた。
「絶望も武器にして生きるって、決めたの」

「……あの曲の歌詞か？」

「そう、それ。あんな風に上手くはいかないだろうけど」

たしか、直生くんも一緒に見ていたはずだ。

なんて単純な私！　こんなに簡単に、好きな作品から影響を受けるなんて。だけど本当に、そう思ったんだから。本当の絶望を知りもしない私の言葉に、説得力もくそもないのはわかるけど。

でも、そんな私を、直生くんは笑ったりしなかった。

ただじつと、揺れる蒼い炎みたいな瞳で見つめて、こう言った。

「あんたは、強いな」

「え」

これまで散々、私を弱者扱いしてきた直生くんからは信じられない、真逆の言葉だった。

どういう風の吹き回しかと置いていたら、直生くんは私の布団の上、真向かいに胡座をかいて座り込むと、正面から私のことを見つめた。小柄な私から見ると、座つても直生くんはどっしりした岩みたいだ。

「オレ……あんたのこと、最初は気持ち悪いと思ってた。

八方美人で、どんな事でも理解できるようなフリして、そのくせ自分の嫌なことからは、都合よく目を逸らして逃げ続けて。やれって言われたこともろくにやんねーし出来ねえくせに、偉そうに文句ばっか言ってるし自分のケツも自分で拭えねえ、口先だけの

野郎だと思つてた」

ひどい言われようだ。まあ、全部ほんとのことだけど。私自身が思つていて認めたくないことを、私の内側から生まれた人間に言われているだけなので、腹も立たない。

直生くんは、私の内側から生まれた人間に言われているだけなので、腹も立たない。

けれど、そこから先が今までとは違つた。

「けど……あなたの暮らしに寄り添つて、ヨハネから色々話聞いて。

あなたは、辛かつたんだなつて。今更だけど、ホントにわかつた。

あの医者が言つてた。今の数値見る限り、これがマジだつたら相当しんどいはずだつて……。

情けねえけど、ホントに、今更だけど……あなたが今まで、どれ程苦しい中でこれまで生活してきたのか、やつとわかつて。今更みてえに血の気が引いたんだ。それなのに、オレは……」

悔しそうな表情になり、唇を噛む直生くん。

私は別に、後悔して欲しかったわけじゃないけど、今までの自分の目の節穴具合を悔むような、そんな表情だつた。

直生くんは、こう見えて人情に厚い、優しい子だ。私みたいな根性なしとは仲良くしてくれないだけで、芯のある相手や実力を認めた相手には、敬意を持って接するし、気

さくで思いやり深い面も見せてくれる。

……はずなんだけど。私は、そういうのの対象外では？ だって、体は弱いし、特に彼に認められるほどの何かを頑張った覚えはない。いつか、認められたいとは思っていたかもしれないけれど。

そう思つて首を傾げた私に、直生くんは項垂れながら小さな声で言った。

「あんたを傷付けた大勢の大人と、オレも一緒だ。あんたのことを知らずに、あんたに向かつて、ひどいことも沢山言った。」

これ以上頑張れないあんたに、鞭打つみたいにひでえこと言つて。オレにはわかるはずもねえことで苦しんだり諦めたりしてるあんたのこと、少しも思い遣つてやれなかつた」

他人に厳しい人間は、自分にも厳しい。

正確無比な視線を、直生くんは自分自身に向けていた。その際限のなさというか、自分にすらストイックでどこまでも追い詰めてしまうところが、心配にもなったりする。

思わず私は、少し強張つた頼もしい肩にそつと触れた。

「直生くん。そこまで考えなくつていいよ。仕方ないことだもの。私が甘つたれに見えるのは当たり前だし、多分世間大多数からはそう見えるよ。就職に失敗した時点で」

「けどあんたは、多くの人間に実力を認められてもいるだろ。あんたの母親だって、あん

たがきつかけで何年も中国語勉強して、わからない事すぐ聞きに来るし。一人で着物を着れるのだって、なかなか出来ることじゃねえって、会う人会う人みんな言うし。あんなの旦那は、あんたが毎日飯を作るから、コンビニ弁当がなくなつて痩せたし。あんたが家にいるから、この家はいつまでも心地いい空間なんだ。

そういうのつて、金の稼げる稼げないで、測られていいもんじゃねえと思う。

あんただつてよく言うじゃん。えつと……ゴン……ゴン……ジュ……？ とかなんとか

「『工作没貴賤』……職業に貴賤なし?」

「そう、それ」

私が中国語で言ったことを、うる覚えだけど覚えてくれていたらしい。まあ、これだつて私が元彼が言うのを聞いただけでうる覚えなのだが。

正しくは「職業無分貴賤」と言うようだ。職業に貴い・賤しいといった分別はない、つまりどんな仕事をしているかで人を差別してはならない、という感じの意味。

はて、日頃の家事労働やら自主的な趣味及び勉強やは、仕事に入るのだろうか……と尚も首を傾げていると、それは人間としての務めだから、と直生くんは言った。

「自分に向かない事を、ひでえ無理して頑張るこたねえよ。あんたんちは、旦那が稼いであんたが家のこと支えて回つてんだ。適材適所つてやつ。

あんたも旦那も、人間として務まってるから、それでいいんだよ」

「にんげん」

いやに壮大な話になったな……と私は思わず目をぱちくりさせたが、直生くんはどこまでも真剣だ。長い睫毛の色までが、微かにオレンジがかって綺麗だった。

「オレ……あんたを気持ち悪いと思ってた。

けど、それでもものうのうと生き続けてきたあんたの事、本当はどつかで憧れてた。

今になったら、どんだけすげえことか、わかるんだよ。

オレは、あんたの心の弱さと不甲斐なさしか、見れてなかった。

誰にも理解されねえ、訴えても相手にされねえ、だから苦しさもしんどさも誤魔化して、沢山諦めて、どうしようもなさも全部抱え込んで……体が動かないっていうそれだけで、心も全部ダメになって、死にそうな思いしてさ。それなのに、あんたは一度も、自分の生を投げ出さなかった。今こうやって、生きてる。オレの前にいる。

それって、すげえことなんだよ。奇跡みてえなことだ。

あんたは、強えよ。本当に強え。

今までオレが知る中で、一番強え女だ」

「っ……っ……」

私の思う一番強い子に、一番強い女だと言われて、喉の奥がぎゅつとなつた。

精神的にも肉体的にも、私よりうんと強い知り合いなんて、直生くんにはごまんといるはずだ。

そんなばかな、と思ったのに、直生くんの瞳はまったく嘘がないし、揺るがない。青く瞬く星のような、あるいは輝く海面のような瞳が向けられている。

語るにつれて、強く熱っぽくなつていく口調が、彼の気持ちがどれほど真なのかを証明していた。

私が強いなんて全然ピンとこないのに、本当にそう思つてくれているのがわかるから、余計に泣きそうになる。

こんな素敵な子に、こんな風に想われていい程、自信も資格も私にはない。そう思つてきた。

それなのに、馴れ合いが嫌いだという君が、今こうして私の中の強さを評してくれるのは、何故なのだろう。

色んな人との出逢いを経て、物語の動き出した直生くんの中にもまた、大きな変化があつたのかもしれない。

だとしたら、私も一緒に、これから君と物語を紡ぎたい。

そう思つて口を開きかけた時、直生くんは唐突に、潔く私の前で——なんと、これまでの5年近い付き合いの中で初めて——私に向かって頭を下げた。

「今まで、ごめん。謝って許されるとは思わねえけど。ほんとにごめん。」

「……こんなオレでも、これからも傍に置いてくれるか？」

「ええええええ！ ちよ、何やってるの！ やめてやめて！」

「当たり前じゃない！ 直生くんがいるから、今までやってこれたんだよ！」

傍にいてくれなど、こつちから頼みたい台詞だ。

私なんかは、どれだけ直生くんに嫌われても、あの子のことが好きだった。しつこいラブコールを止める気は元より永遠になかったのだけど、勝手に叫び散らしていただけのそれがついに通じたようでもあり、予想外やら恥ずかしいやら……。

おずおずと見上げると、照れ臭そうな瞳と目が合つて、思わず逸らしてしまった。

生きていて、自分が人より大変だなんて、これでも思ったことはなかった。自分よりずつとずつとずつと大変な他の人たちとは違って、私は恵まれてるくせに頑張れないだけなのだから、大変だといつても所詮はただの弱音で、何もすごいことなどないと。

でも、病院で数値として自分の置かれた状況を診断してもらえた時に、初めて、希望を失わなかった私を「強かったのだ」と思えた。

そしてその強さが、私と直生くんを繋ぎ止め、私とヨハネさんをより強く結び直してくれた。

いや、実際には「強かった……かな？ もしかして……」ぐらいで、やっぱり大した

自信なんてなかったかもしれない。

それでも、今までの気持ちとはほんの少し違う、そんな変化を自分で味わっていると、スキンケアまでばっちり済ませたらしいヨハネさんが、ようやくこつちに来た。私の部屋で化粧水とか乳液とか貸してたから、途中から私たちの話は聞いていたようだ。

「まったく、よく言うよ。今まであんなだけサキのこと虐めておいて」

「そうは言うけどな、そつちなんか、この家で言やまだまだ新入りじゃん」

「付き合いの深さは年季の長さによらないって聞くよ？ 現に、ボクの方がサキから心を開いてくれたのは先だったし」

「はあ!? そりゃ恋人としてはそうかもしれないねえけどなあ、こつちだってあいつが大学卒業間もねえ時代からこうして……っ」

「わかったわかった! 二人とも大好きだから喧嘩しないで!」

そう言うのと、むつつりしながら矛を収めるタイミングまで同じなので、やっぱりこの二人仲がいいんだと思う。

ぱし、と掌を打ち合わせた直生くと場所を交代しながら、ヨハネさんが布団の上に潜り込んできた。

「さて……。あいつらの言う通りにするのは癪だけど、与えられた機会を無駄にする理由もないし、寝よっか」

「う、うん」

電気を消した部屋で素直に横になると、毛布を上からすっぽり被せたヨハネさんに、ぎゅつと抱き締められた。

二人分の、どこか甘い呼吸音がすぐ近くにある。

冬だから、耳元まで被った厚い毛布の内側は吐息と体温でうつつすらと湿度が高まつていて、けどそんな湿り気さえ、なんだかとても愛おしく、懐かしいものを感じていた。

「二人つきりで眠るのは久しぶり、だね」

「そうかも。まあ、夜羽や恵李朱がべたべたひつついてくるのも、悪くはないけど」

普段はそこに、さらにプラスして直生くんにも背後から抱えられながら寝ていることが多いヨハネさんだ。もはやヨルクんたちの魔法がなければどうにもならないくらい、満員御礼ぎゅぎゅうの布団だけど、それも楽しい。

少し闇に目が慣れると、ヨハネさんの暗い青の瞳がよく見える。光の当たり方によって澄んだ青にも見えるけど、どちらかといえば鮮明というよりは、青藤色や紅碧のような落ち着いた青に見えることが多い、不思議な色だ。

あまり綺麗な顔なので、いつもそんなじつと見つめていられないのだけど、私をからかうより先に、ヨハネさんはぎゅつと腕の中に私を閉じ込めた。

「ヨハネさん……？」

「いい、いい？ 今日はず慮しないで甘えるから。直生にいつもやってるのと同じくらい、甘えるからっ。あんたが言うなら、本当に我慢なんかしてやらないからねっ」

少し焦ったような、ヤケになった早口な声が身じろぎと共に聞こえた。

「というか、直生くんが甘えてる自覚はあるんだ。かわいいな。」

などと思っていると、私の頭を掌で撫でたヨハネさんの吐息が、ふわりと額に感じられた。

キスするのかなあ、と思ったけど、小麦色の綺麗な肌の掌は、そのまま私を片腕に抱き締めたまま、ゆつくりと輪郭を確かめるように、あるいは存在を確認するように、私の体を辿っていった。

気持ちいい。捲り上げたパジャマの内側から、忍び込んだ手が、破れそうな皮膚を優しく撫でていく。痩せて皮膚から不格好に飛び出た、背中の骨やあばらまで、一本一本。私の小さな反応を楽しみ、観察しながら、愛おしむように触れて、何度も往復する。

「お願い、もっと安心させて……。」

サキが絶対にいなくならないって、ボクにわかるまで、ボクに教えて」

切実な声音が、耳朶を打った。

とても、色事など介入する隙もないくらい、それでいて愛しさに満ち溢れた、懇願するような声。

どこまでもまっすぐな、ヨハネさんの願いだった。その気持ちごと受け止めながら、私はただぎゅっと、震える腕に抱きくるめられている。

「ボクがもう大丈夫って思えるまで、ボクが安心するまで、離れたくない」

一旦堰を切るように出ると、止まらない我儘の数々全部が、次々にぶつけられた。多分これが、ずっと我慢してきたヨハネさんの本音なのだろう。

まだ物語として紡いでいないけれど、私は一度、彼の世界から消えてしまったことがある。その時の記憶が尚更、ヨハネさんを苦しくさせるのかもしれない。

暗闇の中、甘えるように頭を擦り寄せると、それに応えて滑らかな頬が触れた。続いて掌。壊れ物を扱うように私の顔を挟みながら、甘やかな薔薇の香りが漂うヨハネさんが、優しく頬擦りをする。

「気が済むまで、ボクの傍にいて。絶対離れないで。どこにも行かないで。」

ボクに……愛してるって、言って」

「……ヨハネさん。愛してる」

「もう一回」

「愛してる。大好き」

「……もう一回」

「えへへ。ずっと愛してる」

何回聞いても気が済まないというように、不安を確かめるように、額を寄せてくつつけてくる。

それでやっと少し安心したかのように、ヨハネさんは腕を緩めて穏やかに寝息を立て始めた。

その寝顔を眺め、私もその温もりに包まれながら、今の幸せと、これから先の幸せを想像しつつ眠りにつく。穏やかな夜だった。

世界で一番強い人《後編》

それから、また数週間が経ち、月が変わった。

ライブがあつたり、結婚式の出席依頼があつたりで忙しかつたし、その間ムラサキが体調を崩すして辛そうなのを見て、ボクは冷や冷やしたりもしたけれど、とにかくこれで次の通院から、本格的な検査や治療を始められるのだと、彼女は息巻いていた。

ここまで、病院で先んじてもらったホルモン剤を飲んでもいたので、なんとか行事を乗り切れたのは薬のおかげだったし、また続けて薬を飲めばとりあえず順調に回復するものだと、彼女もボクもそう思っていたのだ。

——夜羽と恵李朱から、今日で通院と服薬は一旦終了になったという連絡を受け、ボクがサキの家に飛んで帰った時には、もうこちらの世界は夕方近くなっていた。
仕事の撮影があつたりで、なかなかここまで抜けられなかつたんだ。

大体の事情は夜羽たちから既に聞いてはいたけど、きつとこの決定に誰よりも辛い思いをしているはずのサキは、いつもとさして変わらな、けれど少しぼーっとした様子で、夕飯の米を研ごうとしているところだった。

氣を利かせて夜羽たちがリビングで過ごしてくれていたので、ボクは台所で付き添いながら、おそるおそるサキに尋ねた。

「検査……要らなくなつたんだ……って……？」

「うん……そうみたい。薬を飲む前の血液検査の結果見たら、コルチゾールの数値かなり戻つてたから、あの薬を飲むまでもなく、元々ステロイドは出てはいるってことみたい。」

『全く出ない病氣』っていうのが疑わしかったのに、そのセンが潰れちゃつたんだよね。だからこれ以上は精密検査しても、時間とお金が掛かるだけで空振りになる可能性高いつて言われた。

前異様に低かつたあれば、多分その時たまたま低かつたんだらうって。

薬が効いてたのは……なんだろう。安心感によるプラシーボ効果だったのかな。

とにかく、原因がはつきりしない以上アプローチのしようもないし、ホルモンが出るんならホルモン剤出すわけにはいかないし、ここで出来ることはもうここまでと、そういうことらしい」

「……」

「参っちゃうよねえ。先生も参つてたけどさ。検査的にはどこも悪くない以上、何も言うことがなくて。」

うーん……今までもずっとそうだったから、どこかでこうなる可能性をうつすら想定はしてたんだけど、まさかここまでできてこうなるとは」

今度こそ何かわかるかと思っただけだな、と彼女は苦笑を隠さずに言った。

白菜の外の葉をちぎる手が、滑らかに動く。

「ごめんね。なんか心配掛けちゃって。

あれだけ大騒ぎしてたのに、結局また何もわからなかつたね」

「そんなこと言わなくていい。あんたが謝るような事じゃない。それは……」

即座に言ったけれど、それは誰が謝るべきことなんだろう。

サキの体に重大な病気が隠れていなさそうだというのは喜ばしいことで、これまでの診断や結果も、それを検査してきた医者も、ここまで積み重ねたからには、きつと間違っていないと思うのに——それを突き付けられたサキは、ちつとも幸せそうじゃない。

どうして神様は、人の目の前にぶら下げた希望を、こうも簡単に取り上げてしまうのだろう。

何かを弄ぶかのように、そんな運命は何度も、コロナ禍にあつてただでさえ不自由な世界を生きるサキを、何度もそれ以上の絶望に叩き落とす。

これまでに何度も——きつとボクと出逢う前から何度も何度も何度も、サキはそんな絶望の最中に突き落とされてきたのだろう。

思ったほどショックを受けていないように見えるのも、涙一つ流さないのも、もうこんな失望や絶望には慣れっこだからなのだと思うと、ボクは諦念の滲んだ横顔を見て、酷く胸が痛くなった。

「あ……で、でも、そこまでがっかりしてるわけじゃないよ。そりゃショックだけど。

薬の有無が関係ないってことは、体調管理次第でホルモンさえちゃんと出れば、薬飲んでた時みたいに下痢を防げるようになったり、元気に旅行に行つて帰つてくることも、可能ではあるってことでしょ。私の体がちゃんとお仕事してくれればだけど。

まあ……それでも気合でどうにもならないくらい具合が悪くなれば、またどつかの医療機関に罹るしかないんだけど……

ま、通院しながら体調と付き合ってたのが、通院なくなつていつも通りの生活に戻るだけだよ。だから、そんなに気にしないで」

やれることはやってみるからと、逆にボクの方が慰められてしまった。

鍋のスープの素を、流し台の下から探しているサキを見ながら、これじゃダメだと頭を振ってみる。

サキに気を遣わず、心配もさせないように。

サキは、ボクに我慢させるのを嫌だと思つていたみたいだけど、それだつて時と場合とか、程度によるでしょ。辛い人間が辛い時に笑顔を浮かべるのがどれだけ大変か、ボ

クはわかっているつもりだ。そんなサキの前で、余計な心配事や我儘を振り翳すなんて、ますますサキを困らせてしまう。

どれだけに心に擦り傷を負っても、サキが何度も何度も立ち上がって泣かないと決めたのなら、ボクが泣くわけにはいかない。

本人の言葉を信じて、頑張りたい時には背を押し、休みたい時には寄り添うこと。ボクに出来るのは、せいぜいそのくらいだ。

ふー、と小さなため息が聞こえて、ボクは我に返った。

「……まあ、絶望も武器にして生きるって、この間言っちゃったばかりだからなあ、直生くん。」

言うは易し、行うは難しってやつね……正直これからの通院で何とかなると思ってたから、実際食らうとキツイわーメンタル」

「こんな状況であんたが反故にしても、直生は怒らないと思うけど……」

「いやいやいや。私は有言実行の女なのでね。ここで引いたら、あの曲を歌ってる人たちにもみんなにも、申し訳が立たないよ」

なんとかポジティブに捉えられないかな、と呟きながら、冷蔵庫を探っている。

今日も風の中を自転車漕いで、病院の後で在宅でミーティングにも出て疲れているはずなのに、野菜鍋の下拵えを次々と済ませていくサキ。

これ以上は、ボクも口を出せなかった。きつと何を言っても蒸し返しても、傷付けてしまふのだと思う。きつと、一番辛いのは、痛いのは、本人だから。やすやすとわかったようなフリもできないし、それでサキが慰められるとも思えない。

「もうこの時間だし、お肉はまだ昨日のがあるから、鍋は野菜だけにしちゃおつか。

病院でもバランス問わずいっぱい食べた方がいいって言われたし、野菜鍋なら多分永遠に食えるよ私。見てこの素、あごだしだよあごだし。絶対美味しいに決まってるじゃん」

「この間買ってきたやつなんだっけ。一人鍋用の？」

「そう。個包装だから、これを大きい鍋に使えば、味薄でちようどいいと思って。前、大袋の半分でも結構濃く感じたでしょ？ 鯨はあのくらいがいいみたいだけどさ」

「サキの家、普通量だと味濃過ぎるもんね……」

ルーでも何でも、材料表記の倍は薄めてるんじゃないかってぐらい、薄いのサキの味つけ。でもそれに慣れた今では、不思議とそれが美味しいんだけど。

「本当は肉入れた方がいいんだろうけど、今から解凍するの面倒なんだもん。」

「いいよね手抜きで。足りないかな……？ でも豆腐もあるし。春菊も入れようね、ヨハネさんが好きなやつ。あとはいえのきと大根と……そうだ葱忘れてたわ」

「既に野菜だけで溢れそうになってない？」

「あはは、いつも入れすぎてこうなるんだよね。お肉入れなくて正解。

ていうか今思ったんだけど、余りの葱、小口切りじゃなくてみじん切りにして冷凍しとけば、味噌汁にも納豆にも入れやすくない？ 朝卵焼きに入れても火が通りそうだし。天才じゃない??？」

「？ 玉葱じゃないよね。細長いのに、みじん切りできるの……？」

「だーいぶ前にTwitterか何かで見た。一度あれやってみたかったんだよねえ。

確かあれは十字に切れ目入れてたけど……この葱超太いなあ。八分割くらいでいいか」

いつも無理やり鍋に押し込んで具を詰めていたムラサキだけど、さすがに少し学習したらしい。

首を傾げるボクの前で、サキは葱の筋に沿って縦方向に、器用に切れ目を入れた。先が広がって、花か房飾りみたいになっている。それを直角に刻んでいけば……たしかにみじん切りだ。サキが感心したような声を上げる。

「おー、すごいすごい。ほんとに細かく切れてる。これは楽だ。もっと早く思い出せばよかった」

「そういうのって、急に思い出すものだからね。むしろあんたはよく覚えてたと思うけど」

「へへー。汁物は弁当にできないから、豆サラダでも作って入れようかと……げ。豆の期限切れてる。前いたとこのスープで買って、買った後使おうと思つてたら1年ぐらい経つちやつてた。大丈夫かな?」

「不安ならやめとけば?」

「いやでも……葱が勿体無い。もう入れちやつた」

「ほんの数センチ分でしょ、そんなの!」

「んー、食べた感じ、古い味はするけど傷んでるようでは……とりあえず作つといて鯨に毒味させるか」

「あんたの旦那、ほんとに体よく使われてるね……」

あまり変なものを食べて、お腹壊して欲しくないんだけど。

たしか、まだ期限の切れていない缶詰の豆が、あと一つくらいは残つていたはずだ。丈夫そうな鯨さんとはかく、サキの分はそちらを使わせるべきか……と本気で悩んでいたら、切つた春菊を水切り網に移していたサキが、ふと手を止めた。

「……ねえ。ヨハネさんはさ」

「うん?」

「……私が笑つてると、嬉しい、かな」

「うん。それは……嬉しいに決まつてるでしょ」

いつもなら少し照れる質問だけど、今日に限っては嘘を吐く気にもなれない。水を注いだ鍋が、ことりと揺れる。

ガスコンロの火が、銀色の鍋の下でゆらゆら踊る。

微かなガスの音だけが、こぢんまりした照明の弱い台所に響いていた。

暗いだの、床がボロボロだの、文句を言いながらも、シンクやガスが広くて快適だと、自分なりにいいところも見つけて自分のものにしてきたサキの台所は、まさしくサキの人生のようだった。

そんな中で、ふと伺った隣の小さな肩が、震えているのをボクは見た。

「っ、だ、から……っ、私が笑って、誰かが幸せに……なるなら、私、笑ってなきや……っ
て……っ」

「笑えないじゃん。ねえ」

「今だけなのっっっ！」

潤んだ瞳から、細い筋になって流れ落ちる涙を、彼女は乱暴に拭った。

刃物があるから、さすがに抱き締めるのは憚られたけど、本当は今すぐ抱き締めてあげたかった。

子供のようにわんわん泣いてしまいたい自分を、サキはボクら以外の前では絶対に見せない。

ままならない現状におろおろして、本当は八つ当たりしてしまいたいだろうに、表では明るく振る舞いながら、見えない場所でただじっと耐えている。

そういう姿を、ずっと見てきた。それでもサキは、生きることにとどこまでも真剣で、気が付いた時には背筋も伸びて、消えない光が瞳に宿っている。その目はいつも、サキがこれまでで逢った誰かを、焦がれる相手を、前に見つめ続けている。

その人たちの全員が倒れない限り、サキが諦めることもないのだろう。

「本当に、それだけ、なの。」

無理とかじゃ、なくて……自分の笑顔が、誰かを幸せにするなら、笑ってほしいの。私が幸せだって思って、誰かが安心するなら……

だって、私が辛い顔ばかりしたら、ヨルクンやエリくんだって、この世界は辛い事ばかりなんだって思っちゃう。折角、自分で選んで、この世界に生まれてきてくれたのに。

だから……最後は笑って生きられるんだって、思って欲しいの。笑える世界を作るために、頑張ってきた人達の背中を……なかつたことにしたくない。

だから私は、泣かない。嘆かない。

泣いても……乗り越えられることは、全部乗り越えて、向こう側に行く。無理だって思っても、やれる事は一生懸命やって、味わえる幸せいっぱい噛み締めて。全部を大事

にして、辛い時こそ笑うの。

そういう自分になりたい。それが、私の望む私だから」

鼻を噉つて、もうぎこちない笑顔を作ってみせようとす。

包丁とまな板を洗ってから、目の前にやってきたサキの向かいに、ボクはゆつくりと立った。濡れたまつ毛で俯く顔を、じっと見つめる。

心配には、なる。心配すると言われても、無理な話だ。

けれど、今のサキは去年の冬よりずっと、生きる強い力に溢れている。自分を御する方法を知って、この町でこの町なりの楽しさを知って。きつとボクが案ずる以上に、サキはずっと強い。今まで知る中で一番だつて直生は言つたけど、ボクからすれば今までどころか、世界で一番をあげたいくらいだ。

だから、ボクが言えるとすれば——

「……サキ。あんたがどんな顔でも、ボクは好きだよ。泣いてる顔も怒ってる顔も、ボクは好きだ。

でも、笑つててくれたらもつと嬉しい」

顔の横の髪を撫でると、サキは照れたように笑った。

ボクが言えるとすれば、笑い顔だけじゃなくて、どんな表情もどんなサキも、愛しいと思つているから心配ないってこと。夜明けの後には笑えるって、どんな時でも一緒に

信じているってこと。

「それから……サキが笑ってるのはボクも嬉しいけど、泣きたいほど辛い時にまで、無理して笑って欲しくはない。それはわかるよね？」

「はい。なのでさつき泣きました」

「ふっ……そっか」

「しゃあしゃあと答えるので、思わず笑ってしまった。もうすっかり涙は乾いたみたいだ。」

別にもっと泣いてくれてもいいけれど、本人の気が済んだならそれでいい。

相変わらぬの切り替えの早さには舌を巻くけれど、本人的にはボクがいない間にもつと時間が掛かっていたようで、リビングに戻りながらサキは言った。

「さつきヨルクんたちの前でも泣いたし。あとは耐えられなくなつて4人くらいLINEして、それからありとあらゆるSNSに書き込んで同情誘つといたから大丈夫。悲劇のヒロイン演じてだいぶ気が済んだ」

「それでなんとななるんだ……」

「だつれからも反応ないと『あ……世間的にはそんなもんなんだね、ハイ……』てスントってなつて冷静になれるから、意外とおすすめだよ。」

自分の悩みをしつかり向き合つて聞いてくれる相手と、この程度大したことないと思

わせてくれる環境のバランスが大事。どっちかだけだと辛くなるけどね。前者だけだと、自分はこんなに辛いんだ……って思いすぎて結局しんどくなるし、後者だけだと、誰も自分を気にかけてくれない……ってなってしんどくなる」

「なるほど？」

転勤族だと人脈を作るのすら苦勞すると思うけど、サキは家から一步も出ずとも、それなりに上手く人との縁を利用していらっしゃるしかった。

寄つてきた夜羽と恵李朱を抱き締めながら、ムラサキは炬燵で首をストレッチして傾けている。

「私も昔はかなり悲観的な性格だったし、まあそうなるに相應の出来事もいろいろあったわけだけど、結局それでいつまでもウジウジ泣いてたり、どうにもならない事で苦しんでたりしても、あんまりいいことないのよねー。

私はこんなに大変なんですって嘆くよりは、嘆いてる暇使つてなんか楽しいことした方が健康にもいいよなって、今はそう思つてるだけ」

「サキ、楽しいことを見つける達人だもんね」

「そう。楽しいことならいくらでも湧いてくる。それを『叶わないだろう』じゃなくて、『叶えられる』にしなくちゃね。スキマのライブと東京には、行つて帰つて来れたんだし。」

たとえ前向きになろうがならなからうが叶わないんだとしても、それだったら尚更、前向きでいた方が精神衛生的にはいいじゃないの」

そう言つて、夜羽の目を見つめながら頭を撫でているサキは、もうその隣からスマホを持った惠李朱に、セーターワンピースの袖を引つ張られていた。

「ねえ見て（☒?☒）やばい（☒?☒）大阪城80階までいった（☒?☒）今剣が誉取つた」

「はいはいはい、ちよつと待つてねー。ていうかそんなに行つたの!? すごい!? 去年50階までしか行けなかつたよね!? 弊本丸の極短刀部隊やばいな!」

合間を縫いながら、審神者業にも精を出しているようだ。サキが心を込めて育て上げた刀剣の世界を、ボクも時々覗いている。

「元気なのはいいけど、ほどほどに。無理しないようにね」

「はーい」

いつでも元気じゃなくていいから、こんな風に楽しげに輝く瞳を、これからも傍で見たい。苦しいことも、辛いこともあるかもしれないけど、楽しいことをその何倍も、こつこつと一緒に行けるように。

そんな決意も新たに、こめかみに小さくキスを贈れば、何も知らない彼女はその愛おしい瞳で、きよとんとボクを見上げたのだった。

めいぐるみと嘘

「ムラサキつて、犬に似てるよな」

ふと、直生くんがヨハネと、そんな風に話しているところを耳にした。

年の終わりも差し迫った暮れのこと、コンビニに向かつて年賀状を買いにふらふら歩き出したサキの後をついて、みんなで喋っていた時のこと。

「たしかに、人懐っこいし。いつも尻尾ぶんぶん振ってるように見えるよね」

「えー、そんなに私わかりやすい?」

「わかりやすいわかりやすい」

小首をかしげるムラサキに向かって、直生くんとヨハネが頷く。

そんなムラサキと、ボクとは反対側で手を繋いでいた恵李朱が、皆を見上げながら言った。

「でも、直生くんたちも犬っぽいよ」

「そうよねー。我が家どっちかかっていうと犬っぽい子が多いよね」

「は、はア!? 別にボクは犬なんかじゃっ」

照れたように振り返るヨハネを、じーっと見た直生くんがにやっとなら笑った。

ヨハネからもらった、お気に入りのマフラーから覗かせた目が、ビー玉みたいに輝いてる。

「いやいや、ヨハネも大概わかりやすいよな。大人しいけど忠犬っぽいとか、性格は犬っぽい」

「んな事言ってるあんただって愛理さんの犬みたいなもんじゃん！　すぐ落ち着きなく動き回るし、大はしやぎする大型犬だね、ボクからすれば」

「ああ〜ん？　言ったなこのやろお」

「褒めてんじゃん！　触らないでよっ」

「褒めてるにしても言い方ってもんがあんだろーがっ」

「あはは……」

あつという間に喧嘩になって路上で揉み合う二人を背後で眺めながら、サキが笑う。

なんだかんだで仲のいい二人を見て、一緒ににまにましている恵李朱の頭を撫でながら、ムラサキが言った。

「恵李朱くんは猫かなあ。気まぐれだもんね」

「ムラサキはたしかに猫よりは犬っぽい（？）素直で感情表現豊かなタイプ」

お天気空の下でみんながそう言う中、ボクは一人、首を傾げていた。

そんなボクに気付いた使い魔のベルだけが、物言いたげに足元からボクを見上げてく

る。

(そうかなあ。サキは、犬っていうよりも……)

そこでふと、コートのポケットに入っていた魔法具のことを思い出した。

伽々未から、今年のクリスマスプレゼントに、と貰ったアイテム。

小さな虫眼鏡のような道具を、ボクは隣を歩いたまま、右手で持って左隣のサキにそっと翳した。

この虫眼鏡は、翳した相手が心に飼ってる動物を見ることができるとらしい。

その人の記憶や心の状態が、その人が一番近い動物の形を取って現れるそう。

ボクの魔力で使えるのかな、と思っていたら、だんだん透明なレンズの内側が白くなって、周りも真っ白になって。吸い込まれるようにして、ボクは心の風景を覗いていた。

(やつぱり、そうだ)

おりこうにお座りした、首に藤色のリボンをつけている真っ黒な猫を見て、ボクは思う。

ムラサキは、犬っていうより、ねこちゃんみたいだと思う。

お愛想がいいから、みんなに勘違いされている。

だって、ムラサキはみんなのアイドルだから。彼女の元にやって来てくれる人たちに

は、大人気なんだ。

いつも誰にでもにこにこして、黒猫は頭を撫でられている。ボクが見ていると、寄つて来た人たちに沢山撫でられて、触ってもらつて、ムラサキは幸せそうに目を細めていた。

(でも、でもね)

時々、尻尾がぱたぱた動いてる。

ボクは、思わず足元のベルを見る。薄く緑がかつた瞳が、じつとボクを見つめ返す。

犬が尻尾を振るのは嬉しい時のサインだけど、猫が尻尾を振るのは、嫌がつていたりストレスを感じていたりする時が多い。

動物の中には、人間に触られるのが嫌いな子もいる。ベルも、どちらかといえばそんな猫だった。何もしないと寄ってくるくせに、ベタベタ触られるのが苦手で、しばらく触っていると液体のように抜け出して、ぬるりとどこかに行つてしまう。

愛理なんて、ベルに構いすぎるあまり、引つ搔かれたり噛み付かれたりしたもんだ。でも、ムラサキはいい子だから、そんなことはしない。

逃げ出したりしないし、引つ搔いたり噛み付いたりすることもない。

ただじつと、そこに人の手がある限り、その手がぬくもりを欲する限り、誰かが触つてあたたかいと言つてくれる限り、ずっとずっと撫でられている。額を撫でられ、頭を

擦り付けて、目を細めている。

だから、撫でられたくてそこにいるのか、撫でてくれる人がいるからそこにいるのか
わからなくなつて、やがて毛がケバケバになつて、撫でられすぎて艶がなくなつて毛が
抜けて、じつとそこに座っているあまり、いつの間にか中身が猫でなくてただのぬいぐ
るみになつてしまつても、撫でている人がその事に気が付いていなくても——ずつとそ
こにいるんだろう。

それでも黒猫が去らないのは、一度その場所を離れてしまえば、もう誰も触りに来て
くれなくなつてしまうのを知っているからだ。

そんな痛みに比べれば、時々毛が抜ける痛みと引き換えに誰かが笑つてくれた方が
ずつといいと、思っているからだ。

ムラサキは、優しい猫だから。毛が禿げてしまうまで、人に応え続けるだろう。

ムラサキは、我儘な猫だから。行かないでつて言えなくて、そこにい続けるしかない。
甘え下手な不器用さも、ボクはねこちゃんに似てるつて思うんだ。

古ぼけたぬいぐるみのような後ろ姿にたまらなくなつて、ボクは黒猫に近寄つた。

魔法でダンボールを出し、そつとその上に被せる。

こうすれば暗い狭い空間で落ち着くだろうと思つただけけど、ダンボールハウスの
入り口から、猫はすぐ出てきてしまつた。

「にゃーん」

「わっ。だ、だめだよ。休んでなきや」

これじゃ意味がない。

思わず後ずさると、ボクのことを歓迎しようとして、猫は人懐っこく鳴きながら足元にやってくる。撫でられようとして、纏わりつきながら体を擦り寄せてくる。でも、これ以上触ったらポロポロの短い毛が禿げて、皮膚が剥き出しになってしまいそうだ。

ボクは困ってしまった。

「ボクなら、大丈夫だから。ボクのことには気にしないで。安心してゆっくりしていいんだよ」

「？」

って言っても、わからないよね。猫だもんね。

言葉が通じていないらしい、きよとんと見上げてくるムラサキを、ベルは少し離れた場所で見守っている。

「そっこだ……」

ボクは黒猫の傍にそっとしゃがんで、普段は背中に封じている天使の翼を、片側だけ出した。

ばさっと音を立てて広げた純白の羽で、ボクは遮るように猫の体を包み込む。

「はい。これでどうかな。ボクは隣にいるから、これなら寂しくないよ」

抜け落ちた小さな羽が舞っている。翼の内側でじつとボクを見上げていたムラサキは、ボクにくつついたまま、欠伸をしてゆっくり伸びをすると丸くなった。

よかった。ボクもお尻を下ろして、その場にすくと座る。ムラサキが寝付くまで離れて見守っていたベルが歩いてきて、その匂いを嗅いでいた。

猫は眠る。満足げに鼻息を鳴らしながら、ただ丸くなって眠っている。

こうなるまで休めないのは、何も変えられないのはなんでだって、みんなが言う。

でも、誰かのためを思っ自分押し殺すことが、誰かのせいにする前に一人で耐え忍ぶことが、ムラサキの生来の性なのなら、ボロボロになつていくその姿を、せめてボクだけは知っていたいと思う。

猫は、傷や病気を隠す生き物だ。そのためにムラサキがつく嘘で、ムラサキ自身が傷付いていたとしても、ボクはその優しい嘘ごと、翼で包み込める人でありたい。

「夜羽くん？ 大丈夫？ どしたの、ぼーっとして」

気が付いたら、レンズの向こう側にムラサキがいた。

もちろん、人間のムラサキだ。青空が広がるコンビニの駐車場で、長いセーターワンピースを着たムラサキは、心配そうにボクの方を伺っている。恵李朱も不思議そうに、目をぱちぱちさせていた。

ボクは心の中で見たことを胸の内にしまいながら、ポツケに虫眼鏡をしまつて首を振った。代わりに、につこりして手を繋いだムラサキを見上げる。

「ボク、サキがねこちゃんになつても、ぬいぐるみになつても、だーい好きだからね！」

「うん……??? な、なんの話？」

「なんでもないっ！」

大丈夫。ムラサキがぬいぐるみになつちやつたら、ボクが……ううん、ボクとみんなで、猫に戻してあげるんだ。

魔法学校のアイリ先生も言つてた。大いなる力を持つ者ほど、周りに助けてもらふこと、支えてくれる存在がいることを忘れないようにしなさいって。あんなに強い魔法使いが言うんだから、間違いないだろう。

ボクだけの力じゃ、きつと足りない。ボクだけでなんとかしてあげたら素敵だな、かつこいいなつて思うけど、それよりもっと大切なのは、サキが安心して笑えるようになること、なんだから。

だから、何度そうなつても、守るんだ。ボクと、みんなの力で。

「ねー、夜羽、夜羽。さつき何してたの（? ）」

先に店に着いていた直生くんたちのところへ駆け出すボクを、興味津々な恵李朱とベルが追いかけてくる足音を聞きながら、ボクは走った。

お前のことが

それは、例によってムラサキの具合が悪く、ぐったりと寝込んでいた時のことだ。「なあああああんて、お前はあんだけ必死で食ってるのにこんなバテるかな……」

薬飲んだか？ 寝る前の白湯の支度は？」

「うう、すみません……」

「別に責めてるわけじゃねーよ……色々工夫はしてんのに、栄養も貯まんねえし、家で掃除機かけただけで必ず熱出すし、気の毒だなんて思ってるだけだ！」

じりつ、と布団から出てスマホを取ろうとする手を、オレはべしつと叩く。

「明日出品するお仕事の書き溜めくらいやらせてよおおお」

「ダ・メ・だ！ 今日さっさと寝る！ わかったな！」

「う……せめて浮かんだネタのメモを」

「お前が一旦ネタだの設定だの書き始めたら、二時間は寝ねーだろうが！」

本人が気に入っているというカーデイガンを引つ被せて、布団にサキを押し込む。

先に敷き布団に座って雑誌を読みながら待ち構えていたヨハネに、かけ布団を二重に被せられたサキは、うぐぐと唸ってオレのことを見上げた。

横では、夜羽と恵李朱が手を取り合つて、S k y のフオークダンスを練習しながら、それを愛理に撮影してもらっている。この愛理はオレの世界にいる年を重ねた愛理じゃなくて、こつちの世界にいる別の愛理。オレの知る愛理よりは若いから、なんとなくダチみたいな関係だ。

「おーい、お前らも寝支度しろよー」

「はーい（? ）」

そんなことを言っていたら、トイレに行くと言つて起き上がる許可をもらったムラサキが、再び布団にもぞもぞと座り、持ち上げた掛け布団の陰からオレにこう問いかけた。「ねー。直生くんはさ、どうしてそんなに私を気遣つてくれるの?」

「ああ!?! なんもん決まつてんだらうが!」

今更すぎて何を言い出すのかと言いたくなる。

ああ、でも、こいつにはずっと伝わってなかったんだっけ。悔しいことに、オレ自身もずっと自覚していなかった、芽生えてなかった気持ち。

だつたら、当たり前のことだつて、ちゃんと言つとくべきだよな。

思いつきり咳払いして、息を吸う。

そんなの、決まっている。お前のことが、大事だからだ。

作者としてのお前を、人としてのお前を、これからは大切にしたいから。

そう、伝えたつもりだったのだが……

ムラサキは、なぜかそれを聞いた直後にびっくりした顔で固まると、布団を鼻の上まで引つ張り上げて、ずるずると後ずさるように潜っていつてしまった。

まあ何であれ、こんな一言ぐらいで大人しく寝る気になつてくれるなら何よりだ、と思ひながら溜息をついたオレは、何やら様子がおかしいことに気付く。

「……ん？」

変なのは、ムラサキだけじゃなかった。その隣にいるヨハネは、啞然としたかと思えばにやついた面でこつちを見ているし、振り返つたら愛理も似たような顔をしている。夜羽と恵李朱は、それぞれびっくりしたようなまん丸な瞳で、動くのを止めオレの方を凝視していた。

相変わらず、ムラサキは布団から顔を出さない。オレ、もしかして掛ける言葉間違えたか？

「……な、なんだよ、お前ら」

「へえ……ふうん、そうかそうか。なるほどね」

「お、おいヨハネ！ 言いたいことあるんならさつさと言えよ！ 気持ち悪いだろうが！」

「愛理」

「りよ。ちよつと待つてね」

ヨハネに目配せされた愛理は、何も言われていないにも関わらず意図を汲んだように、なぜか自分のスマホを親指で弄っている。それからその画面を、ん、とオレの方に向けて再生ボタンを押した。

『そんなん決まつてるだろ！ お前のことが大好きだからだ!!!』

途端、ポリウムを上げてもないのにスピーカーから飛び出して音割れする大絶叫に、考えるより先に指が映像を止めそうになった。オレの手がスマホに届く前に、ひよいとスマホを取り上げた愛理が、満足げに画面を弄っている。さっきからずっとそのボイスばかり連続再生されているせいで、恥ずかしいなんてもんじゃない。

「ふふん。たまたま回してただけなのに、いい画が録れちゃった。なかなか熱烈な告白じゃないか、直生くん。保存保存っ」と

「だ……！ つ、い、今のは！ 大切って言おうとして、言い間違えた、だけで……！」
「く……く……ふふふふ。いつも澄ましてる奴の深層心理が暴かれる様つて痛快だなあ」

背後の布団でヨハネが腹を抱えて笑っているのを、オレはぎつと睨みつけるが、もちろん毛程の効果もない。マジかよ。穴があつたら入りたい。

夜羽と恵李朱も、繰り返し恥辱の映像が再生されるスマホを覗き込みながら、何やら好き勝手なことを言っている。

「直生くん、やるー」

「直生くん、だいたーん」

「おい、やめろお前ら……やめてくれ……頼むから……」

「えー、どうして? (☒?☒) ストレートに言えるってかっけえじゃん」

「たいせつもだいすきも、おんなじ意味だもんね。だから、大丈夫だよ」

「全ツ然大丈夫じゃねえ……っていうか、愛理もそれ流すな! 保存すんな! 消してくれよおおお」

「えー、だめだよ。消したらボクらの踊りも消えちゃう(・ω・)」

「そうだよ。これ後でヒバリと雀愛にも送るのに(☒?☒)」

「だつてさ。諦めるしかないね」

「おいしいiiiiiiii!」

尚更悪いわ!

と言いつけて、オレはさつきから布団に籠りきりのムラサキをばつと振り返った。

もしかして急に大人しくなったのは……と布団を無理やりめくると、ムラサキはほとんど潜つたような状態で、そろつと仰向けの頭を出す。その顔は真っ赤になっていた。

「ご……ごめんね。あのその……まさかそこまで言ってくれると思わなくって」

「ちつ違つ、違えよ誤解だツ! やつ、違わねえけどつ、勢いで言うもんじゃなくてだ

なっ……!」

「う、ううん。勢いでも嬉しいし。その……な、直生くんでもこんな言い間違いするんだあ……って思ったら、お、可笑しくて……っ、ひひっ」

「あああああ! やっぱ笑ってんじやねえかこのバカ! おい! 笑うな! 取り消すぞ!」

何が悲しくて、こんな話仲間内全員に聞かれてなきやいけねえんだ。

とんだ恥晒しになってしまって、オレはムラサキを寝かすこともすっかり忘れたまま、力を入れすぎない程度にぼかすかその肩を叩き続けたのだった。

其は、いにしへの君【MHR×マルメロ家】

其は、いにしへの君【MH×マルメロ家】(1)

ぴちちと、何処かから鳥の囀る声で目が覚めた。

とろとろと微睡みをもたらす睡魔の中で、瞼をあたためる日差しが眩しい。

まだ朝には早いはずだけど……というか、磨りガラスの二重扉を閉めてあるアパートの部屋に、こんな眩しいほど朝日が差し込むなんて、よほど太陽が昇ってからじゃないとあり得ない。

おまけに、なんか体の下がチクチク……ちよつと待つてこれ布団じゃなくない？

思わず体を起こすと、ぶわりと顔面に風が当たって、ここが完全に屋外であることを思い知らされた。

広がった青空と、眼下に広がった大自然。遠くで川や滝が流れているらしい音がどうどうと鳴り響き、岩肌や森、草に覆われた地面や土をならした獣道で囲まれた風景には、現代社会で見慣れたコンクリートの建物など、影も形も見当たらない。

そんな中、樹上のでっぺんの巢のような場所にいる私は、袴着のまま身一つで放り出されていたのだった。

「あ〜〜……えーつと……？」

リアルで着ているパジャマじゃなくて袴姿ということは、今の私は「紫咲」だ。

枯れ草を持ち寄って作られたような巨大な巢に、そつと手をつけて乗り出すと、太い根つこが張られた木の根元まではだいぶ高さがある。ピルの三階くらいはあるかな。

ひよお、と風が袖下を潜り抜ける中、見晴らしのいい場所にいるおかげでそれとなく全方位を観察したが、やっぱり見覚えのある場所のような気がする。

「大社跡……だよなあ……」

ついさつきまで、ヨハネさんが狩猟で駆け回っていたフィールドそのものだ。

訳もわからず、ある日突然カムラの里に魂が転移するようになってしまったヨハネさんが、ハンターとして最初に狩場に行っている場所。

私はそれを、背後から見ているだけのはずだったのに。

物語の創造主としての私・大野紫咲には、普段自分の住んでいる空間にみんなを自由に招くことができる代わりに、ある制約がある。

私自身は、決して元の世界を離れることができない。例外は、S k yの世界に行く時と審神者業を行う時、そしてセブンスコードにログインする時。今のところこの三つだけだ。あれだけ親しくしている直生くんの世界にさえ、私は行ったことがない。

それなのにここに……ということはおそらくこれは夢。

それが物語となるか虚像となるか、まだ真か偽かも判然としない、曖昧な時期に見る夢。

夢の中ならば一定時間、しかもごく短い間しか私は世界に干渉しないから、こうやって本来は行き来の許されない世界にやって来たり、誰かと話したりできることもある。私はこれを勝手に「夢渡り」と呼んでいる。

それはわかったが……

(このままここに居たら私死ぬのでは???)

びゅうびゅう風が吹き抜ける高所から下を、私は覗き込んだ。

里の外側は、歴戦のハンター達でさえ命を落としかねない危険な野生の世界である。武器ひとつ持たない丸腰の人間が格好の餌であるのは間違いない、地図もよくわからない中でモンスターに一度も遭遇せず里まで向かうなど、まず不可能に近い。

こんな高い樹上にまで登ってくるモンスターがいるかはわからないが……下に降りなければある程度安全だろうか。いやどちらにしろ、それじゃあ動けないことに変わりはないんだけど。翼の生えた翼竜みたいな奴だっていたし。

いくら夢だから問題ないとはいえ、私だつて別に進んで死にたくはない。腹ペコのオアシラに手掴みで食い荒らされるのも、イズチの群れにどつき回されるのもごめん

夢よ、なぜ私をここに連れて来た。どう考えても場違いにも程があるだろう。

このひよろい体で武器を持てることは初めから期待していないが、せめて閃光玉とか毒けむり玉くらい持たせといてくれよ……と思いつきながら着物の袂を探っていると、不意に後ろからガサガサツと音がして、私はびくつきながら振り返った。

何かが鳶を登ってくる音がする。そうだった。こんな絶壁に近い高い場所でも、登る場所さえあれば四足獣はいとも容易く上がってくるのだ。何も鳥の巣っぽいからって、本当に鳥の巣だとは限らない。

何かのモンスターの巣だったら一巻の終わりだ。そう思つて身構えるよりも先に、勢いよく獣の頭がひよっこりと下から顔を出した。

「ぼー！」

「わっ！ ……え、あれ、ガルク……？」

私を見てペロりと舌を出した、青い目の大きな獣。見慣れたオレンジの襟巻きっぽい武器には見覚えがある。

しゅたりと器用に巣の上に降り立った垂れ耳の白茶っぽいガルクは、箒の房ほどある尻尾をぶんぶん振つて、私が何か言う前に勢いよくのしかかってきた。どさりと巣の中に押し返され、危うく落ちる勢いだったので文句の一つも言いたくなつたが、顔中ペロペロ舐め回されてもうそれどころではない。

「ばうわうー！」

「わっ、ちよっ、くすぐったいっ！ ひひっ、やめ……くすぐったいってばあ」

顔も首も涎だらけだし、首筋にも背中にも枯れ草が当たってチクチクするしで、もう何が何やら。

容赦なしに舐めまくられて私が笑い転げていると、不意に樹の下の方から指笛の音がして、ガルクはさっと音のした方角に顔を向けた。

「おーい！ 何か見つかったかい？」

「ばうー！」

報告するように、元気よく吠えて尻尾を振ってみせるガルク。

草だらけになった着物で身を起こすと、そこにヨハネさん——この世界にいる、もう一人のヨハネさんの姿がある。

馴染みのカムラの里の装束を纏った、筋骨隆々の女狩人。でもおかしいな。今夜は私の傍で寝てたから、ヨハネさんは今も元の世界で布団の中にいるはずんだけど……。

その隣には、どんぐりの装束にヘルメットを被った、オトモアイルーことベルちゃん
の姿もある。

てことは、やっぱりこのガルクは、いつもヨハネさんのオトモガルクをしている直生くん
だ。直生くんは、この世界では何故か人ではなく動物になってしまっていた。

不思議に思つてもつとよく見ようと顔を出したら、直生くんの隣に私の姿を認めたとその狩人は、少し驚いたような顔で目を丸くした。そりや、こんな巢の上に人間がいたら驚くよね。

「なんてことだ。採集物だけのつもりが、とんでもないものまで見つけてしまったみたいだな」

「ぼうぼう！」

「あはは、どうも……」

「君、そこから下りて来られる？」

「いや無理ですが!？」

「大丈夫。その子の上にしっかり掴まって。落ちたら僕が下で受け止めるから」

「え、ええ……」

既に直生くんは、その横に身を屈めて乗れと言つてくれてるみたいに見える。

意を決して上に跨ると、狼みたいなその体がにゅつと立ち上がった。

どこを掴んだらいいのか、慌てて首周りに抱き付いて毛を驚掴みにすると、直生くんは器用に体を反転させて、来たのとは逆向きに、お尻から蔦を伝つて降りていく。

たしかに優秀な猟犬だが——カムラの里の優秀なハンターは、ひとつ忘れている。

ハンターではないごくごく普通の、しかも普段ろくすっぽ外に出ない引き籠もりに、

90度の絶壁に蟬の如くくつついたまま体重を支える腕力など、あるはずがないということ。ちよつと待ってハンターの人っていつもどこ持ってガルクに乗ってるの???

わからん。

おまけにこの直生くん、ブラッシングが行き届いていてめちやくちや毛がつるつるだ。掴んでも掴んでもよく滑る。

「わひゃあああ」

あとちよつとで地面につく、というところで手が滑って力尽きた体が、重力に従ってあつさりと落ちる。

思わず目をつぶったまま、次の瞬間、どきつという音と共に腕の中に飛び込んでいた。

「……」

「ふう。危ない危ない。よくぞ耐えた。素人にしてはいい乗りこなしじゃないか」

おそるおそる瞳を開けると、左右で色違いの瞳が、私を見て優しげに緩んだ。

今更だが、私の膝裏と背を支える両腕の筋肉の盛り上がりがすごい。うちのヨハネさんだつてお姫様抱っこくらいはできるし、この世界のヨハネさんは修行で鍛えているのだから逞しいのは当たり前だが……なんというか、いざ身近で接すると、安定感が半端ない。腕や脚の太さからして全然違うもん。

後から降りてきた直生くんが、抱えられた私とヨハネさんの周りをくんくん嗅ぎなが

ら歩き回っている。

傾き始めた西陽に照らされる褐色の肌が美しく、私はぼんやり見惚れてしまった。血色のいい肌色に、彫りの深いぱっちりした瞳……紺の頭巾が似合うボブの前髪は艶々として、この世界ならではの独特の味わいがある顔立ちだ。やっぱり、本人とは少し違う。

それでも、長時間見つめていられない顔立ちなんだよなあ……と私はバクバクした心臓を抑え、ろくに目も合わせられないまま慌てて言った。

「つあのあの、ありがとうございませ……」

「大丈夫？ ケガはない？」

「いえ！ 全然大丈夫ですおかげさまで！」

おまけにこの王子様みたいな声。ときめくと言われる方が無理だ。

いくら揺るぎようもない体に抱かれているとはいえ、さすがに長時間私の体重を持たせるのは申し訳ないと思っていると、地面に降ろすのかと思っていたヨハネさんは、そのまま私を持ち上げて、軽々とガルクの前方に押し上げた。

「あ、あの……う！」

「とりあえず、ここに留まり続けるのは危ない。さっき、アオアシラの進路になってるところを見たからね。もうすぐここに戻って来る。その前に移動しよう」

「ガルクって二人乗りできるんですか？」

「君となら問題ないだろう。小さいし」

「小さいって言うな！」

言いながら私の後方に跨るヨハネさんに思わず突っ込んだが、風のように走り出した直生くん置いていかれないよう、鞍の背中にしがみついているのが精一杯で、それどころじゃなくなってしまうた。

「しっかり掴まってるんだよ」

紫色の袴の裾が、なびいて後ろに流れていく。崖から崖に飛び移ったり、崩落した屋根の上に飛び乗ったり、ものすごい速さだ。ガルクに乗ったことのない私にはこれでもロデオみたいに感じるけど、こんなに高い位置や距離を移動している割には、地面にいた時の衝撃も少なく、本当に風が走っているみたいだ。

いくら小柄とはいえ、人二人を乗せているのは大変だろうに、直生くんはヨハネさんとのコミュニケーションもばっちり、勝手知ったるとばかりに楽しそうに地を駆けていく。前に乗っているから、開けた場所や林の間にモンスターの群れがよく見えた。

多分私を拾ってしまったからだろう、時折速度を上げて距離を空けながら、ヨハネさんは上手い具合にモンスターの群れを躲していた。背中に当たる武器に覆われた大柄な体が、頼もしいことこの上ない。

採集ポイントで、弾や薬草となる植物を手早く刈り取っていくヨハネさんを待ちながら、私は尋ねた。

「あの……ごめんさい。狩りの邪魔しちゃってますよね」

「気にするな。どちらにしろ、今日は足りない薬草と夕飯の材料を補充して帰るつもりだったんだ」

厚みのある唇で快活に笑い、ガルクの背に乗ったままで器用に骨塚を漁る。

土を掘り起こすその手つきさえぐつとくるものがあつて、私は飽きずに小手の指先を見つめていた。

「それ、なんですか?」

「んん? これは怪骨だよ。何の骨かはわからないんだが、素材として使うに十分なほど強度があるのと、捻れているのが特徴だね。武器や防具の強化に使われている」

「へえ……あつ、あつちの黄色いのは?」

「あれはヒヤクメマダラ。蝶の一種だ。鱗粉にスタミナ消費を抑える効果があつてね。狩りの時は重宝するよ」

ついつい指差して聞いても、嫌がりもせず答えてくれる。

この世界においてはほぼ物知らずに等しい私を、珍しがる様子も訝しむ様子もない。それどころか、あちこち子供のように指差す私を、微笑ましげに見つめていた。

(てこ)とは……やっぱりヨハネさんなの……?)

流れでここまで来てしまったので、名前すら聞けていないのだが。

でも、気になることはもう一つある。その瞳の色。

ヨハネさんは、セブンスコードにおける特殊能力・コルニアを発動すると左目がピンクに光る。だから、こつちでも左右の目の色が違うんだと思っていた。

でも間近で顔を見てみると……この人は光っているというよりは、どうも生まれつき片方の目の色が違うような、そんな印象だ。右目は青で、左目は赤紫。私の世界にいるヨハネさんは、元々両目が青だ。

まあ、異世界に転移すれば目の色が変わってしまうことくらいあるだろうと軽く考えていたけれど、何かが引っかかって。

時折首を傾げながらも、初めて見る風景と自然の空気に興味津々の私を連れ、ヨハネさんはやがて、鳥居が崩壊したようなエリアの入り口へと、直生くんの足を向けた。

「さて。完全に陽が落ちてしまわないうちに、帰ろうではないか」

尊大で得意げな言い回しに賛同するように、直生くんが颯爽と歩を進める度、かさこそと足元の草が笑う音がする。その側を、ベルちゃんも離れずに着いてくる。

そうして私は、怪我一つ負うことなく、無事にカムラの村まで辿り着いたのだった。

其は、いにしへの君【MH×マルメロ家】(2)

ここまで来ればさすがに夢から覚めるなり、何か聞かれるなりするだろう、と思つたのだが……

次にヨハネさんが私を連れて来たのは、ヨモギちゃんのお団子屋だった。

ハンター達の御用達、うき団子で有名なお茶屋さんである。

「え〜〜〜！ なになにヨハネさん！ 新しい恋人!? それともお嫁さん!」

なんとなく薄々予想はしていたが、並んで私たちが現れるなり、何か面白い情報はなにかと飢えていそうなヨモギちゃんが、目をキラキラさせて尋ねかけてきた。

毛氈を敷いた近くの椅子で団子に舌鼓を打っていた客たちも、興味津々でこつちを見ている。

和装とはいえ、このあたりは機能性の高い格好で動き回っている里人さんが多くて、私のように筒状の女袴で歩いている人は見当たらない。そんな珍しい格好の女を、それもハンターが侍らせているとなればさぞ目立つだろう……と思ひながら、料理の出来上がりを待っていたら。

「そうさ。ついさつきそこで知り合った仲だね。これから深い関係になるつもり」
「ぢよっつっ」

「やだもう、昼間つから惚気ないでよく！　いくら里一のイケメンっていったって、ほんと大胆なんだからヨハネさんって！」

唾然としていたら弁当箱を受け取りながら思いつきりぎゅつと肩を抱き寄せられて、顔から火が出そうになった。野次馬客からも当然の如く大喝采が巻き起こる。

待て待て待て。君そんなタラシキキャラだったか???

恥ずかしいし噴き出しそうだし、修正しようにも何からどう突っ込んだらいいかわからず、ただ隣に抱かれて歩くしかできないでいる間にも、次々村の人たちに声を掛けられる。

「おうおう。新米のうちは女遊びもほどほどにしとけよ、ヨハネ」

「はいはい。やることはちゃんとやってるんだから、私的な時間の使い道くらい大目に見てほしいね」

「やることやってるって、お前の場合はナニやってんだか……」

「あんまり取っ替え引っ替えして、前の女に刺されても知らねえぞ」

「何を言うやら。そんな酷い子は僕の友達にはいないさ。安心し給え」

(おいおい相当なタラシだぞこれ)

思わず呆れて見上げ、ヨモギちゃんの言っていたことを思い出しながら私はニヤついた。

『新しい恋人』ねえ……新しいってことは、古い恋人もいたのかしら？』

「あれ。僕みたいな奴と遊ぶのは嫌い？」

「嫌いじゃないけど、遊びじゃちよつと満足できないわねえ、私の場合」

「ふうん？　これはこれは、意外と欲張りなお嬢様だ」

そんなふざけたやり取りを交えつつ、觀光気分で里の建物や施設を眺めながら歩くこと数分。気が付けば、私はヨハネさんの自宅の前に来ていた。

こんなやり取りをしておいてあっさり家に入るのもアレかもしれないが、これは夢だし、今のところ私はこの人以外とは大きな繋がりもない。

初めての土間に足を踏み入れて、おそろおそろ玄関の襖をくぐり抜けつつ、私は感嘆の声を上げながら家中を見渡した。

「うわあ……でつかい家。すごい」

何かはよくわからないけど、民藝博物館でしかお目にかかれないような、大きな骨の飾りが上の方に飾つてある。木や梁で支えられた天井部も、換気のためか完全には塞がれていないのが、昔ながらの民家つて感じだ。

ガスコンロなんて勿論なくて、土で作った竈には火が灯り、木蓋をされた鉄の釜が煮

炊きされている。平たい丸型の木桶に、洗いたての果物や野菜が水ごと冷やしてあった。

部屋の奥には、杵と臼を使つて順繰りに音を立てる何台もの脱穀機の姿がある。壁に飾つてあるのは、書き込まれた和紙や折り紙の貼られたオトモボードに、木製のがつしりした壁掛けに乗つた大きな武器……その手前には、竜宮城の玉手箱を彷彿とさせるような大きい道具箱もある。

囲炉裏の隣の寝所には、寝巻きだろうか、衣紋掛けに大きな和服が掛かっている。いつも防具でガチガチの人でも、ルームウェアはこんなにカジュアルなのかと思つたら、あまりの生活感にまたときめきが去来して死にそうになり、頭を抱えてしまった。

そんな風に挙動不審で部屋の中をじっくり眺め回していたら、ふと砥石で剣を研ぎながら笑う声がして、私はようやく我に返つた。

「そんなに珍しい?」

「あ……ご、ごめんなさい。人の家なのにじろじろ見て。でもすごく素敵。実際に目にする感動しちゃう。」

「こんなおつきい家に一人で住んでるの? ハンターってお金持ちだねえ」

「この家は、里長さまのご厚意だね。働きに応じて支給品があるんだ」

あまりにも立地がいいところに住んでるからびつくりしたけど、こんな場所に日頃女

の子を連れ込んでたらそりやプライバシーも丸見えだろうなと思う。むしろよくそんな勇氣あるな。

「さて。温かいうちにいただくとするか」

囲炉裏の傍にあぐらをかいて座ったヨハネさんが、先程ヨモギちゃんのお店で買った弁当を出す。私と逢う前に狩ってきた肉や魚を調理してもらっていたようだ。

座布団を勧められて小上がりに適当に座りながら、私は尋ねた。

「あんなおつきい竈で自炊してるの？」

「普段はね。作り置きしても、なくなるのは割とすぐだから」

「大変だねえ……火起こしたり、鍋運んだりするだけで疲れちやいそう」

「そうか？ まあ……たまに狩猟帰りの調理が面倒で弁当を頼むことはあるけどな。何

よりヨモギのところの料理は美味しい」

「そっか」

言いながら、目の前で豪快に骨付き肉を齧り取るヨハネさん。どこぞの海賊王にも負けない、本当にいい食いつぶりだ。見てて楽しいし可愛い。肉の欠片をオトモたちに分けてあげることもしない。

それをほのぼのと眺めている間に、木の葉の包みを広げたヨハネさんは、木の皿に乗せた雪玉くらいの大きさのうさぎ団子を、二串分私の方へ押し出した。

「……うん?」

「それは君のだ。食べ給え」

「えええ?!?!」

ついでにお茶まで淹れてくれている。

とろろり蜜のかかったお団子に、緑色の蒸した草団子、桃の味のお団子……

全部美味しそうだが、私はうさぎの顔が描かれた先頭の一つだけを丁寧に箸で串から落として取り皿に分けると、残りの五つをすつとヨハネさんの方に押し返した。

「はい」

「えっ?!?!」 君、そんなちよつとでいいのか?! 腹が減るぞ」

「いやだって、このお団子一つで私知ってるお団子五つ分くらいあるよ??? なんなら私一個の三分の一くらいで多分お腹いっぱいだよ?」

「少食だなあ。それはよくない。全部栄養満点なんだぞ。少しずつでいいから食べ給え」

そう言うってわざわざ切り分け用の小さな包丁まで渡してくれた。

この世界の団子をナイフで切って食べる人間なんて多分初だろう。なんかごめん。

「そんなに小さいと、食った気がしないなあ。僕からすると湯水を飲むのと一緒だ」

「君は私からすれば食い過ぎだよ?!?!」

あんなモンスターと闘って散策して、腹が減らない方がおかしいだろうから食い過ぎも何もこの世界では当たり前かもしれないが、それにしてもたまに少しくらい早食いせずゆっくり食べたってバチは当たらないと思う。

私があんまりちまちま団子を齧るので、不思議そうな顔をしつつ、目の前の彼女もそれに合わせて一緒に食べてくれていた。いい人だ。

ぱちぱちと炎が燃える音を聞きながら、舌に広がるお団子の甘みを堪能する至福の間。

温かい湯呑みに手をつけ、香りの高い緑茶を一口啜ってから、私は沈黙の中ゆっくり、ゆっくりと息を吐き出して、伏せていた睫毛を上げながら苦笑を浮かべた。

「……あなたは、『私の』ヨハネさんじゃないよね?」

唐突な問い掛けに、黒々とした濃い睫毛の持ち主は、ぱちちりと目を開け。

それから、色の違う双眸を瞬かせた。

「驚いたな。そんなに明らかだっただろうか?」

「だって、声とか喋り方とか全然違うじゃん」

「声はともかく、口調にそこまで差違はないだろ?」

「ヨハネさんは、私を『君』とは呼ばないの。名前か『あんた』って言う。それにまあ……どんなにいい気になっても、女の子を取っ替え引っ替え出来るようなタマじゃないわ。

すつごく不器用なもの、あの子」

「成る程。君達の絆の勝利だったようだ」

はつはと声を上げて笑った偽ヨハネさんは、あつさり認めて湯呑みの茶を煽った。

そう。この子は、ヨハネさんの魂が憑依する前からこの里にいた、“元の体”の持ち主。そしてその人格は、櫛夜翰とは違う。目の前で会って、話して、はつきりした。

「里の人たちもヨハネって呼んでたけど、みんなにはどう説明したの？」

「何、奇妙なことなら時折この世界でも起こるからね。僕も皆も勿論驚いたが、特に害がある訳でもなし。只困ったのは、素人では討伐に於いて役に立たないという事だな。然し幸いにしてこの僕の体だ、本人さえ気炎万丈なら、すり替わっても任せられると思つたのさ」

「じゃあ、里のみんなの方がヨハネさんに合わせてくれるのか……なんか申し訳ないね……」

「気にするな。常に入れ替わっている訳では無い。時々は斯うして僕に戻る。僕も、ハリーターとしては独り立ちを始めた計りの身だからね。幾ら君達より才も経験もあるとは言え、共に学ぶ事は多い」

ふと隣で伸びをする直生くんたちを見て、私は思い至った。

「あれ……じゃあ、この子達も憑依する前はちゃんと別の名前があつたりするの!? 私

は勝手に直生くんとベルちゃんって呼んでたけど!!」

「このガルクの名は、元々は直生すなおと言う。只、少し阿呆な所があつてね。名前の二文字を聞き取つて反応しているのだから……。ベルは、異国語で鈴の意味だろうか？ 僕の親父は交易商人なんだ。飼ひ猫は首に鈴を付ける物だろう。其れから名を取つた」

猫じやらしてベルちゃんど遊んでやりながら、目の前の彼女が答えてくれる。

どうやら奇跡的に、ベルちゃんの名前だけは同じだったようだ……かたや夜羽くん、かたやこの人が付けた名前だけだ。

複雑な面持ちの私を見て、彼女が笑う。

「大丈夫。心配しなくて良い。彼らは体を盗られている間も、自分の意志で夜翰ヨハネに着いて行つてゐる。分かつて応えているんだ。これからも、力強い狩りの供なに成つて呉れるだろう」

「そつか。ならいいんだ。君達が嫌がつてるのに、無理やりなんじゃないかと思つて」「君が思う以上に、僕等ぼくらは君等きみらの事を氣に入つて居るよ。……名を呼ぼうにも、名前すら知らない君をね。只何となく、今日ならば現れて呉れるような氣がして居たんだ」

其は、いにしへの君【MH×マルメロ家】(3)

驚いて、私は顔を上げる。

私を拾っても何も突つ込まず、何も不思議がらなかつた理由が、今わかつた気がした。「私が来るのがわかつてたの?」

「だって、君とはそういう者だろう。物語の創り主としての君は。何時か必ず目の前に現れて呉れると、願って居た」

好奇心の光できらきらと輝きに満ちた、優しい瞳。

既に小手を外していた、筋肉の浮き上がる滑らかで逞しい右腕を、彼女は差し出した。

「^{かんぼ}樺 ^{もね}望寧だ」

「私、大野紫咲」

「ムラサキ。いい名前だね」

「モネも素敵な名前。もしかして絵画から?」

「父は商売上、色んな世界に顔が利く。モネの絵も持ってた。こちらで洋風の絵画は主流にはならないが、父も母も眺めるのが好きなんだ」

豆だらけのガツシリした手が、私の手を握る。今まで流した汗と血を感じる手だっ

た。

その手を握り返しながら、ふと気付く。

(樺……カンバ？ あれ、どこかで聞いたような)

「ところで、紫咲は此方に長居して大丈夫なのかい」

「いや、帰らなきゃ……と思っただけど、帰り方がわからなくて」

ああそれなら、と頷いた望寧ちゃんは、顎で背後の寝所をしゃくつた。

「彼処で寝れば良い。此方の世界で寝れば、彼方では起きる。それ丈だ」

「そんな簡単なことでよかったの?!?!」

思わず膝立ちで突っ込んだ。安直というか、何というか。

「えっ……じゃあ、ここで布団敷いて、あなたの目の前で寝なきゃいけないの……」

「心配するな。寝付くまで傍に居て遣るよ。それに、疲れているだろう」

「うん、まあ、確かに……慣れないことの連続でちよつと疲れたけど」

お腹も膨れたし、程よく眠くなりつつある。

うつらうつらした私の肩をぽんぽんと叩いて、望寧ちゃんは私の体に両腕を差し入れた。初めて私を受け止めてくれた時と、同じように。

寝所に移動すると、袴と帯を解く私を傍に置いて、せつせと布団を敷いてくれる。

「ねえ、望寧ちゃんはさ……」

「ちゃん……君が良いならそれでも良いが、その呼び名は慣れないな……」

「私からすると、望寧ちゃんって感じなんだけどな。じゃあ、望寧はさ、一人暮らし？ お父さんとお母さんはいないの？」

「此処こゝでは一人暮らしだ。幼い頃に、カムラの里にハンター養成目的で預けられてね。

先言さつきつたように親父は交易商人だから、行商で家を空ける事が多いんだ。今は母上と別の場所に住んで居る」

「そう……寂しくない？」

人の匂いがある布団に横たわり、目を擦りながらそう言っていると、望寧ちゃんは意外そうに目をぱちぱちさせて、可笑しそうにふはつと笑った。

「何を今更。これでも良い大人だ。幼い頃から里の皆には良くして貰っているし、寂しくは無いよ。直生すなおもベルも居るしね。……けれど有難う」

枕元にあぐらをかいて座ると、大きな掌でぽふぽふと頭を撫でてくれる。

その撫で加減が気持ち良くて、思わず私は目を閉じた。

寝る前のお伽話のように、無骨な手で頭を撫でながら、望寧ちゃんのお話は続く。傍に寝転んで寄り添ってくれる直生くんの体温が温かい。

「……その昔、一人の男が“おひいさま”を攫った。身分違いの恋だったらしい。何処どこぞのおひいさまか、僕も知りはしなかな。

当然追われて山中を逃げる最中、姫を連れた男は「境目」を越えて了った。此の世と彼の世とを隔てる境目をね。但し辿り着いたのは、彼の世ではなくこの世界だった訳だ。

それが僕の大祖父……曾祖父の話だと伝え聞いている。其れからずっと、此の世界に居着いているそうだ」

「……望寧ちゃんて、もしかして元は私と同じ世界の出身なの？」

「そうかもしれないし、そうとは言えないかもしれない。けれど、若し僕が外の世界に残っていたら、又全く別の人生を歩む事になっただろうな」

あれほどの気骨を感じた声音が、今は染み入る雪のように穏やかに感じる。

空はもう暗くなり、換気窓の外は星が降って来そうなほどの夜だ。

本格的な眠気が襲ってくる前に、何かまだ、聞きたいことがあったような……

「ねえ。ヨハネさんと入れ替わってる間、あなた達はどこにいるの？」

「其れ程長い間では無いから、近くで見守って居るよ。上手く共鳴すれば、同じ体の中で話す事も出来るかもしれない……若しくは彼と同じように、其方の世界の夜輪と入れ替わる事も可能かもしれないな」

「ええっ!? そ、れは……でも私、書こうにもまだちゃんとあなたのこと知らないよ」

「何れだ、何れ。慌てなくて良い」

ふふ、と小さく笑い声が降ってくる。脱穀機の音が、電車のリズムみたいだ。

「そうだ……初めて私を見た時、驚いていたでしょう。私に来るのを、何となくわかって
そうだったのに。それはなぜ？」

うとうとしていたら、ふと前髪を撫でる指先が止まって、屈んだ衣擦れの音がした。
間近に体温が触れて、ふわりと唇が額に当たる。

うつすら瞳を開けると、心地良い薄暗さの中で、特徴的な色の穏やかな瞳と目が合っ
た。

「……紫咲。何故だか解らないが、君は私の母上とよく似ている。だから驚いた」
「望寧ちゃんのお母さん……？」

「写真が手元に無いから、見せられないけどね。若い頃の母上にそっくりだ」
愛し気に細めた目が、情熱と懐かしさを物語っていた。

こんな凄腕のハンターを育てられる親を、欠片でも彷彿とさせる要素が、私の中にあ
るだろうか……。全然想像がつかないけど。

「お母さんもハンターなの？」

「君と同じだ。あの人は武具の扱いは得意じゃないよ。」

親父……父上は腕は立つんだが、闘いよりは唄と踊りが好きな変わり者でね」

「ふうん？」

小さく笑った望寧ちゃんは、すごく優しそうな目をしていた。

「けれど父が、そんな母をどれ程愛して居るか、僕は知って居る。

……案ずるな、紫咲。闘いに身を投じられない者にも、居場所はある。家庭に残り、留守を守る。其方そちらでは古いと言われるのだろうが、これも立派な在り方だ。僕はそう思うよ」

それはまるで、私を見てきたような言葉でありながら、自分にも言い聞かせているようにうで。

熱を帯びた宝石のような瞳をじつと見て、思わず私は心の中の本音を語っていた。

「私、あなたのこともこの世界のこと、本当にほんのちよつとしか見てない。

会ってからこんなに短い時間しか経ってないけど、私あなたのことが好きになりそう。う。

だから、これからもつとつと好きになっていい？」

色違いの瞳が、溢れそうに見開かれている。驚いたような、喜びに満ちたような、照れたような。あどけない子供のような表情だ。

私とヨハネさんが、いつこの世界で力尽きるともわからない。夢のような現のような、長く活動するとも保証できない曖昧な世界で、約束などできない。それでも、そこに逞しく生きる彼女の、普段は豪快に笑い余裕綽々で武器を構え、炎の如く闘志を燃や

す彼女の、寂しいと泣く背中が何故か見えるようで——私は合わせた褐色の掌を、どうしても離したくない。離せなく、なつてしまった。

握り締めた手の指が、そつと絡み合う。熱っぽい瞳が、切なげに私を見た。

「それは……僕と友達に成つて呉れると、そういうことかい？」

「うん。なる。全然なるよ」

「例え、僕が君との間に自然と友愛以上を望んでも？ 其れで誰かを徒いたずらに傷付けるのは、

先の僕を見て良く分かつただろうに」

「好きでやつてるわけじゃないんでしよう？ ……友愛とそうじゃない愛の違いは、私

にはよくわからないよ。でも、空っぽの時に誰かが傍に居て欲しい気持ちはよくわか

る。だから、大丈夫。受け止めるよ。私は」

口ではそんな事を言いながら、鼓動で溢れそうなのを必死で抑えている私に手が触れ

て、そつと顔が近付いた。

さつきは額に触れたふつくらした唇が、今度は優しく口元に降りて、遠慮がちに唇を

啄んでいく。

瞳を開くと、狩猟が失敗してもそんな慌てたりしないだろうというほど赤らんだ顔に

思いがけず遭遇して、私の方が驚いてしまった。

「なんでそんなに……うん、ああ、そつか。お母さんに似てるんだっけ」

「思い出させるなッ！ 僕も先さつき気付いた所なんだ……ッ」

流石に直生くんとは違うだろうけど、お母さん大好きっ子なら、そりやドキドキもしちゃうか。

伝える事を伝え切ってしまって、今度こそ体の力が抜ける。

身を丸めるようにして布団を被ると、染み込んだ体の匂いがした。さつきまで、ガルクに乗ったり近くに引き寄せられたりした時も感じた、彼女の強い汗や体臭の感じ。でもこれは、あの力強い体を持つ人が奏でる匂いで、モンスターを叩き斬ったり鍛錬したり、砂埃に塗れて里や皆のために日々戦っている結晶として、染み付く匂いで。

そう思うとひどく愛おしくて、私はいつまでも、この少し草臥れた布団に包まっていたかった。

「……望寧」

「お休み、紫咲。……良い夢を」

意識が途切れるその瞬間まで、右手は温かかった。

ふつりと、蛍の光が闇に紛れるように、長かった私の夢渡りは終わりを告げた。

気がつくとき、家の布団の上にいた。

先に目を覚ましたヨルクんたちが、隣で二人仲良く転がって待ち構えている。

「おはよう」

「おはよー、ムラサキ」

「それとも、おかえりなさいって言った方がいいのかな？」

「おかえりなさいの方がいいかもね」

お揃いのパジャマで、可愛らしく顔を見合わせてみせる。

「どうやら、私が長い旅をしてきたことは、天使と悪魔にはお見通しのようだ。」

まだ疲れが抜けきらないまま、私は大きくひとつあくびをした。

「ふああ……おはよお、二人とも。どうしてわかったの？」

「だってー、あれボク達先に読んだんだよ」

「すごいや、ムラサキ。ボクわくわくしちゃった」

興奮気味で、机の上に散らばったルーズリーフを指差す。

目を擦りながら、鯨のつけた暖房が効き始める室内で立ち上がり、ゆつくりとそれを手を取った。びっしりと活字で埋まり、さらにはとところどころ手書きのメモで埋められた、A4の紙10枚分。それを書いたのはもちろん自分だが――

「ああ――そうか」

思わず声に出していた。これだったんだ。

何故、夢の中で思い出さなかったのだろう。

ここまで追い求めるのに、構築するのに、答えを出すのに、一週間。

短かったようで長すぎるようにも感じる日々だった。そしてそれは、ここから先にこそ長く長く、線路のように続いていくのだろう。君が、心の内から消えない限り。

眺めているうちにまた飽き足りなくなり、炬燵に潜って朝食を摂るのも忘れながらシャーペンを手を取っていると、もそもそと私の後から起き出したヨハネさんが、眠そうにこつちに歩いて来て肩をつついた。

「ふああ……おはよ。あんた、またそれ？ もう一週間ぐらいずつとやってるよね」

「おはよう。いい加減にご飯食べなきゃねえ」

「ねえ。もうそろそろ、何やってるかボクに教えてくれないんじゃない？」

「うう……む、けれどこれは、どこから喋ればいいのか」

「それも、一週間ずつと言いつつ延びてくるよね。いつもどこか、遠くの世界ばかり見て」

じとつと、若干ヤキモチ気味のヨハネさんがのし掛かってくる。文字通り、異なる世界を観察するのは時間も労力も要るので、最近ろくすっぽ私が相手をできていないせいで、ややおかんむりのようだ。

私は水筒の中の白湯を飲みながら、諦めてため息をついた。

「そう、ねえ……そろそろ纏めて話しておくべきかもしれないわよね」

「何、そんな重大発表なの？」

「重大……と言えば重大発表だし、そうでない人にとっては、本当に何でもないかも」
「引つ張るなあ。余計気になるじゃん」

「わかったわかった。肩も凝ってきたし、順番に落ち着いて話すことにするよ。まずはあつたかいお茶でも用意して」

私は立ち上がり、少しボサつとした寝起きのヨハネさんの頭を撫でてから、ケトルを持って台所に向かった。

其は、いにしへの君【MH×マルメロ家】（4）

「さあ……て。どこから話したもんか」

棗と小姜を入れた中国茶にお湯を注いでくれた紫咲は、干し杏のお菓子である陳皮梅をボクの前に一つ置いて、炬燵に入り小首を傾げた。どれも頂き物らしいが、どこか漢方薬めいた味がするこの干し杏は、体にもいいらしい。

最近のムラサキは、いつもと変わらないながら、ボクにはわからない難しそうな本やら、変な文字の書かれたWebサイトやらを眺めて、よく唸っていた。それが常識の範囲内ならまだしも、たまに夜中の1時とか2時とか睡眠時間を削ってまでタブレットに向かい、風呂に入っただけでも夕飯の支度をしていても、ずーっとどこかの世界に向かって喋り掛けているもんだから、さすがのボクも業を煮やしたくもなる。

しかも、夢の中であいつに会ったって言うんだから、尚更。

まあ、小説家としてのサキにはよくあることなだけだね。

「私が考える世界の成り立ちっていうのは、そう簡単に一から順に話して全部をスッキリ解説できる感じじゃないんだよね。後から付け足したり、変わったたりするし……ユイ

トが言つてたじゃん、音楽は生き物、生命体だつて。それと同じようなもんかな。

だから確定段階になるまで、あまりTwitterとかで話さないようにしてるんだけど」

「それでもいいから、聞かせてみてよ。あんたが一人で抱えてるのも大変そうだし」「そうなのよ。出来上がるまで待つてたら、頭がパンクしそう。」

「そうね……夢は夢。けれどそれは、誰かが語らなければ形にはならないから」

「そう言つて、ムラサキは杏を一口齧つた。」

「ここへ越してくる前の喫茶店で売つていた、緋色の小さなティーカップからお茶を啜つて唇を湿してから、ムラサキは言う。」

「ヨハネさんがモンスターハンターの世界に行き始めてから、あの世界での君が、どうやら君本人ではなく別個の人生を持っているらしいという話は、したよね？」

「ああ……そういえばそういう話だったね。ボクも、薄々そんな気はしてた。体の造りも、全然違うしね。いくら似てても、『異世界のボク』と思うには少し違う気がする。」

「……もしかしてムラサキは、あれが誰かを調べてたの？」

それとなく温湿度計に目をやってからストープの温度を上げ、肩にカーディガンを羽織らせたボクにお礼を言つてから、ムラサキは言った。

外は相変わらずの冬空だ。去年いた場所と違って、天気はいいけどね。

「そう。それでね、安直な発想だけど、多少の違いがあるとはいえ外見的特徴が似るってところから考えて、真つ先に思いつくのは血縁者関係でしょう」

「まあ、血が全てではないけど、遺伝的特徴は無視できないし、納得はするかな」

「それでまあ……さすがに両親とも調べるのはエグい事になりそうだったから、君のお父さん……まあ、私が強いて言うなら君の母親より父親の方が好感持てるからなんだけど、そつちの家族関係図を一部遡ってみたのね。

ざつと六……七代前くらいかな。時代で言うとう江戸末期くらいなんだけど」
 「なんて???'」

途中まではわかったはずなのに、途中で一気にわからなくなつた。

公式でさえ父親の苗字くらいしか出てないのに、この人、江戸時代までボクのルーツを遡つたて言つた???'

眠そうに目を擦つて、ムラサキは炬燵の横にあつたりングファイルを引き寄せる。文字がいつぱいに印刷されたルーズリーフを捲つて、一枚の手書きのページを出す。

そして、顔を上げてボクを見た。

「昨日会つた女の子、かんぼも榊望寧ねつて名前だったんだ。聞き覚えある?」

「!! ……榊つて、もしかして」

「そう。君のお父さん……かんぼいと榊寧人ねいさんは榊家の人だよ。それで」

心臓が、急に早鐘のように鳴り出す。

彼女は、その中にある家系図の名前を下から指差して順に辿った。

「望寧さんは、ここ。生まれは大正4年。

君から遡って四世代目だから、君の高祖母……ひいひいおばあちゃんに当たる人だよ」

「おばあちゃん……あの、人が？」

につこり笑ったサキに、痺れたようにおうむ返しすることしかできない。

けれど、あそこはこの世界とも、ましてやボクの生まれた世界とも違ってて。

そう口にしようとする前に、ムラサキが片手を出した。

「おっと分かつてる。君やお父さんは絶対あそこの生まれじゃないって言うんでしょ。

それについては、昨日望寧ちゃんに聞いた。ひいおじいさんの代から、ひよんなきっかけであの世界に移住してきたって。

だから、私はこう考えてる。『境目』を越えてモンスターハンターの世界へ行つたのが私の会った望寧ちゃん一族で、そこが異なる世界軸の分岐点だったんだ。君に連なる望寧さんは多分、現代日本で生き抜いた樺家の人なんだと思うよ」

手渡された家系図は、その前も後ろも名前が埋めてある。

ぼきぼきと肩を回して鳴らしながら、ムラサキは目の間を揉んだ。

「まったく、大変だったんだよ。君のご先祖様については、一ヶ月以上前から話には聞いてたんだ。頭の中で話し掛けてくるだけで、今んとこ外に出す気はなかった。

でも、モンハン世界の君を知ろうと思った時に、なんとなくそこ繋がりの人なんじゃないかと思つてね。世界観的に。江戸とか明治の生まれの人なら、あの世界にも違和感なく溶け込めそうでしょう。それで纏めようと思つたんだ」

「それで……この紙……」

「うん。けど、その人たちの事を深く知ろうにも、親やきょうだい、娘やそのまた下の代……次々に見ていかないと整合性が取れなくてね。程度の差はあるけど、結局七代全員、一人ずつ顔と名前見て話する羽目になっちゃったよ。生きてる時代も江戸・明治・大正・昭和・平成・令和に跨つてるしさ。もうほんと大変だった」

「そりやそうだろうね?!?!」
 そのただけに毎日色々調べて本読んでたの!?!」
 相変わらず手抜きが下手すぎやしないだろうか。

それでも自信なさげに、ムラサキは首を振つてみせる。

「いや、そんな大したことは。時代背景を知るのに殆どウィキペディアかネットの記事漁つて格闘してただけだから、信憑性はあんまないよ。

あとはこの本買って、国立国会図書館とか国文学研究資料館のページもちよいちよい覗き見たけど……このレベルまで時代考証するのは、一週間じゃどうにもなるはずな

いからねえ、どうしよっかなって感じ。

まさか、大学時代にやったような事を今やるとは思わなかった」

あくびをしながら手渡された分厚い本に、「華族家の女性たち」と書いてある。

なんでこんな本読んでるのかと思つてたけど……まさかボク絡みだったなんて。

文字に目を落としながら、ボクはぼつりと呟いた。

「それで……あんな……」

「どうかした？」

「あの世界にいるもう一人のボクが……モネが、夢に出てきた事があつたんだ」

この話は、ムラサキにはまだしてなかつたと思う。

目を丸くしてばちばちさせるサキの顔を、ボクはじつと見つめた。

ふと、手元に抱いたあつたかいティーカップに、ボクは視線を落とす。

「狩りが全然上手くいかなくて。武器も振つてるのに全然当たらないし、直生たちに助けられてばかりで。このままじゃ、いつまでもハンターとしてはやっていけないんじゃないかって……里の人にも見放されるんじゃないかって、本当はボクを邪魔だと思つてるんじゃないかって思つたら、怖くて動けなくて。」

家の中で蹲つてるうちに、寝ちやつたみたいで……そしたら、変な夢を見た。

夢の中に、ボクが乗り移つてるはずのもう一人のボクが現れて、言うんだ。

『君に、その武器は向いてない』って」

カムラの装束を身に纏ったボクは……モネは、ボクに笑って言った。

『太刀はひいお祖父様の得意武器だったから、僕もそれを習った。

けれど君の振り方は、曾祖父よりは恐らく父に似ているよ』と。

そして、ボクに狩猟笛を手渡したのだ。

『父上は、踊り子を演るのが好きな人でね。まずはそれに慣れると良い。

君も、舞の方が得意だろう。だったらその武器は多分合っている。

自分の持ち味を活かして闘えば良いんだ。刀に慣れるのは、それからでも遅くな

い』

って……そう言ってくれたかな。だからボクは、あの日狩猟笛を選んで……」

「そうか。オサイズチ討伐の裏には、そんなエピソードがあったのね」

ムラサキの瞳が楽しそうに、幸せそうに緩んでいる。

きつと彼女も、何かしらモネに助けられたんだろう。それが、遠縁とはいえボクの血

筋らしいとは、なんとも不思議な気持ちだけだ。

「ああ、そう、それとね。もう一つ、こっちはモンハンに關係ないけど、調べていたら副

次的に面白いことがわかつちやつたんだよね」

「面白(い)ハント?」

ボクが胸のあたたかさに浸っていると、サキが何とはなしにそんな事を言い出した。家系図の中で、ボクがさつき見ていなかった傍系の方へ注意を促す。

「君のおじいちゃん……つまり望寧さんにとつては孫に当たるわけだけど、その人から生まれたのが、寧人さんと人愛さん。二人兄妹だったのね」

「ああ……そういえば叔母さんがいるって聞いたような。小学生の時に親は離婚してたから、あんまり覚えてないけど」

「んで、人愛さんも後に銀行員と結婚されてます。旦那さんの苗字は檀原さん」

「……ちよつと待って」

嫌でも知っている名前が出てきて、体が硬化した。

青ざめているボクに向かって、サキはにやりと口角を上げた。

「それで、人愛さんと檀原さんの間には、子供が生まれた。

長男の英人^{ひでと}くん、次男の唯人^{ゆいと}くん、長女の人羽^{ひとば}ちゃんの三人きようだい。

よかつたね。つまり君とユイトさんは従兄弟同士だ」

「ばっ……?!?!」

あまりの事で、口をパクパクさせるしかできない。息を吸うのを忘れそうだ。

(カ、カシハラが、ボクの従弟だつてえ……!?)

正直、ひいひいおばあちゃんの話題を聞かされるより衝撃だったかもしれない。

完全にボクを置いてけぼりにしたままで、ムラサキは首を捻っていた。

「でも、いとこを全く知らないって最近の家ではあんまりない気がするんだけど。こう言っちゃ何だけど、よっぽど親族関係希薄だったんだねえ」

「父も母も、そういうの鬱陶しがる人だったから……っでも、それにしてもこんな……ッ、ユイトはっ、なんでっ、」

「多分だけど、知ってて黙ってたんじゃない？ あの人。」

だって、セブンスコードの裏の支配者になれば、当然部下の経歴書とか見るでしょ。重役に就く人なら、身边調査とかも入れるかもしれないでしょ？

その時に君との繋がりに気付いてても、私はおかしくないと思うんだけど……」

「だあああああッ、もうッ……!!!」

なんか!!! ものすごく複雑な気分なんだけど!!!

でも……ボクは本当に臆げにしか覚えていないけれど、そういえば昔、まだ父も母も不仲ではなかった頃、家に遊びに来たきようだい数人と一緒に遊んだ記憶が、あるようなないような……今となってはどうでもいいと思っただけに気がした事もなかったけど、まさか、あの中にカシハラがいたなんて。

正直、友達か同僚しか思っただことない。

次に会った時にどんな顔して会えばいいんだ。

うぐぐと肩に力を込めて唸るボクの肩を、ムラサキが優しく叩いた。

「まあまあ。そんな身構えなくても、分かったからって何かが変わるわけじゃなし。こんな事知らなくても、君たちは元々仲良しだったんだから要らない情報かもしれないけど、もっと仲良くなる切欠とか話の種にでもなれば嬉しいなって」

「いや、要らないからそんなん……だいたい仲良しじゃないしっ」

「わかったわかった」

何故だかムラサキは、机に肘をつけて嬉しそうにしている。

まあ、ここまで調べ上げるのは大変だっただろうし、無理もないか……。

改めてボクは、モンハンの世界で撮った直生とベルの写真を眺めた。ボクもサキも、移動しながらのカメラの扱いに全然慣れてないし、そもそもそれどころじゃなくて、自分の写真が全然ないんだけど。

でもたまには、記念撮影ぐらいいいかもな。家に飾れるらしいし。そしたらモネも、ボクがどれだけ狩ったのかって分かるだろう。……倒して里に戻るまでの間に、ちゃんといいアングルを探して、みんなで撮影できるのか疑問だけど。時間が掛かり過ぎてモンスター剥ぎ取りまで丸々忘れちゃったら、モネにまた大笑いされるかもしれない。

『^{しっか}確りし給え。何の為に討伐まで赴いたんだい』って。あいつならそう言いそう。

不意にそんな笑顔が浮かんで、ボクは隣に座っているムラサキをぎゅつと抱きしめて

いた。くつつけた頬が、ふにふにしてあったかい。

「……ありがとう」

「おわわわあ。え、どしたの、どしたの」

「……なんか、嬉しかった。そこまでボクのことを、大事にしてくれて。」

あんたのおかげで、見えるものが沢山あると思つたら……世界は広いんだなって」

「ああ……ううん、私が好き勝手やりたいことやっただけだよ。」

たとえ家族同士だって、嫌いな所もいっぱいあるし、むしろ好きって思える家族なんて、物語くらいにしか存在しないのかもしれないけど。

それでもせめて、君には幸せでいて欲しい。望寧ちゃんはいいい人だよ。きっと先代も、そのまた先代も」

そして、あらゆる縁が繋がるようにと心を砕いてくれるムラサキの、一生懸命な姿が、ボクは好きなんだろうと思う。

こんな小さな背中が、消えてしまいそうなほど細い体が、いつも勇気を与えてくれる。空になったカップを置いて、ボクは大きく伸びをした。

「さて。今夜も一狩り頑張ろうかな」

「ほどほどに、無理せずね」

「それはあんたもだからね？ やる事多いのはわかるけど、たまにはちゃんと休まない

と」

「そうね。望寧ちゃんを見習って、よく食って寝た方がいいかも」

そう言つて、サキは照れたように微笑んでみせる。

そういうえば、ムラサキはモテるから仕方ないけど、夢の話を書く限り、もう一人ライバルが増えたような感じがしなくもない。だって最近のゲーム中、画面越しにボクの“外側”を見つめるサキが、やたらぼーっとなつたり慌てて目を逸らしたりするようになったから。

その理由がやつと今日の話でわかったけど、ボクは若干複雑な気分になる。いや、ゲームしてる間の中身はボクなんだけど、それにしても。

「……負けないからね」

「えっ?」

「たとえおばあちゃんが中身までイケメンでも、ボクは絶対に負けないからっつ」

突然の宣言に目を白黒させるサキの隣に、ボクも無理やり体を割り込ませて炬燵の熱を拝借したのだった。

マルメロ家の日常3

牛乳とビスケット

ムラサキが熱を出した。

まあ、それはいつもの事なんだけれど。

最近仕事を立て込んでしまつてほんの少しの間ボクが目を離れた際に、サキの奴いつの間にかまた勝手な無理をしてペンは執るし、編み物はするし。

その方が本人の気が紛れて良さそうなら放つておくけど、昼食のミルク粥を作つてから、サキはどうとう食欲がないからと横になつてしまつた。

これは由々しき事態だ。サキは胃腸性の症状がある時以外は、体調不良でも滅多に食欲をなくしたりはしない。物を食べる気もなくすほど、それなりに熱が高いようだった。

聞いていれば昨日から薬は飲んでいるらしいが、未だ熱が下がる気配はないと言う。

このまま昼を飛ばしたらどうしようかと思つたが、少し休んだらお腹が空いたと言うので、ボクは冷めたお粥をせっせと食べるサキの様子にやや安心しながらも、食後のサキを問答無用で布団に押し込んだのだった。

「ご飯を食べてしばらくは具合がいいから平気だと、いつもはそのまま起きている事が多いサキはごねるんじゃないかと思ったが、意外にも素直に横になって、携帯をボクに預けた。

ボクは面食らう。

「……素直じゃん」

「ヨハネさんが横にいてくれたら、別に何もいらぬもん」

「おちゃらけてそんな事を言うので、こっちはまた小言の一つも言いたくなつたけど、隣で見守るうちにふつと気がついた。

「多分、いやいや横になっているわけじゃなくて、寝ている事しか出来ないくらいしんどいだけのだろう」と。

そのくらい、表情だけでわかるほどに、サキとの付き合いも長くなってきた。

肩まで布団を掛け直して、ボクは時計を見ながら言った。

「とりあえず、4時半まではゆっくり横になつてること」

「ねむくないよ」

「眠くなくても、横になって目を閉じるの。その方が疲れが取れるでしょ」

「じゃあヨハネさんが何かお話しして」

「ハア？ ……しようがないなあ。むかしむかし、あるところに……」

「……」

「あるところに……えー……」

「いつもヨルクン達に読み聞かせてあげてるお話センスはどうした」

「うるさいなあッ！ あれは子供向けなんだから、あんなのあんたに聞かせたところでしょうがないじゃんッ！」

そんな事を言い合いながらも、横で添い寝をしていれば彼女は大人しいので、時々うつらうつらする彼女の傍で、久しぶりにゆっくり一日を過ごした。

空は、最高の行楽日和とも言える程のいい天気で、サキの部屋の磨りガラスを開け放つと、澄み切った空を穏やかな雲が流れていた。見かけによらず外は極寒の気温だろうが、とにかく太陽は眩しく、陽気に訴えかけてくる。

何が悲しくてこんな綺麗な青空を布団の中から見なければいけないのかという彼女の気持ちも、少しはわかる気がする。

ぼんやりと四角い窓の外を見上げながら、サキが言った。

「みんな、布団が離してくれないとか布団が恋しいとか言うけど、私はお布団あんまり好きじゃないのよね」

「ベッドの方がいいってこと？」

「それもあるけど。寝具っていう場所が好きじゃないの。」

だって、ベッドに入る時って大抵は寝る時か具合が悪い時でしょ。

ここから見えるのってずーっと『病人の景色』なんだもん。

小さい頃から熱が下がるまでずっと出してもらえなくて、寝ててもつまんないししんどいし、不安な気分の時に見えるのって部屋の中とか窓の外だけだし、辛さやしんどさに耐えるのも、気持ち悪いの我慢するのもゲロ吐くのだって、大抵はぜーんぶベッドの上でしょ。

もう悪印象しかない。私にとって布団って辛い時間を耐える場所だもん。

だから嫌なの。横になっただけで脳が『具合悪い』って錯覚起こしそうになっちゃう。昼寝の時だってホントは使いたくないよ」

つまらなさそうに、彼女は唇を尖らせる。

ボクはただ、それを隣で聞いていることしかできない。

「それに、大抵は一日寝てたくらいで具合が良くなったりしないから、良くなるよねって思いながら、一日経っても大した変化が体に起きないとすっごく不安になる。

朝から晩まで同じ格好ですっと我慢してて、やりたい事もなんにもできずに、私だけ一歩も進めずにいるのに、空の色だけはだんだん青からオレンジに変わって、部屋の中がどんどん暗くなっていくのを見るとすごく怖くなる。

動ける時はそんなの気にならないでしょ。でも寝てる時は、ずっと自分が今どんな状

態か、今がいつなのか向き合って考える事しかできない。そのくらいしか考える事ないじゃない？

辛いのに気が紛れないんだもん、寝てる時って。だから嫌いなもの。

それなのに、昼間寝ちやったら夜はまた眠くなくなるしさあ、地獄だよ」

「……でも、しつかり休まないと良くならないよ?」

「わかってるよう。だからこうして、携帯もゲームも我慢して横になってるんでしょ」

ヨハネさんがいないとこんなにもいい子にしないんだから、と頬を膨らませながら、

サキは布団を被ってしまった。

今まで見たこともなかった病人の世界を覗くようで、サキの話は面白くもあるけれど、心配にもなる。

サキはなんでも、それこそ鯨さんと夫婦で暮らしていたって、自分が出来る事はなんでも一人でやってしまう。誰かに甘えていい部分まで「言わなくてもこうして欲しい」なんていう曖昧さではなく、「指示を出すべきこと／出さなくていいこと」で振り分ける。

「指示を出さなくていいこと」に関しては、その苦悩を徹底的に他人に見せない。

でも、ボクだけはそんなサキの傍にいられる。

色んなしんどさを見てしまう。

その度に、大丈夫、と聞いてしまいそうになる一言を、歯を食い縛つてぐつと飲み下す。

何呑気に聞いてるんだ。一番しんどいのはサキじゃないのか。

大丈夫、と問えば、大丈夫、と答えるだろう。

ただそのやり取りだけで、サキは相手の気遣いを失礼なく丁寧を受け止めようと細心の注意を払い、相手を安心させるための表情をどうにか見繕うだろう。

大丈夫だと言つて欲しいだけの、自分を安心させて欲しいだけの声掛けで、ボクは満足したくはなかった。それがひとつもサキの身のためにはならない事を、わかつていたからだ。

けれど、だとしたらどうするべきなのか、それもわからなかった。

ただ、サキが余計な気を遣わなくていいよう、出来るだけ心配の言葉を飲み込んだ。弱っている姿をずっと見られるのも、心配されるのもサキ自身にとって良くないだろうと思つて、夜羽と恵李朱はメイコさんのところに預けておいた。

寝ている間、窓際は寒いし押入れの側は隙間風が寒いと言うので、思い切つて邪魔な机を片付けて、サキの布団を窓からも押入れからも離れた、部屋の真ん中に移動した。隣室の鯨さんは少し出入りがしにくくなるかもしれないが、背に腹は変えられない。

長時間横になり続けて頭痛を起こさないよう、2時間に一度くらいは起こしてトイレ

に行かせ、脱水にならないよう水やお茶も飲ませる。

みかんゼリーが冷蔵庫に残っていたのを食べたいと言うので、布団の上でそれを食べさせてまた寝かせる。

飽きないように途中で音楽くらいは聴いてもいいと許可を出したけど、あれこれボクが世話を焼くのを見て多少感ずるものがあったのか、大丈夫だからとサキはただただ大人しく横になっていた。

夕方近く、少し雑用を終えて枕元に帰ってきたら、サキがうつすら目を開けた。

横になってはいたけど、時々身じろぎしていたので眠ってはいなかっただろう。

布団からはみ出た足が、べったりと汗で湿っている。サキは、体調が悪いと手足によく汗をかく。まだ完全に調子が整ってはいない証拠だ。

そんなサキは、ボクの顔を見るなり「おやつたべたい」と言い出した。それがあまりにも子供然とした我儘だったので、ボクは思わず小さく笑ってしまった。

日の暮れかかった部屋で、サキの頭に手を載せて指先で前髪をかき分ける。窓から空が見えていた方がいいとサキが言うから、ギリギリまで部屋の照明はつけていなかった。

「何がいい?」

「マリービスケットときゅうにゅう」

「いっよ」

そのくらいなら、消化もいいし軽いし丁度いいだろう。

サキが言うのに合わせて、温かな額を軽く撫でると、不意にその手をぱしつと両手で掴まれた。

「どうした？」

「……ん」。

ヨハネさんさあ、私が死ぬ時も、こんな風に看取つてくれる？」

「ちよつ、縁起でもない事言わないでよ」

思わず苦笑すると、ボクの掌の下でサキも照れたように笑っていた。

「だって、いいなあつて。こういふの。」

別に今死ぬわけじゃないし、できたら病氣じゃなくて老衰がいいけど。

でも、私が死ぬ時つて、ヨハネさん私より7つくらい下だからきつとこの世に残るでしよ。

だからさ、私は私は安心して死ぬるじゃん。そんな風に好きな食べ物の話しながら見送つてもらえて」

「わかんないよ？ 7歳差なんて実際何の保証もないんだから。ボクの方が先かも」

「でも、実際の生年に合わせたら、ヨハネさん私とは5、60歳くらい差があるんだよ？」

必要ならヨルクんに若返らせてもらえば、私が死ぬ時君は20代とか30代でいられるじゃない」

そしたら絶対私より長生き、と冗談めかして言いながら、サキは熱っぽい両手でボクの掌をきゅつと握った。

「そんな時の話まで出来るのが、幸せだなあつて思ったの。

実際もしもの時がどんな感じかはさておいて、死ぬ時に傍にいて欲しい人がいるなんて、とても幸せな事。

そうでしょ。君はともかく、私はしわしわのおばあちゃんになっていくばかりなのに、そんな風になつても傍にいてくれようとするなんて、君は本当に愛情深い人なんだなつて」

そう言つて、ボクの手でひんやりした頬を撫でさせる。

この肌に刻まれる皺がどんなに増えても、サキがそんな自分を愛せるように、もちろんボクは、誰よりも傍で愛してみせる。

ていうか、サキが望むんなら、別に一緒に天国に行つてあげてもいいんだけど。

猫のように何度も掌に甘えるサキが身を起こすのを手伝い、ボクはリビングに案内した。

カップで温めた牛乳に、ビスケットをつけてふやかして食べるのが、サキは好きだ。

ビスケットの破片が溶けた、甘い牛乳を飲むのも好きらしい。

森永の丸いビスケットを牛乳に浸し、至福の表情でペろりと平らげたサキは、その後できなこ味の煎餅を一枚、バレンタインにもらったチョコレートを一粒、6Pチーズ型のチーズデザートを1つ食べ、さらにお茶を淹れようとお湯を準備していたら「インスタントの味噌汁が飲みたい」と言い出した。

おかげで準備をするボクはてんでこ舞いだ。

「あれ入れて欲しい。冷凍庫の生姜とネギ」

「わかったわかった」

ムラサキは、さすが体調を崩し慣れているだけあって、こう言う時に自分が適切に食べるべき物は、呆れるほどすら口から出てくる。

まあ、それだけ苦労してきたんだらうけど。よくこんなすぐ思いつくもんだ。

それにしても、ほんのおやつのもりがこんなに食べるなんて、余程食べられずに寝ているしか出来ないのが辛かったんだらう。多少無理してでも休ませたのは正解だった。

食欲が戻った事にほっと胸を撫で下ろしながら、ガツガツと無表情に等しい真剣さで食べ物にがつつくサキを見ていたら、その様子がふと頭の中で何かを彷彿とさせて……

そうだ。

「……『黒ねこのおきやくさま』って絵本知ってる？」

「え。ヨハネさんもその絵本知ってるの？」

「私大好きなやつだよ。小さい頃めっちゃ読んだ。30年後も残ってるんだ」

「そりゃ、不朽の名作だからね」

ボクの時代にも残ってる。

経緯は忘れたけど、ボクも小さい頃に読んだ事があった。

嵐の夜、貧しいおじいさんの家に、ずぶ濡れのやせ細った黒猫が訪ねてくる。

弱々しい装いの猫を中に入れ、おじいさんは自分の残りわずかな瓶のミルクを分けてやったが、ひもじい黒猫は大声で鳴いて食べ物をくれと訴えるものだから、結局おじいさんは翌朝の朝食にする予定だった羊の肉も、何かのスープの出汁くらいにはと取っておいた魚の骨も、家にあつた食べ物という食べ物を、貪り食う黒猫に全部分けてしまう。

更には抱えた黒猫が震えているのを見て、おじいさんは取っておいた残り僅かな薪も、全部黒猫のために暖炉にくべてやった。

翌朝、元氣を取り戻し丸々太つた黒猫は、よく晴れた天気の良い外に走り出て、なんとおじいさんに口を聞いた。

あなたの残り僅かな食べ物も、大事な薪も全部使わせてしまったのに、なぜ私を家の

外に叩き出してしまわなかったのか、と。

あんな嵐の中にお前を追い出すなんてとんでもない、確かに食べ物はなくなつたが、そのおかげでお前はもうやせ細つた猫ではなくなり、毛並みも良くなり見違えたんだからよかつたのだと、おじいさんは何度も猫を撫でてお別れする。

そして空っぽのはずの家に戻つたおじいさんは、ミルク壺の中に濃いたつぷりのミルクが入っているのを見て驚愕する。皿には丸々太つた羊の肉が十分あり、薪がどつきり積まれた暖炉には赤々と火が燃えていた。

その後おじいさんは黒猫に会うことはなかつたが、暖炉に当たりながらうたた寝をする度、傍であの黒猫がゴロゴロと喉を鳴らす音が聞こえるような気がしたそうだ。

……という話だつたはずだ。多分。

ボクももうろ覚えなんだけど。

「で、それがどうかした？」

「今のサキ、あの本に出てくる黒猫そっくり」

「ぶふっ。てことは、ヨハネさんは優しいおじいさんってことね？」

絵本にあつた、黒猫の食べ物への凄まじい飛びつき方を思い出したらしく、サキもげらげら笑い出した。

だって、今の食べ方見てたら本当にそのぐらいお腹が空いてるように見えたし。家の

中に食べ物が無くなるまで、隅から隅までチェックしておじいさんに要求する黒猫の姿を思い出したら、余計に可笑しい。

「そうだよ？ ボクは優しい人間だからね」

「じゃあ、私は出て行かないでそのまま住み着いちゃうかも」

「あーらら、図々しい黒猫」

からかつて言いながら顎を撫でるフリをすると、サキがくすぐったそうに笑う。

よかった。ここまで元気が出たのなら、もう持ち堪えそうだ。

嵐の間、冬の間と言わず、ずっと居ればいい。

こんな安らかな顔を見られるのなら、ミルクだろうとビスケットだろうと惜しくはない。

そんな事を言ったら、きつと甘い飼い主だと言われるんだらうな。

ボクは余談を許さずムラサキの様子に目を配りながら、夜羽たちを呼び戻す算段を考えていた。

甘えん坊としっかり者

熱を出して、二日目。

ヨハネさんが看病してくれたおかげで難を逃れたらしいと昨日は思ったが、どうやらまだ早かったようだ。

寝起きは随分と調子が良く感じたものの、午前中ほんのわずかな時間を布団の外で過ごただけでダウンしてしまったため、あえなく私は布団の中に連れ戻された。

それにしても、いつも熱を出していても日中活動くらいは問題なく出来るというのに、寝ていなきやならない程だとは、今回は頑固な風邪だこと。

しかし、体の感覚的にそうした方が良さそうな気配は十分だったので、ここは大人しく従うことにした。

ここ最近、イラスト制作や執筆や下準備をし、更にはフアンの人のためにもと思い交流活動や各種投稿作品の閲覧、あとはゲームの進捗にも真面目に取り組んできたつもりだったし、体調も去年に比べて大きく崩れた感じはなかった。

ただ、やはり自覚がなくとも、寒い時期を過ごしてきた負担は寒さが緩み始めた頃に押し寄せるものなのかもしれない。極度の眼精疲労から始まり、目が痛くて起き上がれ

ないぞと思つて布団に寝転んだら熱まで出た。そんな感じだ。

しかもまあ、7・4と言われたらこれまではそんなに苦しくはなかったはずだが、何故か今回は異様にしんどい。これじゃワクチンの副反応に引けを取らないレベルだ。熱が出て怠いだけならまだしも、気持ちが悪くて食欲がない。

こんな7度台前半の熱で食欲を失くすほどだったろうか、自分。

と首を傾げたものの、そう病状を報告したらヨハネさんにめっちゃ怒られた。めっちゃ怒られた。

心配してくれてるのはわかるけど、いつもの事と言えばいつもの事だし、そんな怒るほどのことだろうか。

挙げ句の果て、とりあえず完治するまでスマホは時間管理制度で、ヨハネさんが許可するまで触れないし禁止だと言われた。

怒ると言つても病人相手にそんな烈火の如く叱られたわけじゃなかったが、グラグラと煮え立つマグマを隠しているような表情から、これで嫌だと言えば本当にそのぐらい怒り出しそうな気配を感じたので、私は大人しく頷いておいた。知つてる。この子多分キレたらあやめさんぐらい怖い。

本当に怒らせる前に大人しく従つておくが吉だ。ていうか、私も早く治りたいし。

本当は、天気の良いうちにコンビニに行つてバレンタインの絵を印刷したかったけれ

ど、そんなことが許可されるはずもなく。むしろ、この日の午前中が終わらないうちに調子を崩したので、行かなくて大正解だったかもしれない。

私を家から出すなという指令は他の家族にもしつかりヨハネさんから伝令されていたらしく、トイレに行こうと思つて立ち上がり廊下に出ると、なんと玄関にびつちり「KEEP OUT」の黄色いテープが縄の如く貼られ、おなじみの双子がでんとその側に立ちはだかつて門番をしていたものだから笑つてしまった。

「これは……」

「ピピピピピピー（? ）とまれ！どこへ行く！」

「あ……ええと……お手洗いにいきたいんですけど……」

「うむ。とおつてよし（? ）」

「それはいいんだ」

けたたましく笛を鳴らし、小さい槍まで持った恵李朱くんが仰々しく言うど、夜羽くんが握つていたテープの端っこを離した。トイレとお風呂場に続く廊下の道が解除される。

「ていうか、こんな寒いところで遊んでたら二人とも風邪引いちやうよ!」

「だいじようぶ、ムラサキが部屋から出ようとする間だから」

「それでも体に悪いわ！ ほらほら！ 廊下は寒いから部屋に戻つて！ 二人がこんな

ところになくてもお家の外に出たりしないから！ ね！」

「() ⊗ ? ⊗ ()」

疑いの目がイタい。どんだけ信用ないんだ私。

とはいえ、昨日回ってきた閲覧板を、結局寝込んでしまっただけは幾ら体調がアレとはいえ何とかしてしまいたい。

大したお知らせがない事を捲って確認し、日付を書き入れて廊下から出ようとすると、案の定恵李朱くんに止められる。

「ピピピピピピー () ⊗ ? ⊗ () どこへ行く！」

「お隣に閲覧板を……」

「む…… (? ^ ?)」

「ドア開けてすぐお隣だから！ 一瞬で帰ります！ お願い！」

一瞬口をへの字に曲げたエリくんは、ヨルクんに目で合図する。

傍にいたヨルクんががっちゃんどドアノブを下げる。エリくんは厳かに言った。

「許可しよう」

「ありがとうございます大将」

「5・4・3……」

「早い早い早い!!!」

「惠李朱うううう（；；；）閉め出したらムラサキ風邪酷くなっちゃようよ（；；；）」

本当にすぐ横の家だったので閉め出されることは避けられたが、ヨルクくんが半泣きになる程度には、家から極力出すまじというエリくんの本気が感じられたのだった。それにしても、5秒で行って帰って来られる場所はなかなかないと思うけど。

ウオークマンを探し出して充電させてもらう許可をもらったので、布団に寝ている間は主にそれがお供だった。

とはいえ、熱が高い間はそれを聴く気もあまり起こらなかったのだけど。

窓を開け、昼間の日差しを取り入れた部屋でぐったりしていると、最近しばらくモンハン世界に行けていないせいで暇だったのか、望寧ちゃんが様子を見に来た。

頭の上から褐色の掌を私の額に乗せ、不安そうに覗き込んでいる。

「早く良くなって呉れ給え。君は、僕にチョコレートを呉れる約束だっただろう」

「ああ……冷蔵庫に入ってるよ？　って言いたいけど、それ自分で取り出して食べたところで嬉しくはないか。ごめんね、バレンタインにあげるって言ったのに。狩りにも全然行けてないし」

「そんな事はどうだって良い。君が元気になる事が先決だ」

私の頭を撫でてむすつとそう言うと、布団の隣にもぞもぞと潜り込んできた。

すかさず、枕の隣で本を読んでいたヨハネさんが言う。

「ちよつと、望寧。サキは休んでるんだから邪魔しないでよ」

「隣で寝転がるだけだ。それに、僕も少し疲れている」

「大丈夫よ、ヨハネさん。別に邪魔じゃないから」

小さく丸まって私の胸元に頭を擦り付けてくる望寧ちゃんを、ヨハネさんは白けた目で見ている。

私が耳に嵌めたイヤホンとウオークマンを見て、望寧ちゃんは不思議そうに言った。

「その青色の、薄っぺらい小さな箱は何だ？」

「これ？ ウオークマンだよ。音が聴ける装置。この時代の音楽は、望寧ちゃんには余り馴染みがないかもしれないけど」

「ほう……？ レコードやカセットテープとは、随分音質が違っているのだろうな」

なんだか私の耳元に耳をくっつけて音を聞きたそうにしているので、私のイヤホンを片方分けてあげると、楽しそうに聴き入っていた。

が、私が目覚めて退屈そうにしている時以外は、本当に邪魔する気はなかったようで、望寧ちゃんは私にぴったりくっついてくうくう寝息を立てているだけだった。

時々布団を出て水を飲んだり、起き上がったりと、望寧ちゃんもそもそと手探りで私の体を探している。

「う〜〜……?」

「はいはい、ここにいますよ」

「んん……ははうえ……」

寝ぼけて言いながら幸せそうな顔で私にしがみ付いて、また寝息を立て始める。

ハンター生活の時は鳴りを潜めている、子供っぽい表情だ。

普段はがっしりしているはずの頼りがいのある身体が、どうにも小さく見えて、私は思わずその短い黒髪を撫でながら、微笑みを漏らした。

「ふふ。甘えんぼさんだねえ」

「望寧って、サキの前では随分と甘えたがりだね。あつちの世界にいる時は、皆の前とかじゃそんな顔欠片も見せないくせに」

「安心できる相手になれてるのかな。だったら嬉しいんだけど」

「望寧って、母親とは離れて暮らしてるんだっけ」

「そ。小さい頃から離ればなれだから、寂しかったんじゃないかな」

さつき、お昼ご飯の卵がゆを望寧ちゃんに少し分けてあげたら、「母上の味に少し似ているようで……」「早く元気になって呉れ」と涙ぐんでしまったものだから、さすがのヨハネさんも少しびびりつけていたのだ。

預けられた里で立派にハンターとして成長できるくらいだから、元々しっかりし過ぎ

てあんまり誰かに甘えられるような事もなかったんじゃないかと思う。

私の前では随分可愛らしい顔を見せてくれるので、ちよつと嬉しい。

そう言ったら、ヨハネさんは呆れたように小さく息を吐いた。

「サキつてさあ、なんでそう、いつも爆発的に母性を求めてる人間にばつかモテるのかな」

「あはは、昔から良くも悪くも、そういう傾向はあるのかもね……」

「甘えられると、ついつい突き放せなくなっちゃう」

まあ、現実にはそれで損をしたり、苦しくなったりしてきたことも沢山あったけど。

そうやって潰れやすい私を、ヨハネさんはいつも守ろうとしてくれる。

何も言わないけど、凜とした瞳の奥が警戒するように周囲を見回していたり、ふと布団を見下ろして不安げに私の方を見つめたりすると、瞳の色でそれがわかる。

「……ヨハネさんも音楽聴く？」

「あんたが好きな曲だっけ」

「そ。ちよつと古いけどね。私が大学生の時は、いつも聴いてた曲で……」

今じゃiPhoneの容量が余裕で100GBを超えて、それでもダウンロードするアプリによつちや少ないなんて言われる時代だけど、私が大学生の頃から使っているウォークマンは3GBしか曲が入らない。

だから必然、いつも傍に置いておきたい曲が入っている。普段は全然聴かないけれど、いつまでも消したくはない、そんな曲達が。

そんな曲に付随する思ひ出話を、ヨハネさんは飽きずに目を細めて、隣で寝転がって聴いてくれていた。

ただ日が上り、落ちていくだけの時間を、布団の中でじつと丸まって過ごす。

本当に、何もせずに、休むことだけに専念する休み方はほとんど初めてだ。

今まで、体に負担を掛けない程度に起きていようと、目を瞑ってじつとしていようと、大して体力は消耗しないのだから違いはないと思っていた。むしろ、じつとしている方が不安で辛くて、精神衛生上は良くないと思っていた。

でも、今回はそうするしか出来なかったし、何よりヨハネさんが、そうまでして休んで欲しいと望んでいたから、真摯に想ってくれるその気持ちに応えたいと思った。

一人で養生することは、怖かった。療養だと思った自分自身に、その後の体調で何度も裏切られてしまうから。

でも、ヨハネさんと一緒だと不思議と怖くない。それに、去年度重なる病院通いを経て、私はもつと自分を信じるこの大切さを知った。

あれだけ検査して何もないと言われたのだから、私の体だって無能じゃない。機能的に事足りているのだとしたら、足りないのは後は基礎体力と、私の心の落ち着きだけだ。

だから、大丈夫。今までの私が、私を蔑ろにし過ぎたんだ。いつまでも贅沢な暮らしが出来るとは限らないけれど、少なくとも今ここには、使える環境と薬がある。助けてくれる家族がいる。それをもっと自覚しよう。やれる事は全部やろう。きちんと信じてうんと手を掛けてやれば、私は私に伝えてくれるはず。そう思った。

その日の夜は、鯨さんが大好きなミニオンを金曜ロードショーでやっていて、一緒に起きて見たかったけれど、辛さのあまりそれも叶わなかった。ヨルクン達は楽しんでいて、あまりこちらの事を心配させずに済んだ事だけが救いだ。

昼間じつとしていても、夜にはまたそれ以上に熱がぶり返してきて、音楽を聴いているのも辛くなった。私の体は今回の風邪に対して、どうやら徹底抗戦の構えを見せているようだ。夕食後に解熱剤を飲んだはずなのに、熱いし気持ちが悪い。アイマスクなしでは蛍光灯の光が辛くてくらくらする。

もしかしたらずつとこのまま治らないんじゃないのかと、たつた二日目にして折れかかる心で、隣の指先をきゅつと握ると、ひんやりした掌がいつも握り返してくれた。

布団から出たり入ったりしなくていいようにと、ヨハネさんが淹れてくれたアツプルルイボステイの水筒が、枕の傍にはある。暖かいそれを一口飲んで、こんこんと眠る望寧ちゃんの傍にくつつきながら、また耐える。

「サキ。大丈夫だよ」「苦しいね……」「大丈夫」「愛してるよ」「大好きだよ」

静かな言葉が、優しい掌と唇と一緒に額へ降ってくるのを、臃げな意識の中で何度も感じていた。

こまめに着替えをさせてくれたり、お茶や薬を飲ませてくれたり、体を摩ってくれたり、その度に優しいキスで寄り添ってくれたのを、私は知っている。

一番そう言うて欲しいのは、ヨハネさんの方だったろうに。

熱が普段の風邪のそれより高いと見て、ヨハネさんは部屋の隅に置いてあつた熱冷ましートの箱を取つてくると、裏のフィルムをべらりと剥がした。

「しんどいならこれ、貼ろうか」

「寒くなっちゃわないかな……?」

「額だけだし、大丈夫でしょ」

ひんやりと、貼り付けてくれた薄いシートが急激に熱を奪つていく感触があつた。

ものすごい効き目だ。と同時に、3時間近く経つてようやく効いてきたのか、はたまた身体機能が勝利したのか、シートを貼ると同時に急激に体が楽になった。

私は、凍えそうな極寒の季節でも熱に冷却シートは有用だということを初めて知つた。

これは素晴らしい文明の利器だ。ありがとう久光。これからも常備しておこう。

寝汗は風邪の引き始めと同じくらい酷かったが、おかげでやや熱が落ち着いた私は、

比較的ぐっすりみんなの傍で眠ることが出来たのだった。

熱を出して、三日目。

半分剥がれかけた私の熱冷まシートを取ったヨハネさんは、寝起きの私と額を付き合わせるようにして言った。

「具合はどう？」

「めっちゃ元気！」

「そりゃ、寝て起きたんだから元気になったようには感じるでしょ……」

「あはは、そりゃそうか」

「ゆっくり休めたんだらうからよかったけど」

少し呆れたように言って、軽く頭を撫でてくれる。

昨日とおとといは鯨が出張中だったが、今日は週末だし、買い物や弁当の買い出しは頼める分気が楽だ。

まあ、不在の時は不在の時で、誰の足音も気にせず眠れるし一人の分しか食事を作らなくて済んだから、体に優しい暮らしでゆっくり休めたのだけ。

望寧ちゃんはまだまだもぞもぞと寝ていたの、先に起きて朝ごはんに豆サラダ入りの卵焼きを作る。もう短時間なら台所に立つのは大丈夫そうだ。

「まだ油断しないこと」

「はあい」

ヨハネさんに返事をして朝ごはんを食べ、今日も午前中は布団の中でゆっくり過ごすことにする。

まだ怠さはあつて寝ていることしか考えられないが、昨日よりはやはり随分とマシな感じがした。

立つた時の体の感じが、おとといや昨日とは全然違っている。

体調不良は全然ありがたくも嬉しくもないが、この病弱な体で生まれて唯一よかつたと感じることもあるとすれば、病から復帰する度、毎回これ以上なく健康の幸せを感じることができるとだと思ふ。

私などただの風邪が寛解しただけなのに、廊下に出て冬の冷えた新鮮な空気を肺に吸い込み、朝の街を窓の内側から眺めるだけで、まるで自分が世界中から歓迎されるために生まれてきたような、そんな気持ちになれる。

大袈裟どころか嘘みたいと思われるかもしれないが。

いつもいつも健康のありがたみは噛み締めているはずなのに、不調が一つ消えることは私にとって、生まれ変わるにも等しいことなのだ。

結局、このありがたさをいつも忘れて、簡単に壊してしまうのだけだ。

でも、あれだけ必死に看病してくれた人がいるのに、こんな新鮮な喜びを容易く蔑ろにしてしまうのは、本当に申し訳ないな。

そう思いながら、私は養生に努めようと、部屋に戻った。

昼間、鯨さんが買ってきてくれた和食のお弁当を美味しくいただけられる程度には食欲も復活し、ヨハネさんも一安心といった様子だったが、なかなか起きて来ないと思ったら、今度は望寧ちゃんの具合が悪いらしかった。

開口一番、怠そうにして私の分けたお弁当を食べている。

「あつい……」

「ひよつとして、私の風邪移ったんじゃ……」

「いや……ここへ来る前から、少し疲れているだけなんだと思ったんだが……君のせいじゃない」

「まあ、とにかく望寧ちゃんもゆつくり休んだ方がいいね」

見舞いに来た側が見舞われている状況に、ヨハネさんは言うまでもなく呆れていたみたいだったが、午後から再度私と一緒に横になった望寧ちゃんは、そんなヨハネさんに言い返す余裕もなく、ぐすぐすと駄々っ子になって私にしがみ付いていた。

私は昨日で峠を越えてしまっていたが、他人の病状に関しては、優しくその背中をさすって抱き締めてあげることぐらいしかできない。

「あつい……きもちわるい……やだあ……」

「うんうん。気持ち悪いのやだねえ」

「なあ、君本当にこんなの耐えて平気な顔してたのか!? 信じられない位辛いんだが!」

「いや、私だって別に平気な顔はしてなかったと思うけど……」

「なんだか望寧ちゃんには、余裕で耐えているように見えたらしい。」

「まあ、程度としては微熱だと思うけど、実際私もかなりしんどかったわけだし、こんなの人によつて感じ方は違うしね。」

「ハンターとして普段びんぴんしすぎているせいであんまり体調不良に耐性がないのか、かなりしおらしい顔で望寧ちゃんは私の布団にくるまっていた。」

「私よりはよっぽど毒とか状態異常とか食らってるはずだけど、それより普通の風邪の方がしんどいんだろうか。謎だ。」

「ちよつと可哀想になつて頭を撫でていると、私にべつたり頬をくつつけて甘えたまま望寧ちゃんが言った。」

「ムウは、姉か母親みたいだな。傍にしていると安心する」

「えー、そーお? そういえば望寧ちゃん一人っ子だったもんね」

「何と言うか……歳上で、甘えた顔を出来る人間が、私にはあまり居なかった。」

「里には友人が多いし、ヒノエやミノトも優しかったが……」

「……甘えるにはちよつと恥ずかしかった？」

そう尋ねると、膨れつ面になって頷く。

最近私をあだ名で呼ぶようになった望寧ちゃんは、ひつついたままか細い声で言った。

「……ムウは、何処にも行かないで呉れるか？」

濡れた睫毛でそんな風に言うものだから、少し面食らってしまった。

それは、今の世界の彼女の心か、もしくは前世の彼女の記憶がそうさせているのか。いずれにせよ、推し量れない孤独を埋めるように、私は火照った体を抱き返した。

「大丈夫だよ。私は居られる限りは、ずっとここに居るから」

「……本当に？」

「うーん、どうやったら約束できるかわからないけど、約束できたって望寧が思うまで、ずっと一緒にいるよ。ね」

名前を呼んでから頭上を見上げれば、覗き込んでいたヨルクン達がこくこくと頷いた。

この子達とも、もう一年余り一緒にいる。

隣で黙々とページを捲っているヨハネさんも、多分話だけは聞いているだろう。

みんな一人がイヤで、ここに来た。ここにいる全員に血の繋がりは無いけれど、ここ

にいる子も、それにいない子も、いつでも好きに帰って来られるように、好きだけ居られるように、私はこの場所を作ったのだ。

どんなに都合が良過ぎると言われても、それが私にとつての幸せだから。

そう伝えると、望寧ちゃんは安心したように、私の隣でこてんと漸く眠りに落ちた。

「望寧ちゃん、甘えんぼだね」

「起こさないように静かにしてようか」

頭をなでなでするヨルクんとエリくんにまでそう言われていて、ちよつと笑つてしまった。

でもまあ、この家に現れた人間としては二人の方が先輩だろうから、それも無理ないのかもしれない。

おやつの中には、食欲も昨日よりぐんと出て、私が美味しいと言ったアップルルイボステイーをヨハネさんはまた準備してくれた。さっぱりとした甘い香りのお茶が、母の送ってくれたエディブルフラワーとアイシングのクッキーによく合う。

食べられる花のクッキーは目で愛でるのも楽しく、風邪のおやつにするのは勿体無いなあと思ひながら、4枚のうち2枚は残しておくつもりだったのに、結局4枚全部をぺろりと食べてしまった。

そして、おやつを食べる前に一度ヨハネさんに体温計を渡されて熱を計ったが、汗を

かいた直後とはいえ、なんと6・9度にまで下がっていたため、遅れて見舞いに馳せ参じた愛理をかなり仰天させていた。

「まだ半分寛解とはいえ、7・4度も出しといて3日で下がるなんて新記録だぞ!!? ヨハネ何やったの!?!」

「別に? 治るまではボクが許可した時間以外スマホ取り上げて、親にも友人にもどこにも連絡させなかったし何もさせなかっただけだよ」

「そこだけ聞いてると束縛のヤバイ彼氏なんだけどなあ……」

クツキーを頬張る私の隣で、澄ました顔をしてお茶を啜るヨハネさんを見て、愛理は思わず大苦笑だ。

そんな愛理の前で、顔を見合わせた恵李朱くと夜羽くんは、次々に言った。

「ヨハネ、いっぱいなでなでした (⊠? ⊠)」

「いっばいちゅーしてた (⊠? ⊠)」

「こつ、こらあ!」

告げ口されて怒るヨハネさんを前に、愛理が楽しげに肩を揺らす。

「なるほど。愛の薬の力ってわけね」

「いや、実際彼の献身振りはなかなかの物だったぞ。僕でも手本にしたい位だ」

そう言って愛理に合流した望寧ちゃんは、なんと夜まで一眠りした頃にはすっかり熱

が下がっていたのだった。恐るべき回復力。

いつも通りの堂々とした立ち居振る舞いを取り戻して、あの布団の中の気弱な姿は欠片も見当たらない。

やっぱりあれは弱っている時限定か……と思いつながら、私は遠い目になった。

「望寧ちゃんはこんなにすぐ熱が下がるのに、なんで私は三日も四日も寝てまだ完治しないんだ……」

「望寧の体は規格外なんだから比べたらダメだよ」

「そうだ。寧ろ愛理の言葉に拠れば、君、早く回復した方なんだろう？ しっかり養生し給えよ」

まるでさつきまでの弱り様を忘れているんじゃないかというくらいに泰然さだった。望寧ちゃんは少し照れたように笑みを浮かべると、お礼をするように、小さく私の頭を抱いて頬にキスを落とした。

「それじゃ、また。ムウ、次に会う時はチョコレイトを忘れないで呉れよ」

大正生まれなら、チョコレイトはまだそこまで入手困難という訳でもなかったろうに、私がスーパーで買ったたかが200円の市販のチョコを、相当楽しみにしてくれているらしかった。

鼻歌を歌いそうな勢いで元の世界に帰っていく望寧ちゃんを見て、愛理が私に言う。

「相変わらずモテるねえ」

「いやまあ、モテ……に入るのか、これは？　みんな優しくして、有難い限りだけど」

「それにしても、結構厄介な熱出したって聞いてたから心配してたけど、よかったね、早めに落ち着いたみたいで。ヨハネはほんとに、看病要員として優秀みたいだ。僕以上だよ」

愛理に素直にそう褒められて不意打ちを食らい、若干照れ臭かったのか、ヨハネさんは思わぬ褒め言葉だと言わん限りに、若干目を逸らして赤くなった顔で言った。

「あとは多分、純粹にムラサキの治癒力が上がってきてる……んだと思う。」

この間、ムラサキの体重計ったら、39.5に増えてたんだ。

多分だけど、熱を出す体力が上がった分、治るのも早くなっただんじやないかな。

ほんの少しだけど、風邪ひいてる時以外も、調子が悪い時からの復帰が、前よりも早くなっただような気がして……

ま、今回でまた少し減っただろうから、せつせと食べさせないとだけど」

「なるほどね」

夕方、起き上がってアニメを見ることができるようになった。回復した私の隣で、二人はまだそんな風に何か話しているようだった。

今晚は、買ってきてもらった食材もあるし、夕飯の準備は作り置きのおかげで楽に終

わりそうだ。

やっぱり普段からの家事の積み重ねって大事だな、と思いながら、私は今晚も自分を労って早めに寝れるようにと、気合いを入れ直し台所に立った。

金の牢、銀の鎖

サキが熱を出して四日目のこと。

まだ熱が下がり切っていないとはいえ、随分と体が楽になって身も心も元氣を取り戻したのか、サキは布団の中でうずうずし始めるようになった。

眠くないならせめて横になって目を瞑っていると云ったのに、もう爛々と目を輝かせて、変わり映えのない窓の雪景色をきよきよと眺めている。

まあ、もう寝込んで四日だ。

夜も早めに寝てしまうし、いつも家で何かしらの活動をしているムラサキには、もうそろそろ飽きてくるころだろう。とはいえ、ここで油断してウロチヨロさせるわけにもいかない。

体力の回復を喜ばしく思いつつ、ボクはあまりそれを表情に出さないよう意識しながら、イヤホンを差し出した。あまりこつちが手放して喜ぶと、もう布団から出て何かするとか言い出すからな。

「ほら。音楽だったら聴いてていいから」

「ひまだよお」

「隣で喋り相手になつてやつてるだろ？」

「そうだけど、ヨハネさんと喋つたらいっぱいやりたい事出てきちゃう。」

早く可愛いヨハネさんをいっぱい描きたいし、お話の続きも書きたいし、編み物とか本読んだりしたい」

「気持ちわかるけど、もうちよつとだけ我慢して」

「このまんまだと、お布団の中でおうた歌っちゃう」

「そんなことお父さんゆるしませんよ」

ふざけてそう言うと、案の定ケタケタと笑い出すムラサキ。

ああ、でも、よかった。

こんな風に笑うほど元気になったのかと、ここ数日のしんどそうな表情を傍で目にし続けてきたボクは、随分とホツとさせられる。

思わず掌で優しく頭を撫でると、前髪の下からサキが見上げてきた。

「ねえねえ、今日はお風呂で頭洗っていい？ いいでしょ？」

「そうだね……その元気があれば大丈夫かな。」

湯冷めしないって約束するなら入って洗っていいよ。頭洗って、温まったらすぐ上がって、お風呂上がりにちゃんと髪を乾かすなら、ね」

「約束する」

「なら、よし」

「やったー。一日洗わなかったらもう汗でべたべただよ。早く洗いたいなー」

「ごろんごろん布団を転がり回ってから、彼女は大人しく丸くなった。

「ゆつくりする」とは言っても、人間とは起きて座っていたり、体を動かさずに作業をしているだけで消耗するものだ。

確かにゲームとか執筆とか読書とか、走ったり動いたりするより楽にできることではあるけれど、それでも無自覚に疲れを溜めてしまうサキを、ボクは放っておくことはできない。

だからこそ生活に普段以上に厳しい制限を課したりもしたけれど、サキは反抗することなく大人しくしていた。

本当は、ちよつとだけ心配だった。手出し口出ししてうるさい奴だと思われるんじゃないかと。彼女自身、家族に過保護にされるのはまっぴらごめんみたいだったし、分かっていることを何度も言われたりしたら嫌になるんじゃないかと思つた。

けれど、むしろこうして管理されていることに、サキは嬉しそうな顔すらしてみせる。こんな風にサキのことを見つめている人は、いるけどいない。

鯨さんは、サキのパートナーではあるけど、普段の自分の仕事や生活の領域を出てまで、相手のことを助けることはできない。

遠方の家族や友人は、サキの状況を知らないし、サキ自身がきつと積極的に知らせたいとは思わない。

何故かボクの前でだけは、サキは大人しく頭を垂れ、勸んで鎖に繋がれる。

安全に守られた牢の中に居りたがり、自分から監禁されることを楽しんでいる。

……ように見える。そんな様子を、少しだけ嬉しいと思ってしまうのは、さすがにボクの独占欲が行き過ぎてしまっているんだらうか。

「……いや、だいぶ行き過ぎでしょ、それ」

ボクにそう言いながらも苦笑したのは、眠ったサキを寝室に置いて、リビングの炬燵で一緒に話をしていたアイリだった。

だからと言って何かを忠告するでもなく、純粹に驚きを表したアイリは、サキの足元の方で布団を繋げて眠っている夜羽と恵李朱の頭を撫でていた。

「あんただって、昔から結構サキには入れ込んでたつて話じゃん」

「そうなんだけどさあ。僕のはこう、相手を管理しようつてところまでは行かないというか。相手を自由にする分、自分がそっけないのもある程度許して欲しいし。」

まあ、そのへんのバランスが取れてたら、あやめとも今頃うまくいつてたのかもしれないけど?」

現実にはうまくいかないものだ、なんて、それこそサキもよく言ってることだけだ。

アイリは、そういう「うまくいかなさ」を背負った存在なのかもしれない。

社会人としてのリアルを生きているアイリは、ある意味現実離れた生活を送っているサキとは、今は少し距離ができてしまったみたいだけど、それでもこうして時々遊びに来る。

酒を飲んでいられるわけでもあるまいに、ガラスのコップのほうじ茶をウイスキーのように片手で揺らしたアイリは、にやりと頬を緩めた。

この感じ、セブンスコードのバーで飲んだ頃をよく思い出すな。

「そんなにサキのことが気に入った？」

「気に入ったっていうか……」

単純に、なんかもう姿を見ていないと落ち着かないのだ。

一度サキの「消失」を経験しているから余計にかもしれないけど、そうでなくても、SOATにいる時やプライベートの間中、しょっちゅうサキはボクの視界に入っていた。

別に好きでそうしているわけじゃないと思っていたのに、気がつくと傍にいたり前みたいになっていた。

「傍にいて……できれば、快適な暮らしをして欲しいだろ。」

ボクの横にいて不機嫌な顔されるなんて、そっちの方が御免だよ」

「ふふ、素直じゃないなあ、相変わらず。」

あんまり相手に幻想を抱くと苦勞するよ？ 僕が言うのも何だけど。

衝突する時に離れられないっていうのは、結構苦しいもんだ。もし君が、恋焦がれる相手を神様か何かのように信仰しているのだとしたら、いずれは幻滅を強いられることになるぞ。

僕からすれば不思議だね。君が言うほど相手を好きにならずにいれば、嫌な面を知りスクなんて取らないでいられるのに」

アイリは皮肉めいた表情で言うけど、そんな損得勘定で人の感情を切り捨てるなんて、無理じゃないだろうか。

ボクだって、昔はそれができると思っていた。

感情に流されずに動くこと。一時の迷いに動かされずに、長い目で見て判断すること。

けれど、実際はそのすべてを飛び越えてしまった。

とりあえずやってみて、やってから考えた。

ダメだ、無理だつて思つても、行き止まりに当たつても、繋いでいる掌さえ離さなければ、なんとかなるつて思つてきた。

アイリの言う通り、確かにそれでなんとかならない人間関係つていうのも、世の中にはあるのかもしれない。別にそこで無理をすることが美德だとまでは思わない。

けれど「なんとかしなくちゃ」って想いを持ち続けること自体は、別に無駄なことなんかじゃないと思う。

「ムラサキは、よく出来た人間なんかじゃない。

人を泣かせもするし、傷付けもする。完璧からはいつだって程遠い。

それでもボクは、彼女が好きだ」

目を見てまっすぐに答えると、アイリは少し驚いたような顔をする。

今度は、ボクの方が自嘲的な笑みを漏らす番だった。

「たしかに、自分や相手を正しいって思うのも、盲目的になるのも危険かも。あんたの言う通り。」

それを冷静に見れてるアイリは、やっぱりすごいんだって思うよ。……大人なんだろうね」

「いやいや。僕は……大人になっても、君みたいなまっすぐさを、とても持てないから。ちよつと捻くれてて、それで利口ぶつた顔をしてるだけだよ」

「利口なのは、別に悪いことじゃない。その方が要領はいんじゃない？」

それでも……どんなに合理的じゃないって言われても、ボクはボクなりにサキを愛する以外のことなんて、きつとできない。

もしサキのためになるんなら、たとえどんなに憎まれようと引かれようと、幾らでも

監禁するし足枷で繋いでもおくさ」

目を丸くした表情で、アイリはコップを置いてボクを向かい側から見た。

「すごい自信だね。彼女のためになるって思ってるのは自分だけで、本当はそうなる保証もないの？」

「今回みたいな場合、ボクは彼女が自分では出来ないことの代わりをしているに過ぎないもの。」

まあ、彼女と密にコミュニケーション取れてるのが前提にはなるけどね」

開き直りの末にさらりとそう言っ、賑やかしにコルニアで炬燵の上にキャンドルを灯すと、アイリの青い瞳にオレンジの灯りがちらちらと映り込んだ。

俯き、考え込むような表情で、アイリは片側のボブを耳に掛けた。

「すごいね。ボクはそこまで自信が持てなかった。だからムラサキとも距離を置いたし……あやめとも」

「真摯に相手を愛すれば済むことだろ？」

「愛だけじゃどうにもならない事もあるんだよ。気まぐれな人間がずっと傍にいて、ずっと相手を好きでいるなんてできない。」

それに……さつきも言ったけど、恋が見せる幻想って、冷めちゃったら結構キツイところもあるよっ。」

「だったら、永遠に燃え上がり続けてればいい」

そう言ったら、キャンドルを吹き消しそうな勢いでアイリが噴き出した。

何が面白かったのかわからないけど、ひとしきりケラケラと笑った後で、オレンジの炎越しにボクに言う。

「双方燃え上がってるうちはいいかもしれないけど、そうじゃなくなっても今の愛を持ち続けるって言える？」

「だって、サキが一生懸命、生きているのがわかるから……彼女は、自分がそれなりの苦労や努力をしなきゃ、愛される資格はないって思ってるから。」

「そうやって頑張ってるところを『視て』ないわけにはいかないだろ」

「じゃあ、彼女が頑張れなくなったら、ヨハネはサキを愛さなくなるといふこと？」

アイリがそう聞くから、ボクは首を振った。その拍子に、左耳の飾りが揺れる。

「そうは言っていないけど。どんな彼女だって、彼女は彼女だ。」

それを伝えるために、彼女に自分自身を受け入れてもらうために、ボクがいるんだ。

人生幾らでも、酷い日だって顔を上げられない時だってある。そんな時に、彼女に自分を無価値な人間だって思ってた欲しくない」

ボクは、サキの代わりにお金を稼いでくることもできなければ、セブンスコードの財をこつちでサキに与えることもできない。

サキの世界の中以外では実体を持たないし、物理的にサキの実生活に介入することも、何かを手助けすることもできず、それこそ「リアル」には何の役にも立たない。

もしこの先、ムラサキの身に何かがあつたとしても、直接的にサキを幸せにし、サキの命を救うような手段をボクやみんなは何一つ持たず……お金や時間を掛けてもらうことこそあれ、返すことは何ひとつできない。そういう存在だ。

それでも、ボクはボクの闘いをする。

体がなくて、お金がなくて、だからこそできることがある。

いつでもどこでも、彼女の心に存在すること。

自分自身の生活があつても、理屈や次元を超えて彼女の傍に駆け付けられること。

息を引き取るその瞬間まで、隣で手を握っていること。

そして、何があつても、彼女の味方でいられること。

ふくつと息を吐いて、ボクはふと手元の本を捲った。

「……古語で、結婚することを『見ゆ』って言うの知ってる?」

ああ、と打てば響くようにアイリが頷きを返す。

「昔は、男女が面と向かつて顔を見るのはタブーだったからね。御簾越しの顔も知らない相手に恋心を募らせるなんて、ロマンチックなものさ。それがどうかした?」

「だから……」。

せめてボクだけは、ムラサキの事を『視て』いたって、そう思ったんだ」
何もできない存在でも。

本当には、リアルにいない存在でも。

ぽつりとそう漏らすと、一瞬の間の後にアイリが言った。

「もしかして、真柴先生の小説読んだ？」

「サキが寝込んでる間、押し入れにあつた本を少しね。あれにあつた言葉そのまんま、受け売りだけど」

「いいよね。僕も昔結構読んでさ、あやめと記念館に行った時にサイン貰ってきたりしたよ。懐かしいなあ」

目を細めてそう言うってから、アイリは肘をつきながらボクの方を見つめた。

「そうか。ヨハネにとつては、そういうことなんだね。」

誰かを、誰かの人生を、愛するということは」

「わかんないけど。愛がわかんなくなっても、『視て』いることはできるでしょ。」

バカみたいだけど、本当にそう思うんだ。別にいいじゃないか。見えるうちは同じ幻想をいくらでも一緒に視ていればいい。

そうじゃなくなつた時は、その『形』が変わるだけで、別に愛がなくなるわけじゃない。

たとえ嫌いになっても、それも全部愛だ。また嫌いじゃなくなるまで、ずっとずっと視てればいい」

ゆっくりと呼吸をして、瞳を開いた瞬間、部屋いっぱい反響する優しい灯りが、この目に映る。その光は穏やかで、冬の夜の寒さと寂しさをゆっくりと溶かしていくように、部屋を揺らし続けている。

「だからできるだけ、この目で視ていたい。」

それで、必ずあんたには生きる価値があるって、証明してみせる」

「それ、サキの前で言いなよ……」

「直接言うには、なんか恥ずかしいでしょ」

「今更何を言うんだか」

「そこまで言ったらプロポーズと一緒にだよ、と苦笑するアイリに、ボクは胸を張ってみせる。」

「まあ、ボクはサキがお腹いっぱいって言うくらい、愛し続けるつもりだけどね？」

「……それに、ボクがあんたに勝てるのなんて、それくらいだろ」

「勝てる？ 何の話？」

「ボクがどう逆立ちしたところで、一緒にいた年数はあんたに勝てないんだから」

「聞こえないぐらいの小さい声で言っただけだ、もちろんしっかり聞こえて

いたらしく、アイリは不意を突かれたように笑い出した。

ちよつと呆れたような表情が、こういう時にアイリを妙に大人びた顔にさせる。

「そこ気にしてたわけ？」

「別に勝ち負けじゃないけどさ。でも多少は気にするでしょ。サキのこれまでの人生の時間に、ボクがいなかったのはちよつとぴり悔しい。

……でも、彼女を愛してる気持ちだけは、絶対に誰にも負けないから」

ぐつと目に力を込めると、ボクよりも小柄なアイリは、もはや言葉もないと言ったような様子で、唇に軽く笑みを浮かべている。

「……どうかした？」

「いや……さつきも言ったけど、ヨハネの自信があまりに凄いから、ちよつと呆れてたところ。さすが、『傲慢の審判』に選ばれただけのことはあるね？」

「ちよつと、それメタい発言なんだからやめてよね。あんたは、捕縛の時にはセブンスコードから弾かれちゃってログインできなかつたって設定なんだから」

「おつと、そうだったそうだった」

指を鳴らしたアイリの傍で、ボクはマグカップに残ったお茶を啜る。

「それに……こうなれたのは、直生がいてくれたから、だと、思う。」

直生なら多分、ボクに同じことを、言うと思うから」

アイリは素直じゃないってボクに言うけど、素直になれなさで言えば直生の前にいる時の方がよっぽど酷い。

それでも何とかやっていけているのは、お互いの感情に信頼があるからなんだろう。人生に一度も二度も全身全霊で人を好きになる機会に恵まれるなんて、ボクはとんでもない贅沢者なのかもしれない。

「そうか……支え合える相手がいるってのは、いいことだね」

「あんたもさ。支えが要る時は、無理しないでよね。」

ボクも、夜羽も……住んでる世界は違うかもしれないけど、ちゃんと視てるから「あはは、ありがと。光栄だよ」

恋人とか、パートナーの有無は関係ない。

たまたま、依存関係如何によってそういう名前がつくこともあるけど、そうじゃなくても思い出すと頑張れる相手っていうのは、いくら居たって悪いもんじゃないし。

また何かの機に話を聞かせてくれることを約束して、ボクらは解散したのだった。

そして、次の日。

どうにか平熱の範囲内まで落ち着いたサキを前に、ボクは今度こそ安堵して家事の様子を見守っていた。

まだ多少ふらふらしていて体力が戻るまでに時間は掛かるだろうし、油断は禁物だけど、これでもう付きつきりで様子を見ている必要はなくなりそうだ。

ずっと一緒にいたいけど、ボクも週明けには仕事とかレッスンに復帰しないとだし。そう伝えると、サキはちよつと残念そうにこう言った。

「ヨハネさんがずーつと傍に居てくれるんだったら、もつと長く熱出してたかつたなあ」「バカ。あんなしんどい思い、ずーつと味わう気？」

「それはやだけど……」

唇を尖らせる彼女に、思わず笑ってしまふ。

その表情を見つめて、掌で温かい頬にそつと触れた。

「明日は仕事だから、ボクいないけど……ちゃんと無理しないで安静にしててよね」「無理しないでつて、簡単に言うけど難しいんだよお。」

してるつもりはなくても、結構あれしなきゃ、これしなきゃ……気が付いたら、疲れちゃつてて。

「今回みたいな事にならないと、意図的に切り上げたり休んだりしないし」

「やれやれ。だからいつも、体調を崩すんじゃないのか。」

「おずおずと言う彼女に、小さく溜息を溢してボクは言った。」

「もつと意識的に休憩取つて。」

どんな事でもそうだけど、たまには人のことじゃなくて、もつと自分の内側の声を優先して。

疲れたとか、今はあれやりたいとか、どんな事でもいいから。もつとワガママになつて。

少しは出来てきたかもしれないけど、あんたはまだまだ、自分を甘やかすのが下手すぎる」

「えー……十分甘やかし過ぎじゃない？」

彼女はものすごく懐疑的な様子だったが、ボクからすれば全然甘やかし足りない。

特に心の面じゃ、もつともつと素直に自由になつて欲しいぐらいだ。

明るく素直なように見えるけど、サキには抑圧されているところだつていっぱいある。それも、付き合いが長くなつてきたここ最近だから言えることだ。

「なんか心配だね……本当に一人で大丈夫なワケ？」

「ん。だいじょう……」

いつもなら、大丈夫、と言うところだったのだろう。

けれど、彼女は言い淀んだ。

言い淀んで……もしかして、さっきボクが言ったことの意味を考えてるんだろうか。

そして。ムラサキは首を振ると、思い直すように、照れながらこう言い換えた。

「寂しいから、できるだけ早く帰って来てね」

「わかった。いいよ」

精一杯のわがママが嬉しくて、ボクは小さな体を引き寄せた。

相手の脆い部分を見て安心するなんて、本当にダメダメで嫌な大人かもしれない。ボクは。

それでもこの心配を、不安でずっと視ていたくて、押し付けがましく頼ってほしい気持ち、サキはこうやって受け止めてくれるから。

嫌だって言われるまでは……いいよね、このままで。

そう思いながら、ボクはせめてサキの表情を見間違えないようにと、パーカーに身を包んだ彼女の頬をそつと両手で挟む。

「私って、ヨハネさんの一番？」

「あんたはいつでもとびきりボクが一番だよ」

何度伝えても、飽かずに嬉しそうに笑う、あんたのことが好きだ。

だから、これからも元気でいて。

大切な宝物を抱きしめるように、ボクは少し痩せたその体を、両腕に包み込んだ。

その続きは、また今度

ちょうどバレンタインの頃に風邪を引いて酷く体調を崩してしまっていた私が、ようやく普段並みの生活に復帰できた頃。

安いのでよければ私の好きなチョコレートをあげる、なんていうほんの些細な約束を、律儀にずっと待っていてくれた望寧ちゃんと、私は自宅でチョコレートを開封していた。ロッテのティーロワイヤル。いつもだったら、ロッテの酒入りチョコレートはバツカス一択なのだけれど、たまたまレジの手前で見掛けて、美味しそうだったのでこれにしてしまった。冬季限定、と薄花色の箱には書かれている。もはや冬季だけじゃなくて一年中売ってくれていいのよ？ というぐらい、このシリーズの洋酒入りチョコレートは美味しいのだけれど、冬季限定だからこそ需要もあるんだろう。

「ほう、そんなに美味しいのか」

「紅茶にブランデーだよ。絶対美味しいでしょ」

買ったことないけど、あたりの味だった。チョコレート自体がミルクティーのような甘味の強い味わいをしていて、中から出てくるブランデーの香りとよく合う。一粒口に入れ、わかりやすく口元を綻ばせながら、望寧ちゃんが目を細めて言った。

「今は、廉価でここまで品質の良いチョコレートが作れる時代になったんだな」

「望寧ちゃんは、バレンタインにチョコ貰ったことないの？」

「はは。僕は、母の代からチョコレートを知ってこそ居たものの、此の様な習慣が日本で出来たのは、僕の人生が後半にも差し掛かってからだったよ。息子の秋人あきとに貰った事が有る位だ。彼は菓子職人の道を歩んだからね」

そう言つて、望寧ちゃんはどこか得意げに微笑んでみせる。

以前、私は初めてモンハン世界で望寧ちゃんと会つた時に、彼女のことを「本来かんば望寧もねが在るべきだった世界軸からの分岐・IF世界の存在」と説いたのだけれど、實際のところ、この子は「本来の世界軸での生を経験し、記憶を継承した上での転生先の存在」と見た方がいいような気がしてきていた。

だとすると、この子はモンハン世界に転生する前は一児の母だったこともあつたのかな、と不思議な気分になる。特殊な事例なので結婚していたわけではないが、子孫の夜翰さんに血の繋がりが継承されたということは、望寧ちゃんにも子供はいたわけで。もちろん今の私は、そんな子供がいそうな年齢の彼女ではなく、転生後のもつと若い姿の彼女と知り合っているわけだけど。こうしてしれつと世界線の垣根を跨いだ話ができるのは、私が夢女子である特権かもしれない。

私は、チョコのお供に淹れていたカフェインレスのコーヒを一口啜つた。

「え、パティシエか。じゃあ、私が用意できる市販のチョコなんかより、断然美味しいの食べてたんじゃないの？」

「何、こういう物は気持ちいが肝要だ。君から貰えるのをずっと待っていた。お預けを食らった分、何倍も美味しい。堪能させて頂こう」

そう悪戯つぼく笑って、箱越しに私の手元をちよんちよん指先で触る。食べさせろということらしい。完全な甘えっ子と化した姿にこっちまで微笑ましくなりながら、口元にそつとチョコを運ぶと、指先の体温だけで溶けそうなチョコレートは、あつという間に望寧ちゃんの唇の中に消えて、花の綻びそうな笑顔を残す。

「うん。美味い」

狩猟の世界では、狩人として野を駆け、自然界のあらゆる法則に精通し、勇猛果敢にモンスタ―へと踊りかかるとの姿も、こうして私の前にいると、機嫌よさそうに尻尾を振っておやつを待っている犬みたいな、ただの可愛くて食いしん坊の女の子だ。締まった筋肉質の体と両腕は、私が貸した大きめのカーディガンですっかり着痩せしていて、民族調の衣装とはまた違った現代っ子の感じを醸し出している。

前世で望寧ちゃんが生きたのは大正から昭和だと聞いてるし、その上で渡ったモンハン世界のカムラの里では、現代化した日本とは違う独特の和風文化が発展している。それでもちよくちよく、こうして世界をはみ出て私の住む場所に遊びに来ては、あれもこ

れもと何にでも好奇心に目をきらきら輝かせているのは、ひいひい孫の夜翰さんにもまあまあ通じるものがあるよなあ、と思いつながら、眺めていた時だった。

「それで、その……」

望寧ちゃんが、机で斜向かいに正座したまま、そわそわと所在なげに視線を動かす。それだけで、私はすぐにピンときた。

「そういえば、バレンタインのチョコを貰う時にお願ひしたいことがある、とか言つてたよね？ 何かな？ もう時期はだいぶ過ぎちゃつてるけど、それでよければ」

「ああ、いや……時期で言えば、特にバレンタインである必要も無かつたし、何時でも可能な頼み事ではあるのだが……」

居住まいを正しながら、緊張しつつ言い淀んでいる様子を見る限り、相当言いづらさうな事ではあるらしい。はて、何だろう。ここまで待つてくれたのも私からすればありがたしい、無理難題でなければ、できる限り叶えてあげたい気持ちはもちろんある。

首を傾げていると、微かな、だがはつきり通る声で望寧ちゃんが一気に言い切つたお願いは、私の予想から遙かにぶつ飛んだ内容だった。

「その……わ、私のことを、抱いて貰えないだろうか」

「……へっ????」

思わず、頭に大量のハテナが浮かんだ。

緊張のあまりぎゅつと目をつぶってぶるぶるしている望寧ちゃんを前に、その意味を理解した私は、テンパるあまりとんちんかんな受け答えを返してしまった。

「えっ！ あの……抱いてってその、……ああ、もしかして富山弁!? 『抱いてやる』で『奢ってやる』ってこと!? 私が富山出身だからって、別に今じゃ若い人こんな言葉使わないし無理に覚えてくれなくていいんだよ!? 奢って欲しいなら奢ってって言いな!?!」

『抱く』にはそういう意味が有るのか!? って、いや其れは初めて知ったが、今は別にそういう事では無く!」

「あー……あのその、なんていうか、ハグ的な意味ではなくて……その、そういう系統の、抱いてくれて話……?」

具体的な描写を出さずにそれとなく尋ねてみたら、恥ずかしさを必死で堪えるように、こくこくつと微かに赤らんだ顔で頷いている望寧ちゃん。

……なんか、既視感。去年くらいにもどつかで見たことあるな、こんな光景。ああ、あれか。夜羽くんキスを迫られた時のあれかあ。とか、懐かしんでいる場合じゃなくて。

「ちよつと待って、それお願いする相手本当に私で合ってるの!?! なんか、こういうのを口に出して言うのもちよつと野暮っていうか逆に薄っぺらい気がするけど、そういうこ

とは好きな人と心と気持ちを通わせ合う積み重ねがあつてから、同意の上で一緒にするもんだよ!」

「ムラサキは私の好きな人なんだから、君が同意さえして呉れば問題無いだろう!」
「いや、ま、そらそうかもしれないんだけど!」

両手を握りしめられて、ずいずいと押されるようにカーペットの上を後ずさつてしまふ。

確かに、望寧ちゃんのこと一度もそういう目で見なかつたかと言われれば、私に限つて答えれば嘘になるが、だからつていきなりそんな。まだ会つて、二、三ヶ月とかそこらしか経つてないのに。いやでも、世間一般的なカップルだったら付き合つて三ヶ月でベッドインする人もいるか? 知らんけど。

「で、でも、どうして……? 私と言うのも何だけど、望寧ちゃんつてそういうお相手多いんじゃないの? 何も私に頼まなくても、向こうの世界にいつぱい、望寧ちゃんのお取り巻きというか、ガールフレンドみたいな子が」

前に夢渡りをした時、あつちこつちで女にも男にもきやあきやあ声を掛けられている場面を、呆れるぐらい目撃している。男の方は望寧ちゃんと女の子の仲をからかつていふような感じだったので、恋愛対象は専ら女性なのだろうとは思っていたが。

すると望寧ちゃんは、ぎくりというように身を強張らせ、面白いぐらい必死で否定し

始めた。

「!!! そ、それは! いっ、家には入れるが、かといって別にそういう関係では……!」
「……? そなの?」

「皆遊びの分を弁えているし、隣に座って手を繋いだり、肩を抱いたり、その位で満足して呉れるからな。キス……迄はした事があるが、その……それ以上は」

指先をつんつんさせながら、ごによごによと吃る姿に素直に驚いてしまった。私の肩を抱いて、平然と他の里人からの揶揄いや誘惑をあしらいながら堂々と歩いていたあれは何だったんだ。あっちの世界であんなタラシぶりを見せつけられたら、そりゃ経験豊富なのかと勘違いしちゃうでしょうよ。

そう言うと、望寧ちゃんはふるふる首を振って、私を恨みがましそうに見つめてきた。
「寧ろ、勝手に経験豊富に勘違いされるから、此方が演じている事の方が多い位だ。今じゃ里では誰も、僕が一度も人と寝た事の無い初心な素人だ等と信じる者は、居なくなつて了つたんだぞ」

「いや、だからって期待に応えて大見栄張らなくてもよくない……?」
「分かつては居るんだが……僕なら恋愛関係に於て慣れているし何でも知っていると、期待の目で女子から見つめられたら、ついそう云う人間として振る舞うしなくなつて了うだろう!」

唾を飛ばしそんな勢いで必死に反論する望寧ちゃん。そうとも限らないと思うけど、周りから植え付けられるイメージ通りについつい振る舞ってしまおうというのは、わかることでもあり辛いことでもあると思うので、頷いておいた。豪傑に見える望寧ちゃんにも、そういうところはあるんだな。

「でも、そうだったんだね。あんな里のど真ん中の家で、女の子取っ替え引っ替えしてよく問題にならないなあって、実は勝手に思ってたけど」

「君は誤解し過ぎじゃないかっ!? だいたい、里の若い女子は、結局最終的には男に恋したり嫁いだりする者ばかりだ。……私だつて分かっている。一時の気の迷いや戯れの相手に私が成れるのであれば、別にそれでも良いと」

「でも、それはさ」

望寧ちゃんが幸せにならないのではないか、と思う。訝る私に、努めて明るい顔で寂しさを打ち消すようにしながら、望寧ちゃんはっこり笑いかけた。

「何、ずつとは一緒に居られなくとも、彼女達の記憶の一場面にでも成ればそれで良い。例えば気持ちや繋がりが永遠に成らずとも、思い出という物は嘘を吐かない。私の心も紛れるし、後悔はないよ」

「望寧ちゃん……」

そういうところが、私から見えていて無性に可愛くて、それでいて寂しい、切ない人だ

と思う。純粹さを真つ直ぐ持つていただけでは傷付くだけだと分かつていても、本人の瞳はいつも輝きを失わずにきらきらして、吹き荒れるような寂しさの中をひたむきに生きている。そんな風の中をじつと耐える彼女の側にせめて寄り添って居たいと、そう思つて気が付いたら、望寧ちゃんとはこんな関係になつていた。

ふと思ひ出したように、望寧ちゃんは自信なさげに俯いて指先を突き合わせた。短い前髪の下で、落ち着かなく瞳が動いている。

「が、私は……私だつてその……初めては、大切な人が良い……と、思つている」

「それで私……？ や、でも、知つてるかもしれないけど、私は好きな人いっぱいすぎて、なんというかその、望寧ちゃんだけが相手つてわけじゃないよ？」

「別に、多数と肉体関係を持つ人間が不誠実だと言う訳では無い。が……私は、女を愛する私を受け止めて呉れる人が良い。何れは去つて、私を独りにしない人が良い。」

……ムウなら、それが出来ると思つたから」

優しげに目を細めて、望寧ちゃんに微笑んでみせた。なんとまあ。こんな尻軽代表みたいな人間を好きにならなくてもいいのに、という申し訳なきに駆られながら、私は額ひたひたの汗を拭う。

「それは恐悦至極だけれど、買い被りすぎじゃないかなあ」

「君の為人ひととなりは、僅かながらこの家の者にもよく聞いているよ。薄情な面も知つている。」

其れも含めて、僕の大切な人だ」

私よりもすらりと背の高い、けれど超絶高身長の夜翰さんよりは随分と私の間近にある頭を近付けながら、望寧ちゃんが仄かに染めた頬で迫る。赤紫と薄青の双眸が、潤んだまま私を見た。

「ダメ、か……？」

「だ、だめじゃないけど！ 望寧ちゃんさえよければ、私はその、嫌ではないけど……。でも、抱いてくれてことは、いわゆる受けなんだよね……。 私一応、セブンスコードでちょっとだけそういう仕事はした事あるけど、お得意さんなんて一人か二人だし、ほとんど私が受けになった事ばっかだし、おまけにバーチャルでしか経験してないから、攻めるのはあんまり得意じゃないよ……。？」

「う、受け……。攻め……。？」

ちよつと混乱したような顔で、首を傾げている。

ふむ。別に知ってなきやいけないわけじゃ全然ないけど、したいと言う割には、あまり知識の方面には明るくないらしい。ますますリードが私でいいのか不安になってきた。こんな半端者に任せるより、直生くんとかに投げた方が、確実に絶頂させてくれると思うぞ。やってくれるかは別として。

自分から誘って来たのにおろおろとしてしまう望寧ちゃんを、私は様子見するように

一回ぎゅっと抱き締めた。

「まあ、あとは……そういうのは、いきなりって言うより、雰囲気も大事だから」

「えっと、雰囲気……其うか。如何すれば良いだろう」

「そんな固くならなくても。普段通りでいいんだよ。でもまあ、折角こんないいものがあるんだし、ちよつとだけ」

私はチョコの箱を掴んでから、手を引つ張つて望寧ちゃんを自室の布団の上に座らせると、かちこちになつている彼女の隣に笑いながら腰掛けた。

「ほら。望寧ちゃんの大好きなチョコレート。あげるから、こつち向いて」

戸惑いながら半開きになつた唇に指先でチョコを押し込んで、ぶるんとした唇にちゅつと口付ける。彼女の方が身長は高いから、私はその膝の上に乗りながら、普段通りに何度か軽く唇を重ねた。

「……」

キスまでは、かなり濃厚なコミュニケーションの一環だが、やったことがある。そう思つて、慎重にその唇を口先でつついていると、望寧ちゃんがこくりと微かに喉を鳴らした。

「んむ……、あ、の」

「大丈夫。唇、開けていいよ」

そつと隙間を塞ぐように唇を食むと、甘いチョコレートが蕩け出す。遠慮がちに求めてくる唇の先を軽く割つて、ハチドリが花に吸い付くようにしながら、ブランドーの香りがする甘い蜜を味わつていく。望寧ちゃんの肩先がぴくつと小さく跳ねた。

「苦しくない？」

「つ、ん……へい、き……大丈夫」

おずおずと見つめる瞳が微かに潤んでいるが、嫌というわけではないらしい。

そつと鼻を擦り合わせるようにくつつけて近付くと、ぎこちない照れ笑いが浮かんで、恥ずかしそうに目を逸らされてしまう。どうも、この先に起こる事を緊張して身構えすぎているようだ。

「恥ずかしいの？ いつも望寧ちゃんからいっぱいちゅーしてくれるのに」

「だ、だつてあれはっ……、ただのキスだから良かったけど、これは違って、だからっ」

「あれもこれも変わらないよ、ふふ。望寧ちゃんを大好きつて思つてするキスに変わらない」

「ムラサキ……。私も、その……ムウが、好きだ」

その言葉に安心したのか、照れながらもやつと私の体に腕を回して、自分から熱つばい唇を押し付けてくれる。望寧ちゃんの唇は弾力があつて、厚みも少しあつて、優しく食むように舌で輪郭を辿ると、いつも震えるように潤んでいる。首筋に手を回して抱き

寄せると、耐えかねたように微かな喉声 leaked。

「ん……」

望寧ちゃんはいつもどこか必死で、一生懸命に舌先がこちらを求めようとする。そんなに慌てなくていいというように、不器用ながらも自分の舌と唇で優しく押し包んで、ペースを伺いながらそつと歯茎や口蓋をつついたり、柔らかい唇を食んでみたり、おずおずと差し出される舌先を不意に吸ってみたりすると、だんだん舌の力が抜けて、代わりに喉から漏れる声が増える。

「んう……つ、んっ……」

「ふふ。えつちな声。もつと聞きたい」

「……………」

とめどない唾液が糸のように繋ぐ口先を離れた瞬間、動揺したように息を吸った望寧ちゃんが、ぼつと真つ赤に染まった頬を逸らした。

「ム、ムウだつて結構声出してるじゃないか……………」

「うん。出してるよ。だつて気持ちいいもん。それに可愛い」

「つ……………」

キスや行為の時に出す声がわざとらしいとか言う人もいるけど、こういうのつて相手が無言のままだと、逆に遠慮しちやつて出しづらと思うし、それに声を出す事で気分

が盛り上がることもあるだろうと私は思う。だからまあ、恥ずかしくても演技だと思わなくても、私は自分から見せるのだ。そういう自分を。

狩猟の時でも視界をしつかり確保できるように、前髪をかなり眉上でぱつつんに切り揃えている望寧ちゃんは、こういう時に表情を隠すものが何もない。サイドの短い髪を片手で必死に弄りながら、望寧ちゃんは鼻の小さな整った顔立ちをおずおずと伏せてみせる。

「ムウは、あの……私が、気持ち悪くはないのか？」

「気持ち悪い？ どうして？」

「その……狩りの時には獲物に背中を見せず、里や皆を守る為に闘う事が求められている屈強なハンターが、その……こんな臆病で、弱々しくて、生娘のようになよなよした体たらくでは、と」

「でもそれって、他の人が求める望寧ちゃん像でしょ？ 狩場の外に出れば、ハンターだってただの人間なんだから」

はたと顔を上げて私を見つめる綺麗な色違いの瞳の傍に、私は手を添えて覗き込んだ。宝石玉みたいで本当に綺麗。この世に、こんな純粋で綺麗な色を形容する言葉はあるんだろうかって、そう思うぐらいに澄み切っている。思わず浮かんでしまった微笑みを隠しきれずに、私はおでこをこつんとくつつけた。

「私は、カッコいい望寧ちゃんも、そうじゃない望寧ちゃんも好きだよ。ここにいるあなたも、過ぎ去った時間を過ごしてきたあなたも好き。時間を巻き戻してあなたの苦しみを癒すことはできないけど、今ここにいる間は、あなたの心をいっぱいにしてあげるから。だから、怖がらないで」

「っ……………」

薄暗い部屋でもわかるくらいに、きらりと光を反射した望寧ちゃんの瞳から、決壊したように涙が零れ落ちる。よく泣く子なのは知っていたけど、思わず動転した。

「えっ……………！ っ、ごめんっ、私何か変なことっ、」

「ムウ……………っ！」

ぎゅっ、と膝の上の私を抱き締める筋肉質な体が、微かに震えていることに驚く。その嗚咽でしゃくり上げる背中を手で摩り、頭を撫でてあげながら、私は涙が濡らす褐色の頬に自分のほっぺたをくっつけた。その瞬間、創造主特有の力で、頭の内側に望寧ちゃんの昔の思い出が映像となって流れ込んでくる。私は思わず目を見開いた。

「大丈夫……………？」

「済まない……………私は、本当は……………怖くて」

「うん？」

「人に……………性的な意図を持って触れられる事が、怖いんだ。口付け迄は良いんだ。けれ

どその後が、如何しても……事に及ぼうとすると、頭が真っ白になる。幾ら女性の友人とそうしようとしても駄目なんだ。知識として何をすべきか知っている筈なのに、相手の望みに応えたいと思うのに……私の所為で」

震える拳をそつと片手で握ると、私の体温に應えるようにして拳が柔らかく開いていく。涙に濡れた髪をもう片方の手で優しく整えながら、私は問いかけた。

「ごめん、ちよつとだけ見ちゃった。それ、望寧ちゃんの前世に関係があること？」
「だと、思う」

「相手……その時の恋人に、もしかして何か酷い目に遭わされたりした？」

「いや……酷かったのは、私の方なんだ。何時迄も未熟な私は独り立ち出来ないで、リー……百合ユリの事を困らせて了った。一緒になる事は出来ない、分かっていた筈なのに……離れたがる百合を縛り付けるような真似をして、私は」

百合さんというのが、昔の恋人の名前なのだろう。

両手の指先を私の掌に置いて、望寧ちゃんは涙で潤む瞳を伏せる。その拍子にまた幾つか、涙の粒が掌に落ちた。私はただじつと、その前で言葉を待ち続ける。一つ小さく息を吸った拍子に、望寧ちゃんの胸が微かに上下した。

「それで、そんなに離れ難いのならば、一生忘れられぬようにして遣ると……百合は最後に無理矢理私の事を抱いた。だから、此れは私の自業自得なんだ」

「でもそれって、望寧ちゃんの意味を無視してってことじゃないの？ 異世界に生まれ変わってもこんなに心の傷が残るほど、痛め付けて……その事実自体は、無視していい事じゃないよ。たとえ恋人同士だったとしても」

「そう、なのかな……。確かに、怖かった。私は、百合との関係に肉体の繋がりは必ずしも必要では無いと思つて居た。だから、裸で触れ合う事は有つたとしても、あんな、異形の……」

肩を抱くようにして小さく身震いした望寧ちゃんは、少し落ち着きを取り戻したのか、顔色が悪いながらもなんとか微笑して、瞳を拭いながら私に説明しようと口を開く。「最後に私と契つた時、百合には男根が有つた。俄には信じられないだろうが、其れが私
が秋人を宿すに至つた真実だ」

「え……と、望寧ちゃんもその子も、一応は女の子ってことでおk？」

「そうだ。何というか……百合は、『普通の人間』ではなかった。私が男に性欲や恋愛感情を抱かず、寧ろ性愛の対象としての男性を嫌悪していると知つて居たとしても、彼女は幾らでも肉体を男性の其れに変化させて、私を犯す事が出来たという訳だ」

「なるほど……うー」

なるほどって言つたけど、多分全然わかつてない。わかるのは、百合さんが女になれたり男になれたりする摩訶不思議な体の持ち主って事と、その力を使って恋愛対象にな

り得ない性別の体で望寧ちゃんを犯したのは最低だつて事だけだ。

「必ず出来るとは言われたが、まさか本当に子が出来るとは思わなくてね。分かったのは旅先だったものだから、随分と慌てた」

「いやそれ、もつと怒つていいところだよ??」

「私を犯したのも追ひ払つたのも、今考えれば彼女なりの愛だつたのかもしれない……とは思うよ。お陰で私は、秋人に巡り会う事が出来たし、こうして君や夜翰にも会う事が出来た。彼女が死んでも、私と百合が生き残った証は残っている。残された側は、とんだ迷惑かもしれないがね」

屈託なく笑つた望寧ちゃんは、座り直してその膝に私を座らせる。正面から抱きついたらままの私を見つめながら、優しく目を細めた。

「其れこそ前世の話さ。今更如何こう言つても詮無い事だ。ただ……あの時の事を思い出すと、如何にも体が強張つて了つて。触れられる度に怯えて了うものだから、につきもさつちも先へ進めない」

「それはそうでしょうよ……」

「だから、君ならば平気なんじゃないかと思つて……思つただけけれど、矢張り未だ少し早かつたようだ」

「当たり前でしょ。苦手な事なのに無理しちやつて。さつきのは嫌じゃなかつた?」

一応そう聞いて頭を撫でたが、望寧ちゃんは首を振つてもぞもぞとお尻を動かした。

「あれは本当に大丈夫だ。寧ろその……気持ち良くて」

「そう？ ならいいけど」

「でも、あの……私が急には出来なくても、嫌わなくて居て貰えるだろうか。何時か克服するから、だからつ、その時迄、私を嫌いにならないで欲しい……っ」

「あたりめーだ！ 何度も言わせるな！ つていうか克服しなくていい！ んーな事で嫌いになるわけじゃないでしょーが！」

我慢の限界が来て思わず直生くん口調で怒鳴ると、望寧ちゃんはびくつと体を動かして驚きながら、おずおずと私を見た。

「体で愛し合えない人間は、嫌じゃないのか……？ 価値がないとか、思わないか……？」

「思うわけではない！！ 望寧ちゃんがさつき自分で言ったんでしょ、愛情に肉体関係は必ずしも必要ないって！ そりゃ、私はキスとかハグくらいはできたら嬉しいよ。個人的にはその先もできればもつと嬉しいけど、だからつてそれは親しさや愛しさを目減りさせる原因にはならないよ」

「しかし、私は……自分から誘っておきながら君に怯えた挙句やっぱり出来ない等と、最低の事を」

「いーい？ 一緒に紅茶を飲むつもりで喫茶店に行つて、行つたらやつぱり気が変わつて抹茶が飲みたくなつたなんて、普段のお出掛けだったらいくらでも起こりうる事でしょうが。望寧ちゃんが飲みたいなら抹茶を飲めばいいし、私は紅茶を飲めばいいよ。それは普通の事でしょ？ それで紅茶を飲まないからって怒り出す人間なんか、友達じゃないよ」

「……！」

思わず捲し立てるようにそう言つてしまった私に、望寧ちゃんはまん丸くした目を向けている。その瞳が、再びわかりやすく涙でいっぱいになつた。

「……有難う」

「お礼を言われるような事は、私は何も言つてないよ」

腕を広げると、次の瞬間、必死なまでにぎゅつと抱き付かれて、布団の上でバランスを崩した私は盛大に後ろにひっくり返る。柔らかい敷布の上に頭から押し倒されて、同じように倒れ込んできた望寧ちゃんの体温が、すぐ体の上にあつた。

「わあっ」

「ムラサキ」

もぞり、と身じろぎした望寧ちゃんが、泣いているような笑っているような、そんな表情で私を覗き込んだ。最近では夜寝る時にいつもすぐ傍にある、豆の出来た頑丈な、そ

れでいて案外ほっそりとした掌が、私の頬へと愛しげに触れる。

「君が、好きだ。頭の悪い人間で済まないんだが、本当に……好きで好きで堪らなくて、此れしか言葉が出て来ない」

「十分伝わってる。ありがとね。私も望寧ちゃんが好きだよ」

「本当か？」

「言葉とキスだけじゃ、証明できない？」

「まさか」

くすつと笑ってから、望寧ちゃんがおでこをくつつける。私の隣に寝転んで抱き付くと、望寧ちゃんには甘えるように頭を擦り寄せてきた。自分より大柄な子に甘えられていと、とにかく愛しさと可愛さが募って仕方ない。日没後は未だに冷える春の室内も、体温でぼかぼかしていい気持ちだ。

「……ムウ」

「んー？ なあに」

「言っておくが……君との口吸いは、夜明けまでしても飽き足らない位好きだからな？」

「ふふ。わかりました、ありがと」

改まってそう答えると、本当にわかっているのかと言わんばかりに、望寧ちゃんはむうつと頬を膨らませて私に迫った。

「君の素肌に触れるのも、一緒に風呂に入るのも好きだからな!?!」
「わかったわかった」

そんな風に睨まれても可愛いだけだ。手を伸ばして頭を撫でると、子供扱いされて膨れながらもべったりと離れずに甘えていた望寧ちゃんは、不意に切なそうに目を伏せた。その切実さを内に秘めるようにして、ほんの少し声が掠れる。

「けど、その先は、未だもう少しだけ……いつか必ず、僕とも君とも、分かち合えるようにするから」

「うん、わかってる。また今度ね? 別にその今度はいつになっても、ずっと来なくてもいいけどさ」

思わずそう答えると、望寧ちゃんは勢いよく体を反転させて腕を立て、真剣な顔で私の頭を上から覗き込んだ。

「ずっと来ないのは嫌だ! 触れたいんだ、本当に。その気持ちだけは本当だから、僕の努力を汲んで呉れ。頼むから」

「そ、それはわかったけど、無理だけはしないですよ? 望寧ちゃんといえつちな事出来なくても、それは悪いことなんかじゃないし、私はどこかに行ったりしらないから」

そんなに一生懸命、慌てたり努力したりしなくていい。

こうやって、甘えんぼで触れたがりの望寧ちゃんも、私は好きだ。もしかしたらその

気持ちの奥にある焦りや不安は切実で、いくら私が拭いても拭い去れないものなのかもしれないけど、だとしても私は、彼女がまた一歩明日を歩いていけるように、その傍に在り続けるだけだ。

私に通ってきた不安や道筋を、望寧ちゃんもきつと経験している。大事なことだから、大切な人へ向ける気持ちだから、「流されて」欲しくない。ほんの些細なことに思えたとしても、「大丈夫」と思えるまで、納得できるまで立ち止まっていて欲しい。

人と人だから「違い」はあるのかもしれないけど、少なくとも相手にとって安心感のある相手でいられたらと。時折不安そうに揺れる瞳の彼女を抱き締めながら、私はそう思うことしかできないのだ。

骨抜き注意報

鰯の小骨が、喉に引っ掛かった。

別にそれだけ聞くと大事でもなんでもなく、刺さった直後はちくちくして違和感がある程度だったのだが、夜中に変な夢を見て目覚めた時は、取れたかと思いきややっぱり喉に違和感があり痛みも強くなっていたので、恵季朱くんに慰めてもらいつつ、なんとか眠気が訪れるのを待って一眠りしたという始末であった。

放っておくと傷から菌が入って膿んだり、熱が出たり、その状態で骨が取れない奥まで入り込んでしまうと一大事になる、みたいな話もある事だし、どうせ今日も明日も取れずに痛いのなら先延ばしにする必要もないと思ひ、とりあえず近所の耳鼻科まで行って鼻からカメラを入れてもらったが、一応視認できる範囲に骨らしき異物はなかったらしい。突然「喉の奥はやっぱ見え辛いので、カメラ入れますね」とか言われて、鼻カメラも胃カメラもやった事のない私はあまりの急展開に付き添いのヨルクン達にしがみ付いて震え上がり、案の定嘔吐反射で何度かおえつとなったものの、そこまでして調べて何も見えないと言うのだから、骨自体はもう抜け落ちてしまったのだと信じていたい。おそらく、傷か何かが残ってしまったら多分大丈夫って、お

医者さんも言ってたし。

とりあえず一安心だが、また余計なことでお金を掛けてしまったな……と思いがら、病院の待合ですっかり冷え込んだ体を帰宅後に紅茶で温めていたら、直生くんが私の肩に自分のパーカーをひよいと被せてくれた。微妙な面持ちでマグカップを啜る私の隣にあぐらで座り込んだ直生くんは、同情的な表情をしている。

「吐きそうになつてまで検査したのに、災難だったな……」

「いや、まあ……正直、こんなカメラを入れ込まないといけない部位に骨刺さつてたら、取る時なんてこれ以上に苦しいんじゃないかと思うと絶望的な気持ちになつてたから、異常ないならラッキーなんだけどね……。けど、結局まだ治つてないし、飲むと痛いし」「自然に治るの待つしかないって事か……お前が病院行つた結果つて、ホントそういうの多いよな。いや別に嫌味じゃなくて、金の工面もあるだろうし治るまで不安だろうし、大変だろうなつて」

以前であれば「そんな事くらいで病院病院騒いでんじゃねえよ、軟弱が」とか言いそうだった直生くんは、今やすっかり丸くなって心配してくれるので、その気遣いと優しさに感謝しつつ、私は目を細めた。

「まあねー。お小遣い節約しなきゃ……いやでもさ!! 久しぶりにおえつてなる感覚思ひ出したし、これのおかげで次に食中毒とか胃腸炎なつた時は、吐くのが下手な私でも

スムーズに吐ける説ない!? 異常もないしその練習が出来たと思ったら、2700円めっちゃ安いかも!」

「お前ポジティブシンキングにも程があるだろ!?!」

すばくと優しく頭を叩かれながら、ぐつとガッツポーズをしてみせる私。その隣で、恵李朱くんも例のしよぼん顔をしながら、自分とヨルクんの分の紅茶を淹れつつ会話に参加してきた。今は魔法学校がイースター休暇に入っているので、ヨルクくんもエリくんも、リモート補修を家で見ながら宿題をしているところだ。

「ボクが現実に干渉出来るんだったら、すぐ目頭に見てもらうのにな(・ω・)骨なんて、見つけたらすぐに口で啣えて引っこ抜いちゃうよ」

「いや、管状のカメラでも喉の奥突っ込まれたらそれなりに苦しいのに、蛇は無理じゃない……?」

「髪の毛みたいにはそーくできるよ(☒?☒)前にこれで夜羽の喉の骨取ったもん」

「怖いからやだつて言ったんだけどね、入ってるかどうかもわからないくらいでね、喉の奥がこちよこちよつてして、おしまいだつたよ」

「マジか。目頭くん万能すぎでは?? 魔界の人医者要らずじゃん」

恵李朱くんの体に埋め込まれた蛇こと目頭くんは、恵李朱くんの悪魔師範であるメデューサさん謹製の弟子監視装置なのだが、それ以上に摩訶不思議生物としての機能が

高すぎる。ドラえもんのポケット並みに便利なその力を、兄のために使ってあげるのは何とも微笑ましいなあという気持ちで、私は夜羽くんの頭をなでなでする恵李朱くんを、炬燵の反対側から眺めていた。かわいい。

すると、それを聞いていた直生くんが、膝を崩しながらふと言った。

「えー。じゃあ、オレもあの時見てもらえりやよかったなあ」

「あの時つてことは、直生くんも喉に骨刺さったことあるの？」

「ちよつと前に。まあ、オレのは病院行くまでもなく自然に治っちゃまったんだけど」

そう言つて、直生くんが教えてくれた小話は、次のような内容だった。

話の都合上、以下、ヨハネさん視点から見た再現映像をご覧いただく。

ある日、野外での雑誌の撮影と、それとは別件のロケハンが同時に仕事として入っていた時のこと。

二件外での仕事を立て続けに入っていれば、移動時間はもちろん長くなる。ダンサーだけではなくモデルとしての仕事もしているヨハネは、同じ事務所のよしみと、何より直生のパートナーであるという事実も大きく、一緒の仕事場になることが多い。今回も二人同時に撮影があるので、ロケバスも勿論一緒だった。

「……」

が、今日の移動時間は、いつもとは微妙に違っていた。

常日頃、ちよつと暇ができたと思れば、やれサービスエリアで買ったあれが美味いだの、やれ昨日のテレビは見たかだの、休憩中移動中問わず、カメラが回っている時間以外は口喧しくヨハネに話し掛けてくるはずの直生が、異様に静かなのである。

向かい合つた座席で窓の外を眺めていたヨハネは、車の走行音以外聞こえてこないあまりの静けさを訝しみ、進行方向とは逆側の席に座つていた直生の方をちらりと伺つた。

直生はヨハネよりも三半規管が強いようで、ジェットコースターも平気なタイプだ。だから、電車や車の移動で向かい合わせの座席を使う時には、酔いやすいヨハネよりも先に、進行方向逆側の席を我先にと陣取つてくれている事を、ヨハネは知っている。そんな、微妙な気遣いが出るのか出来ないのかよくわからない恋人は、何を考えているのか読み取れない横顔で、車窓を流れる田んぼに目線を投げていた。流し見なら酔わなからと買つてすぐ封を切つた漫画の新刊も、目を通す気配がなく、膝に置かれたままだ。現場やスタッフの前での直生はまったくのいつも通りで元気そうに見えるが、今日の移動時間の大半は、ずっとこんな感じなのである。

暗い車内へ斜めに差ししてくる春の陽光が、深刻な横顔を半分照らしている。眩く金に輝く睫毛を半分伏せ、キラキラと光る明るい髪色を陽に晒し、頬杖を突いたまま足を組

んでいるアンニュイな直生の顔を見て、ヨハネは思わず胸がざわついた。仕事で大失敗した訳でもあるまいに、どこか憂いた顔で窓の景色を眺めているなんて、いつ如何なる時もこいつに似合わない。もしかしたら、隠しているだけで今回の仕事で何か重大な悩みをこいつなりに抱えていたり、疲れが溜まっていたりするのもかもしれない、と。

ただ、隠すほどの事であるなら、いくらパートナーとはいえどうつついたらよいのかも分からず、ヨハネはわざとらしく大きく一つ咳払いをした。その音に我に返ったように、直生の視線が窓から引き剥がされる。その機会を掴んで、ヨハネはそろっと第一声を投げ掛けた。

「えつと……どうかした？」

「ん？」

「いや、なんか今日のアんた、静かだから。腹でも痛いのか」

単刀直入に聞けばいいのに、婉曲にしか伝えられない角張ったヨハネの言い草に、直生は一瞬きよんとした目を向けたが、気まずそうなその表情を見て言いたいことに察しが付いたのか、今度は頬を掻きながらやや困った顔になった。

「あー……いや、その。大したことじゃねえんだけど。昼間のロケ弁で食ったアジフライの骨が、喉に刺さっちゃまって……なかなか取れなかったから」

「はあああああああつ?!?!?!」

と、怒鳴りたいのをヨハネは間一髪のところまで飲み込んだ。

ここまで自分に一日気を揉ませといて、真剣に心配してたのがバカみたいだ、と思つたのだが、よく考えたら魚の骨も不愉快なものではあるし、人によつては重大案件だろう。それに、万が一こんな事で自分が心配したなんてバレたら、絶対に押揃われる。そう思つて辛うじて閉口したのだつた。後者の理由はともかく、感情的に爆発する寸前、相手を慮つて黙れるヨハネも十分優しいのだが、あいにくと本人はその事に気が付いていない。

一旦ぐつと引き結んだ唇を、ヨハネはそれとない素振りで見開いて尋ねる。

「……で、取れたの?」

「ん。さつき茶あ飲んだ時に。多分もう平気だ」

「あ、そ。よかつたね」

つんと顎を逸らしたヨハネはそれ以上何も言わないが、その頬が夕陽に当てられたにしてはちよつと赤すぎる程度に染まっている。それを見て、直生は小さく笑いながら、トンネルに入った際に席をヨハネの隣に移した。その細い肩を、直生の腕がぎゅつと抱き寄せて体温が近くなる。

「サンキュ。心配してくれたんだろ」

「べ、別に。取れなかつた」って言ったから、取れたのかと思つただけ」

「なんか今日は、やたらとお前からの視線が熱いなあと思ったよ」

「わ、わかっただったら一言ぐらい何か言えよッ!?!?」

横を向いて思わず反論に開いた唇を、暗闇の中でさりげなく奪われる。顎先に手を当てられ、自分の置かれた状況も忘れて、反射的にヨハネの声が漏れた。

「んっ……」

「バカ、声出すな。運転手に聞こえちゃうだろ」

吐息にさえ甘い香りが乗り移りそうな程近くで、掠れた声が囁く。お前が先にしてきたんだろうがとヨハネは言いたくなかったが、やたら熱い唇と、こんな短い間にも全身を駆け巡っていく痺れのような快感に翻弄されて、声を殺すのが精一杯だ。

肩を抱いているのと反対側の手が、口付けながらヨハネの細い指をまさぐり当てて、指先を絡めながら握り締めた。ありがとうと照れて言うよりは、こうした方が直生にとってはやっぼど伝えやすいのだという事くらい、ヨハネにもわかる。むしろ、感じすぎるくらいに伝わってしまうから困るのだ。

「っ……何、そんなに浮かれるくらい、嬉しかったわけ?」

「ああ。心配性の誰かさんがこうも可愛いと、舞い上がっちゃってな」

呼吸の隙間に言葉を継ぐように、なお唇を啄み続けながら、直生が喉元を震わせる。こんな時に限って茶化すことなく、嬉しいという感情を隠しもしないでぶつけてくるの

はズルいと、暗がりの中でヨハネは思った。

トンネルを車が通過する寸前、暗闇が明ける前に唇を離した直生は、くすつと小さく笑って、存外子供が照れたような甘酸っぱい表情をしていた。自分の方が余程一方的に羞恥に耐えかねているのだろうと思っていたヨハネは、思わぬ表情に面食らう。

驚いている隙に、直生は子供のようにどかつと座席に座り込みながら言った。

「さーて、お前に要らん心配掛けるぐらいなら、こつから先は存分に騒ぐかな！」

「は、ハア!? 静かだねって言っただけで、別に騒いで欲しいワケじゃないんだけど!」

「まあまあ、そう言うな。まだ帰りに寄れる美味そうな店あんだろ。調べといたんだよ。

「ここと、ここと……」

「ちよつ、急にガイドブック渡すな! ボクは無理だよ、車の中で読めないんだから。あんた適当に選べば?」

投げられた薄い冊子を前に目を白黒させるヨハネの前で、指を立てた直生はさつきまでの静かさが嘘のようにぺらぺらと喋り始めた。

「そうか? シュークリームとエクレアとタルトで迷ってんだよ。けど、愛理の土産のこと考えると羊羹も捨て難いし。藍の奴、クリーム尽くししたらまた太るつつつて怒るかなあ。

あつ、おいあそこの看板にあるゲーム、この間詫び石配布してたの知ってつか? お

前ままだだったら受け取って来いよ。それからさあ、ゲームといえれば中に出て来たクイズにすつごい面白い奴があつてさあ」

「うっ……うるさーい!!! 機関銃みたいに一気に喋らないでくれるツ!? やっぱ黙らせといたままにしとくんだったッ!」

「なんだよ、オレが静かだと不安なんだろう?」

「加減つてもんをちよつとくらい覚えなよ、この両極端! 魚の骨なんか刺さんなくてもボクの声帯が痛むっつーの!」

ゲラゲラ笑う直生の前で、怒つてみせるヨハネの表情がほつとしたように緩んでいるのを観察できないほど、直生も阿呆ではない。

結局はいつも通りの騒がしさに戻ったロケバスは、スタッフ達との合流地点まで、無事に二人を乗せて辿り着いたのだった。

「……よくわかったけど、その説明に後半のくだり要つた?」

「えっ……あ、あれはその、ヨハネの反応があんまり可愛……って、これは別にどーでもいいっ、やっぱ忘れてくれ!」

私のツツコミに、今更のように慌てながら両腕を振る直生くん。

と言われても、もうヨルクくんもエリくんもニヤニヤしちゃってるし、遅いと思うけど。

「ごちそうさま (⊠? ⊠)」

「? 恵李朱、紅茶はまだ残ってるよ」

「こういう時は『ごちそうさま』って言うんだよ、夜羽 (⊠? ⊠)」

「そっか、なるほど」

「お前はまた余計なことを教えんでいい! 夜羽も! そっかじゃねーの! 聞かなくていいから!」

子供相手に本気でぎゃあぎゃあ騒ぐ直生くんの前で、にこにこしている双子のヨルエリくん兄弟。やはり、天使と悪魔には人間は敵わないという事だろうか。意味違う気がするけど。

うんうんと腕組みしながら、恵李朱くんが更なる追い討ちを放つ。

「とにかく、骨抜きにされちゃったわけだね。直生くんもヨハネも。魚の骨だけに」

「おお、エリくんうまいこと纏めたねえ」

「いやうまくねーし! てか、お前の喉に骨が刺さったって話なのに、なんでオレの話で纏めるんだよおおおおお!」

「まあまあ、こんないい話が聞けたと思ったたら、魚の骨が刺さったのもやつぱりそう悪くはないよ」

「お前の万年ポジティブシンキングもいい加減にしろよ!? 刺すぞ!? イヤリングの先

をー！」

「えっ、それ貸してくれるの!？」

目をキラキラさせた私の前で、顔の火照りが未だ冷めやらない直生くんはやれやれとため息をつきながら、耳元に黒のルーپیヤリングを付けてくれた。ヨハネさんと直生くんがお揃いにしてる奴だ。耳に提げるとピアスに見えるそれを、自分のパーカーを羽織った私の耳にあしらって満足そうに眺めた直生くんは、ふと照れを隠すように明後日の方向を向きながら、ぽんと私の頭を撫でた。

「お守り代わりだ。貸してやるから、風邪引かねえように今日は家で大人しくしてろ。待合、寒かったんだろ」

「うぬ。ありがとう」

「じゃあ、ボクは早く治りますようにっておまじないかけとくね（? ）」

「ぼっ、ボクも、痛いのとんできますようにっておまじないするね!」

「二人もありがとう」

放っておくと怪しげな祈祷を始めそうな勢いの夜羽くんと恵李朱くんを、ぎゅつと抱き締める。

直生くんが大事に至らなかったのもよかったし、甘々エピソードが聞けたのもよかった。その激甘な角砂糖の一片くらいを飲み込んだら、この痛みも鎮静化したりしないも

のかしらと思いながら、私は一口、ぬるくなったお茶を啜ったのだった。

マルメロ家×夜恵城【本丸】

小さな本丸の、超病弱な主と不思議なぬいぐるみの話

「……」

「……」

「……長谷部、あの」

「は、はい？」

妙な緊張感の漂う、布団が敷かれた座敷部屋の中。

急須から茶を注ぐ青年——へし切長谷部きりはせべをじつと注視していた、当本丸の審神者さきにわこと

紫咲ムラサキは、急須に添えた男の大きな手が微かに震える様を見て取ると、まっすぐに顔を上げて声を掛けた。

「そんなに、私の前で緊張しなくてもいいんだよ？」

布団の上で、部屋着姿のまま上半身を起こしたムラサキを、藤色の目が驚いたように見つめ返す。

へし切長谷部は、この本丸に来た二十五振目の刀。まだ顕現して日は浅いものの、主への忠心は噂に聞いていた通り余りあるもので、出逢った時からこうして自ら甲斐甲斐

しく、床に伏せる主の看病をしに訪れてくれる。

そんな彼の、主という存在に對してやや鯁^{しやちほじ}銼^はばっているとも取れる態度が、今のムラサキの言葉を受けて、初めてほんの少し揺らいだ。

暖かな午後^の陽射しが障子越しに落ちて、ムラサキの肩に掛かる羽織を優しく照らしている。

「申し訳ありません……つ、主の前で粗相をしてお気を遣わせるつもりはなかったのですが」

「いやいやつ、全つ然なんも粗相なんかしてないし！ でも何か……失敗して嫌われるのを凄く怖がっている、ように見えて」

虚を突かれたように、長谷部の顔へ驚きの表情が浮かぶ。

ムラサキの観察眼に自信はなかったけれど、強いて言うならば恐怖——忠誠の中に漂う、捨てられる事への恐れのようなものを、彼女は嗅ぎ取っていた。

だから、それを伝えようと手を伸ばさず。怖がらなくていい、完璧にしなればなどと思わず只ここに居ていいのだと、安心させるように。

急須の上の手を細い指で掴むと、言葉はなくともその心持ちを察したのか、彼はひとつ息を吐いて、照れた様に和らいだ表情を覗かせた。

こんな無邪気な顔もする、とムラサキは少し目を見張ってみせる。

「いえ、大丈夫です。お心遣い痛み入ります。不器用な俺が茶を淹れるには、些か肩に力が入り過ぎていたようで。そんなところまで主に見破られてしまうとは、俺もまだまだです」

「別に私、布団の上にお茶ひっくり返してぶち撒けられたとしても怒ったりしないよ？色々してもらってる身で」

「さすがにそこまでではありませんよ!？」

熱いのでお気を付けて、と渡される掌はやはり少し震えていたが、桜色の湯呑みを受け取りながら、ふふ、と口を付けて微笑むムラサキを見て、先程の発言が冗談の一つだと理解した長谷部も、釣られたように少しだけ笑い声を上げた。

「長谷部でも、お茶溢しそうなくらい緊張とかするんだね」

「そりやしますよ。何せ、俺にとつてはこの姿でお仕える初めての主ですから、結構ガチに……って、そんな話はどうでもよくてですね!」

「いや、なんか長谷部は、私執事でも雇ったかしら？　ってぐらい一生懸命仕えてくれるから……そんなに肩の力入れなくていいし、今みたいに多少フランクな付き合いが出来る方が嬉しいよ、私」

「そう、でしようか……?」

脚を崩せばよいのに、布団の傍で礼儀正しく正座する姿を目にしながら、ムラサキは

再び彼の手元を眺め、闘い慣れた手だ、と思う。

鍛錬や戦闘の連続でママやタコが出来た、逞しい手。どうしてそんな強い手の持ち主が、病気がちの小娘（三十路近いが少なくとも見た目は）一人に、震えねばならない程緊張する必要があるのだろう。

そう思つたムラサキだが、もしかしたら向こうも、距離感を計りかねていたのかもしれない。心配は常日頃から痛いほど感じるけれど、今は何かこう、生の本音のようなものを聞き出せたのが、ムラサキにとっては嬉しい瞬間だった。

何せ、刀剣たちとの間柄はおろか、この本丸自体も運営が始まったばかりで、日が浅いとかいうどころじゃないのだから。

こぢんまりした自室の中、遠い目になりながらムラサキが呟いた。

「まさか審神者業を始めてひと月目に、一ヶ月のうち半分近く寝込む羽目になるとは……」

「主はもう十分頑張つておられますっ！ そのお身体を押しての鍛刀と、各種出陣への指令と隊結成に内番の指示まで……っ」

すかさず身を乗り出さんばかりに褒めちぎる長谷部を前に、ムラサキは羽織の袖をばたばたと振る。小柄な体に、大きめの作りをしたその袖はかなり余っている。

「や、私はやってって頼んで様子見に行つてただけだからっ。やってくれるのはみんな

「など職人さん達でしょ？ 部屋から出られない間は、伝令も長谷部とかまんばちゃん頼みだし……」

「うう、主のお使いになる霊力を少しでもお身体の休養や治療に当ててくだされば、主も早くお元気になれるかもしれないというのに、俺はなんとふがない……！」

「大丈夫、上限が極端に低いだけだから私の！ 長谷部やみんなは何も気にすることないよ！」

袖で覆って涙を流しそうな勢いの長谷部を慌てて止めてから、ムラサキはふーと吐息をつくど、ぱたんと長い髪で仰向けに転がった。平凡な色の瞳に、格子型の天井の木目が映り込む。

そう、この本丸最大の要にして最大の問題は——ここの審神者があまりにも貧弱過ぎる事である。

元々ムラサキは、未来や異なる世界軸を行き来する、いわゆる異世界間移動の能力と実績を買われ、他の世界での生活や仕事と兼業する形で、この審神者業にスカウトされた人間だ。

が、そう言うとき聞こえはいいものの、単純に言うとき「なんでか知らないが異世界を都合よく渡れる」という特異性を好条件として雇われただけで、それ以外の能力に関しては、平均どころか下から数えた方が早い。

加えて生来の病弱さに、靈力の消費や審神者業の負担によって拍車が掛かっているようで、調子の良い時はともかく、悪い時は中途半端な微熱や体調不良が続いくら休養すれども治らず、業務に本腰を入れられないという有様である。

そのへんの事情を考慮され、最初からあまり重い任務は任されていないので、マイペースに続けてくれていいと上からは言われているが——正直、頼むばかりで何の役にも立てない審神者というのは、かなり情けない。

「折角、私も体力作りのためにみんなと一緒に走り込みとかしよっかなって思ってたのにな」

つまらなさそうに横向きで膝を抱えると、そんなムラサキに長谷部はやや心配したような、それでいて呆れたような目を向ける。

「主……熱も下がり切らないうちから無茶はやめてください。まずは調子のいい日に鶯丸と縁側で日向ぼっこするぐらいのところから始めて頂かなくては」

「そんなレベルから!?!」

「もしくは、短刀連中と一緒に柔軟と体操ですかね。それが出来たら厩までの散歩。徐々に距離を伸ばして、最低でも徒歩で本丸を一周出来るくらいになつてから、それ以上の運動は考えてください」

「……」

布団を抱えて膨れっ面で黙り込むムラサキを、長谷部は苦笑して覗き込む。年で言えばムラサキもかなり食っているはずだが、その童顔と身長故に年齢以上に見られる事が滅多にないせいで、側から見れば、駄々をこねる妹に説教する兄……のような図に見えなくもない。

「主。どうかお気を悪くされなくてください。意地悪や馬鹿にして言っている訳ではありませんよ」

「知つてますよう」

「衰えた体力を戻すには時間が掛かります。ましてや主は元々の体力が低い方なのですから、尚更時間が必要です。現に、微熱とはいえ二週間近く発熱が続いているんですよ？ 熱を出し続ける事でこれ程体力が削られているというのに、まだ室内をうろつき回れるのが不思議なくらいです」

「そこまで言う!?! いや表の世界でも仕事休んでるし、熱と怠さ以外何の症状もないんだから！ てか打ち解けてからなんか急に言い方がズケズケというか厳しくならなかった!?!」

あまりの言い草に空の湯呑みを返却して憤慨するムラサキを、長谷部はしれつと布団から起き上がりせずに押し戻すと、その肩口まで布団を引っ張り上げる。

「緊張するな、というのがご命令でしたから。主に親しむ為であれば、この長谷部、僭越

ながら多少厳しい言い方は致しますとも」

「うゝゝ……」

「今はゆっくり体を休めて、早くお元気になつてください。本丸の連中は、皆主の顔を見るのを心待ちにしております」

全て反論の余地もない上に、爽やかな微笑で言われるともうどうしようもない。

どうやら主が眠りにつくまで、監視してその場を動くつもりのないらしい長谷部の張り切りぶりに、諦めて溜め息をついたムラサキは、背を向けて布団を被ると、横になつたまま目を閉じた。

が。

「……」

「……」

「ねえ、長谷部、あのさ」

「はい……?」

「何か面白い話ない?」

「先ほど俺はゆっくり休んでくださいと言いましたよね!」

就寝姿勢に入つて五分も経たないうちに休養を放棄する主に、長谷部のツツコミが爆発するものの、発熱からくる暑さで足回りの布団を蹴つ飛ばしたムラサキも負けてはい

ない。

「だつたつてつまらないんだもん！ もう何日、自室とその周辺に籠り切りになつてると思つてるの！ 飽きちやつたよ！」

「飽きた飽きないの問題ではありません！」

「眠らなくてもちゃんと休養する方法はあるでしょ!？」

「それを許可すると主はいつまで経つても携帯端末を弄るだの本を読むだの、結局疲労を溜める羽目になつてからそう言つてゐるんです！ 眠れなくとも、横になつて目を閉じるだけで効果はあるんですから、ちゃんとお休みになつてください！」

「じゃあせめて時間切つて！ 目標もないのに永遠に寝てるなんて地獄だから！」

はあ、と額に手を当てた長谷部が、壁の時計を見やる。

この主、体が極端に弱いくせに、じつとしてゐるのが苦手なのが問題であつた。確かに、下手に無理をさせると悪化の恐れがあるということ、外にも出さず室内での最低限の活動を強いてきたわけだが、どここの景色も見られずほとんど誰とも会えない、という状況が、主にどれ程の退屈をもたらしているかということも、長谷部は理解できている。

寝ようが起きようが、薬研の調薬した滋養剤を浴びるほど飲むが、一向に劇的な回復が見られず、苛立つたりベそをかくほどの不安や焦燥に駆られている背中も、勿論傍

で見守ってきた。最初は一定の効果を上げていると思われた療養期間も、日が進むにつれ、どうせ何をして同じなら、好きなことをしたり多少の無理をしてもと、主が投げやりに思う気持ちも理解できる。

しかし、それはそれとして、どれほど本人が無駄と思おうと、今は主自身の免疫と回復力を信じて、やれることをやってもらう他はない。それを支えるのが近侍たる自分の使命なのだ、と胸に言い聞かせながら、長谷部は口を開いた。

「では、あの長い針が次にもう一度六を指す時まで。せめてそのくらいの間でいいですから、何もせず、何も喋らず、目を閉じて横になっただけでください」

「一時間でしょ……幼稚園児じゃないんだから、そのくらいは分かるよ」
「それは失礼を致しました」

「でも、そんな風に看病してくれる人に言ってもらうのって、本当に子供の頃ぶりくらいかな。なんか、ちよつと嬉しい気持ちになるよね」

ありがとう、と目を細めて礼を言ったムラサキは、満足そうに深呼吸して目を閉じる。もつとゴネられるかと拍子抜けしてその様を見ていた長谷部は、微かに口元を緩めると、座したまま姿勢を正した。

「眠れないのであれば、薬研が見つつけて来た『ひーりんぐみゅーじつく』という奴をお流ししましょうか？」

「あれ怖いぐらい効くんだよなあ……私寝つき悪い方なのに、あれ掛かっていると一時間くらいで寝れちゃうんだよね。どこで見つけて来るんだろ。でも、折角効いてるから、昼寝じゃなくて夜寝る時に使いたいかな」

「さよう御座いますね。それでしたら……」

ふと、何かを思い出したように、長谷部はムラサキが布団の脇に積んでいた本の山から、一冊を漁り出す。不思議そうにきよとんと目を瞬かせるムラサキの前へ、その幅広な一冊を翳しながら、長谷部はにこやかに微笑んでみせた。

「それでしたら、こういうのはいかがでしょう？」

「今、帰った」

「ああ。山姥切か」

「主は就寝中か？」

「見ての通りだ。よく眠っていらつしやる」

その日の夕方。午前中に出発した遠征から漸く帰って来た、主の初期刀こと山姥切やまんばぎり国広くにひろは、気配を察して主の部屋の襖を開けるなり、その身に纏う布を翻しながら静かに歩み寄って来ると、枕元に座る長谷部と小声で言葉を交わす。

普段はどの刀も入る前にノックくらいはするが、こうして主が休んでいることも多い

為、忍び足で入つて来ることを特段長谷部も咎めはしない。

お気に入りの人形を抱き、子供のようによすよすと寝息を立てる主を見て、山姥切はその碧眼を少し驚いたようにぱちくりさせた。

「昼間だから、まだ起きているかと思つていたが。茶や薬でも眠れなくなると騒いでいた主相手に、よく寝かしつけに成功したな」

「ああ、それはな……」

山姥切の言葉を受けた長谷部が、いつもの眉間に皺の寄つた顔ではなく、楽し気にすら見える表情で苦笑するので、山姥切はますます意外そうな顔つきになったが、長谷部はそれを気に留めることもなく、傍にあつた「もういちど読む日本史」と書かれた本を持ち上げてみせた。

「主は、歴史の勉強が大層苦手なようだな。これを隣で朗読して差し上げていたら、案の定数頁もいかぬうちにぐつつすりというわけだ」

「……なるほど」

その時の様子を思い出したのか、長谷部は声を殺しながら、くつくつと肩さえ揺らしながら笑っている。

授業中に生徒の眠気を誘うかのような安直な手法に、山姥切は呆れたような、それでいて愉快そうな表情を微かに口元に浮かべたが、あぐらをかいて隣に座ると、ふと思ひ

出したように言う。

「しかし、主は苦手と言っていただけで、特段歴史が嫌いという訳ではないだろう。お前だって、話が下手というわけじゃない。刀としての経験を生かして本気で講義すれば、もつと熱心に聞いてもらえるんじゃないのか？」

いつも不愛想なことが多い山姥切から、誉め言葉とも取れる言葉を投げかけられ、今度は隣に座る長谷部の方が面食らう番だった。

その根が素直な性格に、ふ、と小さく一度笑みを漏らした長谷部は、夕陽に淡く輝く髪をかき上げると、主の寝顔を見下ろした。

「そんなことくらい、言われずとも分かっている。主は好奇心旺盛なお方だからな。そうするのもやぶさかではないが、あまり話に気合を入れ過ぎると、今度は主が興奮で眠れなくなってしまうだろう。それでは意味がない」

「それもそうか」

「安らかに眠っていただくことを計算に入れ、わざとつまらない読み聞かせをそのお耳に入れるのも、俺としては当然の務めだからな」

どうも、意図的に眠くなるような読み方をしていたらしい。

ひとつ頷いて、フードのように被った檻褌布の端を引っ張った山姥切は、小さく呟いた。

「まあ、それも含めて、あんたにしか出来ない芸当かもしれないがな」

「? どういうことだ」

「主は、あんたの声が好きだと言っていたぞ」

「!!」

動揺のあまり、傍の湯呑と急須を引つ繰り返しそうになった長谷部が、すんでのところで取り押さえて音が出るのを防ぐ。

その様を面白がっているのか、一矢報いたとばかりに布の下から金髪の前髪と瞳を覗かせた山姥切は、何事もなかったかのように、小さく笑みを浮かべて盆を指さした。

「見張りなら代わる。そろそろ、薬研の調薬した薬を取りに行く時間だろう」

「あ、ああ。そうだった。茶葉もそろそろ替えてこなければ……すまないが、頼んだぞ」
機を得たりとそそくさ立ち去っていく長谷部の、その耳元までがしつかり赤くなっているのを見届けてから、山姥切はふうと溜め息を吐いて、未だ眠りこける主へと向かい合った。

写しである自分を出逢った当初から何かと気に掛け、現状最も強き刀剣に育て上げながらも、他の刀剣たちへの配慮や采配も怠らない主に、内心感心はしているが、それにしてその言動はたまに素直が過ぎるのではないかと思う。近侍になる機会が多いが故に、他の刀剣男士達への誉め言葉もよく耳にする山姥切が、律儀にそれを伝えた時の、

他の刀剣たちの浮かれようといったら。姿を見せなくても、主の言葉は十分彼らに響いているらしい。

どこか、我儘な子供のような……それでいて全くの考えなしという訳でもない、脆いのか強いのか、よく分からない主。

体を丸めた猫のような寝姿を見ていると、ふと山姥切は妙な気配に気が付いた。

(ん……?)

付喪神たる彼には、その発生源はすぐに分かる。主のすぐ傍……その腕に抱かれている、二体の人形だ。白いシャツとジーンズを纏った、白い肌の人形と、デニムのワンピースを纏った、浅黒い肌の人形。揃いのリボンを付けたそれらをじつと眺めた山姥切は、きつくその青い目を細めた。

(こいつら、両方とも何か『憑いて』いるな……?)

どちらも瞳は青く、髪は短い。すごく似ているという訳ではないが、どこことなくきょうだいっぽい雰囲気纏っている。長谷部からは特に何の引継ぎもなかったので、山姥切は思わず嘆かわしい気持ちになった。

(あいつ、こんな妙なものを傍に置いておいて気が付かないとは……)

緊張が走り、自分が今のうちに処理するべきか、と山姥切は一瞬刀の柄へと手を掛けたが——間もなくすぐにその白い指先を解いた。確かに何かの気配を感じるものの、よ

くよくよく探してみると、害意や悪意のような危険なものを感じない。霊というよりは、むしろ座敷童や付喪神を見ている時の感覚に近いような……

不意に、虚空を見上げている白い肌の人形と、山姥切の目がぱちんと合った。山姥切を見た人形は、明らかに布で作られていると分かるその目で、ぱちこんと瞬きしてみせる。どう見ても、普通の人形ではない。

(ああ……)

どうしろと、と頭を抱えなくなった山姥切だが、根のやさしさが手伝ってか、それとも喋り相手がいなくて暇だったのか、気が付けば主の懐にいる人形へ向かって呼び掛けている。

「おい。そこにおいては窮屈だろう。こっちに來たらどうだ」

「……!!!」

今度は、瞳以外の場所が明らかに動いた。こてん、と毛糸で作った体で寝返りを打つと、白い肌の人形は毛糸の髪の下から、じーっと山姥切の方を見ている。

やがて、主の腕に押しつぶされていたその人形は、よじよじと身をよじって己の毛糸製の腕をすぽんと二本出すと、宙に向かって差し上げ、幼い鳴き声らしきものを上げ始めた。

「うー!」

「……」

「うー！ う!!!」

「……なんだ。抱き上げて欲しいのか？」

「だうっ、あうっ」

「おい、こら、静かにしろ。主が起きるだろう」

慌てて両手で引つ張り出すと、胡坐をかいた山姥切の膝の上へ移動されてきた白い肌の人形は、ようやく大人しくなる。片手で山姥切の白い布を握り締め、もう片方の手を口元でちゅうちゅう吸いながら、黒髪おかつぱの人形が、不思議そうに山姥切の瞳を見つめていた。

「??？」

「こうして見ると、人形というよりはぬいぐるみだが……。手作りなのか？ 主の力の気配がする」

「ふーん。あんた、ボク達のことかわかるんだ」

膝の上の人形を観察している間に、もう一つの声が話し掛けて来て、山姥切は思わず飛び上がった。跳ねた膝と一緒に飛び上がった白い肌の人形が、きやつきやと楽し気に声を上げている。その一方で、まだ主の腕の中にいたもう一体の浅黒い肌の人形が、よっこいしよとその腕を避け、よじよじ布団から這い出してくるところだった。こちら

は、手助けなしでも自力で脱出可能らしい。

「お前、しゃべれるのか」

「一応ね。ボクがおねえちゃんしてるから」

「おね……女、なのか……？」

「ボクは、一応男。でも、色々あつてそいつには女と勘違いされたみたいでさ。そいつなら、ズボン穿いてるけど女で合ってるよ。多分」

まあ別にどっちだっていいんだけど、と澄ましたことを言いながら、浅黒い肌の人形は、しれっと山姥切の膝の上で足を組むと、白い方よりはやや長めのおかつばを、手で梳かし始めた。各々好き勝手にくつろぎ始める二体を前に、反応に困る山姥切。

「というか、お前らなんで揃って俺の膝の上に座るんだ」

「そいつだけなんてズルいだろ」

「そう……かもしれないが……そもそも、何者だお前は」

「あんたの主に聞いてないの？ ボクは小翰^{コハネ}。櫟^{クヌギ}・小^{しょう}・夜翰^{ヨハネ}を略して小翰。あんたと主を同じくする者。まあ、主というか、ボクらの場合はちよつと特殊なんだけど。そつちはちび」

小翰と名乗った浅黒い肌のぬいぐるみはそう言うが、相方に関する説明が大変雑だ。

自分は大層な名をもらつておいて、そんな適当なことがあるかと山姥切は思ったが、

ちびと呼ばれた方は両腕を振って反応しているので、間違いという訳ではないらしい。少しずんぐりむっくりしたちびは、食いしん坊のようである。一つの間にか傍の皿にあった煎餅をがしがじと貪っている。スーツの上を煎餅の粉だらけにされたが、もうそれは諦めることにして、山姥切はそのちびと小翰を交互に見比べ、ふと気付いたことを口に出した。

「……なあ。あいつをちびと呼ぶが、お前の方が小さくないか？」

「ボクの魂の片割れが華奢な奴だったから、サキがそういう風に作ったんだよ。ボクらにはそれぞれ、モデルになった元の人間がいる。ボクの方が後に生まれたし、あいつとは毛糸の細さも綿の詰め方も違うから、サキも何度か作り直しはしてたけど、同じにはならなかった」

「それなら、その過程でお前達の魂も、元になった人間とは別にして顕現したということになるな」

「完全に別じゃないけど。本体と繋がってるから、何を考えてるかくらいはわかるよ。こういうの、分け御魂って言うんだっけ。分霊箱って呼んでる世界もあるよね。まあ、ボク達には神格も何もなし、あんた達からすれば妖怪か何かだろうけど」

「けど、主は大事にしてたんだろう。お前達のことを」

動くことは今この瞬間まで知らなかったが、本丸へ来る度に連れて来て、毎晩床に並

んで入るほどお気に入りぬいぐるみならば、物であっても——いや、同じ物であるからこそ、どれほど大切にされてきたのか、山姥切にも想像がつく。

そう話していると、膝の上に飽きたのか、今度はちびが山姥切の纏う布を掴むと、肩の方に向けてよじよじ登り始めた。

「うっ、あう」

「おい、落ちるぞ」

肩に乗りたいたいのか、と手で掴んで乗せてやると、ちびはそこから滑り台のように身を覆う襪褌布を伝い、しゅーつと下りて来て山姥切の膝のすぐ傍に着地した。自分でも何が起こったのか分からないというように、尻餅をついたままきよきよ周囲を見回している。

「……うっ」

「ほら、だから言わんこつちやない……」

「!!!」

「が、どうやらそれが気に入ってしまったらしく、ちびは再びダダアと駆け寄って来て膝からよじ登ると、肩の上まで行って布を滑り降りようとする。いつの間にかフードが脱げるほど布が引つ張られていたことに慌てる山姥切の傍で、ちびは転がり落ちて遊んでいるし、小翰はあぐらの内側に布の端を引つ張って来てハンモックを生成しようとする

る始末だ。

「うっうー、だう。きやきや」

「ボクはここが気に入ったから、ここで寝る」

「おい、この布は滑り台じゃない！ そんなに何回も滑ったらお前の体が汚れるだろう。大人しくしている。お前も、俺の布を巢材にして勝手に寝るな！ そもそも、あんまりお前らと騒いでいたら、主が……」

と。そこまで告げて布団に目を移した山姥切は、固まった。

もうとつくに目を覚ましていた主——ムラサキが、何をしているのかと言いたげな目で、布団の中からぱちくりとこつちを見ていたのだった。

「まんばちゃん、帰って来てたの……？」

「あつ、主………これは………」

誤魔化そうにも隠れようにも、ぬいぐるみ二体にべったりくつつかれ、身動きは取れないし体は菓子屑だらけだしで、山姥切にはどうしようもない状況だった。そのなりゆきをぼかんと見ていたムラサキは、布団の中で楽しそうに笑い出す。

「ふ、ふふっ……。ご、ごめんね。帰って来たのに気付かなくて。おかえり。遠征お疲れ様」

「あ、ああ。成果報告に来たらあんたは寝ているし、代わりにこいつらが……」

「うん。うちの子なんだ。ごめんねびつくりさせて。でも、珍しいね。この子達、いつも誰が部屋に来てても動かないのに。まんばちゃんのことを、よつぽど気に入ったみたいだよ」

そろりと身を起こした主が、首が絞まりそうなほどネクタイをぐいぐい引つ張るちびを見かねて手を伸ばす。

「こら。苦しいから引つ張つちやだめ。それ遊び道具じゃないんだよ。そんなにぐいぐいしたら痛いでしょ」

「……」

「まんばちゃんにごめんなさいしようね」

「……」

膝の上に立ったちびは、思いのほか素直にペこんと頭を下げると、主の布団へ戻って行った。目を擦った小翰が寝ぼけたまま山姥切の布を引き摺って行こうとするのを、ムラサキは苦笑して引き離す。

「ごめん。私が寝てる間にだいぶ迷惑掛けたみたいだね……。ありがとう、遊んでくれて」

「いや、それは構わないが……。その二体は、随分知能や言語能力に差があるみたいだな」

「うん。元になつてゐる本体の、魂の性格や本質に影響されてゐたいでね。どっちも、本体の精神面は大人に違いないんだけど……本体達の思いや隠れた願望が、私が作つたぬいには反映されるみたい。ちびは、ちよつと甘えん坊なの。だからあんまり上手く喋れないけど、周りの人が発する言葉はちゃんと理解してるよ」

その説明に納得したような素振りを見せながらも、被り直した布の下からじつとぬいぐるみを注視する山姥切を見て、ムラサキが不思議そうな顔になる。

「……名前、本当にちびなのか」

「ああつ、えつとね。はい、こつちに来てご挨拶して。鈴木・ちび・愛理です。本体の名前は鈴木愛理だから、間にちびが入つてゐるんだけど、長いからみんなちびつて呼んでるんだ」

驚いて瞬きする山姥切の前で、ぶんぶん大きな頭を振つて頷くちび。その様子を見ていたムラサキは、嬉しそうに微笑んだ。

「もしかして、この子が適当に呼ばれてるんじゃないかって心配してくれた？」

「いや、別に……。由来があるなら、それに越したことはないが。少し気になつただけだ」

「やつぱやさしいねえ、まんばちゃん」

「どのへんがだ。俺は、写しな上に刀だぞ？」 人斬りの道具と仲良くなつたところで、こ

いつには何も利点など……」

「でも、やさしいって感じたから、ちびは遊んで欲しいって思ったんだと思うよ。そうじゃないと、自分から近づこうとなんてしないもの。この子案外人見知りだからね」

主の代わりに布団を陣取って、小羽がすびすびと昼寝の続きに入る一方で、ムラサキに両手で抱えられたちび愛理は、山姥切の方へ「だう」と声を上げながら丸々した手を伸ばす。反射的にその体を受け取った山姥切の頭上から、ひらひらと桜色の物が舞った。目に留めたムラサキが、瞳を丸くする。

「……おや」

落ちて来る花卉を見て、目をきらきらさせたちびが、山姥切の膝の上から手を伸ばす。その鼻の上に大きな花卉を乗せたちびは、次から次へと降ってくる小さな桜の欠片にも、手を振って大喜びだ。

「だう。あー、うー。きやつきやつ」

「よかつたねー。まんばおにいちちゃんも、ちびが好きだつてさ」

「なつ……！　そういうことではつ……、というか、お兄ちゃんとはなんだ！」

「実際堀川くん達と兄弟だし、丁度いいじゃない？　お兄ちゃん役」

複雑な面持ちで山姥切は膝の上のちびを見下ろしているが、その心情はちらちら降る桜に正直に表れている。

と、そこへ軽く襖を叩く音が響いた。主が起きていることを察した長谷部が、部屋をノックしたらしい。

「主、お加減はいかがでしようか。先ほど、新鮮な梨が手に入ったので、おやつに……」
そう言いながらにこやかに襖を開けた長谷部が、見知らぬ生物たちとの邂逅に固まる。

「主、これは……??」

「あ、ええつと……長谷部には紹介まだだったね。私の枕元にいたぬいぐるみ……」

「そつ、それは見ればわかりますが！ 動くほどの力を溜めていたとは……主の霊力の賜物ですか？」

「なんなんだろうね。この本丸に連れて来た時は、私が動かさそうと思わなくても、この子らの意思で自由に動けるみたい」

謎の現象を警戒してか、ややこわごわと、盆に乗せた果物と茶を長谷部が運んでくる。その匂いを嗅ぎつけて目を覚ましたのか、布団から起き上がった小翰が「梨だ！ 美味そう！」と声を上げたので、余計にびくつと肩を震わせてびっくりしていた。

しやくしやく欠片を頬張るぬいぐるみ達と梨を分け合いながらのムラサキの説明に、長谷部はまだぼかんと見慣れないそれらを観察している。

「しかし、いくら力の気配が小さいとはいえ、これだけ傍でお世話をしておきながら、こ

の俺が気付かないとは……どうして、もっと早く言つてくださらなかつたのです」

不意に、梨を食べる手を止めてじーっと見上げるちびと、山姥切は視線を交わした。

「……」

「こいつは、お前が怖かつたと言っているぞ」

「おい山姥切！ 言葉も発していないくせに出鱈目を言うな！」

「元々喋らないんだ。物同士、何を言いたいかくらい大体分かる。どうせお前のその怒鳴り声をどこかで聞いたのだろう。気配を消すぐらい警戒されても仕方がないな」

「そ、そうなのですか、主……？」

「あ………だ、だいじようぶ。長谷部もそのうち仲良くなれるよ、うん」

しよげかえる長谷部を慰めているムラサキの傍で、ちびと小翰はすっかり山姥切の布に隠れて、その様を見守っている。その二体を片手で支えながら、山姥切は小声で話し掛けた。

「大丈夫だ。あいつは、口はでかいが怖くはないぞ」

「だつてあいつ、サキ以外の奴には優しくなさそう。人間の本质を見る時は、その人間の親しい相手以外への態度を見ろつて、ボクどこかの本で読んだことあるぞ」

「お前は難しいことを知っているな……。まあ、しかし、ああ見えても付き合いは悪くない奴だ。慣れたら仲良くしてやってくれ」

そう小翰にたしなめる山姥切のネクタイを、隣で飽きずに引つ張るちび。珍しく苦笑しながら、観念した山姥切がその青いネクタイを外す。

「お前、本当にこの布が好きだな」

「だうっ」

「洗い替えもあるし、一本くらいなくなっても問題はない。そんなに気に入ったならお前にやろう」

ひらひらと猫じゃらしのように布を翳されて、ちびはすっかりご機嫌のようだ。それに気付いた小翰が、すかさず唇を尖らせる。

「いいな。ボクも何か欲しい」

「この襪は駄目だぞ。俺が使う。こっちの細いやつで二人仲良く遊んでいろ」

「いーじゃん、ケチ！」

「ケチとか言うな。ったく、仕方がないな。今度切れ端でも持つて来るから……」

着々と山姥切が仲良くなる様を目にしながら、長谷部がムラサキの傍でずーんと落ち込んでいる。

「主……ぬいぐるみと仲良くなる為には、やはり物を積まなければ駄目でしょうか……？ それとも、やはり俺ごときでは主の期待には……」

「いや、物に釣られるとも限らないし……っていうか、別にうちの子だからって、長谷部

が無理矢理仲良くする必要ないんだよ!?　なんか変なプレッシャー感じてない!?　別に、自分から仲良くしたいと思わないのに無理して好かれようとする必要とかないんだからね!?”

大層ややこしい悩みを抱えてしまいそうな長谷部の前で、ムラサキは慌ててどう助言したらいいか考えつつも、己の大切な存在に新たな友人が出来たことに、東の間体調不良を忘れるほどの嬉しさを覚えていたのだった。

何もできない私に、たった一つできること

彼岸の頃——二十四節季で言う秋分はとづくに終わってしまったが、秋晴れのよい天気が続く中、彼岸花の開花時期はまだまだ続いていた。

「主さん！ はいこれっ！ 遠征先で見つけてきたよー！」

「オレもオレも！ 資材も拾ったんだぜ！ エラいだろー！」

「えらいえらい。ありがとね、みんな」

縁側に座つて日を浴びる主・紫咲ムラサキの元へ、短刀たちがたつたか駆けて来て、大はしやぎで成果を報告しては、頭を撫でられ嬉しそうに微笑んでいる。

猫のように主の膝に頭を乗つけて、太陽に輝く金の長い髪を主の手に弄ばれているのは、乱藤みだれとうろう四郎。スカートスカートの正装と無邪気な表情も相まって、一見かわいい女の子のように見える短刀だ。

そして、その主の隣に座つて得意げに足をぶらつかせているのは、赤いつんと立った髪に鼻の上の絆創膏が特徴的な短刀、愛染あいぜん国俊。いかにもやんちゃ坊主、という風貌の愛染は、今日見て来た面白いものの話をしながら、主を楽しし気に見上げている。

「おい、貴様ら。主は最近部屋から出られるようになったばかりなんだ。あんまり長

時間話をして疲れさせるな。さつきと部屋で着替えて風呂でも入って来い」

「長谷部さんは過保護だよ。たまには太陽の光でも浴びた方がいいよねつ、主さん」

「そうだぞ！ オレらとチャンバラしたら、びよーきの事なんかすぐ忘れちゃうつて」

「なつ……！ そんな激しい運動を主にさせてたまるか！」

主を案じて口を出す長谷部にぶーぶー反抗しながらも、立ち上がって本丸の廊下を駆けていく短刀たち。

「おい、走るな！ 掃除したばかりの廊下に埃が立つ！ 汚れたら明日の掃除当番はお

前たちの担当だからな！」

「えくく？ ここを通る刀はボク達だけじゃないでしょ。さつき出陣から帰って来た子達も一緒に通ってたじゃない」

「主お世話係は不公平だつて、みんなに言いつけるぞ！」

まったく今日も賑やかだと、口は出さずにその様子を並んで見守っていた山姥切の隣で、不意に主が、視線を廊下の奥に向ける気配がした。

(……………)

怪訝に思つてそれとなく盗み見れば、長谷部にあつかんべをする愛染国俊を見つめる主の目に、何とも言えない光が宿っていた。

いつものように愛しい刀を見つめる目に、どことなく寂しげで哀しい、何かを震えな

がら堪えているような色を感じる。

それを不思議に思っていると、見られている愛染国俊も、突き当りの扉を開けようとしながら、きよとんと主を見返していた。

「？ 主さん、オレの顔になんかついてつか？」

「あ、う、ううん。なんでもないの」

「あ。はっはあく、さてはこれだな」

言うが早い、愛染は長谷部が止める間もなく、全力ダツシユしてその背中を跳び箱のように跳躍力で飛び越えると、だだどと大きな音を立てながら主の傍に着地する。瞬きひとつ分ほどの間の、俊敏な動作だった。

「あんの野郎、本丸を壊す気か……！」

「まあまあ、長谷部さん……！ 国俊のやんちゃなんて、今に始まったことじゃないし！」

怒り心頭の長谷部をなんとか乱が宥めているのを背景に、愛染が主の前へ、後ろのポケットからさつと風車を差し出す。

「ハイ、これ！」

「え……」

「お土産につて、帰り道に買って来たんだ。ホントは着替えてから主さんに渡しに行こ

うって思つたけど、あんまりじつと見てんだもん。これが欲しかったんだろ？ オレが隠してたもんを目ざとく気付くなんて、さつすが主さんだな！」

赤と青の風車が、微かな秋風に揺れる。

手に受け取つたムラサキは、息を飲んで愛染を見つめ——その瞳が、喜びというよりは、やはり切なさで泣き出しそうな色に染まっているように、傍に居る山姥切には感じられた。

「……ごめんね。ありがとう」

「……??? なんで主さんが謝んだよ？」

「あつ、そつ、そうだよね。私つてば変なことばかり……こういう時はありがとうだよね。ありがと。私のためにつて考えてくれて、すごく嬉しい」

「へっへへ、驚かせるのは失敗したけど、ちゃんと渡したかな！ これで、さつさと元気になってくれよ」

何度も頷いて、誇らしげな愛染の頭を撫でる主の目に、さつきまでの切実な感情はもう読み取れなかったが、優しさの中にどこかちりちりと胸が痛くなるような、そんな複雑な思いを感じるの、自分の気のせいだろうか。

山姥切はそう思つて首を捻りながらも、その場で主に尋ねるようなことはせず、皆と共に本丸の母屋へと引き返した。

その日の夕方。

陽が落ち、風が冷たくなり始めた頃になってもまだ部屋に戻らない主を案じて、山姥切は敷地の一階を歩き回っていた。

いつもこういう役目は長谷部が担うことが多いのだが、あいにく別の任務で立て込んでいる。

なんで俺が……と文句は垂れつつも、しつかり主を探してくれる山姥切が、外に面する廊下の角を曲がって、裏庭のあたりに差し掛かった時だった。

(あれは主か?)

この本丸には幾つかの庭があるが、裏庭は狭く遊びに向かないので、誰かが立ち入ることは少ない。そんな生垣の茂る庭の片隅で、気を付けていないと見逃してしまいそうなほど、ちんまりと背を丸めた影が蹲っていた。

土についてしまいそうなほど、袖と裾の余った羽織り。汚れるぞ、と声を掛けようとして、山姥切はふと声を押し止める。

しやがみこむ主の前に、大きめの石のようなものが置かれている。岩と呼ぶには小さすぎるが、石と呼ぶにはかなり目立つ大きさのものだ。その傍に置かれた瓶に、彼岸花が何本も挿されていた。何本か花瓶代わりに置いてあるそれに、主が胸に抱いていた新

たな花を、そつと挿し加える。おそらく、昼間乱たちが持ち帰って来たものだろう。

(あの彼岸花は、景趣交換のために集めているのだと思つたが……?)

この世界には、季節の収穫物を集めると、本丸で使える様々な商品と交換してもらえ
る制度がある。最初はそれ目的で集めていると山姥切は思つていたし、実際に主もそう
口にしてはいたはずだが、彼岸花の必要数は、主の欲しいと言つていた商品獲得分は既に
足りていたはずだ。

にも関わらず、旅先で見かけたら持つて来て欲しい、と主が定期的に彼岸花を強請る
理由。

もしやこの供え物の為に、と思案する山姥切の前で、俯いた主はそつと石に向かつて
手を合わせていた。何かを祈るように、深く首垂れて落ち込むその姿には、山姥切も声
を掛けられない。

やがて、誰かに見られていると気付くこともなく、審神者は静かに立ち上がると、母
屋の方面へと戻つて行つた。

さすがにこの後はまつすぐ部屋に帰るだろう、と踏んで、山姥切は薄暗がりの中、ち
んまり築かれた石を取り巻く溢れるような彼岸花の元へと近寄る。

こんなに目立つ花の色をしているのに、今までこの裏庭を通りがかつた時にも、気付
く事はなかつた。果たして自分が関心を持たな過ぎたのか、それとも主が、他の誰にも

見られないよう結界を施してでもいたのだろうか。

それよりも、この石は。一見すると墓のようにも見受けられるが、出来たばかりのこの本丸で誰かが折れたとか亡くなったという話を、山姥切はついで聞いたことがない。大体、仲間の刀なら、いなくなつた時に気付くはずだ。

であれば、あれは一体誰の墓なのか。

とても聞けるような雰囲気ではなかったが、昼間のことといい、どこか引つ掛かりを覚えたままで、山姥切はその場を後にしたのだった。

後日。

広い庭に面した縁側で、短刀たちが遊びに興じる様子を、主であるムラサキは縁側に座つたまま、ぼんやりと見つめていた。隣で勧められるがまま茶を飲みつつも、山姥切が気遣わし気に、その表情を見て眉を顰める。

風を引つ張つて遊んでいるのは、前田・秋田・乱の藤四郎兄弟。それに加えて、愛染国俊がいた。皆の後をすばしっこく追い掛けながら、例の風車を回している。主に贈られたそれは、結局は愛染の遊び道具として下賜されたらしい。使われるべき人間に使われることを誇るようにして、赤と青の羽根はいっぱい風を孕み、愛染が走るに合わせ元氣よく回っていた。

楽し気なその様子を見守りながらも、主はやはり、どこか幸せ一辺倒とは言えないような表情を浮かべている。複雑で、哀しそうで。そして言うなれば、その視線から感じるのは、罪悪感——どことなく申し訳なく思っているような、そんな気配を感じる。

無邪気な短刀連中を見ながら、主は何故そんなことを考えなければいけないのか。ここ数日、幾ら考えてもさっぱりだった山姥切は、ついに意を決して口を開いた。

「……。主。少しいいか？」

「？ うん。何かな」

空想の世界から帰ってくるようにして、ムラサキがふと顔を上げる。

秋晴れの空から、おだやかな日差しが降り注ぐ縁側。近くに、盗み聞きできそうな刀がないことを確認してから、山姥切は白い布を被ったままで、小柄な審神者の横顔を見下ろした。

「あんた……あの愛染国俊と何かあるのか？」

「っ。えっ、あつ、その……ど、どうしてそんな風に思うのかな」

そう聞きつつも、一瞬息が止まりそうな程驚いたムラサキは、動揺がバレバレの様子で、羽織りを引つ張つたり張つたり長い髪を弄つたりする。あまりの分かりやすさに溜め息をつきながら、山姥切が口を開く。

「あれだけあいつを見ながら物憂い顔をされれば、いやでも察しがつく。別に、刀との関

係が上手くいっていないという訳ではないだろう。何をそんなに悩んでいるんだ」

「あ……悩みつていうか、えつとく……うう」

やはり、話しづらいことであるらしい。膝を抱えて呻り出す審神者を前に、山姥切の口から卑屈な言葉が漏れる。

「……やはり、写しの俺なんかが相手では話も出来ないということか」

「ちがー！ちがー！ちがー！うー！ そうじゃない！ そういう事じゃなくつて……いやでもこの場合はそういう事になるんか……？ ああつ、違うからね！ 待つて！ 落ち込まないで！」

キンキン声で怒鳴りながらも、必死で山姥切が去らないようにとムラサキが布を掴んだせいで、頭を露わにされた山姥切が、思わず片耳を塞ぐ。その様を遠目から見ていた愛染たちが、楽しそうに手を振ってくすくす笑っていた。

「つたく、主さん達、何やってんだよ！」

「あはは、ごめんごめん……ちよつとでかい声で喋り過ぎちゃった」

笑つてそう誤魔化してから、ムラサキは羽織を着直すと、袴姿のままふうと縁側に腰掛け直す。

手元を見つめていたムラサキは、やがて独り言のように口を開いた。

「そうだよね。いつかは話さなきゃって思つてたけど……やつぱり早いうちの方がい

い。大事な初期刀の子に、隠し事はしたくない」

「隠し事？ 俺に？」

「まんばちゃんに、というか、この本丸の大体の刀は知らないことだよ。最近のことじゃないし。知ってるのは、そう……私と、堀川くんだけ」

「兄弟が？」

ほりかわくにひろ

堀川国広。兄弟刀の名が思わぬところから出て、山姥切の頭の中がますます「？」で溢れ返る。怖いぐらい皺を寄せた眉間を見て、ムラサキがそこをつつき苦笑しながら言った。

「そんなに難しい顔しないで。順番に話すから。……話した後も、君がまだ主として、私を慕おうと思ってくれるかは分からないけど」

少し哀し気な顔をした主は、息を飲む山姥切の前でそう前置きして、静かに語り出した。

この本丸に愛染国俊が顕現したのは、ムラサキが審神者を始めてそう間もない頃だった。

他に顕現した短刀たちと同様、そう珍しい刀という訳でもなく、一度は鍛刀で顕れたものの、そのうち戦場でも、出陣した刀たちが何振もの愛染国俊を見つけ、連れ帰って

来た。

同じ刀を何本も見つけた場合、大半の審神者は一番最初に顕現した一振を手元に残し、後から見つけた刀達は錬結・習合・刀解のいずれかの手段を取って、他の刀剣男士達の力の源になってもらう・素材として本丸の力になってもらうということが多い。そうすれば、単にもう持っている刀だからと捨てることなく、志は自身の刀に受け継いで闘ってもらうことが出来る。

不慣れながらも、錬結や習合による強化は、審神者であるムラサキが自身の力を駆使して頑張り始めていたところだった。それまで特に何の問題もなく——出逢った刀達は、皆余すことなく有効に活用できている、はずだった。

「えっ……………錬結も習合もできない!？」

審神者の部屋で思わず大声を出してしまったムラサキに、この本丸での審神者業におけるガイド役、管狐のこんのすげが、困ったように麿眉を動かし、ふさふさと尻尾を振る。

「先日の戦場で拾われた、愛染国俊の件です。主さまからあの一振のみ、連結や習合の一定手順を踏んでも消失しないとご相談を受け、調べて参ったのですが……………どうやら、ごく稀に見る、そういう呪い持ちの刀なのではないかと」

「呪い……………」

例の愛染国俊の、刀の本体を前にして、ムラサキが小さく呟く。他の愛染国俊と全く変わったところのない、ごく一般的な短刀だ。

もちろんムラサキは、他の刀同様、この愛染国俊を当本丸の愛染国俊に、習合させようとした。同じ刀剣男士同士は、習合によって一体化し、片方は消失するものより強化を図ることができる。しかし上手くいかず、愛染以外の他の刀相手に錬結での強化も試みたが、結果は同じ。

最初は一時的に自分の調子が振るわないだけかと思つたが、さらに後から拾われてきた別の愛染国俊は問題なくすんなり習合できたことから、これはおかしいと踏んで、このすけに相談してみたという次第である。

「でっ、でも、なんで……みんなが戦場で拾ってきて、私も確かに顕現したあの子と会つて……全然普通で。練度が低いで、ほんとに全然普通の刀なんじゃ」

「おっしやる通りです。ですが、これをご覧ください」

このすけは、白い毛並みの中から、突然ふわつと光の玉を取り出した。中から一冊の帳簿が出て来て、ぱらぱらつとムラサキの前で捲れる。

「これは……？」

「我々管狐の、七つ道具みたいなものです。これがなくとも主さまがいらつしやれば錬結・習合作業は出来ますので、普段はお見せすることがないのですが……こちらの本丸

に居る刀の詳細がリアルデータで記載されておりまして、このように、錬結・習合・刀解に有効な刀はすべてここに名が出るようになっております」

ムラサキの雇い主自体が未来の存在なので、いきなりハイテクで近未来的な物が出て来るのにもさして驚かず、ムラサキは手で頁を捲った。和紙がぱらぱらと擦れる音。現在、本丸の主戦力たる刀を始めとして、拾って来たばかりの練度の低い刀たちも、錬結・習合可能な相手先として名前がある。しかし、ややあつてある事に気付いたムラサキは、呆然と手を止めた。

「……どうして……？ この愛染国俊の名前が、どこにもない……！」

「そうなのです。つまりその刀は、この時空では存在しないことになっているのです」

「そんなつ……！ だ、だって！ 見えるよ!? ちゃんとここにあるし、触れるんだよ!?」

「顕現までの過程は、恐らく問題なかったのでしょうか。しかし、その刀の構成成分に、時空の捻じれによって何かしらバグのようなものが発生し、結果刀そのものの存在強度に影響を与えてしまったのだと思われます。本質が不安定なので、錬結や習合に足る要素がないのかと……」

どうにもならない、と知ると、ムラサキは難しい思案顔で、こんのすけと再び向き合った。

「……じゃあ、この子はこのまま、本丸に残らせておくしかないってこと……う？」

「不安定な呪われ刀となると、政府の方で仲介しても、引き取り先はまず見つかりにくいでしょうね……。かといって、このままこの本丸に保存しておいても、いずれ他の刀にまで影響が出ないとも限りません。一つの狂いがあれば、連鎖的に正常であつた他の構成要素までもが、将来的に侵されていく可能性もゼロではありませんので」

万が一にも他の刀に危害が出るかもしれない、という言葉を受けると、置いておくかどうか判断に迷う。何しろ、未だ刀達の名前を覚えるだけでも手一杯の自分が、同じ名前の刀を二振も置いて、間違えずに接したり平等に扱ったりできるものだろうか。

そう悩んでいると、こんのすけが口を開いた。

「……ひとつだけ、方法がございます」

ぱつ、と顔を上げたムラサキに反し、こんのすけの口調は重々しかった。告げられた言葉を聞いて、ムラサキの顔から表情が剥げ落ちる。

「つ……、そんな……でも、でも、そんな事したら、あの子は……！」

「錬結でも習合でも刀解でも消滅させられないとなると……もうこれしか手段はございません」

思わず涙でいっぱいになったムラサキの前で、こんのすけは申し訳なさそうに、力なくしよんぼりとその白い頭を垂れた。

蠟燭の灯りが、浸すような夜闇のにじり寄る窓辺にちらちらと揺れる。

「主さまのお気持ちもお察しいたします。できればもつと、穏便で痛みのない方法で、刀としての形を解きたかった。しかし、我々に出来ることは、これ以上何も……」

きつく唇を噛んで、愛染国俊を握り締めるムラサキにこんのすけは暫く寄り添っていたが、やがて静かに一礼し、黒い丸々した瞳を向ける。

「初就任の主様には、大変心苦しい状況かとは思いますが……ご自身が審神者として『何を』守るべきであるのか、十分に考えた上でご判断をお願いいたします」

黄金色の尾が揺れて、障子の間に消えていく。一人取り残されたムラサキは、短刀を抱いたまま、ぼつりと思索に耽った。

それから短い期間、ムラサキはぐるぐると思い悩んだ。

このまま、二振目の愛染国俊を置き続けることへの、メリットとデメリット。

刀剣破壊なんかさせてまで消すぐらいなら、たとえ戦場に出るほど強く育てられずとも、何もせずとも、ずつとうちに居たらいい。

けれど、その間に何か、他の刀剣男士達にまで問題が起きてしまったら。今まで手塩にかけて育てた子に、将来不具合が出て取り返しのつかないことになってしまったら。その責任はどう取る。

同じ刀が二振いるなんて、別に珍しいことでも何でもない。

けれど、もし万が一自分が間違えて、新しい「愛染国俊」の方に、前からいた愛染国俊を習合なんてさせてしまったら、彼の立場はどうなるんだ。

そうでなくとも——呪われていて消せないから、という理由で育て上げられることもなく、微妙な立ち位置のままうちに置かれ続ける「愛染国俊」は、本当に幸せなのか？ 頭の中に、幾人もの男士達の顔がちらつく。初期刀の、山姥切。まだ小さなこの本丸は、今は部隊長であり近侍でもある彼を中心に動いている。その子と、他の刀達の未来が、万が一にも侵されてしまうかもしれない、と思つたら——

命を天秤に掛ける、なんて真似は、したくはなかつた。

それでも、「守りたいもの」を選んだムラサキは、大勢のために一部を犠牲にする形で、決断の舵を取つた。

「堀川くん。……お願い。大事な話があるの」

こんな事、近侍である山姥切には頼めない。知られるのが怖かつた、と言つたら、もうこれは完全に審神者たる自分の弱さとエゴだろう。一番傍に置いて、一番心を掛けている相手に、知られたくないと思つてしまった。それに何より、山姥切が本当はどれほどの刀剣思いで、たとえそれが一番弱い刀を切り捨てるだけの作業であつても、どれほど心を痛めてしまうか、短い付き合いの中でもムラサキには想像に余りある。

勿論それはどの刀でも同じなのだけど、初脇差の堀川国広を選んだのは、現状本丸の

ナンバーツーである信頼と共に、広い心だけではない冷静な判断力と客観的な割り切りを、最も感じる相手だったからだ。

泣き出しそうな声での主の訴えを聞いた堀川は、もちろん驚いたが、ひとつひとつ説明すると、ムラサキの予想していた通り、しっかりと答えを返してくれた。

「わかった。そういうことなら、僕が『愛染国俊』の出陣には付き添うよ。最後までちゃんと見守るから、安心して」

刀剣男士を刀剣ごと破壊するには、「重傷」の状態で戦線に出し、攻撃を受ける必要がある。しかし、「重傷」になった刀剣を単体で、続けて出陣させることは出来ない。その看取り役として選ばれたのが、堀川国広というわけだった。

既に何度か戦闘に出した「愛染国俊」は、「重傷」の状態に追い込まれたままで、本丸にいる。単騎で出撃させても、その傷を癒されることがなくても、疑問に思うこともないまま、ただ無邪気に「やってやったぜ！ ケンカはこうでなくちゃな！」と笑顔を浮かべて。一度などは、単騎で行っても全くの無傷で帰還して、練度が上がったことを主の前で素直に喜んでいた。その度に、自分は何のために隠れて彼を戦場に送り出しているのか、ムラサキは思い出している胸が張り裂けそうになる。

もう一度行け、と言われたら、「愛染国俊」は笑顔で重傷進撃していくのだろう。疑う余地なく、主の命だけを信じたままで。

裏庭に面した人気のない部屋で、出来るだけ堀川には淡々と説明をしたけれど、それでもムラサキは拳を白くなるほど強く握り締めていた。その上にそつと掌を置いて、堀川は主の前に跪く。その悲しくも優しい微笑を、月明かりが優しく照らしていた。

「主さん。僕らは『物』だよ。大切にされるよりも使われるのが本望だし、それが大事な主のためだったら尚更だ。『愛染国俊』も、きつと最期の瞬間までそう思うと思う。どんなにちつぽけな存在でも、主のことを想わない者はない。それを分かっている。配を下せる主さんに……こんなに悲しんでくれるほど、僕らを強く想ってくれる主さんに使われて、『愛染国俊』はきつと幸せだと思うよ」

それは、主を慰めて楽にしようと、気休めで言ってくれた言葉に過ぎないのかもしれない。

それでも、同じ苦悩を共有できる相手ができたというそれだけで、必死で泣かずにいたムラサキの瞳から、ようやく一粒涙が零れ落ちた。

「ごめんなさい、よろしく願います、と深々と畳に手をつき頭を下げたムラサキに、堀川は顔を上げてと慌てて両手を伸ばす。

「山姥切きよたけや他の刀達には、今は黙っておくよ。みんなまだ、本丸ができたばかりでバタバタしてるしね。兄弟も、みんなの中心で忙しそうだし、あんまり動揺させて、全体の士気を下げたり混乱させちゃいけない。そう思って、主さんはきつと僕に頼んだんだよ

ね」

「本当にごめん……私の身勝手に、こんな役背負わせて」

「だーいじょうぶだよ。それに、主さんの判断は、この本丸の為でもあるんだから。守りたいもの全部は守れないかもしれないけど、主さんはここにいるみんなを守ろうとしたんだ。だから、もうそんなに自分を責めないで」

そう逃げ道を残してくれる堀川は、本当に優しくかった。

出発当日——せめてまっすぐ見送ろうとおもったのに、ムラサキは、光の中に笑顔で手を振って消えていくポロポロの「愛染国俊」を、最後まで見ていられなかった。

待つしかない自分は本丸で何をしていても上の空で、ただあの時、奇跡的に無傷で帰って来たのと同じように、もしかしたら呪われた「愛染国俊」は、錬結や習合だけでなく刀剣破壊すら不可能な刀なのではないか？ と馬鹿げた妄想をしたりもした。もし、壊すことすら出来ませんでした、なんて言つて堀川くとひよっこり帰つて来たら、もうこれは不死身の刀という縁起物として、今までのことも全部謝つて、本丸の永久保存物に指定する他あるまい。

そう、無理やりにでも明るい方に考えようとしたけれど——結局帰つて来たのは、堀川国広一振だけだった。

見守っていた堀川の報告によれば、時間遡行軍相手に怯まず闘い、愛染明王の名に恥

じぬ勇猛果敢な最期だったという。

折れた剣は政府に回収されたが、その欠片を堀川は持ち帰って、とめどない涙を流しながら報告を聞くムラサキの前に、そつと差し出してくれた。

「これ、少しだけど、持ち帰らせてもらったんだ。後で、一緒に埋めてあげようよ」
布に包まれた、雫のようなきらきらした破片を、月の明るい晩、二人はひっそりと本丸の片隅に埋めた。

他の刀剣達には秘密なので、あまり目立つ場所に墓を作るわけにはいかないが、それでも広い本丸で場所が分からなくならないよう、堀川が目印になる石を持って来てくれて、その周りに、ムラサキは空き瓶を使っていっぱい花を飾った。

丁度、あと二ヶ月も経てば秋が終わり、冬の気配が漂い始めるだろうという頃。

せめて時期が間に合う間は、安らかにあちら岸へ送れるようにと願いを込めた、彼岸花を。

「……それからかな。国俊くんのこと、まつすぐに見られなくなっちゃったの。この子を残すために、他の国俊くんにしたことを、どうしても思い出して、どうしようもない気持ちになる。あの子に謝ったって、仕方がないのよね」

そう言つて無理に笑う笑顔を見て、やっと山姥切は先日「ごめんね」の意味に合点

がいった。

あれは、話に出て来た「愛染国俊」に向けた言葉だったのだ。

「本当に、まんばちゃんには、いつかちゃんと話すつもりだったんだよ。少しずつ本丸も拡張して落ち着いてきたし、部隊長を任せられるような子も、他にも沢山できたし。堀川くんには、私の口から言うからって話してあったから。いい加減にそろそろ、言わなきゃなつて。でも……怖くて。隠してて、ごめんなさい」

長い話の後、素直に頭を下げるムラサキの謝罪を、まっすぐに隣を見つめ返す山姥切が受け取っていた。

「そんなに自分を責めるな。事情はわかった。あんたが正直に話してくれたことだから、俺は信じるし当初のあんたの気持ちも考慮はする。すまなかつたな、大変な時期に何も気付いてやる事が出来なくて」

「な、なんでまんばちゃんが謝るの!? 勝手に隠して抱え込んでたの私だし……心配させまいとしたのに、結局今こうやって心配掛けちゃってるしね。ほんと、もう審神者失格っていうか……」

ふう、と溜め息をついてから、暮れかけた庭にムラサキが茫洋とした目を向ける。

「私は、人殺しと一緒なんだよ。……刀殺し、かな。あの子がどうなるか分かっていて、出陣の指令を出した。消すことを目的に、戦線に出して負傷させた。どう恨まれたって

仕方がない、人でなしだよ」

今日の前を走り回っている愛染国俊と、破壊された「愛染国俊」は一切何の関係もない。本丸本所属の刀剣達の生活空間と、拾われてきた刀剣達が一時的に習合までの間眠っている部屋とは別だから、おそらく本人は、そんな刀がいたことすら気が付いていないだろう。

けれど、ムラサキは全てを知っている。その罪悪感が、たまに視線に混じる感情の正体なのだと、山姥切は今やつと気づきながらも、掛ける言葉を見つけられずにいた。

「そんなことをした人間が、本丸の審神者でみんなの主だなんて……あのことがあつてから、私本当はちよつと、みんなの前に出るのが怖い。あんなに一生懸命私を慕つてくれる子達を、私はずっと騙して上に立つてるんじゃないかって。いつもそんな気がしてるんだ」

「主……」

緑茶の入った湯呑へ、ムラサキが小さな背中ではつんと視線を落とす。

単に、経験不足や自信のなさが表れているだけではなかった。割り切りが必要と言いつつながら、一番割り切れずに引き摺っているのは、ムラサキ自身だということを、傍に居る山姥切は痛感する。

「話すことで楽になるなら……いつそ話さなきゃいいとも思つたんだ。話したことで赦

されたみたいない気分になるけど、私がしたことはきつと赦されちゃいけない。多くを救うって言っても、そのために一振の命を犠牲にしたことに変わりはないんだ。しかも、将来的に悪い芽が出るかどうか、まだ分かっていないものを、己の恐怖とエゴだけで握り潰してしまった。

……今でも、たまに思うんだよ。こんのすけの言うことなんて無視して、他の本丸がどうかかそういうのも全部考えないで、あの子を守ってあげればよかったのかなって。私さえ、頑張れば……ずっと居させてあげた方が、よかつたんじゃないのかなって……」

言葉から零れ落ちる後悔の念。

それを上手く慰める術を、山姥切は持たない。「r・b・堀川 > きょうだい」なら上手くやってのけたのかもしれないが、そんな高度な言い回しや、優しく心が緩むような物言いを、山姥切は知らない。そして安易な慰めを、主自身は必要としていないだろう、とも思った。

主が、己で向き合おうと決めていることで、主が、自分の足で苦しくとも立つと決めて実行したこと。

ならば、それを尊重した自分が、できることは。

「……主、俺は」

「…………？」

「……俺が思うのは、ひとつだけだ。就任初期にそれほどの目に遭いながら、よくここまです審神者を続けてきた、と」

夕暮れ時。鳥が群れを成して鳴き始めるオレンジの空を背景に、嘘偽りなくまつすぐに投げかけられた山姥切の言葉を、零れそうな程目を見開いたムラサキは、驚いて受け止めた。

ゴム飛びをしていた短刀たちは、母屋の中へ入ろうとしているところらしい。騒がしい声が近くを通ったが、ただならぬ空気を察してか、主と山姥切には声を掛けることなく、廊下を通り過ぎていく。

蒼い瞳が、夕焼け空の色と混じって、燃える雫のように綺麗に光り輝いた。

「そして、続けられている事それ自体が、あなたの成果であり責任の果たし方でもあると思う。普通は思わないだろう。それほど辛い思いを味わいながら、まだ審神者を続けようなどと」

人間ならば、嫌になって投げ出してもおかしくないほどのことではないかと思う。

けれどムラサキは山姥切の想像に反して、それに対しては今までに見たこともないほどの、強い瞳で答えた。

「続けるよ。私は続ける。やめる事は簡単だけど、続けることはずっと厳しいし難しい

でしょう？

やめないでいることが、何もできない私にとつて、たった一つできることなんだから。だから、たとえ少しずつの歩みなんだとしても、私はやめない。諦めない。……それが、君達の前にいるために、あの子を背負っていくために、必要なことだと思ってる」
焦げ茶の瞳が、暮れ落ちる陽光で微かに桜桃色を帯びて燃え上がって見えた。

病弱で、温厚だと思っていた主から垣間見えた炎のような執念に、山姥切は面食らう。それは、吹けば消えてしまう程、細くたなびく必死の焰かもしれない。けれど、それが放つ輝きに、強い力と譲れない意志を感じる。

「……そこを迷ってないなら、俺の出る幕はないな」

「へ？」

「あんたがここにいて、審神者であること。あんたが今も後も、ここで皆を待ち受けること。それだけで、力になる者ばかりだろう。この本丸は。」

本気で『愛染国俊』を忘れないようにと思うなら、今の愛染国俊にも恐れず向き合うことだ。確かに、習合は出来ないまま、あいつは消え去る事になった。けれど、過去は消えずとも、今に注げるものは沢山ある」

今までになく饒舌に言葉を重ねる山姥切に、ムラサキは瞳を微かに揺らめかせたまま、呼吸を忘れたように見入っていた。

その視線に気が付いてか、ばつが悪いというように、山姥切はふいと瞳をそらしそつばを向く。

「あんたは、俺の想像以上に強情なようだからな。別に、続けてもらえる分には俺としても文句はない。せいぜいこれからも励んだらどうだ」

ばたばたと、白い布の端が風にはためく。夕陽に照らされた顔が仄かに紅い。

数度瞬いたムラサキは、きよとんと首を傾げる。

「……え〜つと、つまり、私が審神者やつてるとまんばちゃんは助かるから、これからもぜひ続けてくれってこと？」

「なんでそう凶々しい解釈で勝手に俺の言葉を捻じ曲げる！ 大事なのはその前だ！」

「大丈夫、そこは聞こえてたから。ごめんごめん、勝手に都合のいいことだけ聞こえる耳で」

「……」

「なるほど。つまり最後の解釈もあながち間違つてはないと」

「あんたなあ……！」

いい加減冷えてきたから中に入るぞ、の声に釣られて、ムラサキはようやく自然な笑顔になりながら、茶碗や急須を乗せた盆を手に立ち上がった。すかさずそれを受け取る山姥切から、不器用ながらも無理をさせまいという心遣いが感じられる。

「でも、よかった。ありがとね、聞いてくれて。逃げずに傍にいてくれただけで、私すつごい安心したし力になったよ。これからもよろしく」

何が起ころうと、山姥切にとって主は主だ。大体、ここから逃げてどこへ向かおうというんだ、と山姥切は半ば呆れ顔で、そのひとごちついたような笑顔を見つめていたが、意志に反してちらつと降つて来る桜を、慌ててぱつぱと片手で払いのける。

にやつただけでそこには突つ込まずに、ムラサキは母屋へと続く廊下の扉を開けた。

「……つていうか、就任初期つて、まだ今も就任初期だと思ふけどね？　せいぜい数週間だよ、まだ一ヶ月も経つてない」

「それでも、続いたんならめでたいことだろう。続かないよりはいい。褒めてやつたんだ、おとなしく貰つておけ」

「はあくい。あ、でも、さつき私が言ったのはみんなの前で言わないでよ。すつごい恥ずかしいから」

「さて、それはどうするかな」

「えくく?!?!? マジでやめてよ!!? あんなカッコいい言動が似合うような審神者じゃないんだから! 私か勝手に思つてればそれでいいの!　ねえ聞いてる!!?」

部屋の灯りが見える廊下の奥を目指して、ずんずん歩いていく山姥切を、ぎゃあぎゃあ

あ騒ぎながらムラサキが追い掛ける。相変わらず熱が出ているとは思えないほど煩い主だと思いつつも、その胸に抱え込んだものも含め、知らなかった本音に触れたことに、無意識ながら満足感を覚える山姥切であった。

それから、数日後のこと。

いつもの通り出陣していく刀たちを、ムラサキは玄関先で見送っていた。

「今日はねえ、本陣を叩く前に川を通る経路で行くんだったて！」

「マジか！ 美味しい鮭落ちてねえかなー！ みんなで釣って、今日の晩飯に持って帰ろうぜ！」

「貴様ら、はしゃぐのはいいが、出陣の目的を忘れるなよ。まずは敵部隊の殲滅が最優先。それから……」

今日の部隊長は長谷部だ。

年下の短刀たちをたしなめてしつかり纏める姿のすぐ傍で、仲良しの乱と愛染が、進撃経路中の季節収穫物について、楽しそうに話している。

同じように出発を見守る山姥切の隣で、ムラサキは例の少し複雑な面持ちのまま、彼らの姿を見つめていた。

（私が勝手に思っていることとはいえ、国俊くんには伝わっちゃってたら申し訳ないな

……)

決して言えないし、これからもきつと言うことはない。

それでも、宙に浮く謝罪の代わりに、一体自分は何を与えてあげられるのだろう。

自分を慕ってくれる、無邪気な一振刀に。もしかしたらぎこちない距離を感じているかもしれないにも関わらず、臆せず近寄って来てくれる、太陽のような短刀に。

『本気で『愛染国俊』を忘れないようにと思うなら、今の愛染国俊にも恐れず向き合うことだ』

『過去は消えずとも、今に注げるものは沢山ある』

ふと、縁側で交わした山姥切の言葉が、ムラサキの脳裏に蘇った。

自分がこんな自分であることを、愛染国俊や消えていった「あの子」は、本当に望むだろうか。

そう思うことは凶々しいと思ってきた。そんな風に考えること自体が甘えで、自分は自分の犯した分、光や優しさからは目を逸らさなければならぬのだ、と。

でも。

「ほいじゃつ、いつてきまーす!」

いつもの愛染明王のTシャツで、元気に待機組へ手を振る、小柄なやんちゃ坊主の姿。その後ろ姿に、ムラサキは草履を履くのももどかしく、石畳を蹴って玄関先を飛び出

していた。

「……ッ、国俊っ！」

反射的に口から飛び出した呼び声に、隣を歩いていた乱や他の刀剣たちはおろか、長谷部までもが驚いて振り返る。

勝気な目を大きく見開いた愛染国俊を、ムラサキは駆け寄るがまま転がしそうな勢いで、正面から抱き締めていた。

「あ、……主、さん……っ？」

「国俊。しんじやだめだよ。ぜったい、帰ってくるんだよ」

あんぐりと、玄関の内側にいた刀達も口を開けていた。さながらその姿は、生き別れて二度と会えないかもしれない息子を最後に抱き締める、母親のようで。

主の胸に抱き締められた愛染は、囁かれた声音に微かに目を見開いたが、動転と照れ臭さのあまり、仄かに紅くなりながら身じろぎする事しかできない。

ムラサキの声に、震えと涙混じりの湿っぽさを感じた乱が、驚いて思わず主を覗き込んでいた。

「主さん、だいじょーぶ？　もしかして、誰か折れる夢とか見ちゃった？　平気だよつ。ボク達絶対、全員無事に戻って来るからねっ」

「そ、そーだぞ！　オレらを待ってってくれる主さんがしょんぼりしてどーすんだよ！

「ここでどーんと構えててくれて！ 心配してくれんのはうれしーけど、オレには愛染明王の加護がついてっから！ 強いからさ！」

「あ、主……？ い、今まで出発前の抱擁は、俺にはなかったと思うのですが……？」
愛染も腕の中から元気よく返事をし、長谷部はといえば、泡を吹きそうな顔で突っ立っていた。

皆に心配されて、ムラサキはようやく、目の端の涙を拭いながら顔を上げる。

「ごめんごめん。出陣一つに、大げさになっちゃって。でも、みんなにいつも無事で帰って来て欲しいのはほんとだからね。」

はい！ じゃあ長谷部もハグしよ！ 確かに、今までしてあげてなかったし」

「あつ、主……！！！！」

「え……！！ ずる……い……！！ボクともしようよ、主さん！」

「もちろん！ 乱ちゃんもおいで！」

「じゃあ、オレももつかいする！」

感激のあまり涙と鼻水を垂らす大の大人十少年二人にハグされて、もみくちやにされながら、くすぐったそうな笑いを漏らすムラサキ。

案じて主の後を追って来た山姥切は、その賑やかな様子に、微かに微笑みを零す。
季節外れの桜が一片、彼らを寿ぐように、秋の風に乗って届いたのだった。

母の日2023

母の日2023・第一話『梅の神、刀の神』

すずきなおつるまろくになが
鈴木直生鶴丸国永、和泉守兼定

【Cam The World of Omega Birth Tokyo 2018 03】

「うわああああん！ ママとこいぐのおおお!!!」

「よ、よしよし、ママはもう少して帰って来るから、ちよつとだけいい子で……」

「葉ちゃんばつかりずるい！ 私だつてママとお出掛け楽しみにしてたもんっ！」

「ほ、ほら、ね？ 葉ようは小さいんだし、尋ひろはお姉ちゃんなんだからもうちよつと葉と仲良く……」

「パパはいつも『お姉ちゃんだから』ばつかりじゃんっ！ お姉ちゃんだからつて言われた尋が我慢ばつかりしてるの、ずつと知らないんじゃないじゃんっ」

「あああ、そうだよねえ」

ギャン泣きする男の子と、ぼろぼろと涙を零す女の子。

その二人に囲まれて、その二人の産みの母でもありながら父役でもある愛理は、途方

にくれて天を仰ぎかけていた。

今日は家族で出掛ける予定であったが、仕事を早めに切り上げて戻って来るはずの愛理のパートナー、あやめがなかなか帰って来ない。どうも会社で想定外のトラブルに見舞われているらしく、一時間ほど遅れるという連絡はもらっているが、その間にあやめを心待ちにしていた子供達が機嫌を損ねてしまい、それを愛理は上手く宥めることもできずに、阿鼻叫喚図と化していたのだった。

母親となつてもう7年生になる愛理だが、元から妙にお人好しかつ不器用なところが未だに出してしまうのか、子供の扱いはそこまで上手いというわけでもない。程よい叱責とあしらい方が得意なあやめの帰宅を心待ちにしながら、愛理は泣いている葉と尋の頭を代わりばんこに撫でつつ、やり場無く震えそうな憤りをなんとか深呼吸で治めていた。

（午前中いっぱいなら何とかなると思って、今日はシッターさんも頼んでないんだよなあ……失敗だったかな。大丈夫、あと十分……あと十分の辛抱……）

本当は掃除まで済ませてしまいたかったが、それとは対照的にぐちゃぐちゃになった折り紙の山と、ひっくり返った食器と、食べ散らかされたおやつが散乱したテーブルを見ただけで、愛理の限界度合と苦労が忍ばれるというものである。

死んだ目で居間の掛け時計を見上げた愛理は、ふと先ほどまでカーペットの上をハイ

ハイしていた子供がいないのを見て取って、周囲を見渡した。

「あれ？ 直生は……？」

一番末子の直生の姿が、ちよつと目を離れた隙にどこにもない。最近ではつかまり立ちをしようと懸命に頑張る姿が家族の目を和ませていたが、未だにハイハイの便利さには勝てないらしく、逆に言うところハイハイさえ出来ればどこにでも行ってしまう。リビングで昼寝をさせておいたら、目を覚ました後、いつの間にか家族が見ていない隙を窺ってベビーカーを脱走し、愛理の書斎がある二階までハイハイでよじ登ってきていた時には、さすがに驚くを通り越して血の気が引いた。

「つたくもう、あの子は物静かだけど、事によると尋の小さい頃より体力あるからなあ」
「なおは？ なおはー？」

弟がいない事に気が付いたのか、さつきまで泣いていた葉も、不安そうにきよろきよろ周囲を見回している。そんな葉に、愛理は微笑みながら抱き上げると、ソファに座らせながら尋に言った。

「ごめん。ちよつと見てくるから、葉のことお願い。後でまた話そう？」

「うんつ。大丈夫だよ。私がばつちり見てるよつ」

こういう時には、嘘のように聞き分けの良い子に戻ってくれる。目をきらきらさせた尋の頭を撫で、頬に感謝のキスを贈った後で、愛理は足早にリビングを歩いて廊下に出

る。

扉が半開きになっていたから、ここから出たのは間違いない。さつき葉をトイレに連れて行った後に、きちんと閉めていなかったかもしれない。フローリングの廊下には既に子供の姿はなく、愛理は自分の不注意を悔いながらも、直生の行きそうな場所を考える。

親の姿を求めているのだとしたら、愛理はずっとリビングにいたのだから、二階に向かったとは考えづらい。玄関はいくら何でも子供の力では開かないだろうし、だとすると残りは――

「直生って、やたらとあそここの部屋好きだよなあ」

洋間と和室を両方兼ね備えたこの邸宅には、表の庭に面した日当たりのいい小さな和室がある。普段は雛飾りやこいのぼりなど、年中行事に使うものを押し入れにしまっただけで、誰も使っていないしさしたる物も置いていないのだが、雛人形があこの部屋から出てくるという事を覚えた直生は和室を気に入っているらしく、何をするともなく井草の匂いの中でぼーっとしている事が多いのだった。

「おーい、直生ー？ こっちにいるー？」

リビングから和室も、廊下を通って来なければならぬので子供の足ではそこそこ遠いはずなのだが、ぺたぺたという小さな足音を聞きつけて、愛理は和室の奥を覗き込ん

だ。

押し入れがある手前の部屋から、襖で隔たれたさらにその向こうに、陽を浴びた六畳間がある。庭に面したガラスには当然鍵を掛けてあつたが、それを器用に開けてしまったのか、指を挟むこともなく引き戸を開けて外に這い出たらしい直生は、今まさに縁側を樂しそうによじよじと這つて遊んでいるところだつた。

「わっ！ ちよっ！ あぶなっ！」

まさか外にまで出ていると思わなかつた愛理は、肝を冷やして畳部屋に駆け入る。

あわや縁側から転がり落ちるといふところで、白い着物の掌がひよいつと、いとも簡単に直生の体を抱き上げた。

「おおつと。危ないぜ」

「あう？」

きよとんとした顔で、直生が見上げながら口に指を咥える。ひとまずは直生が無事だつたことにほつと胸を撫で下ろす愛理だつたが、次の瞬間、自宅の庭に男がいたことに仰天して声が出なくなつてしまった。

愛理に全く気付いていない様子で、男は和装から覗くほつそりしながらも力強い腕に直生を抱きながら、親しげにつこり笑いかけてあやしている。

「よう、直生坊。元氣だつたか？」

「きやつきやつ」

「おーまえちつちやいなあ。あんなにデカくなるなんて、信じらんねえよ」

明るい笑顔の青年に、陽の光の中で高い高いをするように抱き上げられて、笑い声を上げる直生。

直生を抱き上げた男は、そもそも声を聞かなければ、男と判断してよいのかすら迷うような外見だった。眩いばかりの白装束に金鎖を纏った、銀髪に金眼の美青年だ。不審さよりも、まるでこの世のものならざるような美しさが圧倒的に優ってしまう。まるで夢を見ているような気持ちで、愛理は思わず自分の両目を擦った。

浮世離れた和装の青年は、傍にいた背の高いもう一人の青年に直生を見せた。こちらにはくるぶしまで届く長い黒髪の持ち主で、どこか見覚えのある浅葱色の羽織を肩に掛け、緊張しているのか石壁のように固まっている。

「ほら、和泉守いずみのかみも抱いてやれよ」

「いや、オレは別に……そもそも主には、様子見て来いって言われただけだしよ。こんなちつせえ奴、壊れそうで怖えし……」

「んーな事言つて、将来は剣の打ち合いする仲だろ？ 今のうちに仲良くしといた方がいい事あるかもしんないぜ？」

「うるせえつ、赤子はどうしたらいいかわかんねえから苦手なんだよ！」

何やら愛理にはわからない事を言い合っているが、人見知りするはずの直生は、なぜかこの背の高い青年にも興味津々なようで、真紅の着物に向かつてきやつきやと手を伸ばしている。

「う……しよすがねえなあ、ちよつとだけだぞ」

乗り移ろうとせんばかりに身を乗り出す直生に根負けしたのか、今度は和泉守と呼ばれた黒髪の男に抱かれて、直生は上機嫌だ。その肩口をべしべし叩きながら、大興奮していた。銀髪の男が、慣れずに苦戦する和泉守と直生を、にやにやと楽しそうに見守っている。

「おーおー、涎でべちよべちよだ。あとでその羽織、堀川に洗濯してもらった方がいいな」

「言われなくても、あいつなら喜んですつ飛んで来るだろうよ……。つーか、なんで鶴丸つるまるがオレの同行なんだ。様子見て帰るだけなら、一人でも何も問題ねーだろうが」

「そりゃあ、どつからどう見てもちびすけに慣れてないお前が心配だからだろ？ そもそも俺の飯の主は、会いたくても会えねえ場所にいるらしいな。だったら、一番面白そうなのについて行った方が、いい暇潰しになるだろ」

「オレはお前の暇つぶしかよ」

呆れたように直生を抱き直して、盛大に溜息を吐いた和泉守は、ぽかんとこちらを見

ている愛理にようやく気が付き、蒼白になりそうな勢いで、ねこじやしを拾って直生をあやそうとする鶴丸という青年の白い袖を引っ張っていた。

「お、おい。なんかバレてるくないか?」

「はあ? 心配性だなー、和泉守は。こっちの世界の普通の人間に、俺らの姿が見えるわけないだろ? 小心者のお兄ちゃんであちねー」

「あうあう」

「いやでも、何か明らかにこっち見てんだけど?!?!」

ふざけて直生に喋り掛けていた鶴丸は、ようやく、ん?という様子で顔を上げる。はつきりとその視界に二人を捉えている様子で、おたおたと右往左往する愛理を見た鶴丸は、やつちまったというような顔で一度舌を出すと、すぐに人好きのする笑顔を取り戻した。

「いやー、こいつは驚きだぜ。まさか仮の主の候補になる奴以外にも、俺らの姿が見える人間がいるとはな」

「言ってる場合か! どーすんだよ通報されたら?!?!」

「妙に現実感のある心配をするなあ、和泉守は。平気さ、きつと夢か何かと違ってくれるだろう」

「え、えーと……?」

もはや何と話し掛けたらよいかもわからず、おずおずと一步を踏み出した愛理に、和泉守から直生を受け取った鶴丸は、笑顔でその腕を差し出した。

「すまんすまん。ついうっかり、長く遊びすぎてしまったな。ほら、直生坊。母ちゃんが心配してるぞ」

「んばー！」

後から考えれば、なぜ女子の直生のことをこの人は坊と呼ぶのだろう、という事が不思議だったが、その時はそんな頭も回らないまま、愛理は慌ててその腕に帰って来た赤子を抱き上げる。先程までも機嫌良さそうに遊んでいたが、愛理を見上げた直生は殊更嬉しそうに、にっこりと笑顔を浮かべた。

「あ、ありがとう。その、危ない所を助けてくれて……その、あなた達は……？」

「いや、なに。道を歩いていたら、この庭木の立派さに惹かれて、ついふらつと立ち入ってしまっただけの通りすがりさ」

「その言い訳十分に怪しいし、『ついふらつと』だとしても住居不法侵入になるからな？」
 「まあ、そう堅い事を言うな、和泉守。確かに、術も使わない状態で俺らの姿を見て言葉をお互い交わす人間がいるのには驚いたが、きつと直生坊の母上たる人にも、審神者さきにわの素質があつたつて事なんだろう」

謎めいた事を言いながらくると踵を返す鶴丸を、目で追って迷った様子を見せなが

「らも、こちらに丁寧に一礼してから和泉守は後を追う。慌てて愛理は、つつかけのまま庭に生い茂る草の中へ一歩を踏み出した。

「待って！ ああ……あなた達は、もしかして神様？」

「へっ？」

「だってどう考えても、この時代の人間っぽい格好じゃないし……それにこの木って、梅の木だよ。もう実がなり始めてるけど、ちょうど直生の誕生日の頃には満開になるんだ。いつも知らない人に会ったら大泣きするのに、直生はあなた達相手に全然人見知りしないし……だからてつきり、梅の木に宿る豊穰の神様とかなのかと」

「青々と生い茂る葉を見上げるように言った愛理の前で、驚いたように顔を見合わせる和泉守と鶴丸。やがて、耐えかねたように鶴丸が勢い良く笑い出した。涙を流しかねない勢いだ。

「ふっ……あつはつは。こいつは傑作だ。和泉守、俺らは梅の木の神様らしいぜ。明日から転職するか？」

「あんなあ……」

「いやあ、こいつはいい驚きをもらった。すまない奥方。そんな雅なものに諭えられた経験が、とんと久しいものでなあ」

「そ、そうですか？ そのぐらい、綺麗だと思いますけど……二人とも」

褒められる事によほど耐性がないのか、和泉守は困ったような顔で若干耳を赤くしている。が、その口元の表情を見るに、喜んではいるらしい。

不意に強く日が差して、木の枝を揺らすほどに突風が吹いた。逆光の中で、低くしつかりした声と、陽気で楽しげな声が順に言う。

「奥方、そいつのこと、よろしく頼むな」

「じゃあな、直生坊。あんまり母ちゃんを困らせてやるなよ」

眩しさに閉じた目を再び愛理が開く頃には、二人の姿は幻のように消えていた。

不意に家の中から、愛理達を呼ぶ声が響く。

「パパー、ママが帰って来たから連れて来ちゃった」

「パパ、なお、いた？」

「ごめんなさい、愛理！ すっかり遅くなっちゃって……どうしたの？ 庭になんか出て」

愛理も狐につままれたような表情をしているが、スーツ姿でこちらを伺うあやめと子供達も不思議そうだ。

何と説明したものか、と愛理が思っている間にも、あやめに手を伸ばした直生がきやつきやとはしゃいでいる。

「ふふ、ただいま。直生はごきげんさんねえ。あら？」

抱き上げながら、その額にくっついていた物を、あやめは首を傾げつつも手に取って陽に透かす。

「ねえ、見て愛理。桜の花びらよ。どこから飛んで来たのかしら。それもこんな時期なの……」

言っている傍から、尋と葉が次々と裸足のまま庭に降りて、歓声を上げていた。愛理が振り向けば、そこに桜の花びらがちらちらと舞っている。庭に生えているのは梅の木で、しかもとつくに開花の時期を過ぎているというのに、束の間そこは花見の頃に戻ったかのようだった。

「不思議なこともあるものだねえ」

結局愛理は微笑んだままそう言っ、今起こった出来事を胸の内側に収めておくことにした。

直生が大きくなる頃にはすっかり忘れているだろうし、結局彼らが何者かはよくわからなかったけれど、本当に直生のことを見守ってくれる神様がどこかにいて、人の形を取って助けてくれたのかもしれない。

そう思い、青空の下、愛理は小さく、梅の木に向かって掌を合わせたのだった。

一方。鈴木邸を出て、ぶらぶらと住宅街を歩いていた鶴丸こと鶴丸国永は、抜けるような青空を見上げながら、切なげにふと呟いた。

「梅の神……ねえ。人斬りの刀である俺らが、よもや命あるものの神に諭えられるとはな」

「にしても付喪神つーところだけは当たってんだから、なかなか恐ろしい勘の持ち主だったよな、あの人」

「付喪神を前にして、驚きも騒ぎもしなかったからなあ。いやはや、あれは大物だぜ。違くない。お前、褒められてちよつと赤くなつてたろう」

「つ、それは、反応に困つただけだつつの！　そ、それにオレの見た目がいいのは、周知の事実つて言うか何つうか……とにかく言われた事に間違いはないんだからそれでいいだろ」

「帰つて主に自慢するか？」

「つたりめーだ！　そんなくらい割に合わねえとやってられつかよー！」

そうは言いながらも、実際のところ照れ症な弊本丸の和泉守兼定は、大見得を張つたところで主たる紫咲の前では存外静かになつてしまふことを、鶴丸は知っている。馴染んだ仲間の前では気が大きくなるところも見せるくせに、審神者に就任してもう日が浅くはない紫咲との距離感を、未だに計りかねているらしい。

もつともそれは紫咲の方も同じようなものなので、親しくはなりたいのにどうすればいいかわからずにいる二人の間のあれこれを見るのも、鶴丸にとっては楽しい余興なの

だが、わぎと口に出さずにおくことにした。

ふと気が付いたように、あ、と和泉守が唇を開く。

「にしても、男の赤子ってあんなにやこいもんだっけな。いやオレも、そんなに子供を抱き上げた経験はねーけどさ、男児の割には妙に抱き心地がふにやふにやっつてーか、もうちよつと子供でもしっかかりしてたと思うんだけど……」

「……ん？」

「ん？」

不意に立ち止まった鶴丸と和泉守の間に、一陣の風が吹く。一瞬、事態が飲み込めなように固まっていた鶴丸だったが、すぐに例の笑顔を取り戻し、にこにこしながら和泉守の肩を叩いた。

「そーかそーか、なるほどなー」

「は、はあ？ 何がだよ？」

「いやいや、和泉守はまだ知らないのかと思っつてな。面白そうだし、俺の今後の楽しみのためにもそのままにしといてくれないか」

「だっ、だから何が?!?!」

本丸の皆にも男勝りで親しまれている直生が、実際のアイデンティティは不定性で身体的には女性、いわゆるXジェンダーなのだということは、知っている男士は知っている

る事実なのだが、遊びに来る度に直生を稽古で可愛がつて激しい打ち合いを繰り広げる和泉守は、どうやらまだ気付いていないらしい。直生の筋骨隆々とした体つきのこともあつて、完全に男だと思つていようだ。

直生自身も、他人から殊更腫れ物扱いされたり意識されたりするのを嫌がつているよ
うだし、気付いていないならいなくて問題なからうと思つているのもあるが、あわよく
ば誤解が解けた瞬間の驚いた反応を期待しているのが、鶴丸国永という男士なのだ
た。

「さて和泉守、せっかく現代に来たことだし、スタバにでも寄つて帰るぞ」

「はあ!? 直帰でいいだろそんなん! 観光しに来たんじゃねえんだぞ!」

「まあまあ、珈琲一杯分くらいの時間はあるだろう。俺は……何と言つたかな、あの白い
渦巻きが乗つている奴がいい。早口言葉は和泉守の方が得意だろう?」

「オレを注文の読み上げに使うんじゃねーっ!」

任務は終わったものの、今しばらくは帰れる気配がないまま、和泉守のぎゃんぎゃん
言う声に住宅街にこだましたのだった。

母の日2023・第二話『天使にくびったけ』

ふじよるは
藤夜羽×へし切長谷部

【Cam | This World | Nagoya | 2014 | 05】

「ハハ」か……」

ふわり、と窓辺のバルコニーから洋風の邸宅へと舞い降りたへし切長谷部は、色の濃い長衣の裾を翻して、子供部屋の中へと踏み込んだ。

付喪神の身はいくら常人からは見えないとはいえ、響めしい面を携えながら司祭然とした厳粛な格好で住宅に入っていく姿は、子供が見ただけで泣き出してしまいそうな雰囲気醸し出している。

カーテンの影から土足で踏み入れたその行く先に、小さなベビーベッドがあった。艶やかな木材で設えられた上質なベッドの上に、むずかるような表情で寝転がっている、透き通るような青目の赤ん坊の姿がある。ベッドの傍には「藤夜羽」と達筆で筆書きされた紙が額に入れられて、飾られていた。

この先の未来ではよく見知ったその姿を、長谷部は上から見下ろして目を細め、安堵したように嘆息した。

「よかった。今のところ、何事もなく育っているようだな」

「うあああ〜くん!!」

突然大声で、しかしその小柄な体に合わせたかのようなやや控えめな鳴き声を赤ん坊が上げると、長谷部はぎよつとしたような顔で慌て始めるが、子供部屋の入り口から誰かが入ってくる気配はない。

赤子は依然として泣き続けており、長谷部がふと扉を開けてテラス状の廊下から階下を覗き込むと、一階の閉じられた扉の向こう側から、電話で話しているらしき母親の声がかくかに漏れ聞こえてくる。こんなにも広い邸宅だというのに、他に家族や使用人が駆けつけてくるような様子もない。長谷部は小さく溜息を吐いた。

「……金銭的に恵まれた家庭環境でも、気にかけてくれる者がいないのか」
「ふええつ、ううつ、ぐすつ」

もはや泣き疲れたように声が小さくなる夜羽を見て、長谷部の顔に同情的な表情が浮かぶ。

誰から見えている訳でもあるまいに、長谷部は周囲を伺うようにして何度もきよろきよろと見渡し、挙動不審な仕草でベッドに近付きながら、覚束ない手つきで慎重に夜羽のことを抱き上げた。

すると、泣き喚いていた夜羽が、驚いたようにぱつちりと目を開ける。その綺麗な青

玉のような瞳を、長谷部の見開いた藤色の目と見合わせたのも束の間、夜羽はさつきにも増して大きな声で泣き始めた。

「ふぎやあああん！うえあああん！」

「おっ……おいどうした!? 俺だぞ!? 何故泣く!? つて、この時代のお前に言っても仕方がないのか……よ、よしよし、泣くな」

むしろ自分が抱かない方がいいのではという表情で、長谷部はだだっ広い子供部屋の
中を、赤子の気を引けそうなものを探してうろうろしていたが、その移動の揺れが逆に
心地よかったのか、夜羽はしばらくするときよんとしたような顔を浮かべて静かに
なった。

やがてふと気が付いて長谷部が胸元を見ると、ストラを胸の前で留めている金縁の紐
飾りが気に入ったのか、こちらが何をしようとも思う前に、夜羽はそれを紅葉のような
手で弄ってはしゃいでいた。

「きやきやいつ」

「やれやれ……子供というものは、相変わらずよくわからんな」

小さく肩をすくめた長谷部は、普段であれば頭を抱えているところだが、両腕でしっ
かと抱きかかえた子供を落とすわけにもいかないので、そのまま夜羽の様子を伺ってい
る。金の飾りを涎でべとべとにした夜羽は、気が済んだのか、親指をちゅうちゅう吸い

ながら、ふと長谷部を見上げてにこっとした。先程まで泣いていたのが嘘のように、生え揃え始めた短い黒髪の頭で、にこにこ笑っている。

「あうー、えあう」

「まったく、お前は……。天使になるよう宿命付けられている者に、血の匂いは辛いだろうに。俺が怖くはないのか？」

長谷部が手袋をした手で擦るように夜羽の顔を撫でると、夜羽はきやつきやと楽しげな声を上げる。年齢は違えど、屈託のない笑顔は、今の本丸で何かと長谷部を慕ってくる夜羽のそれと同じものだ。

不意に気配を感じ、長谷部は俊敏に窓辺を振り返った。

「おや。珍しいお客人もあるものじゃな」

反射的に右手が刀の柄に触れるが、敵意のない者だとわかった長谷部は、安堵したように息を吐く。テラスの手すりからとっと床に降り立った小さな白狐の姿を見て、長谷部が口を開いた。

「お前が、主と夜羽を導き出逢えるよう仕向けた、守り神という奴か」

「そこまで偉いものじゃありません。ただの世話好きの化け狐が、世話役兼保護者係をやっておるようなものじゃ。こやつが転生前の記憶を取り戻すのも、もうしばらく先の事じゃろうしな」

「それにしてもその見た目……小狐丸こぎつねまるか？」

「誰が小狐丸じゃ」

ぼんつ、と音を立てた白狐が、耳と髭の生えた長い白髪の人型に変わった。ふさふさと触り心地の良さそうな尻尾を振って見せるが、夜羽は怯えたように、長谷部の服へとぎゅつとしがみ付いた。

「えうー」

「と、このように人の格好では怯えられてしまうのでな。人の手足がなくとも魔法は使い慣れとるし、何かとこの姿の方が、儂にも都合がよい」

そう言つて、すぐにぼんと煙を立てて小狐姿に戻った狐の神は、長谷部の肩にびよいと飛び乗ると、腕の上から尻尾を垂らして、夜羽の顔をくすぐった。すぐに樂しげに笑い声を上げる夜羽の前で、ぶらぶら尻尾を揺らしながら、狐が長谷部を見上げる。

「それにしても、小狐丸とはまた懐かしいの。あやつと会ったのも久しく前のことじゃ。おまんところの分霊も、さぞ振るつておるのじやろうな」

「毎日稲荷と油揚げが食べられて元気そうだぞ」

「ふおつふお。帰りにあやつへの土産でも持たせてやろうかのお」

満足げに笑つて胸元を見下ろした狐は、ふと夜羽がうとうと寝そうになっているのを見て、葡萄のような瞳をぱちくりとさせた。

「おや、珍しい。余程おまんを信頼しておるようじゃな」

「そうなのか……？ 本丸で会ったこいつは、やたらと俺にくつついて来るんだが、正直そこまで好かれる事をしている覚えもない。主が命に変えても守りたいと大事になさっている御子ゆえ、もちろん丁寧に扱ってはいるが……」

「おまんの堅実で実直な性格は、儂も嫌いではない。滲み出るものがあるのじゃろう」

不思議そうに首を傾げつつ、先程よりはやや慣れた手つきで眠る夜羽を抱き直した長谷部は、部屋のソファに腰を下ろしながら、隣に飛び乗った狐に尋ねた。

「折角会えたのならついでに尋ねたい事があるんだが、最近このあたりで、迦行軍の襲撃や変わった事が起きている気配はないか？」

「いたって平和じゃな。儂も、おまんらとは別次元に存在する者ゆえ、全てを把握しとる訳じゃあないが……この子を狙うような者とは会っておらんよ。まあ、天使として開花してからはわからんがの。今のところは安全じゃ」

「主と出逢えるまでに、こいつがこの家で健やかに育てる見通しは立っているのか？」

「それも心配なしじゃな。この世で出生後に世話をする魔法契約を結んだ仮の親が、多少放任なのが問題と言えば問題じゃが……こやつが育つまでは、儂が天界の師匠としてつきつきりになる約束じゃ。時間の許す限り面倒は見とる。少し早いが、そのうちこやつの使い魔も採る予定じゃし、人間どもが多少いい加減でも何とかなるじゃろう」

「ふむ……」

任務で確認すべき事項は、すべて裏が取れた事になる。

すやすやと安らかに眠る幼子を、長谷部は慎重に元いたベッドに戻し、名残惜しげに柔らかな黒髪を撫でた。普段はきりりとした目元が、夜羽の前では優しげに緩んでい

る。
「俺が守つてやれたらいいが、ずっとここに留まるわけにもいかないからな」

「じゃな。おまんがこやつと会うべき時は『今』ではないのじやろ」

「うぐ……しかし、血縁がないとはいえ、夜羽は主と大層体質が似ているからな。こんなに貧弱で、本当に大丈夫だろうか。何か心細い思いをしていたり、この先躓いた時に、立ち直れなかったりするのではないかと……」

次から次へと心配が湧いてきて止まらない様子の長谷部に、狐はふわふわした顔周りの毛を揺らしながら、見かけによらぬ頼もしい笑い声を漏らしながら言った。

「確かに人見知りもするし体も弱いが、すこぶる育てやすい子じやよ。それなりに生きる術も覚えよう。安心せい。いずれ成長し天使の自覚を持てば、早い段階で徐々に前世の記憶も戻る。そうなれば、見かけは子供でも中身は立派な大人じや」

「……それ、本当にそうか？ 俺の前では、今でもあいつは子供に見えるんだが……」

「ほっほ。まあ、個体差というものはあるわいの。異世界にこやつの元となった存在が

あるとしても、この姿を与えられてからのこやつ的人生ならぬ天使生は今からじゃかな。人間としては未成熟なんじゃろう。おまんらと同じじゃよ」

「そういうものなのか……??」

首を傾げる長谷部はぴんとはきていないようだったが、その類似性が何かと自分と夜羽に繋がりを感じさせるのかもしれない、と思い直す。階段を上がつてくる母親の足音がして、長谷部は今度こそ吹っ切れたようにばさりと上衣を翻した。

「行くのかや?」

「世話役が来たのなら、俺が留まる意味もないだろう。そいつを頼んだぞ」
「任せておくがよい。皆によろしくの」

ひらひらと尻尾を振って別れの意を示す狐が飛び乗った、ベッドの方角をもう一度振り返る。うつすらと眠たげにその臉を持ち上げた幼子を最後に一目見て、長谷部は元来たテラスから飛び降りる瞬間、桜吹雪の中でふっと口元を微笑ませた。

「夜羽。お前が主となる日を、お前にとっての未来で、待っているぞ」

母の日2023・第三話『蛇の道を行く者は』

ふじえりすひげきり
藤恵李朱髭切

【Cam | Spirit World | Castle | 2014 | 05】

「おじやましませすっ」

軽い調子で、庭に生えたかぼちや畑の蔓をひよいひよいと避けながら、黒で統一された魔界の雰囲気には殊更目立つ真っ白なスーツとジャケットの装束が、鼻歌混じりで屋敷の敷地を歩いていく。

天界や聖なる存在とは距離を置いて暮らしている魔界の住人は、セキユリテイ代わりに魔法陣や魔法生物を邸宅に仕掛けていることも多く、中には天使や妖精を襲って喰らい尽くしてしまいうような危険な罠もあるのだが、薄黄色の髪をした見た目が中性的なこの青年の放つ神気に、かえって畏の方が怯えて引いてしまう始末だった。もちろん、ここへ来る道程の邪気も瘴気も、跳ね飛ばしてしまうほどの神気を纏ってにこにこしている。魔界の住人的な視点から見ると、この青年の方がよっぽどサイコパスじみているのだった。

「ありや。呼び鈴鳴らないねえ。お留守かなあ」

鳴らないのではなく、持ち前の剛力と靈力でインターホンのボタンを壊してしまっただけなのだが、本人はまったくその事に気付いていない。

勝手に裏口から中に入り、カラスの飛ぶ庭を見渡してきよるきよるしていると、不意に鋭い何かが飛んでどこかに刺さる音が、髭切の耳に届いた。

かぼちや畑の中に点々と立つカカシに向かって、両端の跳ねた金髪の少年が、ダーツの矢を投じている。投げる地点は畑のかなり手前で、子供が矢を届かせるにはどのカカシもかなり遠くに設置されているのだが、それでも軽々と、無表情でひよいひよい矢を投じて命中させていた。

大きなかぼちやの上に座り、足をぶらぶらさせながら気紛れに投げた矢が、すとつとカカシの胸に刺さる。次に頭。右手、左手。胴体に両足など、細かな標的にも命中していくのがさも当然と言ったような表情で、少年は最後に、口から火を吹いて矢に乗せてから投げると、カカシごと畑を焼き払ってしまった。

月夜の下、風に煽られて、白い肌の表情が火の粉の中に映える。ひどく冷徹に見えるが、そのくせぼんやりとして何も考えていないようにも、つまらなさそうにも、ひどく幼くも見える顔。

「わーお。すごい力」

屋敷の影に隠れてその様子を見ていた青年がひゅうつと口笛を鳴らしたその時、背後

からずると不気味な足音が迫ってきて言った。

「来るなら事前に連絡を超越さんか、髭切。^{ひげきり} わらわの可愛い毘たちが台無しではないの」「あつとー。ごめんね、今日は様子見に來ただけだから、すぐ帰るつもりだったんだよ。勝手に入っちゃマズかったかな」

呆れたように闇の中で佇む黒いドレスの女性は、髪の中にもドレスの足元からも幾多の蛇を這わせた異形だった。いわゆるメデューサだ。その姿形にも動じる事なく、髭切と呼ばれた青年はのほほんとしている。

「こんな無粋にわらわの屋敷へずけずけと入って來れる奴は、お前とアホ狐ぐらいじゃ。いくら加護があるとはいえ、怯えることすらないとは。源氏の重宝、だったか。付喪神とはふてぶてしい者ばかりじゃの」

「いやだなー、そんなに褒めないでよ。えーと……目えーのお姉さん?」

「褒めとらんが!」 それとわらわの名は目デューサじゃ! この見た目で何度言っても覚えられんのはお前くらいじゃぞ!」

髭切の足元に這い寄ってきた黒い鱗の蛇が、しゃーつと声を上げる。その割に目デューサが本気で怒らないのは、どれほど名前を忘れていようと呼び方が適当だろうと、髭切が絶対に彼女のことを「お姉さん」扱いしてくれるからなのだが。

わあつと蛇の群れに驚いたような声を出しながら、髭切が月明かりの下でその目を輝

かせる。

「それより僕、お姉さんにその蛇しまつて欲しいなあ。あんまり目の前に動くものがないと、ついうずうずして斬つちやいたくなるんだよね〜」

「お前は、たまに魔界の連中よりよっぽどえげつない事を言うね……」

恐ろしいことに、どこまでも本気なのである。髭切の記憶力のなさにも、天然物と言つて遜色ないゆるふわさにも呆れながら、目デューサはもはやげんりとして、しゆるしゆると蛇を引つ込めたのだった。

「あの子の……エリスの様子を見に来たのか？」

「うん。深い意味はないけど、特に変わりにかないかなーと思つて」

「いつも通りじゃ。転生してからしばらく経つが、わらわの屋敷くんだりまで、あの子を脅かしたり取り返したりしようとする輩も見てはいないしね」

「うんうん、それはよかつた。平和が一番だよ」

「わらわが言うのも何じゃが、それは付喪神がこの世界に来て言うセリフか？」

振り回されつぱなしの目デューサが思わずそう呟いている間に、畑の端の方にある池に移動した少年ことエリスは、水上に石を放つて水切りをしながら遊んでいるようだ。相変わらず黙々と石を放っているが、孤独に遊ぶその仕草から、どこことなく微かに楽しげな空気が見て取れる。

「まったく。わらわが出かける間に畑を野焼きしておいておくれとは頼んだが、相変わらずあの子は仕事が雑じゃ」

「ええー、やる事さつさと終わらせて遊ぶのはいい事じゃない？ 有能だよ」

「それはそうだけでもね……あの子には、子供時代がない。事情が特殊でな。本来は転生後の世界に生まれるところから新たな人生がスタートするが、あの子は生まれながらにしてあの姿じゃ。」

ゆえに、心身のアンバランスが目立つ。わらわも見てはおるが、あまりに淡々としていて、もう少しぐらい子供らしい感性が目覚めないものかと不安にはなるだろう」

「うーん、今の恵李朱も可愛げはないけど、子供っぽいとは思おうよ。」

言われた事にありのままを答えて首を傾げる髭切に、目ヂューサは苦笑する。

「思えば、お前とエリスもどこか似てはおるな」

「そう？」

「まあ、あの子も人間界に出て、ゆくゆくは巡り会う双子の片割れや友人らと出逢うことで、人の傍に在る悪魔として成長していくことだろうね」

「目のおねーさん、時々心配とかならない？ あんな強い力を持つちやう子が悪魔だなんて、暴走して僕らと相対することになっちゃったらどうしようって」

穏やかな表情の中で、不意に髭切の眼光が鋭くなる。

それに動じることもなく、目デューサは黒いドレスのレースを靡かせながら、髭切を不敵な笑みで振り返った。

「その時はその時じや。わらわは、あの子を軟弱な墮落者の悪魔に育てるつもりはないからな。人と共に在り、人と共に生きる魔物にしてみせる。」

それが成らなかつた時は——お前があの子を斬るがよい。刀には易い真似だろう？
わらわが決して、そんな事態にはさせんがな」

その強気な態度に、踵を返しかけていた髭切は驚きの表情を浮かべ、そして楽しそうに笑った。

「あははっ、それ最高だね。いいよ。約束を違えるほどどうしようもなくなつた時は、僕が何とかしてあげる。鬼切りの刀だもんね。鬼だろうが、刀だろうが——たとえ悪魔だろうが、切つちやうよ。その時は」

妖しい月の下で振り返つたその瞳が、刹那、数々の伝説を帯びてきた宝刀に相応しい修羅の表情を浮かべた。

コウモリが飛ぶ軒先を、土で汚れるのも構わずに、髭切は上機嫌に歩いて帰っていく。もう用事は済んだらしい。慌てて目デューサが叫んだ。

「おい！ 次こそはわらわの名前を覚えてくるんじやぞ！」

「んー、わかつたー！ 目えー姉さん！」

「どんどん酷くなっておらんか!？」

まるで雰囲気合わない桜を足跡のように残して、大きく手を振った髭切が去っていく。

その桃色の花びらを手に掴んだ目デューサは、声を聞きつけてこちらに駆けてくる愛弟子エリスの姿に応じながら、ぽつりと呟いたのだった。

「……もうそろそろ、あやつに壊されないインターホンを真面目に考えるべきじゃな」

母の日2023・第四話 『年始、吉慶、赤灯笼』

すずきあいらいちもんじのりむね
鈴木愛理一文字則宗

〔Cam | This | World | Shanghai | 1985 | 02〕

屋台から立ち上る、焼けた肉や鍋物の香りが漂う俗っぽい路地を、一人の男が歩いていた。

石造りの建物の間を、踊るような足取りで陽気に行くジャケットに白袴の姿は、異国風の街並みと自然に溶け合い、それでいてごった返す人波の中でその風雅さが自然と人目を惹いている。

あちこち跳ねた癖毛の金髪に碧眼。西洋然とした顔つきの割に、不思議と洋国にも亜細亜にも馴染んだ身なりを整えた麗人は、赤いショールを翻して、軒下で^{ビール}酒を煽りながら惚けたように見上げる男性を覗き込んだ。

「すまないが、一つ教えてはくれないか。このあたりで、日本酒の醸造と販売を商っている会社を探しているんだが」

「ん？ ああ、それなら有名だよ。なんでも日本から上海くんだりまでやって来て、販路を拡大しようってんだからね。若奥さんは豪快だし旦那はちーと頼りないが、みんなあ

「その人らを好いてるさ」

「酒の味も上々だしなあ。今夜みたいな祭りの晩にはうつつつけよ。ほら、あつこの角を曲がって、もう少し行った先だ。しかし兄ちゃん、夜だし店は閉まってるぜ」

次々と集まっては好意的に口出しを始める現地人の言葉は、皆口調の激しい中国語だが、見かけの若いその男は鷹揚に笑って踵を返す。

「なあに、僕は酒じゃあなく、あの家の人間に用があるのでな」

「ほう、あの家族の知り合いかあ。まあ、今は酒の仕込みに加えて赤ん坊の世話もあるから大変だと思うが、よろしく言っといてくれや」

「もうすぐ獅子舞が通るぜ、この通りは昔時から春節ん時は一際賑やかなんだ。兄ちゃんも用が終わったら戻って来いよ。こっちで俺らと飲もうぜ」

声を上げる男達の姿に、赤いストールの青年は、祭りの喧騒にも負けない大声で豪快に笑いながら、手を振って応えた。

「うははは。僕はただのじじいさ。兄ちゃんはよしてくれ。だが、それも良いかもしれないな。どれ、後で寄らせてもらおうとするか」

本気でそう思っているのかどうかも分からない口調で、赤提灯の真下を道の向こうへ消えていく酔狂な後ろ姿を見送りながら、残された人々が次々に首を傾げた。

「なんか、変わった奴だったなあ。あれのどこがじじいなんだ？」

「英国人っぽい見た目だが、西洋の奴らにしては妙に馴れ馴れしいし」

「それに何だ、あの格好は。異国の王子かなんかじゃねえのか？」

「なんで王子が、こんな脂ぎつた街を護衛も付けずに一人で歩いてんだよ」

「狐にでも化かされたかもしれんな。わはは、まあ何だつていいさ。今夜は飲もう飲もう」

人々の疑問は、祝祭の喧騒とごちそうの匂いと陽気な笑い声にすぐさま消されていく。新たな年を迎える春節は、そのくらい現地の人々にとつては特別な節目なのだ。

その群れを抜けて、朱色の提灯飾りや家々の軒先に垂れ下がる真つ赤な祝い飾りの下を抜けながら、青年——いちもんじのりむね一文字則宗は独りごちた。

「やれやれ。堪能な主に多少教わつたとはいえ、この国の発音は相変わらず舌が絡まりそうだぞ。せめて道を尋ねる時に言葉の一つも知らんでは困るだろうとは思つたが、あまり年寄りに無体を働いてくれるなよ」

付喪神たる刀劍男士の姿は、通常であれば人の目に映ることはないが、時と場合に依じて術で自由に姿を現したり、そこにいながら気配を消したりすることが出来るようになってる。

文句を言いつつ、任務のために探し当てた建物を見上げて、則宗はいと口角を上げる。

「……だな」

一階が店舗になった商会のようだ。開きっぱなしのガレージには、車と共に輸入物らしき段ボールや木箱の山が積まれており、眼鏡の男性がやや疲れたような顔つきで、それを移動させながら額を腕で拭っていた。

「この寒空の下、汗をかくほどに働くとは、ご苦労な事だなあ。邪魔するぞ」

再び気配を消し、聞こえないと知りつつも男に声を掛けながら、則宗は車庫の入り口から……入ろうとしたものの、ふと脇にある自転車小屋と、その上にある外装工事の足場越しに灯りの灯った窓を目に留めると、につこりとして、助走を付けながら自転車小屋の屋根に飛び乗った。どうやらやんちゃの血が疼いたらしい。

一回転しながら、それでいて猫の如く音も立てずにひらりと舞い降りると、則宗はトタンの屋根から外壁の足場に飛び移る。腕力だけで体を持ち上げながら、手摺がついた二階のベランダによっこいせと這い上がると、格子窓の内側を覗き込んだ。

側から挙動だけ見ていたら完全に泥棒か不審者のそれだが、どうせ見えないのだからと気に留めてもいないようだ。

「どれどれ」

鍵が閉まっていたはずの窓が、則宗を迎え入れるかのようにいとも簡単に開く。内側に開いた窓から飛び降りると、飴色に磨かれた木製の床に白壁の室内には、同じ系統の

木材で設えられた掛け時計や化粧台、戸棚などが揃っている。ダブルサイズのベッドがあるところを見るに、夫婦の寝室として使っている場所なのだろう。ベッドの向こう側にはさらに奥間のもう一部屋に続く扉があつて、書齋として使っているらしき机が見える。

そして、窓辺にほど近い壁際、カーテンが引かれた大きな窓の側に、白レースの天蓋付きのベビーベッドがあり、そこに赤ん坊が寝転がつていた。手に持つていたおしゃぶりをほいと放り投げ、大きなお尻でごろんと寝返りを打ちながら、くーかー寝息を立てている。不揃いな黒毛は、まだ完全には生え揃つていない。

天蓋をそろりとかき分け、中の様子を伺いながら、則宗がその藍玉のような瞳を輝かせた。

「ほう。お前さんが、将来の仮の主という奴か。食えん娘つこだと主は言つていたが、こうして見ると未だ憂いも悪意も知らぬ、ただの赤ん坊だな。

確かに、主の持つているお前さんを模したぬいぐるみによく似ているか……いや、しかしあんなに毛は生えていないようだな。生後一年近い人の子では、まあこんなところだろう」

則宗が含み笑いを漏らすと、不意に窓の外で歓声が上がリ、深夜の花火が打ち上がった。今年も無事に年越しを迎えたようで、街路の人々が一斉に爆竹をぶち撒け、窓の外

が俄かに明るくなる。窓を閉めていてもわかるほどの激しい音と衝撃が、レンガ作りの建物の間にこだまするが、赤ん坊は涎を垂らして幸せそうに眠っていた。

中華風の格子窓から外を見上げ、呆れたように則宗が言う。

「しかしまあ、こんなどんちゃん騒ぎの中でよくも寝ていられるなあ、お前さん。銃声すら久しいじじいの耳には、いささか堪えるぞ」

くうくう寝息を立てた赤ん坊が、それを合図にうつすらとその瞳を開けて黒い目を覗かせた頃、階下から人の上がってくる音がして、寝室の扉が開く。

哺乳瓶を携えた、ひどく小柄で長髪の女性が、則宗が見守っているとも知らずにベビーベッドの方へ歩み寄ってきた。

「すまないな、愛理^{あいり}。丁度ポットのお湯を切らしてしまっていて、今ミルクを……ありや。待っている間に、もうこの子は寝てしまったのか」

「どうしたんだい、麗香^{れいか}くん」

「聞いてよ、広海^{ひろみ}さん。愛理^{あいり}つてば、さつきまであれだけお腹が空いたって泣いてたのに、もうとうとうとしてたみたい。呑気というか、これじゃ泣き損だよ」

広海と呼ばれていた、先ほどガレージで働いていた男が、湯の入ったポットや育児用品一式の入った籠を両手で抱えて、えっちらおっちら階段を登ってくる。

それを待たずに、麗香と呼ばれた母親らしき女性は、我が子——愛理を抱きかかえて、

寝ぼけまなこの口元に哺乳瓶の乳首を吸わせた。

「ほら。待望のミルクだぞ」

「……………うー?」

眠そうにしていたのは単純に空腹を忘れていたからのようで、ぼけつとしていた愛理は目の前に差し出された食料にはつと目を見開くと、がぶがぶミルクを吸い始めた。肩を揺らして笑っている麗香の元に、荷物を置き終えた広海が合流する。

「こんなに賑やかな晩でも大人しく寝ていてくれるのは助かるが、あまり静かだとそれはそれで心配になるね。妙におっとりしたところは、広海さんに似たのかしら」

「そ、そうだろうか…………? 愛理は泣き声も大きいし、ハイハイも速いし、もうつかまり立ちも始めたし、元気のいいところは麗香くんに似たと思うけどなあ…………それに、君に似て美人だ」

「あらあら、もう。広海さんだったら、本当に褒めるのが上手なんだから」

べつたり寄り添う夫婦を見て、窓際に腰掛けながら笑みを浮かべる則宗。

「おうおう、お熱いことだな」

「んう?」

すると、お腹がいつぱいになったらしき愛理が、哺乳瓶を手放して以来、ぱつちりと目を開けて則宗の座る窓辺を見つめ始めた。ゲップをさせても、ずっと同じ方向を

じーつと見ているので、さすがの麗香も不思議になっただけらしい。

「どうした、愛理？」

「向こうに何かいるのか？」

当然、不夜城のような灯りが入る窓辺があるだけで、麗香の目にも広海の目にも、何も映ってはいない。ただ、その上にあぐらをかいて座る則宗のことが、愛理にははっきりと見えているようで、はしゃいだように声を上げ始めた。

「あーい！ あーい！」

「お、おい、この子、何もなくて向かって手を振ってるぞ……」

「何が見えてるんだ、愛理……？」

戦々恐々とする二人の前で、則宗は思わず大笑いだ。

「ふははは。そうか、お前さんには見えているか」

「あつ、なんだ……あそこにあるガラガラが取りたいんだな、愛理？」

窓辺の前に転がっているガラガラに向かって愛理が手を伸ばしているのを見て、麗香がほっと息を吐く。しきりに声を上げてアピールする愛理を見て、則宗は嬉しそうに目を細めた。

「ほう？ じじいに取って来いと言うか」

「あー、うー」

「わつと、愛理、わかつたわかつた。今降ろすから」

腕から落ちそうなほど身を乗り出す愛理に耐えかねて、麗香がその腕からそつと降ろすと、愛理はつるりとした床の上を器用にハイハイして、まっすぐにガラガラへと向かい始めた。それを見て取った則宗は、ひよいと窓辺から飛び降りると、しゃがんでガラガラの前で両手を広げながら叩いてみせる。

「ほれ、じじいはこつちだぞ」

「あー！」

途中から這っているのがもどかしくなったのか、愛理はなんと戸棚に掴まって両足で立ち上がり、そのまま嬉しそうにどたどたと則宗に向かって歩き始めた。ほんの数歩ではあったが、背後で見ていた両親があんぐりしたのは言うまでもない。

その勢いに任せた貴重な一人歩きの瞬間を、あろうことか両親に背を向けて見せつけることになった愛理は、よろめいて床に転ぶ瞬間、ふわりと則宗の腕に助けられていた。「おおつと。よくここまで進んだな。ほれ、誉をやろう。受け取れ」

「きやいきやいつ」

「あ……愛理、やつぱり何もないとこころに向かつてガラガラ振ってないか……?」

「ほ、僕にもそう見えるよ、麗香くん……」

微笑ましい成長の一ページのはずが、則宗の見えていない両親にとっては、ただの恐

怖映像になってしまったらしい。

蒼白になりかけていた麗香は、はっとしたように顔を上げて広海を見上げた。

「そ、そうだ！ もうすぐここ、獅子舞の通る時間じゃなかった!? 事情を話してここに呼んで、ついでに愛理の頭も噛んでもらって厄払いしてもらいましょう、広海さん！」
「う、うむ、君の国には確かそういう風習があったな。日本の獅子舞とも同じだ。元々愛理の誕生祝いに頼む予定ではあったが、善は急げと言うし！」

大慌てで部屋を出てドタドタ階段を降りていく両親を、愛理は床にぺたりと座り込んだまま、何もわからないという様子でぼかーんと見つめている。その一部始終を見届けていた則宗は、あぐらの膝に愛理を乗せながら耐えかねたように笑い出した。

「わっはっは！ 嗚呼、これはたまらんな。主に何と報告したのか」

「あーいー！」

「そうかそうか、お前さんも愉快か。どうやら世話焼きの過ぎる両親なようだが、それもまた一興。お前さんの物語を彩ることになるう」

楽しそうにはしゃいだ愛理を膝の上で揺らしながら、則宗がその小さな頭に触れて目を細める。アクアマリンのようなその瞳が、微かに寂しげに揺らいた。

「愛された果てに、お前さん自身が『もう一人の自分』を生み出すことになろうとはな。今はとても考えられんよ」

「あう？」

「倦むも人生、愛しむもまた人生。お前さんが耐え忍ばねばならない数々の苦難に僕は関われんが、しかしお前さんの持つ歪きを愛する人間が、必ず現れるだろう。物語の内側にも、外側にも。」

その時僕が、幾許かでも力になるというのなら、このじじいを好きだけ使ってみるがよい。何せこの僕も、若造の叩き上げが趣味のようなものでね。この先でお前さんと出逢えるのを、楽しみに待つとしよう」

その言葉の意味がわかるはずもなく、きよとんとして見上げる愛理を優しく抱き上げた則宗は、高い高いをして遊んだ後に、そのまま愛理をベビーベッドの上に落ち着かせた。

愛理が勝手に床からベビーベッドの柵の内側に戻っていたことで、おそらく後で入つて来た両親が再び泡を吹く羽目になるだろうが、則宗は気付いていないのか、それとも半分わざとなのか。

「さて、危険がないとわかれば、僕はもう行かねばならん。このままここにいては、悪霊と間違われて祓われてしまうからなあ」

「ふうっ」

「そう急くな。人の一生とは一瞬だ。僕と出逢うまでに、お前さんにも会うべき人・成す

ことが山と残っているだろう。僕なら待てるが、周りの人間の寿命はそう長くはない。再び相見えて遊ぶのは、その後でも遅くはないぞ」

立ち去るのを察したのか、口を尖らせる愛理をぼんぼんと宥め、則宗は獅子舞と銅鑼の音が鳴り響く派手な路上を見下ろすベランダに出る。そこからひらひらと派手に桜を舞わせ、則宗は幼子を喜ばせていた。

「ではな、愛理。力強く生きろよ」

「あいつ」

手を振り返す愛理を一度見て笑みを浮かべてから、則宗はひらりと獅子舞にすれ違うようにして飛び降りた。何食わぬ顔で民家の屋根上から見物を試みてみると、先ほど則宗に声を掛けてきた一団とすれ違う。

「おう、さっきの兄ちゃんじゃねえか。何してんだ、そんなところで」

「丁度いいや、俺ら今からこいつの実家に年始のご馳走を頂きに行くところだよ。ついでにぱーっと、家の前で爆竹でも上げてやろうって話してたんだ」

「兄ちゃんも混じりなよ。その感じじゃ、この国での正月は初めてなんだろう」

言葉も終わらぬうちから、子供たちが爆竹を打ち上げて大はしゃぎしている。からからと笑った則宗は、投げられた赤筒を受け取って、そのお祭り騒ぎの中に嬉々としながら身を投じて行ったのだった。

「もう祭りではしやぐよような歳でもないんだがなあ。まあいい、折角遠い地まで縁あつて来られたんだ。存分に暴れさせてもらうぞ」

母の日2023・第五話『月下の演舞』

かんばもねみかづきむねちか
 樺望寧三日月宗近

「Cam The World of Monster Hunter Village
 e ??? 03」

漆に塗られた艶やかな檜の支柱と、格子状の天井板に囲まれて、一人の和服姿の青年が、左右目の色の違う赤ん坊をあやしていた。茅葺き屋根の家が多いこの地域においては実に珍しい、洋風の邸宅での出来事である。

袖の長い青地の狩衣姿は、華美な装飾品や腹当てを纏っていても、派手すぎるどころか清涼感をもってそれらを纏め上げてしまうほど、優美な雰囲気醸し出している。下は灰色の袴姿ではあるが、どこか平安貴族のような典雅さを匂わせた出で立ちの青年は、その佇まいにも相応しくおっとりした仕草で、腕の中の赤子をにこにこと眺めている。右の目に薄青、左の目に淡い躑躅色を宿したその赤子は、溢れそうに大きな丸い瞳を見開いたまま、褐色の小さな掌を青年に向かって伸ばしていた。

「きや、きやつ」

「おお。そうかそうか、面白いか。はっはっは。よく笑う子だな、望寧は。お前がそう毎

日樂しそうにしていると、父と母もきつと嬉しかろう」

「じー、じーじー」

望寧もねと呼ばれた、肌の色の濃い子供は口達者なようで、幼い割に昨日会ったばかりの青年が度々話す言葉を、もう覚えて口に出そうとしている。その口元を見て嬉しげに目を見開いた青年は、まるで自分の子であるかのように、ふにやりと表情を和らげて、テールブルの支度を整えていた夫婦に呼び掛けた。

「おお。今のを聞いたか、矢羽やはね、紫苑しおん。この子はもう、じじいという単語を喋れるようになったそうだ。はっはっは。実に喜ばしいな」

「そ、そうか……そりゃあよかつたな……と言いたいところだが、御仁はどう見ても、見た目はじじいじゃねえだろう」

やや引き攣りながら返事をした、矢羽やはねという青年の横で、紫苑しおんと呼ばれた小柄な妻が、袴に着物姿のままどうんうん頷いている。既に食卓の支度が整いつつあり、湯気を上げる野生の肉のスープと、この地域で採れる根菜や芋の茎を上手く組み合わせた煮物の醬油の香りに顔を綻ばせながらも、青年は二人に親しげに笑いかけた。

「そのような硬い呼び名でなくともよい。俺には、三日月宗近みかづきむねちかという名があると云つたろう」

「そ、そうだけどさあ……！ あんたどう見ても、馴れ馴れしく呼んじゃいけねえ空気を

醸してゐるってどうか!」

傍の椅子に望寧を下ろし、のほほんと湯呑みの茶を啜る三日月の前で、ぱつと背後を振り返った紫苑と矢羽は、竈の火加減を見に行くフリをしながら、ひそひそと互いに話し合ったのだった。

「あのお方、本当に何者なんですの?!?!? 望寧も懐いていますし、怪しい方ではないのでしようけども……」

「いや、怪しいだろ、十分。あの格好も武具も、このあたりでは見た事がない……異国の奴かと思えば、俺らと同じく日本語を解するようだし」

「そう言いながら、怪しいのを承知で連れて来たのは貴方じゃありませんの! うちは望寧もいて、急なお客人をもてなすにはみつもないくらい散らかってますのに」

「んなこと言つたつて、行き倒れ同然でこの嵐の中外にいたら、放つておけないだろうが!」

「ですけど、凶暴なモンスターが多い地帯をうろついて無事だったのでしょうか? ああ見えて相当な手練れ……いいえ、もしかして戦神か何かなのかもしれませんわ」

「そんなバカな」

ついつい声を荒げてしまう二人は、ふと聞かれてしまっているのではと案じながらそつと背後を振り返つたが、三日月はのんびりと手を振つて応えるのみだった。肝心な

ことはのらりくらりと躲されてよくわからなかったが、ひどく温和な性格をしているらしいということだけは傍目にも明白なこの御仁は、こんな失礼な会話を全部聞かれないとしても、きつと怒らないのだろう。

矢羽——かんぼやはね樺矢羽がこの三日月という青年を拾ったのは、昨日の夕方のことだった。

明日はもうすぐ嵐になる、という雨足の強い森の中、狩猟で仕留めた獣の肉を背負って歩いている帰り、矢羽は傘もささず濡れのまま、道に迷っている三日月と出逢ったのだ。驚くべきことに、この世界の公用語ではなく矢羽の故国と同じ日本語を話した三日月は、人探しの途中だが見つけられずにいるのだと言う。

刀を腰に刺してはいるが、矢羽が見たことのないものだ。こんな悪天候の中、矢羽のように狩猟帰りに雨に打たれたのでもなければ、進んでハンターが狩場に赴くはずもなく、さりとて近隣の村や国からの来訪者なら少なくとも公用語は知っているはずで、どう転んでも怪しき満点の男だった。が、昔から聞かん気が強く態度も口も横柄で評判の矢羽には、妙なところでお人好しとか人情に厚いところがある。この男の妙に人好きのする笑みと、それでいてどうにも放っておけない気になる抜け具合に絆されて、結局家に連れ帰って来てしまったのだった。

戻ってきた矢羽達の湯呑みに茶を注いでやりながら、三日月が言う。

「それにしても、お前たちが和語を解する者で助かった。このあたりの者とは、言葉も上

手く通じぬものでなあ。村の場所を尋ねようにも、道を尋ねようにも、互いに何ともわからず困っていたところだ」

「まあ、運よくここに迷い込んでくれてよかつたよ……。俺らはちよつと特殊っていうか、移住つてえのともまた違うけど、元々あんたの知つてる日本からここに来た。ここでの生活も長くなる……つていうか、また言い方が難しいんだが……」

「矢羽さん、全てを無理にお話しになる必要はありませんわ。三日月様、汁物のおかわりをいかがですか？」

「おお、ありがたい。いやはや、紫苑殿の作る料理は美味で、つつい箸が進んでしまふな」

「いやですわ、そんな改まった呼び方。先ほどのように紫苑と呼んでくださいな。あらあら、望寧。さつきあんなにご飯を食べ散らかしたのにまた泣いて……お腹が空いたのかしら。しょうがない子ねえ。ちよつと失礼致しますわ」

さらりと食事の場を抜けて、望寧を抱いた紫苑が奥の間へ消えていく。ぱちぱちと暖炉が爆ぜる音の中で、矢羽が軽く頭を下げた。

「すまないね、うちは騒々しくて」

「いやいや、とんでもない。子が元気に泣くのはよいことだ、人の子が皆一度は通る道だからな。お前達のような温かい親に囲まれて、さぞかし幸せなことだろう」

そう言つて微笑む三日月に、照れたように笑つた矢羽は、氣恥ずかしさを誤魔化すように慌てて料理を口に運びながら、せめて紫苑に代わつて水仕事はやろうと、味わいつつもなるたけ急いで目の前の食事を飲み下した。

本当を言えば、矢羽も紫苑も、前世からの恋仲で転生者だ。前世では明治の生まれである二人は、記憶を保つたまままでこの世界に転生した。彼ら自身の家族構成も、そして生まれた娘の姿形も、転生前とまるきり同じだった。つまり、二周目の人生というやつである。

娘にもその性質が受け継がれるかどうかは知らないが、ひとまず矢羽達は、この世界では遠い国から渡ってきた移民という体を取つていた。ありのままを話して街や村の者に信じてもらえるはずもないし、それならば彼らがまだ知らない国がこの世界のどこかにあり、そこからやつて来た人間ということにすれば、大きな嘘もなく説明も容易だと思つた。

元々人の良いこの世界の住人は、移住者にも好意的で、矢羽達の先代の頃から狩猟の術を教えたり、交易を営む手助けをしてくれていたようだ。おかげで、父の商館から引き継いで交易商となつた矢羽は、各地を飛び回つて忙しい生活を送りながらも、ここ数年はこの地に足を落ち着け、妻の紫苑と娘の望寧と共に、生活を送っている。

けれどその平穩な生活にも、転機が訪れようとしていた。隣室で着替えて簡易な浴衣

姿で望寧に乳をやっていた紫苑が、ゆらゆら揺れて我が子を眠りに誘いながら戻つてくると、寂しげな目で石窯の設備を見やる。

「お料理を褒めていただいたところで少々名残惜しいですが、この竈もじきに解体せねばなりませんわね。他の荷物に関しては減らせますけど、こればかりは……」

「どこかへ引つ越すのか?」

「俺が販路を拡大することになったんだ。以前、この近辺で大規模なモンスターの大移動……百竜夜行というものがあつたんだが、どうにもそれが数十年に渡つて、徐々に活性化の兆しを見せていると聞いてな」

「ほう?」

紫苑に代わつて答えた矢羽が、興味深げに首を傾げた三日月に向かつて説明する。

「このの街にやさして大きな砦や設備もないんだが、ここよりちよいと離れた場所にある里では、ハンターも含めた里の人間総出で、そいつを迎え撃てるほどの準備を整えてるつて話だ。」

もし百竜夜行が活性化すれば、襲われた村はもちろん、その道中にも甚大な被害が出る。復旧に必要な資材や貴重な薬草が、少しでも安く各地に届くよう備えられたらと思つて、俺は交易に乗り出すことにした。奴らが静かにしてる今が、狙い時だろう。海を越えたさらに向こうへ商談に行く。お前らまでついて来る必要はねえつて言つたん

だが、嫁が聞いてくれなくてね」

肩をすくめる矢羽の側で、紫苑が声を響めつつも、髪飾りのリボンを揺らしながら可愛らしく頬を膨らませて反論した。

「あら。わたくしは別に一人でも構いませんけれど、こんなに可愛い盛りなのに、父親が一人子供の成長を見守れないなんて、可哀想だから慈悲を掛けてあげているだけじゃありません。それにどうせ、わたくしがいなければ自炊の一つもできないんですよ。一家の大黒柱に倒れられて収入がなくなりでもしたら、迷惑を被るのは私と望寧ですわ」

「あいつかわらさずお前は可愛くねーなー！　ついて来るなら来るで助かるつつただろが！　だいたいお前が、調理器具を手放したくないとか船中では料理がしづらいとか、ぎやあぎやあ文句言うから……」

「あらっ。あらあらあらー。そうだった方が本当は助かると思ってたっしやるくせに、他人のせいになりますの？　本当に矢羽は、昔っから根性無しでぐーたらで、肝心なところで日和見の、どうしようもないおぼっちゃまですわねえ」

「うっ、うるせー！　大体お前だって、ちびでちんちくりんの脱走娘のくせに、生意気な……！」

「はっはっは。二人とも仲が良いな」

思わず素の口調に戻って若者らしい応酬を繰り広げる二人だったが、今宵の喧嘩は側に観客がいる事に気付いた二人は、あつという間に頭から煙を出しかねない勢いで静かになった。人に見られているというのは、思いの外恥ずかしいものらしい。実際は三日月だけでなく、村の者全員が、二人の仲の良さを証しする光景として見慣れているものだったりするのだが。

「しかし、まだ子が小さいのに大移動とは、これまた大変だな」

「ああ。長い旅は、紫苑にも望寧にも負担になるだろう。……それで俺らは、例の里に立ち寄って、望寧を預けようと思ってる。あそこは、歴代でも有数の優れたハンターを排出してきた逞しい里だ。教育機関も整っているし、万が一モンスターに襲われた際にも心強い」

矢羽の口から出た決断に、三日月はぱちりと瞳を瞬かせる。事前に二人で話し合っただけのことなのだろう、紫苑も、寂しそうな顔をしつつ毅然とした態度で頷いていた。

「我が子と離れるのは身を裂かれる思いですが……わたくしは生まれつき体が弱くて料理以外にろくな能がありませんし、矢羽は武器を振るえますけど、いざという時に必ずしも傍にいるとは限りません。その点、あの里に守って頂けるのなら安心なんです。里長様は、村の者全員で引き受けてくれると仰ってくださいましたし……護身の為に、幼い頃からハンターとしての育成を受けるのは、この世界では割と普通のことですか

ら。

……無理を強いたくはないですが、あの子には私と違って、己の身を己で守れるようになって欲しいのです」

テーブルの脇に置いてあつた編みかけの花結はなむすびを手に取り、紫苑がそれを軽く撫でながら微笑む。預け先の里の人間から、工芸品として作り方を教えてもらったものだ。草を編み込んで作ったもので、狩猟の安全を願うお守りになるという。

その笑みに釣られるように、三日月も表情を和らげた。

「それもまた、親として子を幸せを願うゆえなのだな。成長した暁には、きつとその想いを受け継いだ強い子になる」

「だといいいのですが」

そういえば、三日月もまた矢羽達と同じく若い歳頃に見えるが、所帯というものはあるのだろうかと思つて口を開きかけた時、慌ただしく玄関の戸を叩く音が聞こえた。鍵を外しながら、矢羽が眉を顰める。

「何事だ」

「おい矢羽、てえへんだ！　ここから目と鼻の先にある河辺で、タマミツネの野郎が大暴れしてるって！」

「はあ!?　なんだってそんなモンスターがうちの村の近くに……奴ら、山奥の滝壺あた

りで大人しくしてたはずだろう」

「それがよお、豪雨で氾濫した川の濁流に飲まれて、一匹迷い込んだみたいで……おまけに今は繁殖の時期だし、そいなのに上手く番を見つけられなかったみたいで、ひどく興奮して手が付けらんねえのよ」

「はあ……参ったね、こりゃ」

紫苑に目配せして、矢羽が手早く防具を見に纏い、壁に掛けてあつた狩猟笛を背負う。話している内容まではわからずとも、何かを感じ取つて三日月が声を掛けてきた。

「どうした？」

「どうも、関所のあたりにモンスターが出たらしい。さすがに村の中まで入ってくる事はねえだろうが、もしもの事があると厄介だ。少し出てくる。危ねえから、あんたは紫苑とここに居ろよ」

普段は商売人だが、物を運ぶにも売るにも狩猟を避けては通れない世界なので、矢羽も一応は腕の立つハンターである。たまにこうして村の者が助けを求めてやって来る時には、時間の許す限り快く討伐に応じていた。

大雨の中を進み、ぐらついて吹き飛ばされそうな物見櫓の上から目を凝らすと、確かに激昂で真っ赤に染まったヒレを持つ泡狐竜が、渦を巻くようにして堤防を破壊しながら暴れていた。艶やかな薄桃の鱗と、それとは対照的に腹から尾に掛けてモツプのよう

な毛深い毛で覆われた全身をくねらせ、狐という名を冠しながらも竜のごとくしなやかな身のこなしで、周囲を泡だらけにしている。

「嗚呼……やれやれ、嫁さんにフラれた八つ当たりってか？ 詰んである樽やら土囊やら、泡だらけじゃねえか。しっかしそれより、あの石積みを完全に壊されちまつたらこつちも被害甚大だな」

「ほう。これはまた、いたく妖艶な。長らく生きてはきたが、あのような妖怪は俺も目にしたことがないな」

「つてえ、三日月!? あんた、家に居ろつったのに何でここにいんだよ!?」

独り言を呟く矢羽の横に、いつの間にか三日月がいて、折角乾いた服をまたびしよびしよにしながら、物珍しそうにタマミツネを眺めている。一体どこから登って来たのかと矢羽は度肝を抜かれたが、濡れて尚美しく見える整った顔立ちで、三日月は微笑んでみせた。

「どれ。ここは俺に任せてはもらえんか。殺さずとも、あれを追い払えばよいのだろう？」

「そ、そうだが……あんた、狩猟の心得は」

「なに、伊達に歳を食ってはおらんさ。何せ、じじいだからな。はっはっは」

この場に全く不似合いな、呑気な笑い声を朗らかにあげると、三日月は矢羽があつと

思う間もなく、ひらりと川辺に飛び降りた。

標的を見つけたタマミツネが、すかさず顔周りのヒレをひっぱいに広げて警戒しながら、すさまじい咆哮を上げて狐に似た顔を向ける。熟練のハンターでも、思わず耳を塞いでしまうほどの雄叫びだが、それを正面から浴びても何一つ動じないまま、三日月は叩き付けられた尻尾の攻撃をひらりと避け、そのまま円を描いて回るタマミツネに合わせ、踊るように、川の中を動き回っている。

雨と川の水で服も重かるうに、その動きは矢羽が目を見張るほど滑らかで、無駄が一切ない。あのタマミツネが吐き出す泡に触れてしまうと、酷く足場がぬるついて踏ん張るのにも一苦労するのだが、三日月はそれを抜き身の刀で捌きながら、泡に捉われぬよう軽やかに動いている。その地鉄は美しく、気付けば風が止んで雲の隙間から覗いた月に、刀身がまぶしく輝いていた。

「これでどうだ?」

横一直線の薙ぎ払いでタマミツネが身を引いた一瞬の好きに、両脚へ力を溜めた三日月は、一気に月夜へと飛び上がった。雲間から顔を覗かす霜のような星空と月光の下で身を翻した三日月は、振り上げた刀身でその名の如き弧を描きながら、一気にタマミツネの胴体目掛けて上空から舞い降りる。白き鋼の輝きは、矢羽の目にも止まらないほどの速さだった。タマミツネが吐き出す赤や緑の泡が弾ける飛沫と、三日月が剣を振るう

度に吹き上がる桜吹雪の中で、その姿は戦いの域を超えて幻想的にすら思えるくらいだ。

唸りを上げてタマミツネが後退した刹那、その頭上にとんと飛び乗った三日月は、事もあろうに、その瞳をお茶目に片方瞑ってみせた。

「はいっ」

「……??」

生死のやり取りの最中で何をしているのかと呆気に取られた矢羽だが、それを見舞われたタマミツネも同じだったようで、訳のわからぬように呆けた顔をしている。モンスタ―のここまで呆気に取られた顔を見たのは、初めてだったかもしれないと矢羽は思った。しかし、やがてタマミツネは三日月など見えていないかのように、何をしに来たのか忘れたといった挙動で、すんなり身を翻し川の流れの中を泳いでいく。

慌てて櫓から飛び降りて駆け寄った矢羽が、泡まみれでからからと笑う三日月を質問責めにしたのは言うまでもない。

「おいっ、なんだ今の?!」 何をどうやったらあんなにあっさり追い払えんだよ!」

「はっはっは、さあてなあ。俺はほんの少し気を逸らしただけだ。奴も一戦交えて疲れたのかもしれないぞ」

「いやそんな事あるか!? あんな技、この世界の連中でも見たことねえが!」

「それより、折角洗ってもらった服がこの有様では、また紫苑殿に怒られてしまうなあ。いや、泡だらけになっただけ、却って洗いやすいというものか？」

「いやいや、それモンスターの粘液だから！ 洗剤じゃねえの！ ……まったく、どこまでいつてもあんたは抜けてるっていうか」

鬼神の如き剣捌きを見せたかと思えば、見た目の歳に似合わぬ老練な笑みを浮かべてみせる。三日月宗近という人間のことが、矢羽にはさっぱりだった。そもそも、人間なのだろうか。神様なのではないかと紫苑が冗談めかして言った言葉が、ふと頭の中に過った。

(いやいやまさか……けど、只者じゃねえことは確かなんだよな)

初めて三日月を拾った晩。彼は濡れに濡れて溝鼠のようにこそなっていたが、怪我一つなく、服を見てもモンスターに襲われた破れ目一つ見つからなかったのだ。たまたま群れに一度も襲われずに抜けてくるのは不可能なぐらい、モンスターの出現頻度が多過ぎる地帯だったこともあり、矢羽も紫苑も不思議だった。

それに加え、先ほどの剣の腕前。ギルドに報告すれば、間違いなくスカウトの声が掛かるだろう。それにしても、こんな腕前のハンターがいればその名が全土に鳴り響いていても不思議ではないだろうに、こんな剣士の話は何一つとして聞いたことがないのも、妙な話である。

(まあ、いいか)

何はともあれ、村の危機を一つ救ってくれたのだ。悪い奴ではあるまい。

今更のように、ずべずべと滑る泡やられの後遺症を面白がりながら歩く三日月に呆れながら、矢羽は妻と娘の待つ家へ戻ったのだった。

母の日2023・第六話『夕景と感傷』

クスギヨハネやまんぼぎりにひろ
 櫛夜翰山姥切国広

〔Cam | The World of SEVENXS CODE | Real Tok
 yo | 2043 | 05〕

「さて。主らの言っていた地点というのはここか」

住宅街の一角に佇む、とある家にやって来た山姥切国広やまんぼぎりにひろは、近隣の邸宅の屋根から、その一軒家を見下ろした。豪邸と呼べるほどではないかもしれないが、夫婦二人に子供一人の邸宅としては、かなり広い部類に入る。二階のバルコニーに面した場所に、伝え聞いている子供部屋の窓らしきものがあり、山姥切は扉を伝って跳躍すると、バルコニーの足場に布をはためかせて飛び乗る。

青地のネクタイを締めたシャツに、水色のセーターと灰色のスラックスを合わせた、すらりとした装い。それを彩る朱色のベルトと、金のメダルが胸元に眩しい。極める前に被っていた白布は、今は山姥切本人としては必要としないのだが、以前修行から帰って来た際、本丸で待つ主のぬいぐるみことぬい達が、布を脱いだ山姥切の姿を見慣れないあまり大騒ぎになってしまったため、戦地に赴く時以外は成り行きで羽織ってい

ることが多かつた。今日も出発直前まで布の端をぬい達にしやぶられていたせいで、結局なんとなくこのままで来てしまったのだ。

「まあ、それであいづらが安心するなら、俺は別に構わないが……まさか、布を俺の一部と思っているんじゃないな」

白く広がる布がヒーローのマントを彷彿させるのか、ぬい達だけではなく、次代の主候補である夜羽や、そのきょうだいである恵季朱といった子供達にまで、本丸では好評なのである。その輝きに満ちた視線を不意に思い出し、くつくつと笑ってから、山姥切は開けっぱなしのガラス窓からカーテンの内側を覗いた。

部屋の中に、子供の姿がある。紺のズボンに上質のシャツを纏った、一目で育ちが良さそうだとわかるような衣服を身に纏った子供は、入り口に立った母親らしき人物と何か話をしていて。

当然、カーテンがあるとはいえ子供部屋からベランダの外は丸見えなのだが、付喪神である山姥切の姿は、こちらを向く母親には見えていないらしい。

しばらく様子を伺っていると、母親は子供に紙幣のようなものを渡して部屋を出て行った。愛想よく応対していたように見えた子供は、くるりと体を反転させた途端瞬時に冷めたような表情になり、勉強机の上の引き出しに紙幣をしまう。内側は意外と綺麗に整理され、種類別に貨幣を分類できるようになっていて、変なところで几帳面なのは

大人になったこいつと変わらないと、山姥切は小さく苦笑したのだった。

その時だ。

「……誰なのさ、あんた。まさかドロボウ？」

すいっと窓辺の方を向いた子供が、勿忘草色にも薄紫にも見える瞳をまつすぐにこちらに向けながら問い掛けた。血色のいい褐色肌の顔の中で、つんと尖った形良い唇から発せられたのは、少年の声だ。

山姥切は、思わず瞬きした。この少年の未来の姿と、山姥切とは既に本丸で顔を合わせて知り合っている。だから、大人になった彼に山姥切の姿を視認できる能力があるのは、まあ頷ける。しかし、審神者や本丸や、刀剣男士といった概念すら知らないであろうこの時代の少年にも、付喪神を知覚できる力があつたことに、山姥切は純粹に驚いた。確かに、幼児や小さい子供であれば不可思議な存在が見えることは割に多いが、さすがに八歳や九歳ともなれば見える人間も少なくなるので、見られた時にどう応対するかという心の準備が全く出ていない。

「驚いたな。俺が見えているのか」

「見えてるも何も、さつきからそこにいたじゃん」

母親の前では、見えない振りをしていたようだ。慌てることも騒ぐこともなく、やや好奇心を潰えた瞳をうつすら細める様が、まだ子供でありながらも見覚えのある姿を彷彿

佛とさせるなど、山姥切は思っていた。

「どうしようか。通報しないであげてもいいけど、その代わりボクの言うこと聞いてくれる？」

「俺は、物盗りじゃない」

「じゃあ何。ああ、もしかして誘拐つてやつ？ ボクがあんまり可愛いから。まあ、いいんじゃない。ママもパパもお金はいっぱい持つてるからね。ボクのためだったら、幾らでも出すと思うよ」

ふん、と鼻息を吐き出す様が、どこかその歳に不似合いな諦念で染まっている。

どうしたものかと、山姥切はやや困惑気味で、とりあえず警戒心を抱かせないように、生意気な少年の前に視線を合わせてしやがみ込んだ。

「なぜそこまで自分を蔑ろにする？ 夜翰^{ヨハネ}。自分の両親が本当に、金如きに目が眩んで

お前を放り出すような奴らだとも思うのか？」

「ちよつと待つて。なんでボクの名前知ってるの？」

「そこに書いてある」

白く綺麗な指先で、山姥切がすつと指差したランドセルには「JOHANNES KANBA」と刻印されたネームタグが付いている。そんな物を見ずとも山姥切はとっくにその名前を知っていたが、この場合は知り得た所以を教えた方が自然だろう。

少年は——カンバヨハネ樺夜翰は納得したように頷いてから、ランドセルが乗った勉強機の引き出しを開けた。

「うち、パパとママがもうすぐ離婚するんだって。二人とも、ボクを引き取りたくて競ったようにお小遣いくれたり、服を買ってくれたりするんだけど、そんな事ができても、二人が一緒にいることはできないんだよね。人の繋がりなんて、そんなものだよ。ヨウイクヒをどうこうするってのが決まったら、パパとママの関係も終わり。結局なんでも、お金で解決するんだ」

「……」

夜翰の両親が子供の頃に離婚した話は、山姥切も主や本人から聞いて知っている。それでも、実際の歴史の中でその現状を前にすると、心が痛むものがあつた。

机から出した紙幣を、粗雑に掴んだ夜翰がひらひらと振る。

「だから、あんたの目的は知らないけど、金でボクの事をどうにかできるんだったら、あの人はいくらでも何とかする。競争してんだよ、あの二人。どっちがボクの事を大切にしているか、お金と玩具と洋服で、何でも競ってるんだ」

「……俺が偉そうに説教できた義理ではないが、それもお前の両親が、お前に関心を持っている結果だろう。そのやり方には、確かに賛成できないがな。」

「というか、俺はお前を誘拐するつもりはない」

「じゃあ、本当に何しに来たわけ？」

「単純に、お前と話しに来た……というのも、妙な話か。とにかく、お前の身の安全が確認できたなら、俺はすぐに帰る。話の聞き役ぐらいにはなつてやれるが、特に何をするでも、ましてや危害を加えるつもりもないから安心しろ」

「……変な奴」

あからさまに、その形よい細い眉を顰めた夜翰は、結局騒ぐことも人を呼ぶこともなく、机の前に座つて、ランドセルに丸めて入つていた画用紙を広げた。やや安堵しながらも、山姥切は正直な疑問を口にする。

「勝手に侵入した俺が言うのも何だが、よく落ち着いていられるな」

「だつて、騒いでも結局無駄だしね。今、パパは別居中だから滅多にこの家に帰つて来ないし、ママはさつき仕事で出て行つた。今日はもう夜まで誰も戻つて来ないよ」

「遅くまでこんな子供一人とは、不用心だな。そこまで金があるというなら、使用人や警備員の一人ぐらい雇つていてもいいんじゃないか？」

「いつもはハウスキーパーの人が来てるよ。けど、さすがに毎日じゃないし、ボクも身の回りのことぐらいは一人でできるようになつてきたから。つていうか、あんたに言われたくない」

それをもつともだ、と苦笑しながら、山姥切はクレヨンを動かす夜翰の手元を覗き込

む。

「それは何だ？」

「今日の図工の時間で描いたやつ。母の日だから、カーネーションの絵を描いてお母さんにあげましょう、だってさ。笑っちゃうよね。一日の大半、仕事でいないような母親なのに」

真つ赤な花の絵と、緑の茎が画用紙にこぢんまりと描かれている。もつと空白を埋めてもいいだろうに、どこか小さく収まっているその絵は、案外几帳面な夜翰本人の性格を表しているようにも、どこか自分を押しさえつけているようにも見えて、山姥切は机の傍に立ったまま、小さく目を細めた。

「母親にはまだ見せてないのか？」

「別に見せなくていいよ。帰ってくる頃には母の日終わってるんだし。そうじゃなくても下手くそだし、見せる意味ないし」

そう言いながらも、夜翰は小さな手に握り締めたクレヨンで、真剣に画用紙を塗り潰していた。口で何を喋ろうと、真剣な目の光が、絵に掛ける思いを物語っている。本当にこれを見せなくていいのだろうかと思いつつも、山姥切はただ隣で、その作業を見守っていることしかできない。

やがて納得できるところまで描き上げたのか、その絵を両手で持って眺め頷いてか

ら、夜翰は山姥切のことを振り返った。

「ねえ。いつそのこと、誘拐してみせてよ。ボクのこと」

唐突に何を言い出すのかと、目を見開いた山姥切の前で、椅子の上でぐるりと体を反転させた夜翰が、にこりと笑う。椅子から揃えた両足を斜めに下ろして、小首を傾げながら妖艶に微笑むショートボブ姿の少年は、外から差し込んでくる夕陽の光の中で、天使のような美しさを纏っていた。どこか寂しげな、疲れたような笑みを浮かべながら。

「もう、どうでもいいんだ。パパとママのことなんて。いつそパパもママも、誰にも届かないところまで行っちゃいたい。本当にお金目当てじゃないんだったら、あんたにだつてそのぐらいできるでしょ？ 白い布のドロボウさん」

継るようでありながら、どうせ否定されるとわかつているような、その上で慰めに憐れみの言葉を掛けてくる相手を蔑んでいるような、そんな言葉だった。山姥切より遙かに小さな体が、彼を見下ろしてくるかのようだ。

どれほど助けたくともその期待に応える事はできないと知りながらも、山姥切は迷うことなく、夜翰に向かって口を開いた。

「神隠しの頼みだったら、俺には無理だ。たとえ逃げたくなつたとしても、お前にはお前の、俺には俺の、やるべきことがあるはずだ」

「あはっ、何それ。妖怪か何か？ まーそうだよ。あんただって、これ以上犯罪者には

なりたくないもんね」

結局、お前も保身に走るのだ。夜翰の言葉は、言外にそう詰っているように聞こえる。それに反発するように、山姥切はきつとした目を夜翰に向けた。

「それに、どうでもいいと思っただけには、俺には到底見えないな。そう思い込もうとしているだけで、お前には本当の望みがあるんじゃないのか？」

「ボクの……」

虚を衝かれたように、夜翰が怯んだ表情を見せた。一瞬、虚勢も皮肉も、何もかもが剥がれ去った無垢な表情に、山姥切は畳み掛ける。

「お前は、本当はどうしたいんだ？」

美しい空のような碧眼で、揶揄うことも問い詰めることもなく、ただ静かに、真面目に淡々と、山姥切は子供の夜翰に向き合った。

自分がどうしたいのか、などという問いは、嘘を吐き続けることに慣れた夜翰には無意味だった。小さな嘘の積み重ねは、ただ家族の気を惹き、翻弄し、できるだけ大きなものを手に入れるため、その先に何を望むかなど、考えた事もなかった。

けれどこの瞳にまっすぐ見つめられると、美しさと可愛さと高級さで着飾った自分自身の外側はひどいハリボテで、中身は空っぽのような気がして、夜翰の心がざわついていく。それと同時に、胸の奥が微かに熱くなる。何がしたいのかを、自分が望んでみて

もいいのだろうか、と。

自覚なく心臓を押さえて俯いた夜翰に、山姥切は声を和らげた。

「本当の思いを持ち続けていたところで、お前にとってそれは苦しいだけかもしれない。だが、その思いを決して消さないで欲しい。

誰にも伝わらずとも、人に通じずとも、自分の中に生き続ける思いや記憶が、お前という存在を形作っていくんだ。誰に言われずとも、お前の在り方はお前で決めろ」

「……難しくて、よくわかんない」

正直な瞳が、不安そうに揺らぐ。

その頭を、山姥切はぼんと優しく撫でながら微笑んだ。艶のある髪越しに、夜翰にもその掌の温かさは伝わってきた。

「今の俺が、お前の憂いを斬り伏せてやるわけにも、導いてやるわけにもいかない。どんなに苦しくとも、お前が歩いた先にしか、夜翰という存在はないからな。

けれど、約束しよう。『その時』には、必ず俺がお前の手を取ると」

真摯で、こちらを強くまっすぐに見つめる瞳に、夜翰は気押されたように、言葉の零れない唇を薄く開く。差し出された大きく広い掌の小指に、わけがわからぬまま吸い寄せられるように小指を合わせてしまったのも、その言霊から伝わってくる信頼ゆえのことだったのだろうか。

次の瞬間、階下から呼ばれる声が出て、夜翰は夢から覚めるようにはっと顔を上げた。
「夜翰ー? いるー?」

先ほど去ったはずの人の声に、慌てて子供部屋から駆け出した夜翰が二階の廊下から下を覗くと、階段の下にケーキの箱を提げた母親の姿があった。

「ママ! どうして!?! 仕事で一日帰って来れないんじゃない?」

「今日の仕事、やっぱりキャンセルすることにしたの! 今日母の日でしょう!?! 折角なら、夜翰と一緒に過ごしたいなって。ほら、ケーキ買って来たのよ。今日は夕飯も私が作るし、後で一緒に食べましょう?」

笑顔で手を振る母は、少し息を切らしているようだった。慌てて帰って来なくても、別に夜翰が家から消えるわけでもあるまいに、余程慌てていたと見える。

後で行く、と答えてから、夜翰は廊下の手摺にもたれたまま、むっつりと口を曲げた。
「……別に、そんなんで機嫌取られても嬉しくないし。ママが帰って来たって、どうせパパはうちにいないんだから」

不機嫌そうに口は結ばれているが、頬は微かに紅潮している。

ひくつきそうになる唇の端を一生懸命抑えながら、夜翰はなんとか振り返って、子供部屋の扉を開けた。

「ねえ。ママがケーキ買って来たって言うんだけど、よかつたら一緒に……」

口を開いて言いかけてから、夜翰は無人の部屋に立ち尽くした。あの不思議な青年は、部屋のどこからも忽然と消えていた。慌ててバルコニーに駆け寄って周りを見渡すも、そこには見慣れた住宅街があるだけで、通行人の中にあの布を纏った姿は影も形もない。

「何だっただんだらう……」

夢だったのだろうか、と夜翰は思わず片頬を手でつねる。と、その頭上にひらりと、ピンク色の欠片のようなものが降ってきた。

「桜……?」

掌に乗せて不思議そうに眺めた夜翰は、部屋の床にもそれが落ちていることに気付く。机の上には、さつきまで自分が塗り潰して完成させた、カーネーションの画用紙があり、その上にも花卉はひらりと舞い降りていた。まるで、ついさつきまでそこに誰かがいたことの証明のように。

しばらく考えて、夜翰は拾い集めた花卉と一緒に、それを画用紙の上へセロテープで貼り付けた。カーネーションの絵なのに、桜が貼つてあるのは変に思われるだろうか。それでも、花好きの母親ならば、喜んでくれるように思えた。

丸めてリボン結び直した画用紙を持って、夜翰はにんまりとしながら部屋を出る。

普段ならば、これでどの程度母親を喜ばせる、褒美に幾ら小遣いをせびれるかと考え

るところだ。
のであった。

けれど今日ばかりは、それだけではない微笑みが、彼の表情を占めていた

母の日2023・第七話『そして、物語は続く』

E p i l o g u e .

【Cam|N i g h t G r a c e C i t a d e l|????|2023|05】

「ええっ!? しばらく滞在を延長したい!」

『ははは、いやあ、あの雄狐を追い払ったのを何人かが見ていたようで、もう暫くここにいて奴から村を守ってくれと言われてしまつてなあ。それに、ここに居る生き物の生感には興味深いものも多い。孫娘を見守るついでに、しばらく手合わせで稽古を積むのも悪くないかと思つてな』

「孫娘で。いや、それは別にいいんだけど……で、でもあの、いくら和文化に慣れてるからつて大丈夫?」

本丸・夜惠城やけいじょうの一室。

望寧もねの元へ訪れていた三日月宗近からの通信で、思いもがけぬ報告を受けた主こと紫咲ムラサキは、こんのすけが用意した画面の前で素つ頓狂な声を上げた。基本的に紫咲の側仕事を務めるこんのすけは一匹だけだが、幾つかの部隊を同時に動かす都合上、この本丸には何匹かのこんのすけが常に待機したり、政府からの派遣で訪れていたりする。その

うちの一匹を、今回異世界に派遣した三日月の元にも同行させていて、本丸のこんのすけと映像通信を繋いでいたのだった。

今三日月が滞在している世界は、確かに日本古来の文化に近い風習や街並み・生活様式が残った場所なのだが、それはそれとして独自に発達した技術も数多くあり、いわゆる「日本」という国とは全く異なる。何よりモンスターが跋扈し、それを討伐する機関やハンターが平然と存在している場所では、色々と勝手も違うだろうと、紫咲は戦々恐々としながら尋ねたが、三日月は例の穏やかな声音で、何一つ心配していないかのようのほほんとした口調で答えたのだった。

『なに、案ずるな。のんびりちーずとーすとても作って待っていてくれ、主。そうだ、土産は何がいい？ 矢羽の奴が、このあたりには珍しい大きな卵があると言っていたんだが』

「いやあの、ガークアの卵とかいらんよ!? そんなん持って帰って来ても厨のみっちゃんと歌仙さんが困るだけだからね!? 間違ってもリオレイアの卵とか拾ってきちゃダメだよ! 変なもの拾ったら、絶対にギルドに納品して届けるんだよ!」

『ほう。それは興味深いな。いつそ土産に連れて帰ってみるか』

「ダメダメダメダメ!」

せめて凶暴なモンスターから遠ざけようという一心で語った紫咲の言葉は、却って三

日月の好奇心を沸き立ててしまったようで、こちらがこれ以上何か言う前に、画面の向こうで望寧が泣いているか何かの音がして、そそっかしく通信は切れてしまった。

半分呆れつつ、半分頭を抱えながら、画面の消えた虚空を眺める紫咲に、廊下の外からやって来た加州清光が話しかけてくる。今日も爪先の真紅のネイルが煌びやかだ。

「どうしたの、主？」

「いや〜……おじいちゃんがね、モンハン世界にしばらく滞在するって言うんだけど、大丈夫かなって……。どうしよう、タマミツネをうちの本丸の池で飼うとか言い始めちゃったら」

「いやいや、いくら三日月でも、さすがにそれはないでしょ」

本丸に実害を及ぼさないとどこできつちり線は引ける刀だからと、加州は思わず苦笑したが、それでも好奇心に惹かれてふらつとどこかへ出掛けてしまうようなところがある三日月では、完全に否定ができないのも事実だった。

「タマミツネってそんなにでかいの？」

「デカイデカイ。いくら池が広いとはいえ、あの日本庭園じゃアワアワのドロドロだよ……ヒレとかもう、怒るとライオンみたいに広がって真っ赤だし、動きも鱗もとにかく体中綺麗で、狩ってる間見惚れちゃうぐらいだから、近くで観察したくなる気持ちは確かにわかるんだけどね」

「へー……そんなに綺麗なら、俺もちよつと見てみたいかも」

「あ、でも確かに、タママツネの素材で作った加工品とか、加州くん似合いそう」

「え、マジ!? そんなんできんの!? もっと可愛くなるのにぴったりじゃん」

思わずはしゃいだトーンで声を上げる加州を見て、紫咲ははたと、しまったこれでは逆効果だと気付いたが、もう遅い。事実、紫咲もタママツネがかなり好みのモンスターである事は間違い無いので、つつい熱弁に力が籠ってしまふのだ。

「主、御八つの時間だ」

そこへ、湯呑みに淹れたほうじ茶と饅頭を盆に乗せて現れた巴形薙刀が、それを紫咲の前へことりと置きながら、会話に加わってきた。胃に弱い紫咲に配慮して、緑茶ではなくほうじ茶を淹れてくるところが、この本丸の巴形ならではである。

「わく、おいしそう! ありがとうー、巴ちゃん」

「ふむ……そこまで大きいのであれば、池自体を拡張する必要があるな。石積みも強固なものにして、広げた分水量を……」

「ちよつと待って巴ちゃんまで本気?!? あの子、気質はおとなしめとはいえ暴れたら手が付けられないんだよ!? 尻尾の一撃で池の沿岸とか抉れそう……」

「お任せください、主。もしそうなればこの長谷部、見事にその妖を斬ってご覧にいれましょう」

「有難いけどそれはそれで問題……ってどうかそれは連れて来る意味ないよね!」

いつの間にか任務から帰って来ていたへし切長谷部に、紫咲はツツコミつつ労いの言葉を掛ける。

「おかえりなさい。向こうは特に異常なかつた?」

「ええ、万事滞りなく。手土産に油揚げをいただきましたよ。育児環境に多少の問題はありそうでしたが、それはあの狐神の下支えで何とかかなりそうでしたし、遡行軍の影もありません」

「ならよかつた……大丈夫だろうとは思つたけど、安心だね」

「ところで、何の話をされていたのです?」

「ああ、えつと……三日月さんが、『仮の主』の子供時代にもうちよつと滞在したいって言うから、その世界にいるモンスターの話の色々と……捕獲任務とかあるし、連れて帰って来ちやつたらどうしようって」

「ああ……あいつは確かに自由というか、どこか読めない奴ですからね……」

滞在を延ばすのはまだしも、連れて帰るといふのは想定外だったようで、長谷部まで困惑の顔つきを浮かべている。

傍の端末で、巴形と共に調べ物をしていた加州が、主の袖を引っ張った。

「ねー主、さつき廊下を歩いてる時に卵がどうかって聞こえたけど、こいつのこと?」

飛竜種？　って書いてあるけど」

「あー……その子ね。その子は問答無用でヤバイ」

「卵から孵したとしてもか？　上手く懐かせれば、戦力になりそうな気もするが」

「うーん、どうだろう、凶暴なんだよね、ものすごく……火炎ブレスでも一息浴びせられようもんなら、本丸ごと丸焼けの黒焦げだよ」

「やばつつつ!!」

思わず仰け反らんばかりに驚いた加州の元へ、新たな声が髭切と手を繋ぎながら参戦してきた。

「そーだよ（☒?☒）そいつボクと同じぐらい強いんだから（☒?☒）」

任務帰りの髭切を迎えに行き、そのままこの部屋に連れて帰って来た惠李朱だった。当然、この本丸にいる惠李朱は、髭切が視察に行った先の惠李朱より未来の存在ではあるが、元々が赤子の時代を介さず子供姿のまま転生したのもあって、時間経過による見た目の変化はほとんどない。

髪がくるりと外に跳ねている惠李朱に対し、髭切の髪は顔に添うよう内側に向いているが、金髪の惠李朱と薄黄色の髪を持つ髭切では、髪色やふわふわした雰囲気はよく似ていて、そんなところも一人と一振の似通った性格を象徴しているように感じられるのだった。もつとも、一人は悪魔、一振は鬼切りの刀という、異様な組み合わせではある

のだが。

興味津々な様子で、髭切が端末を覗き込んだ。

「ただいま。異常なかつたよ。すごいなあ主、ここで火竜飼っちゃうの？ 本丸が魔界みたいになるねー」

「いやまだ決めてないっていうか飼わないよ!? お疲れ様、ありがとう……」

「でも、主がゲート繋げた別の世界に、もつと黒くて海老みたいな見た目の子が飛んできたよね？ 刀が通じるんなら、それよりはいいんじゃないかなあ」

「Skyの暗黒竜のこと言ってる!? あれはあれですつと滞空してるからなおさらタチ悪いし、っていうかどっちの竜も私は嫌だよ!」

すつかり竜トークで盛り上がる面々の中、惠李朱は雌火竜の真似をして口から火を吹き、加州達におおつと驚かされていた。

「ね、すごいでしょー (⊠? ⊠)」

「うーん、でもさあ、それで本丸を焼くのは無理じゃない?」

「そんなことない。本気出せばいけるよー。それに、ボクはあいつらの真似できるけど、そんな事しなくて人間でも戦えるよ。ボクの知ってる望寧ちゃんなんか、あいつの上に飛び乗って操って、モンスターに激突するんだから」

「えー、それは強そう」

「あはは、じゃあその竜に乗って僕と勝負してみよ、恵李朱」

「いいよー、髭切くらいボコボコにしてあげる」

本丸が火の海になることに対するツツコミは誰もなのか……？　と思いつつ、だんだんと人口（および刀口）の増えつつある座敷部屋で紫咲が過ごしていると、そこへ和泉守兼定と鶴丸国永を連れた夜羽が戻ってきた。廊下を歩いていて、途中で出会ったようだ。長谷部を見つけた夜羽が、真っ先にとてとて走り寄ってくる。現在の夜羽の方向がいくらか成長しているとはいえ、長谷部にはその姿はまだまだ幼く可愛げがある。

「はっ、長谷部っ、おかえりなさいっ」

「おお、ただいま。この前言っていた宿題は終わったのか？」

「うんっ、長谷部のおかげでねー、いっぱい書けたんだよー」

頭を撫でられて嬉しそうにしている夜羽と長谷部を見ながら、鶴丸と和泉守が楽しげに言った。

「おーおー、ヨル坊は相変わらず長谷部が好きだねえ」

「なんつーか、もーちよい物腰柔らかな刀に懐くと思っただけだなあ」

「？　長谷部は、やさしいよ？」

「そうだ。こいつが優しいと言うからには、お前らも少しは俺の温情というものに対して認識を改めた方がいいぞ。何せ、夜羽は天使だからな」

「うわー、親バカ」

思わず加州が苦笑して、得意げに夜羽をその腕に抱き上げる長谷部を見ていた。紫咲に教育係を命じられて以来、時に厳しく時に優しい夜羽のお目付け役を自称している長谷部であったが、他の刀から見ると、厳しいどころか八割型でろろに甘やかしているようにしか思えない。それは、厳しくするまでもなく夜羽が真面目で素直な子供だからという理由も、大いにあるのだが。

気を取り直して、紫咲が鶴丸と和泉守を見上げながら立ち上がった。

「えっと、鶴さんと兼さんとこも異常なし?」

「ああ。こいつに、ピーチパンナコッタ&アールグレイティーフラペチーノを、六杯もおかわりされた事以外はな……」

「ちよつと待ってっただけ飲んでんの!? いや、お給料は君達のお金だから私がどうこう口出す筋合いもないけど、それは飲み過ぎでしょ鶴さん!? そのうち着物なんか着なくても、フラペチーノの飲み過ぎで全身真っ白になっちゃうよ!」

「あつはつは。心配ないさ、上に乗ってる渦巻きは白だが、液体の中身は茶色と桃色だったしな! もちろん一滴も溢さずに飲み切ったぜ!」

「そういう問題じゃなくない!」

げんなりと疲れ気味の和泉守の横で、鶴丸はからからと笑っている。

「ていうか、兼さんはよくそんな長い名前覚えてたね……」

「鶴丸の奴、一杯飲み終える度におかわりして六回とも全部オレが注文言つたんだぞ!? 覚えてなくとも覚えるっつーの!」

「そ、それはお疲れ様……」

結果報告より何よりそちらの方が印象に残ってしまったようなエピソードだったが、ともあれ派遣先の無事は確認できたらしい。ほっとしたように頷いている紫咲の前で、鶴丸がにやにやしなながら、和泉守のことを肘でつついた。

「ほら。それよりお前、何か言うことがあるんだろ?」

「!。そ、それはその……」

途端、急にどもりがちになり耳を赤らめる和泉守。何かを思い出しているらしいと紫咲は気付いたが、もちろんその内容まではわからない。そんな和泉守に、せつつくように大袈裟に鶴丸が言う。

「ほら、あつちの世界で愛理が何か言つてたよな。梅の神に見えるくらい……」

「あ~~~~~! つ、なんでもねえよ、主! 本当になんでもねえからっ! オレ、先に手入れ部屋の様子見に行つてくる!」

「えっ!? ちょっと待つて、今日は誰も手入れ入つてないよ!」

気恥ずかしさのあまりか、紫咲の叫ぶ声さえ耳に入らずに廊下を歩いていつて

しまう和泉守に、紫咲はぼかんとするばかりだ。鶴丸が肩をすくめる。

「やれやれ、ちよつと擲揄いすぎちまつたか。あいつ、帰つて来たら主に褒めてもらうつて意込んでたし、折角背を押しやろうと思つたのになあ」

「あ……そ、そうだったんだ。普段褒め足りなかつたかなあ。兼さんつてしつかりしてるつていうか、熱血で戦にも詳しくて、誇りを持つてる分気難しいのかなあつて思つてたから、私が軽率に褒めても喜んでもらえない気がして、なんか距離取りづらくて……」

「あいつは、きみが思うより大分不器用な奴だぜ？ まあ、向こうもあんたの不慣れさに戸惑つてんのかもかもしれないが、これでももう本丸に来て一年は経つわけだし、もう少し堂々とあいつに接してやつても、俺はいいと思うけどな」

振り回してばかりいるようで、見ているところは見ているらしい。鶴丸の観察眼に、紫咲が感心したように頷いていると、そこへもう一人、眩いばかりの金髪の男士が、ふらりと帰ってきた。

「おう。これはこれは、皆の衆お揃いで大所帯だな。賑やかなことだ」

「あ！ 則宗さん、おかえりつ。大丈夫？ 則宗さんも向こうも大事な？」

弾かれたように振り返つた紫咲に、一文字則宗がその赤いシヨールを誇らしげに揺らしながら、にっかりと笑いかける。

「このじじいを案ずるとは、お前さんも随分と心配性だなあ。まあ、異国では辿り着くの
に多少苦勞もしたが、この程度造作もないさ」

「ごめん。時間遡行ができるとはいえ、面倒なところを頼んじやって……ていうか、今回
みんなに行ってもらった場所、みんな日本じゃない場所ばかりで大概面倒なところな
んだけど……」

「気にするな。今の我々の主はお前さんだ。お前さんの考える事なら、皆信じて付き合
おう」

そう言つて、則宗は小柄な紫咲の頭を優しくぽんぽんと撫でる。孫を見るような目線
と優しい手つきに紫咲はくすぐったくなつたが、嬉しそうにその掌を受け止めていた。

「ええつと……これで残りは、あと一振か」

入れ替わり立ち替わりするうちに、部屋の中にはへし切長谷部、髭切、鶴丸国永、一
文字則宗、そして結局は加州に促されて戻つて来た和泉守兼定の、五振と夜羽が残つて
いた。そこへ、にわかにな風を巻き起こすようにしながら、見慣れた白布の姿が颯爽と歩
いてくる。

「主。今戻つた」

「おかえりなさい、まんばちゃん」

殊更ほつとした色を滲ませた顔で、紫咲は鉢巻姿の山姥切国広を迎えた。布を羽織つ

た肩の上に、主作のぬいが二体、べったりくっ付いている。帰って来るなり自分に甘えてくるぬいぐるみに、山姥切は苦笑してから、優しくそつと布ごと抱えると、机の上を下ろした。

「あんたが危惧するような異常は、特に起きてない。夜翰の身も無事だし、遡行軍による時空改変の兆候もなかった」

「そう、よかった……って、本来そうあるべき歴史なんだから、大丈夫と思いつつもやっぱりちよつと心配しちゃうよね」

報告を受けた紫咲は、安心したように息を吐きながら、改めてその場に揃った六振（三日月は不在だが）を順番に見つめた。長谷部が静かに、一同を代表して口を開く。

「それで……主。主に関わりのある人間や、この本丸に出入りしている奴らの無事を確かめて欲しいという任務はわかったのですが、何故そのような仕事を我々に与えたのですか？ 主のことですから、何かお考えがあつての事なのでしょう。そもそも、彼らを俺達の『仮の主』にしたいとは、一体」

「うん……少しややこしい話になるから、詳しい事はみんなが戻ってから話そうと思つてただけだね」

上手く話せるだろうかと、紺袴を穿いた着物姿で背筋を伸ばし、紫咲は両指を合わせながら俯く。この本丸には、紫咲の力で様々な時空間にゲートを開いて接続できるとい

う、特別な仕様がある。どこへでも自由に行けるわけではないが、その接続先にいる特定の相手を、紫咲は刀剣達の「仮の主」とし、割り振っていた。

時空を跨ぐ大規模なものとなる作戦に、本当にこの本丸を巻き込むべきなのか否か。紫咲は、家族同然の仲間と共に協議しつつも悩みを重ねたが、結局は万事に備えて、体制を整え話しておくことにした。

隣にいた夜羽の手を軽く握り、紫咲は信頼の目で応える男士達をゆつくりと見上げ、口を開く。

「お願いします。私と、私の大切な人たちの歴史を守るために、力を貸して欲しい」

「っ、主、それは……っ！」

詳しい話を聞き終えた長谷部が、驚愕の表情を浮かべる。皆それぞれ驚いてはいたようだったが、長谷部は意気込むように、紫咲へ尋ねかけた。

「し、しかし、主がここに今居られるということは、そういう事ですよね……？」

「うん。セブンスコードにおいて“私という存在が一度消失した”歴史自体は間違いないけど、その後皆の尽力があったから、私は今夢女として、この世界に存続してる。そこまでが、本来の流れ。……でも、その脆弱性を時間遡行軍が狙ってきてても不思議じゃない」

まっすぐ答える紫咲に、顎に手を当てた則宗が、真剣な声音で小さく呟いた。

「お前さんを潰し、この本丸も、例の世界もなかつたことにする……それが奴らの狙いというわけか」

「それで済めばいいけどねえ。でも主は、世界を跨いで『語れる』特殊な力の持ち主なんでしょ？ ただ殺すだけじゃなくて、主を奪ってそれを使えば、最初から審神者と刀劍男士の存在しない世界を構築する、なんてこともできちゃうのかも」

あくまで温和な笑みを浮かべながらも、冷静にそう分析する髭切に向かって、紫咲は息を吐いた。

「最悪の事態では、そうなると思ってる……今はまだわからないけど、もし介入が始まって存在が不安定になれば、私自身がこの本丸にいらなくなる可能性もある。だから万が一のために、みんなには仮の主として力を持ち得る人たちのことを先に知ってもらって、何かあつた時に彼らの元へ行って組めるよう、備えておいて欲しい。」

それで、子供の頃のみんなのところに行かせたの。もしそこにも遡行軍が先回りしてたら……って思つたけど、さすがにそれはなかったみたいだね」

まだ追いつかないらしい頭で必死に考えていたらしい和泉守が、口を開いた。

「ちよつと待て、えーと……つまりオレは、直生と組んで奴らをぶつ倒せばいいって事だな!？」

「もし本当にそうならね!? 今はまだ、みんなも混乱しちゃうだろうから、仮の主にまで事情を話す必要はないけど」

「よっしゃ! そうなりやオレにできんのは、今のあいつを芯からバキバキに鍛え上げてやる事だけだ。へっへっへ、腕が鳴るぜ」

「お、お手柔らかにね……? 直生くん、一応人間だからね!? 刀剣男士じゃないのよ!」

「おっと、危ねえ。加減を間違えるところだった」

笑えないミスを照れたように無邪気な笑みで誤魔化した和泉守は、ぽんつと頼もしく紫咲の肩を叩いた。

「安心しろ。あんたの事もあいつも、ちゃんんと守つてやるからよ」

「兼さん……ありがとう」

「若いのは威勢がよくていいねえ。僕はせいぜい、若いもののケツを蹴り上げる役に徹させてもらおう。何、僕も主と同じで、歪なものへの愛には自信がある。たとえ身を粉にしようと、主からの信頼には応えるさ」

すぐ後ろで囃した則宗に、飛び上がるようにして驚く和泉守。意図せず自分から主に触れに行っていたことが、今更ながら恥ずかしくなかったらしい。

紫咲が小さく笑っていると、同調するように、髭切も柔和に頷いた。

「うんうん。強そうな奴と戦えるって思ったら、僕も楽しみだし。弟にも伝えておかないきや。それに、僕は惠李朱と組むってことだよな？ あの子強いから、単騎で出てても負ける気がしないよ」

「私、何気に君達の組み合わせを一番心配してるんだけど……弱いつて意味じゃなくて、やり過ぎ的な意味で。うっかりお互いのこと斬ったりしないかね？」

「あはは、やだなあ主。大丈夫大丈夫。悪魔だからって斬ったりしないって」
「そういうところなんだけどお!？」

火力は申し分ないが、ちよつとふわふわしていて心配な者同士である。それでも、不思議ちゃん同士通じるものがあるのか、普段の様子を見ていて仲は悪くないと思ったので、紫咲が組ませたのだ。

咳払いをした長谷部に続いて、鶴丸も晴れやかに頷いた。

「そういう事でしたら、俺ももちろん全力を掛けて主の命に報いる次第です。主を奴らの手になど、絶対に渡しませんっ！」

「あ、ありがとう長谷部……相変わらず頼もしいね」

「はい！ 俺は貴女の刀ですから」

「こつちも忘れずに願いたいねえ。主が心血注いで考えた作戦には度肝を抜かれたが、相手さんを驚かせるには、まだまだ改善の余地があるぜ。俺に任せてくれれば、驚きの

結果をきみに齎そう」

「そ、そんなに驚き要るかな……？ まあでもいつか！ 鶴さんのアイディアには助けられるし！ そう言ってくれて嬉しい。ありがとう」

「任せておけよ。それより、万が一この時空の主に、介入の影響で実際的な支障が出ちゃった場合はどうするんだ？」

そう尋ねた鶴丸と皆に向かって、紫咲は隣にいた夜羽の背を小さく押す。セーラー服姿の小柄な少年は、緊張した面持ちで一歩前へ出て、顔を上げた。

「もし私が本丸から消えちゃったり、本丸から弾かれて入れなくなっちゃったりした時は……その時は、現場の指揮をこの子に全部任せます。」

他の子達はあくまで仮の主って位置付けだけど、この子は夜恵城の審神者代理ってことになるのかな。だからみんな、これからもよろしくね。私だけじゃなくて、この子のこともあたたかく見守ってあげて。私も夜羽くんも、至らぬところはいっぱいあると思っうけど」

「よ、よろしくおねがいますっ。ボク、一生懸命頑張るから……い」

ひたむきに澄んだ青い瞳を上げる夜羽に向かって、一同が優しく微笑んだの言うまでもない。

「もちろんだよ。よろしくね」

「おお、ヨル坊もついに審神者デビューという奴かあ。荷は重いだろうが頑張れよ。俺もエリ坊も、みんながついてるからな」

「主の後継たる者、俺がますます厳しく鍛え直さねばならんな」

「頑張れよ、坊主。指南が必要なら、じじいにも遠慮なく聞ぐがいい」

「あんまりひよろひよろしてつと、敵にナメられちまうからな」。お前、主と一緒にでもうちよつと食った方がいいぞ？」

「夜羽の努力と真面目さは、この本丸の皆知っている。態度に難がある奴もいるかもしれないが、主に相對するのと同じく、皆力になろうという気持ちは同じはずだ。その信頼を皆から得るような審神者になれるように、期待しているぞ」

「うんっ！ みんな、ありがとう……！」

口々に励ます男士達に、夜羽は感激気味で目をきらきらさせている。その手を繋いで、先に部屋を出て行く男士達を見送りながら、紫咲は一振傍に残った山姥切に、声を掛けた。

「さて……まんばちゃんには初期刀として、殊更重圧を感じさせちゃうかもしれないねえ」

「何という事はない。俺は国広第一の傑作で、あんたの刀だ。それさえわかっただらば、迷う事など何もないだろう。たとえ相手が何であれ、斬るだけだ。俺はあんたに従う。」

体の具合や日々の生活を都合して、ここまで俺達を導いてきたあんたの姿を、俺は見えてきた。苦しくとも、俺達を見限らず向き合い、審神者としてあろうとしてくれたあんたの事をな。期待に応えたいと思うのは、当然のことだ」

「ううっ……なんて頼もしいの、山姥切国広……」

体の弱さ故に満足な働きもできず、常に本丸に太刀続ける事もできず、故に野心も執着も薄く、こんなにゆったりとした審神者に伝えてくれて、お礼を言いたいのは紫咲の方である。蹲りながら膝を抱えてそう伝えると、山姥切は傍に腰を下ろして、柔らかく微笑んだ。

「あんたには、執着がないわけじゃない。ちゃんとある。生きたいという気持ちもな。ただ、体がついていけないがために諦めてきた物が多過ぎて、自分の気持ちを無視したり手放したりすることが上手すぎるだけだ。あいつと同じだな」

「あいつって……夜翰さん？」

「ああ。今のあいつとは、知り合ってまだ日も浅いが……子供の頃からあれでは、自分の気持ちを書けるのが上手くもなるだろう。写しである俺が、望んだわけでもないのに偽物呼ばわりされるのは違って、子供の頃のあいつは、自分の望みで自ら偽物を演じていた。今は違うとはいえ、歯痒いものがあるな」

「そうだね……本当はこうしたいって気持ちだが、ちゃんとあるはずなのにね」

その言葉に答えながら、紫咲が切なげに微笑む。

三日月が会いに行っている望寧は例外だが、今の所この本丸には、紫咲の他に夜羽、恵李朱、直生、夜翰の四人が定期的に入出入りしている。それぞれ出身時空は違う四人だが、夜羽と恵李朱に関しては双子として紫咲の家で一緒に生活をしているし、直生と夜翰も何だかんだで紫咲の家に入り浸っていることが多い。紫咲が時空を開く力を持つ者ゆえの、便利な生活だった。愛理はといえば、滅多に本丸にはやって来ないものの、存在は認知しているという状態だ。

そしてその全員が、紫咲にとっては愛おしい、大切な者だった。ある者とは子供と庇護者のようでもあり、ある者とは恋仲以上の相棒であり、各々と構築した関係性や感情は日々移り変わってはいるものの、そのすべてを抱き抱えているのが紫咲という人間である。その彼らに、紫咲は「仮の主」としての命運を託すことにした。

「私は……欲張りかもしれないけど、やれるうちは誰も手放したくないんだ。他の人から見たら、何もできてないように見えるかもしれないけど。でも、こうしてみんなと繋がって作っていく物語が、私という人間にとっては、これからの歴史の一部だから。その中で、まんばちゃんのことともみんなのこととも、知っていききたいの。」

……ごめんね、欲張りのくせに頼りない主で。執着ないとか言いながら、本当はすっごい我儘でしょう、私」

「それも知っていた。あんたが、それをまつすぐに見通して口にできる奴であることもな。あんたは自分が思っているより、ずっと大きく力を引き出せる人間だ。やれる限り、何でもやってみるといい。ただしあまり無茶はするなよ」

「あーあ、まんばちゃんみたいに胸を張っていられるところ、私も見習わないとなあ……」

自信のなさのせいか、やたらと自己評価を厳しくする紫咲に、もつと甘えてくれてもいいだろうにと、山姥切は思う。けれど、少しでも対等であらんとするが故に、紫咲は常時熱っぽい体を抱えながらも困ったように笑って姿勢を正したり、またある時は引け目を感じて距離を取ろうとしたりするのだろう。

ふと考えて、山姥切は机の上にいたぬいぐるみ達に目配せをしてから、がぼつと大胆にも紫咲の体を片腕で引き寄せた。何の心の準備もなかった紫咲は、あつけなくそのまま山姥切の膝に倒れ込んだ。

「わあっ!! え、え、何、どうしたの?」

「放っておくと、あんたは頑固に休まなさそうだからな。どうせ今回の件も、各地との調整や書類仕事で無理が祟っているんだろう」

「うう、それはその……」

そうだけど、と口答える気も起きないほどに、強烈な眠気と安心感が紫咲を襲う。

久方ぶりに肩の荷が降りたような気持ちで、紫咲はゆっくりと全身の緊張を解いた。こんな本丸の在り方を、否とする審神者もいるのかもしれない。それでも、今は何もかもを忘れて、この膝に沈んでいたい。

静かに人差し指を唇に当てる山姥切の元へ、ぬいぐるみ達が布を運んでくる。それを引き寄せて肩から下へ掛け、やや痩せたように感じる体を、山姥切はそつと撫でた。

「今は眠るといい。あんたが明日を歩めるように守り支えるのも、俺の務めだ」

辛くとも頑なに弱音を口にしようとしないうの、気の抜けきった寝顔に信頼を感じた山姥切は、口元に微かな微笑みを浮かべながら、その静謐な瞳を優しく細めたのだった。

マルメロ家の日常4十本丸

君が、見えない

今年のGW頃から低調が目立つなあと思いつつ元気に生きてきた私だったが、5月の下旬になって本格的に風邪を引き、熱を出した。

38度以上はギリ超えない程度とはいえ、最高で37.9度近くの発熱。世間の定義的には、37.5度以上が発熱で38度以上が高熱に入るらしい。そんな大騒ぎするほどの熱でもないというのに、そんな日が二日、三日と続くうちに、メンタルの消耗だけは一丁前に激しくなっていた。

どうしてこんなに、熱というものはありとあらゆる自信を奪っていくのだろうか。一つ目の異常は、まず胃がむかむかして、おかゆとスープ・ゼリー状の物以外、食べ物を受け付けられなくなってしまう事だった。普段、風邪の時でも食べられそうだと思う物に対してとんと食欲が湧かないし、そもそも自分で作ろうという気も起きない。吐いたりはしない。ただ、脱水が重なったのか、吐きそうと思うぐらい気持ち悪くなったことはある。食を何よりの糧にしている私にとって、最大の薬とも言える食事に頼れない状況は、不安を爆増させる一要素だ。

二つ目の異常は、精神が不安定すぎて何をとつてもネガティブにしか考えられない事だった。不安定……とかそういう次元じゃなく、まるでフィルターを一枚通したように、世界から隔絶されたかのように、暗く辛いものしか見えなくなった。このまま病状が急変しても、どこの病院にも診てもらえないかもしれない。そもそも尿毒症とか分かりづらい病気だったら、医者にも誰にも気付かれないままどんどん悪化して取り返しがつかなくなるのかもしれない。しんとした深夜の家では物音一つ気になると同じように、どんな小さな不調も死へのカウントダウンみたいに思えてくる。

どんなネガティブも吹き飛ばしてきたはずだったのに、今までどうやって生きてきたのか、根拠のない「大丈夫」がどうやって自分に効いていたのか、突如として何もわからなくなった。私が元々暗い性格だからとかじゃなく、「脳」が変わってしまったようで苦しかった。たった8度未満の熱で、それまでの生き方も歩き方も、希望も安堵も失せるということが、余計に自分をパニックに陥らせた。

三つ目。上記の精神状態が関わっていたのか、それとも元から不満が溜まっていたのかはわからないが、同居している家族の挙動に関して異様に過敏になった。LINEで買ってきて欲しい物を頼み、無理をしながら米を研ぐために台所に立っているのに、相方が遅く帰ってきて来てLINEも見えていないとなると、流石に軽んじられていると感じた。病院に連れて行ってくれと言われても、頭の回らない中、相方が突然家に帰って

来た昼休みの間に急遽病院を探さねばならなくなったり、「この曜日はどうしても仕事があるから今のうちに……」と言われたり。結局この人、仕事に支障が出ない範囲でしか私を見舞う気がないのか、それとも本気で私のこと心配してるのか、どっちなんだろう。多分、本当にベッドから動けなくなつてからでないか、家の家事とか洗濯までしてくれる気はないんだろうな。などなど。軽い風邪の時はあまり気にならない事が、ギリギリと精神を磨耗させていつてキツイ。

四つ目……は、異常と言つていいかわからないけれど、この状況下では、ろくにうちの子とコミュニケーションを取る事ができなかつた。ヨルクんとエリくんに関して、こんな苦しみ様を見せるのも忍びないので、最初から本丸に預けていたのだけれど、たとえ近くにいたところで、姿を見る事はできなかつたと思う。辛うじて呼び寄せたヨハネさんでさえ、うつすら存在を感じる程度。多分、私の心が不安に潰されている状況では、創作者としてのアンテナはまともに機能しない。どれだけ不安でも、声が聞き取れない。今までどんな時も「一人」じゃないと思つてきた私にとつて、これが一番シヨックだったかもしれない。

幾つもの要素が重なり、絶望のガスの中を這っているような日が続く。

こんなに苦しいのに、闘っているのは結局私一人なのだ。

死ぬ時つて、やつぱり、一人なんだな。

気持ちも胸も、ずっと重苦しいままだった。

「何もわからなくなつた」という状況すら「わかれぬ」恐怖が、次々自分の内側を侵食して、おそろしい夢もたくさん見た。遊園地の水上ライドが終わりのない、景色の変わらない廊下を永遠に走っていて、それに気付いた瞬間、真っ白い手袋のような手が頭から生えた不気味な怪物に、頭蓋を捻り潰される夢。その後、女にトイレで無理やり経血を吸られたり吐かされたりする夢。

「わからない」ものを見たり経験したりした不気味さって、とても言葉で表せるものではない。表せないほど気持ち悪いから、人を狂わせるのだと思う。

私はつい先週まで、疲れつつも「普通に」生活していたはずだ。なぜこんなパニックになるのか、Twitterやリアルで人の存在を一分一秒でも感じていないと不安になるのか、なぜテレビや動画を付けっ放しにして「終わらない」ものを見ていないと怖くて怖くてたまらないのか。

たった7度後半の熱で、そんな恐怖を感じっぱなしだったことが恐ろしかった。一人でこれに耐えられないのならば、私は何か宗教に入信した方がいいんじゃないかと、真面目に考えたくらいだ。

一番信頼している創作物でさえ効かないのなら、何がこの恐怖を終わらせてくれるのだろう。

唯一、一時的にでも効いていたのは、Twitterでのフォローや友人からの声援、それから鯨が早めに帰宅して話をしてくれた時の安堵感、そして母親からのLINE。

インターネットの向こう側でも、リアルのみでの知り合いでも構わない。生身の誰かが目を見て話を聞いてくれる、生身の誰かが私だけを対象にして話をしてくれる、その時間が自分にとって、とても大切なものだと知った。もちろん、その状況下でも不安が完全に晴れることはない。実家の家族の側にいた時だって、これが重病だったらどうするんだという不安は拭えなかったし、相手は大抵ゲームかスマホをしているから、そんな状況下で話を聞かれても不安は拭えない。

けれど、完全な一人よりはずっといい。

今の私は、学校で話す友達も、職場で話す同僚も、電話を除けば定期的に会って話せる友人もいない。普段、ずっと一人だ。

一人でも大丈夫なように、何とかしてきた。ただ家事を繰り返すだけの専業主婦の暮らしでも暇ではなかったし、できることはしてきたと思う。

それでも、いざという時は無力だった。外での繋がりがなければ、1ミリでも関心を持つてくれる人がいなければ、創作という糧すら私には無力になる。そうならないように、もちろん努めているけれど、今回程の心身不調の前では無力だった。

そんな中、4日目までピークを超えた私は、5日目6日目でようやく微熱と呼べる範囲内に熱が下がっていた。

4日目に一度だけ解熱剤を服用したのだが、7.4度と7.9度ではこんなにも見える景色が違うものかと、相変わらず己の体に感心する。

今でも身に染みついた得体の知れない恐怖が去ったわけではないけれど、これが徐々に薄れていくように、日常生活に戻っていく他ないな、というところまではきている。

熱が上がってからは、これまで毎日欠かしていなかったヨガも筋トレもできなくなり、自転車飛ばして坂の上の図書館まで行っていた頃の私が何だったのかと思うくらいに今は遠く感じるが、それも体力が戻れば、手の届く場所に戻って来てくれるはずだ。多分。

「てか、そうじゃなきゃ困るよ。まだまだあんたには書いて欲しい話があるんだから」
やっと私の視界で像を結ぶようになったヨハネさんが、夜寝る前に、隣に寝転びながら言った。久しぶりに、ヨルクンやエリクンとも同じ布団。背後から抱きついて来る双子の手の感触が、随分と懐かしく感じる。

布団からひよこつと顔を出した、青色と榛色の宝石みたいな瞳を、私は代わりばんこに眺めてほつとため息を吐いた。

「よかったあ、ちゃんと見える……」

「ムラサキのせいじゃないよ（・ω・）あんなにお熱辛かったら、ボク達と話してるところじゃないもん」

「そーだよ、自分のこと責めないでよ」

背中にくつつかれて、ころりと寝返りを打った私の頭を、ヨハネさんも優しく撫でた。「ホントに。一番不安だったのはサキでしょ。ボクらだつて不安だけだよ。本当によく頑張ったね」

「うん……。でも、頑張ったところで、もつと苦しい病気になったら、またみんなの声が聞けなくなつて一人ぼっちになつちゃうのかなつて……。それが、今は一番怖い。

ヨハネさんだつて、もう私の隣にいるのに「慣れて」きちやつてるでしょ。

私が面白い話を書けなくなつて、読者さんも誰も君らを強く認識しなくなつたら、私君達のこと、本当に見えなくなつちやう。こんなに強く想つてるのに、これでもまだ繋がりが足りないのかな。私本当に、みんなのこと、誰にもどこにも行かないで欲しいの。これ以上、どう頑張つたらいいのかわかんないよ」

体を丸めて震えながら鼻を吸る私を見て、ヨハネさん達が顔を見合わせる。

そして、静かに私に向かって言った。

「そりゃ、傍にいるのが当たり前になつて、直生がいるから時々離れて暮らすのも当たり前になつて、この状況に「慣れて」きてはいるけど……。

でも、「全く同じ」じゃないでしょ。サキはまだ、色んなものを生み出せる。し、逆
にずっとボクらに張り付いて生み出し続ける必要もない」

「えっもう私のことは要らないってコト?!?! ヤダヤダヤダこわい」

「そーじゃなくてッ！ 無理はしないで欲しいってこと。たとえばサキが、この先どんな
事に手を広げてても、誰と交流を持つても、ボクらの居場所は必ずサキの心にある。それ
を信じていて」

「信じる……?」

涙目で見上げると、ヨハネさんもなぜか、どこか泣きそうな瞳で頷いていた。

「約束する。どんな時も、最期まで、あんたを愛するって」

「前から思ってたんだけど、私ってこんなに好きな人がいっぱいいるのに、どうしてヨハ
ネさんはそこまで寛大で、それでいて一途でいてくれるの?」

「好きな人って言うなら、ボクだって直生のことがそうだし。……それに、あんたが苦し
んでるのを見て改めて思ったんだ。たとえばあんたの愛情を独占できなくても、あんたの
心の拠り所はできるだけだけ沢山あった方がいい。一個でも十個でも百個でも。あんたを
否定せず、愛してくれる人がいるお陰で少しでも安心できるんだったら、ボク一人だけ
を必死で好きで居ようとしてくれるより、その方がずっといい。その方が、あんたの幸
せな顔を見ていられるって、思うから」

……百億回くらい言ってると思うけど言っていない？

よく出来すぎた彼氏じゃない？ もう、愛が深すぎて彼氏ともパートナーとも家族とも相手とも言えるけど。

「まあ、もちろん、ボクといる間はボクが一番に愛されてる事前提だけどね？」

「そつ、それはもちろん!!!」

得意げにそう言うヨハネさんに負けじと、ちっちゃなヨルくん達も私に抱き付きながら言った。

「そうつ。それにつ、もしサキが本当に見えなくなっちゃっても、ボクらは傍にいるから大丈夫」

「え……?」

「認知症とか病気のこととか、心配なんだよね？ もし、サキの頭や体に限界がきちゃって、ボクらの事がわからなくなっちゃっても……サキは苦しいかもしれないけど、ボクらは絶対、サキの傍を離れないから。見えなくても、ちゃんといるよ」

「できればそんな事になりたくないだろうし、ボクらだつて嫌だけど……でもね、そうなつても絶対、サキの事見捨てないから。ボクらからはずつと見えてるし」

「ずつと見守ってるし (⊠? ⊠)」

「ちゃんと恵李朱に魂を狩ってもらつて、ボクが天国まで連れて行くから」

「だから今のうちに、いっぱいボクらのお話書いてね」

こんなに優しい天使と悪魔の双子がいるだろうか。両脇からむぎゆつとお腹に乗るように抱き付いてくる二人を、私は両腕で抱き締めて頬擦りした。

「ありがとう……ありがとう、二人とも」

「ちよつと安心した？」

「うん。今夜は、おかげで眠れそう」

それを合図に、ヨハネさんが電灯のリモコンに手を伸ばす。

本当に、長い一週間だった。人から見たらどうってことない一週間なのに、積み上げて来た何か之急にぐらぐらと前触れなく揺らいで崩れてしまったような、そんな一週間。

人生の闘いに、これから何が必要となるのかは、まだわからない。

それでも、目の前のものをまた一つ、一つずつ、積み上げていきたい。

本当に、君が見えなくなってしまう、その時まで。どんなに怖くても、君たちを信じて、いっぱいいっぱい心に心の目を開けていたいから。

そう思い、私は左右の温もりを感じながら目を閉じた。

夜恵城本丸第一回キスの日選手権

本丸の座敷部屋。私室ではなく、庭に面した少し広めのお座敷に、審神者の紫咲が布団を移したのは、弱った身体に良い空気を吸わせる目的もさながら、とある刀の意向があつたからだった。

乱藤四郎。ロングヘアに愛らしいリボンを結んだ、一見して少女のような見かけのその短刀は、布団を膝に掛けたまま上半身を起こした紫咲の前で、楽しげに挙手しながら言ったのだった。

「はあくい！ あるじさんが回復して座っていられるようになったところで、第一回、夜恵城本丸キスの日選手権を開催しまあす！」

「キスの日選手権って……もう一週間以上経ってるよ？」

「いゝのっ！ だって、あるじさんがあんまりしんどい時に無理してやるわけにいかないでしょ？」

「そんな事言ったら、その選手権自体やる意味あるのかって話に……」

苦笑した紫咲の膝に頭を乗せ、猫が転がるようにして甘える乱。

さらにその周囲には、ギャラリーらしき短刀達がわらわらと集まって来ている。今日

も五匹の虎を連れた五虎退や前田藤四郎、鯰尾藤四郎など、外見的には小さい子供達ばかりだ。おそらく、他の刀にも声を掛けたが都合が合わないか興味がないかで集まらなかったのだろう。単純に、病人の傍ではしやいで負担を掛けないよう配慮してくれた可能性もある。

短刀や脇差を除けば、いつも何かと紫咲に付き合ってくれる山姥切国広が、苦笑気味にあぐらをかいてギャラリー参加している。乱に請われたに違いなかった。その膝上には、いつも山姥切に懐いているちび愛理や小翰などのぬい達も一緒だ。何かと紫咲の世話を焼いてくれるへし切長谷部も、他の者から主への求愛の様子には興味があるのか、はたまた監視のためなのか、興味津々で控えている。

そして、呼ばれたので仕方なく来たと言った風体で、落ち着きなく障子戸のあたりに佇む和泉守兼定の姿があるのが珍しい。

(兼さんはこういうの、興味ないと思っただけだな)

はて、と内心首を傾げる紫咲の傍で、司会進行役の乱が張り切って紙を捲る。

「さて、まずはエントリーナンバー一番！ 三日月宗近さん！」

「えっ、ここにいないくない？」

「もうすぐ来るって言ってたはずなんだけど」

まさかのここにいるメンバー以外の名が挙がって皆驚くものの、当の三日月は、普段

と変わらぬのんびりした調子で、盆に茶道具を持ってやって来た。手に携えたお重には、茶菓子が入っているらしい。

「はっはっは。すまんすまん、待たせてしまったか」

「いや、待たせては……っというか、それは何？」

しずしずと袴の裾を揺らして座敷に入り込んだ三日月は、紫咲の側に正座すると、盆に乗せてきた茶碗と鉄瓶の湯で、綺麗に抹茶を泡立て始めた。簡易的なものだが、その所作や手つきは周囲が引き込まれてしまうほどに美しい。

「そら、できたぞ」

ことりと目の前に碗を置かれて、紫咲は慌てて布団の上に正座する。病人とはいえ、元茶道部の血がこういうところでは抜けない。居住まいを正して、とりあえず略式的に三日月にだけ礼を返すと、紫咲は茶碗を回して正面の絵柄を避け、一口味わった。薄茶のほのかな苦味と甘味が、舌全体に染み渡る。

「……結構なお手前で」

（でもこれ、今の所ただのお茶道だよな？）

嬉々として茶菓子を留意し、周りにいた短刀達にも振る舞う三日月の前で、紫咲は何気なく茶碗を置いて、かりんとうを一本指でつまむ。

すると三日月は、誰も注意していなければわからないのではないかというほど、し

れつと茶碗をそのまま手に取り、残った茶を口に運ぼうかと――

「おいおいおい！　ちよつと待て三日月！」

「ちよつ、それ間接キスというやつなのでは?!?!?」

長谷部と紫咲が突つ込むのがほぼ同時だった。きよとん、とした三日月は、やや残念そうな様子すら見せながら茶碗を置いて、いつもの温厚な笑いを浮かべる。

「はっはっは、バレてしまったか」

「貴様……！　主に正面切つて願う事すらなく無断でその唇を奪おうとするなど！」

「いや長谷部、私の唇そんな大仰なものじゃない……と言いたるところだけど、それ以前に風邪の患者と間接キスしちや駄目だよ!?!　うつつちやうよ!?!」

「この身であれば並大抵の病は移らぬとは思うが……しかし、刀である俺の身をも案じてくれるか。やはり紫咲は優しい主だな」

既に長谷部に両脇を抱えられ、畳の上をずるずる引き摺られながらほっこりと三日月が言うので、紫咲は思わず嘔き出してしまった。

「しかし……ふむ、間接キスとやらは、則宗はよい手だと言っておったのだがなあ」

「あのおじいちゃん三日月さんに何邪なこと吹き込んでくれてんの」

「主、俺が行つて説教して参ります」

「ああ、ならせめて残りの茶は主に……」

茶碗を返そうとした三日月だが、どこからともなく現れた巴形薙刀が、残された盆に茶碗と鉄瓶を片しながら、そのモノクルをきゅつと指先で持ち上げて告げる。

「主にカフェインは厳禁だ。抗菌作用があるとはいえ、今の主の胃の不調に抹茶の成分が合うとは思えん」

「あなや」

「主、俺が新しい茶を淹れて来よう。ほうじ茶がよいか、それとも番茶がよいか」

「巴形！ 貴様つ、俺が雑事に囚われている間にやすやすと主お世話係の座を……！
しかし三日月をこのまま放っておくわけにも……ええい、覚えていろ！」

非情に茶を片付けようとする巴形に向かつて、三日月をずるずる引き摺る背後から長谷部が何か叫んでいた。白鳥のように、白い装束と青い羽根をふわりとゆらして退場した巴形を見送りながら、紫咲がぼつりと呟く。

「巴ちゃん、カフェイン警察みたいだな……」

「えーつと……なんか想定外の事態があつたみたいだけど、続けてもいい？」

「ま、まだいるの？」

「エントリーナンバー二番！ 夜羽くんと恵李朱くんです！」

まさかの、刀ではなく主の後継候補である兄とその弟だった。障子の影に隠れていたのか、てってつと仲良くやってきた黒髪と金髪の双子は、わちゃわちゃと群がる短刀

達に混ざって、紫咲の両隣に座を占める。

「ボク達はねっ、みんなの分のお願ひも込めて、おまじないしようと思って」

「早く紫咲が良くなりますようにっ」

「いつもありがとう」

「大好きだよ」

そう言つて、紫咲の両頬へちゅつと同時に唇を寄せる。息のぴつたりなストレートな愛情表現に、周囲がおおつと湧いた。いつの間にか通りすがりに見物に来ていた一期一振が、羨ましそうに呟く。

「これは……私も、一度我が弟達にされてみたいものですな」

「えっ、いち兄もちゅーして欲しいの?」

「もつと早く言つてくれればよかつたのにー!」

思いもがけない本音が漏れた一期が、その場にいた藤四郎兄弟たちにもみくちやにされるという予定外のハプニングが起きたものの、全体的に場は幸せな雰囲気にも包まれたので、お礼に夜羽達の頭を撫でながら、紫咲も思わず微笑んでいた。

一期へのキスの列を抜けてきた前田が、和紙を束ねたメモに何かを書きつけている。

「ふむ……純粋な心と愛らしさを基準と考えるに、やはり得点は高いようです」

「前田くん何してるの?」

「あ、はい。一応僕、今回の採点係に任命されておりますので。皆から、感想を聞いて集計しているところです」

「こ、こんなおふぎけの企画なのに真面目だねえ、前田くんは」

「主君に笑顔になっていただくためですから。けれど、反対に我々が、主君と二人のおかげで元気をもらってしまいましたね」

夜羽とよく似た小柄なおかつぱの頭を、劳いの意を込めて紫咲が撫でると、前田は照れたようににこつと笑っていた。そんな前田は、未だのどかに賑わっている周囲を伺いつつ、そつと紫咲の耳に口を寄せる。

「ところで、乱が準備していたことはこれで全部なのですけど……主君は、もうそろそろお休みになられた方が良くはないですか。お疲れも溜まっているでしょう」

「ん、そだね。楽しかったし、私はそろそろ……」

一旦横になろうか、と言いつけかけたところへ、勢いよく廊下の向こう側からどたどたと走ってくる足音がした。何事かと居合わせた面々が顔を上げる中、一番廊下に近い場所で腕を組んで立っていた和泉守がぎよつとなる。

「げっ。おい陸奥守、なんだそのカツコ。水浸しじゃねえか……!」

「いや〜! これは遠征帰りじゃき! おっ、主! 丁度えいところに!」

自分から船に乗り込みでもしていたのか、膝の上まで捲り上げたズボンの裾をびしょ

びしよに濡らして水飛沫を散らすのも構わず、陸奥守吉行は豪快に笑って畳に上がり込んだ。なお、水滴を散らしているのは陸奥守本人だけではない。彼が抱えたザルの上でびちびち跳ねている、大量の生魚が原因である。紫咲は、あんぐりしたまま口を聞くのが精一杯だ。

「む、むつくんそれ、どうしたの……？」

「おう、今日の遠征先ではキスが豊漁でのう？ こげんにいつぱい採れたがじゃ！ 主は淡泊な白身魚は好きじゃろう？ たんと食うて栄養付けとうせ！ 刺身もえいし、揚げ物もえいのう！ 主はどれがいい？ なんならわしが今ここで捌いちやるぜよ！

今日はキスの日なんじゃろう？ 出血大さびすちゆうやつじゃ！ がっはっは！」

「あ……ええと……今はあんまり食欲ないから、厨でみっちゃんに渡しておいで……？」

「ほうか？ 残念じゃのう。燭台切と歌仙に頼んじよくき、後で天井にでもしてもろうたらええぜよ」

若干胃もたれが抜けない病人には、まだ揚げ物はキツイ……と紫咲は言いたかつたのだが、それを説明する間もなく、陸奥守はまた楽しげに笑いながら、風のように廊下を歩いて去って行った。ザルから溢れて畳の上でびちびち暴れる魚の尻尾を持ち上げながら、しげしげと眺める惠李朱を、鯨尾と夜羽が慌てて止めている。

「なまぐさいけど、うまそう（？）」

「ちよつ、いくら悪魔だからって、そのまま食べたらお腹壊しちゃうよ!」

「そ、そうだね。みっちゃん、歌仙さんにお料理してもらおう」

他にも残された魚のおこぼれを、五虎退の五匹の虎や、夜羽の使い魔である猫のベルが取り合つて大騒ぎしている。なんとか山姥切がその場の收拾をつけて片付けをしてくれたおかげで、会場はようやくやく人も刀も捌けて静かになり、山姥切は紫咲の膝に布団を掛け直しながら、ふうと小さく溜息を吐いた。

「ご、ごめんまんばちゃん。世話かけて……」

「まったく。あんたはまだ病人なんだぞ。他の刀を喜ばせてやるのもいいが、これ以上悪化しないように治ることだけ考えて、あとは休んでくれ」

「といつても、鱧の襲撃は私にはどうしようもなかったと思うんだけど……」

「まあ、それはそうだが」

「ごめんね、あるじさん。体、辛くなかった?」

氣遣うように主催者の乱が尋ねるのを見て、紫咲は安心させるように微笑みながら、優しくその頭を撫でる。

「大丈夫、ちよつと疲れちゃっただけだから。まだしばらく休まなきゃいけないとは思うけど、みんなのおかげで元気出たよ。ありがとう」

「えへへ」

その横では、前田がまだ生真面目にメモを取っている真つ最中だ。

「鱧……主君への栄養価という点では、陸奥守さんが一等賞ですね」

「すごい大穴だったもんね……MVPは決まった？」

「ええ。一応、皆の投票の結果は出揃いましたが……でも僕は、結果報告にはまだ早いと思います」

筆をしまいながら、前田は首を傾げる紫咲に向かって、思わせぶりにっこりする。

「まだ、主君に想いを表明できずにいる刀が、残っていますから」

「あれ……そういえば、兼さんは？」

「あいつなら、途中で抜けていったぞ。大方、陸奥守の遠征班の収穫物を、台所に運ぶ手伝いにでも行ったと思っただがな」

片付けに使った雑巾と桶を持ち上げ、山姥切が廊下の方角を不思議そうに振り返りながら言った。そのまま戻って来ないのも、和泉守らしいといえば和泉守らしい。

元々無理して付き合ってくれてそうだったもんなあ、と紫咲は苦笑しながら、山姥切の忠告に従って、しばらくの間午睡を取ることにした。

それから、どれ程の時が経った頃だろうか。

かさり、かさりという軽い何かが触れ合うような物音と、鼻先をくすぐるような感触

と、ふわりとした芳しい匂いに包まれて、紫咲は目を覚ました。甘やかだけれどこか爽やかで、それでいて強い個性を持つ、嗅いだ覚えのある香りだ。

横向きに寝転んだまま、紫咲がうつらうつらしながら目を開けると、畳に置かれた白っぽいものが視界に映った。艶やかにその身をいっぱいに広げる花卉を前に、きよとんと紫咲が焦茶色の瞳を開けると、そのすぐ側に屈み込んでまた新たな花を置いていた和泉守の鮮やかな青い瞳と、ぱつちり視線が合ってしまう。

「あ……悪い。起こしちゃったか」

「ん……ううん。もうだいぶ寝たと思うし。それより兼さんは何を……」

紫咲が目を覚ましたのは想定外だったようで、和泉守は気まずげに目を逸らす。

いつもの鳳凰柄の着物の袖に、隠しようもなく、色とりどりの百合の花束が抱えられていた。左手の小脇にそれを抱えて、右手にそのうちの一本を持つているあたり、どうやらこれを紫咲の枕元に置いていたらしい。

一番近くにあるのは白百合だが、他にも橙、桃色、黄色、薄紅色など、目を飽きさせないほど豊かな色合いの百合たちが、布団から見てもちこちに置かれている。身を起こして眺めてみれば、周囲一帯が点々と置かれた百合の花にぐるりと囲まれて、さながら花畑の中にいるかのようだった。

繊細なところもある和泉守のことだから、几帳面に円形に並べてあるのかと思いき

や、花や葉の向きがバラバラになって置いてあるところに、慣れないことをした戸惑いの跡が見えていじらしい。そんな風に思いながら、紫咲は白い百合を一本手に取り、くるくと指先で回して、狼狽えた様子の和泉守に微笑んでみせた。

「もしかして、この花はお見舞い？」

「あ、ああ……まあな。国広が最近熱心に庭で育ててたのを思い出してよ。主はこういうの好きだろう」

「うん！　最近はお庭もあんまり下りられてなかったから嬉しい……ありがとう」

わからないなりに喜びそうなものを探してきてくれたのかと思うと、嬉しさが募る。

バレたのなら仕方がないと思ったのか、先ほどまでとは対照的に、少し緊張を解いた様子で照れたような笑みを微かに浮かべた和泉守は、残りの花の束を紫咲に渡すと、畳の花をかき分けて少し離れた位置に胡座で腰を下ろした。元々の端正さもあって、花を背負う和泉守の佇まいというのも、なかなか様になっている。

「鶴丸には、死人に花を供えてるみたいだからやめろって言われたんだがな」

「んっふふふ。鶴さんが言いそうなことだね。でも、目を覚ましてびっくりするならこのぐらいの方がいいんじゃない？」

「まあ、あんたが喜ぶんならそれでいいけどよ」

「あつ。主さん、起きたんだね。今丁度お茶を淹れてきたところなんだけど、一緒にどう

? 兼さんの分も」

「おお、国広。悪いな」

和泉守が作業を終える頃を見計らっていたのか、盆に急須と三人分の湯呑みを乗せた堀川国広が、花を踏まないよう器用に避けながら傍へやって来る。普段何かと和泉守の世話を焼いていることもあつて、割れ物を盆に乗せていても運び方に如才がない。

「わわ、ありがとう、堀川くん。ここまで運んでくるの大変だったでしょ」

「そんな、何てことないよ。結構いいバランス感覚の訓練になるし!」

前向きな姿勢で爽やかにそう言った堀川から、淹れたてのほうじ茶の香りが立ち昇る湯呑みを受け取り、一口啜りながら紫咲は言った。

「そういうえば、堀川くんにもありがとうね。この百合、堀川くんが育ててくれたんでしょ?」

和泉守の湯呑みに茶を注いでいた堀川は、不意に急須を持つ手を止めてきよんとしたが、すぐにいつもの無邪気な笑みを浮かべる。

「あははつ。植えたのは僕だけど……兼さんも、結構お世話しに来てたよね。あんなに馬当番嫌がつてたのに、花が綺麗に咲くようにって堆肥まで運んで来てくれてさ」

「ちよつ、おいつ、国広! 余計な事言うなつて!」

熱々の茶を溢しそうになりながら和泉守が慌てていた。動揺でギクシヤクと揺れる

浅葱色の羽織の肩を見ながら、紫咲はふと素朴な疑問を感じて堀川に問い掛ける。

「そういえば、百合だつて植物なんだから、すぐに育つて花をつけるつてわけじゃないよね……?」これ、いつぐらいから植えて育ててるの?」

「百合は球根なんだけど、植えるのは秋くらいですね。去年の10月とか11月とかだつたかな」

「ええ!? そつ、そんな前から手入れしてくれてるの!? しかもこんなに沢山……ちらつと上の階から見えたけど、道理で庭があんな綺麗に育つてくれるはずだよ」

「あはは、僕だけの力じゃないけどね。もちろん、みんなで畑当番や庭当番は分担してるから、その中でも特に興味がある刀が、有志で手伝ってくれたりもしたんだけど……でも、兼さんが自分から花の世話に興味を示すなんて珍しいんだよ。僕もびつくりして「おつ……おい、もうやめろつてえ……!」

目を丸くする紫咲の前で、和泉守は面白いほど必死で堀川の話を遮ろうと躍起になっている。こんなに前から花の世話に携わっている事をバラされたのは、想定外だつたよ。うだ。

(たしかに、堀川くんじゃなくて兼さんがそんなに前からお世話に協力してくれてたなんて、ちよつと意外だけど……ううん、ちよつとどこかだいたい意外)

失礼ながら、言われた主命こそこなすものの、当番の類は手合わせ以外ほぼ嫌々やつ

ているのかと思つていた。特に花や観賞用の植物という、戦には何の役にも立ちそうにない事に自ら立ち入つてくる和泉守の姿など、紫咲にとつては想像もつかない事だ。ぽかんとしたまま、紫咲が口を開く。

「私はてつきり、今日堀川くんは無理言つて譲つてもらつたものかと……ごめんね、兼さん。そんなに一生懸命育ててくれてたなんて、知らなかつた」

「たつ、大した事はしてねえよ！ 別に植えたのはオレじゃねえから育て方なんてさつぱりだし、追肥だの草むしりだの、そういうややこしい事は全部国広とか他の連中が……」

「でも、よく見に来てくれてたよね。どうやったら綺麗な花が咲くんだったって言つて液体肥料を買つて来てくれたり、アブラムシ用の殺虫剤作つてくれたり……それで今日、僕が手入れをしてる間に、兼さんが庭に来て言うんですよ。陸奥守さんの鱧の山に、何か対抗できそうなものはないかって」

「おい、国広！ それは言わねえ約束……！」

あつけらかんとタネをバラされてしまい、頬を紅潮させそうな勢いで和泉守が声を荒げるが、堀川は苦笑しながら、紫咲の手元にあつた花の束を整える。

「だって、今日じゃなきや意味がない事だったんでしょ？ 主さんだって、起きて目の前に何の説明もなくこんなに花があつたら、さすがに不審がるだろうし」

「それはそうだが……だからって、お前に頼ったことまでバラされちまったらカツコがつかねえだろうがよ……」

「兼さんだってお世話に携わってたんだから、実質僕らの共有財産みたいなものだよ。それに他の刀達だって、兼さんが欲しがってたって言えば、喜んで譲ってくれたと思うよ?。」

「そうは言ってもなあ。オレの一存っつーか我儘で、勝手に花を筆らせてくれつつってするようなもんだしよ」

あくまで、バツが悪そうな様子の和泉守だった。どうも、自分が一から十まで育てた訳ではないので仲間達に対して遠慮が働いていたらしい。最初から堀川が育てた花を自分が持つて来たような口ぶりで、その裏に自分が関わっていた事をおくびにも出さなかつたのも、それが原因なのだろう。

誰よりも格好良い自負があつて堂々としているはずなのに、変なところで成果を隠そうとする。そんな和泉守に、堀川は手持ちの組紐とその場にあつた和紙で、紫咲の持っていた花束を簡易的にラッピングしてみせると、ひよいと渡した。複雑な面持ちの和泉守の隣で、堀川が紫咲に笑いかける。

「主さん。兼さんは不器用だけど、主さんに花を贈るのは、きつと前からしたかつた事だと思ふんです。だから、主さんが兼さんの気持ちを汲んでこんなに喜んでくれたのは、

僕も嬉しい」

じゃああととは頑張つてね、と意味深な言葉をさらりと残すと、堀川はストラックスの脚で立ち上がる。

「お、おい、国広……！」

「あ、そうだ。この百合は萎れる前に回収しちゃうね。折角切り花にしたんなら勿体無いし、本丸のみんなと飾っておくから」

布団周りに散らばっていた花を抜け目なくしつかり拾つて抱えると、堀川は何事もなかったかのように去つて行つたのだつた。後には、仏頂面の和泉守と、どう反応していかかわからない紫咲だけが残される。

先ほどから戸惑い以外の表情が紫咲に向けられる事がないのだが、それでも手に携えた芳しい花の群れは、紫咲のために用意してくれたものらしい。意を決したように、若干ぶつきらぼうな仕草で、和泉守が片手に握つた花束を差し出した。素直に紫咲の方を向けない和泉守の代わりに、かきりと花がこちらに顔を見せるようにして微かに揺れる。

「あーと……その……聞いてたからわかっと思うけど、そういう訳だから。受け取つて、くれるか」

「えっ。も、もちろん」

差し出した両手の上に、和紙で包まれた軽い花の束がふわりと乗った。柔らかな白や薄桃、艶やかな蘇芳や、ぱつと明るく目を引く黄色や橙。今はまだ布団から出られず、本丸の自室から月の光を浴びて揺れるのを眺めているだけだった百合の花達を、紫咲は嬉しそうに両腕に抱き締めると、ふんわりした表情で匂いを嗅ぐ。

「ふふ。可愛い花。こんなにいっぱい百合もらったこと、今までにないや。それにいい匂い。ん〜、すつごくいい匂い。百合って豪華な香りがするよねえ。甘いんだけど、なんかこう爽やかでさ。着物までいい匂いになっちゃいそう」

「おいおい、そんなにか」

花の中に頭を突っ込みかねない勢いで香りを堪能している紫咲を見て、和泉守が苦笑する。ほんの少し緊張が緩んだ様子を見て取った紫咲は、花に顔を隠すようにしながら、遠慮がちに尋ねた。

「あの……これって、キスの日のプレゼントだったの？」

「……まあ、そういうことになるな」

「……」

「わあつてるよ！ これじゃ、口付けも何も関係ねえって言うんだろ！」

「ち、違うよ！ 別に、そんな風に思った訳じゃなくて！」

わたわたと首を振った紫咲は、部屋着で布団の上に正座しながら花を抱え直す。

「キスに直接関係あるかどうかはその……みんなからのもちろん嬉しかったけど、別に関係なくて。どんな贈り物でも、気持ちがあるだけで嬉しかったよって言いたかったの。お花をくれたただけで嬉しかったのに、まさか兼さんがそんなに前から、心を込めて育ててくれてたなんて思わなかったから……ありがとう。大事にする」

「大事にするってたって、あんまり持つてると熱でへたつちまうぞ、それ」

「へへ、じゃあ花瓶に生けて来ないかね」

「オレに貸せ。まだ熱があんのにふらふら花瓶やら水やら持つてうろつくには早えだろ」

ん、と頷いて花束を和泉守に渡しかけた紫咲は、ふと思いついて手を引つ込めた。

「そうだ……」

「ん？」

受け取ろうと片手を出した状態で止まった和泉守の顔面に、紫咲はふつと花束を持ち上げ、ぼふつと花を押し付ける。立ち眩むほどの甘やかで優美な香りが鼻先いっぱいに広がって、百合に半分顔を突っ込んだ和泉守がぱちぱちと瞬きする前で、紫咲は悪戯っぽく笑った。

「さつき私が香りを嗅いだ花だから、兼さんにもお裾分けしてあげる。唇じゃなくって、これだったら香りで間接キスみたいになるかもしれないでしょ？　なーんて。回し

「嗅ぎ」じゃ、やつぱり全然関係ないかあ」

「……」

一秒。二秒。三秒。

きつかり固まつてから、和泉守は尻餅をついたままざざつと後ずさつた。とつさに和服の袖で隠した顔が、真つ赤になっている。

「だっ!? あ、ああああんたなあ! 馬鹿か! そういうのは、もつとこう、将来を誓い合つた仲とかつ、とつ、特別な奴相手にやるもんだろう!」

「ん、っ……ふふふ、そんな大層なもんじゃないよお。ヨルクんとかにも普通にやるだろうし。それに、兼さんだつて特別な相手だよ? 私の刀だもん」

「だつ、だからあ! 男の体で顕現してる奴にそういう事ホイホイ言うもんじゃねえ!

あーもーッ……!」

差し出した花をひつたくるように受け取つて漆黒の長髪を翻しながら、和泉守がわずかずか歩いて行つてしまうのを、紫咲は小さく肩を揺らして見送つている。その様子を障子の影から身を隠して見守つていた前田は、同じく隣にいた乱と、満足げにこそこそ話し合つていた。

「ね。僕の言つた通りだつたでしょう」

「うわあ。和泉守さんつて、本当に恥ずかしがり屋さんなんだなあ」

「遠回しであれ、主君には伝わったみたいでよかったです」

「あれで伝わってるのかなー？ でも、あるじさんの反応見る限り、悔しいけど優勝は和泉守さんだね」

ボクらししか見てないけどね、と乱は前田と肩を並べたまま、小さく笑ったのだった。

緊張の理由

「なあ、主」

「うん？」

「あんた、陸奥守となんかあんのか？」

近侍兼看病に、布団に座った紫咲の枕辺へあぐらで控えていた和泉守兼定が、ふとそう問いかけた瞬間。如実にびくつと体を強ばらせた紫咲の湯呑みのお茶が、小さくちやぼんと跳ねた。

愛想笑いを増しながら、部屋着のジャージ姿の紫咲がおそるおそる尋ね返す。

「な、なんでそう思うの……？」

「いや……あんたは最近よくオレと話してくれるけど、なんかこう、他の刀連中とか……特に陸奥守とはオレもよく話すから、余計に目についちまうのかもしれないけど、なんか緊張してねえ？」

「ほうじゃー！ この前も遠征先の鱧を目の前で山盛りにしちやったきに、主全然喜ばなかったらう!? 主は、鱧は嫌いじゃったか!？」

「うわー！ ツびつくりしたッ！」

盗み聞きなのか、はたまた廊下を通った時にたまたま聞こえたのか、突然勢い良く開いた障子から乗り込んできた陸奥守吉行に、和泉守の方が飛び上がりそうな大声でびつくりしていた。

同じく驚きながらあわあわする紫咲の前へ、陸奥守は目を好奇心で輝かせながらずいずい膝で進み出る。

「燭台切がおんしやあ天井が好きと言ううちよつたき、せつかく頼んで天井にしてもろうてもおんしは何ちやあ食べん言うし、わしは鱧が気に入らんかったんかと……！」

「ち、違う違う！ 鱧も天井も好きだよ！ ただその時は、胃腸風邪に天ぷらが重すぎて食べれなかっただけで……」

そこまで答えてから無意識に額に手を当てて俯いた紫咲の横で、和泉守が呆れながら、陸奥守の頭を背後からぼこんとはいた。

「おい、大声出しすぎだ。熱は下がってきてつけど、頭痛がまだ引いてねえんだよ主は。大人しくしとけ」

「あ……す、すまんかった」

「いいのいいの！ 謝らないで。私もちゃんと言ってなかったし……食べられなかったけど、その気持ちだけで十分嬉しいの。ありがとう」

軽く横になって目を閉じる紫咲を、陸奥守は心配そうに見守っていたが、やや緊張し

ながらも拒絶の気配が紫咲にない事を見て取つてか、もそもそ体を動かしながら問い掛けた。

「なあ……主が寝込んだじよつてもわしはよう騒いだるき、おんしやあ邪魔じゃないか？」
「ええ？ そんな事ないよ。むしろ、あんまりレベリングとか付き合つてあげられなくてごめんね。もう本丸に来て長いのに、他の子ばつかでちゃんと使えてあげてなくて……」

「い、いんや、それはええんじや！ こんだけ刀がおれば、無理もない話じやき！ ……
けど、主はちつくと、わしらの前じやあ遠慮というか、線を引いて我慢しとる節があるんじやなか？ 当然信頼関係つちゆうもんがあるき、今すぐここで問いただそうとまでは思わんが、わしやあそれが気になつてのう」

それは今聞いていい事なのか、という顔をしつつ、隣にいた和泉守も気になつてはいたらしい。何も言わないものの、どこか答えを待っているような目を受けて、紫咲はもぞりと、掛け布団の中で身じろぎした。

熱を出している今なら、甘えだからと許されるだろうか。

「あ……えつと……じやあ言うんだけど……」

「おう、何でも言うちよくれ」

「あのね……審神者就任一周年の挨拶の時に、陸奥くんが『いつまでも新人面はできん

のう』みたいな事を、言ったことあったでしょ？」

「そうなのか?という和泉守の視線を受けて、顎に手を当てながら天井を仰ぐ陸奥守。

「あく……そういうえばそげな事も言うたような気がするのう。それがどうかしたかか?」

「あの……それがなんか……怖くて」

「へ?」

「きよとんとする二振の前で、布団にもそもそと潜り込みながら、紫咲は辛うじて続けた。

「一周年だったけど、私全然……何ヶ月も放置してて、催事の時しか来ないのが普通だったし……普段もちゃんと本丸に来てなかったから」

「主……」

「それでも『新人卒業だ』って言われると、ちよつと重圧っていうか……『体が弱いのを言い訳に、いつまでも新人气取りでいられると思うなよ』って、物凄く怒られてるのかと……思っ……」

「はああああ!」

「ちよ、それは飛躍しすぎじゃろー!?!?!」

先ほど頭痛に響くから声を出すなど言った張本人も含めて、紫咲は二人から盛大な

ツツコミを受けていた。

布団の上でほんのちよつと涙ぐんですらいる紫咲を見て、和泉守は慌てて言う。

「おいおい、いくら何でもそりやあ考え過ぎだぜ、主！　こんな後先考えねえカラツカラの五月晴れみてえな刀が、わざわざあんたにそんな湿っぽいイヤミ含めて言葉を発すると思うか!?　オレ相手ならともかく！」

「ほうじゃ！　和泉守のアホの言い分には腹あ立つけど、主にそげな風に思った事なんか一度もないぜよ！　和泉守はともかく！　主はよう頑張つてくれちゆう！　和泉守はともかく！」

「さつきからオレの名前いちいち出しすぎなんだよお前は！　ははくん、さては相当オレの事が好きなんだなア？」

ぼかんとする紫咲の前で、ニヤニヤ肘で小突く和泉守とそれを睨む陸奥守は勝手にヒートアップしている。紫咲に口元を寄せるようにして、陸奥守はわざとらしく言った。

「聞いちよつたか主、イヤミつちゆうんはこげながを言うがぜよ。まつことおまんこそ、いつまでも修行に行かんとダラダラ本丸で過ぎしゆう、新人气取りの刀じゃのお。わしにそのうち切れ味で抜かれても知らんきな」

「あアン？　オレは主が心配でここに居るんだよ！　修行に行かなくともやれる事は山

程あんだろうが!」

「おまん、その口もうちつくと素直に主に聞いちやつたらどうじゃ? わしも確かに気付いてやれんで悪かったが、わしだけじゃのうて、おまんじゃち主と変に距離を取ろうとするき、主をここまで不安にさせゆうがろう?」

「はああああ!?! 元はと言えばおめーの口下手が全ての根源だろろうが! はッ……いいだろう、そこまで言うなら表出る!」

「ふっ……ふふふ……わ、わかった二振とも、もういいから……ひひひ、おかしい!」

今にも掴み合いに発展しそうになっている陸奥守と和泉守が、不意に笑い声に気が付いて振り返ると、紫咲が布団の上で振れそうになりながら笑っていた。

いつの間にか涙は笑い涙に変わり、陸奥守達はそんな紫咲を見て、何で争っていたか忘れたとばかりにきよとんとしている。

目尻の涙を拭いながら、紫咲が身を起こした。

「も……兼さんつてば相変わらず喧嘩っ早すぎ。私の話なのに、なんで兼さんがそんな怒つてんの?」

「えっ? ああ、いや……あれ、何でだっけ!」

「あつはつは! ようわからんけど、主が笑うたき、わしやあ何でもええ。やつぱり笑うた顔が、主が一番かわええのう!」

陸奥守が無骨な手を伸ばして、くしゃりと紫咲の頭を撫でてくれる。それに驚きながらも、紫咲は少し縮んだ距離を喜ぶように、照れた笑みを浮かべて俯いた。

「まあでも、こいで主がわしの前で凝り固まつちゆう理由が、ようやくわかつたき。主は繊細なお人じやのう」

「うう、すみません……」

「何ちゃあ気にせんでええ。わしもそこまで気に病んじゆうとは思わんかつたき。もうあれから半年じやろ？ 変に主に負担掛けてしもうて、すまなんだの」

「いつ、いいの！ 私が至らないのはほんとだし……それで壁を感じて、みんなと馴染めないのも私のせいだから……」

小さく溜息を吐いてから、紫咲はふと思いついたように遠い目になった。

「あー、でも……実は陸奥くんと同じく『初心者卒業かな』って言ってきた刀が、あの時もう一振いるんだけどね……山姥切長義って言うんですケド……」

その名前に、勢い込んで陸奥守は食いついた。

「ほうじゃー！ あいつもそんな事言うちよつた。なんであいつじやのうて、主はわしの言うたことばつかそげに気にして……！」

「でもさ、長義くんは元々そういう事言う刀じゃん??？」

「……まあ、それはそうだな」

「それは……そうじゃな……」

自分で聞いておきながら、自分で納得する陸奥守。

山姥切長義は、いわゆる本科一つまり、「写し」として打たれた山姥切国広のオリジナルに当たる刀である。

元々政府刀として、監査任務を遂行する為にやつて来る監査官の役目を担っていた性質もあり、審神者への評定は良きも悪きもかなりきっちりしている印象がある。

とはいえ、紫咲の本丸の長義は政府刀としてではなく、お正月に配布されるシールの交換品として迎えられた刀なのだが。

「だからまあ、そこから圧が掛かるのは想定してて、あまりショックではなかったというか……」

「なるほどのう。あいつはちつくと高慢なところがあるきのお……」

「まんばちゃん修行に出て精神安定した後にお迎えしたから、まんばちゃんの方に余裕がある分、そこまで目立った衝突はしてなさそうなんだけど、かと言って私もそれ以上の事は何も知らないしなあ。長義さんと仲良くなるのは、まだまだこれからかな。陸奥くんじゃなきゃ、ここまで甘えた事はなかなか言えないよ……」

苦笑しながら、紫咲が布団の中で茶を啜る。その言葉に髪の毛がびこびこしそうな勢いで喜んだ陸奥守は、今度紫咲の食べられそうな菓子類を土産に持つてくることを約束

し、部屋を辞そうとして、何かを思い出したようにぱつと振り返った。

「ほうじや。わし、この間ゆるちゆるぶとかいう奴で見よつたんじやが、『ふりーはぐ』つちゆうんがあるろう？ あれを主もやつたらどうやろうか。主もみんなと仲良うなれるし、霊力供給にもなるき！」

「この本丸で？ フリーハグって書いた紙首から提げて、座敷に立つてるの??！」

してくれそうな刀とそうでない刀がいるな……と紫咲はぼんやり想像したが、陸奥守はさも名案だという表情でばああつと顔を輝かせていた。

「それがええぜよ！ そうと決まったら、全振に知らせて会場も日時も確保せんとこのうにひひっ」

「あらかじめ知り合いだったら『フリーハグ』の意味ねえんじやねえの……？ てかさうじゃなくても、主が主命だつて言えば断る奴なんかいねえんだから、やつぱり意味ねえだろ」

「無粋じやのく、和泉守は。こういうのは歩み寄りつちゆうんが肝心なんじや。自分からやりに行くがと、待つちよつたら向こうから来てくれるがは全然違うき」

「はあ……そういうもんかあ……？」

「それに、おんしやあも主と『はぐ』する口実は欲しいじやろ？」

「お前つ、まさかそれが目的じやねーだろうな!？」

にやりとした笑みを残して障子を締める陸奥守に、和泉守の言葉は届かなかつたらしい。頭を抱える和泉守に、紫咲は頭痛の痛みを堪えながらも、まだ小さく笑いを漏らしていた。

「つたく、あいつはよー……騒がしい上に、次々面倒ごと持ち込みやがって」

「ふふ。兼さんって、意外と英語の発音慣れてるよね」

「へっ? ああ……土方さんが、外国の兵法書を読んでたこともあつたからな。他の連中よりちいと慣れてるっただけだろ」

「……鶴さんに、スタバのメニュー読み上げさせられまくってたからじゃなくて?」

「それもそうだけど! あれは単に鶴丸が横暴すぎるっただけの話だろーが?!?! ほら、無理して起きてんじゃねえよ。茶あ飲んだならさっさと休め。まだ痛むんだろ!」

少し赤くなった和泉守に促されて、紫咲は頷きながら布団に横になった。

目を閉じたままの紫咲に、隣にいる和泉守の声が届く。頭を大きな手で撫でるように抑えられているせいで、表情は見えない。

「……なあ、主」

「うん?」

「あんまり、心配しなくて大丈夫だぞ。この連中は、あんたが思うよりずっと、あんたのこと信頼して気に掛ける」

「……」

「それでも心配だったら、オレが何度でも言つてやるからさ。そんな事はねえつて。何回聞かれても、オレだけは絶対に、嫌がったり呆れたりしねえ。居ることしかできねえけど、傍に居てやる。だから、その……。あんま一人で抱えんな。辛い時は辛いつて、言つてくれよ」

誤魔化すようにもぞもぞと動かす掌が、和泉守の精一杯を表している。それに応えるように、泣きそうに歪んだ唇を紫咲が辛うじて小さく動かした瞬間、ほろほろと涙が落ちた。

「……ありがとう、兼さん」

「ん。辛いなあ。もうちよつとだぞ。必ずあんたもここ出て遊べるようになってから、もうちよつとだけ頑張れ」

主の泣き顔を見ないようにと気を遣う和泉守だが、朱に染まった今の自分の顔も、とても主には見せられない。そんな心持ちで、和泉守は紫咲に寄り添い続けていた。

図書館の君

風邪の熱がようやく引いて、ある程度まともに眠れるようになった日の夜。

私は、夢の中で図書館にいた。

どこことなく今住んでいる地域の図書館に雰囲気は似ているが、夢だし完全に同じとは言えない。

本棚とパソコン画面が並んだ、レファレンス専用の区画のような場所で、紙を捲るような音があちこちから聞こえてくる。どうも今回は、恐ろしい夢ではなさそうだ。身に覚えのある気配に、私は少し安堵した。

何を調べているのか、自分でもよくわかってはいなかったが、手元にあるファイルと書棚の中身を見比べて、私は何とはなしに、ぱらりと本のページを捲った。

その時だ。右側に影が差し掛かって、私に声を掛けてくる人がいた。

「すまないが、一つ教えてはくれまいか。この本を探しているんだが」

なんかめっちゃ聞き覚えのある声だね???

と思う間もなく、顔を上げてその姿を見上げた私は固まった。見慣れた三日月模様の深い青の狩衣に、少しひよんと跳ねた黒髪。柔和な微笑みと、ブルーハワイを思わせる

青に黄色混じりの瞳。三日月宗近。紛れもなく、刀の神がそこにいた。

「あつ……えつ……んっ？」

思わず声を出してしまつてから、ここが図書館だったのを思い出し、慌てて口を塞いで辺りを見回す。幸いなことに、誰にも気付かれていなかったらしい。それどころか、図書館に来るには随分と目立つ格好ともいえる三日月さんを、気に留める様子の人が周囲に全くなかつた事からして、元々人間からは見えていないのかもしれない。

手を口に当てたまま挙動不審に様子を伺う私を見て、三日月さんは眉の端を下げながら、少し申し訳なさそうにも見える笑顔でころころと笑つた。

「すまない、驚かせてしまったな。同業者かと思つたもので、つい声を掛けてしまった」
「あ、いえ、同業者は多分合つてま……す……う？」

審神者だということが、バレているのだろうか。

それに、私の夢だし見目形はそつくりだけれど、この三日月さんは、多分うちの本丸の三日月さんじゃないな。外見的特徴から判別出来たわけじゃないのに、何故かそう思う。雰囲気というか、感じというか。審神者だけに分かる勘みみたいなものだろうか。

自分の親切で何か手助けが出来るならと思ひ、私はおずおずと顔を上げた。

「あの、本をお探しなんですか……？」

「ああ。ここに書いてあるものなんだが」

司書でもないのに私に分かるだろうかと思っただけだけど、どうも探したい本の目星は最初から付いていて、タッチパネルでの入力が上手くいっていなかったらしい。タイトルを検索欄に入れて、書架番号から本を探すくらいの真似は私でも出来たので、棚を回りながら何冊か本を抜き出すと、私に物珍しげについて来た三日月さんは、おおっと嬉しそうな声を上げながら、分厚い本を受け取っていた。

「いやはや、これは助かった。やはり若い者は探すのが早いな」

「いえいえ、そんな……他に何かお困りの事はありませんか？」

「この部分の印刷をと頼まれているんだが、俺はどうも機械が苦手だな」

何かに関する資料を集めているらしく、コピーした紙をファイリングしたノートを、その三日月さんは持っていた。

印刷機を使ったコピーなら、そんなに難しい事ではない。それこそ、大学時代にレポート書く時に死ぬほどやったし。

頼まれた資料を印刷し、それを分別する作業を手伝った。夢の中だから、何を書かれているかははっきりと分からないのに、隣にしながら黙々と仕事をこなすのが、なんだか楽しい。どんな本丸の個体でも、三日月宗近という刀は、自然とこちらが落ち着くオーラを放っているような気がするの、私だけだろうか。緊張しながらも凶々しい真似に出してしまったと思っただが、三日月さんはただ隣で、微笑ましく作業を見守ってくれ

ていた。

夢の中だから、時間の経過の感覚は独特だ。何日か、何週か。まるで週に一度待ち合わせをして資料集めを手伝っているかのような感覚で、どこかの三日月さんと勝手に意気投合し、すっかり顔見知りの気分になってきた頃。

「それと……もう一つ、頼みがある。その資料も印刷して譲ってはくれないだろうか」「えっ?」

三日月さんが微笑んで、すつと紺色のファイルを指差す。

いつの間にか、私の手元にあったファイルが、目の前で開かれていた。自分のものなのに、今まで中身がわかっていなかったけれど、よく見たらそれは、私が台湾や日本で旅行した先で、昔もらってきたパンフレットや記念の品が、パンパンに詰め込まれたクリアファイルだった。

全然整理をしてないから、写真やら観光地のマップやら、行った店の名刺やら、可愛くて捨てずに取っておいたティーバッグの袋やら、とにかく雑多なものが各ページの袋にごっちゃになって入っている。

そして、三日月さんの示した指先には、何か書かれたルーズリーフ……小説の設定か、はたまた必要知識のメモかは忘れたが、明らかに私の字で纏まったノート紙片が挟まっていた。

思わず反射的に、慌てて首を振った。

「そ、そんな。私が纏めたこんなぐしゃぐしゃのノートじゃなくて、もつと綺麗で見やすいものがどこかにあるはずですよ。それこそ、この図書館の本とか、誰かの論文とか、色々……」

けれど、三日月さんはゆるりと首を振り返すと、穏やかに微笑んだままで、——本当に嬉しそうに、私の抱えるファイルにそつと触れたのだ。

「他の誰かではなく、おぬしの書いたものがよいのだ」

どうして、そんなに私の書いたノートに拘るんだろう。私より優秀で、見やすく書ける人はいくらでもいるのに。

思わず言葉に詰まったけれど、なんとも言えない気持ちを飲み下すようにして、私は言われたページをコピーした。

そうしないと、泣いてしまいそうだったから。

あと少しで、多分これを受け取ったら、この三日月さんは図書館から帰ってしまう。もう二度と、会う事もなくなってしまう。そんな予感があった。

最後のページを渡して、書棚の間で向き合っていると、三日月さんは出逢った時と同じ、朗らかな笑みを浮かべて言った。

「ありがとう。おぬしに手伝ってもらったお陰で、よい収集ができた」

「あ……え、いえ、そんな……私なんて、本当に大した事は」

「そう謙遜するな、自信を持ってよいのだぞ。本当に助かった。これで主も喜ぶだろう」大袈裟だなあ。思わずふつと笑ってしまったのに、瞳を見ながらそう言われたら、胸の内側からじわりと、感謝と涙が滲む。

よかつた……と思ひながら俯いた私の頭上を、三日月さんの掌がふわりと撫でた。まさか、よその本丸の審神者にまでそんな気軽にスキンシップを取ってくれると思わなかつたから、思わず俯いて真つ赤になつてしまふ。

顔を、上げられない。このまんまお別れするのは、寂しいのに。行つて欲しくないのに。

「何か、礼に叶えられる事はあるか？」

頭を撫でながら、優しい声が響く。

行かないで。これからも、一緒にいて。寂しい。

どうして、よその三日月さんにそんな事を言いたくなるのか、わからなかつた。けれど、私は——誰かに求められて、嬉しかつたのだと思う。

私は、専業主婦の片手間に審神者になつた。

体も弱く、そんなにコンスタントには働けないから一時は辞退しようと思つたけれど、時の政府はそれでも気軽に始めて欲しいと言つてくれた。それに、私には常に前を

歩き続ける、憧れの審神者先輩がいたから。理由としてはそんな、大した事のない動機だった。

主婦としての現実での暮らしにだって、大した役割はない。

風邪を引いて、病院の帰りにドラッグストアで薬を待っていた時、忙しく立ち働く薬剤師さん達を眺めながら、ふと思った。

ここにいる人達はみんな、健康で頑丈で、当たり前のように、出勤すべき日に出て仕事ができる。生きているだけで、100点満点の生活だ。パートであれ正社員であれ、「毎日元気に出勤できる」以上の長所がどこにあるのだろう、と。

私には、それすらない。社会人として一番に求められる「当たり前」すら、欠如している。

だから、この歳になっても何も無い。養われて生きていく事は出来ても、社会の中で、誰からも求められない。

そんな私に突然手を差し出して、「私」だからいいのだと、言ってくれた。それは「人」ではなかったけれど、リアルの世界でどこにも居場所がなかった私に、どこに居ても惨めだった私に、生きる意味を与えてくれた。ありがとう、助かったと、言ってくれた。

誰かに暮らしの中でそんな風に言ってくれたのは、結婚してこんな生活を続ける中で、数えられるくらいに少なく——本当に本当に、久しぶりの事だったのだ。

それこそ「誰かが私を必要とした」という、たった一つの何気ない事実で、涙が止まらなくなってしまう程度には。

「……………ひつく……………うっ……………うっ……………」

返事の代わりに、俯いた顔から、押し殺した嗚咽と涙が幾つも零れ落ちた。

たった一つか二つ、本を探して、集めるのを手伝って、コピーして。誰でも出来る事をやったただけだ。

たまたま私がそこにいて、手が空いていたから。別に一本丸の立派な刀が頭を下げた感謝するほどの事じゃないし、大した事は何もしていない。

それなのに、一期一会の出逢いの瞬間から、丁寧に礼を尽くした温かい感謝と優しさは、私だけに向けられていた。

助けを求めてくれてありがとう、と、力にならせてくれてありがとう、と、そう言いたいのは、私の方だったのに。

「うっ……………う……………うあっ……………あ……………っ」

言葉にならずに、ただ涙になって流れ落ちるその全部を、まるでわかってくれているかのように、三日月さんはいつまでも、私の頭を撫で続けてくれていた。

その日。

夢から戻りぼんやりしたまま、私はまだ夢現で、本丸の三日月さんに会いに行つた。朝ぼらけの中で、早々に目を覚ましていた三日月さんは、内番着姿のまま、縁側でお茶の支度をしながら日を浴びている。

まだ袴を纏う気力もなく、裸足で浴衣のままやって来た私を、三日月さんは振り返つた。

「お早う、主。今朝は早いな。また熱で眠れなかったのか」

やや心配げな表情を浮かべる、いつもと変わらないうちの三日月さんは、私の顔色が良くなつてきているのを見て、ぺたぺたと歩み寄つて来た私の頬に手を当てながら、少しだけ安堵したようだ。

「ふむ。昨日一昨日より、随分と楽になつたように見えるな」

「おじいちゃん……」

大きな手が、少しひやりとして気持ちいい。

いなくなつていいるはずはないのに、三日月さんがいつも通り本丸に居てくれている事に、酷く安心した。それはそうだ、あの夢でお別れしたのは別の本丸の三日月さんで、この三日月さんじゃないし、私が恋しがったり悲しがったりする義理なんてないのだから。

それなのに、いつも通り三日月さんがここに居てくれる朝の風景が、ひどく愛おしく

て、心があたたかくて、夢の中で味わった優しさと重ね合わせた瞬間、ほろほろと涙が頬を零れ落ちた。

「おじいちゃあんつ……」

夢から覚めてまでこんなに泣きじやくつてしまふ自分を滑稽だとも思うけど、涙が止まらなくなつてしまった私を、訳もわからないだろうに慌てることも問い詰めることもなく、三日月さんは伸ばした手で撫でると、縁側で隣に座らせてくれた。

「どうした。何か悲しいことがあつたか」

「うう……えつく……ぐすつ……」

着物に染みを作つちやうのは申し訳ないなあと思いつつも、べつたり三日月さんにくつついたまま、私は蹲つた膝から顔を上げられずにいた。悲しいこと……どうなのか。部類としては、むしろ嬉しいことに入ると思うけど。泣きながら夢であつたことを少しずつ話すと、小鳥の声が微かに響く庭で、三日月さんは右肩で抱くように寄り添つた私の髪を漉きながら、目を細めて何度も頷いていた。

「そうか。はっはっは、それは他所の本丸の俺も、さぞ嬉しかろうなあ」

「そうかなあ……?」

「こんなにも聡明で努力家な主が、人助けならぬ刀助けをしたのだぞ。他所の俺も、お前が審神者であることはわかつていたのだろう? 自分を大切に扱ってくれる同業と出

逢えたことは、誇らしかったに違いない」

「そ、かな……だったら、私も嬉しいな」

今はそう思うことしかできないけれど、その言葉が、心にぼっかり空いてしまったとうしような寂寥を、埋めていってくれるような気がした。

お礼に叶えられることはないかと、あの三日月さんは聞いてたけど、願うことなら、どうか幸せに、本丸と主と共に生きていって欲しいと思う。

話しているうちに、ふと私は気が付いて頭を上げた。

「ごめんなさい、よその本丸の三日月さんの話なんかして」

「はっはっは。俺がそんな事で気を悪くするほど、狭量な刀に見えるか？ 紫咲」

「ううん、全然。でも、あんまり気持ちよくないかなあって……なんていうか、その三日月さんとどうしてももう一回会いたいか、うちの刀にしたいとか、そういう訳じゃないんだよ。ただ、あの時どうしようもなく寂しくなっちゃって……」

「わかっているとも。ただ、その俺がお前に求めたことが、お前の普段感じている寂しさや苦しさに、すっばり嵌まったのだろうなあ」

優しく肩を撫でながら言われると、日は高くなってきたのに、うとうとと心地よい眠りに誘われる。風邪から回復したばかりで、体力がまだ追い付いていないらしい。少し動いただけで、疲れて眠くなってしまう。半分くらい目を閉じていると、三日月さんは

そーっと私の体を横倒しにして、そのまま膝の上に頭を預けた。

「ん……重いよ……？」

「かまわんよ。主の頭くらい、軽いものだ。今は存分に、じじいの膝に甘えるといい」

「ありがとう……おじいちゃん、すき。めっちゃだいすき」

「うむ。俺も紫咲が好きだぞ」

当たり前のようにのほほんと降ってくる声も、柔らかに髪や耳を撫でてくれる手つきも、全てが心地良い。

1000年を超える歴史を持つ刀の神様に、こんな風に甘えるなんて図々しいのかもしれないけど、その傍はほっとして、温かくて、つつい離れ難くなる。

優しく心を解くようなぬくみに揺蕩いながら、私はそのまま三日月さんの膝に身を任せて、ころりと寝てしまったのだった。

「……お湯、冷めちゃったでしょ。新しい奴持って来たから、その急須の中のはボクが飲むよ」

「はっは。気を遣わせてすまんなあ、夜翰」

背後から小声で話し掛けてきた人影に、三日月が小さく微笑して振り返る。盆に載せた湯呑みと、あつあつの鉄瓶を持った人物——紫咲のパートナーである夜翰ヨハネは、この本

丸に合わせた甚平姿の出立ちで、三日月の左隣に静かに腰を下ろした。普段から露出の多い服装を好みがちな夜翰ではあるが、上下共に半袖なのは却って珍しい。

柔和な三日月に、夜翰は照れを隠すようにして、ぼそぼそと返事をしながら茶を注ぐ。「別に……自分の湯呑み取りに行つて、戻つて来たらサキがあんたの前で泣いてたから、今割つて入るのもなんか違うと思つて。ついでだから、待つてる間に厨でお湯沸かして持つて来ただけ」

「そういうのを、気を遣える奴と言うのだぞ」

紫咲を起こさないよう、二人の音量は小さいものの、静謐な朝の空気の中では、互いの声が無かにも遮られることもなく、程よく耳に届く。

先ほどまでの会話を途中から遠目に眺めていた夜翰は、小さく湯呑みを啜つてから呟いた。朝の光が艶っぽい紫紺の前髪に反射して、朝露を浴びたような輝きを纏わせている。

「……その三日月宗近は、なんでサキの思い出なんか欲しがつたんだろう」

「さあてなあ。その俺が何を目的で歴史を収集していたのかはわからんが、きつと主の辿つた『物語』は、もう一人の俺にも興味深いものだったのだろう」

「まあ、それは……わからなくも、ないけど。サキの人生つてなんかこう、波瀾万丈だし」
紫咲は、取り立てて有名人のような煌びやかな人生を送っている訳でも、誰の目をも

惹く劇的な過去や経歴を持つわけでもない。それこそ、大きな歴史と情報の波の狭間に、簡単に飲まれて消えてしまうような、何て事はない人生だ。

それでもその人生における一つ一つを輝かせているのは、紫咲の「物語」だと、三日月は思っていた。決して平凡だと流す事なく、その中で味わう幸せや歓び、それだけでなく悲しみや苦しみさえも、噛み締めて天へと上げていく、彼女の生き様。意味があるのかと己に問い直しながらも、もうダメだと何度も足を止めそうになりながらも、どうにか一歩、また一歩と持ち上げて踏み出そうとする、その姿が三日月にはとても愛しかった。この本丸に顕現して以来、短い間にも眺めてきた紫咲の姿だ。

初夏の風が吹いて、軒先の風鈴を小さく鳴らしていく。涼しげな音色の下、三日月の膝を枕にしながら、熱で火照った体をようやく冷ませたというように安らかな寝息を立てる紫咲を見下ろし、夜翰は不意にぼつりと漏らした。

「……止められなかったんだ」

「うん？」

「こんな事になるまで、ボクは気付いてやれなかった。絶対にサキの事を守ってやるって、言ったのに。本人が大丈夫って言うから、なんとなく自分でも見守りつつ心配はしてやってるつもりで。心配はしてるけど、まだ自分の都合とか仕事を優先して大丈夫だって思ってた……甘えて、潰れるまで放置した。最低だ。こんなの、サキの旦那さん

と大して変わらないじゃん」

ぎゅつと、悔しげに吐露した夜翰がその唇を噛む。元より美しいだけに、険しくなると尚更その造りの鋭さが際立ってしまう夜翰の顔色を見ながら、三日月は困ったように眉尻を下げた。

「そんな事はあるまい。見よ。お前たちの手は、あまりにも小さいのだぞ。その五本の指で、望むもの全てを守り切れず溢れ落としてしまうのも、無理はない。守るものが多い中で、お前はよくやっているさ」

褐色のたおやかな夜翰の指の間に、三日月の色白な大きな手の指が、ゆつくりと差し入れられる。それをぎゅつと握り返しながら、肩を震わせる夜翰の頬を、堪え切れなくなつた涙が伝つた。

「それでも……っ、何かできたんじゃないかって……っ、もつと早く、もつと沢山サキのところに通い詰めていけば、こんな事にはならなかつたんじゃないかって……!」

叫びながら真珠の粒のような涙を散らす夜翰を、三日月は右隣で切なげに目を細めながら見守っていたが、やがて柔らかく解いた手を、麻の着物越しの細い肩に回し、包み込むように夜翰のことを抱き寄せた。

右手で、膝枕に横たわる紫咲の黒髪を。左手で、嗚咽を漏らす夜翰の紫紺に近い黒髪を。交互に優しく撫でながら、静かに目を閉じた三日月は、泣き声を上げる夜翰の華奢

な腕を摩る。

「夜翰。お前たちは、二人そろって優しい子らだなあ」

「優しいって……ぐすつ……別に、ボクはそんな、優しくなんかないし」

「いいや。そんな事はないぞ。悲しいのは、人を想って痛める心がある故だ。紫咲もまた、お前たちや常世の人間達のことを想わなければ、こんなに苦しみはしないだろう。本当に、頼りなき小さな体で、なんとも大きな悩みを抱えるものだなあ。お前たち人間は」

朝方の抜けるような青空に残った月を仰いで、その名の如き弧のような光の浮かぶ瞳を、三日月は感慨深げに優しく和らげた。

「生きている限り、孤独が癒えることはない。それでも、共にある者達の力があることで、主は命を繋いでいる。俺も、お前もな。お前をこれ程までに泣かせたのだ。主もしばらくは養生して、身も心も慮ってくれろとよいのだがなあ」

「紫咲って意外と素直に甘えるタイプじゃないんだよね……周りに頑張り屋が多いせいで、すぐ自分を下に置いちやうというか。まあでも、少なくとも三日月さんには甘えられるみたいだし、それはよかったかな」

「はっはっは。そうか。それは俺も嬉しいな。ただ……」

「？」

ほんの少しだけ、見ていてもわからない程僅かに表情を曇らせた三日月は、首を傾げる夜翰の前で、またからりと笑った。朗らかだが、どこか己への呆れを笑い飛ばすかのような笑みだ。

「いや。紫咲の夢に現れたのが、他所の本丸ではなく、この俺であればよかつたなどと……柄にもなく思ってしまったただけだな。はっはっは」

「ええ……さつき自分は狭量な刀じやないとかどうとか言つてなかつた？ 三日月さんつて、意外と執着心強い方？ サキに焼き餅？」

「お前には敵わんなあ。なに、年寄りのつまらぬ嫉妬のようなものよ」

意外そうに夜翰が瞬いて目を輝かせたのを見て、三日月が苦笑する。

「三日月さんでも、そんな事考えたりするんだね」

「今の俺たちには心があるからな。何も綺麗なものだけでできているわけではない」

「心……か。人の内側にある感情は、一つじゃないからね」

「人の身と心というのは、如何にも難儀なものだ。それ故に苦しみ、それゆえに興味深くもある。お前も、感情のままに振る舞う姿は、随分と可愛らしく見えるぞ」

不意に横槍が飛んできて、夜翰は不意を突かれながら慌てふためいて声を裏返らせた。

「は、はア!? ボク別にかわつ……かつ、可愛いのは当然かもしれないけど？ でも別に

そんな言われても嬉しくないし！」

「ははは。外見の話ではない。心根の良い奴は、見ていて気持ちがいいぞ」

あまりに騒ぐので、とうとう紫咲がもぞもぞと体を動かしながら目を擦る。既に太陽は高く昇り、鳥の声がぴちちと軽やかに庭の木から降り注いできた。ころりと寝返りを打って膝から降り、紫咲は縁側にごろりと転がりながら夜翰と三日月を見上げた。

「うーん、あれ……夜翰さん？ いつの間に。おはよう。ふたりで何話してたの？」

「何。俺らの主は可愛いなという話だ」

「違つ！ ベベベ別にそんな話してないし！」

「はっはっは。その顔の赤さでは、染まった心までは隠せんなあ」

「ふふ。夜翰さんてば、そんな嬉しいこと言ってくれたの？」

「違うつてばーッ！」

どちらかといえば恥ずかしい話をしていたのは三日月の方のはずだったのに、しれつと恥を擦り付けられて夜翰は声を大きくするが、とはいえ自分も同じような醜態を晒していたので、反論する余地もない。

誤魔化そうと苦くなった茶を啜る夜翰の隣で、三日月が袖の下の手を、紫咲の乱れた髪へと伸ばす。愛すべき刀に寝覚めの髪を整えられて、紫咲は幸せそうに微笑んでいた。

私たちのこれに、今はまだ名前はない 《前編》

3〜4日の間、38度近い熱を出した後も、しつこく風邪は居座っていた。

目覚めた朝は一旦熱が引いたかに思えるが、朝を食べて間もなくすれば、徐々に頭痛と倦怠感に襲われ起き上がることができない。もう、自分がどうやって日中机の前に座っていたのか、どうやって布団を離れ生きていたのか、何故家事やゲームといった日常の活動を行うことができたのか、そんな事さえ思い出せないほどの暗く長い日々が、十日もの間続いた。

病院に担ぎ込まれるほどの重症ではないが、飲める薬をすべて飲んで日々療養を重ねたところで、安心できるほど好転することもない。このままいれば良くなるのか、果たして悪化の前触れか、一向に不明瞭でただいつまでも終わりの見えない状態が、逆に審神者である紫咲の体力と精神力を削っていた。

そんな中、初期刀の山姥切や世話係の長谷部が主を案じざるを得なかつたのはもちろんのこと、それに加え、本丸に移動することすらできずに現世で伏せている紫咲の元へまでわざわざやって来て、何かと世話を焼いていた一振の刀の姿がある。

和泉守兼定。本丸が発足して半月後には顕現していたものの、ごく最近になって紫咲

と近しく話すようになった刀だ。馴染みの浅葱色を肩に羽織った装束で、交流が浅いはずの紫咲相手にややぎこちなさを見せつつも、日夜献身的に、彼は不安がる彼女の傍へ寄り添っていた。

「うーん……小康状態つてところだが、目に見えて良くなった感じもねえなあ。食欲は？」

「無理やりなら食べられるけど、あんまりない……頭も痛くなってきたし、昨日とあまり変わらないかな」

「まだ下がりそうにねえなー。もう布団に入っとけよ、主」

朝食後、寝起きは下がっていた体温が再び上がってくると共に襲い来る倦怠感と眠気に従い、紫咲は和泉守に促されるまま、大人しく布団に横になろうとした。布団に入る前に、力の入らない体を叱咤して台所で薬を飲み、水を汲み、体を温めるためにケトルで沸かした白湯で漢方薬を口に運んで、ぐったりと肩を落としながら、紫咲は俯いたまま、ぼつりとあること問い掛けた。

「カネサン」

「ん？」

「……もし私が具合良くなってきたら、兼さんもうここに来てくれなくなっちゃおう？」

「はっ……はああああ!!」

審神者の突然のネガティブ思考に虚を突かれるあまり、最近の和泉守は、最早返事をする度に反射で怒鳴り声になりつつあるが、そんな訳ないと口にするより先に、紫咲の目にもみるみる涙が盛り上がるのを見て、和泉守は盛大に慌て始める。

「誰がんな事言ったんだよ！ んーな訳ねーだろ!!」

「仮病じゃないんだよ。構って欲しいから具合悪くなってるわけじゃなくて、熱もそんなに高くないけど、家事も何とかできるけど……でも、本当に辛くて。布団の上から動けなくて」

「んなもん、あんたの顔色見てデコ触つてりゃあいくらでもわかるわ！ わかってんだよ。だから……あー、泣くな！ 泣いたらまた熱上がっちゃうだろうが！ いや待て、この場合は上げた方が得策か……？」

ほとほとと涙を落として、俯きながら鼻を嚙る紫咲を前に、大混乱しつつも必死で熱を下げる方法を模索していた和泉守は、少し迷った末に、軽く指先で紫咲の肩に触れた。ぎこちなく、隣で抱き寄せるようにしてその肩を摩る。身長差と体格差がすごいので、和泉守が羽織姿で隣に寄り添っていると、親鳥が羽の下に雛を庇っているかのようだ。

和泉守は、多少おろおろと途方に暮れて、その長い結わえた髪を時折弄りながらも、懸命に紫咲を安堵させようと口を開く。

「あんたのところを離れて、他の何処に行く宛があるっつーんだよ」

「うう」

「大丈夫だ。あんたの言葉が嘘だなんて思つてない。心細いのもわかつてる。心配すんな。病の時は、殊更気落ちするもんだ。今までだつて居てやつたろ？」

「そ、だけど……」

「けど、なんだよ」

「傍にいる理由がなかったら、一緒にいてくれるのつて、難しいのかな」

ぼつりと漏らした紫咲が、指輪を嵌めた和泉守の大きな右手を持ち上げた。長い睫毛を見開いた和泉守の隣で、紫咲はしばらく寄り掛かつて休みながら考え込むように目を閉じていたが、そのうち先程の薬が少し効いて、体に力が戻ってきたらしい。再び瞼を開けた時には、ここ二週間近くは見られなかった光が、その目に微かに宿っていた。初夏だというのに冬用のカーディガンを羽織ったまま、長く寝込んだことで草臥れてしまった部屋着姿で、それでも紫咲はしっかりと背筋を伸ばし、和泉守の目を正面から見つめる。

「私まだ、兼さんのことちゃんとよく知らないけど、もしかしたら主命を聞いてくれてただけかもしれないけど、辛いつて言つた時に一緒に居て嬉しかった。

でも私は欲張りだから……もしちゃんと元気になれたら、もつと色んな事知りたいし、私が好きな事もいっぱい教えたい。何が好きで、何が面白くて、この世界のどんな

事に幸せを感じるのか。頑張ったら褒められたいし、私もいつばい褒めたい」

「主……」

「伝えたいことがいっぱいあるの。だから、その……ううん。上手く言えないけど、これからも近くに居られたら私は嬉しいなって、思っただけ」

一気に言い切つてから、紫咲は疲れたようにころりと横になると、布団脇にいる和泉守の掌を握り直してから目を閉じた。

傍に居てくれる。その手を振り払わずに、厭うこともなく衰弱した主を励まし、見守つていてくれる。和泉守兼定がそんな刀だと、紫咲は思っていなかった。

戦事に関係のない用事で、何故ここまで和泉守に甘えたくなったのか、自分でもはっきりした理由はよくわからない。ただ、兄貴分らしい笑顔や頼り甲斐のあるところ、自家の割に主の前では時折狼狽えたところを見せるのが可愛らしくて、もしかしたら手を伸ばせば応えてくれるのかもしれないと、期待してしまった。

うつらうつらしながら、紫咲は考える。

それでも敢えて理由を求めるとすれば、きっかけは、和泉守が直生に——紫咲の大切な相手に、似ているという事だった。

動機としては最低かもしれないが、それに気付いた時から、そして直生と和泉守が楽しげに交流を持つようになってからずっと、気になってはいた。

怖いし気難しそうだし、戦と指令に関する事以外は興味がなさそうだと思つていた刀が、直生に屈託なく剣術を教えてくれる姿を見て、この刀はもしかしたら、私が気付いてないだけで私が思うよりずっと優しく、ひよつとしたら自分とも仲良くしてくれるのではないかと。

そうこうしている間に風邪と疲れを拗らせて体調を崩し、想像以上に具合が悪くなつてしまったので、少しずつ距離を縮めたり様子を見たりする予定が、どさくさに紛れてなりふり構わず和泉守に甘えていたのだが。

まつすぐな強さが好きで、それでいて壊れそうに繊細な儂さと美しさもある事を知つて、憧れた。それが恋であろうとなかろうと、その背中を見ているのが好きで、自分はまだ愛したいと思つた。優しくされると尚更喜欢きになる。

ただその資格が、審神者としても人としても自分にあるのかはわからなくて、わからないままに、元主のことや新撰組について書かれた本を図書館で借りてみたり、他の本丸の和泉守兼定をアニメや小説で見たり。

つい最近のこととはいえ、いつも和泉守のことを追いかけて考えている時点で、あんなんだこれ、もう立派に恋じやないかと紫咲自身は思つたけれど、ただ一方的に気持ちを押し付けるのは違う気がして、憧れは胸に咲いたままにした。

この間柄がいずれどうなるにしろ、ただ真つ直ぐに見つめていられればそれでいい。

魅力を知れただけで自分は嬉しい。そんな気持ちだった。

全身の力が入らず、苦しくてたまらない夜、和泉守は遠征にも行かず、付き添って紫咲の部屋にいてくれた。

その晩は、全国的に豪雨で、深夜になってもしとしと雨の降る夜だった。

いつも一緒に寝ている夜羽や恵李朱の他に、三日月や則宗も付き添いに来てくれていて、繰り返す火照りと寒気で眠れない紫咲の不安を和らげようと、音楽を聴きながら、皆が彼女の傍にごろりと転がって雑魚寝だった。

やがて子供の夜羽達が寝落ち、紫咲の手を握ってじやれつく猫のように転がっていた則宗も寝落ち、窓際で座ったまま三日月もうつらうつらし始めた頃。

自動再生の曲が終わっても尚、紫咲は眠れる気配がなく、一人目覚めていた。胃やお腹も変に引き攣って、眠りに落ちかけてはびくつと体を震わせて覚醒する。一体自分はいつまでこんな熱を出していればいいのかと、何かの病気だろうか、何度退けても這い上がってくる不安に、もう一週間以上押し潰されてきた。紫咲の人生においては毎度の事なのに全く慣れず、いくら必死に生きても自分を大切にしても、不調は長引いてしまう。三日四日、一週間と治る兆しが一向に見えないうちに、前向きだった気持ちは次第に闇に閉ざされて、足を引き摺り込む蟻地獄の最中にいるような、誰とも共感しやうがない不安と悲しさに襲われるのだった。

そんな時、苦しげに寝返りを一つ打つと——背筋を伸ばして座る、傍らの和泉守と目が合った。

眠ければ寝ていいと言ったのに、連日の演習での戦闘で疲れているにも関わらず、本当に寝ずの番をしてもらっているようだった。胡座で座ったまま、ただ静かに窓の外の雨を眺めていた和泉守は、ちらと目だけを動かして紫咲の方を見ると、静かにその鮮やかな浅葱色の瞳を和らげる。話す気力すらない紫咲を、安心させ慮ってくれるかのような優しさが、黙っていてもその目に滲んでいた。

『あんたが寝付くまで起きててやるって、約束したろ』

静かな微笑みが、口元に浮かんでいる。

心を読んだかのようにそう言われ、体を上向きにして見上げながら、紫咲も微かに口を開く。

『でも、兼さんの体に障っちゃうよ。あんま無理しないで』

『病人が何一丁前に心配なんかしてんだ。オレはあんたよりよっぽど丈夫だつての』
屈託のない声で、和泉守が笑い飛ばす。

不安でいっぱいな夜に自分が最後まで眠れず取り残されてしまうのは怖くて堪らないという、紫咲の我儘を聞くためだけに、和泉守は生真面目にも起きてくれた。平気だ、必ず良くなるよと優しく頭を撫で、紫咲が苦しくなると布団から手を出すと、黙っ

てその上に掌を重ねてくれた。

その気配を——黒々とした髪が浅葱色の羽織の上いっぱいに広がり、余った長髪が静かな夜の光の中で畳の上に撓む佇まいを、確かに紫咲は覚えている。

物言わぬ姿にどれ程感謝して、どれ程枕を涙で濡らしてしまったかも、忘れられそうにない。

実際のところ、現実世界で自分を物質的・精神的に支えたのは家族の助力や薬なのだろうが、和泉守と本丸の仲間にも命を救われたと、紫咲は思った。

和泉守自身は特にそんな風には思っていないかもしれないけれど、紫咲にとっては恩人ならぬ恩刀だ。どう大切にしたらいいのだろう、という思いばかりが募って、「近くに居て欲しい」という中途半端な要望になった。

それに和泉守が思いもがけない形で応えたのは、紫咲が漢方薬の効果で漸く復調の兆しを見せ始めた、その翌日のことだった。

私たちのこれに、今はまだ名前はなし 《後編》

「主」

「ん？」

「朝飯と着替えが終わったら、ちいと話したい事があるんだが。時間空いてるか？」

実家を送ってもらった漢方薬の力を借りて、昨日は久方ぶりに食事らしい食事をできた。今朝は食欲もあり、布団を出て炬燵机に座っている程度の体力がだったので、再度苦くて美味しい食前の漢方と、生きていることの有り難みを白湯で嘔み締めていると、兼さんが神妙に私の傍へ座しながら、そんな風に声を掛けてきた。

なんだろう。優しい兼さんは、今朝も私が目覚めるより先に起きていて、私と目が合うなり挨拶してくれたり、熱を気に掛けてくれたりして、甲斐甲斐しく見守ってくれるが、私もようやく回復の兆しが見え始めたことだし、もしや飽きたから近侍はこれで辞めたいとか、そういう話か。

「……」

「おい、そんな顔すんな！ べつ、別に、大した事はねーつつーか！ 熱出ててもちゃんとおんたがまともに聞けるような話だから心配しなくていい！ いいか悪いかって

ゆーと、多分……いい方の話だろうしな」

「そ、そう……？」

ネガティブな想像をして黙ってしまった私の顔に色々出ていたのか、兼さんは慌ててそう言い足して、すぐ目を逸らしてしまう。いい話だとは言いながら、妙に話しくそうにも見えるのだけど、本当に何だろう。

「話がある」って言われたら大体誰にも彼にもトラウマ級のことしか過去には言われた事がないのだけど、兼さんが大した話ではないと言うのなら信じたい。

結局、朝ご飯を食べてからもしばらく動かずのんびりしたり、久しぶりに洗濯や軽い掃除なども自分で行ったりして、纏った時間を取れるのは午後になった。その間中、兼さんはやっぱり少しそわそわしていたように思う。

夫の鯨氏が仕事で外出中は、いつものように一人で過ごす家の中。布団を敷きっぱなしの私の寝室じゃ、体の大きな兼さんは随分窮屈そうに見えるな、と思いながら、その正座した臙脂色の装束姿の前に、私は腰を下ろす。いつでも安静になれるよう、一応はまだ布団の上だ。

「で、話というのは……？」

「ああ、ええと……。あんた、昨日っていうか最近よく言ってたよな。理由がなくても、オレに近くにいるほしいって」

「あ……う、うん」

(改めて言われるとめちやくちや恥ずかしいな、これ)

自分で言ったくせに、人に言われると改めて、小っ恥ずかしいお願いを正面切つてしたものだと思う。

気持ちは嘘ではないけど、熱で弱つていなければ漏らすこともなかったかもしれない。ただのどうしようもない憧れで、愛とも恋ともつかない、まだ育ち切つてもいない、何かの途上にあるような気持ち。

何かを考え考え、兼さんは少し気まずげに片頬を指で搔きながら、先を続けた。

「んで、オレなりに考えたんだけどな。あんたはそれでいいかもしれないが、やっぱ何もなしにただ居ろつていうのは、難しいっつーか……オレにはやっぱ理由が要る。あんなの隣に居るだけの理由が」

「うん……ま、普通そうだよね」

何のメリットも楽しみもないのに、請われたからといってはいそうですかと、好んで隣にいる奴はいないだろう。

私にすら、まだどうなりたいかはつきりとわかっていないのだ。

兼さんだつたら今の段階で応えない事も十分にあり得ると、覚悟はしていたはずだつた。むしろはつきりした性格な分、そういうのはきつちり伝えておきたい主義なのかも

しれない、と思ひながらも俯いてしまう。別に、本丸にさえいてくれるなら、私がそれ以上高望みする事は何も無い。仲間でいられるのが一番の幸せなのだから。

しかし兼さんは、引き続き真面目な声のトーンで、想像もしなかったことを言い始めた。

「それでまあ、思つたんだけどよ。なければ作っちゃえばいいんじゃないか。理由」

「……? へ……? あ、うん……」

(いや、うんつて言つたけどどゆこと???)

小首を傾げた私の前で、膝に軽く握つた拳を置いたまま、更に言い募る兼さん。

「形式だけのものでも、ないよりはあつた方がいいんじゃないかと思つてな。それを上手く生かせるかは、正直自信がねえが」

「うん……」

「けどまあ、主がオレを大事にしてくれんのと同じで、オレも別に主を大事に思わねえはずはないわけでな?」

「うん。うん……? 何の話?」

何がなんだかわからなくなり、とうとう直接的に疑問を口にする私の前で、兼さんはその特徴的な前髪の頭をバリバリと片手で掻き回しながら、じれつたそうに言つた。

「だア〜ツ! つたくまどろっこしい奴だな! あんたはオレの女になる気はある

かつて聞いてんだよ?!

「……………?!? ……え?!?」

兼さん語を兼さん本人に翻訳された結果、私はものすごい勢いで固まる羽目になった。

待て待て待て。それはものすごく「大した」話では?

完全に予想外の方角からのアプローチに、未だ完全復活していない体調も相まって、ひたすら慌てふためくことしかできない。

「え、それはつまり……………え? え? 兼さんの女……………わわわ私が?????」

「オレの主はあんただぞ。あんた以外の女がこの本丸にいるかよ? ……あー、一応直生と夜輸も女か? でもあいっらはなんか違うんだろ?」

印象で直生「くん」と夜輸「さん」つてずっと呼んでるけど、私にとつてかけがえのない存在で、既に密な関係でもあるこの二人は、身体女性でありジェンダー不定性だ。少なくとも、この世界においては。

ついでに言うると、その二人及び他の各マルメロ家メンバーと私とは、いわゆる「付き合っている」と称しても構わない程親密な仲にある。ただそれは不倫とかではなく、我が家の面々も、私のリアルにおける夫も一応は了承していることなのだが、それを知って尚、私に「女」になつて欲しいということなのだろうか。

確認するように、私はおそろおそろ尋ねた。

「えっ、と……兼さんは、私が表では結婚してて、こっちの世界にも『好き』とか『特別な相手』が何人もいる事は、知ってる……なんだよね……？」

「ああ。あんたから何回も聞いてるし、理解はしてるつもりだ」

「付き合ってる相手の中で、誰が一番っていうのはないんだけど……っていうか、私と『付き合う』っていうと一人を独占できるって訳じゃなくてね、その為に今関係を持つてる子と別れるって事もないし、ただそういう諸々の関係性の中に、兼さんも一員として入れ込まれるって事になるんだけど……うち、そういう欲張りで変な家なんだけど……それでも、本当に、いいの……？」

「まあ、そりゃ世間的に流布する考え方やねえのは重々承知の上だが、うちの本丸は『ここ』だろ。あんたと過ごすあいづらを見てて、何となくわかったしな。ていうか、元々オレが活躍してたような時代じゃ、妻も妾もいるのは普通だろう。あんたの場合逆みてえだけど」

少し考え込むような表情で、相変わらず照れてそっぽを向きながらも、そう言ってくる兼さん。

まさかここまで柔軟に考えてくれるとは思わず、今まで散々兼さんに好かれたいというアピールしておきながらも、急に自信がなくなつて声がしぼんでしまう。

「ほ、ほんとのほんとに？ 私色んな人との距離感とか “好き” の範囲がおかしいから、普通に恋人じゃない相手とも刀ともハグするし、べったりくつつくし、相手のことが気になってたりするよ？ うちの子らはそれを当たり前と思ってくれてるみたいだけど、でもそのう……私は『誰か “だけ” の女』じゃないし、文字通りに明確な所有物になる事はできないと思うの」

「それは、今んとこは気にしてない。ていうか、正直言うと、オレも “好き” が何かって言われたら、よくわかんねえ」

きつぱりと、いつそ清々しいほどに兼さんは私をまつすぐ見てそう言ってみせる。

あまりに迷いのない眼差しに、ふと湧き上がった疑問符を、私は頭の上にいっぱい浮かべた。

「わかってないけど、恋人になれ、と……??」

「あー、いや。なんつうか、言い方が悪かったな」

再度、途方に暮れたように頭を搔いて言葉を探している兼さんを、私は前に膝を崩して座ったまま、のんびり待つことにする。わからなくてもこうして声を掛け、自分なりに提案してくれたという事は、何か考えている事があるはずなのだ。

私が慌てもせず、気長ににこにこしているのを兼さんは不思議そうに見ていたが、それで焦って言葉を出す必要もないと感じてくれたのか、少し安心した様子を見せなが

ら、ぼつりぼつりと話し始めてくれた。

「あんたがオレに向けてくる好意を受け取るのは、率直に言う悪い気分じゃなかった。主としても好感はあるが、そうじゃなくともあんたはその……なんか面白いし」

「面白いかな……？」

可愛いとか綺麗とか格好良いとかではなく、「面白い」って女性への口説き文句としてどうなんだ。そういうえば、リアルにいる夫に、私と付き合おうと思った動機を尋ねた時、返答は「なんか面白い人だなあと思ったから」だった。

そんなに面白いんだろうか、私は。そもそも、面白いなんて言われて喜ぶ人間……いや、ここにいるな。もういいや、それを嬉しいと思ってしまう時点で私は変人ということ。

勝手に納得しておいて、私は兼さんの話の続きに耳を傾ける。

「それで、悪い気分じゃねーけど、どう返したらいいのかはわかんなくて……」

「だったら別に、無理にお近づきになろうとしなくてもいいんじゃないか……？」

「それは嫌なんだよ。嫌っつーか……オレが一番困ってるんのは、口実がないと、これ以上下手にあんたに近付けねえと思ってるからで」

どうも、兼さんの中では「恋人」以上になることは決定事項らしい。

何があつてそこまで拘っているのだろう、と小さく首を傾げると、兼さんはもぞりと

体格のいい肩を動かし、ガタイの良きの割に儂く線の細く見える顔をあらぬ方角に向けながら、何度か唇を開いてはつぐみ、言葉を紡ごうと試みているようだった。

「……その」

「……？」

「夜翰とか直生とか！ あいつらその……平然とあんたに抱き付いたり、口吸いとかするだろう」

思い切ったようにそれを問いかける兼さんも必死で恥ずかしそうだったが、公然の事実とはいえ知られていて全く恥ずかしくない訳でもないので、面食らった私も顔が熱くなってくる。

「ま、まあ……お互い、そういうことしてもいい間柄っていう、同意の上だから」

「それが今のオレじゃできねーって話なんだよ！ だいたいなあ、きちんと交際を申し込んでもねえのに、あんなにベタベタベタ触れてたら破廉恥だろうがッ！」

「はれんち……」

見た目はこんな大柄でしっかりした男の人なのに、真っ赤になりながら耐え切れないという風に声を荒げるので、思わず私は鸚鵡返しに呟いてしまった。

うちの兼さん、なんだかんだで交際に関する観念めちやくちや清いな。なあなあのうち私に手を出してきて、なあなあうちに隣に居座ってた直生くんとか、愛情が先行

し過ぎて付き合う前から相方同然だったヨハネさんとは、また全然違う。

「なんていうか……兼さんってめちゃくちゃきちんとしてるんだね」

「普通だ普通。あんただって年頃の女だろ」

「年頃も年頃というか、もう三十路も近いんですけど」

「幾つでも関係ねえって。妙齢の女が、何の約束も取り決めもなしに、オレみたいなカッコいい刀を傍に置くもんじゃねえ」

「……ねえ、『妙齢』って本来若い女性に向けて使う言葉らしいんだけど、今年で30代の女を指して言うのはアレじゃない？ それとも現代の用法に合わせて、微妙な年頃だからそう言ってる？」

「だーっ！ いちいち揚げ足を取るなっつー！」

わざわざスマホで調べて聞いたのに怒られた。

何はともあれ、これで兼さんの突然の交際宣言の理由はわかった。好きだからそうしたいと思ったというよりは、私と距離を縮めるためにわざわざそうしてくれるという事らしい。律儀というか、何というか。

やけくそのように、兼さんがキツと私を睨む。その仕草が、普段の戦闘でドスを利かせる感じとは違って、妙に子供っぽい。

「とにかくなあ！ 好意を持った男女の間柄ってのは、それなりにケジメが要るだろう

が。告白だのポーズだの、そのためにあるんだろ？」

「そ……そうだけど、ちよつと待つて。ええと、兼さんはスキンシップなり何なり、私とこれ以上の距離を縮めるのに口実が必要だから、形式的に恋人関係に収まって欲しいと、そういうことで合つてる？」

「まあ口実っていう言い方はアレだけど、そういうことになるな」

なんかうまく言い方ねえかなー、と本気で悩んでいるようだった。

「形だけの仮の恋人」という概念が、私を傷付けるかもしれないと思つたのかもしれないけど、言いたいことは何となくわかる。伝わっているという事を示すために、私も一緒になつて考えながら、首を捻つた。

「んーと……恋人つて縛りがないと、触れたり抱き寄せたりするのは落ち着かない、つてことだよな」

「だつてよ、普通そこまで親しくない相手に、平気で口吸いしたり添い寝したり、悩みを打ち明けあつたりしないだろ？」

「まあ、それはそう……つて事は、そういうことをしたいとは思つてくれるの？」

兼さんの思う「スキンシップ」がどこまでの範疇を指しているかわからないが、大前提の確認としてそう尋ねてみると、再び後退りそうになりながら真つ赤になる兼さん。最近関わりができたことで薄々感じてはいたが、うちの和泉守兼定は、元の主のモテ男

伝説に反してだいぶ初心らしい。ものすごく。不器用にも程がある。でも、それだけに実直さと真面目さを感じられるところが、私はとても好きだった。

「そつー！ いやつ、必ずしもそういう訳じゃ……！ オレはなあ、夜翰達がそうやって接してるのを見て、あんたがそうすると喜ぶと思つたから……つー！」

「でも、私が喜びそうなことは考えてくれたんだ」

「うぐ……それはまあ……だつてそのくらいしか思いつかねえしよ。オレは敵を斬るのが本来の仕事なんだぜ？」

自分の専門外のことであれ、主の命であればこなしてみせる。この身と心を得て日が浅くはないとはいえ、彼ら自身のこれまでの刀生から見れば、顕現してからの日々の方が圧倒的に短いはずだ。その慣れぬ生活の中、指示通り闘つてさえいけば本来主とは関わりを持つ義理もないであろうに、こうして考え、手を差し伸べてくれようとすると涙がある。未熟な主の私を、ここまで慕つてくれることが本当に嬉しくて、ありがたくて、涙ぐみそうになりながら、私は微笑んだ。

「……うん。わかつた。兼さんが、もつと近くに居るために必要だつて思うなら、特別になろつか、私達は。今は、名前がないけどさ。でも、一つだけ言つておきたいの。別に、だからつて無理して恋人らしい振る舞いはしなくていいんだよ。私は、兼さんのことは好きだけど、いっぱい好きだけど、もつとこう……恋だけに拘らないで、色んな愛

を長く持てたらなつて思つてるから」

「主……」

「だから、その『特別』が何かは今すぐわかんなくてもいいし、うちの子の真似をしようと思わなくていい。戸惑つていいから、そのままの兼さんを伝えて欲しい。それで、もつと仲良くなりしたい。好きになる理由も、ドキドキする理由もいっぱい知りたい。私今、怖いけどすごくワクワクしてるの」

今の文脈に沿わない響きに、兼さんが一瞬、形の良い眉を微かに跳ね上げた。

「怖い？」

「そりやあまあ……私はすぐに誰かを好きになれるから、恋に落ちるのはいつだって簡単だけど、簡単すぎて踏み出す時はいつも怖いよ。上手くいかなかったらどうしようとか、マンネリ化したり、大事にできなかつたり、億が一嫌いになつちやつたらどうしようとか」

「それこそ、あんたがそんな心配する必要ないだろ。いいか？ オレらのこれは試験運用みてえなもんだ。試みにやった事が失敗するのはある意味当然だし、それで誰が悪いつて訳でもねえ。別に、無理だと思つたらその段階で切つてくれて構わねえよ。オレから頼んだ事なんだ」

「ええ〜！ 理屈はわかるけど、それは何か気が引けるといふか、そんなあつてもなくて

もどつちでもいいみたいな……いやでも、その方が依存度的には丁度いいのかな……？
ああっ、難しいっ……」

頭を抱え始める私の前で、ふと見上げると兼さんは、あろうことかちよつと楽しげにくつくつと肩を揺らして笑っていた。え、ここ笑うところ？と思ひながらぼかんとしていたら、口元に手をやりながら笑うという、ちよつと控え目で珍しい動作を見せつけながら、兼さんが顔を綻ばせる。

「相つ変わらず、なんつーか……主は面白い奴だな」

「ねえそれ本当に面白いの!？」

「我儘なんだか謙虚なんだか。全然わかんなくて面白えよ。オレみたいな奴相手に、そこまで真剣に考えて悩んでる人間も、初めて見た」

「……私は、何も手放したくないだけの最強の我儘野郎だよ。面白いつていうか、ただ迷惑掛けてるだけの人間かと……」

口を開きかけた私の唇を、長い人差し指が縦に触れて塞いでいた。それが兼さんの指だと気付いて驚いている間に、目の前に悪戯っぽく顔を寄せた兼さんがふわりと微笑む。あまりに柔らかい笑み方で、花のような儂さを感じて、二度びつくりした。

「そうかもしんねーけど、それだけじゃねえ。主は主なりに、上手くやってくれると思
う」

「……」

「信じらんねーつつう顔だなあ？ あんまり自己評価が低くちや、オレみてえなかつこよくて強うい刀も使いこなせねえぜ？」

今度は歯を見せながら無邪気に笑って、私の頭を大きな手でぽんぽん叩いてみせる。前はこんなにくるくると豊かに表情が変わる刀だとは思ってなくて、ああ、これが私は好きなんだな、と今更のように気が付いた。

「オレを前線に出せて部隊も回せてる時点で、あんたは有能だ。少なくともそこは自信持ってくれよ」

「でも……ずっと走り続けられる訳じゃないし」

現に、ちよつと風邪を引いただけでこんなに不調が長引いてしまっている。療養が終わっても、完全に元の暮らしに戻るほど回復するには更にまた数週間や一月以上時間が掛かるとしか思えず、いつだって自分が元気でいられるビジョンも、明るく皆を率い続けられる未来も、今は見えない。

それでも、兼さんは力強く笑って、隣に座ると私の背を叩いてみせる。

「まあ、こう体が弱くちや、度重なる不調で自信を喪失すんのも仕方ねえけど。けど、前も言ったろ。オレはあんたを役立たずなんて思った事はない。あんたが自分をダメだって思ってたんなら、信じられるまで何遍でも言つてやる。」

それであんたが一番辛い時、他の奴らはよくて、オレがあんたの心の一番近い場所にいてやれねえのは、不公平だろう。あんたがオレを、求めたんだろう?」

寄り添ってくれる広い掌が、温かかった。

私は、私を信じられない。信じてても、いつだって簡単に裏切られてしまう。

それでも、私をダメじゃないと言ってくれる存在を、その想いを否定したくはない。応えられるようになりたい。同じくらい、私が「好き」だと思つた気持ちにも、嘘をつきたくない。熱い涙が頬を伝うのを感じながら、私は頷いた。

「その線引きが、あんたの言う『特別』かそうじゃないかって基準なら、オレはいくらでもあんたの特別になつてやる。ていうか、それで力にならせてくれよ、主。どうするべきかは分からなくとも、気持ちい分からなくとも。あんたの力になりたいって気持ちは、嘘じゃない」

足を引いて私の前に正座した兼さんは、同じように布団の上で正座した私の両手を包み、瞳を真正面から真剣に見据えた。浅葱色の瞳は、いつだって光差す水底の瑠璃のように輝いている。どんなに照れていても、恥ずかしがついていても、口下手でも、伝えなければならぬ事からは絶対に逃げない、逸らさない瞳。

「これでもまだ疑うか?」

「疑つ……兼さんの事疑つてなんてないけど! 私が信じられないのは、どちらかとい

うと自分の方で！」

「じゃーとりあえず近くに置いとけ。それで困る事がありや後々色々決めればいいだろう」

「そんな適当に〜?!」

確かに、私が寝込んでる間はほぼ兼さんが近侍みたいなものだったし、これからも傍にいてくれる機会があるなら、やぶさかではないどころか願ったりだけでも。

まだ迷いを押しやれないまま、結局はその瞳の迫力に押されて頷いた私の前へ、広い掌が差し出された。

「ええと……まあ、じゃあ、今後とも宜しくってことで？」

形だけの交際宣言から始まった、初めてのスキンシップが握手。堅い。堅すぎる。あまりにも真面目で実に兼さんらしい。告白成功した瞬間、それを免罪符と言わんばかりに浮かれて甘ったるいハグだのキスだのしてくる男も私の人生にはいたというのに、なんて真面目なんだ。

戸惑いがちなその手に、未だ病の熱を孕んだ手をおそるおそる差し出すと、私が掴むより先にぎゅっと握り返された。力強い握手だ。不安も迷いも包み込んでしまうような、あつたかい手。

と、何の心の準備もなかった私は、不意にその手をぎゅっと引つ張り込まれ、思いつ

きり兼さんの腕の中に抱き締められてから面くらった。どきつと音を立てながら倒れ込むような形で激突してしまっただけ、頼もしい体はびくともしない。それまでは何て事ないという様子だったのに、その腕の力は思ったより強かった。羽織からほんの少し、熏きしめた香の熏りがした。

「紫咲」

「……は、はい」

熱くなつた耳元に寄せられた唇から、不意に真剣みを帯びた声の流れ込む。

そういえば、主、ではなく名前を呼ばれるのは初めてだな、と気が付いた時、その緊張が吐息と共にふわりと緩んだ。

「あのなあ。本来だつたら、刀に真名を握らせるのも他の本丸だつたら禁忌だつたりすんだからな？ 格下とはいえ、オレらは神様なんだからよ」

「ん〜でも、うちはうちだし。一応それ、戸籍上の名前とは違うから真名でもないし。ていうか、兼さん私の名前なんてずーっと呼ばないから、忘れてんのかと」

「忘れるわけねえだろ。オレの中じゃ、あんたの名前を呼ぶのも『刀と主』の関係の範疇に入つてなかつただけだ」

「……じゃあ、今は少なくともそれ以上？」

「……ん」

戦いに慣れた掌が、そくつと私の頭を撫でる。床に寝付いている間手入れもできず、ガサガサになってしまった私の髪の毛を、指先で漉いて解いていく。きつと本当はそこまで不器用じゃないだろうに、下手をしたら壊れてしまうんじゃないかと危惧しているかのように、慎重な手つきだ。

あたたかさに身を委ねていると、不意にちらりと、目の端に白いものを捉えた。抱き締められたまま肩口から見上げれば、ちらりちらりと、薄い色の花びらが降ってくる。そのうち一枚が、ぺたりと鼻の頭にとまって、私は呆気にとられながら、兼さんの頭上から雨のように次々と降ってくる桜を浴びていた。

「う、嬉しいの……?」

「!! ばっ……、ちがつ、これは勝手に!」

慌てて私を引き離してから、ぱたぱた袖や髪の毛の桜を払ってるけど、あまり意味ないと思う。

たったこれだけで舞い上がってくれなんて、なんだか僭越だし恥ずかしい気もするけれど、兼さんが喜んでくれるのなら私も嬉しい。

少しほつとした気持ちで、私は胸の前に両手を抱きしめながら、兼さんを見上げた。

「あなたが強くなってくれるのを、これからも楽しみにしてる。ゆつくりだけど、一緒にがんばっていいよ。よろしくね——和泉守兼定」

ふわりと微笑んだ瞬間、兼さんがその瞳を、一度瞬いて驚いたように見開いた。

「……あんたこそ、オレの名前覚えてたのか」

「忘れるわけじゃないでしょー？ みんなが親しみ込めて『兼さん』って呼ぶから私も呼んでるだけだよ。当番表の木札に“和”って漢字を見つckerるだけで私どきどきしてるんだから」

今はまだ、ハグが精一杯で。

でも、それ以上になろうとならななかうと、私達の間にあるものは揺らいだりしないのだろう。誰が知らずとも、理解されなくとも、それでいい。本当に大事なものは、いっぱい花開いた恋のきつとその先に、いくらでも咲き乱れているはずだから。

様々に変化していく先の未来を、これから一緒に生きられるように。兼さんと照れたような瞳を互いに見交わし、思わず笑い合いながら、私はそう願っていた。

兼さんを暗黒竜ツアーに連れて行くヨハネさん

その日。

Skyの世界に降り立った和泉守の前に、得意げに新しい紺袴の衣装を翻して現れたのは、虹のケープを肩に羽織ったヨハネだった。普段の本丸での甚兵衛姿とは一転、虹色の帯を細い腰に差し込んで、ちやりんと耳元にプリズムの光を放つ大柄なイヤリングを光らせたヨハネは、自分と同じく星の子身長に縮んだ和泉守を、腰に手を当てて不敵に見やる。とはいえ、それでも和泉守の方が背の高さは勝っているのだが。

「やあ。見学だつて？ いつも本丸じゃ世話になつてるから、こつちでボクが兼さんを案内できるなんて光荣だね」

「おう。まあ、主が気に入つてる世界を見とくのも、悪くないかと思つてな」

「今日はこの後、『捨てられた地』でキャンマラなんだ。あんまり映える場所での仕事じゃないけど、よかつたらゆっくりしてつてよ」

そう言いながら、和泉守をぐいぐいと祠の方角へ押しやるヨハネに、和泉守は首を傾げながら振り返る。

「お、おいヨハネ？」

「とりあえず、あんたその服じゃ汚れるから着替えた方がいい。紫咲の袴……まあ、最悪サイズは魔法で変えられるからいいか。適当に選んどいてよ。着替えた？ そしたら次はケープを……」

「おっ、おいつ、ちよっ、待てっ！ 随分質素な服だなあ!」

ゆっくりしていけと言いながら、スタイリストさながらに着付けを黙々と済ませていくヨハネは、本当は和泉守を着せ替えさせてみたいだけなのかもしれない。結局、普段ヨハネや恵李朱が好んで着ている赤いチュニックと黒のパンツを合わせた後で、ヨハネは次に和泉守をケープの祠へ連れて行った。目を白黒させる和泉守の前で、自分たちが持っている数多のケープの中から、黄色の細い縞柄が入った青のケープを引っ張り出すと、肩に掛けてちよっちよと肩紐を留め始める。

「新撰組の羽織に似てる色のケープはないんだよね。これで我慢してくれる?」

「いや、別にそこまで気にしなくていいから……そりゃ、あつたらあつたで嬉しいけどよ。てか、そんなに着替えねえとダメなのか?」

「あんた、羽なしでしょ。まだこの世界との互換性がないから、仕方ないけど。他のエリアならともかく、今から行く先は少しでも、魔力を含んだ衣服で身を守った方がいい。防具の代わりだからね。はい、火鉢持つて」

「防具……ってちよっど待ったア!? おい、オレの本体っというか刀どこだよ!」

あまりに怒涛の展開なので気が付いていなかったが、いつも腰に穿いている和泉守兼定——己自身の姿がない。周囲を見渡して慌てる和泉守に、ヨハネはちよつと呆れたようなジト目を細めた。この世界の干渉を受けているのか、いつものまつすぐな黒のシヨートボブが、今日は透けるような銀髪になっている。

「サキが言つてたでしょ。この世界に『刀』なんて概念はないんだよ。斬るべきものも斬れるものも存在しないんだから。まあ、槍みたいなのはギリ見たことがあるけど……刀があるとしても、多分今の世界になる前の、戦乱の歴史の中だろうね」

「そ、そうか……わかつてはいても、なんか落ちつかねえもんだな」

「棒状の物がいいなら、ボクの松明と交換してあげようか？」

「いや、その棒つきれで何を倒せと……犬も殺せねえぞこんなんじゃ」

とはいえないよりマシだということで、松明を背負つた和泉守を引き連れながら、ヨハネは再度、捨てられた地の玄関口となる広場の焚き火へと戻つた。きよろりと辺りを見回し、集めるべき赤い大キャンドルの位置を確認する。

「後ろにある……ということは、今日は座礁船はナシか」

小さく呟いたヨハネの言うことはわからなかったが、とりあえずその後をついていき、ヨハネに倣つて次々火の玉状の光を発生させるキャンドルに当たりながら、和泉守はふと思ひ出したように言つた。

「そういや、この間現代への遠征から帰還した時に髭切が言ってたな。でかい竜がどうとかこうとか……」

「そいつなら、ここから先で出逢えるよ。……ただ、生きて帰れる保証はないけど」

ざっと荒廃した土を踏み締め、こちらを流し目でちらりと振り返るヨハネの瞳に、和泉守は思わずごくりと唾を飲んだ。建物の足場は崩れ、地面があるべき場所には台風の目のような風が、雲を巻き込んでごうごうと渦を巻いている。いくら誇り高き負け知らずの刀といつても、迦行軍というわかりやすい敵に相對する時と、未知なる世界を前にした時では、緊張の種類や度合いが違っていた。

妖しい目で唇に凄みのある笑みを浮かべていたヨハネは、不意にそれを苦笑に和らげてから、安心させるように和泉守の腕をつついた。

「冗談だよ。まあ、ボクがいれば何とか避けてみるから大丈夫。準備はいい？」

「お、おう」

当たり前だが、刀の時も人の身を得てからも、投げられたことこそあれ空を飛んだ経験などない。本当に飛べるのか、と半信半疑で不気味な光の渦巻く雲間を眺めていると、ヨハネが何でもないかのようにひよいと手を差し出した。

「はい」

「あ？」

「繋いで」

差し出された褐色の掌を前に、意味がわからないというように一瞬固まった和泉守だったが、すぐにその意図するところに気付いてぶわつと頭に血を昇らせる。半分ほど声が裏返りそうになっていた。

「はあ!? オレにお前と仲良く手繋げって!？」

「そうしないと魔法が適用されないんだから仕方ないでしょ。あんた一人で飛ばせるわけにもいかないし。何、紫咲だったらよかったわけ？」

「そーいうわけじゃねーけどっ!」

「別に、こっちの世界だったら兼さんだつて子どもサイズに縮んでんだから今更気にする必要ないでしょ?」

「そっ!! ……これは、そうだが……」

唐突に審神者の名前を出されてますます赤らみながらも、年下の青年に手を引かれる照れにはどうしても抗えず、ぐぐぐと唸る和泉守相手に、ヨハネは何かを思いついたような顔で人差し指を立てた。

「あ、もう一つ方法はあるか。リトル面付けておんぶでも離れずに済むからね。好きな方を選ばせてあげるよ」

「……手繋ぎで」

これ以上体を縮められた拳句おんぶされるのはさすがに耐えきれなかったらしい。大人しく差し出された和泉守の手を取って、ヨハネが雲の中に飛び込む。

「しっかり掴まってね」

「うわっ……!?!」

間もなく、照れなど感じている余裕がなくなる程度の衝撃と暴風が二人を襲う。和泉守の力をもつてしても掴んでいるのも精一杯だ。洗濯機に振り回されているような遠心力と風に吹き飛ばされ、流され、気が付けば砂漠の土の上に投げ出されていた。やむをえず顔面から着地した和泉守は、体こそ丈夫でどこも怪我をしていないものの、さらさらの砂が口いっぱいに入ってじやりじやりになっている。

「うおえっ……ぺっぺっ」

「荒っぽくてごめん。ここしか入るルートないんだよね」

対するヨハネは既に何度も来て慣れているのか、着地こそ腹から突つ伏して無様なものの、何事もなかったかのように服の砂を払っている。

即座に和泉守に手を差し出したヨハネは、縁が虹の七色で染まった空色のケープを翼のように羽ばたかせ、一気に砂地から飛び立った。

あまりにあつさりと体が地面から離れるので和泉守は驚いたが、纏ったケープが風を捉えて、特に何かをしようと思わなくとも、ヨハネの横を綺麗に飛んでいられる。

緑色のどんよりした空が広がり、薄暗く足元すらよく見えない荒野を、ヨハネは目に止まらないような速さでぎゅんぎゅんと引つ張り回して進んだ。体は勝手に動くが、急カーブや急回転もあつてついて行くのに精一杯だ。

ふと物陰に溜まった火の玉を集めたヨハネが、黒々とした帯のような地帯を滑空していくのを見て、和泉守は初めてそこが土ではなく水だということに気付く。

「きたねえけど、随分広い川だな」

「その黒い水は、触らない方がいいよ」

言いながらもヨハネは、わざと足元を掠らせるようにして、川の水にぼしやりと服の裾を付けながら滑走した。途端、赤色の光が散つて、びりつと痺れるような感覚が和泉守を襲う。すぐに羽ばたいて上昇したことで一瞬の虚脱感はすぐに去つたが、確かに水に触れている間、体から生気が抜けていくような感じがした。

ふるりと顔を振つて、空を連れ去られながら和泉守が黒い川を振り返る。

「なんだ、今の……」

「闇で汚染された水に触れるとああなるんだ。他の地方じゃ限られた場所にしか見られないけど、捨てられた地にある水はほぼ全部コレだから。紫咲なんか、初めて来た時に、夜だから暗いだけだと思って突つ込んだら溺れかけたらしい」

「うおっ、怖っ！ あの野郎、ただでさえ体弱えのに心臓に悪いことやりすぎだろ！ な

んつうか、服が汚れるっつー意味でも触りたくねえな」

「それは完全に同意。ボクも、本当はお気に入りの服であのドブ沼に突っ込みたくならないね。まあ、火の玉を集めるためだから仕方ないけど」

クールにそう言つて、さつきから宙に浮く火の玉の箇所へ順に寄りながら集めているヨハネは、どうやらその位置を完全に覚えていているらしい。迷いのない効率的な道筋と、時折ヨハネの手元に光りながら降ってくるキャンドルを見て、和泉守は尋ねた。

「さつきから熱心に回つてつけど、その蠟燭は何に使うんだ？」

「ん、大侵寇の時に聞かなかつた？ この火の玉を集めて精錬しておくど、破魔の力を持つキャンドルになるんだ。まあ、結局本丸に輸入して使う暇はなかつたみたいだけど」

「ほお……闇を祓う蠟燭ねえ」

「本丸でも何かの足しにはなるかもしれないし、こつちでも入り用だから備蓄してるんだけど、恵李朱は炎が好物だからたまにつまみ食いして頭から齧ってるね」

「おまえんち色々おかしくね??? 恵李朱は悪魔なんだろ？ なんで破魔の蠟燭が好物なんだよ」

やいのやいの言いながら、ヨハネが白くうじやうじやと岩場に群がる蟹の群れを飛び越える。さつと近づいて火の玉を回収しただけで相手にもしなかつたが、和泉守は奇声を上げて行き交う蟹を眺めながら口を出した。

「おい、まさかと思うけどそこに群がつてるちつけえ蟹がヤバイ奴とか言うんじゃないだろうな」

「まさか。あれは大鳴きすれば倒せるんだ。一回ひっくり返せばジタバタしてるだけで襲つてこない。まあ、追い込まれてる時に群がられると結構厄介なだけだね。本命は次のエリアだから」

今のところ、雰囲気がおどろおどろしく荒廃しているだけで、驚異になりそうなものは和泉守の目には見当たらない。崩れ落ちた人工的な建物の入り口を迷いなく潜り、中を走っていくヨハネに手を引かれながら、和泉守は左右に立つ門兵のような巨像を見上げる。確かに、その手には武器のようなものが携えられていた。

「なあ、まだかー？ 結構……まあ、歩いてるんじゃないやなくて飛んでるから体感がよくわかんねえけど、かなり進んだんじゃないやねえか？」

「そんなに慌てなくても。この先に行けばすぐ会える。……ほら、おでましたよ」

ごおおお、と地の果てから響いてくるような音が轟いたのは、その瞬間だった。足を止めたヨハネの目の前、廃墟が佇む池のど真ん中から、巨大な黒い影が立ち上がる。巨大も巨大、それはどんなものを前にしても足が竦むことなどないと自負していた和泉守の、予想を遙かに超えていた。時間逆行軍が現れる際には、上空の時空の歪みができるのを見たことがある。その大きな歪みを埋めてしまうのではないかと思えるほどの巨

駆だった。さすがの和泉守も、どう斬りかかれば有効かさえずくには算段できない。

「で、でけ……でけえ。なんだ、こいつ……」

「でかいよね。あの光に当たるとマズいから、こっちに逃げよう」

鼠を追い込むようにして、巨大な青い光が迫るのを、ヨハネは和泉守の手を引つ張ることで手早く避けた。図体がでかすぎて全貌を把握できないが、触角のようなものがついた頭から、青い光が射出されている。

「マズいつて……どんな風に？」

「ここに隠れて見てな。あいつが恐れられてる理由がわかるから」

柱の影に身を隠したヨハネが、先ほどすれ違う形で追い越した巨大な生物を振り返る。不気味な音を立てながら、生物はうじゃうじゃと沢山ある脚を動かしながら、狙いを一点に定めて動きを止めているようだった。青ではなく赤い光の点滅が浴びせられたその先を見て、和泉守の心臓が早鐘を打つ。

「お、おい、あいつ襲われるんじや……」

白い羽根を持つ、マンタのような生物が宙を泳いでいた。もちろん人ではなく動物らしき生き物だが、それでも巨大な竜よりは明らかに弱々しく見えるそのマンタを見て、和泉守が嫌な予感を募らせたその瞬間。断末魔のような声と共に、風を纏った巨体が突進してきて、その光は綺麗に消え失せていた。何も泳いでいない空中を、ヨハネは驚く

こともなく淡々と眺めている。その様子を見て、和泉守はヨハネの行動の意図を知った。

「お、お前、わかってたのになんで……!」

「ああなったら誰にも止められないんだ。この世界の誰にもね。あの突進を防ぐ方法はどこにもない。唯一、攻撃を無効にする魔法はあるけどそれも時間制限付きだし……ボクらならともかく、あのマンタみたいな光の生物は、ただ食われることしかできない」
「だからって、何も見殺しに……!」

責めるような口調になった和泉守の背後から、また青い光が闇を横切る。今は言い争っている場合じゃない、と我に返った和泉守を連れて、ヨハネは無言で廃墟の中まで一直線に飛んだ。直後、青色の光が舐めるように石壁の中に反射して、二人のいた場所を執拗に辿っていく。

「だから、こうやって隙を見て移動して、あいつらのサーチライトに当たらないように身を潜めるんだ」

話すヨハネの頭上を、ガラガラガラと不気味な音を立てながら、黒い煤のようなものを溢して竜が通過した。愕然と見上げる和泉守の横で、身を守るように抱き寄せていたヨハネは、小声で囁いた。

「あの光に当たると感知されるけど、逆に当たらなければ真下においても気付かれること

はない。センサーみたいなものかな。今のうちに行こう」

上方にある廃屋の出口に向かって、ヨハネは和泉守の手を引いたまま一気に駆け上がった。軽く息を切らせた和泉守は、背後で再び不気味な不協和音を耳にして立ち止まる。それに合わせて、ヨハネも一瞬だけ、耳を澄ませるようにじつと足を止めた。やがて場が静かになると、ヨハネは砂丘が下り坂になったようなエリアの先へと、再び足を進ませた。

「……誰か狙われてる。まあ、羽が散った音はしないから、多分大丈夫でしょ。ボクらは先に行くよ」

「なあ、あいつらは……あの目玉から発する光で、何を感知しようとしてるんだ。野生生物の捕食本能だとして、なんでそこらへんに生えてる草とか蟹じゃなくて、光ってる生き物や人間を食らうんだよ？ お前らも……あいつの獲物なのか？」

一匹どころではない、さっきの巨大な竜がうようよと巡回する砂原には、建物ほどに大きな、太古の生物らしき骨が幾つも転がっている。そのうちの一つに身を潜め、外の様子を伺いながら、瓦礫の壊れるような耳障りな音を立てて通過していく竜たちの気配を警戒しつつ、和泉守に説明した。

「あいつらに、悪意なんてない。意図も邪悪さもない分、遊行軍よりタチが悪いかもね。あの生物は、……暗黒竜は、幸福や喜びを食らうんだ。底なしの胃袋みたいに果てが

ない。ただ、いくら取り込んでも満たされない乾きと飢えを抱えて、本能のままに光を追い掛けてくる。幸福っていうと抽象的だけど、要は生きるのに必要な気力とか、希望とか、エネルギーとか……そういうもの全部」

闇の花を燃やして火の玉を回収する間にも、青いサーチライトの光と音が迫る。慌てることもなく、ヨハネは岩壁を挟みながら竜の背後に回ると、その姿を追い掛けるように、慎重に距離を取って荒れ地を進み始めた。獲物を見つけない限りは、ただ順路を巡るだけでその挙動は大人しいものだ。エビにも似た造形で、硬い甲殻をしならせて蛇行していく暗黒竜を、和泉守は観察していた。

「髭切の奴、あんなヤベーもんを本丸で飼うとか言つてやがったのか……」

「まあ、ハロウインの時背中に乗せてくれた奴もいたし、星の子に友好的な個体もいるらしいんだけど……最近あれがぬいぐるみとして発売された影響で、幼体の頃から星の子と絆を結んで育つ暗黒竜の事例も観測できたって、紫咲言つてたし。そういうのを指して言つてるんじゃないかな。だとしても、おっかないことに変わりはないけどね……」

もう一つ回りたい場所がある、と口にしたヨハネは、土管を抜けた先にある黒々とした海で、座礁した船の傍の火の玉を回収してから、廃工場の土管のような場所を登り始めた。足元にべちゃべちゃと泥が纏わり付き、ごぼごぼとパイプが音を立てるその場所は、裸足で降り立つのも嫌になるほどだったが、服を汚したくないと喚いていたはずの

ヨハネは、何故か神妙な顔で騒がずに和泉守に言った。

「あいつらがどうやって生まれたのか、ボクも知らない。でも一説では、人間の負の感情や憎み合う心があゝの虚無を生み出したとか、人間に搾取された生物がその恨みであの姿に変わったとか、そういう風にも言われてるんだ」

「人間の……」

見晴らしのいいパイプの上から黒々とした海原を振り返り、和泉守はこの世界が、現実離れしていながらも妙に現実味を帯びていることに気付く。特にこの「捨てられた地」は、単なる石積みや魔法を使ったものだけではなく、工業的かつ人工的な建造物が目立つのだ。化学工場。船。滅んだ生物。干からびた砂地。時代の中で、和泉守も多かれ少なかれ、その流れは目にしてきた。

「……この先には、何があるんだ？」

「来てみればわかるよ」

汗っばい掌を繋ぎ直したヨハネが、和泉守を最後の場所へと誘う。パイプを登り切った先に続く砂の道。鮮やかな色彩のケーブを翻して、和泉守たちが上空から目にしたのは、色を失った荒涼地帯。見渡す限りの砂漠に、盾や槍のようなものがところどころ埋まり、柄に結ばれた紐が虚しく風に靡いている。

遠方には、機能していないらしいものの、砦のようなものが聳えていた。和泉守が、砂

地の上で長髪を靡かせながら目を細める。

「戦場の跡……か？」

「ボクはAURORAのコンサートの中でしか見たことないけど、そうらしいんだよね。何のために戦っているのかもわからなくなるぐらい、ひどい戦争だった。沢山の人が殺し合って、沢山の人が死んだ。地上に繁栄してた生物が全部死んでも、残された人や子供達がどれだけ泣いても、戦争で傷付いた世界は簡単には元に戻らない。それを忘れさせないためのエリアなんだと、ボクは思ってる」

遙か上空、砦のてっぺんまで手を繋いで飛び立つと、ヨハネはその石積みの上にふわりと降り立つ。見下ろせばその内側は、地面に突き刺さった武器や残骸だけが目立つ、寂しい遺跡だ。遙か砦の上方まで舞い立つほど激しい砂埃を浴びながら、ヨハネは強風に髪を押さえ、無人の廃墟を眺めながら呟いた。

「……ねえ。兼さん達がやつてること、ボクは間違ってるとは思わないよ。誇り高い使命だと思う。ボクだって、抗わないと自分や大切な人が殺されるって言われたら、武器を持つて闘うだろうし、今までだってそうやって生きてきた。」

「……ただ……一つだけ覚えておいて欲しいんだ。戦を経た世界は、もしかしたらこうなるかもしれないってこと。ボク達が戦って散らせた命の陰で生み出された世界は、もしかしたら取り返しつかないものかもしれないかも、無慈悲に大切なものを奪われて苦し

み続けてる人達も、必ずいるんだってことを」

「夜翰……」

いくら正しい歴史を守ろうとしたところで、その過程で守れぬものもあり、救えなかつた命がある。幾度もそれを経験した和泉守が、知らぬはずはなかつた。それでもヨハネは、主を支える者として、自らこの本丸に関与する者として、言わずにはいられなかつたのだろう。

ふつと力の抜けた笑いを浮かべて、ヨハネは自嘲するように、涼やかなケープを纏つた肩をすくめた。

「……なーんて。偉そうに語っちゃったけど、ボクが言うまでもないよね。兼さんはボクよりうんと長く、戦の世界を知ってるんだからさ」

「そうでもないさ。他の刀連中に比べたら、オレの方がうんと歳下なんだ。……けど、そうだな。戦つてのは、どっちかが勝つて決着する。勝つた方が正しい歴史になる。そして、勝つたとしてもその犠牲は絶対に消えねえ。……痛いぐらいわかっているさ」

何を以てすれば「守る」ことになるのか。先代の主の時から、和泉守が突き付けられてきた命題でもある。今、人の身を得て、心という物を覚え、自分の意志で動けるようになってからでも、考え続けている。それに囚われて動けぬようになっては本末転倒だと思いつながら、時々立ち止まって問い掛けずにいられない。そしてその問いに思いを

馳せるのが、今は自分一振ではないことも、彼はまたわかつていた。

応えるように、ヨハネが隣で強くその手を握る。

「さて。おしゃべりはこのぐらいにして、そろそろ行こうか。ここは早めに抜けてしまわないと厄介なんだ」

高所から飛び降りても重力に従うことなく、ケープを広げて滑空したヨハネは、大きな闇花の側を通り、このエリア最後の大きなキャンドルの側で火種を回収してから、ちらりと周囲を窺って呟いた。

「……マズいな。花が全部燃やされてる」

「? さっきだって、先に通過した奴らが燃やしてった後は、似たような状態だったろう」

現に他の星の子の気配があり、彼らが燃やして先に行ったのだろうと想像がつくし、燃やされたところで後に残る火の玉さえ回収出来れば何の問題もない。同じように巡って来たこれまでのエリアを思い出して首を傾げる和泉守だが、それに反してヨハネは慌てているようだ。

「そうなんだけど……ここはちよつと、あまり誰かに先行されるとこの先の仕掛けがね。とにかく急ごう」

訳のわからぬままヨハネに豪速球で手を引っ張られた和泉守は、あつという間に荒地

の先を進んでいた星の子の影に追いついた。そう思った瞬間、エリアの突き当たりにあった神殿の、鋼鉄製の檻のような門が、ゴゴゴと大きな音を立てながら上方に持ち上がって開いていく。

「ヤツバー！」

「おいおいおい、何をそんな慌ててんだよ？ ここにはあの竜はいないんだろ？」

この神殿がエリアの終着点である事は聞かされていたが、だとしたら尚更急ぐ必要はないのではないかと思う和泉守に答える余裕もないまま、ヨハネは大慌てで、他の星の子と協力しながら門の手前にある闇花を燃やし、火の玉を回収する。

前を行く星の子に続いて、閉まり始める門の下を間一髪でびゅんとすり抜け、神殿の中に潜り込んだヨハネ達の背後で、ガラガラと檻の閉まる音がした。蠟燭の薄明かりが灯る階段で軽く息を切らしたヨハネは、服の埃を払って立ち上がりながら、ただ静かな声で和泉守にこう告げた。

「後ろ向いてごらん」

向けなかった。言われるまでもなく背後の妙な気配に和泉守は気付いていたのだが、あまりのおぞましさに躊躇したのである。

それでも首を捻って振り返れば、何もいなかったはずの荒地に、四つの青い丸が浮かんでいた。何度も見た、サーチライトの光だ。

どこから現れたのか、触覚と幾本もの腕を威嚇するように持ち上げた暗黒竜は、あの真つ青な一つ目で、心なしか一斉にじつと門内の和泉守の方を眺めていた。

まるで、自分たちをこんな姿に追い込んだ人間を恨み、安全圏に逃げ込んだ獲物を非難するかのような眼差しで――

その後、本丸に戻った和泉守は、直生に今日のことを話してみた。

最近になり、やっと鍛錬以外のこともあれこれ話すようになった直生は、事のあらましを聞いて容赦ない響めつ面をその顔に浮かべていた。

「げーっ!? ヨハネの奴、兼さん連れて捨て地なんか行ったのかよ!? なんでわざわざあんな辛気臭え場所を……もつと他に遊べそうな場所も、綺麗な場所も幾らでもあるじゃねーか」

「いやあ、オレは結構楽しめたけどな。それにまあ、あいつがあそこを案内したのも、それなりに意図があつての事だったんだろ」

苦笑する和泉守に、直生は首を傾げている。縁側で共に食べ終わったおやつの子の串を指先で振りながら、和泉守が言った。

「同じものを守りたいと思つてんのは、別にオレだけじゃねえつてことさ」

「ふーん? まあ、兼さんが楽しめたんならいいけど……」

今度はオレとも遊覧飛行しようぜ、と無邪気に笑う直生に約束しながら、和泉守はあの淀んだ空と、そこで寂しげに揺蕩う巨大な黒い影を思い出していた。

京極正宗は主のスカートを詰めたい

京極正宗が夜恵城本丸に顕現し、数日が経過した頃のことだった。

いつものように薔薇の髪飾りが優美な装束姿で、廊下で偶然出逢ったにつかり青江と京極正宗が立ち話をしていたところへ、この本丸の主・紫咲ムラサキが通りかかった。

顕現した時、宝箱の外から声は聞いていたが、それ以降に主本人と面と向かって会うのは、今日が初めてになる。予定外の邂逅にやや緊張しながら、木窓越しに他の男士たちと会話を交わしている主の様子を覗き見た京極正宗は、ぴしりと固まった。

「あ、青江……あつ、あの……あの可愛らしい方が、わたくしの新しいあるじさまだというの……?」

主のいる方を指差しながらわなわな震えるという、想像以上の反応に、青江が苦笑する。夏はいつも着流しか、Tシャツにサロペットという楽な格好の主にしては珍しく、その日はちよつと他所行きの装いをしていた。猫の柄が袖についた襟付き半袖シャツに、膝丈の赤いスカート。縛ると頭痛がするからと最近放置しがちだった長髪は、今日はトレードマークの桃のリボンで纏められている。

驚いたのは京極正宗だけではなかったようで、縁側に面した日中の廊下がにわかに活

気付いて騒々しくなった。

「主!?! 本日はそのスカートなのですか!? いえ、いつものお召し物もそれはそれはお似合いです、本日は殊更に麗しく光り輝いて見えます!」

「あるじさんかわいいく! きゅんきゅんしちゃう、それ!」

「おや、随分少女じみた装いだねえ。それもまた、たまには風流じゃないか」

「ううっ……主があいらしかスカート穿いとるばい……俺あ嬉しゅうて涙が……」

通りがかつただけで、次から次へと近場の男士達が声を掛けてきて大騒ぎになっているらしいが、皆に囲まれて照れながらも幸せそうに笑う小柄な審神者を見て、京極正宗は不思議そうに、ボブの黒髪をさらりと流し首を傾げた。

「どうも驚天動地の騒ぎように思えるのだけど……あるじさまのスカート姿というものは、そんなにも珍しいのかしら」

「ああ、何。うちの本丸の主は、とても体が弱い人でねえ。布団の中で指揮を取るのが往時な上、部屋の外に出て長時間活動されるのも難しい。近頃もすぐ熱を出すもんだから、熱中症対策とはいえ夏場の冷房がついた室内では、寒くてスカートなんかとても着れたもんじゃなくてね、主は。だから、こうして少しお洒落をされただけで本丸中大騒ぎというわけさ。今日の主は元氣だという証拠だよ」

「まあ。そういうことでしたの……」

隣の青江にすんなりと説明されて、京極正宗の顔にやや憂いと同情を帯びた色が浮かぶ。そんな二人の元へも、主はとことと板張りの廊下を歩いてきて代わりばんこに顔を眺めた。太陽のようににこにこ笑っている主に、青江の表情にも自然と笑みが浮かぶ。

「やあ、主。今日は随分と調子がいいみたいだね」

「青江さん。うん、熱は測ってないけど、今日は起きていても大丈夫みたい。ここまで元気なのは珍しいから、久しぶりに可愛い服着てみたくなっちゃった」

「よく似合ってるよ？ どこかのお嬢様みたいだ」

「ありがとう！」

みてみて、とくるりと回転して円状のスカートを回してみたら、主は我に返ったように動きを止めると、頬を搔いて言った。

「だって、京極ちゃんはすつごくお洒落なんだもん」

「わ、わたくし……?」

「うん。とつても可愛い。私は熱出すから外出も散歩も現実世界じゃろくに行けない体だし、だからお洒落着なんて最近全然着てなかったけど、京極ちゃんの姿を見てたら、家から出られなくてもいいからたまにはお洒落したいなあ、なんて。まあ、私じゃ全然、京極ちゃんの麗しさには及ぶはずないんだけどね！」

こういうのは気持ちの問題だから、とはにかむように笑った拍子に、主の頭のリボンが揺れた。

思わぬ言葉に、白い頬を真っ赤にしながら俯いた京極正宗に、主が微笑んで小さく手を振る。

「それじゃ、またあとで。京極ちゃん、ゆっくりしてってね」

「ご機嫌で庭の方へ向かった主を見送りながら、青江は眩しそうに目を細めた。

「よかったねえ。あんなに具合が良さそうに笑う主は、本当に珍しいよ。うちには数多くの男士が顕現したけど、主が寝込んでいるから、必ずしもやって来てすぐ会えるとは限らなくてね。君は運がいい」

「青江……」

頭一つ分以上抜きん出た青江を、京極正宗は見上げる。本丸に顕現して以来、主との付き合いもそこそこ長い青江の目には、切なく優しい光が宿っていた。

「大抵は、顕現しても暫くは交流の機会が持てないことが多いんだよ。うちの主は、自分が一番に新しい仲間を出迎えに行きたくても、体が動かさずに歯痒い思いをしている人なんだ。今日は自力で、一言でも君と挨拶を交わしに来られたことが、本当に嬉しかったんだろう」

その言葉を聞いた瞬間。驚いた青江が手を伸ばして止めるのも構わず、京極正宗は走

り出していた。短刀ではおなじみの機動力を駆使してあつという間に廊下の先にいた主へと追い付き、赤い裏地腰巻きを翻して駆け寄った京極正宗は、ぱつと主のカーディガンの裾を掴む。

「あるじさまー！」

「わ、わつ。きよ、京極ちゃん？ どうしたの？」

急に後ろから引つ張られた主が、多少よろめきながらびつくりして振り返った。

きよとん、と大きく目を見開く主のことを、未だ少し照れてうつむいていた京極正宗は、思い切ったように見上げて訴える。

「あるじさま、あの……裁縫道具を、お持ちではないかしら？」

「ご、ごめんね。京極ちゃんにスカートなんか直させちゃって……」

「よいのです。縫るものには手を差し出さなくては。こちらこそ、わたくしの我儘であるじさまを寒いところでお待たせしてしまつてごめんなさいね。すぐに終わらせてみせるから、少しの間辛抱してて頂戴な」

「い、いいのいいの！ 毛布あるから大丈夫！」

所変わつて、ここは本丸内にある審神者の自室。

弱冷房のついた部屋で、脱いだスカートの代わりに脚の上へ膝掛け毛布を乗せなが

ら、紫咲は畳の上で、黙々と貸した裁縫道具から糸や針を取り出す京極正宗の動向を見つめていた。

スカートの色味と同じ、赤い糸を選び針に通して引つ張りながら、京極正宗が言う。「皆と一緒に話している時に、スカートが下がってくるのを気にしておられたでしょう？ あるじさま。体格に服の寸法が合っていないのではないかと思つて。腰より上の位置で穿きたいのなら、おそらく少し詰めればすぐ済みますわ。できることを放つておくのは勿体無いと思つて、思わず声を掛けてしまったの」

「あの一瞬でよくそこまでわかつたね……すごいや」

たしかに少し緩いのを気にしながら穿いていたのだが、あの廊下での立ち話の一瞬で、そこまで見抜かれてしまうとは。刀剣男士の洞察力に感服していた紫咲は、自分のスカートを手に器用に針先を動かしていく京極正宗の手つきに、ゆっくりと目を細めた。

「お裁縫、上手なんだねえ」

「名家の嗜みですもの、このくらいはできて当然ですわ。それにしても、現世は便利なものが豊富ですこと。この『スナップ』というもの、素晴らしいわ。これがあれば、縫わずとも好きなように身幅を詰めることができるなんて」

感嘆したように言いながら、京極正宗は現代ではお馴染みの銀の丸い金具を、上に翳

して眺める。スカートウエストを詰めるのであればホックの方が有効だろうが、あいにく裁縫箱に持ち合わせがなく、凸凹の小さなスナップを複数個付けることで対応してもらっていた。

初めてのはずのそれを、危なげなく指で押さえながら針で縫い付けていく姿を見て、紫咲は毛布の膝を抱えながら、ぽつりと語り始めた。

「ほんとはね、そのスカート……もうすぐ私三十だし、年甲斐もなく似合わなくなってきたのかもあつて、思つてて。買つてからもずつと体調崩してるから、どこにも着て行けるような機会がなくて。則宗さんには『ほお、僕と同じ色のスカートなのに捨てるのかあ』つて散々ネチネチ言われたから、結局その気持ちしが有難くて捨てるのはやめたんだけど……ウエスト詰めるところまでは、踏ん切りつかずにいたんだ」

「それは御仁の言うとおりだわ。あるじさまに、とても似合っているもの。この薔薇のような真紅の色……年齢や着る機会のことを言い訳にして箆笥に押し込めてしまふは、あまりにも惜しくてよ」

「そう、かな……？」

真剣に針先に視線を注ぎながらも、そう話していた京極正宗は、膝を崩しながらも凛とした佇まいでふと顔を上げ、背筋をすつと伸ばしてまつすぐに紫咲を見る。血のようなジャケツトと同じ真つ赤な瞳は、薄暗い部屋の中でも真剣な気色を湛えながら輝いて

いた。

「それに、わたくしは深窓に咲く薔薇の如く気高き刀。わたくしのあるじさまとなる方には、もつと堂々と自信を持って可愛らしくいて頂かなくては」

「京極ちゃん……」

「そのためのお手伝いなら、わたくし何だってしますわ。だってあるじさまは、わたくしを見ていると綺麗になると、褒めてくださったのだから」

無邪気にそう言った表情は、気高さの中に滲み出る純粹で健気なものだったが、すぐにそれを引っ込めて得意げにつんと顎を上げてから、京極正宗はスカートを紫咲へと手渡した。

「さあ、これでできあがったわ」

「わあ。ありがと……ん？」

すぐさまスパツツの上にそれを着用した紫咲だったが、肝心のスナップの部分留めようとして異変に気がつくのと、申し訳なさそうに言った。

「京極ちゃん、ごめん、これ閉まらないかも……」

「えっ!?! そ、そんなはずは」

慌ててもう一度手に取って調べる京極正宗の隣で、紫咲も首を傾げて残りの部品と取り付けられた部品とを見比べていたが、やがて彼は何か気が付いたかのように、可愛

らしい悲鳴を上げてへなへなと畳に膝をついた。

「あ、ああつ!? わ、わたくしとしたことが、スナツプの向きを反対にして付けてしまつたみたい……」

「あ、そゆことか……それよくあるんだよねえ。私ですら付ける度に間違えるくらいだから、人の身に顕現して短い京極ちゃんが慣れないのも無理ないよ」

スナツプは手縫いでも付けることができる手軽な部品だが、凹凸の向きを間違えて付けてしまうと、留めることができななのだ。すぐに解けば、と紫咲は思ったが、京極正宗はこの世の終わりのような蒼白な顔をして頭を抱えていた。よほど動転して落ち込んでいるようだ。

「いいえ！ こんな、名族の出でありながらはしたないわ……それも、取れないようにこんなぐるぐるに頑丈に縫い付けてしまつて……嗚呼、わたくしとしたことが。どうしましょう、何たる失態かしら」

「落ち着いて。大丈夫だよ。どんなにしつかり縫つてても、糸なんだから鋏があれば切れるって」

手間を掛けさせて、と詫びる京極正宗を何度も励ましながら、紫咲は自分も糸切り鋏を持つて間違えた箇所を取り外す。結局は半々に共同作業をすることになり、今度は間違えないようにとわかりやすく地面に正しい向きで置いた部品と、手元の部品とを何度

も見比べていた京極正宗は、くすんと鼻を鳴らしながら針先を動かした。

「嗚呼……早く綺麗に終わらせて、会心の出来栄えのものをあるじさまにお見せしたかったのに。上手くないかどころか、体の弱いあるじさまをこんなにお待たせしてしまっているなんて、名族の名が廃りますわ」

「そんな、お裁縫のスナツプぐらいで。むしろ私は、京極ちゃんが私のためを思ってお直ししてくれて、さつきからずつと嬉しいのに」

「あるじさま……」

半泣きの京極正宗の前で、紫咲は絶えず楽しそうにしている。そんな主の前で、彼もやつと、はにかんだような笑顔を取り戻した。綺麗に直されたスカートを改めて身につけ、両端のスナツプをしつかりと留めた紫咲は、感動しながら腰を摩る。

「す、すごい！落ちて来なくなつたよ、感激……」

「いいえあるじさま、これだとまだ緩いわ……本当はもう少し詰めてもよかつたくらい……ほら、ここにまだ指が入るじやありませんの。一体何を召し上がったらこんなにお瘦せになるの？」

「治したいんだけど、体質なのでちよつとどうしようもなくね……とりあえずはこれで大丈夫だよ」

瘦せ過ぎに苦言を呈した京極正宗に、紫咲は苦笑いで侘びながら手を合わせる。

まだ少し緩めとはいえ、これならば秋口などに少し厚めのトップスを併せてスカートにインしたとしても、楽に着ることができそうだ。

役目を終えてしまい、もじもじと白い手指を合わせる京極正宗を、紫咲は感謝の意を込めてぎゅっと抱き締める。自分と同じく小柄なので、とてもハグしやすい。

「ありがとう、京ちゃん。嬉しい。折角直してもらったスカートだもん、あんまりいっぱい着られなかったとしても、絶対大事にする」

「あ、えと……これは、スキンシップ、というやつなのかしら？」

「わ、ごめん、思わず！ 嫌だった？」

「いいえ。そんなことは。……あるじさまはあたたかいのね」

「鋭い子だと、ハグしただけで『熱がありますね』ってバレて布団に戻されちゃうんだけどね」

「でしたらわたくしも、そのくらいはすぐわかるようにならなくては」

紫咲の腕の中で、彼はふふふと、小さく囁くように嬉しげな笑みを漏らした。

部屋の外に出て、まだ散歩の途中だった主の手を自然と取りながら、京極正宗がきらきらした目で振り返ってくる。

「あるじさま、今度わたくしに裁縫を教えてくださいな」

「えー？ 京ちゃんに教えられるほど上手なんかじゃないよ、私」

「けれど、あるじさまの部屋にあった小さな服は、本丸にいたあのぬいぐるみ達のものな
のでしょう？ あれを自分で作れるなんて、あるじさまは十分に器用よ」

まだまだ盛りを通り越すことを知らない夏の日差しが、頭上高くで輝いている。

その中においても、一人と一振の喋り声は、薔薇の間を舞う蝶々のように楽しげに響い
ていた。

朝涼みの刻

久しぶりに酷い夢を見て、涙の中で溺れそうになりながら目が覚めた。

呼吸が浅く、体がどっと疲れている。

隣でヨルクン達や夜翰さんが寝息を立てる中、頭が切り替えられないまま、勝手に涙だけがどんどん溢れてくる。夢の中では泣いていなかったはずなのに、目が覚めてから結局泣いてしまった。

隣で寝ていた大柄な青年の、赤褐色の長髪から伸びていた大きな獣の耳が、何かを察したようにぴくりと小さく動いた。朱色あけいろの紅葉を思わせるそれは、人間よりはるかに広音域の音を拾ってしまうのだから、幾ら私が隠れて泣いていたところで、結局は無駄になるだろう。

眠たげな声が、静かな洞窟の奥底から響いてくる水滴の音のように、一つ問い掛けた。

「どうした」

「……」

「どこか痛むのか」

「いや……何か変な夢見て。ごめん、今めちゃくちゃ死にたいんだけど、私、もしかして

どうにかなつちやつてる？」

「俺の見た感じ、特に何の変化もないが」

低く揺蕩う声でそう答えた主——神龍の青雨せいいうことセイは、長く艶やかな帳のようだった髪から漸く顔を上げて、翡翠色の瞳を細めた。その体から伸びた水の触手が、するりと私の体の内側に入り込んだかと思うと、心臓の上でゆつくりとぐるを巻く。ひんやりと心の熱を奪う不思議な感触と共に、波立っていた感情が少しだけ落ち着くのを感じて、私は目を閉じた。

鱗の下にふつさりと毛の生えた、龍らしい尻尾を慮るように体に被せながら、セイが言う。

「大丈夫……大丈夫だ。ここにはお前を害すものは何もない。夜羽も、恵李朱も、夜翰も、皆お前を愛してここで朝を待っている」

私の心中の怖れを、体内の水の流れと涙から見て取ったのか、波紋のように静かに、セイの声が語り掛ける。揺れていた現実の位相が少しずつ元に戻り始めて、私は背中を撫でる大きな掌に導かれるまま、ゆつくりと呼吸を繰り返した。

「だいぶ荒れていたようだな。これで少しは落ち着くか」

「ん……少しね。何だったんだろう、本当に。なんか、こんなに絶望的な気持ちしかないことって世界にはあるんだなって、久しぶりに思っちゃった」

頭のコントロールが効かない、と言うべきなのだろうか。

目が覚めた直後、「死にたい」という視界でしか物事を見られない自分を、もう一人の自分が平坦な目で見ていた。

これは一時的な“状態”の一種なのだ、まさかこれで本当に死ぬはずはないだろうと頭ではわかっているのだが、その視野狭窄度と絶望感だけは本物で、何の前触れもなしにそうなってしまう事に、純粹に驚いてショックを受けた。

親から役立たずだと責められる夢なんて、最近とんと見ていなかったから油断した。夢の中で嫌な顔をされ、こんな状態でこの先どうやって生きていくつもりなのかと詰られる事に、何の心の準備も出来ていなかった。今の自分の在り方を、親からも責められ、かつての先生からも責められ、漸く目が覚める。わかりやすい悪夢だ。

「何か、お前に心当たりみたいなものはないのか」

「全然。だって最近、体調も少し良くなってきたと楽しかったし。昨日だって寝る前に見たかったライブの配信みんなで見ただっかだし……熱出して不調だったから、少し無理はしたかもしれないけど」

熱を出して凹むことも、数ヶ月前よりは少し減ったと思つたのに。

そう考えながら首を傾げると、セイは私と同じように、うつ伏せで肘を立てて寝転がったまま、ゆるりと首を傾げた。

「むしろ、そのせいじゃないか」

「？」

「完全なる快調には程遠いとはいえ、多少普段通りに体が動くようになってきたのなら、働くなり仕事を見つけるなり、自分と誰かのために、金の糧になる手段を見つければと、そう考え始める人間だろう、お前は」

そう言われて、少し驚いた。

確かに、そう思っていたのは否めない。いくら体調が悪いとはいえ、こんなに毎日家で夫の稼ぎに甘えてごろごろ過ごしていることは本来許されなくて、多少無理をしても社会復帰しておかなければ、後々本当に家族が働けなくなつた時に困つたことになるんじゃないか、と。

それは普段あまり意識し過ぎないようにしている事で、自分を追い詰めないよう、心の深い奥底に鍵を掛けて押しやっていた。今回、自分でも知らないうちに、その蓋が少し開いていたのかもしれない。

自分でもわからずにいた焦りを言い当てたセイに、小さく溜息を吐くと、傍で見守っていた翡翠の瞳は、カーテン越しの朝方の光の中で、きらりと輝きながら私を見下ろしていた。

「お前、真面目すぎるんじゃないか」

「私よりよっぽど大真面目なセイに言われたくないよ」

「俺が真面目なのかどうかは知らんが」

人に裏切られた経験を持ち、それでも今も尚、主としての私や皆の傍にいたいことを選んでくれる青雨は、十分に優しく真面目だと思う。

よくわかっていない顔で耳を動かす本人を、私は苦笑いで残して布団から這い出し、机の上の白湯を一口飲んだ。冷房はつけっぱなしとはいえ、一晚飲まず食わずでは喉が乾く。ピルを飲んでいいるから、血栓症も心配なところだ。ヨルクン達を踏まないよう注意しつつ、もう一度布団に戻った。

一度身じろぎしたセイは、腕の中に戻ってきた私を着物の袖に覆うようにしながら、頭を抱いてぼそりと呟く。

「……俺は、良い神ではないのだろうか」

「なんで？ どしたの、突然」

「お前にとって何の力にもならんとわかっていても、お前が苦しいとき、俺はどうにかお前の苦しみを取り除けないかと考える。だが、良き神というのは本来、ハクのように幅広く大勢の人間の幸せを願うものだ」

ふと寝返りを打って振り返れば、噂の主が、ヨルクンと恵李朱くんに囲まれて、派手な寝相で眠っている。亜麻色の髪から生える白い耳。小柄な体を丸めてふにやふにや

眠っているこの子——白雨はくうことハクも神龍だ。今はセイと同じで、神様の資格を失っている訳ありの神龍だが。

そつと胸の方へ向き直ると、微かにはだけた浴衣の胸元から肌を覗かせたセイは、やや自重的な微笑みを含んだまま、私の髪をゆるりと撫でた。

「俺のように、一人の人間に執着するのは、お世辞にも良い神とは言えん。たつた一人だけを幸福であつて欲しいと願うのは、一番神らしからぬ振る舞いだらう」

「う〜ん……まあ、そうかもしれないけど、今のセイは龍であつても正式な神様じゃないんだし、そんなに偉い神様みたく模範的なこと考えなくてもいいんじゃない？」

私に青雨のことを教えてくれた、古くからの知り合いであるらしい伽々未さんも言っていた。セイは、龍でありながらその在り方は人に近い、変わり者の神だったと。

とはいえ生態は龍だから、未だ人の身に慣れずに生活面ではド天然をかましているところもよく見かけるけれど、そうまでして人の傍にいようとしてくれる人間臭い神様を、私は酷く愛おしいと思う。

ひやりとした体温の低い体に、私はぎゅつと両腕を回して抱きついた。

「私は、そんなセイが好きだよ」

「……」

「それに、うちには人間を大好きでいてくれたり、主のためについて必死で命を張ってくれ

る付喪神さんだつて、いっぱいいるんだし。別に神様が一人の人間を好きだつていいと思ふよ」

「まあ、それもそうかもしれないな」

くぐもつた低い声でそう言つて、セイは私を抱く力を強めた。少しだけ笑つたようだった。

「まだ、朝を迎えるには早い。多少眩しいだろうが、もう少しだけ休むといい」

寡黙なセイでも、こうして体に触れ合っていると、色んなことがわかる。心臓の鼓動の代わりに、体を流れる水の音色が聞こえてきて、しやらしやらちりちりと、私の心を静めていく。

それは、セイの記憶や感情を奏でる水音とも重なり合っている。穏やかで優しい音。どんなに表情から見えなくても、継るように腕を伸ばして耳を澄ませばすぐにわかる。この優しい龍が、どんなに愛おしい目で、私を眺めてくれているのかということとは。

少しでも涼しく眠りやすいようにと、氷が水の中で触れ合う音を、触れた体から響かせてくれる青雨。その音色が全身に染み渡っていくよう、そして私の周りで眠るみんなの中にも流れていくようにと願いながら、私は朝の微睡の中で目を閉じた。

猿の手

「主君。……猿の手の物語を、ご存じですか？」

縁側でお茶を楽しんでいる私に、隣に座つたまま、躊躇いがちにそう言つて瞳を上げた前田くんを、私は驚いて見た。季節は秋、未だ日差しの衰えというものを知らぬ太陽が、壽の上から燦々と照り付けて、庭木の葉を輝かせる。羽織を纏つた軽装姿で、団栗のような艶のある茶色い瞳が、真剣な色を帯びていた。

「知つてるけど……前田くんは、英国の物語まで嗜んでるのかな？」

「少しは、この本丸にも本がありますし。それに、夜羽や恵李朱が学校で習つたことを教えてくれる事も多いです。この間、読書の時間にこの短編を読んだと聞いて。それで僕も耳にしたんですよ」

にこやかに笑つてそう教えてくれるが、さすが魔法界の学校、一年生が読むにはいささかハードな内容ではないだろうか。

とはいえ、魔法学校に年齢制限はないし、そもそも魔族である夜羽くんや恵李朱エリスくんヨルハに、元々年齢の概念というものは大きく影響しない。あくまで人間換算したら小学五年生ぐらいというだけで、種々様々な勉学に励むのに支障はないようだ。

左手に携えた湯呑みを、私は床の上に置いて、頭を巡らせた。

「あれはたしか、どんな願い事でも叶うけれど、願いの成就にはとても大きな代償を伴う……そういう呪物だったよね？」

「ええ。僕が聞いた話では、猿の手の木乃伊なのだ。金を願った夫婦は、労災で亡くなった息子の見舞金として、願ったのと同じ金額を得ることになってしまいます。その息子を蘇らせようと願いを掛けたところ、今度は人ならざる者が玄関先まで尋ねてきた。もう一度息子を墓に戻すよう願ったことで事なきを得ましたが、三つの願掛けをしい切つてさえその代償は大きかったと……そのような話でした」

なんでいきなり、こんな話を始めたんだろう。前田くんは。

首を傾げた私の隣で、沈痛な面持ちで顔を伏せた前田くんは、何かを耐え忍ぶような表情をして、おもむろにそつと、膝に置いたままの私の右手に触れた。

「怒らずに、聞いて頂きたいのですが」

「なあに。前田くんに怒るようなことなんてないよ」

「この話を聞いた時……主君の手のようだと思っただけです。主君は、この手でどんな物語でも生み出すことができる。どんな日常も記録して、僕らのことを支えてくださる。その代わり、この手は」

唇を噛みながら泣きそうに瞳を潤ませた前田くんが、重なった自身の掌を、悔しそう

に見つめていた。

それで全てを察して、私は未だ痺れが残る己の掌を、右手の内側に引き寄せた。

描画や筆記やタイピングで、少しでも疲労が溜まるとこの手には痺れや痛みが出る。もちろん、家事や生活一般の動作でも同じように影響する。もう症状が出て一年以上だ。痛みや違和感が気になる時でも、休ませるしか対処療法はない。

原因は不明だが、一年前に整形外科に見せた時、生まれつき外に曲がる肘をしていると、神経を圧迫して痛みや痺れの原因になりやすいと言われた。

普通の人は、両方の手を上向きにして手首の側面同士をくつつけ、両腕を前方に伸ばしても、両腕の肘と肘同士をくつつける事はできない。だが私は、手首から肘までの前腕が、綺麗にぴったりとくつつく。生まれつき、それだけの角度がついて肘が外側に曲がっているからだ。

このような腕のことを、俗には猿腕とか猿手とか言うことがある。

私の手は、本当に「猿の手」なのだ。

夢を創るにも、そのための努力を連ねるにも、この右手では代償を払わずにいられない。何かを生み出せば、確実に消耗する。今はまだその代償が小さく済んでいるのだとしても、これから先もそれがずっと同じだとは限らないのだ。

苛立たしい痛みを振り払うように、手首をぶらぶらさせた右腕を左手で摩っている

と、前田くんははっしと私の右手を小さな両手で掴んだ。近付けた顔の中で、傾き始めた秋の日差しに、溢れそうな少年の瞳があまりに必死な色を湛えて光っていた。

「ですがっ！　ですがっ……主君は決して、過ぎた願いをお持ちの人ではない。僕らとここで、日々を重ねて、生きようとされているだけ。戦いに赴く僕らを、主君はいつだって明るく励ましてくださる。この本丸には、刀の身を持つものもそうでないものも、たくさんの仲間が増えて……そんな日々を見つめていたいと、主君は願っているだけなのに」

つむじが見えるほど深く俯いた頭の下から、しかし涙が零れ落ちることはなかった。どれほど小さな少年の姿でも、どれほど泣き出しそうに見えても、彼は主君を守るという矜持が高い、凜々しい短刀だから。主より先に泣くことは許されないと、その思いが掴まれた掌の強さと震えから、痛いほど伝わってきた。

絞り出すように吐き出された、掠れた声が、秋風に乗って微かに響く。

「……どうして、主君なのですか」

彼は常日頃、主を困らせるようなことを言う柄ではない。

こちらが答えに窮するようなことは言わないし、ましてや我儘なんて聞いたこともない。

だからそれは、本当にうっかり、彼の感情の制御を超えて出てしまったかのような、悲

しく震えた声だった。

「どうして……物を創ることで物を愛そうとする主君が、なぜ。他の誰かではなく、この世界を形作ることを誰よりも愛している主君が……どうして、このような目に遭われなければならぬのですか」

「前田くん……」

「呪いなんて……代償を受けなければならぬようなことなんて、主君は何一つ望んでない！ この本丸の外で、生きていれば当たり前前に望めるようなことすら、主君はきつと半分も叶えられていないでしょうに」

ただでさえ健康を害しがちな私がどれほど悔しい思いをしてきたか。初めてこの本丸ができた日から顕現した前田くんは、今までずっと見ていたはずだ。この二年間、まともに外を出歩けた日の方が少なかった。

そつと膝をついて、私は前田くんに向き直ると、彼の温かな掌を握り直した。私以上に、悔しさと理不尽で震えてくれた肩をそつと摩ると、柔らかな茶色いボブの頭を、前田くんはようやく上げてくれた。

「大丈夫だよ。私は……このままでいいとは思ってないけど、でも、この体で生まれたからできることも、きつとあるって思ってる」

「主君……」

「不安になったり、泣きたくなったりすることだってあるけど……でも、こんなに心の温かい神様たちがいっぱい見守ってくれてるんだよ？　だったら、どんなに最悪な事が起こったって、それ以上は悪いことなんて起こりようがないに決まってる」

こつりと前田くんの綺麗な前髪のおでこに額をぶつけて、私はその鼓動に耳を澄ませるように、そつと目を閉じた。

「まだ、動く。この手も、足も、耳も、目も。その終わりが来るのがいつかなんてわからないけど、だったらそれまで、君たちのこといっぱい大切にしよう。色んな方法で、幸せになれないかなって考えてみる。……だからありがとう。前田くとみんなのおかげで、今はまだ、生きるのを諦めずにいられる」

祈る以外に私がこの身一つでできることなんて、たかが知れている。

それでも私は祈るのだ。

握った手を離さずにいられるように。想いに宿る力を信じていられるように。

優しく見つめると、不意に柔らかな笑みを取り戻して、前田くんは眉を下げながら私に笑いかけた。

「すみません。主君を困らせるつもりではなかったのに、僕はつい難儀なことを」
「まさか。前田くんは普段いい子すぎるんだから、このくらいでちょうどいいよ」
「では、我儘ついでにもう一つ、お願いを申し上げても？」

珍しい。なんなりと、と先を促せば、前田くんは眩しそうに目を細めてから、きちん
と正座し直し、私をじっと見つめ返した。

「僕を、修行に行かせていただけませんか。主君」

「そつか……長らくうちにいてくれたけど、もうそろそろ行ってもいい頃合いだもんね」
「主君が涙を堪えて頑張つていらつしやる隣で、僕が泣くことなどないように。主君が
お辛い時、もっと隣でお役に立てるように。——身も心も今より強くなつて、帰つて来
たいのです」

強い決意を込めた言葉に、私は目を見開いた。

心配を掛けてしまうのは忍びないけれど、私の姿を見てそう思つてくれたのは、嬉し
かった。修行は、ふらつと行つてしまふ子もいれば、何かのきっかけがあつて旅立つ子
もいるけれど、長く初の姿のまままで本丸を守つてくれていた前田くんにとっては、きつ
とこの「猿の手」が契機だったのだろう。

だから、私は力強く頷いて微笑んだ。

「行つておいで。前田藤四郎。ここでみんなと、帰りを待つてるから」

「主君の三十のお誕生日が過ぎる頃には、戻つて参ります。直接お誕生日をお祝いでき
ないのは口惜しいですが、どうかそれまで、今一時待っていてください」

頼もしくにつこりと笑みを返して手を握つてくれる愛刀は、小柄な少年に見えてこの

本丸では歴戦の猛者だ。安心して送り出すことができる。

立派になって帰って来る彼の姿が誕生日の贈り物になるなんて、恵まれた審神者だと思いながら、私は小さな両手をぎゅつと握り返した。

剣とペン

「はあ……」

「どうしたの兼さん、人の誕生日に盛大に溜息なんか吐いて」

「いやな、主が三十路になって初めての修行にはオレが行きたかったのに、前田の奴に先を越されちまったなあ、と思つてよ」

「あらやだ、兼さんてばそんな事考えてたの？」

思わず右隣の影を見上げると、月影つきあかりの中でも浮かび上がって見える程美しい睫毛に縁取られた、兼さんこと和泉守兼定の憂愁の顔つきが、仄かな溜息を吐きながらぼんやりと遠くの星空を見上げていた。

隣に座つたまま、大きな掌が守るように私の右手を包み込んでいる。

私が大きく体調を崩した時に、日々看病に寄り添つてくれてから数ヶ月。あの頃のような窮状は脱して、常に兼さんの助けを必要とするような状況はなんとか避けられているけれど、それでも兼さんは、時々こうやつて黙つて傍にいてくれた。

隣に座つて、手を握り合う以上に大きな接触や進展はない。お互い、声を大にして関係性を主張するようなこともない。それでも、何となくわかる。別に恋愛や色めいたあ

れこれがなくとも、お互いのことは大切に想っていて、このつかず離れずの穏やかな距離感が、一番心地良いのだと。

修行に旅立つ前田くんを見送った日の晩、確かめるように私の右手をすすると触りながら、並んで本丸の月見をしていた兼さんの大きな体を見上げながら、私は言った。臙脂と黒の軽装姿とひとまとめの黒髪が、涼しげでよく似合っている。

「でも、前田くんは私の誕生日より前に出発して、丁度誕生日を跨いでから戻ってくる予定でしょ。だったら、その後で兼さんが修行に旅立てば、私が三十路になってからこの本丸で初めて、修行に出た刀つてことになるんじゃない？」

「そうだけだよ。なんかこう、タイミングつてもんがあるだろ？ 主の誕生日は、どのみち過ぎちまうわけだし」

「じゃあ、この本丸ができて二周年とか、兼さんが来て二周年とかの時にするのは？」

「来月か。まあ、本丸の周年祝いに合わせるのは、確かにアリかもしんねえなあ」

何かを考え込むように遠くを見ていた兼さんはそつと視線を引き戻すと、ゆつくりと私の方を見て、軒下の行燈の明かりに照らされながら、微かに唇の端を緩めた。

「主。オレが、あんたが右手を思い通り動かせないことを知って、何を考えたか教えてやろうか？」

「え……前田くんは『猿の手』の話みたいだと言ってたけど、兼さんも何かあるの？」

文字通りの猿手と、それによる神経への圧迫。まあ100%猿腕が原因と決まったわけじゃないのだけど、生まれつきの骨の曲がり方が、腕や手の不調の原因になるとは、去年医者で聞いた事がある。

それをたどって前田くんが、「猿の手」の話をしてくれてた訳だけど、兼さんは兼さんで別の思いがあるようだ。

きよとんと見上げると、星のように静かに微笑んだ兼さんは、滔々と話し始めた。

「あんたがこの本丸に直生なおを連れて来た頃、あいつが剣術を教えてくれって、頼んできたことがあったろ」

「ああ。そういえばそんな事……でもたしかあの時、兼さん最初は嫌がってたよね？」

芝居向けの剣を教えるなんて自分の柄じゃないって」

「オレのは、実践殺法だからなあ。芝居や演技重視の剣術とは訳が違う。本気で向かえば、血も流れるし傷も負う。遡行軍みたいな敵を相手にしてんだ、手加減なしで容赦なく叩き込めば、直生みてえな普通の人間じゃひとたまりもない。……と思ってたが、今思えば、本当の理由は別のところにあつたかもしれない」

「別のところ？」

「心の何処かで舐め腐ってたんだよ。芝居なんかとオレらの剣を一緒くたにするな、人前で見せるための剣技と、命のやり取りしてる剣技じゃ訳が違うんだ、ってな」

自分の青臭さを振り返るような、苦い笑みを浮かべて兼さんが言う。

今でこそ仲が良いけれど、表の世界で役者をしている直生くんと、そんな彼の気高さや豪快さどこか似た面を持つ兼さんとは、意外なことに少し溝があったらしい。

最初の頃、気のいい短刀や打刀達が、外の鍛錬場で直生くんと打ち合いの稽古に付き合ってくれている様子を、兼さんは屋敷の中から眺めていたのだという。

「今じゃあいつが芝居にどれだけ命懸けてるかわかるつもりだが、付き合いが出来たばかりの頃は、とてもそうは思えなかった。所詮、芝居は芝居。オレが何か教えたところで、学べる所なんかない。……チンケで安い矜持だと思うだろう」

「いやいや、そうは思わないけど。実際に命張ってる兼さんがそう思うのも、無理はないことだと思うし。それで……?」

何せ、あの土方歳三の刀なのだ。気さくで面倒見のよいところがあるとはいえ、数々の血生臭い戦場を駆け抜けてきた本刀ほんたんには、譲れないプライドだってあるだろう。

それがどう折り合いをつけたのだろう、と言葉の続きを待っていると、兼さんは少し思いつくような沈黙を差し挟み、庭の方を向いたままゆっくりと瞼を閉じてから、浅葱色の綺麗な瞳を開いた。

「あいつのなあ、手を見てた」

「直生くんの手……?」

「直生は、あんたと違って左利きだけだな。何度、加州や秋田や前田たちにボコボコに打ちのめされても、あいつは決して刀を手放そうとしない。地面に倒れ伏したまま、空いた手で爪を立てるみてえに、乾いた砂を掴んでた。あの真っ青な瞳だけは、どんな埃に塗れてもギラギラしててな。」

悔しさと硬く握り締められた拳と、血と汗に滲んだ掌で竹刀の柄を掴む様を見ているうちに、オレは気付いたんだよ」

まるでその時の情景を思い浮かべるように、眩しそうな目で広い庭を眺めていた兼さんは、その目をゆつくりと私へと向けた。

「前にな、あいつの鍛錬中に、あんたが横に来て小説を書いてた事があつたらう」

「ああ……何回か、外が見える場所に布団敷きながら、携帯とかタブレットで書いてたよね。あの時は、連載抱えてたから必死で」

体調は悪かったが、一度休んでしまえばもう二度と原稿のペースを取り戻すことができなくなりそうだったので、初志貫徹の精神で、何とか参加する企画の話は粗方書き上げた。

その時は、ただひたすら自室に籠って寝込みながら作業をするのも憂鬱だったので、兼さんやまんばちゃんに付き添われながら、外の景色が見える日当たりのよい座敷部屋で、執筆をしていたこともあつたのだ。

まあ、実際にそれで原稿がちゃんと進んだのか、それともネタ出し程度で終わってしまったのかは、頭が朦朧としていたので記憶が定かではないのだけど。

「それと何か関係が？」

「オレの隣で這いつくばったまま、あんたはどんなに熱に浮かされても、ペンを離そうとしない。常人じゃ立つてるのもしんどくなるような熱が出てんのにだぞ。どれだけ無理すんなつつつても、『これを書いてた方が元氣が出る』『自分がやるって決めたことだから、絶対にやんなきゃ』って、あんたは言う。その、止められねえほど仄暗い執念が宿った瞳と、必死で縋るみてえにペンを握り締めるあんたの手が——直生と、似てると思ったんだ」

舞台役者に相応しく全身が堅強な直生くんと、病弱すぎる私とでは、欠片も共通点なんか見当たらない。

そう思っていたから、思いもがけない評価にびつくりした。兼さんの視線が知らぬうちに注がれていた右の掌を、私はじつと見つめる。執筆や家事の余韻で、まだ筋肉が熱を持つような仄かな張りりと痛みがある。

その下から、私が痛がらぬようにと掬い上げるように慎重に掌で包んだ兼さんは、微かに息を吐き出した。

「あん時に気付いたんだ。現実も虚構も、実戦も芝居も、領域が違うだけで“戦い”であ

る事に変わりはない。どちらがより重大だとか、そういうことじゃねーんだって。直生は直生の芝居で人を元気にするし、主は主の物語でオレらを生かしてる。……オレには剣を使った戦いしか出来ねえが、それは他人の戦場をバカにしている理由にはならない」

「それで……直生くんの殺陣の練習に、付き合ってくれようになつたの？」

「まあ、あいつオレの想像を遥かに超えて、飲み込みが早かつただけだな。ここまではいいつつつてんのに、実践剣法まで覚えようとするし。あくまで人間としては、つて話だけど、直生はなかなか筋がいい」

ついつい熱くなってしまう兼さんのその現場を思い出して私が笑うと、兼さんも釣られたように笑い声を上げた。ひとしきり笑ってから、兼さんが軽く包み込んだ私の掌を振る。

「だからな。あんたは、その……」

「うん」

「その……」

「……？」

なんか、急に歯切れが悪くなったな。

不思議に思つて顔を上げると、長くて豊かな髪の間から覗く耳が、ほんの僅かに赤

い。

唸るように一度首を振った兼さんは、握った手に微かに力を込めたまま、振り向いた私をじつと見つめた。

「負けず嫌いで、執念深いあんたの瞳めが好きだ。誰にも言わねえようなことも、苦悩も、必死で全部隠し込んで生きてる。せめてそれを隣で知つとけるように在りたいと思うし、……それだけじゃなくて、あんたを守るように。もつと、強く」

ぐつと低くなつた声が、すぐ傍でそう囁いた。

星の瞬く空の下で、その瞳は大きな感情の動きを見せないまま、けれど熱く燃え盛つて、きらきら光る一番星みたいに見える。具体的な言葉にせずとも、その目が、真剣な表情が、何よりも雄弁に兼さんの気持ちを語っていて、胸が熱くなつた。

「オレが折れても、この手だけは絶対に折らせない。あんたの筆も、直生の剣も。」

今のままで守れるなら、それでもいいと思つてた。けど、オレが修行に出て更に強くなることで、守るための選択肢が増えるんだとしたら、それに越したことはない。今はそう思う」

「……ありがと。嬉しい。でも、折れるのだけはやめてね？ そんなの、何を引き換えにされるより悲しいに決まつてる」

「はっ、わあつてるよ。そんな簡単に、オレがやられちゃうわけねーだろ？」

そう安心させるようにくしゃやくしゃつと笑った兼さんは、すぐにお兄ちゃんみたいに私の頭を大きな掌で撫でてみせる。まあ実際はお兄ちゃんどころかうんと歳上なのだけれど、こんな風に時折見せてくれる近しきを感じる表情や仕草が、私は好きだ。

今まで、何度重傷になっても、ボロボロにされても、帰って来た。だからこれから先もずっと帰って来るように、私は采配を誤らぬよう、審神者としての勤めを果たすだけ。こんなに中途半端でも、誰かが愛しんでくれる事を幸せに思いながら、私はぼすつと肩に寄り掛かり、件の右手を伸ばして兼さんの髪先をそつと弄んだ。

「あゝあ……てことは、この下ろしたロングヘアともついに別れかあ。寂しいなあ」
「おいおい、別に本丸にいる間ぐらい、髪型は自由だろ。見たきやいくらでも下ろしといてやるよ。ずっとポニーテールでいなきやならねえ規則でもあるまいし」

「そーだけど、私兼さんの下ろした髪と、あの袖のない羽織が本当に好きなんだもん。修行には行って欲しいけど、それだけが心残りだよ」

修行から帰ってくると、みんな少しずつ今の姿とは見目が変わる。まんばちゃんなんてその最たるものだが、兼さんもどう変わるのか、他の本丸の極個体を見て知っている私には、十分名残惜しいものがあつた。

どっちも好きだが、初の姿をあまりにも気に入っていて、どうしても手放し難いのだ。けれど、こんな我儘にもいい加減ケリをつけるべき時なのかもしれない。

兼さんが、苦笑気味に私の頭をぼんぼんと軽く叩いた。

「カツコよくて強いオレに、変わりはねえだろ？ 何ならもつと、カツコよくて強い刀になつて帰つて来るからよ」

「それじゃ、遠慮なく期待しとくね」

「おう。今のうちに、好きなかだけ焼き付けといてくれていいんだぜ」

そんな事を言いながら、得意げに凜と胸を張つてみせる兼さんに、思わず肩を揺らしながら、私は縁側に垂らした足先に、秋の夜風の涼しさを感じていた。

タマミツネ・青雨が本丸にやって来るまでのお話

幽霊タマミツネの怪《第一話》

「じーじー！　　じーじーじー！」

「ははは。ほれ、じいじはこっちだ」

ひらひらと舞う群青色の袖を、よちよち歩きの幼い望寧もねが捕まえようと追いかけている。足元がおぼつかないのも構わず、裸足で家の中をどたどた歩き回り、あわや転ぶといたところ、先を歩いていた狩衣姿の若者は、危なげなく手を差し出し、ぼつてりした望寧の体を支えた。

「はっはっは。よしよし。望寧は今日も元気だなあ」

「じいじ！　　だいちゆき！」

ぺちぺちとはしゃいだ紅葉のような手に頬を触られている若者は、短めの黒髪をさらりと顔の横に流して、屈託なく笑みを浮かべた。この娘の祖父どころか父親と呼ぶにも若すぎる見目をしているが、その佇まいと老成した雰囲気、爺という呼び名に不思議と違和感を抱かせない。

そんな青年——三日月宗近みかづきむねちかの元へ、望寧の母親たる女性が、家の外から甕を持ちなが

ら入ってきた。小柄な体では、水汲みも一苦勞のようだ。

「あらあら。望寧つたら。三日月様をお祖父様なんて呼んでは失礼でしょう？　こんなにお若くていらつしやるのに」

「なに、気にすることは無い。俺がじじいなのは周知の事実だからなあ」

「そう言われましても……全然お年を召しておられるように見えませんわ。三日月様が、どのようなご身分の方かは存じませぬけれど」

くすりと笑つて、台所に甕を置いた母親こと紫苑しおんは、こちらに手を伸ばしてきた愛娘を、三日月の腕の中から引き取つた。

嵐の夜、三日月がこの近くの森の中で迷っているのを発見し、夫に連れられて来てから幾ばくか経つ。迷つたとは言つていたものの、彼自身の帰る場所ははつきりしていたようで、時々どこかへ連絡を取つていたり、ふらりと数日々数週間ほど姿を消してはまた現れたり、とまるで友人のように樺家かんばへ滞在を繰り返していた。

自身については多くを語らず、狩りに連れて行くと鬼のように強い。不思議な友人ではあるけれど、よからぬ企みや悪人の気配は、紫苑にも夫である矢羽やはねにも、何故か感じられない。子供が懐くから悪人ではないとも言切れないが、人見知りの激しいはずの望寧が、三日月にだけはちつとも物怖じせず、べつたり離れないのも、信頼を寄せる要因の一つだった。

そうこうするうちに、ギルドへ行つて仕事の依頼を探していた矢羽が戻ってきた。

狩りの獲物から入手した羽飾りを頭の片側に付けた矢羽は、望寧と同じ褐色の掌に携えていた依頼書の束を机に置き、鞆を下ろしながら肩を回す。華奢な体つきに、きちんと整えた焦茶色の髪を緩いハーフアップにしているので、女と間違えられることも多いが、れっきとした青年だ。

同じく、こちらは長い髪をハーフアップにして馴染みの蝶結びを飾りにした紫苑が、夫の傍に寄つて尋ねる。

「矢羽。お仕事はどうでした？」

「うむ……幾つか受けてきたが、ちよつと一件、気になるものがあつてなあ」

「気になる依頼？」

覗きこんだ紫苑の頭上から、自然と三日月も一緒に依頼文を見下ろす。紫苑が元々だいぶ小柄な上に、三日月は背が高い男なので、一緒に物を眺めるには背後に立てば全く支障がないのだった。

紫苑と望寧の頭を交互に片手で撫でながら、矢羽が紙に目を落とす。

「ほら。先日、俺と三日月が追い払ったタマミツネがいたろう」

「ああ……この近くの川辺で、堤防を壊しながら暴れていたのでしたっけ。たしか、三日月様が来られたその日の夜のことでしたわね」

「そうだ。そいつが、ここから十数里離れた村にも現れたらしい。傷跡というか、体表の特徴からして同じ個体なんだと。そいつ、普通のタマミツネよりもやけに体がデカくて赤いんだそうだ。この間闘った時は、夜だったから特段気に留めなかったが……確かに、デカイタマミツネではあったな」

何せ、あの三日月を鼻先に乗せてしまう程度の頭の大きさはあったのだ。

あの夜は三日月が謎のウインクで追い払ってしまったが、他の里に被害が出ているとなれば、一度狩猟に手を出した者として、何となく放つてはおけない。

思い出すように遠くを眺めている矢羽を、紫苑が不安そうに見上げた。

「亜種や希少種であるということは……？」

「いや……攻撃のパターンからして、闘った感じは普通のタマミツネと変わりなかった。タマミツネの亜種は未だ発見されていないし、体色が赤なら希少種やヌシ個体とも違うだろう。だがどうも気にかかる」

「それで、討伐しに行くのですか？」

「ああ。悪いが、しばらく留守にするから家と望寧を頼む。ここから十里以上離れた村なら、馬に乗ったとしても二、三泊は掛かるだろう」

強情な妻は、毎度矢羽が家を立つその瞬間まで、心配や甘えを顔には出さない。むつつりとした紫苑の表情にふと頬を緩ませた矢羽が、黙ってその頭に手を触れると、後ろ

にいた三日月がのほほんと言った。

「なに。紫苑殿、心配はいらん。俺も夫君に同行するからな」

「えっ、三日月も行くのか？」

「戦力は多いに越したことはないだろう。それとも、組合に正式所属していない者の参加は何か不都合があるか？」

「いや、うちのギルドはそのへん緩いから、何も言われねえとは思うけど」

確かに、近くの狩場に行く時に三日月を伴って狩猟をしたことも、今までに何度かある。おかげで動きの癖もある程度はわかつているし、その太刀筋も見慣れているが、ここまで遠く離れた地へ獲物を一緒に狩りに行くのは初めてだ。

ギルドで依頼を受けた時には、一瞬誘おうかという考えが頭を掠めたものの、さすがついては来ないかと思ひ直したのだが、当の本人はのほほんとしながらも同行する気は満々のようだったので、矢羽は武具や宿泊の準備を済ませてから、紫苑に留守を任せて出立したのだった。

到着先の村で宿を取り、ついでに依頼主たちから詳細な話を聞く。

件のタマミツネは、数日前から水の豊かなこの土地に現れて、山の麓に生えている稲を荒らしたり、滝壺の猟場に仕掛けた網を壊したり、氾濫対策に築いた堤防を破壊した

りと、好き放題を尽くしているらしい。

「何にせよ、あいつは体がでかいものだからさあ……奴にや悪気はないのかもしれないが、移動しただけで辺りは水浸しだし、穀物庫や櫓は壊されるし、被害甚大よ。どうにかならんもんかねえ」

「まあねえ……うちの旦那がちよつくら懲らしめようとしようもんなら、岩場まで吹き飛んでえらいことになったわ。最近は、どうもこつちに来る頻度が増えたよねえ」

「ふむ?」ということは、以前にも出たことがあるということか?」

三日月の質問に、顔を見合わせた村人衆は、宿の一階にある囲炉裏端でこくりと頷いた。最初こそ三日月の見慣れぬ衣装を物珍しがっていたが、その物腰の柔らかさと色男ぶりに心を開いてくれたようで、すぐさま色々な事を教えてくれる。

「そうよ。多分あいつと同じ奴だと思っただけ……まるで幽霊みたいよねえ」

「幽霊?」

その手の話が実は苦手な矢羽が、びくつと体を震わせる。

モンスターならば殺せばいい。だが、幽霊なら話は別だ。武器の通用しない相手にどう手を出せばいいのかと恐々としている間にも、村人達は好き勝手話していた。

「おいら達、前にも何回か腕の立つハンターさんに討伐を依頼した事があるんだが、どういうわけか、みんな口を揃えて『殺せねえ』って言うんだよ。確かに討伐したはずなの

に、素材を剥ぎ取ろうとするや否や、煙みたいになえちまうんだと。罨にも掛からねえ」「ハンターさん達が戻って来てから村は静かになるから、本当に追い払ってくれてるとは思うんだけどねえ。けど、しばらく間が空くとどこからともなくまた現れる。その度にうちらは色んな人に討伐を依頼してて、その繰り返しのよ」

「まるでイタチごっこだなあ」

朗らかに茶を啜りながら言った三日月に、村人がまさしくと言った調子で頷いてい

る。「青い顔して戻ってくるハンターさん達が、揃いも揃って嘘ついてるとも思えねえしなあ。事実、俺らだって被害を受けてるわけだし。ちよいと不気味な依頼ではあるが、引き受けてもらえるかね？」

「ここまで来ておきながら今更嫌だとも言えず、矢羽はせいぜい内心の臆病さを悟られぬように頷いてみせるのが、精一杯であった。」

「しかし参ったな。そんな曰く付きのタマミツネだったとは……」

「なに。剥ぎ取ろうとしたら消えた」ということは、正体が何であれ、そこまでは普段と同じ狩り方で対処ができるということであろう。俺らは普段通りに振る舞えば良いだけだ」

「そうは言っても！ その正体って奴が問題なんだろう！」

移動と聞き込み調査に思いの外時間が掛かってしまい、矢羽と三日月がいざ狩場に出た時には、すっかり日が落ちて月が昇っていた。

ばしやばしやと、水をかき分けて川を渡っていく足音が、いやに大きく響く。兩岸に生えた木々も黒々とその影を落とし、ざわざわと風に葉を鳴らしながら、静まり返った夜の森に不気味な雰囲気を出していた。

本当はこんな時間に狩りになど来たくなかったが、数日分の宿泊申請しかギルドにしない事を思えば、おちおち時間を無駄にもしてられない。

不意に、三日月と矢羽は川の間地点で動きを止めた。

川辺には小獣の姿もなく、人っこ一人いない丸石の川岸には、薄野原がその影を落とすばかり。今夜は三日月ゆえに光源はやや心許ないが、天気は良く見通しがいい。

「ふむ。近いようだな」

「ああ」

獲物の姿はないが、あの独特のピリつくような殺気が、先程からじつとりと体に纏わりついている。どこからともなく、唸り声が微かに聞こえてくるようだ。

気配を探りながら周囲を警戒し、少し川幅が狭くなつたところで、丁度モンスターが隠れるのに良さそうな茂みを、矢羽が警戒しながら岸に上がろうとした時だった。

「……!!!」

不意に激しく近づいてくる水音に勘づいて、矢羽は反射的に後方へ跳んだ。続いて危なげなく三日月が回避したその場には、川底に穴が空きそうなほどの衝撃があり、巨大な体軀と鱗がぬめぬめと燃えるように、水飛沫の中で赤く光っている。

ギロリと、翡翠にも似た冷たく恐ろしい瞳が、縦に長い顔の中で矢羽を射抜いた。

「……出やがったな」

即座に抜刀して、旋律を奏でる。矢羽の武器は狩猟笛。一律で笛と呼ばれているが、その形状は弦楽器のようなものから琴のようなものまで様々だ。巨大な楽器でモンスターの体を殴りつけ、尚且つ楽器の旋律で自己と味方の能力強化を行うという、武器としてはかなり使用法が珍しい部類に入る。

「それにしても、こいつ……!」

あまりの泳ぎの速さに、三日月と連携を取る暇もない。剣の音からして上手く立ち回ってはいるようだが、練炭が燃え盛るようなどす黒い赤の鱗に包まれた、やまたのおろち八岐大蛇さながらの巨軀に遮られ、相手の動きはほとんど見えなかった。これは、複数人で狩りに来ても苦労したはずだ。

引き絞られた矢のように、身を折り曲げてタマミツネが矢羽に標的を変え、襲いかかって来る。とつさに翔蟲を前方へ放ち、突進してくる相手とすれ違う形で、笛を振り

回しながら首筋に打撃を加えた。どすつ、という鈍い音に、やつとタママツネの悲鳴が上がる。

「矢羽。大事ないか」

「俺は大丈夫だ！」

肩を押さえながら、矢羽はその身丈ほどある笛を抱えて体勢を立て直した。すれ違いざまに幾らか負傷するものの、こちらも蟲の糸に引かれてそれなりの速度で移動しているので、突っ込んでくるモンスターの攻撃をいなしながら、一撃を加えることができ。真正面から突っ込むのは、矢羽の十八番とも言えるやり方だ。

「ちっ……小賢しいな」

ここに来て初めて放たれた激しい咆哮に、矢羽は思わず耳を塞ぎながら、川中で大口を開けるタママツネに呟いていた。

川幅が狭まってくる箇所まで襲って来なかったのは、ハンターを岸に追い立てるため。茂みや木々が豊富で、モンスターが身を隠すのに最適だと思われる川岸をハンターが警戒している間に、逃げ場を作らぬよう敢えて水の中を突っ切って、川のだ真ん中から襲いに掛かる。

どう考えても、過去の経験からハンターの動きを分析し、読み切って不意を突いていくとしか思えない行動だった。

おまけに、一度己に敵意を向けるハンターを認識した途端、本能的にすぐさま咆哮を上げてくるような大概のモンスターとは違い、ここまで鳴き声一つ上げず、徹頭徹尾闇夜に姿を隠すことに意識を向けていた。

狡猾だ。その上、その体軀からは信じられないくらいに動きが速い。足腰の筋肉も相当発達しているのだろう。

油断ならない気持ちで、矢羽は鬼火のような紫炎を上げる相棒を——禍ツ琵琶ノ幽鬼ウラザを構えた。

「三日月！ 頭の方は俺が引き受ける！ あんたは後ろを！」
「あいわかった」

一切の迷いもなく、三日月が走り出す。後ろに回り込もうとする三日月に視線を投げるタマミツネから、矢羽は気を逸らすため、思いつきり肺の中の息を笛に吹き込んだ。

「おらおら！ お前はこっちだ！」

おどろおどろしい戦慄が流れ、体中に力が漲るのを感じた。

吹き込んだ息と同時に、振り回した時の反動でも、楽器の胴体に入り込んだ風がその弦を打ち鳴らす。どすつ、と頭蓋を叩き割りそうな衝撃で振り下ろされる狩猟笛を、矢羽はまるで舞踏の供にするようにして、軽々と振り回しながら、ゴンゴンとタマミツネの肢体にぶつけ続けた。

怒ったタマミツネが、お得意の泡攻撃を次々口から吐き出して浴びせかけてくるが、矢羽は意に介さない。こちらが音で囿になつている間、毛深い尻尾の部位はガラ空きなのだ。

その隙に、背後から高く跳び上がった三日月が、尾を切り付けようと両腕を振り上げるが、まるでそれをわかつていたかのように、タマミツネはギロリと背後を睨み、振り返りもせずに巨大な尻尾をびしゃんと叩き付けた。岩に当たつて碎ける波のような衝撃波を受けた三日月は、もろに背後に吹っ飛ばされたが、水と泡に塗れた体を眺めながら、何事もなかったかのように立ち上がつて笑い出す。

「はっはっは。読まれてしまったか」

「ギャアアアアア！」

「おっと。笑つている場合ではないな」

潤滑液で生成される泡を巧みに利用するタマミツネは、とにかく水の中では移動が速い。四本の脚とくねらせた胴体を使い、吠え立てながら川中を蛇のように泳いで突進してくるタマミツネに、三日月は微笑を浮かべたまま対峙すると、身を翻して叩きつけてくる紫毛の尾を、最低限の動きでひらりと避けた。

そのまま全身でとぐろを巻いて回転し、泡と水を激しく巻き起こそうとするタマミツネの胴体を、三日月はとつとつと軽く蹴りながら宙へ舞い上がる。ひらりと宙返りした

三日月は、瞬間、彼を見失って動きを鈍らせたタマミツネの脳天に、力強い一閃を浴びせかけながら着地した。

どう、と倒れ伏して、突然の衝撃に目を回しているタマミツネを、矢羽は好機を得たりとばかりに殴りつける。

「手加減はできねえからな？」

ぼそりと呟いて、狩猟笛を勇ましく肩に担ぎ上げると、矢羽は笛の先端に取り付けたクナイを、タマミツネの左耳へ狂いなく叩き付けて打ち込んだ。

そのまま、クナイから伸びる糸で繋がった琵琶形の笛を、ぶおんと振り回して一回転させ、手元に引き寄せる。琵琶の弦を手で掻き鳴らせば、その体は怪しく煌めき、骨を砕き割るほどの強烈な音撃と旋律が、糸を通してタマミツネの全身に響き渡った。聴覚の優れているタマミツネに、これはかなり効くはずだ。

どんな形状をしていたとしても、狩猟笛とは「笛」である。故に、息を吹き込むのではなく直接弦に触れて奏でるなど、笛使いとしては邪道だと父親には散々言われたものだが、武の道に厳しいはずの矢羽の祖父だけは、何故か矢羽の我流に対して何も文句を言わなかった。

『やり方や武具は如何様であってもいい。ただ、どんな道であれ、自分が究めると決めたものは究めなさい。そして、正義と誠のためにその力を使え』と。

この指先が弦に触れ、初めて己で討伐した怨虎竜の調べを奏でる度、矢羽は頑固者だった祖父の教えを思い出すのだ。

「どわっ、どわっ。」

しかし、タマミツネもやられっぱなしではない。

眩暈から目覚めてすぐ身を起すと、己の耳を傷付けたクナイの糸を容赦なく引きき切り、牙を剥いて後ずさるなり、水鉄砲をこちらに向けて噴射した。

並の防具では気絶もあわやといった激しい水流に、矢羽が受け身を取って吹っ飛ばされてくる間に、タマミツネは身を翻して川の上流へと向かって行ったのだった。

幽霊タマミツネの怪《第二話》

「くっそお……逃したか」

「ううむ。なかなか手酷くやられたな」

「三日月、怪我は……？」

「俺は見ての通りだ。何、多少衣服を破いたくらいで支障はない。紫苑殿には、繕い物を増やすなど怒られてしまうがなあ」

主にタマミツネの背後を狙っていた弊害か、鋭い背鱗や硬い尻尾の装甲部に切り裂かれた衣装の下から三日月の肌が見えていたが、本人は乱れた髪を直しながら飄々としていた。

回復薬を分け合って一息入れてから、矢羽と三日月はタマミツネが逃げた方角を追って上流へと向かった。

「しかし……あいつ、確かに凶暴だが、村の者が言うほど悪戯好きには見えなかったけどなあ」

思わずそう呟いて、矢羽が目の前の枝を掻き分ける。後方を守っていた三日月が、興

味を持ったように相槌を打ってきた。

「ほう？」

「噂の通り体表の赤みは強かったが、普通、タマミツネの鰭や耳が変色するのは、興奮や怒り状態で、あいつらの血色が増すからだ。だが見た限り、あいつの動きは冷静さを欠いてはいない。怒り心頭でもないのに俺らにこれだけの傷を負わせたとすれば、相当の手練だぞ。そんな奴が、無作為に村の物を荒らしたりするなど……俺には、どうも考えられんのだが」

「おぬしはどう見る？」

「……まだわからん。だが、何か……本当に幽霊の類と関わりがあるのなら、何者かがあいつに取り憑いている、とか」

自分で予想しておきながら、矢羽は馬鹿げた妄想にぶるぶると首を振った。

この世界のモンスターは、確かに生態が奇怪なものが多いとはいえ、どれも理屈ある存在なのだ。幽霊や怨霊に憑かれるなど、突拍子もなさすぎる。

「いたな。さて、どう仕掛けたものか」

ふと、背後を歩いていた三日月がそう声を掛けた。

今度は、こちらが獲物を発見するのが先だった。崖下にある滝壺のあたりで、タマミツネは周囲を警戒しつつも魚を獲っている。先ほどよりは、少し落ち着いた様子だ。

どう追い詰めるか矢羽が策を練っていたその時だった。ぱきり、と背後で枝を踏む音がして、矢羽はぼつと振り返った。

「誰だツッ!?」

その言葉が終わりもしないうちに、黒い煙を纏ったクナイが飛んでくる。

抜き身でそれをかんつと弾いた三日月は、鋭く目を細めて、茂みの奥を見やった。ぞろぞろと、怪しげな黒い靄を纏った者達が一斉に森の中へ立ち上がる。

「お、おい、なんだよ、これ……」

見たこともない、全身が黒に染まった連中だった。それぞれに、大太刀や薙刀など、物騒な武器を構えて唸りを上げている。傘や甲冑を各々纏った彼らの筋肉や体の作りは、あまりにゴツゴツとしていておよそ人間とも思えず、中には四本足の異形や、宙に浮いている小魚のような化け物もいる。

矢羽によくわかったのは、彼らがおそらく話の通じる連中ではないという事と、明確にこちらに敵意を向けているという事だけだった。

「ギャアアアア！」

不意に鋭い声が上がって、矢羽は再度、滝壺の方をハツと振り返った。

こちらに気付かれたかと思つたが、そうではない。タマミツネは、何と闘っているわけでもないのに、湖の中でドタバタと身をのたうち回らせながら、苦しんでいたのだ。

その体を、うつすらと覆う黒い靄が見える。その気配は、黒甲冑の者達とよく似通っていた。

余談なく、光る太刀を構えながら、三日月が敵から目を離さずに言う。

「これは、とんだ邪魔が入ってしまったなあ。矢羽よ、すまんが先に行っておいてはくれまいか。俺は少々、野暮用を片付けねばならん」

「えええ!」

言うや否や、叫び声を上げてこちらに突進してくる黒甲冑の胴体を、三日月が一閃して薙ぎ払う。

どう、と崩れては塵になって消える敵軍の中で、三日月は雄々しく、かつ華麗に刀を振り回していた。角を生やした黒甲冑の者らの動きはどう見ても人間離れしているが、三日月のそれも引けを取らない。唾然と見守る矢羽の油断について、気が付けばすぐ側まで、刀を振り上げた甲冑が迫っていた。

「うわっ……!」

痛みを覚悟して目を閉じた瞬間、悲鳴を上げたのは甲冑の敵の方だった。

矢羽が目を開ければ、遠くから三日月のぶん投げた刀に喉を貫かれた敵が、木の幹にもたれかかったまま、塵になって崩れ落ちていく。

生身のまま、腕や足で敵を捌きながらこちらへ向かってきた三日月は、突き刺さった

刀を引き抜き、いつもと変わらぬ笑みで微笑んだ。

「早く行け。お前が止めねば、奴はまた下流へ降りてしまうかもしれないだろう?」
「つたく……死ぬなよ!」

仕方なく三日月を置いて、矢羽は草叢から湖へと走り出す。

太く長い体でのたうち回るタマミツネは、あの滑る泡を四方八方に吐き出しながら、激しく水を巻き上げている。浅い湖底は抉れ、水が当たった岩が砕けそうな勢いだ。

何も無い場所だからまだいいものの、この体躯で田畑や櫓の側で暴れられれば、確かに小さな村の設備などひとたまりもないだろう。

(何としても、ここに仕留めるしかない)

噂が本当かは知らないが、噂通りであるなら倒すことはできるはずだ。息を吹き込んで命を宿し、紫の光を発して燃え盛る相棒の柄に、矢羽は軽く口付けてから、じやらんと琵琶の弦を鳴らした。

泡の中で旋回を繰り返していたタマミツネが、音に反応して振り返る。ギロリとした目は血のような赤に爛々と輝いており、常軌を逸した殺気が、黒い煙と共に立ち昇った。先ほどの翠の目をしていた時とは、顔つきが違う。しかし、矢羽は躊躇わなかった。

「いくら脅されようと、俺は紫苑と望寧のところには、生きて帰らななきゃならねえんでね。幽霊なんぞにビビってたまるかよ!」

突進を間一髪かわし、大きく身を反らせながら飛びかかろうとするタマミツネの腹部へと、矢羽は勇猛果敢に翔蟲を放って飛び込む。内臓を殴りつける度、粉の詰まった袋をはたいた時のように、その体から黒い靄が上がって、矢羽は目を見張った。

(これは……?)

初めての経験に戸惑いながらも、殊更高的位置にある頭部ヘリーチが届くよう、矢羽は全身の筋肉と反動をうまく使い、笛を頭上へと振り回した。

びよびよとおと風が唸るような音が鳴り、太い笛の胴体がもろに頭部へ直撃したタマミツネは、怒りを露わにしながら牙を剥く。あつと思つた瞬間、その口から激しい水流が発射された。

旋回する水鉄砲の攻撃を受け、さらに地響きを立てながら振り下ろされた尻尾の一撃を食らい、湖へ叩きつけられた矢羽の体。目の前に翳された鋭い爪に、何とか躲そうと身を振ったその時、タマミツネが叫び声を上げながらひっくり返った。

「矢羽。大丈夫か」

「三日月……!」

血を振り落としながら、湖水へと着地した三日月がこちらを振り返る。そこには分断された尻尾と、傍で痛みに振れるタマミツネの姿があり、その体内から次々と、黒い靄が空へと吸い込まれていくのが見えた。

「遅くなつてすまなかつた。一気に畳み掛けるぞ」

「ああ!」

再度、旋律で己を奮い立たせて立ち上がり、矢羽は笛を担いだままで一気に突進する。月を背景に、すらりとした刀身を持ち上げた三日月は、目にも止まらぬ速さで、暴れ回るタマミツネの胴体を切り裂いた。あまりの見事さに、息をすることすら忘れたような様子でバランスを崩したタマミツネの首元へと、矢羽は笛を叩きつける。

「でやあああああつ!」

禍々しく奏でる禍ツ琵琶の旋律に気押されたかのように、タマミツネのか細い悲鳴が止んだ。どう、と激しい音がして、その体が水中に没し辺りが静まり返る。

「終わった……か……?」

「そのようだな」

ボロボロの体を引き摺りながら、改めて矢羽は、狩猟したタマミツネを観察した。

頭から尻尾の先あたりまでを歩いてみると、七十尺はゆうに超えているだろうか。メートル法に換算すれば二十メートル近くだ。

心なしか、体からあの黒い煙が抜けるに従つて、鱗や鱗の赤みも鮮やかになり、美しさを取り戻していったような気がする。

そう思つて矢羽が鱗に触れた途端、タマミツネの体は、そこからぱらぱらと崩れて風

に舞い始めた。岩が風化するように、あるいは灰が吹き散らかされていくようにして、瞬く間に矢羽たちの前から削れてなくなっていく。それと同時に、削れたはずの川底が不思議な光に包まれ、時間が巻き戻ったかのように元通りになった。

「な……おい……い…… あいつ、消えちまった……！ 本当にこんな事が……」

狩猟笛の柄を携えたままで、啞然と矢羽が立ち尽くす。確かに、この手にモンスターにトドメを刺した時の、絶命の感覚があった。それなのに、煙のように消えてしまった。鬨った痕跡も、あの大柄な体も、綺麗さっぱりと。

共に斬撃を加えたはずの三日月は、矢羽に反して慌てることもなく、まるでそれが最初からわかっていた事であるかのように、月夜の元でからりと笑っている。

「はっはっは。消えてしまったなあ」

「笑ってる場合か！ ああもう、あんたまた服も泡でドロドロだし……」

強い御仁であることに間違いはないが、どうにも世話が焼ける。

苛立たしげに川の水を掛けて、衣服についた泡やられの部分を流し取る矢羽のするに任せていた三日月は、嬉しげに微笑みながら、その神秘的な瞳を細めて、矢羽にこう問い掛けた。

「なあ、矢羽よ。一つ、お前に尋ねてみたいことがあるのだが。その上で、俺に付き合っ
てはくれぬか」

「な……何だよ」

「ここ」の近くで、忘れ去られている古びた祠のような場所はないか？」

三日月の問いかけは、およそ狩猟ともタマミツネとも、何の関係もなさそうなもので、思いもがけぬ質問に、矢羽は水に濡らした手拭いをその手に握ったまま、ぽかんと三日月の顔を見上げたのだった。

幽霊タマミツネの怪 《第三話》

「あつた……本当に祠だ」

あれから、麓の村に戻つてこの付近の祠や廟について尋ねてみた。

依頼されていたタマミツネの狩猟に関しては、亡骸すら残らなかつたために何とも歯切れの悪い報告をせざるを得なかつたものの、それでも追い払つたというそれだけで、幸い村人たちは大いに助かつたらしく喜んでくれた。

祠に関しては、伝承や伝説に詳しい者が村におらず、情報を得るのに多少難儀したが、ある家にいた長老格の者がうまく捕まり、その場で矢羽達に話を聞かせてくれた。いわく、村を流れる川の水源に当たる部分に、古くから神社があつたのだという。

由緒のある場所のはずだったが、村の居住区が次第に山中から麓へと移り変わり、なおかつその社自体が滝上のかかなり険しい場所にあるため、だんだんと人が寄り付かなくなつたということだった。今は管理する者もおらず、荒れ放題らしい。

そこで矢羽と三日月は、タマミツネと最後に闘つた滝のある場所へ赴くと、麓から翔蟲を駆使して崖を登り、険しい山道を歩いて水源を目指した。たしかに過酷な道で、こ

こを日常的に通るのはモンスターと修行者くらいだろうというくらい荒れている。恐らくは登山道があつたであろう場所は、既にすっかりぼうぼうと生えた草で埋まり、人が作つた道も、獣道すら影も形もない。

それがかえつて、矢羽には不気味だつた。人間はともかく、モンスターすらもこのあたりに寄つつかないということなのだろうか。登れば登るほど、空気は澄んでいるのに、どこか寒々とした感覚が身を這い上つてくる。

途中で枝を切つて作つた杖を頼りに、矢羽と三日月が水流の頂点まで登り切ると、不意に目の前が開けた。岩を這う苔と蔦に周囲を囲まれ、こんこんと湧く翠色の水面を湛えた、水源地が現れる。かきりと生い茂る草を掻き分け、一礼を拝すると、三日月は岩の間から落ちて小川を形成する清水の流れに、両手を浸した。

「一口頂こう。源流の水は一段と澄んでいるからなあ。旅に疲れた体には沁みる」
「ああ。美味しいな」

元々、この麓の村に住む住民たちは、農業用水や生活用水や飲用にと、この川が齎す恩恵を大いに生かして生活してきた。だからこそ、悪さをしに現れるタマミツネには手を焼いていたのだらう。下流で飲むのと遜色ない味わいだが、確かにここまで登つてくる間に乾き切つた喉から腹に滑り落ちる水の冷たさは、矢羽には格段に快く感じられた。

「ん……?」

口元を拭った矢羽は、ふと顔を上げ、すぐ傍でかさかさとして揺れる蔦の葉に目をやった。水源のすぐ横あたり、木々に埋没するような塊が一つ、不自然に盛り上がっている。大きな岩か何かと思つたが、よく目を凝らしてみれば、朽ちたそれは人の手で造られた建物のようだった。

「まさか、神社つてこれか? 祀られていたなんて思えないほどボロボロだぞ」
「そのようだなあ」

切なげに目を細めた三日月は、立ち上がって草に覆われた扉をひと撫でする。

ここまで来る間、鳥居すら見かけなかったのだ。既に風化して、朽ち果ててしまったのかもしれない。回り込んで見れば、この建物も既に屋根や側面は半壊し、扉の部分だけがハリボテのように奇跡的に残っている。

「まったく、罰当たりな……」

そう呟いて矢羽が三日月の隣に立ち、同じように傾いだ扉に触れた瞬間。
周囲の空気が変わった。

「ん……?!?」

清浄な土と水の匂いは消え、変わりに湿った木材とカビの香りが鼻をつく。瞬きを数度とせぬ間に、三日月と矢羽はえも言われぬ空間に迷い込んでいた。目の前には、朽ち

たまま寂しく風に揺れるしめ縄飾りと賽銭箱。入った覚えもないのに、朽ちているはずの社の境内にいた。ガアガアと鳥が鳴き喚き、赤色と化した空に呆然としながら、矢羽が狼狽えて武器を握りしめる。

「こ、これは……？ 俺たち、いつの間に」

「ふむ。ここの社の主は、よほど俺たちをここに招きたがつていたようだなあ」

奇妙な現象にも相変わらず動じることなく、三日月はひとつ顎を撫で、ゆつくりと拝殿から本殿の方へと回り込んだ。一歩進むごとに、足元に纏わりつく空気が重苦しくなり、矢羽は生唾を飲んだ。いる。この先に、ハンターや人間の力ではどうにもならない何か。そのくらいは、靈感など皆無の矢羽にも、野生の勘で何となくはわかるのだ。

『俺に……近づくな。ここから、立ち去れ』

果ては、不気味な声までが地を這うように響き渡り、矢羽はひとつ悲鳴を上げた。

『失せろ……失せろ!!』

「お……おい。なんかめっちゃ怒られてるみたいだぞ。大丈夫なのか？ 三日月」

「なに。案ずることはない。俺は、こやつを迎えにここまでやって来たのだからな」

意味深な呟きと、余裕めいた慈悲深い微笑みに、矢羽は自らの置かれた状況も忘れて

三日月の表情に魅入った。

その時。本殿の扉がガタガタと鳴り、怪しげな黒い靄が社を包み込む。その感覚に、

矢羽は覚えがあつた。

（この煙……あの時のタママツネの!?）

斬り込んだ時、微かにその体から上がった煙。その何十倍も強力そうな靄が、扉の前で力を溜めるようにぐるぐる渦巻いている。当たれば即座に気絶してしまいそうだ。そこへ向かつて、三日月は袖の下から何かを摘んで取り出すと、軽やかに掛け声を上げながら放つた。

「はいっ」

黄金の矢のような——三日月が空から舞い降りる時にも似たその螺旋状の煌めきは、花びらのように矢羽には見えた。筋を描いたその光が一直線に社に吸い込まれた途端、衝撃波を放ちながら両開きに本殿の扉が開く。バンツという大きな音と共に、一陣の風が吹き抜け、邪悪な霧を瞬く間に蹴散らして霧消させた。真正面から吹きつけた風の大きさに思わず目を閉じてから、矢羽は上げていた腕を下ろし、幾らか空気の澱みが消えた周囲を見渡す。

「……これは……?」

「主に頂いた札に、俺の神気を込めて御霊みたまを封じた。これで、奴もしばらくは身動きが取れぬだろう」

三日月が剣以外のもので化け物を退けた事にも啞然としてしまったが、この本殿の中

に封じられているものとは、一体何なのか。興味と恐ろしさの両方に駆られながら、矢羽は三日月の後ろについて階段を上がり、そろりと扉の中を覗き込んだ。

四方を壁に囲まれた本殿はしんと静まり返っており、蠟燭の明かりもない。ただ、ところどころ朽ちた木の天井の隙間から、月の明かりが揺れるように入り込んでくる。

その中を歩み、中央の壁際にある祀り上げられた衣装棚のようなものを、矢羽は三日月と共に見上げた。観音開きの扉の中央に、金色の桜のような花びらが、幾つか貼られている。これが、三日月の先ほど言っていた「札」というものらしい。

その効力と邪気の薄さに、矢羽がそつと胸を撫で下ろすや否や。どんどんどんと激しく扉を叩く音と激しい鈴の音に、矢羽は再び心臓を縮み上がらせる羽目になった。木の箱を壊しそうな勢いで、中で何かが暴れ回っている。

その激しさに、流石の三日月でさえ一瞬きよとんとした顔をしたが、すぐにあの朗らかな笑みを取り戻して、すらりと腰の刀を抜いた。

「はっはっは。こいつは、なかなか威勢が良いなあ。矢羽。少し下がっている」「え、ええ……いいけどよ、気をつけろよ」

この状況下に笑える三日月の胆力が一番恐ろしいかもしれない、と思いつながら、矢羽はじりじりと後ずさる。

三日月が刀身を構えた瞬間、合図を受けたかのように、はらりと扉を封じていた花び

らが外れた。鉄砲玉のようにその中から飛び出してくる黒い影を、三日月はばさりと真つ二つに切る。

つんぎくような生き物の悲鳴が響き渡り、矢羽が思わず耳を塞いだところで、三日月は袖の中からひらりと別な札を数枚出すと、それを空に放ち、風を巻き起こすかのよう
に剣を一閃風いだ。

ひゆうつと空を切る音がして、意思を持ったような動きで、札が衣装棚の中へ次々吸い込まれていく。やがて、激しく鳴っていた箱の動きは止まり、矢羽ははつと息を吸い込んだ瞬間に、固唾を飲んで見守っていた自分の目を上げた。

「……」

そこは元通りの、寂れた水源の敷地内だった。頭上には、途切れた雲と穏やかな三日月の姿がある。

深呼吸して周囲を見渡せば、恐ろしい空間は消え失せ、いつの間にかやら朽ちた扉の内側の、既に草がぼうぼうに生えた社の跡地に立っていた矢羽たちの目の前には、扉の壊れた祠があった。縦長に大きく、完全に風化してはいるが、先ほど社の幻の中で見た、あの衣装棚と同じものだ。

「これは……」

「矢羽。これが、俺たちの狩っていたタママツネの正体だ」

ちりん、からん、と寂しげな音がして、壊れた扉から三日月の腕の中に、何か倒れ込んでくる。封印の札が貼られたそれは、驚くべきことに、矢羽にも見覚えのある物体だった。

「これは、コトノハナクテ……？ ただの狩猟笛が、どうしてこんなところに」
狐鈴コトノハナクテ。

和傘のような形の芯に、三段の鈴を取り付けて作られた狩猟笛の一種だ。タマミツネの鱗や爪、体毛などの素材を元に鍛えられている。

この狩猟笛は随分とポロポロになっていたが、その形からコトノハナクテであることは明らかだった。傘の色は禿げ、柄の皮には水が染み入って変色し、経年の劣化でお世辞にも綺麗なものとは言えない。傘と鈴とを繋ぐ紐は今にもごとりと音を立てて千切れそうなほど古くなっているし、装飾品の傷みも酷いものだったが、それでも尚形を保っているのは、これが丁寧に作られた武器だからだろう。

よく見ると、鈴の形が矢羽の見知ったコトノハナクテとはいささか異なっていた。異国情緒を感じるそれは、矢羽と同じように、もしかすると別の世界から渡ってきたものなのかもしれない。

固唾を飲む矢羽の側で、三日月はどこか切なそうに目を細めながら、その得体の知れない笛をそつと撫でた。仄かな月明かりの中で静かに鈴が鳴るが、禍々しい気配は感じ

られない。今やすっかり大人しくなったその笛を見つめながら、矢羽が躊躇いがちに口を開く。

「さつき神社の幻影の中で聞こえた『失せろ』という声は、もしかすると……」

「こやつの声であろうなあ」

「俺たちの討伐しようとしていたタマミツネは、この狩猟笛なのか？」

「うむ。この笛の元となったタマミツネ……いわば、この武具の付喪神だな。俺と同じように」

そう言って微笑む三日月に、矢羽は思わずはっとして背筋を伸ばす。

そよそよと草を撫でる風に煽られ、三日月の群青の狩衣の袖が短冊のように揺れた。生命力溢れる荒れた草地を背後に、笑みを浮かべる神々しい佇まいを見つめ、矢羽は問いかける。

「三日月宗近……名前を聞いた時から、もしやと思っていた。俺はこの世界に転生して長いが、前世の日本での記憶はうつすらとある。あんたは、俺が前世で若かりし頃にも、その名を耳にしたことがあるくらいの名刀だった。

……どうりで人間離れしているはずだ。あんたは、付喪神だったんだな」

「はっは。何、刀の中でも、とりわけ長い年月を過ごしてきただけのこと。俺は、ただのじじい」

とても信じられない話だが、今の矢羽はそれをすんなりと受け入れられてしまうほどに、三日月の並外れた体術や摩訶不思議な力を何度も目にしてしまっている。

朗らかに肩を反らして笑う三日月の前で、矢羽は小さく肩をすくめた。

「それで？ そんな付喪神様が、この世界に何の用なんだ。まさか、うちの望寧もねを可愛がりに来るのが当初の目的だったなんてことはねえだろう？」

「はっはっは、孫娘のようでも何とも和んだがな。それはさておき、俺があのだ社で言ったことを覚えてるか」

「確か……迎えに来た、と」

「その通りだ。俺の今の主は、少々変わったお人だな。この札には、俺たち刀剣の神氣と融合させることで、付喪神の御霊を一時的に封じる力がある。俺は主から、この札を使つて荒ぶる御霊を鎮め、こちらの本丸へ連れて来いと仰せつかった。

まあ、本体がどこにあるのかを突き止めるには手間取ってしまった故、お前の力を借りたがな」

説明されても何とも不思議なことばかりで、矢羽は首を傾げたが、ひとまずタママツネの一件は、これで本当に片がついたらしい。

「まるで、この笛の付喪神が最初から暴走することがわかっていたような言い草だな。あんたの主とは一体」

「何、先ほども言ったであらう、少し不思議なお方なのだ。歴史を守るため、俺たちを束ねて戦っている。……が、そうとも思えぬほど、普段はおつとりと、可愛らしい方だなあ。心を痛めた者や、助けを求める者をついつい放っておけなくなってしまう。それは、相手が人間であれ付喪神であれ、同じなのだろう。いやはや、何とも困ったお方よ」

そう語る三日月は、これ以上ないほど愛おしげに目を緩ませ、ちつとも困っていないさそうな口ぶりで、手元の狩猟笛を抱え直した。その仕草だけで、三日月の言う主への忠愛ぶりが窺えるというものだ。

鈍く光を放つ古い鈴に、三日月は優しく撫でるように触れながら囁きかけた。その瞳に、どことなく悲しげな色が滲む。

「おぬしは『失せろ』と言っていたが……それはおぬしの悲鳴のようなものであろう？

泡狐竜よ」

是とも否とも返さずに、ただ鈴が風に鳴り、独特の音色を奏でる。あの黒い邪のようなものも三日月が切り捨てた際、響き渡った恐ろしげな鳴き声を思い出しながら、矢羽はその様をじつと見つめていた。

下山するには日が暮れすぎってしまったので、その日はそこで簡易的なテントを張り、野宿の支度をするようになった。念の為に笛を背負ったままだが、周辺の草を刈り、焚

き火用の枝を集める三日月の所作は軽やかだ。節の多い枝を拾い上げながら、三日月ののんびりと矢羽に説明してくれた。

「おそらくは、この笛が神社の御神体であつたはずだ。鈴は神楽舞にも使われよう？」

誰かが、泡狐竜を龍神に見立てて奉納したのであろうなあ」

「ああ、なるほど……川沿いの村にとって、治水は死活問題だからな。水域に棲むタマミツネそのものを、水神として祀り上げる習慣があつたとしても不思議はない。それでご利益を忘れちまつて今に至る……つて感じか」

勝手に祀り上げておきながら祠の改修や掃除もせず、放置され忘れ去られていれば、それは怨霊化するほど恨みも買うはずだ。

過去の世代の話であれば、今住んでいる住民たちに直接の罪はないのかもしれないが、昔は感謝されていた存在が、お役が済んだ途端、今や疎ましがられ追い払われる対象になるとは。矢羽はやや呆れた心持ちで、負の遺産と化してしまったコトノハナクテをするりと褐色の掌で撫でた。

「だが、あの黒甲冑の者達は？ 村の者と何か関係があるのか？」

「いや……おぬしらの歴史には関わりのないことゆえ、詳しくは話せんが、あやつらは歴史に干渉するために、このような怨念を利用しようとする者達だ。この世界に棲む聡い鳥獣の、積もりに積もった負の感情は、奴らにとって利となり武器となる。それを未然

に防ぐために、俺は主からこの世界に派遣された」

「なるほどな……付喪神を操っていたのは、幽霊じゃなくあいつらの仕業だったわけか。だとしたら、あのタマミツネは暴走を始める前は、大人しい個体だったのかもしんねえな。狩りの時の言動から、何となく想像がつく」

目を細めていた三日月は、ため息をついて頷いてから、地面の枝を拾い続ける。

「村の民達が、『何度討伐を依頼しても、いつの間にか川まで戻って来る』『どんな狩人にも倒すことができない』と言っていただろう」

「あれは、本体じゃなくて実体化した付喪神モンスターを叩いていたから……だな？ 何度討伐したとしても、コトノハナクテという狩猟笛が存在している限り、怨霊は再び現れる。元々生き物として実体が存在するわけではないから、骸も残らなかつた」

「そういうことだ。やはりおぬしは聡いなあ」

矢羽を見て嬉しそうに微笑んだ三日月は、抱えた枝をキャンプの前に持つてくる。藻草で火種を起こした矢羽が、枯れ草から枝の山に点火すると、闇夜を明るく照らすような炎が燃え上がった。

舐めるような赤色に頬を照らされる中、焚き火の前に座つて手持ちの酒を三日月と酌み交わし、一口煽りながら矢羽が呟く。

「しかし…… “一時的に” って事は、札の力で抑え込んでいただけなんだろう、今は。効

果が切れれば、またさつきみたいに暴れ出すんじゃないかねえのか。大丈夫なのか、あんたの本丸とやらは」

「ふむ……本体の損傷は、御霊の精神や肉体の状態に直接作用する。修理できれば、多少は抑制もしやすいかと思うのだが」

「とは言っても、俺の街じゃ、ここまで錆び付いた笛を修理できるほどの腕前の鍛冶屋は見たことがないぞ。ここの近場にも、一軒とあるかどうか」

「であれば、俺の本丸に持ち帰って修理するでしょう。なに、心配ない、腕の立つ鍛冶屋の伝手はある。そのために、必要な素材を集めてくれる狩人の伝手もな」

意外なことを言い出した三日月に、矢羽は目を丸くした。

初めから、ハンターやこの世界の武器のことを知っていたのだろうか。けれど、おそらくはそれを追求したところで深くは語らないだろう、と踏んだ矢羽は、ただこう言うに止めておいた。

「そうか。タマミツネは、一頭討伐するにも骨が折れる。怪我をしないようにと、そのハンターにはよろしく伝えておいてくれ」

「是非とも伝えよう。おぬしのような有能な狩人に案じてもらえたとなれば、さぞかし喜ぶに違いない」

何故かそう断言した三日月の顔が、いやに嬉しそうなのは気のせいだろうか、と矢羽

は思いながら、今や旧友のように親睦を深めた三日月の盃へと、自らの盃の口をぶつけたのだった。

幕間～マルメロ家本丸の顕現事情～

「主。今帰つたぞ」

「おかえりなさい、三日月さん！」

転送用のゲートから本丸へ戻つた三日月が、召喚閣しょうかんかくではたきを振つて掃除している主へ声を掛けると、彼女は振り向きながらぱつと顔を輝かせ、ぱたぱたと入り口へ向かつて駆けてきた。

全面が土間で、何の変哲もないがらんとした建物だが、ここは彼女が付喪神の顕現や、特別な術式を行う時に用いている場所だ。少々薄暗いが、木材でこしらえた飴色の天井や壁はつやつやと輝き、祭壇からの蠟燭の灯りを反射している。

儀式場めいた雰囲気だが、体の弱い主は自らここへ来て顕現を行うよりも、寝込んでいる間に札に込めた靈力で、他の男士に代理を頼むことの方が多い。故にここへの出入りも特段禁止されてはおらず、清浄にこそしているものの、そこまで重大な秘密が隠されているというわけでもない。

夏用の薄い袴を風に揺らしてやってきた、この本丸の主こと紫咲ムラサキは、三日月に渡された狩猟笛に両腕を伸ばし、慎重に受け取つた。

「ごめんね。私の我儘で、殊更大変なこと頼んじやつて。大丈夫だった？」

「何の。俺もなかなか楽しめたぞ。ほれ、気をつけて運ぶといい」

「おつとと。大きいなあ、この子」

「主は小柄ゆえ、身に余るだろう。そこまで俺が運んでやろうか」

「いいの、大丈夫大丈夫。ここの真ん中くらいまでなら、何とか私でも動かせるから。一番最初に、私が運んであげたかったんだ」

ならされた土の床の中央に、巨大な円陣が描かれている。その陣に笛を抱えた紫咲がえつちらおつちらと近づくと、和傘状の狩猟笛からぶら下がっていた鈴が、何かに反応するかのようにぼうつと輝いた。

「ようこそ。いらつしやい」

初めて出迎えた刀剣男士にする時と同じように、紫咲は抱きしめた狩猟笛へ優しく静かに声を掛けると、大きな狩猟笛を陣の上へそつと横たえる。

愛おしいな目を注いで狩猟笛に触れていた紫咲は、しかしすぐに立ち上がり、三日月を傍へ招いてそのまま報告を聞くことにした。

「なるほど。遊行軍が……」

「とどころどころに出現する、退治せど倒し切れない妖獣の噂。主の読み通りであったなあ」

「私は、自分がモンハンの世界を覗き見してて、想像したことを口にしたただけだよ。まさか本当に、モンスターへの負の感情を遡行軍が利用しようとしたなんて」

「そこまでの知能を発達させる獣の数自体が、あの世界にはまだ少ない。人の願いや祈りさえ、歴史改変のために利用せんと四苦八苦しておる遡行軍の奴らが、ましてや獣のそれなどを容易く操れるとも思えんが……油断はできんな」

「今のところ、あちらの世界で実害が出ているのは、モンスターの『あらかみたま荒御霊』の暴走だけ。繰り返し出現するのが特徴だし、大抵の人は討伐できちやう範囲の強さに留まっているから、今は幽霊騒ぎで済んでるけど……。もし遡行軍が何らかの実験に成功して、暴れてる子達をさらに凶暴化させちやったら、死傷者も出るかもしれない。放つてはおけないよね。あーん、また仕事が増える」

「そう言つて、行儀悪くごろりと床に寝転んでしまう主を、三日月は微笑ましく、眩しそうな目で見つめていた。

本来、歴史改変による分岐ではなく、そもそもがこの人類の歴史からは大きく異なっている世界線・いわば別世界で起こる事件など、時の政府の管轄範囲内ではない。別世界の人間が死のうが生きようが、この世界の上での歴史を存続させることにのみ重きを置いてる政府にとっては、関係のないことなのだ。

その傘下で仕事を引き受けている紫咲にも、「遡行軍が関わっている」という口実がな

ければ、干渉の許可を得るのは難しかったであろう。それでも、多様な世界を渡り歩く不思議な力を持つ紫咲は、既にその世界を、そこに住む生き物達を、愛してしまつていた。世界が続く限り、傍にいて見守りたいと願う程度には。

そして、その途中で一匹のタマミツネの孤独を見た。

あのままでは、終わらない苦しみの中で荒ぶるままに身を滅ぼしてしまつたであろう御霊を、ここへ連れて来て欲しいと願つたのは、完全なる紫咲の我儘だ。

「紫咲」

その時、不意にひよいっと、召喚閣の扉の横から緋袴を着た影が覗いた。

矢羽によく似た褐色肌に、紫がかつた濃い黒髪的青年。綺麗に切り揃えた斜めのボブの下から、涼しげな薄青の瞳を向けた青年は、耳飾りを揺らしながら形よい唇を開いた。

「準備、できた？」

「夜翰^{ヨハネ}さん。うん、こっちは大丈夫。やるつか」

視線を合わせながらこくりと頷き、立ち上がった紫咲は夜翰の手に導かれながら、笛が置かれた円状の魔法陣の手前へ戻つた。紫咲が先に座ると、夜翰はその背後へやつて来て、紫咲の目を布で目隠ししてから、自分は円陣を挟んで紫咲の対になる位置へと移動し、正座で腰を下ろす。

夜翰の衣擦れの音が消えたのを合図に、二人はそのまま、片方の手を狩猟笛に触れ、片

手で印を結びながら、瞼を閉じて集中し始めた。どこからともなく、陣の中には不思議な光の粉が舞い、横たわっているだけの狩猟笛が、ふわりと飾り帯を風になびかせる。

そのまま、術に没入していく紫咲と夜輪を、開いた入り口から座って眺めている三日月の元へ、加州清光かしゅうきよみつと山姥切国広やまんばぎりくにひろがやって来た。そつと中の様子を覗き見て、加州が小声で呟く。

「主に文を渡そうと思つて持つて来たんだけど……今儀式中か」

「俺も、久方ぶりに戻つて来たのだから三日月に向かうの世界の話でも聞こうかと思つていたが……出直した方がいいな」

「いや。ここで静かに待つておる分には、構わんだろう。じきに終わるさ」

まるで双子の巫女のように、目を閉じて狩猟笛に宿る魂へと会話を試みる紫咲と夜輪の姿を、三人は入り口からじつと見つめていた。もつとも、小柄な紫咲よりも夜輪の方が身長は30センチ近く高いので、随分と頭の位置に差がある組み合わせではあつたが。

円陣の放つ黄金の輝きに、染め上げられる夜輪の黒髪を見ながら、加州がぼつりと言った。

「夜輪のやつ、随分様になつてるじゃん」

「あいつも、ここへ来てからかなり審神者代理としての腕を上げていたからな」

「いーなー、主と一緒じゃないと使えない術とか。俺妬いちやうんですけど」

「そう言うな。それに……これは危険な術なんだろう。夜翰の力と、主の持つ力の波長とが上手く合わなければ発動できず、御霊の強さに引きずられれば、精神がこちらの世界に戻つて来られなくなる可能性もある」

「……まあね。だから余計に、見守ることしかできないのが焦ったいんだけど」

「なに、案ずるな。主は、体は丈夫でなくとも、芯の強さは一等優れている。あの背に思いを託し、俺らはここで信じて待つとしよう」

三日月の言葉に、ひそひそと話し合っていた加州と山姥切は、こくりと頷いて口をつぐんだ。

透心術とうしんじゆつ

——心を見透かす術と呼ばれるそれは、審神者を務める紫咲と、元の世界では特別な「目」を持つ夜翰とが、魔法使い見習いである夜羽よるはや恵李えり朱すの力も借りながら編み出した術だった。

紫咲は、夜翰とは特別に強い繋がりがあつた。物の心を励起させ、その声を聞き取ることで紫咲は、物を透かしたり遠くの光景を見たりできる夜翰の「目」の力を借り受けながら、僅かな時間だけ、触れている物に宿つた魂の、過去の経験や感情を読み取ることができるとだ。

ただし、深く潜れば潜ろうとするほどに、対象への強い思い入れや霊力が必要となる。

紫咲一人でも、ある程度は魂の記憶を読み取ることが可能だが、安定して使うためには、発動時に二人一緒にいる事が望ましい。

あまりに魂の記憶や感情が強烈だと、精神の世界で迷ってしまったたり、戻って来られなくなったり、最悪術者が精神汚染を受ける危険性もある。二人一緒ならば、片方が巻き込まれてしまっても、片方が術を切って引き戻すことが可能なのだ。

やがて光が収まり、紫咲はふっと肩の力を抜いて、立てていた指を下ろした。頭の後ろで縛られていた目隠しの紐を、ゆっくりと解く。

術の発動中、魂の世界での光景を見るために必要な「霊視力」は、すべて夜翰が担っている。夜翰と繋がっている間、その力の代償として紫咲は視力を差し出しているため、術中は失明同然の状態だ。目を閉じていれば関係ないのだが、どうせ何も見えないならばと、瞼の裏の視界に集中できるよう、気持ちの切り替えも兼ねて時々こうして目隠しをしているのだった。

一段落ついたと見た加州が、入り口からすぐさま駆け寄ってくる。

「主。大丈夫？ 具合は悪くない？」

「うん。平気。心配してくれてありがとうね」

「まったく。夜翰がいるとはいえ、主も無茶をする。ほら、甘い炭酸水だ。巴形が入れてくれた」

「あはは、竹筒に入ってる！ 巴ちゃんも粋なことするねえ。ありがと、まんばちゃん」
竹の水筒に入った、ほのかに植物の香りが漂う炭酸水を、紫咲はストローで喉に流し込む。それを夜輸にも回し飲みできるよう渡してから、紫咲は言った。

「うん。大体、前に透心の術を使った時と同じ感じだったね。今回は、前よりもうちよつと昔のことまで見えた気もするけど、この子もまだボロボロだし、あとは本人の口から聞いた方が早いかな」

「あれ？ この笛に尋ねるのは、これが初めてじゃないの？」

「ああ。それはそうなんだけど……実は三日月さんが前帰って来た時に、幾つかモンスタアの落とし物を貰ってて、それに触ったことがあってね」

「ほれ。これだ」

三日月が懐から出して掌に乗せたものを、加州と山姥切は覗き見る。装飾品にすれば映えそうな、艶々した透明な鱗がその手に乗っていた。

「きれいなウロコ。これ、あの狩猟笛に宿ってるタマミツネの？」

「ああ。どうやら、顕現した体が消えてしまう前にこの手で拾ったものは、実体を伴って残るようだな」

「ふうん。俺は見たことないけど、このタマミツネ、きつとすつごい綺麗な奴なんだろうな」

「それはそれは美しかったぞ。月下の中の泡を纏った舞など、お前達にも見せてやりたいほどだ」

三日月の言葉に、山姥切は想像するように遠くを見、加州はほうと溜息をつく。その様子を見た紫咲は、悪戯っぽく微笑んでみせた。

「それじゃ、見せてあげようか」

「え？」

「主は一体、この笛をどうするつもりなんだ？」

山姥切に尋ねられて、紫咲はゆっくりと慎重に、体を使いながらコトノハナクテを立てて持ち上げる。

「ちよつと……試してみたい事がある。よっこいしよと。でも、それを試すにもこの笛の修復が先だから……夜翰さん、今日って望寧ちゃんこつちに来る日だっけ？」

「うん。てか、あんたが呼ばなくても、多分もうすぐ来ると思……」

夜翰が最後まで言わないうちに、部屋の外からばたばたと元気のいい足音が走ってくる。迷いなくこちらへ向かってきた足音の主は、ここにいる男衆よりは小柄ながらも、筋肉のついた体つきで、澆刺と駆け込んでくる。獣の素材でエキゾチックに装飾したTシャツとパンツというラフな格好から褐色の肌を露出させた彼女は、夜翰と年端の変わらぬ顔をぱあつと幼なげに輝かせながら、嬉しそうに三日月を見やった。

「三日じいじ！ 帰って来てたのか！ 会いたかったぞ！」
「おお、望寧。久方ぶりだな」

筋肉質な腕を回して飛びつくように思いつき抱きつかれ、重い重いと言いながらも、三日月は嬉しそうにその体を抱えて抱き締め返す。

過去のモンハン世界で、三日月が世話を焼いていた時から遙かに成長した姿——今やいっぴしのハンターであり、紫咲や夜翰の友人でもある樺望寧が、甘えを全開にして嬉しそうに三日月に頬を擦り寄せていた。

その様を、呆れたように夜翰は見守っている。

「つたく……あんたは、何歳になっても三日月さん相手には甘えん坊なんだね」

「むう。良いだろう、別に。甘えたい相手には好きなかだけ甘えれば良いと、紫咲が言っ
呉れたんだ。それに、紫咲に審神者の代理を引き受けて此処まで来たものの、幼い頃に
慕っていた祖父同然の相手と、まさかこんな所で再会出来るとは思わなかった。時空を
超えるとは何とも不思議な経験だが、紫咲や夜翰と出逢えたのも、此処の皆と出逢えた
のも、何かの縁だろう」

三日月宗近が飛んでいたのは、ちょうどまだ望寧が幼かった頃のモンハン世界の時空
だった。あまり干渉せぬよう、それ以降の時代には三日月は樺一家と関わりを持たない
ようにしていたが、望寧は時々家に現れていた御仁の記憶をしつかり覚えていたらし

い。

後に夢渡りでモンハン世界へやって来た紫咲と出逢い、親しくなつて彼女の術でこの本丸へと誘われ、三日月と再会しその正体を知った時には、大いに驚きながらも喜んでいた。

以降、彼女の故郷である世界とこの本丸とを自由に行き来しながら、紫咲の審神者業にも力を貸してくれているという訳である。

夜翰に向かつて唇を尖らせていた望寧は、抱きついていて腕を解いて、今度は嬉しうに紫咲の側へとびったり引つ付くと、その顔を覗き込んだ。

「それで？ 僕を呼んだのは、そのコトノハナクテと何か関係が？ 随分と年季が入つた狩猟笛のようだが」

「ん。あのね……この笛を、望寧ちゃんに直して欲しいの」

からん、と涼しげに音色を鳴らす狩猟笛と紫咲を、望寧は左右色違いの瞳で驚いたように見比べた。紫咲は静かに続ける。

「私自身はそつちの世界に行くことができないし、よしんば行けたとして、武器の扱いら覚束ないだろうしね。モンスターを狩るなんてとてもとても」

でも、今望寧ちゃんが住んでるカムラの里には、優秀な鍛冶屋のハモンさんがいる。それに、望寧ちゃんなら修理に必要な素材を狩つてこられる。……タマミツネの笛を直

すのに、タマミツネを狩って来いなんて酷なお願いをしているのはわかってるんだけどお！でももし、里の周辺で悪さをして困らせてる子とかがいれば、そのお……」

「あはは。気にするな。紫咲は本当にタマミツネが好きなんだな」

紫咲は、狩りに出向く望寧とは視界を共有できる。ひよんなきっかけで、紫咲との視界共有能力を持つ夜翰が、世界線を超えて望寧の体に憑依できるようになってしまったからだ。

それゆえ、紫咲は望寧の狩場において、全体を見渡す監督業のような事もやっているのだが、その過程ですっかり紫咲がタマミツネというモンスターに惚れ込んでしまった事を知っている望寧は、からからと太陽のような笑いを浮かべて、紫咲の肩を叩いた。

「僕らとて、無作為にモンスターを殺戮する為に、武器を振るう訳ではないさ。素材集めの為の戦闘や、人間の生活圏確保を目的とした討伐に赴くにも、自然界に生きる彼らへ対する一つの礼儀を忘れぬよう心掛けている。その辺の向き合い方は、僕らに任せると良い。君は君らしく、我儘を貫いてくれ」

力強く請け負ってくれた望寧に、紫咲は一同と顔を見合わせながら、ほっと笑みを浮かべる。そんな望寧に、三日月は言伝を思い出して口を開いた。

「そうだ。矢羽が言っていたぞ。タマミツネは一頭狩るにも骨が折れる、怪我のないよう十分気をつけてくれと」

「そうか、父上が……。ふふ、過去の世界からすらも、僕を案じて見守って呉れているとは。有難い事だな。今頃何処で旅をしているだろう」

まだ年端もいかぬうちに望寧が独り立ちしてからというもの、父の矢羽やはねと母の紫苑しおんは、商人とその妻として、モンハン世界を旅している。交易拠点の近い街にでも行かねば頻繁に会う事は叶わないが、それでも望寧は、憧れる父と母との邂逅を楽しみに、日々ハンターとして腕を磨きながら過ごしているのだった。

もちろん、矢羽は「優秀なハンター」の正体がまさか未来の娘だとは夢にも思わずに三日月に言伝を頼んだのであろうが、その効力は十分だ。

父からの言葉に嬉しげな笑みを浮かべる望寧の様子に、三日月や山姥切達も、思わず頬を綻ばせる。

紫咲はそんな望寧に、三日月が矢羽の力を借りて大切に持ち帰って来てくれた笛を、預けたのだった。

それから間もなく。

綺麗に直された狐鈴コトノハナクテが、本丸の紫咲の元へと届けられた。

つやつやとした塗料に包まれた柄は、年季の入った芯の素材を入れ替えて作られたように、白銀の世界に凜と聳え立つ一本の竹のようだった。ところどころ赤みを帯びてい

るのは、元からの毛の素材を使ってくれているからだろう。

微かに青みを帯びた特徴的な形の鈴は、無事だったものを模して新たに鍛えてくれたのか、全て鏡のように磨き上げられ、破損やヒビもなく傘の下にぶら下がっている。紐も丈夫で切れにくいものに付け替えられ、振るとしやらんと力強い音が鳴り響いた。

得意げにそれを鍛錬場で振り回してみせる望寧に、紫咲がキラキラした顔を向けたのは言うまでもない。背中から柄を回し、舞うように力強い足取りで狩猟笛の一連の動きを見せた望寧と、地面に立てられた笛を見て、即座に駆け寄った紫咲が口を開いた。

「すごい！　なんて素敵なの！　これはハモンさんにもお礼を弾まなくっちゃ……うおお、幾らぐらいうるんだろ」

「あはは。何、ハモンさんも喜んでいたよ。ここまで由緒の有りそうな珍しい笛を触ったのは、久しぶりの事だと言っただけ。黙々と砥石を動かしていた。顔にこそ出ないが、職人魂に火を点けてしまったらしい」

「そっかあ……望寧ちゃんもありがとね。大変だったでしょう、タマミツネとやり合うの」

「何、この位軽いものだ。何せ、熱心なガイドが頭の裏ですつと指示を出して呉れていたんでね。此の体への憑依に慣れた夜翰にも、随分と助けられた」

「あ、あはは……ごめんね、私ら二人していつも五月蠅くて」

一人の体に、二人も三人も魂が同居しているような状態で狩りに行くのである。望寧からしたら騒々しくて敵わないだろうと思ったが、さして気にもしていないように、からつとした笑みを浮かべて、望寧は紫咲に笛を差し出した。

ちようどそこへ、屋敷内での雑用を済ませたへし切長谷部が、主の姿を目に留め颯爽と歩いてくる。

「主。それが例の笛ですか？」

「うん。こんなに綺麗にしてもらつて……あとは、私の顕現が上手くいくかだなあ」

「主の実力ですから。既に何頭かのモンスターは、素材から顕現に成功されているのでしょうか？ たとえ前例のないことだとしても、挑戦されればきつと上手くいきますよ。自信を持ってください」

「うん。ありがと。だいじよぶだと思うけど、長谷部にも一緒に来てもらつていいかな……？」

「ええ、もちろん。喜んで！」

喜び勇んで返事をした長谷部を伴い、紫咲は望寧と別れて、ガルクの背に乗りながら山奥の湖へと向かった。人が乗れる大型犬のような見た目のガルクは、望寧の世界のオトモ達を何頭か借り受けたものだ。

顕現させたモンスター達の飼育に当たり、山姥切長義やまんぼせりちようぎにお願いして、広い山野の敷地

をこの本丸内に所持する許可は政府から得ている。大型モンスターは一頭一頭の体がかなり大きいので、のびのびと動き回るには、文字通り山一つ分くらいの敷地があつても困らない。

その中でさわさわと音を立てる笹藪の中に立ち入り、紫咲はガルク達を待機させて、清らかな湖の岸辺へと笛を背負つたまま歩み寄つた。

夏恒例の炎天下の日差しは相変わらずだが、ここでは山を吹き抜ける風と木陰がある分、随分と涼しく感じられる。夏用の袴姿なら、汗ばむ程度でなんとか耐えられるくらいだ。

薄い麻の着物の袖に包んでいた狩猟笛を、跪いた紫咲は湖の中へとぼんと沈めた。忠犬さながらに背後で直立した長谷部が、その姿を見守っている。

底が見えるのではと思うほど、綺麗に澄んだ深い湖の前で、紫咲は一つ息を吸い、簪で上げた黒髪の下で、額に巻いた鉢巻をもう一度締め直してから、ぱんつと柏手を合わせた。

天つ風よ 土よ いのち生命与ふる雫の源よ

我が手元に いざ御霊みたまを呼び寄せん

旧きを巡り 新しきを賜り

呼び声に応えし魂よ えいじゆ永寿の森に解き放て

この紫咲に 命めいを捧げよ

審神者の周りを、不思議な風が取り巻いていく。

風が木々を鳴らす音の中、湖に沈んだ笛が気泡を上げ、次第に眩い光を放つのを、目を閉じたまま気配で感じながら、紫咲は透心の術で見た光景を思い出していた。

淡い水の色が血に染まり、深い孤独の中に漂う一匹の竜。

裏切り者と、何度も水中で叫ぶ悲痛な声が、振り下ろされる武器の金属音にかき消される。

それでも彼がその場を動かなかったのは、彼が優しい竜だからだ。

無抵抗で有り続けたのは、人を傷付けたくなかったからだ。

裏切られたという悲しみが存在するのは、人間を信じたから。信じさえしなければ、悲しむことも傷付くことも、初めからありはしないのに。それでも尚、痛みに苛まれ続

けるこの竜は——おろかで、とても優しい。

(だから私は、君に手を伸ばしたい。)

我儘だと言われても、傲慢だと言われても、どうしても捨て置くなんて出来ない)

その優しさごとく抱き締めるように、紫咲は祝詞を呟く。

「……そなたの名は、青雨。

慈悲に満つ五月さつきの雨。降り注ぐ恵みの雨。

其の立つ土と草木が、永遠とわの至福に濡れるよう。

玉雫に込めた願いの、千々に光振り撒く汀に……今、甦れ。」

高く、太陽に向かって光を掬うように掲げた諸手を、もう一度胸の前で叩いた途端。激しい光の奔流が水底から溢れ出して、湖に大きな飛沫が上がった。

とあるタマミツネの日記《第一話》

深い暗い水の中で、誰かが呼んでいた。

赤黒い霧が、頭の中を回る。

また煩い人間どもか。それとも身勝手な神職や妖怪の類か。

もうどちらでもいい。

黒い藻の中をどこまでも、絡め取られながら落ちていくだけの体に、今更何が聞こえたところで。

“あいつ”は、今度こそ添い遂げられる相手に巡り合うだとか馬鹿げたことを抜かしていたが、どこの世界に移り住もうと、結局人間など同じだ。

暗闇など晴れはしない。祀り上げて敬い畏れて、用がなければ処分する、蠅のような人間どもも、“あいつら”のことも——もうどうだっていい。永遠にここにいればいい。

そう思っていた。

気が付けば、目の前が底のない暗闇ではなく、入り口に近い洞窟の中くらいの暗さまでぼやけてきたのは、どういうわけだったか。

霞む意識の中で、誰かが俺を呼んでいた気がする。

眠い。俺を呼ぶな。

眠ってさえいければ大して何も思い出さずに済むと言うのに、この耳は勝手に音を拾う。

『上手く……いったのかな？』

『笛は戻って来ましたし、成功はしているはずですが……浮かんできませんね、奴』

『ど、どうしよう、中で溺れちゃってたら』

煩い。意識の中で耳を動かすと、腹や足先に水の当たる感覚があつた。どろりとした意識の闇の泥ではなく、涼しい水底の石が擦れる感覚が、爪先に当たる。

(水だと……?)

何だ、こんなところに連れて来て。

鼻先を鳴らせば、鼻の中にも空気ではなく水が入り込んできた。鰓を揺する感覚が、ここには時と水の流れがあることを教えてくる。

『タマミツネに限ってそれはないでしょう』

『いい、いやでも、わかんないよ。潜ってみる？ ああでもつ、私じゃ重すぎて持ち上がり
ないだろうし』

『本丸から石切丸でも呼んで来ます？』

それにしても、煩い。何なんだこいつらは。さつきから訳のわからない事をぐだぐだと。

水音を伝つてくる喧しさに、耐え切れずに目を開けると、差し込む陽光の激しさに眩暈がした。

皮膚を撫でる水の流れ。聴覚。焼け付くように焔めきながら降り注ぐ光の筋。すべて、生きていた頃の感覚だ。

……「生きていた」？ 俺は、死んで常世にも天上にも戻らず、彷徨っていたのでは。次々と知覚が現世のものへと切り替わり、戸惑う俺の真上あたりから、焦燥に駆られたやり取りがさつきからずつと聴こえてくる。

『えっ、あつ……じゃあ、石切丸さんと岩融にでも頼もうか……。ああつ、でも薙刀組遠征中なんだっけ!? 静さんは!?』

『落ち着いてください、主。静形ならそろそろ戻っているかと』

『どうしよう。まさかこんな大事故になるなんて。水の中が好きだな子だと思っただけど、いきなり笛を沈めるなんてやっぱり無茶だったんじゃない?』

『失敗は何事にもつきものですよ。本体さえ無事なら付喪神が死ぬ事はないはずですよ。もう一度試されては』

(煩い!!!)
!!!

もう少し籠つていようかと思つたが、苛々してたまらず暗闇を蹴破りながら飛び出すと、水飛沫の向こう側から一對の派手な悲鳴が上がった。

「わひやああああ!!」

「うおおお!!」

この体での加減をすっかり忘れてしまったので、陸地を押し流しそうな波が岸边へと押し寄せた。そうやって、水上に顔を出して初めて気がつく。どうやらここは、湖の中らしいと。

そして岸边に……目の前の濡れた草地の上に、尻餅をついたまま丸い目でこちらを見上げる、いかにも愚鈍そうな女がいた。

(……なんだ、こいつは)

さつきから口喧しく喋っていた奴の片方だろう。そして……俺には、自然とわかりかけていた。暗闇の中で、何度も俺を呼んでいたのは、こいつの声なのだ、と。

「貴様あああ! 出て来るなら出て来ると言え! 主をずぶ濡れにした上に心底驚かすとは、悪意があるにも程がある! 許さん!」

「わーわー! 長谷部! 大丈夫だから! 落ち着いて! ステイ、ステイツ」

長谷部と呼ばれた凶暴そうな男が、こちらに向かって何やら喚くのを女が抑えていた。

こいつ、人のなりをしている癖に人間ではないのか。付喪神が忠犬の如くこんな女に傳くとは、神の格というのも墮ちたものだ。

(あそこにいる犬どもは、さつきから尻尾を丸めて近づかぬと言うに。恐れ知らずの犬め)

ガルクと言ったか、かの世界でよく人間に使役されていた動物は、茂みの中でこちらの様子を伺ったまま、威嚇して動かずにいる。こいつらを乗せてここまで来たのだから。

一方、付喪神とはいえ、塵のような人の身で俺とその女の間に立ちはだかるなど、同じ忠犬でもこちらはなかなか度胸があるようだ。

(構わん。吠えるなら好きなかだけ吠えていろ。返り討ちにしてくれる)

牙を剥き出せば裸足で逃げ出すかと思いきや、長谷部という男の背にすっかり隠れるほど小さなその女は、思いもがけない行動に出た。

奴を制するように前へ出ると、俺の方へ向かって歩いて来たのだ。

「大丈夫だよ。ちよつとびつくりしちゃっただけだよ。大丈夫。いい子いい子」

簡単に俺の顎で引き千切れそうな腕を、雫の垂れる着物から剥き出しで、何故かこちらに伸ばしてくる。その顔は、何故か笑っていた。あまりのことに、あわや顔に掌が触れるというところまで、俺は硬直したまま動くことすら忘れていた。

(……！ よ、寄るな！)

それ以上こいつの顔を見ていられなくなり、俺はたまらず尻尾で水面を叩いて背を向けた。とつきの事で力加減など頭の半分ほどでしか考えていなかったが、女はものもの見事に波に飲まれ、湖を取り囲む崖の際あたりまで流されていく。

訳がわからなまま混乱した頭で振り向けば、瞬間啞然とした長谷部の周りが、湖の中央から見ている俺からもわかるほどに、殺気で匂い立っていた。

湖のあちこちに反響しそうなよく通る声で、忠犬が吠えるのが聞こえる。

「……ッ!!! タマミツネ、貴様ア！ 顕現したばかりだと言っても限度があるぞ！ 主に危害を加えるような真似は俺が許さん！ 今すぐその鼻面、叩き切つて成敗してくれ
るッ……！」

「けほけほ……ま、待つて待つて！ 長谷部、私は大丈夫だから！ 刀を納めなさい！

ねっ！」

「しっ、しかし主……ッ！」

「大丈夫。……本当に傷付ける気があるのなら、とつくに爪や牙を立ててもおかしくないのに、あの子は水しか掛けてこない。優しい子なんだよ」

……何故、俺を庇う。

途方に暮れた様子の子の長谷部から、手を取られて立ち上がった女は、ずぶ濡れの着物で、

水の冷たさに震えながらも、尚俺から目を逸らさずに微笑んでいた。

「主……主の術で見た風景を疑うわけでは決してありませんが、あいつが優しいというのは本当のですか？」

「うん。まあ、根拠もない勘と言えば勘だけ……。それに、青雨せいうって呼んであげて。あの子には、ちゃんとした名前があるんだから」

ぴん、と扇のように広げた耳が、俺の意思に反して動いた。

言霊だ。誠に不本意だが、どう足掻いてもこいつが俺の「主」であるらしいということとは、その名を呼ばれることで分かってしまった。だが、実際に俺が主従関係に甘んじるかどうかは別だ。名を握ったくらいで、俺を使役できると思つて貰つては困る。

湖の中から動かない俺を見て、それ以上は近づかずに距離を保ったまま、女は岸辺で口元に手を当て、こちらに呼びかけた。

「少し落ち着いたー？ 大丈夫。私は何もしないから」

（……………こいつ、まさか願いを叶える目的で、元神竜たる俺を現世に顕現したのか？）

だが生憎と、今の俺には「神の資格」はない。

転生権と引き換えに、“あいつ”が俺から勝手に剥奪していったのだ。元々要らぬものだったから奪おうが捨てようが知つた事ではないが、ここへ来て勘違いを起こした人間に面倒に巻き込まれるなど、俺は御免だ。

首を傾げる女の音が、湖面を伝ってここまでよく届く。

「青雨。自分が、どうしてここににいるのかわかる？」

(……俺を召喚したところで、何の得にもならないぞ。雨の一滴すら、お前らのために降らせてなどやるものか)

「あのね。あなたはもう、神様にならなくていい。主は私。でも、主とかじゃなくて、普通に友達になって欲しい。ゆつくりしたかったら、ここで好きだけゆつくりしててくれていいんだよ」

会話が、さっきから微妙に噛み合っていない。ということは、俺の心を読んでいくわけではないようだ。

それにも関わらず、俺が望んだことを次々と投げかけてくる。こうなつてくると更に怪しくて、何を企んでいるのかと俺は半目になりながら、水から頭を出して小柄な女を睨んだ。

何の打算もなく、俺を顕現させるなどあり得ない。それなのに、この馬鹿そうな女からは、何か裏の顔らしい匂いは本当に何一つ読み取れないのだった。

(……まさか、本当にただの馬鹿なのか?)

「主の厚意に甘えられるのを有難く思うのだぞ。俺らは、歴史に害を及ぼす遡行軍と戦うべく、現世に呼び出された。種類は違うとはいえ、お前たちもその身分は変わらない。

現に、この山で放し飼いにしている奴らも、少しずつ訓練を積み、戦闘や遠征において主のためにその身を役立てているのだ。主の言葉を鵜呑みにせず、お前も顕現した体に慣れ次第、研鑽を重ね……」

(興味ないな)

「ぶわあつ！ 貴様ア！ 人の話の途中で水を掛けるな！」

水鉄砲を顔面に噴射させると、長谷部と呼ばれた忠犬は濡れ鼠になりながら尚も喚いていた。本当に喧しい男だ。

そっぽを向いて身を翻しかけた時、何故かくすくすと主と呼ばれた女が笑っているのが視界に映った。

「ふふっ。……セイ、また明日来るね」

水底に潜りながら、こちらをくすぐるような言葉の端が、俺の耳を掠める。

また明日来るだと？

これだけ酷い目に遭いながら、まだやって来るとは。何を目的とも知らせず、ただ俺に水濡れにされる為だけにやって来るなど、馬鹿げている。それともやはり、口に出さないだけで、そうまでしてでも成就させたい願いがあるといふのだろうか。凶々しい。

まあ、さしたる目的がないのだとしたら、どうせ口先だけだ。

何故俺に媚びを売ろうとするのか知らないが、それが媚びであるのなら、所詮三日も

経たず俺のことなど飽いて放置するだろう。勝手に社に俺を祀り上げた連中と同じように。

そう考えながら、俺は思ったより広い湖から連なる森の中へと、不本意にも呼び出された新天地を散策しに出掛けた。

驚いたことに、女は次の日、本当に湖までやって来た。

次の日も、そのまた次の日も。

俺を監視するのは、何もこの女ばかりではない。

何体か、彼女が顕現したと思えるモンスターとはすれ違つたし、時々彼女の本丸に属する他の刀剣男士とやらが、遠巻きに俺の様子を観察しに来る。

その度に水を掛けて追いつ返してやったが、反撃してきたり、無理やり俺を術や道具で縛り付けたりするような事もない。自由にさせろというのは、本当にあの女が指示しているようだ。

(つたく……鏡キヨウもまた、面倒なことを)

俺をこの世界に、引いてはここに来る前のモンスターが跋扈する世界に転生させた、腹立たしい白狐の面を思い出し、俺は内心で悪態を吐きながら仕方なく魚を獲った。狙いを定めた腕を振るえば、銀色の腹が空中に飛び出て跳ねる。

何が悲しくて、忌み嫌った人間になど、この俺が飼われなければならないのだ。

困われたここより気軽に居心地がよい場所があるならと、当然の如く俺は脱走を図ったが、何度か周囲を散策して気が付いたのは、存分に広いこの山野にも、どうやら境界があるらしいということだった。

森の風景は果てまで続いているが、ある地点まで来ると透明な壁に跳ね返される。どうやらそれは、結界などではなく、“世界”の境界線に類するようなもので、ここまでわざわざやって来るもの好きがいるとも思えないが、万が一外へ出ようもんなら、未知の地帯や常識の通じぬ空間などが、待ち構えているのかもしれない。

仕方がない。いくら逃げ出してやろうかと思つたとはいえ、そんな危険を冒すよりかは、此処に留まっていた方が無難だ。縄張りを作るための敷地の広さに不満はないし、少なくとも此処にある植物や動物や景色は、俺にも馴染みがあるものだ。留まってさえいれば、清浄な気と美味しい魚は手に入る。

滝壺に溜まる水にも、俺が普段潜っている湖の中にも、至る所に魚が泳いでいる。ここにはあの主とやらと刀剣男士しか住んでいない様子だし、モンスターの数も少ない。他に自然を荒らす者がいないせいかもしれない。

タマミツネに転生してからも、その前世の時代に神童として存在していた頃から、魚は好物だった。現世に呼び起こされたのは不本意ではあるが、久々の美味しい魚が喉を

通つていく感覚は、悪くはない。

思う存分魚を食つてから、水の中で大欠伸をしていると、聞き覚えのある間抜けな声
が、水面の方から波紋のように降つて来た。

「セイー。青雨ー。どこにいるの〜?」

昼下がりのうたた寝に最適な日差しさながらに、ゆらゆらと漂つて水底へ聴こえてく
る声を、俺は胡乱に思いながら目を細めた。覚えたくもないのに、すっかり覚えてし
まった声紋に耳を動かしながら、俺はどうするか考えた。

追い払つてもいいが、あの刀剣男士どもならともかく、この女はごく普通の人間。無
駄に水を掛け、俺のせいで山を降りる間に風邪を引かされた何だと、この女を盲信する
連中に逆恨みを買つて狙われるようになったら、それはそれで鬱陶しいし厄介だ。

(何が好きで、こんな軟弱な人間を主に立てているんだか)

明日にも倒れるのではないかという噂を、ここを見張りに来る男士の話し声から耳に
したが、だったら屋敷の中から一步も出さなければいいものを。

それ以前に、何の特別な力もない、頭脳や体力に優れているわけでもない、計略にお
いても戦闘においても役に立たなさそうな人間を、ずっとこの場の頂点に据えていると
いうのは、理解に苦しむ。遊行軍が何たらというのは俺の知ったことではないが、大体
そのような戦場の場では、凡人よりは秀でた人間を長にするものではないのか。

今まで俺を討ち取りに来たあらゆる人間どもの誰と比べても、あの女に明らかに優れた点があるとは思えなかった。

首を振りながらその場を離れようと思った時、普段の世界では聴き慣れぬ音色に、思わず手足が止まった。

(この音は……)

頭上から、女の声以外のものが聴こえてくる。

この世界の——いや、あの女は本丸の外のあらゆる世界で出入りを繰り返しているらしいから、どの世界のものかは知らないが、いわゆる音楽という奴だろう。

何か、小さな牌のようなものを女も仲間も使っているのを目にした事がある。あれは、俺らのように鳴き声を持たぬ者が、仲間と交信したり音を流したりするのに使うらしい。

それに混じって、女の声が「歌」に変化するのがわかった。

(……下手くそだな)

湖に接する崖の上から、音は聴こえている。その真下あたりに潜って、俺は耳を澄ませた。

別に、大した歌声じゃない。人間と共に暮らしていた時間は短く、俺は芸能には疎い方だと思っているが、水鏡に潜れる力を利用して、色んな世の様々な音楽を耳にしてき

た。そんな俺からすれば、聞くに耐えないというほどではないにせよ、特筆すべきようなところもない。どこにでもいる人間が、ただ旋律に合わせて口を開いているだけの、凡庸な歌声だ。通りすがりの人間なら、間違ひなく気にも留めはしないだろう。

俺とかつて番つていた「彼女」の方が、神楽の腕といい張りのある歌声といい、よっぽどいいものだった。

(……)

そう思うのに、何故かしばらくその場を動けずにいた。

別に、これは進んで聴いているとかじゃやない。気になるとかじゃやない。

憐れなほど凡庸なこいつの歌に、どういう意図があつて何をしているのか、不可解に思っているだけだ。

誰かを立ち止まらせる事も、振り向かせる事も、感嘆させる事も、ひれ伏させる事もないだろうに。たった一人で、何がそんなに楽しくて、幸せそうに歌っているのだろう。(俺ほど良い耳でなければ、お前の歌など何の意味もない)

好きで特別な力を持つ身に生まれたわけではないが、この耳や髭があれば、少しの音から感情の機微を察することなど容易いものだ。「感情を込めて歌う」だの「心を込めて奏でる」だのいう芸当は、人間では感度が鈍すぎて、もし人間から人間に伝えようとすれば、秀でた才や喉がなければまず実現し得ないものだが、俺ならわかる。

(……どういふつもりだ。俺のことを思いながら歌ってるのか)

当惑して水中で一度旋回してみても、聞き違えようがない。

どうして、こいつの歌からは「好き」が溢れてくるのか。無視され冷遇され続けて、何故何かを伝えたいという意志が薄れないのか。——どうしてこの俺などと、「仲良くになりたい」と思うのか。

長い間、水に潜っているのも何となく気詰まりになって、俺は息継ぎのついでに、音を立てないよう慎重に水辺に鼻を出した。

「あつ、セイのお鼻！」

(ちつ。目ざとい奴だ)

歌に夢中になっているものとはばかり思ったのに。楽しみに弾んだ声を聞き、気付かれているのにこつちが鼻だけ出し続けるのも間抜けなので、俺は仕方なく水面に顔を出した。

日差し of 眩しさに目を輝かせるような表情で、彼女が少し小高い崖の上から足を振る。まあ、ここまで高低差がある場所なら、迂闊にこちらに近付いて来ることもないだろう。

彼女が手元に置いたあの牌からは、既に記録されたものらしい音が流れ続けていた。耳慣れない楽器の合わさる音が聞こえてくる。俺が聴いたことのある類とは違うが、や

はりなかなか良いものだ。

「セイは、もしかして音楽が好きなの？ わざわざ水から出てくるなんて」

（勘違いするな。お前の凡才な歌はどうでもいい。そこで流れている元々の曲が良いから感心しているだけだ）

一声鳴いて水の代わりに泡を数個吐き出すと、彼女は袴の膝に当たってぱちん、と弾けたそれに驚いたような目をしながら、今度はきやつきやとはしやぎ始めた。

駄目だ。こちらが嫌がらせのつもりでいても、頭の弱い奴には何の効果もない。馬鹿につける薬はないという世の言葉は、本当のようだ。

どうせここにいる間はその喧しい声を聞き続ける羽目になるのだろうし、未知の音楽はこれこれで興味深い。俺は崖下の岸に上がり、体を振って水を落とすと、日差しで温かくなった砂の上に寝そべて丸くなった。

（仕方がない。俺の体が乾くまでの間くらいは、付き合ってやるとするか）

皮膚から潤いが完全に消えるのも良くないが、ずっと水に浸かりっぱなしは、それで体が苔生す原因になる。欠伸をして目を閉じ、微睡みながら、俺は自慢の耳だけを音のする方へ向けていた。

崖の影になって見えていない事を祈ったが、この俺の体躯だ、どうせ彼女には気付かれているのだろう。

それでも、馴れ馴れしい割には不思議とこれ以上の距離を詰めずにいる女を、妙な奴だと思いつつながら、俺は彼女の齋す歌に耳を傾けていた。

とあるタマミツネの日記 《第二話》

曲があれば俺が寄り付いてくる、と単純な思考で学習したらしい女が、毎日のようにこの森の水場で歌うようになってから、また一週間ほどが経った。

俺が水や泡を飛ばすときやあきやあと甲高い声で大騒ぎするくせに、自分から俺を脅かすような真似はしてこない。それがわかってから、無駄に崖の下と上で距離を空けるのは止めた。あの女の意図に乗るようで癪ではあるが、どうせ音を聴くのなら、近くの方が良く聞こえて来るのは当然だ。

彼女や仲間の男士が持っている牌の事を、「すまほ」と言うらしい。少し前は「携帯電話」と呼ばれていたらしいが、電話というものを知らない俺には、その説明を聞いてもぴんとはこなかった。どこかの世界を水鏡越しに覗き見た時に、発明されたとか何とか言われているのを聞いた気もするが、俺には無用の長物なので覚えようとも思わなかった。人間は、よくもまあ好きでこんなにややこしいものを作るものだと思っただけだ。

彼女が指で少し撫でただけで、種々様々に変化した音色がそこから流れ出す。曰く、彼女が自分で奏でているわけではなく、遠い場所で音楽を生業とする者らが、「録音」と

いう技術でそれを保存し、どこでも聞けるような形にしているのだという。

俺が元の世界で、自らの泡の中に記憶や音や風景を封じて保存し、時々それを割っては楽しんでいたのと、同じようなものだろうかと思つた。

彼女は、よく喋つた。

歌のみにあらず、その曲に込められた思いだの、その曲に謳われている物語にはどういふものがあるだの、この曲は誰に教えてもらっただの、その誰かが今日はどこで何をしているだの、関係あることないこと、何でもよく喋る。

俺の言葉は理解できないくせに、俺が聞いているという事はわかるのか、瞳を見つめ返すと、その喋りは殊更に嬉しそうで止まるところを知らないのだつた。

別にこいつのどうでもいい話など、聞いていてもいなくても構わないだろうに、何故か気が付けば耳を傾けてしまう。どうでもいいと思つているはずなのに、いつの間にか話の最後まで、この女の横にいて付き合つてやる事が増えていて、それを苦にも思つていない俺自身にも驚いた。

あまりにも平和で暇を持て余していると、こんなくだらない話でも、憂さを晴らせるようになるのだろうか。

ある時、湖の際にやって来て足を浸している彼女を見つけ、俺はいつものようにその近くに寄つた。

珍しく今日は静かだ。曲も流れておらず、ただ浴衣の袂を緩めてぼーっとした顔を晒しているところへ、俺がやって来た事に彼女は驚いたのか、頬を緩めて微笑んだ。

(別に、その顔を拝みに来た訳じゃないぞ)

「青雨。音楽は流してないのに、来てくれたの?」

(今日は、歌わないのか)

鼻先を脚に押し付けると着物の裾が多少濡れたが、彼女はそれを気にも留めず、声を立てて笑いながら、初めて俺の額に触れた。むずむずとした指先の感覚よりも、その火照った手と脚の体温が、妙に気に掛かった。

(……………ふむ)

嗅覚や聴覚だけでは、確かめ切れぬこともある。

俺は岸边に身を乗り出すと、舌でべろりと女の頬の汗を拭った。彼女は、舐められた箇所を驚いたように手を当てながら、俺のこゝを見つめ返している。

竜は、同族や親しい相手に対して挨拶や毛繕いをするために舌を使うことがあるが、別にこれは、親愛の情を示すためにやった訳ではない。ここへやって来る前の俺は、仮にも水を司る神だった。人間の体液然り、俺が水から得られる情報は大きい。

彼女の汗からは、その情に違わぬ蜜のように甘い味がした。そこに混じるように感じられる、苦味と渋み。表面上の塩気や酸味などは、人体を構成する要素としては正常範

困内だろうが、俺が感じ取っているのはそれとは違う。微かに眉を顰めると、彼女は不思議そうに、俺の顔を見て瞬きした。

「青雨……？ どうしたの」

（早く、ここから帰れ）

着物の裾を噛んで引つ張り、陸に上がって彼女の背中を鼻先で押すと、慌てたように彼女は立ち上がった。

「わ、わあ。え、何、私ここにいちやダメ？」

（こんな体調の時に、ふらふら外を出歩くな）

苛立つて口の端から唸りを漏らすと、彼女は俺の表情を見て何かを察したのか、こくりと頷いて、振り向きざまに小さく手を振った。

「……心配してくれたんだね。ありがとう」

（礼を言うくらいなら、初めから来なければいいものを）

ふん、と鼻を鳴いてそっぽを向いてから、俺は彼女がガルクに乗って下山するのを見届けた。降りるまで尾けてやろうかとも思ったが、流石にそこまでしななければ帰らないほど愚かな奴でもないだろう。

弱り切った体を押して、わざわざ俺に会うためだけにここまで来るのも十分愚かだが、それで無理をするのは尚更愚かだ。

ざわりと逆立ちかけた背中の鱗を何とか静めながら、俺は湖へと踵を返した。

俺が強引にあいつを帰らせた日から、彼女の来訪が極端に減った。

大人しく俺の意図を汲んで、具合の悪い日は外に出たり、長時間滞在したりしないようにしているのだろうが、追い返しておきながら、来ないと来ないで落ち着かなくなる自分自身に、俺はたまらなく苛立った。

あれだけ俺のことを好いていると言った癖に、あれは嘘かと問い正したくなる。

傍に寄れば、彼女に触れさえすれば、そんな事はないとすぐにわかるというのに。何度彼女の、湿りやすい柔い手足に触れて、その体に流れる水の音を感じ取っても、次に会えるまでのほんの束の間が、とてつもなく長い。

永い永い時を生きてきた俺にとって、この世界での数日など、瞬きするにも等しいほど短い時間だというのに。

あんな脆い人間に構うから、俺まで弱くなる。

苛立ちを誤魔化すように、俺は傲慢の尾を叩き付けて、地面にめり込ませた。あまり縄張り争いや喧嘩の相手もないから、時々樹木や岩相手に鍛錬でもしておかなければ、食べてばかりで体が鈍りそうだ。

そんな俺の、貴重な喧嘩相手たりえる奴が、ずべずべと雨上がりの後の泥の中を滑つ

て、こちらへ這ってくるのが見えた。

「セイちゃん。こんなところで何してるの。さつき大雨が降ったばかりだから、溢れた川の岸に新鮮なお魚がいっぱいびちびちしてるよ。一緒に食べに行こうよ」

「……ポン。お前、しこたま食ってばかりだと、ただでさえ丸い体がますます丸くなるぞ」

黄色い瓜が巨大化したような体で、短い前脚を持ち上げながら足踏みをし、へらりと笑っている様を見て、俺は呆れながら目を細めた。

ポンこと、ロアルドロス。ロアルドロスというのは種族名だが、この本丸ではポンと呼ばれているらしく、呼び名としては俺も楽なのでそれに倣った。一体何が由来なのか、ポンという名前では元の名の影も形も見当たらないが、本人は気に入っているようだ。

「ぼくは、丸いのがかわいいーからいいんだもん。ムラサキちゃんも他の子も、みーんなかわいーって」

「……ふん。いっぱいしの獣が、すつかり懐柔されておめでたい事だな。無駄な話をしてる暇があれば、取っ組み合いにでも付き合え」

じやれるように飛び付くと、顔の周りにふよふよと柔らかそうな立髪を蓄えたポンは、その丸っこい見た目からは想像のつかない俊敏さで、ころりと転がって俺の攻撃を

避けた。

ひらりと宙を舞うように身を翻して尻尾を叩き付けると、上がった水飛沫を盾に身を隠したポンは、猛烈な速さでこちらに突っ込んでくる。泡を吐き出してやると、それをもろに食らったポンは、転ぶどころか楽しげに両手で泡を抱えるようにして割り始めた。そのまま滑る泡で加速しながら突進してきたかと思えば、べしやんと音を立てて、上半身全部でこちらを押し潰そうとしてくる。

さすがにポンの体軀では俺は潰せないだろうが、無邪気に遊ぶようにして尻尾を振っている割には、一打一打の攻撃が的確で重い。俺より脚が短いくせに、体の使い方を心得ている。なかなかの強者だ。ちよつとした喧嘩の相手には打つてつけだった。

妙にのんびりしていて、若干阿呆っぽく見えるのが玉に瑕だが。

べつと氷のように冷たいブレスを吐き出して、俺に足止めを食らわせながら、ポーンが首を傾げて言った。

「また鍛錬く？ セイちゃんは真面目だねえ。どうしてムラサキちゃんとみんなのことが、そんなに嫌いなのか？」

「……逆に、お前はあいつらのどこがそんなにいいのか聞きたいんだが」

「みんなぼくのことかわいーって」

「それはさつき聞いた」

「おなまえいっぱい呼んでくれて、いっぱいなでなでしてくれて、おやつくれるの。お団子とかー、お菓子とかー」

「結局食い意地つてことか」

まあ、食い物に釣られるのは獣らしい習性だ。別にそれを馬鹿にするつもりはない。俺にはよくわからないが、人間の世界には美食も多いらしいし、本能には抗えないものだ。

そう勝手に結論づけて、水辺で爪と鱗の手入れをしていると、自分が吐き出した息で俺の泡を凍らせて遊んでいたポンは、思い出したように振り返りながら、無邪気な顔で言った。

「あとねえあとねえ、ムラサキちゃんの横は、ふわふわであったかくて気持ちいいよ。ごろーんってするとねえ、なんかふわふわするの」

「……お前、あいつの膝に乗ったのか」

「セイちゃんも、お隣にいたらなんとなくわかるでしょ？ いつも、どきどきしてふわふわして、はぴはぴの感じ。おむねがきゅきゅきゅーんって。ぼく、ムラサキちゃんだいすき。やさしいもん」

「……」

思わず顔を顰めると、ポンは体をぐいぐいと両側に捻りながら、ない首を傾げるよう

にして頭を左右に振っていた。

「うん？ あれれ？ セイちゃん、なんかお顔の皺ふえた？ でも、セイちゃんよくムラサキちゃんと一緒にいるよね？ セイちゃんもお膝にごろーんすればいいのに。ぼくだけじゃなくて、みんなにやってくれるよ」

「違う。誰がやるか。そもそも、俺やお前の大ききじやあいつが潰れるだろう」

「靈力節減で、ちっちゃくしてもらえばいいんだよ」

「……要らん。お前らがべたべた媚びた後の奴の膝なんか、誰が好き好んで」

「ねえ、それってもしかして焼き餅？ 焼き餅ってや」

「煩い」

容赦なく水を噴射して浴びせてやると、きやーと声を上げながら、最後まで愉快そうにポンの奴は去って行った。

まったく、こんな場所に生きていてもどこまでも気楽というか、お騒がせな奴だ。

(……誰が焼き餅だ。誤解も甚だしい)

さすがに、人間の世界の語彙で、これが単なる焼いた餅を示す言葉ではないことぐらい知っている。

別に、あいつが他のモンスター相手に平気で接触することぐらい、俺はどうとも思っていない。あの間抜けならやりそうな事だ。馴れ合って油断しているうち、寧猛なモンス

ターに食いつかれて懲りてしまえばいいとさえ思う。

(だが、それが原因で、腕が千切れてすまほを使えなくなったり、声が出なくなったりし
ようなものなら困りものだな)

そうなるくらいなら、俺の横にいたらいいものを。

少なくとも、俺は噛まないし、力加減を間違えたりもしない。

それなのにあいつは何故か、俺が近寄らない限りは、俺に触れてこようともしない。
あれだけ歌に想いを込めながら、いつもいつも受け身なのだ。凶々しい。

(……それは、俺が拒んでいたからか)

ひらりと、頭上の木から落ちてきた緑の葉が、鼻の上に止まった。

ポンのように馴れ馴れしくすれば、膝にも乗らせてくれるだろうか。

それとも、あれだけ水を掛け続けたり波に押し流したりしたこともある俺を、これ以上
上傍に寄らせるなど、考えられないのだろうか。

陸に上がり、水鏡に映った己の姿を見る。

獰猛だ、呪いだ、穢れていると散々に呪詛を吐かれた赤黒い体が、堅強に大地を踏み
締める脚が、水鏡に映っている。体表から滴った雫が、水面に波紋を作っていく。

なぜ、俺に「青雨」と名付けた。

俺のことが、恐ろしくはないのか。

俺の元あつた姿を知っているわけでもあるまいに。俺に、何が起こつたかも知るまいに。何故、この体色と真反対の清らかさと美しさを、その名に込めたのかと。俺はまだ、あいつの口から聞いたことがない。

聞けば、教えてくれるのだろうか。だが、人の口がないこの身でどう尋ねるべきか。信頼関係が築ければ念話が可能な人間もいると聞くが、おそらくその段階にはまだ至っていない。そもそも、あいつの体が弱っている今では、足繁くここに通うこと自体も難しいだろう。

何をどうするにも煩わしい時の流れの遅さを鬱陶しく思いながら、俺は雑念を振り払うように、勢いよく水の中へと飛び込んだ。

それから間もなく。身を引き摺るように様子を伺いに来ていた彼女の訪れが、完全にぱったりと止んだ。

それはそれでせいせいするだろう、あの下手な歌にも纏わりつく視線にも迷惑せずに着む、と考えた頭とは裏腹に、心は未だ晴れなかつた。

代わりに、刀剣勇士と呼ばれる彼らが見回りに来る。

この世界の付喪神とは、主に主を守護するような存在だと聞かされてはいるが、まさかこいつらが隠したのか、と警戒しがちに唸りを上げると、その度に奴らは種々様々な

反応で、俺を宥めた。

「ふん。気に食わぬ様子だな。俺だつて貴様の様子を拝みに来るのは不本意だが、主は最近お加減がよろしくないのだ。あまり心配を掛けぬよう、ここで大人しくしている」
「あのう……ごつ、ごめんささいっ！ あるじさまは、お布団から起き上がれなくて、そのう……ひいつ、食べないでください！」

「青雨さん。主君は今、ご自身の病と闘つておいでです。どうか、信じて待つていただけませんか。困り事があれば、僕が代わりに承ります」

いつも通りの忠犬ぶりを發揮する長谷部に、ちつとも強そうでない虎を連れた五虎退。小柄な割に気丈で、礼節を重んじ毅然とした態度の前田藤四郎。

この三振が多かつたが、他にも入れ替わり立ち替わり、刀が様子見に現れる。が、彼女だけが待てど暮らせど現れる気配がない。

無理をするなどは言つたが、これは間が空きすぎなのではないか。というよりは、こんなに長い間来られないほど、具合が良くないということか。

(……顔を見せに来なければ、俺が直にその身を診てやる事もできぬではないか)
診たところで、俺に病を治す力などない。水の流れや音から、具合が良いか悪いかをせいで判別出来る程度だ。

それでも知つていたかつた。単純に、これは俺の知識欲を満たすためだ。あいつがど

の程度弱り果てているのか知りたいのは、俺自身の欲望で。そして。
(……どう、したいのだろう)

大した事はない、こんなに案じさせるなど鼻を鳴らして呆れられる程度であれば、まだ良いが。俺を顕現させておきながら、もしあいつの方が先に世を去ろうとしているのであれば、俺は――

「おや。随分としよげ返っているな」

闇世の中に凜と響いた若者の声に、俺ははつと身を起こして振り返った。

この耳と髭があれば、一、二里は手前から音を拾う事ができるし、刀剣男士が山を登ってくるのもわかる。こんなに近寄られるまで気配を察知出来なかつたのは、初めてのことだ。

体を捻ると同時に即座に後ずされれば、竹藪の林の中に、三日月形の装飾が印象的な青い狩衣を纏った、黒髪の男の姿があつた。

およそ遠出には不適当だろうと思えるような格好で、男は緊張感もなく笑う。

「おっと。すまんすまん。驚かせてしまったな。警戒する必要はない。俺の姿に見覚えはないか？」

(……は……)

俺は目を見開いて、目の前の姿を眺めながら、鼻をひくひくと動かした。覚えのある

香の香りだ。

確か、名前は……三日月宗近。そう呼ばれていた。ここへ渡る直前に俺の魂が棲み着いていた秘境で、俺の荒御魂を討伐にしに訪れた、矢羽というハンターと共にいた奴だ。俺はあの時、何か凶暴で重苦しいものに意識も意志も支配されていて、記憶が朧げだった。ただ、その虚ろな記憶の中でも、闇を裂くように閃いたこいつの刀と、側で奏でられていた狩猟笛の音色は覚えている。

こいつは俺に傷を負わせるだけではなく、それと同時に、苦しさに暴れる俺の内側に巢食う黒い塊を、少しずつ千切り取っていった。気がついたら、悲しみも憎しみも、驚く程に元通り鎮められて、俺の内側に返ったままで笛の中に魂を封じられていた。

膨らんでいく感情と御霊の力に、既になす術もなかった俺は、やすやすと敗北を覚えておきながら、かえって安堵したほどだった。

半分以上自我を失っていたとはいえ、何が起こったのかすらわからないまま、ここまですで俺が翻弄されていたのは初めてだ。もし彼がこの本丸内の刀剣男士だというのなら、間違いなく抜きん出て高い力と実力を持つ者だろう。

(……癪だが、俺はこいつに助けられたとすら言えるのかもしれない)

「おや。はっはっは。面を上げよ。よもや俺がこのような言葉を使う機会があるとはな。そう畏まらずともよいのだぞ。おぬしは殊勝で真面目な竜だなあ」

モンスターと人間同士、刃を交わし、互いに実力を認め合った間柄である以上、相手に義礼は尽くすべきだ。悔しくはあっても、負けたのであれば俺が三日月の下だ。それを弁える程度の礼儀は、俺にもある。

そう思つて脚を折り、首から頭を垂れたが、三日月はそれをさして気にもしていないかのように、弾けた笑いを漏らした。

「それに、俺は使われる刀の身に過ぎん。俺を敬うより、主に優しくしてやつてはもらえんか」

(……またその名前か)

「はは。そう嫌そうな顔をするな。おぬしも、気になつておるのだろうか？」

まるで心を読んだような挙動に目を丸くすると、三日月は俺の隣に立ち、風が水面を撫でていく湖越しに、静かな夜の森を眺めていた。

「主は素直で甘え好きの無邪気なお方だが、時に少々、疲れや無理が祟り倒れてしまつてな。大事はない。ただ、一度調子を崩すと、長引いてしまうことが多いのだ」

(……)

「さしたる大病ではないとはいえ、人間の体の機能も気の流れも、滞れば主にとつて悪影響となる。あまり寝付いて欲しくはないが……誰よりも苦しんでいるのは、主だからなあ。おぬしに行つた浄化や退魔とは違い、人の子相手では何もできぬ刀の身とは、歯

がゆいものがある」

困ったように、三日月は月明かりの下で眉を下げて微笑していた。

下手をすると、常人が名のある病に罹った時などより、余程長く寝込んでしまうこともあるらしい。元来神童である俺には、病などほとんど無縁のものだが、明けども明けども、熱や病魔が去らない日々を繰り返すというのは、一体どんな心持ちなのだろう。

(……それなのに、あいつは何故)

「おぬしをここへ連れて来てくれというのは、主の命だった。主は靈力が少ないと言われてはお方だが、その潜在的な力はとても強い。むしろ、内なる力を制御し切れず暴発を繰り返しているが故に、主は体調を崩し易いのだと俺は考えている。おぬしを封じたのは俺だが、それは内在する力を出力できぬ主に代わり、俺が札や神氣と融合させて使っていたからで、源は主そのものなのだ」

(……！)

「おぬしの御霊の中の凶暴性——俺らが荒御魂あらかみたまと呼んでいるそれを、膨らませ暴走させようと目論んでいたのが、時間遡行軍だ。奴らの歴史改変の企みを阻止するのが、俺らの役割ではあるのだが……その名目がなかりと、主はおぬしに手を伸ばそうと躍起になつたであらうなあ」

三日月は、そう微笑んで俺に告げた。

暗闇の中で聞こえた、微かなあいつの声が脳裏に蘇る。

俺が神であるか獣であるかなど気にも留めず——ただ必死で、俺を呼んでいた。自身では、何もできぬ癖に。こんな付喪神にしか、頼る事ができない身の上の癖に。

俺を抱えて何になるのだ。本当に、俺には何も求めていないのか。

風の匂いを嗅いでいると、三日月がまた、俺の隣で月を見上げて呟いた。

「何も、と言うにはちと矛盾があるなあ、青雨よ。おぬしが何を叶えるのも望まない代わりに、ある意味では一番大きなものを望んでおるのかもしれない。俺の主は、存外寂しがりなのだな」

(……………？ どういうことだ)

この青年、もとい爺の言う事は、どうも謎かけめいていて分かりにくい。刀剣男士というよりは、狸爺だ。

そんな三日月は、その特徴的な色をした目で、広げた扇の下からふと俺の方を覗き見し、仰いで自分に風を送りながら、全然関係のないことを言い始めた。

「うむ。それにしても、十五夜には早いが良い月だな。たまにはこうして山野を歩きながら眺める月も良い。だが、本丸で見る月もなかなかのものだ。甲乙つけ難いな」

(……………)

「なに、どちらも大して変わりはないと言いたいのだろうか？ だが、もしこちらの月が恋

しくなった時は、湖の中を覗いてみると良いぞ。何せ、本丸の池に映っているものも、お前の棲まう湖に映っているものも、同じ空に浮かぶ月なのだからな。何かと縁故もあるだろう」

何を言いたいのかわからなかったが、そんな言葉を残し、三日月は衣の裾を翻して、もと来た道をあつかりと戻って行つた。こんな夜半に、ガルクに乗ることもなくわざわざ歩いてやって来たのだろうか。相変わらず健脚の爺だ。

涼しい風のそよぐ中で、俺は雲が泳ぐように漂っていく暗い夜空を見上げた。本丸との距離はそこまで離れていないだろうし、平地と莫大な高低差があるわけでもないのだが、不思議と澄んだ気持ちのいい風が吹き渡っている。

何をするともなく、その日は月を眺められる場所に体を丸めて眠つた。奴の真似をして見上げていれば、せめてあの女が眺めているのと同じ月を見ていることはできるのではないかと、そんな気がして。

とあるタマミツネの日記 《第三話》

三日月が去った翌日。相変わらぬ音沙汰を待ちながら、俺はふと、湖で空を眺めていた。

(……)

湖水を賑やかすように、少し強くなった風がざわざわと周囲の木を揺らす。ここと同様に風が吹けば、本丸の池に映る雲もまた揺れているのだろうか。それとも、向こうは穏やかなのだろうか。

三日月が言っていた。ここに映る月も、本丸の池に映る月も、同じ空に上がるもの。同じものを眺めていれば、縁もまたあるだろうと。

(……いや。待てよ)

頭の中を、月光に鱗粉を煌めかせながら舞っていく蝶の羽のように、閃きが過った。

三日月が、何の含蓄もなくこんなことを言うだろうか。

俺は思いつきで、青空を映す湖の中に顔を突っ込んだ。殊更澄んだ場所であれば、或いは。

普段泳いでいる時に使うのとは違う感覚に意識を集中させ、俺は目を見開いた。水底

に縞を作つて、ゆらゆら揺れる陽の光。その中に、ぼんやりと虹色に輝いて浮かんでくる光景がある。

(……主様の具合は……)

(まだ……安静にはしておられるが、熱が……)

(案ずることはない……本日も交代で任務を……)

途切れ途切れに、刀剣男士達が喋っている会話の音を耳と髭が捉える。更に意識を集中させると、座敷部屋に揃う男士達の姿と、側の布団に身を起こす女の姿が見えた。いつも結えていた髪を下ろし、楽そうな甚兵衛の上に、体が冷えるのか羽織を纏っている。(ということは、これは枕辺に置かれた盥たらいの中か)

よもや、この身になつても未だ使えらるとは。

神竜であつた頃、俺には水にまつわる術や力が使えた。そのうちの一つが、水を通して遠視をすることだ。ここより遙か遠方にある、水面の周囲に映る光景をこの目に見ることができる。水がある場所でさえあればどこでもいい。川でも海でも、それこそ三日月が言つた本丸の池でも可能な訳だ。

それならばと、意識を別な場所に向けると、今度は水底の模様の上に、天井のない空が見えた。石が積まれた広々とした池が屋敷の方に面していて、その廊下を歩いている男士達や、庭の方で鍛錬に励む男士達の姿が見える。遠くから会話を拾おうと、俺は目

を閉じて耳や髭に神経を集中させた。

「あるじさま、はやくよくなるといいですねえ」

「ええ。これだけ長引いては、体ばかりではなく、主君の気持ちも弱つてしまうのではないかと……」

「ぼくらだけでも、げんきでいなくてすねつ。まえだがげんきをなくしては、あるじさまもしんばいしてしまいますよ」

「そうですね。今日も、僕らは出来ることを精一杯やるのみです」

廊下を歩く、ちんまりとした短刀二振の会話が聞こえてくる。そうかと思えば、また別の声が聞こえてきた。

「主、ちゃんと大人しく寝てっかな」

「心配なら、兼さんが様子見に行ったら？ 今日近侍でしょ？」

「そうだけど、あんまり近くに居てもあいつは気詰まりだろうがよ。私のことは気にしないで鍛錬してきて、つってたし……」

「そうかなあ。好きな人には、いつまでも傍にいて欲しいものじゃない？ ただでさえ、

今の主は病で心細いんだし」

「ばつ、違つ、オレは別にそんなじゃねえつて……！」

「今のは主の話でしょー？ なーんで兼さんがそんなに赤くなつてんのかなあ」

赤い襟巻きの奴と、青い羽織の奴はまだ記憶に浅いが、両脇のこいつらに擲掬われて
いる長い髪の男士は、見覚えがある。思い返せば、見かける度にあいつは何故かあの女
の一等傍に控えていた。名はたしか、和泉守兼定。

(人の身を得ておきながら、やるのはいっばしに色恋の真似事か)

一度浮上し空中に顔を出して呼吸しながら、俺は湖の中に漂う手足を動かした。体の
水気を振り落として陸に上がる。

とりあえず、あの女が死にそうでない事が確認できたならそれでいい。布団から出ら
れぬと言つても、起き上がれるくらいの体力はあるのだろう。であれば、やはり多少は
回復に時間が掛かっているだけで、俺の出る幕などない。

最初から、ここで大人しく待っている以外の選択肢など、俺にはないはずだった。わ
かつていて魔力を使い、光景を垣間見して、それで満足したはずだった。

(……)

けれど。それは明日も明後日も、続いていくことなのだろうか。

何かの間違いで、容態が急変したら。平気な顔をして、少し見ぬ間に冷たくなつてい
たら。

白日の太陽よりも、夜中の月よりも、人間は脆い。あまりにも脆すぎる。それを、何
百年と生きた付喪神のうちの誰が、本当の意味で理解しているのだろうか。苛

立った爪が、ぎりりと地面へと食い込んだ。上下の顎から生える牙を、俺はしかと噛み締める。

(人間など……一人や二人、勝手に死なせておけばいいだろう)

あいつらは困るかもしれないが、俺は顕現が解かれて消えるだけの身だ。あると思っ
ていなかった余剰の獣生が失せようと、何も困らぬし知ったことではない。

たとえ、泡のようにあの女の笑顔が消えようと——ふわりと吐き出した緑の泡を、俺
は爪先でぱちんと割った。下手くそな歌が、泡の中から流れ出す。

どこで流れようと何も変えられぬまま、消えていくただの声だ。俺が記憶しているだ
けで、誰の得にもならず、何を照らすこともなく。淡く儂い。もし今を生き延びられた
としても、竜である俺よりは確実に、世を先立ってしまふ。

(お前……本当に、それは今なのか)

俺を、また、置いていくのか。

幾つもの泡がぱちりと弾ける感覚に我に帰った。いつの間にか、昔の記憶まで引つ張
り出して眺めていたらしい。

戦で勝手に死に、病で勝手に死に、寿命で勝手に死に、そうでなくても己の都合で俺
の前から姿を消していく。人間は、勝手な存在だ。だから、人間のことは嫌いだ。

けれど。こうも思う。

俺が嫌ってきた「人間」と、俺が関わってきた「彼女」は、違うものではないかと。

俺が見てきたのは、人間であり、大野紫咲という一人の女。

まだ、お前の全てを知りはしない。けれど、思うことが一つある。

(勝手に俺を顕現しておきながら、勝手に俺を捨てるのか)

以前なら、たとえうち棄てられようと忘れ去られようと、それを呑んだだろう。時の流れ行くままに、全てを諦めただろう。

だが、今の俺は昔の俺ではない。神の矜持も、聞き分けの良さも、人間への義理も、顕現されこの世に再臨した今では、もう必要もないものだ。

(「好きに生きよ」とお前は言った。ならば、多少の身勝手は許されような?)

言霊使いと言うのなら、己の言葉の責任くらいは取ってもらおうとしよう。

感情に身を任せるがまま、俺の脚は自然と湖の底へと向かっていた。

昼下がりの光を受けて、水底の陽が翡翠色の模様の中でゆらめいている。

俺は一つ水を吸って、陽炎のようなその光の中に飛び込んだ。普通であれば鼻先から伝わるであろう湖底の岩盤の衝撃は襲って来ず、俺の体は光の揺れる回廊のような、柔らかなく温かい場所へと滑り込んでいた。

(本丸は……こちらの方向だな)

鼻先に触れる水の香りを頼りに、先ほど見た光景へと繋がる場所へ、水流の中を駆け抜け泳いでいく。神であった頃は何度か潜り込んだことがある。水の世界へ触れる者だけに許された、水面と水面を繋ぐ水路だ。異空間移動を行う際の境目とも言えるかもしれない。虹のような光が、目の端に懐かしい残像を残していく。

(鏡キョウも、多少は役に立つものを残しておいてくれたようだ)

水中花魔法——と、彼は呼んでいたのだったか。俺が教わったのは、まだその完成系を見る前の原型のようなものだったが、水から水へと旅するのに支障はなかった。今でも使えるとは意外だったが、使えるのなら使わない手はない。

もしや三日月は、これを見越してあの言葉を残したのだろうか。

以前、山野を散策していた時には、本丸の屋敷がある手前あたりに獣避けの結界が張っており、それより先にモンスターが進めないことはわかっていた。害意があつてやっている事ではなく、おそらく万一の時の害獣対策や、単純に俺のような凶体で侵入して来られては、家屋を壊されて困るからだろう。

本丸の池を目指したのは、あれだけの広さがあれば、俺がこの水路を伝って侵入したところで、池ごと壊れることもないと思つたからだ。

(しかし……どちらにしろ、その後は問題だな)

池から上がったところで、彼女の部屋まで赴けば、屋敷が俺の体軀や重さに耐えられぬのは必須。言葉の通じぬ奴らに、襲いに来たと思われれば敵意も向けられることだろう。

であれば、最初から人の形に化けておくのはどうだろうか。

(……俺に、出来るのだろうか)

あれだけ嫌っていたとはいえ、人の形というのはもう嫌と言うほど見飽きている。変化の術さえあれば、化けることなど造作もないはず。

体表を撫でる水の流れを浴びながら、俺は目を閉じた。

(化けるには、その対象を強く印象付けることが肝要だと、鏡が言っていたな)

具体的な誰かを想像した方が、上手くいくかもしれない。そう思って脳裏に一番最初に浮かんだのは、鍛錬場で見た髪の長い刀剣男士だった。和泉守兼定。あいつがあんなの本意で傍に控える事が多いと言うのなら、あいつの姿に化けておけば、万が一見つかっても時間稼ぎ程度には誤魔化せるだろう。

人の形を思い浮かべた上に、あいつの特徴の仔細を俺は想像する。くるぶしまで届かぬばかりの、絹のように長い黒髪。よく通る鼻筋に、凛とした若造らしい表情。目の色は……まあ、俺と同じでも大差ないだろう。体格は良いが長身のしなやかな手足に、袴と上着の姿。

ざつとこんなところか、と思つたところで、硬かつた体表の鱗が随分と柔らかみを帯びていることに気がついた。もうそろそろ向こうの出口に着きそうだ。

「ばよっ」

突然変化した自分の呼吸に戸惑いながら、俺は池から顔を出した。人間は、水の中で呼吸を保つことができない。不慣れた生き物だ。

水の中で揺蕩っている己の赤い着物と、灰色に変化した袴を見る。そういえば、あいつの着ていた羽織を化けさせるのを忘れていた。多少違うような気もするが、大体こんなもんだらう。

幸いにも、周囲に人気はないようだ。岸まで泳いでざばりと水から出ると、着物の端から垂れる水の重さに驚いた。

(なんだ。俺が命じねば、着物すら俺の思う通りには動かんのか)

己から湧き出る水の力を制御して、ある程度は重さを軽く、纏わりつく程度にしておいたが、それでも歩いた時に垂れてくる雫はどうしようもない。竜の体では、草地を歩こうが砂の上を歩こうが、体から垂れる水滴など気にも留めたことがなかった。

さて、このまま中に踏み入って良いものかと戸惑っていると、あろうことか縁側の廊下を曲がつてきた刀剣男士に、声を掛けられてしまった。

「あれ？ 兼さん、今日は加州さんや大和守さんと一緒に、鍛錬場じゃなかった？ こん

なとこで何して……って、うわあ、どうしたの!? びしょ濡れだよ! っっていうか、え、え、兼さんに、耳と尻尾……???

(耳?)

驚愕の表情を浮かべる少年を振り返り、頭上を眺めて思わずはっとする。

そうだ。耳だ。普通、人間の耳はこうじゃない! 尻尾だって生えてはいないじゃないか! すっかり隠すのを忘れていた!

見事なまでに髪から突き出た、自慢の赤い紅葉のような耳を風に靡かせるほどの勢いで、俺はその場を逃げ出した。

「えっ、ちよっ、あつ?! 待っ……誰かあー!」

背後に間抜けな叫び声を聞きながら舌を打つ。思ったよりバレルのが早い。

こうなつては、一気に部屋まで突っ切るしかないようだ。

あちこちから響く誰彼の声を耳にし、せいぜい廊下で直面せぬようにと願いを掛ける間もなく、飛び出してくる男士の面々と鉢合わせる。

人に化けた時点で元々相手を害するものなど持ち合わせてはいないが、身に纏わせた水と泡で襲撃を躲し、せいぜい上手く避けながら、俺は慣れぬ二本足を操って、水鏡で見た階上の彼女の部屋へと急いだ。

「主、長い間起きていては、お身体に障りありませんか？」

「ううん、まだそんなには大丈夫……と言いたいところだけど、目も疲れてきたし、少し休もうかな。長谷部、疲れたら休憩してくれていいよ」

「いえ。主から頂いたお仕事をこなせるのも、この長谷部、至福の極みです。それに、休むと言つても一人ではご不安でしょう。お休みの間も、俺が傍を離れずしつかりとお守りしておりますよ」

「……それ、私が一人だと寝ないのを見越して言ってる？」

「さて、どうでしょう」

冗談めかして小さく笑う長谷部に合わせて、私も笑った。

相変わらず熱が出て体は怠いが、笑うとほんの少し力が出る。

病床にいと、体力なしで出来る事という事でついついネットや動画を見がちになつてしまうが、いくら退屈とはいえ、目を閉じて休息の時間はしつかり取れと暗に促してくる長谷部に従つて、私は大人しく横になる。

側の座卓で本丸の書類仕事を厭うことなくやってくれている長谷部に、私は手を合わせて感謝してから、二階の廊下側に敷いた布団に入り、薄いタオルケットを羽織つた。が、横になつて五分も経たぬうちに、何やら外の喧騒と足音が耳に入ってくる。

思わず寝返りを打つと、座卓に座つたままの長谷部も、不審そうな表情で私と目を合

わせた。

「……どうも、外の方が騒がしいですね」

「でも、防衛システムは反応してないよね……？ 急な襲撃や遡行軍なら、アラームが鳴るはずだし。また誰かが喧嘩や派手な遊びでもしてるのかな？」

まあ、それはそれで困り事だが、敵の来襲に比べれば、喧嘩で柱が折れたり悪戯で蔵が一つ吹き飛ばぐらいは可愛いものだ。恵李朱くんだって、しょっちゅう魔法に失敗してあちこち吹き飛ばしては歌仙さんに怒られてるし。

そう思つてのんびりと構えていると、私が寝転がっていたすぐ傍の襖が、スパーンといい音を立てて開いた。

「た、たたたたた大変ばい！」

「博多！ 主がお休み中なのだぞ！ 入る時はもう少し静かに……」

「それどころじゃなかとよ！ 侵入者ばい！」

赤縁メガネが特徴的な男の子、博多藤四郎くんが口角泡を飛ばしながら慌てた表情で報告してくるのを見て、たまらず身を起こしながらも、私は困惑気味の長谷部と顔を見合わせた。その間にも、開けた障子の外からはわーわー言う声と足音とが、如実にここまで聞こえてくる。

「この本丸に侵入者だ?! だが警報は……」

「俺にもわからん！　ただ、どこのシステムにも警報にも引つ掛からんと！」

「そんな馬鹿な……いやそうでなくとも、侵入者であれば邪な気配くらいは感じるだろう!?　この俺すらも何も感じないぞ！　他の誰も、侵入を許すまで気付いていなかったと言うのか!?!」

「一番最初に気付いたのは堀川しゃんやけんど、邪悪なもんは何も感じんかったって……その後誰が捕まえようとしても捕まらんばい。何か大事なもん盗まれたり、攻撃されたりはなかと。ただ逃げ回るばかりやし、おまけに廊下中アワアワのドロドロやけん」

「泡?」

思わずぴんと来てそう答えた私に、長谷部が口を開きかける前に、ばたばたと黄緑の髪の毛の子が飛び込んできた。毛利藤四郎くんだ。その制服も帽子も、ふわふわした髪の間まで、見事なまでに泡だらけになっている。目に入りそうになる泡に、彼は幼い顔を顰めていた。

「あ、主さまあ、あいつ、速いです……今、極短刀のみんなが応戦してるんですが、動きが変則的な上に奇妙な泡と水の術を使ってきて！　見た目は和泉守さんそっくりなんですけど、この僕らが遅れを……うわあつ！」

「ああつ！　毛利、しっかりするばい！」

言っている傍からズルツと滑って転ぶ毛利くんを、支えようとした博多くんが巻き添えを食らって、二人してつるーんと廊下を滑っていった。廊下が傾いているはずなどないのに、まるで坂道を転がしたのかというくらいの見事な滑りようだ。

思わず立ち上がった障子の傍から覗こうとする私の肩を、長谷部の手がそつと止めた。

「主、お気を付けを。うちの精鋭の刀がこんな目に遭うなど、今のところ実害がないとはいえ、敵は相当の手練か」と

「あ……いや。ねえ、長谷部。多分、私の知ってる子が来るよ」

目を丸くする長谷部の瞳に答えようとしたその時、この階を登ってくる階段の激しい足音が、廊下の向こうからどたどたと聞こえてきた。

「ちよつとお！ どこへ行くのさ！ ここから先は通さないよ！」

「主君の元へは行かせませ……うわあつ！」

「なーにするんだよお！ 服も靴下もどろどろじやないか！」

乱ちやん、秋田くん、包丁くんの悲鳴が次々と響き渡る。廊下に現れた三人が、泡でずるずる滑りながらも尚応戦しようと、壁を蹴りながら激しく体当たりで迫るその相手は、大柄で着物を纏っているとは思えないほど軽やかな動きで、身を捻りながらそれを交わす。床の滑りすら利用して、並の人とは思えぬ身のこなしで、上へ下へと宙返しし

ながら攻撃を躲す様は、まるで嵐に舞う紅葉のようだ。

ずだん、ずだんと力強い足音の響く音を聞きながら、私は確信を深めていた。

「貴様……主に仇なす者は斬る！」

「一体どうやって入ったか知らないが、よくもここまで俺たちを翻弄してくれたな。写しだからと侮った事、後悔させてやる！」

恐れをなさず、真正面から挑みにかかろうと走り出した長谷部の向かい側から、丁度階段を登ってきて追いついたまんばちゃん、刀を構えて謎の侵入者に迫る。

さすがにこれはまずいと、その刃が届く前に私は腹の底から大声を振り絞って叫んだ。

「待つて！ その子はうちのタママツネだから攻撃しないで!!!」

「……………え？」

その場にいた全員が、刀を振り下ろす直前でぴたりと動きを止めた。狙われてまさに掌から泡と水噴射を放とうとしていた本人までもが、驚いたようにこちらをぼかんと見つめている。リボンのような大きな赤い耳が、私の声に応えるみたいに小さくひらんと揺れた。

「そうだよ。青雨。大丈夫だよ。仲間だとわかってくれたら、みんな君のことは攻撃しない。大丈夫。いい子だから、こっちにおいで」

さすがに廊下へ踏み出すのはすってんころりんの危機なので憚られたが、部屋の中からちよいちよいと手招きすると、ずだんつと男士達の間から脚を踏み出したタマミツネは、上手いこと化けたつもりらしいその山姥みたいな黒髪を振り乱して、一足飛びに目の前へとやって来ると、こちらを見下ろした。

とあるタマミツネの日記 《第四話》

目の前に舞い降りると、女はぼかんとした表情で俺のことを見上げていた。

あれだけ確信を持って呼びつけたくせに、それは失礼だろうと思えるくらいには、呆気に取られた顔で。

けれどすぐに、小さく開いた唇が懐っこい満面の笑みに変わり、俺の名を呼んだ。

「青雨」

「……」

「ふふ。もしかして、心配してわざわざここまで来てくれたの？」

心配、か。そういう感情だということに、なるのだろうか。

それに迷って肯定も否定も返せずにいるうちに、背伸びした女の掌を、ふわりと前髪の上に乗せられてしまった。辛うじて届いているだけとはいえ、こんな部位を撫でられるのは随分と久方ぶりの感覚だ。タマミツネの姿であれば、きつと俺の方から近づかぬ限り、手が届かなかったであろう。

背後から、狼狽えた複数の声が掛かった。

「ええっと、主……？」

「うお、ごめん。みんなに紹介が遅れちゃったね。敷地の山に、この間タマミツネを顕現でお迎えしたことは、みんなも知ってるよね？　この子はそのタマミツネ。……の、化けた姿って言えばいいのかな？　名前は青雨。お騒がせしちやっごめんね。これから仲良くしてあげてください」

俺の代わりに頭を下げた女に、周囲の短刀連中があわあわと手を振って慌てていた。

「主がそんな畏まることなかと！」

「そつ、そうですよ！　僕らも、早とちりした訳ですよ……」

「なぐるほど、それで全然邪悪な感じがしなかったんだ？　敵じゃあなさそうだなって思ったけど、強いからボク冷や冷やしちやった」

「ホントですよ……主の身の上に何かあったらどうしようかと」

手を合わせて、周りを囲んできた短刀の子供らに謝っていた女は、まだ多少置いて行かれ気味のへし切長谷部と、その横にいた金髪に赤鉢巻の刀剣男士を見上げた。こいつも、彼女がよく連れているから見たことがある。

名は確か、山姥切国広。剣筋がまつすぐで、迷いなき強さを感じた。あのまま一太刀、こいつらに浴びせられていたらただでは済まなかっただろう。

俺のことをちらちら胡散臭そうな横目で見ながらも、長谷部がこう言ってきた。

「その……主は何故、こいつが例のタマミツネだと？」

「……勘？」

「随分とぎつくりですねえ!」

「いやだって、そういうものじゃない!? 顕現したのは私だし、何となくつていうか……水と泡で薄々見当はついてたけど、姿を見たらすぐにわかったよ」

「まあ、主は俺ら全ての刀剣男士を統べる存在だからな。実際に顕現した者と、特別な繋がりを持っているのはおかしな事ではないが……それにしても、人間に化けるとは。あの山には、何か特殊な霊力でも満ち溢れているのか?」

そう言った山姥切国広は、思ったよりも抵抗感のある様子はなく、呆れたような微笑みを浮かべて俺を見ている。

あの山が特殊なのか、俺が特殊なのかはわからんが、それを説明しようにも声を出せずにいると、ふとこちらに聞き覚えのある足音が近づいて来た。

「はっはっは。まさかこんな形でおぬしがこの本丸に現れるとはなあ」

聞く者全員の心を、どことなく和らげてしまいたいような笑い声。

のんびりした步調でこちらに向かいながらも、廊下の泡に足を取られかけては慌てて周囲の短刀に手を貸されている三日月宗近が、俺のすぐ傍に立った。

(そもそもお前の入れ知恵がなければ、俺も気付きはしなかったんだが?)

「おや。俺は何か余計な事を言ったかな。何をどう手がかりにするかはおぬし次第。あ

のまま留まる道を選ぶも、歩み寄る道を選ぶも、青雨、おぬしの心一つであろう」

「……おい、三日月。お前まさか何か知っているのか!？」

「さあてな。昨晚、散歩の際のひとりごとを、こやつには聞かれてしまっていたようだ」
俺の心を読んだかのようにそう言った三日月は、長谷部に問い詰められながら、相変わらず暢気に笑っている。そんな三日月と俺を、女は不思議そうに見比べていた。俺とこいつの間のやり取りを知らないのだから、無理もない。

そこでふと、足元に目をやった山姥切が慌てたように口を挟んだ。

「あ、主。それはともかく、青雨に水を湧かせるのを止めるように言っちゃたらどうだ? 廊下が全面水浸しなんだが」

「へっ……えっ、わあ?!?!? ちよつと待って、なんでセイの足元こんなにびしょびしょなの!？」

「元はこやつは水神であろう? 人間に化けたばかりで、力の制御が上手くいっておらんのかもしれんなあ。そうそう、俺は宗三そうざの奴に言伝を頼まれて、ここまで来たのだった。雨漏りで天井が浸水してきているから、どうにかしてくれないかとな。はっはっは」

「それは早く言っておじいちゃん!？」

事実、俺が困惑する程度の水たまりで、廊下は色が変わっていた。確かに、力が暴走

している時の感覚とは違う。単に人間の体では小さ過ぎて、タマミツネの体では保持できていた力が、外に漏れ出てきているのだろう。どうにかして力を節制する事も慣れればできるはずなのだが、あの姿以外になるのが久方ぶりすぎて、如何せんすぐには勝手がわからない。

何振かの短刀が桶と雑巾を運んできて、困惑気味の俺の着物を拭こうとしてくれるが、それでは追いつくはずがないと思う。が、それを伝えようにも、人間の喉の動かし方が未だわからず、ここは一旦池に戻るべきだろうかと考えたところで、今いまのつぎ剣と呼ばれていた短刀が、軽々と廊下を滑りながらこちらを振り向いて言った。

「あのあの！ それだったら、ぼくらがつかっていた、びにーるぷーるというものをもってきてはどうでしょう！」

「ああ……確かに、いい考えですね！」

「あれなら軽くてすぐ運べますし、しばらくの間なら水も溜められますね」

そう言った短刀達が、すぐさま廊下を飛び出してどこかに走って行く。先ほどは泡に手こずっていたというのに、もう慣れたらしく誰も転ばない。驚異的な運動能力だ。

それから程なくして、短刀の連中は薄くて軽い、人工素材で作られたらしい何かを運んできた。こんなペラペラで水をどうにか出来るのかと思ったら、空気を入れると伸びて膨らみ、巨大な水桶になる仕組みになっているらしい。

ヨツミワドウの腹の皮みたいなものだろうかと見知ったモンスターの姿を思い浮かべながら、そのびにーるぷーるとやらに座り込んで縁を指でつついていると、隣で主は一生懸命ぺこぺこ頭を下げていた。

「みつ……みんなごめん……！ 私も片付け手伝うからあー！」

「何言ってるの、主さんは無理しちゃダメでしょ？ お熱があるんだから」

「そうですよ。今は青雨さんと語らつてあげてください。この本丸の敷地にいるとはいえ、普段と違う環境では不安でしょうし」

「お掃除は俺らに任せておくんだぞ！ あつても、あとでござ褒美にお菓子ちょうだい！」

「包丁……具合の悪い主君に、お菓子を強請るなんて」

「ふふ……わかったわかった。包丁くんにもみんなにも、お菓子いっぱい弾もうね。ありがとう」

順に軽く皆の頭を撫でる彼女を、俺は見た。こうしていると姉か母親のようだ。

言葉が出ずとも、ここまでして留まる手段をくれた相手には謝意を示して然るべきだろう。そう思い、両手を胸の前で組んで軽く頭を下げると、彼らは驚いたような顔で互いに目を見合わせた後に、どこか照れ臭そうな様子で去って行った。

……人間の心というのはよくわからないが、刀の心もよくわからない。

「青雨つてば、随分風流なお辞儀の仕方知ってるんだねえ」

ぶーるのすぐ側にやって来た女が、座り込んで俺のことを見上げていた。これなら横に布団を敷いていても濡れる事はない。

その布団の移動を手伝った打刀の連中が部屋を出る際に、山姥切と長谷部が言っていた。

「じゃあ、俺は下の階の片付けの手伝いに行く。無理するなよ」

「俺は部屋の外におりますので、何かあればいつでもお呼び付けください」

「うん。ありがとうね、ふたりとも」

長谷部の方から暗に、「だから絶対にお前は主に妙な真似をするんじゃないぞ」という脅すような視線を感じたが、この忠犬は何でもかんでも心配し過ぎではないだろうか。

そこまで威嚇しても何も出はしないのに、と呆れて多少肩を竦めながら、俺は開け放した障子の向こうに人影が消えるのを見送った。

「さて……他のみんなも言ってたけど、青雨は一体どうやってこの本丸に入って来たの？ 一応、安全上の問題で黙除けの結界はしてあるって話だったんだけど」

半袖の甚兵衛に羽織を纏った彼女が、俺を見上げる。俺は少し迷ってから、一度ビニールプールから数歩外へ出ると廊下の手前に立ち、窓から見える外の池を指差した。

廊下で胡座をかいて待機していた長谷部が、こちらを眺めて呟く。

「……主、もしかすると、こいつは人間の言葉がわからないのでは？」

（失礼なことを言うな。お前達の喋る内容は一言一句漏らさず分かっている。人間の言葉と喉の動かし方に、まだ慣れていないだけだ）

「大丈夫。喋れなくてもちゃんとわかつてるよ。ね。あの池から入って来たって言い込んでよね」

驚いて振り向くと、主は髪留めで緩く結び直した頭を傾げて微笑んでいた。

差し出された手に掌を乗せると、熱を持った指先が暖かい。俺をぶーるの中に戻した主は、自分も布団の上へ座りながら言った。

「なるほどね。何か最近のおじいちゃんにはやにや楽しそうにしていると思ったけど、そういうことだったか。不思議な水路を通って、湖から本丸の池まで移動してきたの？

すごいなあ」

（お前が全然顔を見せに来ないせいだ。勝手にふらふら現れたかと思えば勝手に消えるなど……いちいち中途半端な真似で俺の気を揉ませるな）

「んふ。ごめんごめん。私、青雨に嫌われてると思ってたから。わざわざ、みんなに攻撃されるかもしれないのに、ここまで来てくれると思ってなかった。びっくりしたけど嬉しい。ありがとうね」

ふわふわと笑った顔を眺めながら考えて、ふと気付く。

さつきから俺は一言も声を発していないのに、女の喋る言葉は辻褄が通っていた。
(……俺の言葉がわかるのか?)

「何となくね。湖にいた時は、そんなにはつきりとは聞こえなかったけど。あとはその、お耳と尻尾があればわかりやすいかな」

はたと、忙しく動く頭上の耳を俺は両手で押さえてみた。尾はそこまで揺れていないと思つたが、そんなにわかりやすいだろうか。

それにしても、普段モンスターでいる間は顔の筋肉をそこまで使わないので、表情というものが作りづらい。未だ強張っている顔面を両の掌でごしごし擦っていると、女が言つた。

「青雨のおめめは、やっぱり綺麗だね」

(……?)

「髪や尻尾とは違うけど、翡翠みたいに青い色。タママツネの時はあんまり近くに寄れなくて、遠くから眺めてるだけだったけど、この姿になつてもやっぱり綺麗だなあ」
びにーるぷーる越しに、目の前に跪いた女が見上げてきて、頭に手を触れる。

髪は和泉守の黒に合わせているからともかく、この頭から生えた耳やら目の色やらがどちらかといえば派手な俺と違い、何の変哲もない女の黒目と黒髪を見下ろしながら、俺は言つた。

(……この身に化けている時ならともかく、俺の赤黒い体をして『綺麗』だと言ったのはお前が初めてだ)

「だって、綺麗なものは綺麗だもん。竜の時の体だって紅葉みたいよ」

(この色の由来を知っても尚か?)

「ごめんね。笛を運んできて顕現する前に、何度か透心の術を夜翰ヨハネさんと使ったから、本当は少しだけ知ってるの。……あなたは、元々赤色の竜じゃなかったんだよね」

思わず目を見開くと、俺と目を合わせたままで女は切なげに微笑む。

「全部を見たわけじゃない。でも、タマミツネに転生してくる更に前、あなたは大切な相手を守るために、その身を盾にして闘った。湖と同じと称えられるくらいに青かった体は、その時の返り血を浴びたせいで赤く染まってしまった」

(……俺の犯した過ちを知っていたのか)

「でも、あなたは人間を殺したかったわけじゃない。打たれても最低限の反撃だけでやり返さなかったのは、これ以上誰も傷付けたくなかったから。あなたに染み付いた赤は、他人の血じゃなくて、傷付いても耐え忍び続けたあなたの血の色でしょう」

(……)

着物が濡れるのも厭わずに、女はそつと俺の首に両腕を回した。くつついた頬から、弱った人間特有の汗の匂いと、甘い香りがした。

「あなたが嫌なら、私はこれ以上何も言わないけれど。でも、誰かのために闘って、どんなに憎んでも自分が傷付いても、心の奥底では人への優しさを失わなかったあなたを、私はとても綺麗だと思う。青雨って名前を与えたのは、青かった頃のあなたに戻って欲しいからじゃなくて、あなたの心の綺麗さと清らかさを映した名前だと思ったから」

(……)

「ちよつと大袈裟すぎたかな？ でも私は……うわあつ」

小さな女は、人間とはいえ俺の腕の力でも傍に引き寄せるには十分だった。

ばしやん、と僅かに溜まった水が跳ねる。半分転ぶようにして俺の着物の内に飛び込んできた彼女は、少しびっくりしたような顔をしながらも、腕の内側で大人しくしていた。

嗚呼。そうだ。この感覚だ。尻尾の先で叩き潰せば、即座に死んでしまうような弱い小鳥を、何故かわざわざ囲って逃さずにいるかのような。それでいて、俺よりも大きなものに、守られているかのような。

すぐ真下にある艶やかな髪の毛の頭頂に、俺は顎を乗せる。

「……気に入ってくれたのかな？」

(……)。俺の心が読めるんだろう)

「ふふ、そうだけど。言葉にしてくれたら、それはそれで安心するもんだよ？」

肩を震わせて小さく笑った彼女は、くしゅんと一つくしゃみをした。
(寒いのか)

「うーん、今日は暑いくらいだけど……流石にずつと水に浸かつてるのは無理があるみたい。元気だったらセイとずつとくつついていられるのにな」

彼女は残念そうにそう言いながら、濡れた服を御簾の内側で手早く着替えて、麻の浴衣姿でこちらに戻つて来た。帯も体の横で結ぶだけの簡素なものだ。

触れていたくとも、添い寝すら出来ず横で見ているだけとは。本格的に化ける練習をきちんとした方が良さそうだ、と俺が濡れた着物の袖を眺めて思案を巡らせている間に、彼女は廊下の長谷部に向かつて声を掛けていた。

「ごめん、お茶ってまだあるー？ 青雨の分も頼んでいい？」

「あいつも人間の茶を飲むのですか？」

「いやわかんないけど……長谷部やみんなも嗜んでるくらいだから、普通に飲むかなーって。あ、でも、そろそろお薬の時間か。私が自分で取りに行こうかな」

「種類と量さえ教えていただければ、俺が茶と一緒に持つて参りますよ」

そう応える物腰柔らかな声が聞こえてくる。よく仕事のできる忠犬のようだ。

でも下の階の様子が気になるから、と畳の縁から廊下に踏み出した彼女の後ろ姿を見た途端、妙に鮮烈に、湖での光景が頭に蘇った。

明日もどうせ下手な歌を歌いに来るのだろう、と思つて疑いもしなかった、随分と前に見たように感じる、ふらふらと頼りなげな背中と長い髪。

何の為にここまで来たのかを思い出したその瞬間に、俺は立ち上がつて、彼女の袖を繋ぎ止めていた。

「あゝ」

「……。え、えっ!？」

僅かな驚きの空白を挟んだ後に、振り返つたまま俺を見つめる顔に、この喉と唇は思つたよりもずつと、澱みなく動いて音を紡いだ。

「もう、おいていかないでくれ」

「……。えっ……。あつ、うそ、青雨ひよつとして、私が湖にあなたを捨てて行つたと思つてたの!？」 そんな訳ないじゃん!」

言葉にした方が安心することもあるというのは、本当だつたらしい。いくら念話のできる彼女でも、ここまでは読み切れていなかったようだ。

同様に驚いている長谷部の前で、彼女は着替えた衣を濡らさないように、雫の滴る俺の額を引き寄せると、そつと自分の額を押し当てた。

「大丈夫だよ……。私は自分の寿命が尽きるまでは、青雨の前からいなくなつたりしないつもりだから」

「……」

「と言つてもまあ、この体じゃ信用ならないよねえ。えへへ。でも、今回はちよつと下の階を見たらすぐ戻つて来るから、ほんとに大丈夫。ね？」

「……」

「おーい、青雨さーん？」

「コラ貴様！ そのびしよびしよの体でこれ以上主を困らせるんじゃない、主を離せ！ お前が動き回つたらまた本丸中水浸しだろうが！」

嗚呼、煩い。

久しぶりにこれだけ近くに居るのだから、少しくらい大人しく匂いを嗅がせてくれないも良いだろうに。

解らせてやるつもりで、俺は背を屈めたまま彼女の瞳を覗き込んだ。

「……紫咲。あんたが、俺のあるじだ」

「！」

「だから、あんたが戻つて来られないなら、俺がずっと傍に居れば良い。死ぬまで、お前の傍を離れない」

「……そ、それは嬉しいけど、お手洗いとかちよつとした用事の時くらい、気を張つてなくてもいいんだよ？ そんな目を離れた隙に死んだりしないって」

「青雨貴様アア！ 力の制御も出来ぬうちから主お世話係など百年早いわ！ ビニールプールから出直して来い！ とうかさつさと戻れ！」

目を白黒させる主と、ぎゃあぎゃあ喚く長谷部の顔が、少しばかり愉快だった。幾年振りだろうか、こんな風に頬が緩むのは。

そう思つて主に微笑めば、どういふ訳か彼女は、俺に向かつて益々頬を赤くした。

とあるタマミツネの日記 《エピローグ》

早いもので、あれから季節は移り変わり、秋を迎えようとしていた。

タマミツネを本丸に迎えたい、なんてことを話し始めてからはや四ヶ月。

折角迎えるのならば、この場所のことも私のこともうんと大好きになつてくれればいい、とは思つたけれど、想像以上の愛を注いでくれるようになった彼が、今私の隣で、人の形を取りながら毛繕いに勤しんでいた。

巨大なタマミツネの姿から人の姿に化けて過ごしていても、もう力の制御はお手のものになつたらしく、辺りがびしよびしよになる事もない。気兼ねなくこの本丸の屋敷へ出入り出来るようになり、私の隣にいられるようになった事を、彼は大変喜んでいらしく、頭上の赤い耳が時々ぴっぴつと機嫌良さに揺れていた。

(……いや、普通に髪を梳かしてるだけなのに毛繕いはおかしいか。でもなんか、中身がタマミツネだつて思うと毛繕いに見えるんだよなあ)

「何見てるんだ」

「えっ、あつ、いやっ、何でも！ 相変わらず綺麗だなあつて思つて」

「そういうあんたは、相変わらず歯の浮くような台詞が得意だな」

「ええ!? そんなに言ってる!」

セイは物静かで表情は動かないけれど、考えていることは随分とわかりやすい。硬い装甲に覆われた尻尾の下側の、紫色の艶やかな毛が、縁側の床板を掃くようにふあさつと一回揺れた。ふ、と小さく口元が微笑んで、穏やかな翡翠の目が私を見つめている。秋の落ち葉を思わせる長髪が風に流れて、吹き流しのように舞っている中で微笑む顔はとても優しく、私は人間の姿の彼にも、うっかり見惚れてしまうのだ。

「そんなに妙か?」

「いや妙とかじゃなくて。化ける時って、髪の毛の色とか体とか服装も、自由に変えられるんだね」

「あんた達にバレてしまったら、和泉守いずみのかみの格好をしている意味は別にないからな」

初めて私の目の前に、人の姿で現れた時のセイは、兼さんを模した格好をしていて黒髪だった。一番私の近くに多い刀剣男士をモデルにしたらしい。

ただ、本丸のみんなへの自己紹介も済んだところだったので、確かにこれ以上兼さんの髪色を真似る必要はなくなつた。童の時の体色に合わせれば赤が似合いなのだろうが、さりとて黒髪も素敵だし、と私が甲乙つけ難さに唸っていると、「ではこれでどうだ」と赤と黒が混じつた褐色らしい髪色にくれたのだ。

「やはり黒の方が良かったか」

「ううん。私この色好き。セイの体の色だもん」

「青の方が好きなんじゃないか？ 俺が言うのも何だが、転生してくる前は、青色の竜は何故か随分人間どもの評判が良かったぞ。あくまで魔法で化けた身でしかないとはいえ、見せてやれなくもない」

「青ももちろん好きだよ。でも、私のために無理にあるがままの色を変えなくたっていい。セイはセイであるだけで綺麗だから、どんな色でも私きつとうつとりしちゃう」

「……そうか」

ぐるん、と大きな尻尾を巻き付けて、青雨は私の腰とお尻を巨大な尻尾で抱き寄せるようにしながら、大柄な身をさりげなく傍へ寄せてきた。時々、無意識でやってしまうらしい。やつぱり、耳と尻尾は正直だ。

「……嘘じゃないよ？」

「お前が嘘が吐けるほど器用な奴だとは思っていない」

あまりに正直な評価に思わず笑い声を上げながら、私は明るめの赤い着物を纏った広い肩口に、頭を寄せる。ほんの少し、磯や潮風の香りがした。

「この本丸とか山にある湖って淡水だよな？ どうして青雨から海の香りがするんだろ」

「海か。たまに、水路を開いて見物に行く。俺は、潮水の中でも泳げるからな。鯨や海豚

の群れも見たことがある」

「えー！ すごー！ いいなあ」

「俺にとつて、水は記憶が溶け込んだ媒体でもある。お前が眠れない晩には、鯨の鳴き声を録つてきて聞かせてやろう」

「そんなことできるの……？」

「お前達の機械でやる『録音』はよくわからんが、俺が水と泡を使つてやるこれも、多分同じことだ」

立てた青雨の指先に、ぷわつと緑色の泡が現れる。くるくるとゆっくり回転しながら、陽の光にきらきら薄い膜を輝かせた泡に、そつと耳を近付けると、ここからは遙か遠いはずの潮騒が確かに聞こえてきた。

本丸でも景趣のシステムを変えれば、周りを海にできるしいつでも皆に海水浴をさせてあげられるけれど、この音は青雨が自分の目で見てきた、青雨だけの海の音なのだ。きつと。

「素敵だね。私がここから動けなくても、青雨の見てる世界を見られるんだ」

「……お前ら人間が遊びに行くほど面白いものは、きつとないぞ？」

「他の人がどう思おうと関係ないよー。私は、セイが好きな景色と一緒に共有できるのが嬉しいの。それに、私が好きな物のこともいっぱい喋っちゃおうと思うし」

「別にかまわん」

「迷惑じゃない？ だって青雨は、人間のことがあんまり好きじゃないでしょ」

少し考えるように遠くを見ながら、青雨は翡翠色の目を微かに眇め、ややあつて隣にいる私の手を黙って取った。

「人間は、確かに愚かだとは思う。だが、それで言えばお前を好いている俺も同じことだ。今の俺は、神でいることは辞めた。ただの妖獣の身で、人間のことを愚かだの何だのと断ずる筋合いもない」

「……」

「……それに、お前達の作り上げたものを、どうしても憎めない。そこに在る生活の音や想いに、近寄ればつい耳を傾けてしまう。まあ、だから俺は神には向いていないのかも知れないがな」

昔もよくそう言われた、と独りごちてから、青雨はふわあと大きな欠伸をした。日向のぼかぼかした日差しを浴びながら、眠そうにぼわぼわと目を細めている。タマミツネの時と同じ艶やかで美しい紫の尾は、水の霊力のおかげで濡れた時の柔らかさを保ちながらも、日に当たって毛布のようなふわふわの触り心地だった。

それに包まれながら、私は思わず微笑みながら髪に手を伸ばした。まだ人の姿に顕現して日が浅く不器用な青雨は、兼さんとは違って、顔の横の長い毛を結んでおらず下ろ

しっぱなしだ。けれど、教えればきつとすぐに出来るようになるだろう。

「青雨は、きつと好奇心旺盛な神様なんだね」

「好奇心……？ 俺は、下手をすれば迫害されるから、必要に駆られて人間のことで文化を学んでいただけだ」

「そうかもしれないけど。でも、知ろうとしてくれたでしょ。昔も、この本丸に来てからも。そうじゃないと、私に会いにここまで来てくれないでしょう」

人差し指で、形の整った鼻先をちよんとつつく。すると。

「それは……人間への興味とは違う。お前のことが好きだからだ」

唐突にさらりとそう言われて、何も飲んでないのに咽せかけた。

どうしてそうなった!? と慌てふためく私の前で、表情を変えない青雨は、自分がどれほど重大なことを言ったのかをまるで分かっていないような顔で、きよとりと耳の生えた頭を傾げ、尻尾だけをふさふさ動かしながら私に言った。

「お前が好きだ」

「……」

「お前のことが、好きだ。だから、もっと知りたい」

「……」

じつ、と翡翠色の瞳から視線が注がれている。大真面目だ。

青雨が、素直でいい子なのは知っていた。出逢う前から大好きだった。私だけのタマミツネに、愛してもらえたらどれだけいいかとも思っていた。けれどまさか、こんなにもあつさりと。

目の前の現実を信じられずに、啞然と固まってしまった私を見て、青雨の尻尾の動きが不安そうに止まった。

「……俺の言葉は、これで合っているか？」

「あつ、合ってるよ!?! ものすごく合ってる! これ以上なく合ってるけど!」

いけない。折角気持ちを伝えてくれたのに、私が挙動不審すぎて不安にさせてしまった。

慌ててそう言い返すも、自分の話す言葉に自信が持てなかったららしい青雨は、心配そうに目を眇めて問い返してきた。

「俺のような、ケダモノ 獣に想いを寄せられるのは嫌か」

「うううううううううう!?!? そんなことないよ!?!」

「『うん』か『ううん』なのか、どっちなんだ」

両手を握り、ずいと顔を寄せながら、青雨が眉を顰める。普段だったら大歓喜だけど、今はそのイケメンすぎる顔をこちらに近付け過ぎないで欲しい。余計パニックになつてしまうから。

必死で言葉を捻り出しながら私は言った。

「ええと……えつとえつとNo!」

「……それは、外国語か?」

綺麗な髪を肩に流したまま、緩やかに首を傾げられる。あちこちの水を渡り歩いて物知りの青雨でも、英語は詳しくないらしい。であれば。

私は両腕で胸の前にはつてんを作りながら、こう言った。

「不^{いいえ}是!」

「……ああ、なるほど。それならわかる。嫌ではない、ということだな」

安堵したように穏やかな微笑みが浮かんで、不安気に動きを止めていた尻尾が、またふあさふあさと振られ始める。

出身が中国系の信仰にも由来しているらしい青雨は、日本にも古くから流入してきた中国語が、少しなら理解できるようだ。

僅かの間にめまぐるしく変わった表情に驚きながらも、私は大柄な体にぎゅつと抱きついて頭を撫でた。

「嫌なわけではないでしょう。だから、そんな不安そうな顔しなくて大丈夫。私も、青雨が隣にいたら嬉しい。ありがとう。大好きだよ」

「そうか。それならいい」

「ふふ」

「……」

「どうかした？」

「いや……人間の番は、何をすれば番らしく見えるのかを考えていた。今度夜翰に聞いてみるとしよう」

「そこまでしなくっていいよ!？」

再び遠くへ視線を戻して、ぼんやりと何かを考えている真面目さに、思わずつつこけそうになった。青雨は、近付いてみると意外とゆるんとした穏やかな神様で、たまに何を考えているのかわからないだけに、前途多難そうだ。でも、そこが面白いところだとも思う。

「うくん……じゃあさ。いつもは私が青雨に寄り掛かってばっかりだから、今度はセイが私の膝に横になって」

「??？」

「ここに頭を乗せるの。人間の姿だったら、少し楽でしょ」

モンスターの姿でもいくらでもやってあげるけど、と笑いながら私が膝を叩くと、青雨は縁側に横になって、ごろりと赤髪の頭を乗せた。こちら側を向いた頭を、髪を漉くようにして撫でていると、青雨はリラックスしたように目を細め始めた。

「これも人間の番がやるのか」

「まあ番だけとは限らないけどね。どこか撫でて欲しい場所ある？」

「みみの……つけね……」

「はいはい」

もう半分くらいとうとうとしているので、可笑しくなりながら私はつるりとした葉っぱのような耳の付け根や後ろ側を、マッサージするように指先で解しながら、もう片方の手で青雨の前髪を撫でた。すると……

(……あれ。あれれ?)

ふと変わった手触りに違和感を覚えてから、私は目を見開いた。タマミツネの顔に付いているのと同じようなヒレ型の耳は、いつのまにか真っ赤な毛に覆われたふさふさの犬のような耳に変わっていた。紫毛だった尻尾も、鱗に覆われた部分がなくなっ、真っ赤な襟巻きみたいな狐の尾に変わっている。これじゃ本格的に、狐が人間に化けたみたいだ。青雨なんだけど、一部の外見が全然違ってしまっている。

魔法のような現象にぼかんとしていると、覚えのある声が聞こえた。

「おや。前世の姿を取り戻したんじゃないか」

すとつ、とどこからともなく音を立てずに庭に降り立ったのは、本丸のこんのすけ……ではなく、狐神の伽々未さんだった。すやすやと寝息を立てる青雨を起こさぬよ

う、とどこも縁側に近付いてきた伽々未さんに、私も小声で話しかけた。

「伽々未さん、セイの知り合いなの？」

「ちいとばかし、昔に因縁があつての。彼をタマミツネを通してこの世界まで転生させたのは儂じゃよ」

「まあ、ヨルクン達の時も同じパターンだったから、もしかしてと思つたけど……」

次から次へと行き場のない子をうちに連れて来て、私は迷子相談所か何かか。

楽しいから別にいいけども、と呆れながら笑つてしていると、伽々未さんは小狐姿のまま、ひくひくと鼻を青雨に近付けて匂いを確かめながら言つた。

「前世のそやつは竜神じゃが、化け術を教えたのは儂じゃからな。人に化けると狐の耳と尾が生えるんじや」

「なるほど……?」

「心を開く相手に出逢い、『物語』が定着すれば、転生してきた存在はおまんの前に本当の姿を現す。この短期間で、よくぞ良い主となり得たな。紫咲よ」

褒めてもらえたけど、全然ピンとこない。というか、私は可愛い子が次々我が家と本丸にやつて来てくれるおかげで、得しかしていないような気がする。

「まだ全つ然わかんない事だらけだね!」

「まあまあ、それはおいおい知つていけばよい。何せ……勝手な願いですまんが、そやつ

は儂にとつてもとりわけ気に掛かるといふか、心配のタネじゃ。おまんが側にいれば、それだけで安心じゃよ。青雨を頼んだぞ」

そう言つて、いつも細めている目を微かに開け、金色の瞳を覗かせた伽々未さんの表情に、こころなしかハツとなつた。

上手く言えないけれど、いつものらりくらりとした伽々未さんの、こんな表情は初めて見たのだ。どこか切ないような、懇願するような。それは青雨のこれからの……いや、彼にとつては「これまでに」経験してきた出来事と、何か関係があるのだろうか。

私は掌で守るように青雨の頭を撫でながら、こくりと頷いた。

「わかりました」

「よい返事じゃ。あ、ちなみにそやつは、狐の術と融合しておるが、スキンシップのツボは犬に近いでの。撫でられて喜ぶ場所は大体犬と一緒にじゃ。参考にするとよい」

「貴重な情報どうも!？」

大事なのかどうなのか全くわからない事を言い残して、伽々未さんは空の上へと去つて行つた。三日月おじいちゃんもだが、この方も大概食えない神様だと思ふ。

騒いでいた気配を察したのか、柔らかそうな毛に覆われた青雨の耳が時折びくびく動いたが、彼はまだ微睡の海を彷徨つたまま、私の側に大柄な体をくつつけるように丸めて、ぼそりと寝言を言つた。

「……悪くない」

安らかなその顔があまりに幸せそうで、今はとりあえずこのままでいつかと微笑みながら、私は穏やかな陽射しの中、与えられた情報を参考に、耳周りやおでこを撫でながら、青雨と平穏な時間を過ごしたのだった。

マルメロ家の日常5

青雨と夜翰さんの出逢い

「ヨハネさん。改めまして、この子が青雨だよ。よろしくね」

「……」

「よろしくね」

「よろしくねえ」

紹介する紫咲ムラサキの隣で、何故か夜羽ヨルハと恵李朱エリスまでもが、囁すようにきやつきやとはしゃいでいる。

紫咲の家の一室で、夜翰ヨハネは獣人姿の青雨と改めて向き合った。水神の力を持つ、竜の青年。それは、紫咲と透心の術を使った時に、未だ人としての形を取っていない彼の心と記憶を覗くことで知った。

紫咲には、「物語」の中の存在をこの世に導き出し、触れ合うことのできる力がある。夜翰自身もそうやって紫咲達の側にいることを選んだし、今やいっぱしのパートナーだ。紫咲を想う人間は一人ではないが、こうして家族でいられ、他の仲間と知り合う機会ができる事を、誇りに思っている。

そんな彼女が、新たに家族に迎えたいと言う竜が、どんな奴なのか。

夜羽と恵李朱に、膝に座られたり肩によじ登られたりしていた青雨は、それを厭うこともなく、褐色の髪から伸びた赤い狐耳をこちらに向けながら、夜翰にじつと視線を注いでいた。

ちなみに夜羽と恵李朱は、紫咲を主とする天使と悪魔の双子である。魂の年齢は成人しているはずだが、中身はまだまだ幼い。そんな弟分達にもすつかり気に入られているらしい青雨は、無口だと話に聞いていた通り、言葉少なに小さく頭を下げた。

「……宜しく」

「あつ、ああ」

こいつ、夜羽たちに適当に合わせたんじゃないのか、と思うくらい、表情からは何も読み取れない。

髪は赤褐色だし耳も尻尾も赤で、着物も暖色系統に合わせているので、見た目は明るい表情はびつくりするほど冷ややかだ。

(昔のボクでも、もうちよつとぐらい愛想あると思うけど)

そう思いながら、無遠慮に夜翰がじろじろと観察していると、青雨の尻尾がさつさと床を掃くように動いている事に気がついた。

(……狐のしっぽって、犬の奴と同じなのかな?)

だとしたら喜んでゐる事になるが、特に自分が何か喜ばせるような事を言つた覚えもないし、無表情すぎて全く信じられない。

コーヒーを淹れに紫咲が席を立つ中、気まずい時間を過ごしていると、青雨が袴のまま、滑るように床を移動してきた。

「……」

「な、なに」

思わず絨毯の上をじりつと後ずさるも、青雨は翡翠のような淡い瞳を逸らす事なく、まっすぐ夜翰に注ぎながら、頭のでっぺんから爪先までを観察するかのよう動かししている。

「……」

「……なつ、なんなのさっ」

「これは、匂いを嗅いでいますね（？）」

半分声を裏返らせた夜翰に代わりに答えたのは、側で見守っていた惠李朱だった。ちよん、と自らの鼻を得意げに触りながら、ふわふわの金髪を揺らして惠李朱が言う。「悪魔や魔族が、匂いを使って他人の感情や思い出を判別するって話はした事あるでしょ。セイは竜だから、それなりに嗅覚鋭いと思うよ」

「え、何……？　ボクは一体、今何を識別されてるの……？」

「仲間かどうか？ ああでも、仲間なのは知ってるから、ヨハネがどんな人か知りたいのかもね」

「普通に喋ればよくない?!?」
「そこは人間風でいいよー!」

「すんすん、と顔のすぐ側で鼻を鳴らされるので落ち着かない。」

「おかしな人外との接触には慣れているつもりなのよ。夜翰だったが、やはり緊張するものは緊張するらしい。おまけに、青雨は恐ろしいほど顔つきが整っているのである。」

「じりじりと後退し、匂いを嗅がれ、もうそろそろ床か壁に押し倒されるのでは……と夜翰が嫌な予感を覚えていると、果たして青雨は、夜翰の頬にふと顔を近づけ、そして

「キヤーーーーーッッッッッッッッッッッ!」

「次の瞬間アパート中を揺るがせるのではないかと思うほどの悲鳴が上がり、サーバーから皆のコーヒーを注いでいた紫咲は、大慌てで台所から飛び出してきた。」

「なっ、なっ何事?!?!? どうしたの!?!」

「ヨハネ、気絶しちゃった(・ω・)」

「なにゆえ!?!」

「夜羽から報告されて紫咲が視線をやると、青雨の腕の中でぐったりした夜翰を、恵李朱が指先でつつんつつんしている。その夜翰を抱き抱えながら、青雨は珍しく困惑した表情

で、おろおろと耳を動かしていた。

「ヨハネってばおこちやまねえ。刺激が強すぎたのかしら（☒?☒）」

「惠李朱くんのその唐突なキヤラ変はどこから……ていうか、何があったの?」

「仲良く……なろうと、したんだが……」

どうも青雨なりに悪意はなかったようなので、続けるように見上げてくる彼を宥めて落ち着いて話を聞こうとしていると、夜羽が先に紫咲に説明した。

「ほら、青雨がよく、ボクとか紫咲のほっぺ、挨拶がわりにぺろってやるでしょ。あれを

ヨハネに」

「あ、あ……」

それで何となく察しがついた。

元々竜である時の癖が抜け切らない青雨は、その振る舞いが獣人姿の時も出ることがある。

相手の匂いを嗅いだり、鼻をくつつけたり、側に寄ったりするのもそうなのだが、相手の体を舐めて毛繕いするのも、竜のコミュニケーションのうちの一つなのだ。

が、当然それを人の姿で初対面の相手にやれば、どうなるかは想像に難くない。

紫咲は、座り込んでいる青雨の頭をそつと撫でた。

「仲良くなりたかったんだねえ。でもね、人間相手にそれはいきなりやつちやダメよ?」

びつくりしちゃうからね」

「……………うん」

顔に大した変化はないが、しよぼ、と頭上の耳が見事なまでにしよぼかえっている。落ち込んでいるようだ。

とりなすように、夜羽と恵李朱も言ってくれた。

「ごめん、ボクらもずっと見てたから、あつと思つて止めようとしたんだけど……………」

「止める暇もないくらい一瞬だった（ ⊠？ ⊠）」

「あはは、まあそれはそうよね……………」

「すまない、つい……………」

言っている間にも、やや意識を取り戻したららしい夜翰が、青雨の膝の上で寝言のよう
に呻いていた。

「うう……………イケメンが……………イケメンがボクをペロペロしに来る……………」

「そう言う夜翰さんもイケメンでしょうが。ほら、しっかりして」

紫咲にそつと顔を触られて目を覚ました夜翰は、閉じていた褐色の瞼を開くと、頭上
に青雨の姿を確認するなり、声を上げて飛び上がった。

「うわあつ!?!」

「そんなに驚かなくても……………まあ、無理もないか」

背後に隠れた夜輪を見やって苦笑する紫咲の前で、青雨はさつきと同じように姿勢を整えて座っているが、耳も尻尾もしーんとして、明らかに元気がない。

その様を見ていた夜輪は、紫咲からコーヒーカップを受け取ってふうふうと冷ましている間に、ちらちらと青雨の方へ視線を投げながら、こう言ってくれた。

「まあ……そういう事情なら、別にボクは構わないけど？　人前ならともかく、ここなら別に困る事もないし」

「…………… 本当か」

ふわつと赤い尻尾が膨らんで、翡翠色の瞳が輝きを取り戻す。あまりの分かりやすさに、さすがの夜輪も青雨のことをただの鉄面皮とは思えなくなったのか、コーヒーを炬燵机に置いてから、苦笑して両腕を広げた。

「別に、青雨の事が怖かったわけじゃないから。ちょっとびっくりしただけだよ。ほら、おいで」

呆れながらも寛容な姿勢を示してくれた事に、紫咲だけではなく夜羽や恵李朱までもが驚いたが、青雨は胡座をかけた夜輪の元へ擦り寄っていくと、まるで前世からの家族や兄弟に接するかのようになり、くつついて甘え始めた。

頬を舐めたり、頭を擦り付けたたり、寄りかかったり、尻尾をぐるりと夜輪の体に巻きつけて包み込んだり、やりたい放題だ。

青雨が随分と大柄なので、超大型犬にじやれつかれてる様子に見えなくもない。

ようやく隣に腰を落ち着けてくつついている青雨を見て、紫咲はあんぐりしたが、楽しんで声を上げて笑い始めた。

「ふふっ……セイは、ヨハネさんの事がすごく気に入ったんだね」

「なんで……? 別にボク、好かれるような事何もしてないと思うんだけど。今までそんな動物に懐かれた記憶もないし」

「でも、セブンスコードでことりちゃんには懐かれてたじゃない?」

「あれは半分鳥であつて鳥じゃないみたいなもんでしょ……まあ、竜やら狐だつて動物に勘定していいのかわかんないけどさ」

温かい尻尾を満更でもない様子で撫でてやりながら、夜翰がそう話している横で、夜羽と恵李朱はひそひそと顔を寄せていた。

「セイは、夜翰が紫咲をだーいすきな、きつとわかつたんだね」

「気持ちがあつたかい人の傍は、あつたかいからだよね」

「水神つて、舐めた汗の味からも相手の考えることがわかるんですよ?」

「だつたら、ヨハネがただけエラソーでイジワルでも、優しいのバレちゃうね」

「そこ二人? なんか悪口を言ってる気配がするけど?」

「「いってないーい」(⊠? ⊠)」

白々しく答えた二人は、夜翰にぐしやぐしやと頭を撫でられている。

和やかな風景にほっと笑みを浮かべながら、紫咲はなくなつたコーヒーの代わりにお茶を淹れるべく、ケトルに水を入れに立ち上がったのだった。

そこは耳じゃない

タマミツネの青雨せいうことセイが、夜惠城本丸にやって来て間もない頃のこと。

既に転生前の姿と記憶を取り戻し、人型の時も自由に狐耳の姿とタマミツネの擬人化とを行き来できるようになった青雨だが、その日はたまたま、タマミツネの擬人化姿で本丸の中をうろついていた。丁度、モンスターとしてのタマミツネの姿で、他の刀との手合わせを手伝ってきたばかりだったからだ。

モンスターから人の形に戻っても、傷跡は残る。この方が手入れをするにも面積が小さくなるし、薬研も楽だろうと思いつながら、青雨は本丸の廊下を歩いた。

薬房に寄ると、白衣で薬草を調合中だった薬研藤四郎やげんとうしろうは、案の定呆れたような笑い顔で、自分より倍以上背の高い青雨の頭を、背伸びして撫でた。

「やれやれ。自分から治しに来てくれるようになったのは有難いが、俺たちもモンスターの体の事まで、全部わかるとは限らねえぜ」

「人の形なら、皮膚や臓器の構成にそれほど差異はないだろう。お前が治療に困るような怪我はしていないつもりだ」

「はいはい、上手に転んだな」

傷跡から、しれつと青雨の受け身の取り方を褒めてくれた薬研は、いつも通り擦り傷に塗り薬を施す。いつもこの薬房は芳しい草の香りで鼻がむずむずするが、この場所にいる時間も青雨は割に好んでいた。

大人しく上り框に座っていた、派手目の赤い耳を生やした大男を、歳下の弟にやるように笑って撫でてから、見送ろうとした薬研藤四郎は、ふと机の上のものを取り上げた。

「そーだ。悪いけど、もし大将に会ったらこれを返しておいてもらえないか」

「？」

「イヤホンだよ。こつち側を機械に繋ぎ、こつち側を耳につけて音を聴くためのもんだ。俺つちのを今度買い換えようと思ってたんだが、音楽好きの大将が、これを音質いいって気に入ってたからさ。ちよつと試しに借りてたんだよ」

大将とは、主の紫咲ムラサキのことだ。何種類かイヤホンを持っていてる紫咲から、そのうち一本を借りていたらしい。

参考になった、と笑う薬研の掌から、コードのついたそれを受け取った青雨は、しげしげと眺める。

「まあ、あんたはその自慢の耳がありや必要ねえか」

そう言った薬研の元を辞し、廊下を歩いて男士達の歓談用の座敷部屋へ戻った青雨は、いつもおやつや蜜柑が潤沢に置いてある座卓の前へ座ると、小さなイヤホンをちよ

んとそこへ置いて、両手と上半身を乗り出すように机に張り付き眺めていた。

いつも、主のスマートフォンから音楽を聴く時は、そのままスピーカーで流して聴いているか、主に触れて水の波動を通すことで聴いている。元来、水に由来する神であった青雨は、紫咲に触れさえすれば、血液の流れや汗を通して、彼女の耳にしていることや考えていることは察知できた。

(確かに、俺には必要のないものだが)

だが、青雨は元々、物静かに見えてかなり好奇心旺盛な性格なのである。

丁度そこに置いてあつた紫咲のスマートフォンを借り、見様見真似でイヤホンジャックを繋ぐと、二股に分かれた側を片手で持ち上げた。

(これを、耳につけるんだと言っていたな)

こんなに小さいもので音が聞こえるのだろうか、と半信半疑になりながらも、頭上でゆらんと揺れる、紅葉のような耳の根元に、それぞれイヤホンの先端を埋め込む。

教えてもらったパスワードで画面を開き、アプリを開くところまでは、紫咲がやっているのをよく見ていたので覚えていた。

然るべき手順で「▶?」の再生ボタンを押すところまではできた。……はずなのだが、一向に音が流れて来ない。

首を傾げながら、試しに別のアプリや、動画のサイトに変えてみても同じことである。

(やはり、モンスターの耳では拾えない電波か何か、使われているのか)

しかし、人間に拾えてモンスターに聞こえない音など、聞いたことがない。いや、聞こえない音なら知らなくて当然ではあるが、そんなことがあり得るのだろうか。

人間の文明の不思議に、青雨が大柄な体を揺らしながらひたすら頭を傾けていると、そこへ一振の刀がやって来た。

「おい。何やってんだ、こんなところで」

刀にもモンスターにも、何かと面倒見がいいことで定評がある和泉守兼定いずみのかみかねさだである。

最初こそ、主の近くにべつたりの青雨と、照れがあつてなかなか主の側に寄れない自分を比べてやきもきしていたものの、最近では何かと世間知らずな青雨に対する世話焼き心の方が優ってしまったらしい。

理解不能な青雨の行動を見て、たまらず声を掛けてきたようだった。

「和泉守か。これは、いやほん、と言うらしいんだが知っているか」

「そりゃあ、そのくらいは俺も知ってるぜ」

「音を出すぼたんは、これで合ってるのか」

「ん？ 音が出ねえのか？」

こくり、と頷いた青雨が、タマミツネ特有の鱗に覆われた紫色のブラシのような尾を動かすと、和泉守はスマホを触りながら首を傾げた。

「んー……ミュートスイッチも入ってねえみたいだし、本体が断線してるとかじゃなけりや、普通に聞こえるはずなんだが」

生まれは刀とはいえ、顕現して以降長く現代の機器や言語に触れる生活をしていたので、物覚えの早さも手伝って、流石の和泉守も機械にはそこそこ詳しい。

ふと、青雨の頭上から音漏れの気配を感じ、おそろおそろそれを摘んで自分の耳に当たった和泉守は、次の瞬間、イヤホンを放り投げそうになりながら盛大に声を上げていた。

「——って、爆音で聞こえてんじやねーか!!」

「？」

普段はあまり動かない表情の中で、青雨が微かに眉を寄せた事に和泉守は驚いたようだったが、青雨はそれにも構わず、何かぶつぶつとイヤホンを摘みながら呟いていた。

「やはり、モンスターには聞こえないということか……それとも、俺の神としての徳に問題があるから……」

「待て待て、お前には聞こえねーのか？」

「わからない……」

モンスターに聞こえず人間に聞こえる音、という青雨の仮説に、和泉守はやはり首を傾げてしまう。特殊電波ならともかく、普段はイヤホンを介さずスピーカーを使えば聴こえるという同じ音楽で、そんなことが起こり得るだろうか。青雨の耳に問題があるの

だとしても、今こうして普通に会話できていることの説明がつかない。

首を捻る人数が一振と一匹に増えてしまったそこに、書類を抱え颯爽と廊下を歩いてきた影が、呆れたように声を掛けてきた。

「……何をしてるんだい、君たち」

外から差す陽の光で透き通っているかのような銀髪。内側が青い布のマントを翻して、山姥切長義が仕事部屋から出てきたところらしかつた。

本丸の仲間と交流がない訳ではないが、政府関連の仕事をしている事もあって、内勤が多くしよつちゆう籠り切りになっている。ぶつぶつ文句を言いながらも励んでくれているので、彼は彼で主や本丸に思い入れを持って接してくれているらしい。

その役職を思い出し、和泉守はおもむろに尋ねた。

「長義、お前モンスターのことに詳しくあったよな?」

「ああ。政府への報告には、詳しく生態資料を纏めて添付しなくちやならないからね。それが何か?」

「タマミツネの耳つて、イヤホンの音だと聞き取れないとか、そういうことあるか?」

「はあ? そんな訳ないだろう。彼らの聴力は、触覚での振動察知然り、野生動物としての聴覚しかり、俺らよりも遙かに上だ。というか……」

書類を片腕に持ち替えた長義は、救いようがないと言わんばかりの溜息を吐きなが

ら、黒手袋の片手で思いつきり額を押さえた。

「……君、そこは耳じゃないんだが」

「へ？」

「タマミツネの頭部に付いているのは“ヒレ”だ。錦ヒレと呼ばれる、興奮状態や疲労によつて色が変わる部位だよ。オスの個体だけが持っている特徴だと言われている、メスに関しては俺も知らないが……とにかく、耳じゃない。それは確かだ」

代わりに間抜けな声を上げてしまった和泉守の隣で、青雨は頭上を見上げながら、ひらんと耳——否、ヒレを揺らしながら、呆然と呟いた。

「これ、耳じゃなかったのか……」

「どうしてそうなる!? 大体何でモンスターの子じゃなく、刀の俺が君の体のことを教えてやっているのかな!? 自分の体のことだろう!？」

「いや、その……このヒレでも泡の振動は察知できていたから、てつきり耳なのかと……前世はタマミツネの体ではなかったし」

「……はあ。それもそうか。君はそういう特殊な個体だったね。まったく主も、次から次へと面倒を抱えてくる」

そう口では言いながらも、どこか楽しそうに笑みを浮かべる長義の横で、和泉守はそろそろと青雨の頭のヒレからイヤホンを外した。

「つてことは、こつちの耳なら……」

人間の方の耳に、音量調節した両方のイヤホンをすぽっと入れると、目を見開いた青雨のヒレが再びふわっと動いた。耳ではないが、感情に合わせて動く性能はあるようだ。

「きこえる」

「やれやれ。よかつたな」

「まったく、人騒がせな」

ふあさふあさと尻尾を揺らしている青雨のあまりの天然ぶりに、和泉守は隠しようもなく大笑いしており、長義はそれに釣られまいとしながらも唇の端が堪えきれず動いている。

そこへ、丁度トイレに行っていて席を外していた紫咲が戻ってきた。

「あれ。こりやまた珍しいメンバーが揃つてるね。随分楽しそうだけど、何話してたの？ みんなで私のスマホなんか覗き込んで」

既に面白そうな気配を察して笑い出しそうになっている紫咲に、和泉守達は何と説明したものかと、頭を抱えたのだった。